

遊戯王5D&#39;s タッグフォース 満足の意志を継ぐ者

ゾネサー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔サティスファクションというサテライトを統一した伝説のチームがあった。

サティスファクションはリーダーの鬼柳が目的も希望もなく過ごしていた遊星、ジャック、クロウ、そしてコナミを集めサテライトの統一を目的として結成したチームである。

だが統一を果たしてしまっただ後は再び目的を失ってしまった。

そして目的を失った鬼柳は暴走しチームはバラバラになってしまった……。

今回のストーリーはその後の話。これから彼らはどういった人生を歩むのだろうか。

## 目次

序章 サテライトからシテイへ

D ホイールは拾った | 1

おい、タツグデュエルしろよ | 6

そうよ、令嬢だからよ | 21

だが奴は…弾けなかった | 28

本気を出さなくとも一瞬だ | 40

一見熱いようで、すぐクールになる | 47

伏せカードが変わっていないか確認しなかっただけだ | 60

この世に使えないカードなどあまりない | 67

見えてたけど見てなかったもの | 77

割と大切に使用してもらおう | 89

第1章 ダークシグナーとの戦い

来るぞゆま | 96

格好や憧れだけでHEROを使うやつ | 104

だって俺もシグナーじゃないし | 113

そこらへんに転がっているデュエリスト | 120

貴様の歩んだデュエル道などまだ入り口にすら来ていない | 130

明日を作るのは憎しみじゃない | 142

コナミのドラゴンは天使族だけどね | 148

さあ踊れ、死のワルツをなあ！ | 156

ワルツは…苦手だな | 160

私は邪神の道を選択した | 179

冥界への入り口は魔女の島にある？ | 187

おじさんのデュエルは本気と書いてマジと読むからね | 195

どんなに離れたって途切れることはない

206

## 第2章 WRGPに向けた戦い

もつと言葉のキャッチボールをしろよ

215

ちっ：気づいていたか

219

いいな：あれ欲しいな

230

カウル以外は俺が塗った

241

スピイーデューにミーとティーを

256

不死鳥は墓地より舞い戻る

262

融合じゃねえ、フュージョンだ

276

とんだハリキリボーイズがやってきたじゃねえか

285

忘れちまったよ：ラストデュエルなんてものは

293

エンディングはマルチに存在する。どれもお前のバッドエンドだ  
がな！

301

最高の satisfaction を貴方に

315

新たな満足へ

331

貴様のドラゴンは頂いていく

346

いい突っ込みだったぜ

357

カードプレイングにスキがあるぜ

364

## 第3章 WRGP開幕

すでにバトルは始まっているがね

378

まあドローしてから考えるか

389

死神は死なねえ

397

チームで戦うということ

407

確かにこれは希少なカードだけど、僕の趣味じゃなくてね

416

とんだロマンチストですわね

424

フオア・ザ・チーム

437

自分達の可能性を信じて

446

新たな可能性を求めて

460

自分が目指す場所

467

正解と不正解と可能性

473

忌むべき印

483

正しき闇の力

490

モンスターではない、神だ！

502

世界を笑う神

513

オゾンより下なら問題ない

528

特別な力なんてない

541

どうしてDホイールと合体しないんだ？

553

天国と地獄の狭間

564

走り出せその足で

574

今こそ一つに

587

#### 第4章 決戦！アーククレイドル

時を超えた舞台

607

たった一人で

628

絶望がもたらすもの

644

もう一つの戦い

655

理想のために

663

自分が信じられるもの

675

最後の足掻き

685

それぞれの一步

696

#### 最終章 それぞれの決着

全力のぶつかり合い

700

絆のバトン

722

可能性は人の数だけある

742

一人一人の道

793

受け継がれる意志

818

## 序章 サテライトからシテイへ Dホイールは拾った

サテライト。ここは流れ者たちが住み着き権力によって支配された街。セキュリテイという権力がある限りもう一方の地、シテイには行くことができない。だが権力に屈せず、諦めずにシテイへ渡ろうとする者が居た。名は不動遊星、彼は奪われたスターダスト・ドラゴンを取り戻すためDホイールを走らせていた。

「すごいよ遊星！これならパイプラインを突破できるよ！」

「…だがこれでは僅かなアクシデントで失敗となってしまう。もう一度計測を頼むラリー！」

「うん。分かった！」

遊星には仲間がいた。名はラリー・ドーション。彼は以前遊星のためにDホイールの部品を盗み、それが原因となってセキュリテイに追われたことがある。だが遊星がセキュリテイ捜査官の牛尾にデュエルを仕掛け、勝利したことにより助けられている。以降は反省をして窃盗に手を染めていない。

「おいラリー、タイムを計るのもいいがちゃんと働かねえと食いつぱぐれちまうぞ」

「まあまあナーブ、今日は遊星がパイプラインを抜けてジャックに会いに行く日だ。今日くらいいいじゃねえか」

「タカの言う通りだぜ。それにラリーは言い出したら聞かねえからなー」

遊星の仲間には他にもいる。ナーブ・タカ・ブリッツ、3人とも遊星がシテイに行くことを心から望んでいる。

「…あれ？コナミはどうしたの？」

「ああ…あいつはカードを拾いに行っちゃったよ」

「もう少しでデッキが完成するとか言ってたぜ」

「サテライトに落ちてるカードなんてロクなものないだろうになー」

そしてもう1人の仲間、コナミ。彼は遊星とは昔からの付き合いで

ある。

「ふ…カードは拾った、か」

仲間に囲まれながら時間は過ぎていき、そして時は来た。

「ついに行っちゃうんだな遊星」

「安心しろ。カードを返してもらっただけだ」

「と言っても簡単なことじゃねえぜ。何たってあいつはキングだからな」

「カードとの絆を信じていれば必ず道は開けるさ」

「流星は遊星！俺たちはお前を信じているからなー！」

「ふ…ありがとう」

「遊星、良かったらこのカード持って行って！」

「これは…ワンシヨットブースター、だがこれはお前が一番大事にしているカードだ」

「そいつをお守りとして持って行って欲しいんだ！」

「…ありがとうラー！。大切にに使わせてもらう」

そこにもう1人、遊星の仲間が帰って来る。

「遊星、まだいるか！」

「…コナミか」

「良かったー！間に合わないかと思っただぜ」

「あれ？コナミが乗っているのって…もしかしてDホイール!?」

「…！コナミ、どうしてお前がDホイールを？」

「え？あー…ひ、拾ったんだよ」

「えー！治安の悪いサテライトにDホイールが!？」

「ま、まあいいじゃねえか。それより見てくれよ…俺のデッキが完成したんだ！早くデュエルしたいぜー！」

「おいおい…拾ったカードなんかで戦えるのか？」

「デュエルはやってみないと分からないだろ！」

「はは…あ！遊星、そろそろ時間だよ！」

シテイとサテライトはパイプラインによって繋がれている。普段は閉じているがある時だけパイプラインは開く。パイプラインの役割はシテイのゴミをサテライトへと流すこと、つまりゴミが流れてく



る瞬間こそメンテナンスハッチが開きシテイへと渡ることのできるタイミングである。そしてその時が迫っていた。

「分かった。ラリー、このカードは必ず返す」

返すには帰って来る必要がある、そのことを理解したラリーは笑みを浮かべ遊星を送り出す。

「うん！遊星、頑張って！」

その言葉を受け遊星はDホイールを走らせる。…その時であった。

「よし…俺も行くぜ！」

コナミもDホイールを走らせて遊星についていった。

「え！ちよつとコナミ!？」

「俺もシテイに行つてくるぜー！留守番よろしくな！」

「ふ…」

かくして遊星とコナミは2人でパイプラインへ向かうのであった。そしてパイプラインへ向かう道で遊星は尋ねた。

「コナミ、少しいいか？」

「なんだー？」

「お前もジャックに用があるのか？」

「んー、まあ久しぶりにジャックに会いたいのもあるけど…単純にシテイがどんな感じか知りたいってのが大きいかな」

「ふ…コナミらしいな。そのために俺が出発するまでの間クロウと一緒にDホイールを作っていたのか」

「あれ!?なんで遊星が俺たちがDホイールを作っているのを知ってるんだ？」

「…やはりか」

「え?ああー!カマかけたな遊星！」

「そんなところだ、それにDホイールを乗りこなしているところを見ると相当練習したんだろう?」

「う…よく見てるなー。クロウに驚かせたいから内緒にしとけて言われたのに…」

「ふふ…」

遊星はあまり人とのコミュニケーションが得意な方ではない。だ

が昔からの友であるコナミならば話は別である。仲良く談笑していたのも束の間、パイプラインの入り口が見えてきた。だが、そこに2人以外のもう1つの影が近づいてきた。

「……危ないコナミ！」

「え？うわっ!？」

突如現れた影がコナミのDホイールに激突してきた。コナミは何とか体勢を立て直しクラッシュを免れる。遊星はその影の正体を知っていた。

「お前は……この前のセキュリテイ！」

セキュリテイ捜査官の牛尾哲、以前見下しているサテライトの出身である遊星にデュエルで敗れたことを根に持ち遊星を追いかけまわしている。

「へっ、また会ったな屑野郎！今度は何しようってんだ？」

「コナミ、こいつを相手している時間はない。先を急ぐぞ！」

「了解！」

メンテナンスハッチが開く時間は僅かしかない。遊星とコナミは牛尾を無視しパイプラインに突入した。

「パイプライン……？まさか野郎どもサテライトから抜け出すつもりか！逃さねえぞ！」

「牛尾さん！増援の沢中です、サテライトの犯罪者の逮捕に協力します」

「おう、あいつらを絶対に逃がすな！行くぞ！」

牛尾と沢中、2人のセキュリテイもパイプラインへと突入する。

「遊星、セキュリテイの奴らここまで追ってきたぜ!？」

「大丈夫だ。このまま進めば振り切れる！」

遊星とコナミのDホイールの方がセキュリテイのDホイールより僅かにスピードが速い。パイプラインに入るタイミングも遊星達の方が早かったためこのままなら振り切れる……はずだった。

「……なら特殊追跡デツキを使うには丁度いいな……。やるぞ沢中！」

「了解です！スピードワールド強制発動、タッグデュエルモード！」

セキュリテイがスピードワールドを発動した瞬間、遊星とコナミの

Dホイールに異変が起こる。

「Dホイールの最高速に制限がかかっただど!? しかもデュエルモードになってるし…:…どういうことだ?」

「…どうやらセキュリティは強制的にライディングデュエルを仕掛けることが出来るようだ」

「ははは! その通りだぜ、てめえらサテライトの屑にデュエルを断る権利なんかねえんだよ!」

「なんだと…:…ふざけるな!」

「コナミ! 奴にさせられてはダメだ。シティへ向かうためにはメンテナンスハッチが閉まってしまいう前に奴らをデュエルで倒すしかない。すまないが協力してくれないか?」

「遊星…:…分かったぜ、このデュエル俺たちの絆で勝つてやる!」

「絆だど? 下らねえ、俺たち権力の前にサテライトの屑野郎どもが勝てる道理なんてないんだよ!」

「…:…御託はいい」

「相変わらず可愛げのない野郎だ。いいぜ、なら始めるとしようか!」

互いに噛み合うことのない言葉のキャッチボールを交わし4人はデュエルの構えを取る。そしてパイプラインに4人の声が重なり、響き渡った。

「」「」「デュエル!」「」「」

おい、タツグデュエルしろよ

「「「デュエル！」」」

先攻後攻はDホイールがランダムに選出するシステムとなっている。先攻を取ったのは…牛尾。

「先攻は俺からだ、ドロ―！俺はゲートブロッカーを攻撃表示で召喚！」

ゲート・ブロッカー 攻撃力100

牛尾が召喚したモンスターは立ち塞がるように遊星達の前に現れ2人の視界を塞ぐ。まるでサテライトからシテイへと抜けるゲートを守るかのよう。

「へっ…攻撃力100か。大したことないな！」

「コナミ、油断するな。攻撃力の低いモンスターを攻撃表示で場に出すということは何かを狙っている可能性が高い」

「なるほど…そういうものなのか」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。さあ来いよ」

牛尾 & 沢中 LP4000

フィールド 『ゲート・ブロッカー』（攻撃表示）

セット1

手札4（牛尾） 手札5（沢中）

自信ありげにターンを終了する牛尾、そして次のターンプレイヤーがDホイールによって決められる。

「おっと…俺か！ドロ―するぜ！」

ここでコナミは一呼吸入れる。彼にとっては初デュエル、落ち着いて情報を整理したかったのだ。

（今俺たちはタツグフォーエースルールでデュエルをしている。だから俺と遊星、あつちのセキュリティ達はフィールドと墓地と除外ゾーンのカードとライフポイントが共有になるんだったな。あとこのターンから攻撃ができるんだったか）

そして彼はもう1つ、ライディングデュエルにおいて大切なことを思い出す。

(そうだ…。ライディングデュエルでは普通の魔法カードは使えずスピードスベル  
s p っていう専用の魔法カードが必要なんだった。そのためには  
スピードカウンタ  
s c が発動条件になるんだったな。s c は2ターン目からスピー  
ドワールドの効果でお互いのスタンバイフェイズ毎に一個ずつ乗っ  
ていく。つまり今はお互い1個のはずだ)

そう思いコナミはDホイールの画面を確認する。しかしそこには  
予想外の結果が写っていた。

牛尾&沢中 s c 1 コナミ&遊星 s c 0

「なっ…こっただけs c が乗らない!？」

「へっ…そいつはなゲート・ブロッカーの効果よお!こいつがいる限  
り相手はスピードワールドの効果でs c を置くことができねえ!つ  
まり…」

「:俺たちは魔法カードの使用を封じられた」

「なんだって!？」

デュエルとはモンスター・魔法・罠の3つの種類のカードによって  
成り立っている。どれか一種類でも封じられれば苦戦を強いられる  
のは間違いないだろう。

「こいつはな…デュエルのバランスを大きく左右するほどの優秀な  
カードで本来は使用制限がかかってるんだ。だがなあ、俺たちはセ  
キュリティ特権でこいつを自由にデッキに投入できるのよお!」

「権力ってやつか…:気に入らねえな」

「だが攻撃力が100なことには違いねえ!俺はギガテック・ウルフ  
を攻撃表示で召喚するぜ!」

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

場に現れたのは全身が鋼鉄で作られた狼。金属が擦れているよう  
にも聞こえる鳴き声がパイプラインに響き渡る。

「屑野郎にお似合いの鉄屑モンスターってわけか。笑わせるぜ!」

「この攻撃を受けても笑ってられるかな?行けギガテック・ウルフ!」

ギガテック・ウルフはギシギシと音を立てながらゲート・ブロッ  
カーに体当たりを仕掛けた。

「てめえが攻撃してくることなんざお見通しなんだよ!トラップ発

動、進入禁止！No Entry!!」

辺りに警告が鳴り響きギガテック・ウルフは思わず立ち止まり警戒態勢をとった。同時にゲート・ブロッカーも警告に応じるように自らを守備態勢へと変更しゲートへの壁という役割を果たせる状態となった。

「こいつはフィールドの攻撃表示モンスターを全部守備表示にしちまうのさー！」

ゲート・ブロッカー 守備力2000

ギガテック・ウルフ 守備力1400

「しまった…トラップカードを張っていたのか！」

「へっ…俺がわざわざ攻撃力1000のモンスターを無防備な状態にしておくとでも思ったか？」

「ちくしょう…俺はカードを3枚伏せてターンエンド！」

コナミ&遊星 LP4000 sc0

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（守備表示）

セット3

手札2（コナミ） 手札5（遊星）

ターンは進み次はもう1人のセキュリティ、沢中のターンとなる。

「行くぜ、俺たちのターン！ドロー！」

彼は熱血な性格のようで気合の入ったドローをするも、危うく牛尾のDホイールにぶつかりそうになり注意を受ける。

「とと…気を取り直して行くぜ！俺たちはサムライソード・バロンを召喚する！攻撃表示だ！」

サムライソード・バロン 攻撃力1600

2本の刀を背負うサムライがギガテック・ウルフと対峙するように降り立った。

「攻撃力がギガテック・ウルフの守備力を超えている…。だけどモンスターが守備表示なら戦闘で破壊されようとプレイヤーには戦闘ダメージが届かない。守備表示にしてくれたおかげで助かったぜー！」

「俺たちを甘く見るなよ！サムライソード・バロンの効果発動、そこへなおれギガテック・ウルフ！」

サムライソード・バロンが1本の刀を取り出し、それをギガテック・ウルフに向かって突き出す。するとギガテック・ウルフは突き出された刃物に反応し、身を攻撃態勢へと変更して吠え出した。

「どうしたギガテック・ウルフ！」

「サムライソード・バロンは1ターンの1度だけ相手フィールドの守備モンスターを攻撃表示に変更できる！」

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「なんだって!？」

「血がたぎってきた…!バトルだ、サムライソード・バロンで攻撃する!切り捨て御免!」

なおれと命じられたにも関わらず無礼にも武士に吠える狼へ侍が2つ目の刀も取り出し2刀流で成敗を下す。パイプラインにギガテック・ウルフの悲痛な鳴き声が響き、破壊される。

「そして攻撃力の超過分の切れ味を受けてもらおうぞ!」

「ぐっ…!？」

コナミ&遊星 LP4000↓3600

「良くやった沢中!」

「俺たちはこれでターンエンド!」

牛尾&沢中 LP4000 sc2

フィールド 『サムライソード・バロン』(攻撃表示)『ゲート・ブロッカー』(守備表示)

セット0

手札4 (牛尾) 手札5 (沢中)

「すまん遊星…。あのモンスターを倒せなかったどころかダメージまでくらっちゃった」

「気にするな、まだデュエルは始まったばかりだ。俺のターン…ドロー」

申し訳なさそうにするコナミを横目に遊星は戦略を立てる。

(奴の場にゲート・ブロッカーがいる限り俺たちはspを使用することができない。あのモンスターを破壊するには…)

遊星は手札にある1枚のカードに目を向ける。

(ラリー、お前のお守りを使わせてもらうぞ)

「俺はラピッド・ウォリアーを召喚する」

ラピッド・ウォリアー 攻撃力1200

現れたのは腹部をバネによって繋がれたロボット。体は小さいが目にも留まらぬスピードでフィールドを駆け回っている。

「攻撃力1200なあ？さっきの鉄屑モンスターと同じ攻撃力じゃねえか。屑野郎め血迷ったか！」

「何度も何度も屑とばかり…、他の言葉を知らないのか？」

「あん？」

「モンスターの召喚に成功したターンにワンショット・ブースターは特殊召喚することができる。こいこい！」

ワンショット・ブースター 攻撃力0

ロケットを発射する際にその推進を補助するブースターを腕に装着したロボットが新たに場に現れる。

「そいつはワンショット・ブースター！ラリーのカードか」

「ああ！このモンスターで俺はゲート・ブロッカーを倒し前に進む！」

「はっ…攻撃力0で何ができるってんだ！」

「俺はラピッド・ウォリアーでゲート・ブロッカーに攻撃する！ウィツブラッシュ・ワロップ・ビーン！」

「馬鹿め！守備モンスターの守備力が攻撃モンスターの攻撃力を上回っていけばモンスターは破壊できねえが差分のダメージを与えることができる！その攻撃は無意味だぜ」

「それはどうかな」

「何い？」

ラピッド・ウォリアーが攻撃の態勢に入った瞬間、ワンショット・ブースターからブースターが発射された。ブースターに着地したラピッド・ウォリアーはそのままゲート・ブロッカーめがけて突っ込んだ。

「何が起こってやがる！」

「ワンショット・ブースターはこのターン自分のモンスターと戦闘を行ったモンスターを自身をリリースすることで破壊することができる」



る」

「何だど?!…だが甘いな、戦闘ダメージを防げるわけじゃねえ!」

「…それでも俺は前に進む!」

ブースターに乗ったラピッド・ウォリアーはその勢いのまま攻撃を行うがゲート・ブロッカーの壁は固くそのまま跳ね返されてしまう。

コナミ&遊星 LP3600↓2800

「俺はワンショット・ブースターの効果を発動する!」

しかしラピッド・ウォリアーが跳ね返された直後、乗っていたブースターがゲート・ブロッカーへと直撃し爆発した。

「よし…前が空いたぞ遊星!」

「コナミ、あそこだ!あの通路がメンテナンスハッチにつながっている!」

2人は大きくカーブしその通路に突入することに成功する。視界を塞ぐ壁が消えたことでコナミ達はシティへと続くゲートを見失わずに済んだ。

「な…まさかメンテナンスハッチからシティに抜ける気か!お袋さんが泣いてるぜ!」

「追うぞ沢中!奴らは絶対に逃しちやいけねえ!」

同時にセキュリティ達も通路に突入する。急なカーブをかけたためタイヤとゴミを運ぶベルトコンベアが摩擦を起こし、金属音を鳴り響かせる。

「やっぱりついてきたか…」

「俺はカードを2枚伏せてターンを終了する」

コナミ&遊星 LP2800 sc0

フィールド 『ラピッド・ウォリアー』(攻撃表示)

セット5

手札2 (コナミ) 手札2 (遊星)

「ち…ゲート・ブロッカーがいなくなっちゃったからこのターンから奴らもscが溜まっていく。なら速攻で片付けてやる!俺のターン!」

スタンバイフェイズにコナミと遊星にとっては待望のspが1つ

置かれる。だがセキュリティのs cは既に4つ溜まってしまった。

「行くぜ！俺はトラパートを召喚だ！」

トラパート 攻撃力600

マスコットののような魔法使いがゆらゆらと不思議な動きをしながら場に現れる。

「俺たちのモンスターを散々馬鹿にしておいてその程度の攻撃力か！」

「いや…トラパートはチューナーモンスターだ。つまり…」

「…！シンクロ召喚か！」

「その通りよお！俺はレベル4のサムライソード・バロンにレベル2のトラパートをチューニング！」

トラパートがサムライソード・バロンの周りを一周すると自身を光の輪っかにするので包み込んだ。2体のモンスターが同調し、新たなモンスター出現する。

「…いつから逃げられるかな？出会え！ゴヨウ・ガーディアン！」

ゴヨウ・ガーディアン 攻撃力2800

現れたのは歌舞伎役者のような顔をした巨大な人型モンスター。手には紐付きの十手を持っておりそれをグルグルと振り回している。

「なっ…攻撃力2800だっ!?」

「こいつの前にはどんなモンスターも一網打尽よお…。だが、その前に…」

そう言いながら牛尾は自らのs cを確認する。現在のs cは4、牛尾はにやりと笑う。

「このターンで終わらせてやるぜ！俺は手札からs pーソニック・バスターを発動する！」

「s pを使ってきたか…」

「ライディングデュエルなら当然だよなあ？ソニック・バスターはs cが4以上の時発動できる！自分フィールドのモンスターの攻撃力の半分のダメージをお前らに与える！」

「つまりあのでけえモンスターの半分…！400も喰らうってのか

!？」

「てめえらのライフは2800、こいつと戦闘ダメージを合わせればライフは0になるってわけだ。喰らいな！」

ゴヨウ・ガーディアンを中心に不可視のエネルギーがたまり、衝撃波となつて遊星達を襲う。

コナミ&遊星 LP2800↓1400

「へっ…さらに攻撃で終わりだぜ」

「まだまだ！永続トラップ発動、倍返し！」

「何だど？」

「こいつは相手のカード効果によって1000ポイント以上のダメージを受けた時に発動できる！この時に受けたダメージ1000ポイントにつき1つ、このカードに倍々カウンターを置く！」

コナミの発動した永続トラップの上に倍と書かれた文字が1つ置かれる。

「それが何だつてんだ！」

「こいつの効果はまだある！次の相手ターンのエンドフェイズ時にこのカードは破壊され、このカードに乗っていた倍々カウンターの数×2000のダメージを相手に与える！」

「な…なんだと！」

「つまり次の俺っちのターンに2000ものダメージが!？」

「上手いぞコナミ！」

「ち…だがそんなものは関係ねえ。ゴヨウ・ガーディアンの攻撃が決まればライフ1400のお前らはお陀仏だ！」

牛尾は再び画面を確認する。先ほどのソニック・バスターが直撃した以上コナミと遊星のライフはさすが1400。そう思い相手のライフを確認すると…。

コナミ&遊星 LP2800

「ば、馬鹿な！倍返しが発動している以上奴らは確実にダメージを受けているはず…」

「そいつはどうか？俺はダメージを受けた時にもう1枚のカードを発動していたのさ！ダメージ・ワクチンΩ<sup>オメガマックス</sup>MAXをな！こいつは俺

が戦闘か効果でダメージを受けた時にその数値分だけ回復できるのさー！」

「ぐ…そんなカードを伏せていたとは」

（あのカードを発動するタイミングは今までにもあった。だがコナミは最適なタイミングで使用した…。今まで俺たちのデュエルをよく見ていたからか、コナミは戦況を判断するのが上手いな）

「だが…お前らのs cを見てみるんだな！」

「え？」

コナミは言われるがまま画面を確認する。そこに表示されていた自分たちのs cは再び0になっていた。

「あ、あれ？…さっき1つs cが乗ってたはず…」

「…スピード・ワールドのもう1つの効果。ダメージを1000受ける毎にs cを一つ失う」

「あつ…！」

「そういうことだ。次のターンになればまた1つカウンターが乗るがs c1で発動できるs pなんて大したもんじゃねえ！」

s pは定められているs cが多いほど強力な効果を持っている。未だ魔法カードが自由に使えるとは言いがたい状況となった。

「このターンでは仕留められなさそうだが…まあいいさ、攻撃だゴヨウ・ガーディアン！お縄を頂戴しろ、ゴヨウ・ラリアット！」

攻撃命令を受けたゴヨウ・ガーディアンは手に持っていた紐付きの十手をラピッド・ウオリアーに投げつけた。ラピッド・ウオリアーは逃れようとするも投擲された十手を躲せずそのまま受ける形となる。

「やばいぞ遊星！」

「ああ…そうはさせない！トラップ発動…」

「無駄だ！トラパートをシンクロ素材としたモンスターが攻撃するとき相手はトラップを使うことができねえ！」

「何…!？」

遊星が発動しようとしたトラップに磁場が発生し表になることは叶わなかった。そしてラピッド・ウオリアーに十手が投擲され破壊される。

「ぐっ…！」

コナミ&遊星 LP2800↓1200

「やべえ…」一気に1600もダメージが入っちゃった！」

「まだだあ！ゴヨウ・ガーディアンが相手モンスターを戦闘で破壊して墓地に送ったらそいつを俺のフィールドに守備表示で特殊召喚出来るのよお！カモーン、ラピッド・ウォリアーちゃん！」

ゴヨウ・ガーディアンが今度は相手の墓地をめぐけて十手を投擲する。すると今度は紐でラピッド・ウォリアーを絡め取り、無理やり自分のフィールドに引きずり出した。

ラピッド・ウォリアー 守備力200

「なっ…遊星のモンスターが逮捕されちゃった！」

「くっ…」

「これで分かったか！所詮お前らは権力には逆らえねえのよ！俺はこれでターンエンド！」

牛尾&沢中 LP4000 sc4

フィールド 『ゴヨウ・ガーディアン』（攻撃表示）『ラピッド・ウォリアー』（守備表示）

セット0

手札3（牛尾） 手札5（沢中）

「ちっ…この状況、魔法カードが使えない上にトラップも効かないゴヨウ・ガーディアンがいる。しかも攻撃力は2800…守備でしいでもモンスターが奪われちゃう。一体どうすれば…！」

「コナミ、デツキを信じるんだ！」

「え？」

「信じれば必ずカードは応えてくれる。どんな時だって諦めずに立ち向かうんだ！」

「…そうだったな。遊星達はどんな時も諦めずに逆境を乗り越えてきた。そんな姿を見て俺もデュエリストになりたいって思ったんだ！危うく忘れるところだったぜ…サンキュー遊星！」

「へっ…この状況、サテライトの盾なんか突破できるかよ！」

「俺はもう迷わないぜ！デュエリストになりたての俺が出来ることな

んでデッキを信じることだけだからな！行くぜ…俺のターーーン！」  
コナミがデッキを信じ勢いよく引いたカード、それは緑に彩られたカード。つまり魔法カード…spであった。

「へっ…まさかspでも引いちまったか？だとしたら残念だったな！このターンお前らのscは1、この状況は引っくり返せねえだろ！」  
「それはどうかな」

「…遊星!？」

「コナミ、お前が信じる事が出来るのはデッキだけじゃない。これはタッグデュエルだからな！」

「…そうか！行くぜ遊星、俺たちの絆の力であの権力野郎をぶっ倒す！」

「やれるもんならやってみな！」

「ああ！俺はチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを攻撃表示で召喚だ！」

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

頭の左右にアンテナのようなものをつけたロボットが現れる。体は無数のコードで繋がっておりその構造の全てを把握するのは難しいだろう。

「へっ…チューナーモンスターか、シンクロに必要なモンスターも足りないくせに…」

「モンスターならいるさ、永続トラップ発動！蘇りし魂！こいつは墓地の通常モンスターを守備表示で呼べる…もう1度俺に力を貸してくれ、ギガテック・ウルフ！」

地面にあいた穴から再びギガテック・ウルフが舞い戻る。

ギガテック・ウルフ 守備力1400

「よし…これでシンクロに必要な条件が整ったな」

「行くぜ…俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーがアンテナから特殊な電波を飛ばしギガテック・ウルフの姿を変貌させていく。

「3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼

却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA・ジエネクス・トライフォース！」

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

ジエネクス・コントローラーが変貌したギガテック・ウルフの胸部にあるコアに装填される。突き出した右腕にある3つの装置のうち、オレンジのものが点灯した。

「サテライトの層がシンクロだとお？…だがゴヨウ・ガーディアンは攻撃力の方が上よお！」

「そういう時のためのspだ！」

「はっ…てめえらのscは1だろうが！」

「…それはどうかな」

「何だと？」

慌てて牛尾はscを確認する。まずは自分たちのsc…これは当然5だ。そして相手のsc…これも5を表示していた。

「馬鹿な…!？」

「俺はお前がspを発動した瞬間、このカードを発動していたのさ」

「あつ…あああ！スリップ・ストリームかあ!？」

「このカードは相手がspを使ってきた時に発動出来る！次のスタンバイフェイズに相手のscとこちらのscを同じにするのさ」

「ナイスだぜ遊星！」

「ち…俺たちがspを使うのを待っていたのか！」

「そして俺たちのscは5！このカードを使うぜ、spーラピッド・ショットウイング！こいつは俺たちのsc1個につき俺たちのフィールドのモンスター1体の攻撃力を100アップ出来る！」

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500↓3000

「ゴヨウ・ガーディアンは攻撃力を超えただとお!？」

「バトルだ！あの権力モンスターを燃やし尽くせ！」

A・ジエネクス・トライフォースは右腕を突き出すと、手に該当する部分が相手に向かって蓋が外れ、そこから火炎放射が繰り出される。ゴヨウ・ガーディアンはなす術なく燃やされてしまう。

牛尾&沢中 LP4000↓3800

「この俺がサテライトの層なんかにダメージを…！」

「まだまだ！炎属性をシンクロ素材にしたトライフォースは戦闘で倒したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「なっ…ぐおおおっ!?!」

牛尾&沢中 LP3800↓1000 sc5↓3

「見たか！これで俺はターンエンド！」

コナミ&遊星 LP1200 sc5

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』(攻撃表示)

セット1 『倍返し』(カウンター1) 『蘇りし魂』(使用済み)

手札1 (コナミ)

「くっ…俺っちのターン！」

沢中が引いたカードはトランプカードリアクティブ・アーマー炸裂装甲。このカードは攻撃してきたモンスターを破壊することができる。次のターントライフォースが攻撃すれば破壊することができる…が、そうはいかないことにセキュリティは気づいていた。

「忘れてねえよな、このターンのエンドフェイズに倍返しの効果がお前らを襲うぜ！」

「くっ、だがこの手札では…。俺っちはカードを1枚伏せて…」

「よし、勝った…！」

コナミが表情を緩める中、牛尾が突然高笑いをしだす。

「はははは！馬鹿め、俺たちのライフが尽きる前にお前たちのライフはゼロよー！」

「何…？どういうことだ！」

「……」

「へっ…こういうことよ。ラピッド・ウォリアーの効果を使え、沢中！」

「…そうか、俺っちはラピッド・ウォリアーを攻撃表示に変更し、効果を発動する！」

ラピッド・ウォリアー 攻撃力1200

ラピッド・ウォリアーが目にも留まらぬスピードでトライフォースの横を駆け抜けコナミの背後を取る。



「な…なんだ!？」

「…ラピッド・ウォリアーは効果を使うことで他のモンスターの攻撃を放棄しダイレクトアタックを行うことができる」

「なっ…何だって!？」

「さつきは絆の力がどうか言ってたが笑われせくれるなあ!お前らのライフは1200…これで終わりだ!やれ、沢中!」

「はい!俺たちはラピッド・ウォリアーでダイレクトアタックする!」

既に背後に回ったラピッド・ウォリアーはコナミに向かって加速し攻撃を仕掛ける。コナミにラピッド・ウォリアーのパンチが決まる…その直前、ぼろぼろの鉄屑で出来たかかしが間に割って入りラピッド・ウォリアーを跳ね返す。

「何だと!？」

「俺たちの絆は決して何者にも断ち切らせはしない!トラップカードくず鉄のかかし!このカードはモンスターの攻撃を無効にし、再びセットされる!」

「流石だぜ遊星!」

「さあ…他にすることがないならターンエンドしてもらおう」

「うっ…俺たちはターンエンドだ」

「この瞬間倍返しは破壊され、お前たちは2000のダメージを受ける!今まで俺たちを権力で支配してきたんだ、倍で返してやるぜ!」

倍返しのカードからみすぼらしい格好をした市民が大量に現れ、セキユリテイ達をタコ殴りにする。

「この俺がまたしてもサテライトの屑野郎なんか…!やめろ、お前ら…俺に近づくな!?!」

牛尾&沢中 LP1000↓0

ソリッドヴィジョンとはいえ大量の市民に周りの視界を塞がれたセキユリテイ達は思わずクラッシュしてしまう。同時にこのデュエルの勝者が決定した。

「俺たちの勝ちだ遊星!」

「ああ…だが浮かれている暇はない、メンテナンスハッチが閉じる前にシテイへ抜けるんだ!」

「もちろん！フルスロットルで行くぜ！」

デュエルが終了したことで速度制限が解除され、自由に運転が出来るようになったコナミ達はシティへ続くゲートが閉じてしまう前に抜けようと必死にDホイールを走らせるのであった。

そうよ、令嬢だからよ

シテイ。ここは身分の高い者のみが住んでおり、贅沢な暮らしをしている。今は夜だというのに灯りは絶えず、辺りをまんべんなく照らしている。そこに2つのDホイールが止まる音が響く。もつとも未だ賑やかな街の騒音にかき消され、聞こえた者は僅かだろう。

「どうやら…ついたようだな」

「おお…！ここがシテイか！俺たちついにやったんだな！」

「ああ。…!?そこにいるのは…！」

「え？あつ…お前は！」

「「ジャック！」」

2人の視線の先にはかつて遊星のスターダストとDホイールを奪い、仲間を裏切つて1人シテイへ渡り、そこでキングとして名を馳せているジャック・アトラスの姿があった。

「待っていたぞ遊星。それに…コナミか、久しいな」

「どうしてお前がここに…」

「月を見ていたらお前が来るような気がしてな」

「…あれ？俺は!?!」

明らかに遊星しか見ていないジャックに対しコナミが異議を申し立てる。

「ふん…キングであるこの俺がデュエリストですらない貴様に目をくれる訳もあるまい」

「残念だったな！今の俺はデュエリストだ、さつきデュエルにも勝つたんだぜ！」

「ほう…お前もデュエリストになったのか。だが、そんなことは今はどうでもいい。今俺が用があるのは遊星、お前だけだ」

「そ、そんなこと…」

コナミはジャックの態度にショックを受けるが、ジャックが高圧的なのは昔からなので切り替えるのも早かった。

「…俺がここに来た理由。分かっているな？」

遊星の質問に対し、ジャックは1つのカードを取り出す。

「分かっている。俺が奪ったスターダストを取り返しに来たのだろうか？」

「え？そうだったのか」

ジャックはそのカードを遊星へ投げつける。遊星はとっさにそのカードを手に収めた。

「キングになった今、そのカードはもはや不要！返してやろう」

「お？返してくれるのか、良かったな遊星」

「……」

遊星はそのカードを一瞬見た後、すぐにジャックへと投げ返した。

「…そのカードはデュエルで取り返す。お前もそのつもりで来たんだろー！」

「そう来なくてはな！丁度いい舞台がある、ついて来い！」

ジャックはそのカードを再びデッキに戻し、自らが愛用しているDホイールに乗り込む。ホイール・オブ・フォーチュンと呼ばれる一輪走行で車輪の中に操縦席がある変わったDホイールを操り、ジャックはスタジアムのある方向へ向かう。そして遊星もそれについていった。

「…え？2人とも待つてくれー！」

慌ててコナミもついていった。

この様子を監視カメラを通して見ていたものが3人いた。ジャックの秘書、狭霧御影<sup>さぎりみかげ</sup>。治安維持局調査室長、イエーガー。治安維持局局長、レクス・ゴドウィン。彼らは一部始終を見終えた後、このようなことを話した。

「キングは…スタジアムへ向かっているのですか」

「どうやらこのサテライト住民とデュエルなさるようです」

「アトラス様がサテライトの者とデュエルを…」

「如何なさいますか？セキュリティを呼んでデュエルを中止させることもできますが」

「いえ…まだいいでしょう。2人のデュエルを見届けましょう」

「了解しました。…ところで赤帽子の男は如何なさいましょう？」

「興味はないですね。セキュリティに任せます」

「分かりました。お任せくださいまし…ヒヒッ！」

ピエロのような男は電話を取り出しセキュリティへと連絡した。

時は少し経ちジャック達はスタジアムへと到着する。先頭のジャックが入り口を通り、続いて遊星もそこを通っていく。さらに続いてコナミが入ろうとした瞬間、入り口のシャッターが急に閉じてしまった。

「なっ…何!？」

コナミは慌てて急ブレーキをかけ、衝突を回避する。ホツとしたのも束の間、辺りがライトによつて照らされる。

「お前がサテライトから侵入したことはイエーガー様からの連絡によつて分かっている。不法侵入の罪により貴様を逮捕する！」

手際よくセキュリティ達がコナミの逃げ場を塞ぐ。

「もうばれたのかよ！いくらなんでも早すぎだろ…!？」

「お前は完全に包囲された！無駄な抵抗はやめろ！」

「くっ…諦めてたまるかよ！」

コナミは再びDホイールのアクセルを踏み、壁を作っているセキュリティに突っ込んだ。

「な…突っ込んでくるだと！そんなことをしても衝撃でクラッシュをするだけだ！これ以上罪を重ねるな！」

「悪いけどこのまま突っ込む気なんてさらさらないぜ！」

コナミはDホイールに体重を偏らせウィリーの状態にし、前輪を宙に浮かせる。そして設置してあるライトの1つを踏み台にすることでDホイールごとセキュリティ達の上を乗り越えた。

「クロウに教わった対セキュリティのテクニックがこんなところで生きるとは…！」

「しまった…奴を追え！」

こうしてコナミとセキュリティのレースは小1時間ほど続くのであった。

「な、なんとかかまいたか。慣れてない土地だから苦労したぜ。ここは…どこだ？」

コナミは周りを見渡す。すると1つ大きな建物が目に入った。

「ちよつとボロボロだが、これはホテルか。そーいや寝る場所どうしようかな…」

そう言いつつコナミはDホイールにセットされているデュエルディスクに貯められたD Pデュエルポイントを確認した。デュエルディスクはモメントというエネルギーで動いており、これはデュエルを行うことで発生する。この発生したモメントはデュエルの勝者にDPという形で委ねられ、お金のように扱うことができる。ただしコナミが持っているDPは先ほどのデュエルでの勝利分のみであり、これではホテルに泊めてもらうのは夢物語である。

「どうするか…。いつそのことタダで泊めてくれないかなー」

コナミがそんな戯言を言った瞬間、ホテルから大きな声が聞こえてくる。

「んだとコラア！もう一回言ってみろ！」

「うわ!?ごめんなさい冗談で…なんだホテルの中からか」

コナミはとっさに謝るも相手はホテルの中だった。

「ふざけんなよ temeエ！」

「それにしても只事じゃなさそうだな…。一旦中で身を隠したいしDホイールを草陰に隠して入ってみるか」

コナミはDホイールを見えないように隠し、デュエルディスクだけ持ってホテルの中に入る。すると中では予想通り只事ではないことが起こっていた。

「ですから、このホテルを買収させて頂くと言ったのですわ。庶民はそんなことも分かりませんか？」

「だから！なんで temeエ にアタイのホテルを渡さなきゃなんねえんだよ！」

2人の女性がロビーの中心で激しい言い合いを繰り返していた。コナミはその女性の1人に心当たりがあつたようだ。

「えっ…？あんたはノーマナーの姉御!？」

「ああん？…ってコナミ!?!なんで temeエ がこんな所にいやがるんだ？」

彼女はノーマナー弥生、サテライトに存在するギャングのボスだよ

そ者にはとことん厳しい。反面サテライトの仲間には優しく、特に訳ありの人間には人情家な一面も見せる。サテイスフアクション解散後のコナミを腑抜けた顔をしていると評し、しばらく世話を焼いていた過去を持つ。

「そつちこそ！サテライトからいつの間になくなったかと思えばこんな所に！」

「アタイはサテライトとシティを通る輸送船があるって情報を仕入れてな。ちよつくら忍び込んできたってわけよ」

「さすがは姉御…。肝が座ってんなあ」

「テメエはどうやってここに？」

「俺か？俺はパイプラインのメンテナンスハッチが空いているタイミングで通ってきただけだぜ」

「そつちも大概じゃねえか」

2人が話の花を咲かせていると、堪忍袋の緒が切れたと言わんばかりに怒っている女性が話に割り込んできた。

「ムキー！庶民風情がこのわたくしを無視しておしやべりなど…恥を知りなさい！」

「えーと？どちら様？」

「海野財閥のご令嬢さんだよ。名前は…覚えたくもねえな。知りたかったらネームプレートでも見てくれ」

コナミは言われるがままネームプレートを見してみる。

「む…漢字か。だが俺はカードで漢字を勉強したからちやんと読めるぜ！ちよつと待ってな…えーと、分かった！うみのさちこ海野幸子か、よく分からないけどよろしくな」

「さちこ…ですって？」

ただでさえ怒っていた女性がさらに鬼神のように怒り出す。どうやら逆鱗に触れたようだ。後ろにいたお供らしき黒服達も騒ぎだす。

「あいつ…お嬢様のタブー中のタブーを！」

「あいつら逃げたほうがいいぞ…」

「というか俺らも逃げたほうが…」

黒服の1人が逃げようとする前に彼女は黒服達に向かって手を叩

き、あるものを要求する。慌てて黒服達は要求されたもの、デュエルディスクとデッキを彼女へと渡す。

「その庶民…。わたくしが一番気にしていることを軽々しく言った罪はデュエルで払ってもらいますわ」

「え？どうゆうことだ？」

「わたくし：海野幸子はこのホテルの存続権をかけて庶民にデュエルを申し込めます。」

「ちよつとアンタ！勝手に何を！」

「うるさいですわ！そもそもこのホテルのオーナーに買収の許可は貰っています、あなたが口を出すことではありませんわ」

「許可を出したっていつても無理やり出させたんじゃないやねえか…ん、待てよ。おいコナミ」

「なんだ姉御？」

「このデュエル受けてくれ」

「え？ええ！なんで俺が？」

「今アタイが経営してるこのホテルはあの財閥に無理やり買収されそうなんだ。だからデュエルで勝たねえと多分買収されちゃう。むしろ奴さんの頭に血が上っている今がチャンスだ」

「ん…なるほどな。俺としても姉御に借りを返すチャンスだ。このデュエル受けるぜ！」

この時幸子は何か思いついたようで、コナミに意地の悪い笑みを浮かべてくる。

「わたくしが勝ちましたら…そうですね。ホテルの買収はもちろん、庶民に何か一つ言うことを聞いてもらいますわ」

「ええ？」

「こんな貧相で利益も出ないホテルを買い取って海野財閥に貢献させてあげようと言うのです。これくらいのプラスアルファは必要ですわ」

「好き勝手言いやがって…いいいぜ、こっちが買ったら買収の話は無しにしてもらう」

「あ、姉御!?!俺の意見は…」



「要は勝つちまえばいいんだ。細かいことは気にすんな！」

「えー？まあ、そうか。いいぜデュエルだ！」

「話はまとまりましたわね。格の差というものを見せつけてあげましょう」

2人は距離を取りデュエルをするのにちょうどいい間を空け、デュエルディスクを展開する。数秒の沈黙の後、互いにデュエルの開始を宣言する。

「「デュエル！」」

だが奴は…弾けなかった

「「デュエル！」」

デュエルディスクが先攻をランダムに選ぶ。先攻の目印となるランプがついたのは…コナミ。

「先手必勝だ！俺のターン、ドロー！」

「頼んだぜコナミ…もし負けたら、分かってるよな？」

弥生が関節をコナミに聞こえるように鳴らす。思わず冷や汗をかきコナミは必死に手を考えた。

「俺は手札のモンスターを裏側守備表示で召喚する！さらにカードを1枚伏せて…まずはこれで様子を見るぜ、ターンエンドだ！」

コナミの場に正体不明のセットカードが2枚場に現れる。カードの裏面しか見えないため相手には一切の情報が入らない。

コナミ LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット1

手札4

コナミのターンが終了し、次は幸子のデュエルディスクにランプが点灯する。

「凡庸な初手ね。わたくしのターンですわ、ドロー！」

社交デュエルを嗜む彼女はリズムよくステップを踏みながら鮮やかなドローを見せ、ドローの確認すら華麗に行う。

「現れなさい、ヒゲアンコウ！」

餌を誘い出すために長いヒゲを持った深海魚がピチピチと跳ねた。よく見るとメスとオスが一体化しており血液や栄養を共有している。

ヒゲアンコウ 攻撃力1500

「行きますわよ庶民、ヒゲアンコウでそのセットモンスターへ攻撃を行いますわ！」

ヒゲアンコウは大きく跳ねるとセットモンスターめがけて落ちていった。攻撃が決まる直前、伏せられていたモンスターの正体が明らかになる。

「俺が伏せていたのはUFOターゲットだ！」

UFOターゲット 守備力1200

未確認飛行物体を甲羅として背負う亀が姿を現した。避けようとするも歩くのが遅い亀では避けることは叶わず攻撃が直撃してしまう。

「UFOターゲットを撃破ですわ！」

「けどこのタイミングでUFOターゲットの効果が発動するぜ！こいつが戦闘で破壊されて墓地に行ったらデツキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚できるんだ！」

「わたくしの魚デツキに炎のモンスターで立ち向かおうなんて無謀も良いところですよ」

「俺が呼ぶのはこいつだ！頼んだぜギガテック・ウルフ！」

鋼鉄で作られた狼がコナミの場に現れる。大きな遠吠えをするがヒゲアンコウの攻撃の際に飛び散った水に反応し萎縮してしまう。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「随分と貧弱なモンスターですこと」

「…おい！コナミ、まさかそのデツキは!？」

「ふっ…俺の拾ってきたカードたちだぜ！」

「ま、マジかよ…」

「…？拾ってきた？」

幸子は拾ってきたという言葉に怪訝な反応を示すも、世迷言と聞き流しターンを進める。

「わたくしはカードを2枚伏せてターンエンドですよ、せいぜいあがきなさい庶民」

幸子 LP4000

フィールド 『ヒゲアンコウ』（攻撃表示）

セット2

手札3

「俺のターン！行かぜ、チューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚だ！」

頭の左右にアンテナのようなものをつけたロボットが水を避けな

がら現れる。機械なので水に濡れると不都合が出るのだろう。もしかしたらギガテック・ウルフが避けた理由は炎属性だからではなく機械だからかもしれない。

「場にチューナーとそれ以外のモンスターが揃いましたわね…まさか」

「そのまさかだ！俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーがアンテナから特殊な電波を飛ばしギガテック・ウルフの姿がみるみるうちに変わっていく。

「3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA・ジェネクス・トライフォース！」

変貌したギガテック・ウルフの姿が大きく変わっているところを見るとジェネクス・コントローラーの力はとつもないものなのかもしれない。ジェネクス・コントローラーは自らが変貌させたモンスターのコアとなり炎の力を制御させる。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「どうだ！攻撃力2500の強力モンスターを召喚したぜ！」

「この僅かなターンでシンクロ召喚に成功するとは…。庶民の割にはやりますわね」

「よし、このままバトルだ！行け、トライフォース！あのアンコウを焼き魚にしてやれ！」

トライフォースは右手を突き出し、そこからヒゲアンコウをめがけ火炎放射を放つ。

「トライフォースは戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！戦闘ダメージと合わせて一気に2500のダメージだぜ！」

「そんな単調な攻撃が通るとでも思ってた？わたくしは伏せていたトラップカードをオープンしますわ。ポセイドン・ウエーブ発動！」

幸子が発動したトラップカードから出てきた津波がいとも簡単に火炎放射を蒸発させてしまう。

「くっ…攻撃を防がれた！」

「まだ効果は終わっていませんわ！」

「何!？」

発生した津波はそのままコナミへ向かう。その波に乗ったヒゲアンコウがそのままコナミに襲いかかった。

「うわっ！な、なんだ!？」

「ポセイドン・ウェーブは攻撃を無効化し、わたくしのフィールドの魚族・海竜族・水族モンスターの数×800ポイントのダメージを庶民に与えます！当然、ヒゲアンコウは魚族！」

ヒゲアンコウは尻尾でコナミの顔をビンタする。

「痛えー！くっ…ダメージまで貰っちゃった！」

コナミ LP4000→3200

「わたくしに傷を負わせるなど100年早いですわ」

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP3200

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）

セット3

手札2

「さあ、参りますわよ。わたくしのターンです」

幸子がドローカードを確認する。すると幸子は突然高笑いをはじめた。

「オーホッホー！庶民、所詮あなたではわたくしのようなシテイでもさらに最上階級のトップスとの力の差は歴然としていることを教えてさしあげますわ。」

「デュエルに身分なんて関係ないだろ！」

「ご冗談を。わたくしは海野財閥の令嬢、庶民ごときに負ける理由などございせんわ。庶民などわたくしにとつてはそこらへんに落ちている紙くず同然、デュエルであろうとなかろうと邪魔になるなら振り払うまで」

「…な、なんだと！力があるからって無闇に人を振り払うことが許されると思ってるのか！」

「庶民に許しなどどうして請う必要がありません。わたくしはお父様の命令ならばどんな庶民の犠牲があろうと気にせず実行致しますわ。今回もそれは同じ、オーナーであろうとあなたであろうとわたくしは持てる力を全て振るいます」

「お前は…」

「おしやべりはここまです、わたくしはヒゲアンコウを生贄にこのモンスターを召喚しますわ。現れ出でなさい、超古深海王シーラカンス！」

ヒゲアンコウを媒体として現れたのは全長約1.5メートルの巨大なシーラカンス。ヒレは扇の形をしており、古くから生存し続けていることで貫禄も凄まじいものとなっている。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「1体の生贄でいきなり攻撃力2800のモンスターだど!？」

「わたくしはヒゲアンコウの特殊効果を使用していたのです。このモンスターは水属性モンスターを召喚する場合1体で2体分の生贄となりますわ」

「あのオスとメスで1体ずつの生贄になるってことかよ…! 攻撃力は2800…来るか!」

「お父様からもらったこのカードの力はこんなものではありませんわ、わたくしは手札のカードを1枚墓地へ捨てることでシーラカンスの効果を使用します。効果によりデッキから任意の数だけレベル4以下の魚族モンスターを召喚することが出来ますわ…わたくしは竜宮の白タウナギとキララー・ラブカを2体ずつ呼び出しますわ!」

シーラカンスが扇形のヒレを使って水に衝撃を与える。するとそこから4つの渦ができ、モンスターが飛び出てきた。

竜宮の白タウナギ×2 攻撃力1700

キララー・ラブカ ×2 攻撃力700

「な…一気にフィールドのモンスターが埋まった!？」

「これがシーラカンスの効果ですわ。もつともこの効果で呼び出したモンスターは効果を無効化され、攻撃も行うことはできませんが」

「な、なんだ…びっくりさせざるぜ!」

「油断するなコナミ！竜宮の白タウナギはチューナーモンスターだ！」

「な…なぬ!？」

「行きますわよ、わたくしはレベル3のキラール・ラブカにレベル4の竜宮の白タウナギをそれぞれチューニング！貧民と富豪、庶民と貴族、これが格差デュエル！シンクロ召喚！鋭き槍でわたくしに勝利を、氷結界の龍 グングニール！」

2匹の魚はそれぞれ同調し、万物を凍てつかせる破壊の龍を呼び覚ます。2体の龍が咆哮をあげるとシーラカンスによつて飛び散った水が一瞬で凍りついた。

氷結界の龍 グングニール×2 攻撃力2500

「攻撃力2500以上のモンスターが3体も並ぶなんて…！」

2体の氷を身にまとった巨大なドラゴンと古くから生き抜いてきた超巨大な深海魚がコナミとトライフォースに対峙する。

「庶民、このターンで終わりですわ」

「ち…総攻撃を受ければコナミのライフはもたねえ！」

「まだまだ…！俺はライフが0になるまで諦めないぜ」

「ふっ…甘いですわよ庶民、わたくしは攻撃を行う前にグングニールの効果を発動致しますわ」

グングニールが雄叫びをあげるとどこからともなく氷で出来た槍が飛んでくる。トライフォースとコナミの1枚のセツドカードに突き刺さりそのまま凍ってしまう。

「なっ…トライフォースと伏せていたシンクロ・ストライクが破壊された!？」

「グングニールの効果でわたくしは手札のカードを2枚墓地へ送ることであなたのフィールドのカードを2枚破壊させましたの。わたくしの手札は凍てつく氷の槍となったのですわ！」

「トライフォースがこうも簡単にやられるなんて…」

「それに先ほどまであなたが描いていた筋書きも読めましたわ」

「な、なんだと!？」

「シンクロ・ストライクはシンクロモンスターの攻撃力をシンクロ素

材となったモンスターの数×500アップさせるトラップカード。あなたはこれでライフオースの攻撃力を上げて効果と合わせてわたくしに3500の反撃ダメージを与えようとした…こんなところでしょう」

「くっ…すごいなお前」

「当然です、わたくしは海野財閥の令嬢なのですから」

「だけどよ、さっきからシティだのトップスだの海野財閥だの父親だの…そこにお前自身の意思はないのかよ！」

「…っ！お黙りなさい、力なき庶民に何が分かりますの！行きなさいシーラカンス、無礼な庶民に肅清を！」

「そうだよ…俺に力なんかない、今も昔もな。だからこそ分かることだつてあるんだよ！トラップ発動、シンクロ・スピリッツ！こいつの効果で俺は墓地のライフオースを除外し、こいつのシンクロ素材となったジェネクス・コントローラーとギガテック・ウルフを特殊召喚する！」

氷漬けにされたライフオースが自らの身を異次元に飛ばすことで墓場に送られていた同胞をもう一度呼び覚ます。

ジェネクス・コントローラー 守備力1200

ギガテック・ウルフ 守備力1400

「いいえ、分かりませんわ。わたくしは幼い頃から英才教育を受け、海野財閥の社長であるお父様の令嬢として育てられました。そして今までお父様の命令は全て遂行してきました、そうすることではお父様はわたくしを認めてくれないから…。だから今回の命令も必ず遂行しなくてはならないのです、海野財閥の令嬢として完璧に！まずはチューナーのジェネクス・コントローラーへ攻撃を続行いたしますわ！」

シーラカンスが墓地からぼろぼろの状態で復活してきたロボットへ襲いかかる。あからさまな体格差を前に破壊を逃れるすべはなかった。

「…俺はゼロ・リバーズで両親を失った。だから父親に甘えたい、認められたいってのはよく分かるぜ。だけどよ父親ってのは何かしな



きや認めてくれないとかそんな主従関係じゃないだろ!?もつと無条件の絆で繋がっているもんだろ家族つてのは!」

「もう子どもの頃とは違うのです!無条件で甘えられたあの頃とは:watakushiを認めさせるにはこう力を振るうしかないのですわ!」

「子供をそんな足枷で縛る関係なんて家族じゃねえ!お前もわかつてるだろ!それがどんなに辛いのか!」

「:watakushiにはその足枷を外す術は分かりません!足枷を背負ったまま生きる、それしかないのです!」

「俺が教えてやるよ、その方法を!子供みたいだと思っても駄々をこねろ!自分に悪いことをさせてるって自覚があるんなら反発しろ!自分の意思を閉じ込めるよりはよっほどスッキリするはずだぜ。トランプ発動、自由解放!俺のモンスターが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、フィールドのモンスターを2体デッキに戻す!俺が戻すのは無闇に力を振るってるその2体のドラゴンだ!」

コナミのトランプから自由を求める人々が現れる、彼らは2体のドラゴンにがむしやらに攻撃をする。すると2体のドラゴンは咆哮をあげようとすもあまりに無茶苦茶な攻撃に参り、はるか上空へと飛びどこかへ行ってしまう。

「そんな、2体のグングニールが:!?」

「へっ:どうよ。俺が昔組んでたチームも時々ケンカをすることがあった。俺たちはケンカをする時全力でケンカした。最後にはみんなスッキリして笑いあえるようにな!」

「今更:、watakushiはお父様の教えの通りにしか生きることがないのです。お父様の教え以外でwatakushiはこの力の使い方を知らないのですわ。:watakushiはこれでターンエンド。次のターン、再びシーラカンスの効果を使えば私の勝ちは決定するでしょう。諦めなさい庶民」

幸子 LP4000

フィールド『超古深海王シーラカンス』(攻撃表示)

セット1

手札0

「諦めねえよ！諦めちまったら何も変えることはできねえからな！俺のターン、ドロー！」

（無駄ですわ…わたくしの墓地にあるキラール・ラブカは1ターンに一度、シーラカンスへの攻撃を防げる上に攻撃してきたモンスターの攻撃力を500下げられます。さらに伏せカード激流蘇生はシーラカンスが破壊されても再び呼び戻せる上に庶民に500のダメージを与える。もはや力のない庶民ではこの力は破壊できない）

「行くぜ、幸子。俺は手札からアイアンコールを発動！俺の場に機械族モンスターがいる時、墓地のレベル4以下の機械族を復活させられる。もう一度来い、ジエネクス・コントローラー！」

ギガテック・ウルフの遠吠えに応じ、三たびフィールドにジエネクス・コントローラーが舞い戻る。しかし、その姿はもうボロボロだ。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「無駄ですわ…、あなたにシーラカンスは倒せない。わたくしの力はお父様の教えの通り、トップスの繁栄のために使う。それ以外はありません！」

「トップスのため…か。だがそれは俺たちサテライトとの格差をさらに広げることになるぜ」

「トップスとは人生の勝者、敗者がどう過ごすかなど知る余地もないのです」

「そうか…、知らないのか。俺はギガテック・ウルフを生贄にマインド・オン・エアを召喚する！」

マインド・オン・エア 攻撃力1000

頭に水晶玉を乗せた占い師が現れる。占い師は手から特殊な光線を水晶玉にかざし、幸子にあるビジョンを見せる。

「なっ…これは。なんですの、この貧相という言葉では表現しきれないこのビジョンは！」

「これは俺の心に残ってるサテライトの様子をこのモンスターを通してお前に見せているんだ」

映し出されるのは仕事がなく物乞いをする者や、食べるものが無くてシテイからのゴミをあさり残飯を食事にする者、どれも痛々しい風貌

をしております今にも倒れてしまいそうだ。

「これが…サテライトの姿だと言うのですか。わたくしはトップスの生活しか知りませんが、当然最低限の生活はしていると思っていたのに…！」

「俺たちは毎日生きるのも必死さ。食事もカードもロクに手に入らない、ようやく手に入ったかと思えばセキュリティという権力に強奪されちまうことなんて日常茶飯事さ」

「そんな…、わたくしはこれを見てどうすれば。わたくしは…わたくしは…！」

「これは俺からお前へのお願いだ。決して強制する訳じゃない、だけど聞いてくれ。俺はレベル6のマインド・オン・エアにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアン！」

ジェネクス・コントローラーがマインド・オン・エアを特殊な電波によって黒い蒸気機関車へと姿を変える。蒸気機関車が欲を抑えきれなくなる前にジェネクス・コントローラーがコアへ装填され力を制御する。

レアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「わたくしに…お願い？ 一体何を…」

「見ての通りサテライトはあんな感じた。いや、俺が見えていないだけでもっと酷いかもされない。…俺はあいつらを助きたい。だけど俺にそんな力はない。だから…お前の力を貸して欲しいんだ！レアル・ジェネクス・クロキシアンの効果発動、相手フィールドの一番レベルが高いモンスターのコントロールを得る。シーラカンスの力を貸してもらうぜ」

クロキシアンが汽笛を鳴らすとシーラカンスは幸子の方を少し見た後コナミの方へと向かっていく。

「…！庶民にわたくしの力を貸す。それがわたくしの力の使い方…？」

「ここから先はお前が決めてくれ。お前が一番後悔しない方法で！バ

トルだ、クロキシアンとシーラカンスでダイレクトアタックだ！」  
シーラカンスが水を吹き出すとそれは四方八方に散ってしまう。  
だが、クロキシアンが蒸気を飛ばしその水を1つにまとめ上げる。

幸子 LP4000↓0

この瞬間デュエルの勝者が決定した。だが、もはやこの勝負の勝敗を気にしている者はいなかった。いや、弥生はホテルの存続権がかかっていたので少し気にしていたかも知れない。

「庶民。あなたの名前は？」

「コナミだ。かつこいいだろ」

「コナミですか、覚えておきましょう。…今から私はお父様のいる本社に行つてきます」

「幸子…！」

「ですがわたくしは負けず嫌いなのです。次デュエルする時あなたに勝ちはありません。本当のわたくしのデュエルであなたを倒させていただきます。それでは、ごきげんよう」

そう言い、幸子はホテルから出て行き、慌てて黒服たちは弥生にホテルの存続権を保障する契約書を弥生に渡した後幸子を追いかける。

「勝ったぜ、姉御」

「全く…アンタといると飽きないよ」

「だろ？」

「褒めてねえよ。…なあお前がシティに来たのつてもしかしてサテライトの人を救うためか？」

「さあな。俺はただシティがどんな感じか知りたかっただけさ」

「そう、まあいいさ。とりあえずアタイのホテルを守ってくれて感謝するよ」

「…そう言えばそんな理由で始めたんだっけ」

「おい！そこは忘れるなよ…。つたく、助けてくれた礼にしばらくこのホテルに泊めてやるよ」

「マジで！助かるぜ姉御！」

「どうせ寝るところなんてねえだろうからな。部屋まで案内してやるよ」

弥生に案内されコナミは無事寝どころに着くことができた。遊屋とジャックがあの後どうなったかを考えるも、今日1日の疲れが来てしまい熟睡してしまう。翌日、弥生に叩き起こされないと起きないほどには。

本気を出さなくとも一瞬だ

パイプラインを抜けてシティを訪れてから一晩経ち、コナミは2日目朝…というには日が昇っている時間に目が覚めた。弥生に叩き起こされたコナミは渋々と体を起こす。

「相変わらずテメエは誰かに起こされるまでずっと寝てやがんな」

「眠いもんは眠い！」

「胸張っていうことじゃねえよ！」

コナミは部屋から引つ張り出され、ロビーへと連れてこられる。

「…で？テメエはこれからどうするんだ。あの海野財閥の嬢ちゃんの様子でも見に行くのかい？」

「流石に1日で話がつくとも思えないしそれはあつちからの連絡を待つさ。それより俺は遊星を探しに行くぜ」

「遊星を？遊星もこつち来てんのか」

「ああ。シティに抜けた時にジャックと再会してスタジアムで遊星とジャックがデュエルすることになったんだが、俺だけ締め出されちゃった上にセキュリティに追われちゃってな。その後どうなったか分からないんだ」

「遊星がキングとデュエルを…。でもヤバくねえか、お前が追われたってことは遊星も多分追われる。スタジアムでデュエルしてる遊星に逃げ場はねえぞ」

「そうなんだよな…」

コナミは遊星をどう見つけるか考えた。遊星が捕まっているなら収容所を探して脱獄に協力することも考えられる。だが、まだ遊星が捕まったという確信はない。それに遊星ならば自分の力で脱獄してくる可能性もあり、その場合無駄足となってしまう。どちらにせよ情報が足りないのだ。

「それにテメエはセキュリティに追われてんだろ？遊星を探してテメエが捕まっちゃったら本末転倒だぜ」

「そうか、セキュリティを避けた上で情報を探さないといけないのか…あ」

コナミは思いついたと言わんばかりに手をポンと叩く。

「何か思いついたのか？」

「ああ、名付けて木の葉を隠すなら森の中…いや、グリグルを隠すなら世界樹の中作戦だ」

「ネーミングセンスねえな」

そしてコナミはすぐさま行動に移す、グリグルを隠すなら世界樹の中作戦とやらを。

時は少し経ち、場所はシテイの繁華街。

「見つかったか！」

「いや、こちらにはいない」

「くそっ…とにかく探せ！」

そこではセキュリテイ達がせわしなく誰かを探している。

「多分、俺を探してるんだろうな…。もしかしたら遊星もか」

セキュリテイ達はお互い調べたところを教えあうと再び手分けして探し出す。セキュリテイの1人が単独で裏路地に入った瞬間だった。コナミは首のあたりに手刀を食らわせ、セキュリテイを気絶させる。

「悪いな、ちょっと借りるぜ」

セキュリテイの服を勝手に借り、コナミは変装をすませる。トレードマークの赤帽子を目立つと判断してセキュリテイの被っていた青帽子を拝借し、出来るだけ顔を隠す。最後に気絶させたセキュリテイを人目につかないところに隠し、準備完了だ。

「セキュリテイの格好をしていけばセキュリテイに追われる心配もないし、情報収集も出来る。一石二鳥だぜ。…1岩石の巨兵2冠を抱く蒼き翼作戦の方が良かったかなあ」

再びネーミングセンスのない作戦をぶつぶつと呟くとコナミは裏路地を抜け先ほどのセキュリテイのDホイールにまたがり、遊星の情報を得るため治安維持局へ向かおうとする。幸いDホイールのマップ機能で場所はすぐ特定することができた…が、そううまくはいかない。

「おい、お前どこへ行くつもりだ？」

「……じよ、情報を一旦整理するために本部に戻ろうと思つてな」

「気持ちはわかるが…無理なことはわかつてるだろ。昨日赤帽子の奴を取り逃がしたから俺たちはイエーガー様からすごいお叱りを受けて、赤帽子を見つけるまでは本部に帰つても追いつかれちゃうんだぜ」

「な…!?…そ、そうだったな」

とりあえず怪しまれる前にDホイールを降りるコナミ、だがとつきに1つのことを確認する。

「あれ?もう1人スタジアムに入つていった奴はどうなつたんだっけ?」

「あいつは逮捕されただろ?といつても俺たちとは違う管轄の奴らだから俺らが赤帽子を取り逃がした言い訳には出来ないけどな」

「……」

遊星が捕まっていたことを知るコナミ、だが遊星が細かくどういった状況なのかを得るには至らない。これ以上情報を集めるには、赤帽子…即ちコナミが捕まらなくてはならない。だがコナミが捕まつては意味がない。そう思つた矢先であつた。

「ああ…だけど別件で追つてるあいつを捕まえればそいつの報告をするために一旦戻れるんだつたな」

「…その話、聞きそびれたみたいだ。悪いがその件の説明を頼めるか?」

「ああ…いいけど。あれつて全員に通達されてなかったか…?まあいいか、あれは今日の朝…丁度キングが今日のチャレンジャーとデュエルし終わったあととくらの時間だったか。通学中のアカデミア生徒が融合つていうレアカードを手に持っていたところ、そのカードを引つたくられてしまったんだとよ」

「そうか。…そいつの特徴は?」

「一瞬の出来事だから分からなかったんだとよ。これしか情報は無い、正直目撃情報待ちなんだよな」

「分かった。俺はそいつを探してみる、お前らは引き続き赤帽子を探しといてくれ」



そう言うど返事を聞く前にコナミは再びDホイールに乗り、とりあえずその場から離れる。

「…？わざわざ情報の少ない方から探すなんて変な奴だな」

コナミとしてはこちらにかけける他なかつたのだが、このセキュリティがそれを知る由はなかつた。

「ふう…あの堅っ苦しい喋り方はすげえ疲れるぜ」

コナミは額に滲む汗をぬぐう。

「だけどどうするか…、あんな少ない情報じゃ遊星を探すより難しいんじゃないか」

治安維持局に行くのを諦め、収容所をしらみ潰しに探そうか…と考えるコナミに大きな声が響く。

「キングは一人この俺だ！」

「うわっ…なんだ!?!」

顔を上げるコナミの先には今日のキングのデュエルと銘打たれたスクリーンがあつた。そこでは今日のジャックのデュエルが映っており、相手を圧倒する様子が伺える。

「相変わらずジャックは強えなあ…」

まじまじとスクリーンを見るコナミ、しかしそこにはヒントが隠されていた。

「ワシはエーリアン・ソルジャーを攻撃表示で召喚じゃあ！これでターンエンド！さあ、かかってこんかい！」

場に現れたのは奇妙な姿をした異邦人。一応人型の姿をしており手に握っている剣を一振りし、ジャックを挑発する。

「哀れなな道化め、その程度でキングに挑もうとはな。俺のターン、貴様には我がレッド・デーモンズ・ドラゴンを見せるのすら惜しい」

「なんじゃとお？」

「だが、キングのデュエルとはエンターテインメントでなくてはならない！俺はマジックカード融合を発動！俺は手札のビッグ・ピース・ゴーレムとミドル・ピース・ゴーレムを素材にして融合召喚を行うう！岩で作られし番兵よ、巨大な岩の番兵と交わりて新たなる力を示せ！融合召喚、その力を余すところなく敵にぶつけよ、マルチ・ピース・

「ゴーレム！」

2体の番兵が引力により1つとなり新たな姿へと生まれ変わる。その姿はまるで岩で作られた巨大なロボット。片手を振るうだけですさまじい風を呼び起こす。

「なっ…シンクロ召喚じゃなく融合召喚じゃとお！」

「キングが本気を出せば一瞬だ！だが貴様など俺が本気を出すまでもない。バトルだ！貧弱な兵を破壊しろ、我がゴーレムよ！」

ゴーレムの鋭く重いパンチがエーリアン・ソルジャーをいとも容易く粉砕する。

「くっ…これがキングか。少しはやるのお」

「キングとはこの程度ではない、俺は手札から速攻魔法融合解除を発動する。この効果によりマルチ・ピース・ピース・ゴーレムは元の2体へと分離する！さらにミドル・ピース・ピース・ゴーレムの効果によりデッキからスモール・ピース・ゴーレムを効果を無効にし、特殊召喚する」

巨大なゴーレムが分解されそれぞれのブロックが2体の番兵を作り出したかと思えば、さらに小さな兵が2体の間から生み出される。

「なん…じやと」

「貴様ごとき、俺が本気を出さなくとも一瞬ということだ。やれ、ゴーレムよ。哀れなチャレンジャーを葬りされ！」

3体のゴーレムのパンチが決まり、あつけなくチャレンジャーのライフはゼロになる。

「乾く…こんなデュエルでは満たされない」

「ワシが…負けた？ワシにもあの融合というカードがあれば…！こんなことには…！」

「あいつは…秀行か！あいつもサテライトから抜け出していたのか…しかもプロになっていたとはな。だけどあいつの最後の様子明らかにおかしかった…まさか！」

コナミの脳裏に1つの言葉が思い出される、事件が起こったのはキングがチャレンジャーを倒したすぐ後だったと。コナミはDホテルを走らせる。行き先は…弥生のホテル。

「姉御！もしかしてここに秀行がいないか？」

「な、なんだよ急に。確かにここはサテライトから流れてきた奴をアタイが世話してやってるところだ。あいつもいるけどよ…。なんかあったのか?」

「あいつ…アカデミアの学生からカードを盗んだかもしれないねえんだ」  
「なんだと?ちっ…バカめ。待ってろ、呼んでくる」

弥生は秀行を部屋から引つ張り出してコナミのいるロビーに連れ出してくる。

「久しぶりだな秀行、…学生から融合のカードを盗んだのはお前か?」  
「そうじゃ…このカードさえあればワシはキングになれるんじゃない!」

「バカが!・テメエがプロデュエリストを目指したいっていうから泊めてやってんの…学生からカードを奪うだど?恥を知りやがれ!」

そう言い、弥生は秀行の首を持ち上げ訴えかける。コナミはそれを止めた。

「なぜ止める!?!」

「秀行、俺とデュエルしろ」

「なんじゃと?」

「俺たちデュエリストは自分のカードに思い入れを持ってる。そいつを奪ったお前を許すわけにはいかねえ。俺が勝てばセキュリティに突き出させてもらう」

「ワシにデュエルじゃと?笑わせてくれる、ワシはプロデュエリストじゃぞ!お主、聞いたところによるとデュエリストになりたてじゃそうじゃな。ええぞ、そのデュエル受けちやる。ワシが勝てばこのことは見逃してもらおうかいな!」

「ああ、いいぜ」

「ちよつとコナミ!こいつは腐ってもプロデュエリストだぜ!」

「姉御、ここは俺に任せてくれ。秀行はデュエルで倒さねえと自分がデュエリストとしてどれだけバカなことやってるか分かりはしねえ!」

「…分かったよ」

「話はまとまったかのお。ならいつちやる!」

「  
「  
デ  
ユ  
エ  
ル  
！  
」  
」

一見熱いようで、すぐクールになる

「「デュエル！」」

デュエルディスクによってランダムに先攻が選ばれる。先攻のランプがついたのはコナミ。

「よし、俺のターンからだ。ドロ―！俺はモンスターを裏側守備表示で召喚するぜ、さらに1枚カードを伏せてターンエンドだ！」

2枚のカードは裏向きでカードの模様しか見えない。デュエルは幸子との戦いと同じく静かなスタートで始まった。この時、ホテルの入り口でこのデュエルの様子をのぞくものがあったがそれに気づく者はいなかった。

コナミ LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット1

手札4

「堅実に来たのお、ワシのターンじゃ！ワシは魔法カード、苦渋の決断を発動じゃあ！こいつはのお、デッキからレベル4以下の通常モンスターを1枚墓地へ送ることで同名カードを加えられるんじゃあ！ワシはエーリアン・ソルジャーを選んじやる！」

モンスターを墓地へ送る場合、デュエルディスクにある専用のゾーンに送らなくてはならないが、秀行はエーリアン・ソルジャーをそのまま投げ捨てた。

「おい！自分のモンスターをそんな風に…」

「じゃかあしい！効果でエーリアン・ソルジャーを加えてそのまま召喚じゃあ！」

水色の球体を所々に身につけた異形の剣士が剣をかざし、相手の伏せモンスターに狙いを定める。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

「いきなり攻撃力1900か…！」

「さあバトルじゃあ！エーリアン・ソルジャーでそのセットモンスターを粉碎じゃあ！」

エーリアン・ソルジャーは足についている水かきを生かし最短距離で獲物に近づく。剣を振りかざした瞬間伏せられていたモンスターの正体が明らかになる。

「かかったな！俺が伏せていたのは大木炭いんばち18だ！」

その正体は巨木が完全に燃え尽きて出来た真つ黒な木炭。しかし、その木炭は意外にもエーリアン・ソルジャーの剣を弾く。

大木炭18 守備力2100

「なっ…エーリアン・ソルジャーで切れないモンスターじゃと！」

秀行 LP4000↓3800

「へっ…ジャックとのデュエルでそいつが出てたのは見てたからな。このデュエルでも出してくると思っただぜ！」

「ちい…カードを1枚伏せて、永続魔法、強者の苦痛を発動じゃあ！これでターンは終わりじゃ。さあ来んかい！」

秀行 LP3800

フィールド 『エーリアン・ソルジャー』（攻撃表示）

セット1 『強者の苦痛』

手札3

「俺のターン、ドロ―！こいつで行くぜ、来てくれ！華麗なる密偵スパイ―Cシ！」

現れたのはとても魅惑的なレディ。その美しさに目が釘付けになってしまいそうだが、着ているドレスからちらりと見える太ももにはナイフを収めているベルトが付いている。しかし、彼女がフィールドに降り立った瞬間に突然3つの星が降り注ぎ、彼女に突き刺さる。

華麗なる密偵―C 攻撃力1200↓900

「何！攻撃力が下がった!?!」

「甘いもう、強者の苦痛の効果でお主のフィールドの表側表示モンスターはそのモンスターのレベル分攻撃力を下げられるんじゃあ！」

「つまり…強力なモンスターを呼べば呼ぶほど攻撃力が下がっちゃうわけか！」

「そういうことじゃあ！攻撃力900程度のモンスターじゃワシのエーリアン・ソルジャーに歯が立たなからうて！」

「いや…そうでもないさ！俺はスパイCの効果を発動するぜ、ミツシヨンスターだ！」

スパイCはドレスを着ているとは思えない素早い動きで秀行に近づき、彼のエクストラデッキの1枚のカードにキスをする。

「おおつ？な、なんじゃあ!？」

「スパイCは相手のエクストラデッキのカードをランダムに1枚確認し、そのカードの攻撃力で効果が変わるのさ！」

フィールドにキスマークの穴が空き、そこから1枚のカードが現れる。そのカードはシンクロモンスター宇宙<sup>そらとりで</sup>砦ゴルガー、攻撃力は2600だ。

「確認したモンスターの攻撃力が2000以上の時、スパイCの攻撃力は1000上がるぜ！」

ゴルガーのカードから光線が放たれ、スパイCに降り注ぎ力を与える。

華麗なる密偵C 攻撃力900↓1900

「強者の苦痛を受けながらエーリアン・ソルジャーと並ぶじゃと!？」

「だけどこのままじゃ相打ちだ…どうする気だコナミ！」

「うーん…ど、どうすっかな。でも秀行の奴にモンスターを残しておくどさっきのシンクロモンスターを呼ばれちまうかもしれないな。こつちには大木炭18もいるしここは行くぜ！スパイCでエーリアン・ソルジャーに攻撃！」

「ならこのまま相打ちじゃあ！」

「だけどこのままタダじゃやられねえぜ！永続トラップ発動、バツクファイア！こいつは俺のフィールドの炎属性モンスターが破壊されるたびにお前に500のダメージを与える！」

「なんじゃと!？」

スパイCはベルトを外し、ナイフでエーリアン・ソルジャーに切り掛かる。エーリアン・ソルジャーも自らの剣を振るいナイフをはじきにかかった。互いに持てる剣術を出していき、最後に両者は相手に刃を立てて文字通り相打ちとなった。

「当然、スパイCは炎属性だ！」

スパイ—Cの破壊による爆破のエフェクトが秀行をも包み込む。

「げほっ！やってくれたのう…」

秀行 LP3800↓3300

「っし…！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP4000

フィールド 『大木炭18』（守備表示）

セット1 『バックファイア』

手札3

「いいぞコナミ！大木炭18も炎属性だから仮に破壊されてもあの野郎に500ダメージを与えられるぜ！」

「そう上手くいくかのう、ワシのターンじゃ！まずは伏せていた永続トラップを発動、チャリオット・パイルじゃ！こいつはのう、1ターンに1度ワシのメインフェイズにお主に300のダメージを与えるんじやい！」

秀行が発動したカードからローラーのように巨大なタイヤが出て、そのままコナミを轢いていく。

「くっ…このくらい！」

コナミは咄嗟に飛んで直撃を免れる。

コナミ LP4000↓3700

（ま…チャリオット・パイルには1ターンに1度、直接攻撃して来たモンスターを800ライフ払うことで破壊する効果もあるがのう…）

そして秀行は自身のエーリアンデッキを支えるキーカードを場に出す。

「ワシは手札からチューナーモンスター、エーリアンモナイトを召喚じゃあ！」

構造がオウムガイに似ている殻に顔が付いている気色の悪い生物が現れる。顔の下からは触手のようなものが伸びており、先の方は爪のように尖っている。

エーリアンモナイト 攻撃力500

「へ…やっぱりチューナーを握ってたか！だけどシンクロに必要なモンスターはさつき俺が倒してやったぜ！」



「それくらい分かっちゃるわ！エーリアンモナイトの効果発動じゃあ、こいつは召喚に成功すれば墓地のレベル4以下のエーリアンを1体呼び戻せるんじゃないやあ！さっきお主に破壊されたエーリアン・ソルジャーを復活じゃあ！」

エーリアンナイトの触手が地面にあいた穴に伸びていき、エーリアン・ソルジャーに触手を絡め引きずり出す。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

「しまった！遊星のジャンク・シンクロンみたいにチューナーに蘇生効果が付いてやがるのか！」

「今更気付いても遅いわい。ワシはレベル4のエーリアン・ソルジャーにレベル1のエーリアンモナイトをチューニングじゃあ！」

再びエーリアンモナイトから触手が伸びるが、さっきのように絡めるのではなく爪の部分を直接刺すことで自身の体と一体化させ同調していく。

「異邦より解き放たれし難攻不落の要塞よ、惑星を侵略し我が手中に収めよ！シンクロ召喚！出てこんかい！宇宙砦ゴルガー！」

現れたのはまさに要塞、頭部にはレーザー砲、側面に並んだ穴は主砲口が設置されており容易に突破ができないことが伺える。

宇宙砦ゴルガー 攻撃力2600

「くっ…大木炭18の守備力を超えてきやがったか！」

「そんな単純な手じゃないわい！ゴルガーの効果発動じゃ、こいつは1ターンに1度フィールド上の表側表示の魔法・罫カードを好きなだけ手札に戻してその数だけ表側モンスターにA エーリアン カウンターを置けるんじゃない！ワシが戻すのは強者の苦痛、チャリオット・パイル、そして…バックファイアじゃあ！」

ゴルガーの側面の穴からミサイルが発射され、3枚の永続カードを吹き飛ばす。同時に大木炭18に光線を放ち、3箇所を毒を打ち込む。

「何！俺のカードまで戻せるのか!？」

「その通りじゃあ！さらに大木炭18のAカウンターを2つ取り除くことでワシは手札からエーリアン・リベンジャーを特殊召喚できるん

「じゃあ！」

打ち込まれた2箇所から抜かれた毒が地面に放たれ、毒沼から紫色の球体を所々に身につけた6本の腕を持つ異邦人が湧き出てきた。

エーリアン・リベンジャー 攻撃力2200

「さらに上級モンスターを特殊召喚したと!?」

「これがワシの実力じゃあ!さらにエーリアン・リベンジャーの効果発動!1ターンに1度お主のフィールドの表側表示モンスター全てにAカウンターを置けるんじゃあ!」

エーリアン・リベンジャーが身につけている球体から光線が放たれ、大木炭18に再び2箇所目の毒が注入される。

「そして仕上げじゃあ!ゴルガーは1ターンに1度フィールドのAカウンターを2つ取り除くことで相手フィールドのカードを破壊できるんじゃあ!ワシは大木炭18のカウンターを2つ取り除き、大木炭18を破壊するんじゃあ!」

大木炭18から取り除いた2箇所分の毒をエネルギーに変え、ゴルガーは頭部からレーザーを放つ。レーザーは大木炭18の繊維を粉砕し、跡形もなく消し去った。

「うっ…バックファイアが戻されてるからダメージが与えらんねえ!」

「そんなことを気にしている余裕はないわい!強者の苦痛を再発動し…バトルじゃあ!ワシはエーリアン・リベンジャーでお主にダイレクタアタックじゃあ!」

エーリアン・リベンジャーは素早くコナミに近づくと腕を器用に使い、6本の腕を同時に振り下ろしコナミを引っ掻く。

「うあっ…!?!」

コナミ LP3700↓1500

「…!大丈夫かコナミ!」

「終わりじゃあ!ゴルガーでお主にダイレクタアタックじゃあ!」

「この攻撃が決まったらコナミのライフはゼロになっちゃう…!」

ゴルガーは側面の穴から大砲をコナミに向かって放つ。あまりにも圧倒的な攻撃で避ける余地はない。大砲が直撃し、コナミの周りを

爆煙が包み込んだ。

「がはは！ワシの勝ちじゃあー！」

勝ち誇る秀行、それに対しコナミは爆煙の中から返事をする。

「それはどうかなー！」

爆煙が晴れるとコナミの周りには半球形の障壁が貼られており、コナミはその中に立っていた。

「何じやと、ゴルガーの攻撃を受けておいて何で無事ですむんじやー！」

「俺はトラップカード、ガード・ブロックを発動していたのさ！こいつは相手ターンの戦闘で俺がダメージを受ける時に発動できる。効果で俺へのダメージを0にしてさらにカードを1枚ドロワーできるんだぜ！」

「馬鹿な…ワシの攻撃を耐えきったじやと。くっ…ワシはカードを1枚セットしてターンエンドじやー！」

秀行 LP3300

フィールド 『宇宙砦ゴルガー』（攻撃表示） 『エーリアン・リベンジャー』（攻撃表示）

セット1 『強者の苦痛』

手札2

「や、やれやれ…首の皮1枚じゃねえか」

「危なかったぜ…俺のターンだ！へへっ…さっきのガード・ブロックのドロワーでいいカード引いたんだぜ！速攻魔法、ツイスター発動！こいつは俺のライフを500払うことでフィールド上の表側表示の魔法が罠を破壊できるんだぜ。当然強者の苦痛に消えてもらう！」

コナミが発動したカードから竜巻が出てきて秀行の場にある強者の苦痛を吹き飛ばし、破壊する。

コナミ LP1500→1000

「ちい…強者の苦痛が破壊されおったか」

「これで攻められるぜ！俺は手札から予想GUY<sup>ガイ</sup>を発動だ！こいつは俺のフィールドにモンスターがいない時にデッキからレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚できるんだぜ。来てくれチューナーモンスター、ジエネクス・コントローラー！」

何もない所に突然放電とともにジェネクス・コントローラーが現れる。ジェネクス・コントローラー自身も突然のことに戸惑っているようで、周りをキョロキョロと見渡している。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「さらに俺は手札から5つ星モンスター、ジェネクス・ヒートをリリース無しで召喚するぜ！」

煙突付きの溶鉱炉型ロボットが場に現れた。元気がいいようで溶鉱炉の口から空に向かって火を吹き出している。

ジェネクス・ヒート 攻撃力2000

「レベル5のモンスターを生贄無しで召喚じゃと？」

「こいつは俺の場にジェネクス・コントローラーがいる時は生贄無しで召喚する事が出来るんだぜ！」

「なるほどのう…。チューナーとそれ以外のモンスターを並べたということはお主もシンクロをする気かい！」

「当然だ！俺はレベル5のジェネクス・ヒートにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーは左右のアンテナから電波を飛ばすことなく、元から設置されていたコアに装填されていく。ジェネクス同士なため元から連携が取れているのかもしれない。

「炎のエレメントを司る者よ、燃え上がる心を制御し討ち倒れし同胞の意思を継げ！シンクロ召喚！燃え盛れ、サーマル・ジェネクス！」

ジェネクス・コントローラーの力で炎の力を制御することで、熱を利用して火力発電を行う役目を果たせるようになった。そのせいか所々から青白い高熱の水蒸気が吹き出ている。

サーマル・ジェネクス 攻撃力2400

「残念だったのう、折角のシンクロ召喚もワシのゴルガーには及ばぬわ！」

「いや、サーマル・ジェネクスは熱いハートを持っている！倒されていった仲間たちの力を糧に強くなるんだぜ！サーマル・ジェネクスは効果で俺の墓地の炎属性モンスターの数×200の数値分を自身の攻撃力に加える、俺の墓地にはスパイC、大木炭18、ジェネクス・

ヒートの3体！よって攻撃力は600上がる！」

墓地から3体のモンスターが霊魂が出てくる、それぞれ溶鉱炉に自らの炎を託すと再び消えてしまった。

サーマル・ジエネクス 攻撃力2400↓3000

「何…攻撃力3000じゃとお!?!」

「こいつは倒されていった仲間たちのことを思い、パワーアップする。仲間を大事にしている証拠だ。もちろん俺もこいつらのことを大事にしているけどな。…ジャックがお前に本気で戦わなかった理由、今なら俺にも分かるぜ」

コナミの目線の先は秀行の足元に落ちているエーリアン・ソルジャーのカード。心なしかカードに描かれている彼の表情が寂しうに見える。

「何じゃと?」

「ジャックは昔言っていた、デュエルとは相手との語り合いだ。だが、語り合うためには己自身がデッキと語り合えなければ相手に話す言葉など持てるはずもないとも言っていたぜ。お前は自分のデッキを大切にしていない。だからジャックはお前と語り合おうとしなかったんだ」

「じゃかあしい!ワシに説教をするつもりならデュエルに勝ってからやるんじゃない!」

「ああ、やってやるさ。サーマル・ジエネクスでゴルガーに攻撃だ!」

サーマル・ジエネクスは大量の水蒸気を出しながら、ゴルガーめがけ溶鉱炉の炎を螺旋回転させながら放つ。ゴルガーは大砲、ミサイル、レーザーを用いて炎を撃ち墜としにかかるがどれも螺旋状の炎をすり抜けてしまい、炎が要塞の爆薬庫に直撃し大爆発を起こす。

「おのれえ…ワシのゴルガーを!」

秀行 LP3300↓2900

「まだまだ!サーマル・ジエネクスが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、俺の墓地のジエネクスモンスターの数×200のダメージを相手に与える!俺の墓地にはジエネクス・コントローラーとジエネクス・ヒートの2体だ!」

螺旋状の炎は要塞を貫き、そのまま秀行を包み込んだ。

「熱いんじゃないあ！小賢しいダメージを！」

秀行 LP2900↓2500

「へっ…お前を守る要塞は崩れたぜ。俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ！」

「1枚はさつき戻されたバックファイアだな…このまま押し切るんだコナミ！」

コナミ LP1000

フィールド 『サーマル・ジエネクス』（攻撃表示）

セット3

手札0

「調子に乗りおって…ワシのターンじゃあ！ちっ…ここでこのカードかい。速攻魔法、サイクロン発動じゃあ。ワシから見ても一番右のカードを破壊じゃあ！」

ツイスターよりも規模の大きい竜巻がコナミの伏せていた1枚のカード、ストライク・ショットを撃ち抜いた。

「あれは…自分モンスターへの攻撃時に発動でき、攻撃力を700アツプして貫通ダメージも与えられるカード！あの野郎…悪運だけは残ってやがる」

「危ないのう…。ワシはチャリオット・パイルを発動してもう1度300のダメージじゃあ！」

再び出てきたタイヤがコナミを轢こうとするも、コナミはジャンプで乗り越え余裕で回避する。

「同じ攻撃なら余裕で避けられるぜ！」

コナミ LP1000↓700

当然だがダメージは免れない。

「じゃがこのままじゃ押しきられる。プロとしてのワシの勘がそう言っちゃうよ。永続トラップのチャリオット・パイルを墓地に送ることでマジック・プランターを発動じゃあ。効果でカードを2枚引いちゃう…！ワシはエーリアン・リベンジャーを守備に変えてモンスターをセットじゃあ！さらにカードを1枚セット！これで終いじゃあ」

エーリアン・リベンジャー 守備力1600

(エーリアン・リベンジャーの効果でAカウンを置かなかった？  
使い忘れか?)

秀行 LP2500

フィールド 『エーリアン・リベンジャー』(守備表示) 裏守備表

示1

セット1

手札1

「俺のターン、ドローだ！ここは攻めるしかねえだろ。バトルだ！  
サーマル・ジエネクスでエーリアン・リベンジャーに攻撃！」

「かかったのう、ワシはセットしてあるエーリアンモンスター、エーリアン・グレイを生贄にすることでトラップカード惑星汚染ウイルスを  
発動じゃあ！」

エーリアンを媒体としたウイルスがコナミの場に蔓延する。サーマル・ジエネクスがそのウイルスに触れると拒否反応を起こしてしまう。  
う。

「な、なんだ!？」

「こいつはのお、エーリアンモンスターを生贄にすることでお主の場のAカウナーが乗っていないモンスターを全て破壊するんじゃないやあ！  
エーリアン・グレイはワシの勝利のための犠牲になったんじゃないやあ！」

「俺はもう1度バックファイアを発動だ！」

「そんなせせこましいダメーシなど傷に入らんわ！」

拒否反応を起こしていたサーマル・ジエネクスはやがて崩れ落ち、消滅してしまった。サーマル・ジエネクスの消滅による爆発が秀行を再び包みこむ。

秀行 LP2500↓2000

「これでお主のエースモンスターは消え失せたわ！仲間の力を糧にするとか言っておったがそれも脆かったのお！」

周りに舞っていた煙が晴れ、フィールドを確認する秀行。彼の目に映っていたのは…氷河だった。

「な、なんじやこりやあー！」

「仲間の力はこいつに受け継がれたのさ！トラップカード、ヘイト・クレバスになー！こいつは俺のモンスター1体が効果で破壊された時に発動出来る！効果で相手モンスターを1体墓地に送れるんだぜ。サーマル・ジエネクスがいなくなったことで気温が下がってお前のフィールドは氷河になっちまったようだな」

エーリアン・リベンジャーは爬虫類なので寒さは苦手なようだ。そのため少しでも体を暖めようと1歩踏み出すと途端に氷河に亀裂が入る。やがてそれは大きな裂け目：クレバスとなりエーリアン・リベンジャーを飲み込んでしまう。

「ちい…これでお互いモンスターが消えたっちゆうわけかい」

「ああ…だがもう勝負はついたぜ！」

「何じゃと？」

秀行の頭上に異次元からの穴が出現し、そこからエーリアン・リベンジャーが現れる。

「ヘイト・クレバスのさらなる効果！墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるぜ。自分のモンスターにヘイトを溜めすぎたな！やれ、エーリアン・リベンジャー！仲間を大事にしない持ち主に復讐してやれ！」

「や、やめんかー！」

エーリアン・リベンジャーは墓地に捨てられた仲間の力を込め持ち主を全力で引っ掻く。こうして勝負は決したのであった。

秀行 LP2000→0

「馬鹿な…ワシが初心者デュエリストに負けるじゃとお!?何かの間違いいじゃあー！」

「見苦しいぜ、学生からカードを盗んでも心が痛まないのはお前は自分のカードすら大切にしてなかったからだ」

「救いようはねえな！」

「うう…ちくしょう！まだじゃあー！」

秀行は慌ててホテルの出口に走り出し逃げようとするも、それを予測していた弥生に飛び蹴りを喰らい気絶してしまう。



「ひゅー、流石姐御。動きが素早いぜ」

「へっ…ギャングのボスなめんなよ」

そんなやりとりをしている2人に話しかけてきたものがいた。

「あのーすいませんー!」

「ん?」

話しかけてきたのはアカデミアの服を着た学生。純粹そうな瞳があまりにも真っ直ぐ突き刺さるため後ろめたいことがある人間は直視出来なさそうだ。

「どうしたよ」

「えーと、セキュリティのDホイールがこのホテルの駐車場に入ってたのが見えたのでもしかしたらと思っただけですが…」

「あ!融合のカードを盗まれたのっでもしかして?」

「はい私です!宮田ゆまと言います、よろしくお願いします!」

「俺はコナミだ、ちよつと待ってな」

気絶している秀行のポケットを探り目当てのカードを見つける。

「これが融合か、不思議な絵柄だな。ほらよ、もう盗まれないようにな」

「ありがとうございますコナミさん!私このご恩一生忘れません!」

「そ、そう?そこまで感謝されると頑張ったかいがあるっでもんだぜ」

「おいコナミ、こいつが気絶している間にさっさと突き出した方がいいぜ」

「それもそうだな。じゃあなゆま!また会えたら会おうぜ」

「はい!」

コナミは秀行を担いで外に出る。彼を無理やりDホイールの後方に固定させ、コナミはDホイールを治安維持局へと走らせた。

伏せカードが変わっていないか確認しなかったただけだ

秀行を連れて治安維持局へと向かうコナミ、拝借した青帽子を深く被りあまり顔が見えないようにしている。格好もセキュリティの服装を借りているため、おそらくばれないだろう。そう思いつつDホイールのマップ機能で治安維持局の位置を確認する。

治安維持局ならば遊星が捕まっている収容所を調べられるだろう、欲を言えばもっと細かい情報も欲しい。そんなことを考えているうちに治安維持局に到着した。

「ムツ…どうしたのですか。あの赤帽子の行方は分かったのですか！見つかっていないのなら、さっさと探してきなさい！」

治安維持局の前で仁王立ちしているのはイエーガー、彼は昨晚のセキュリティの失態を相当怒っているようだ。

「あの赤帽子はまだ見つかっていませんが、今朝起きたアカデミアの学生のカードを奪った事件の容疑者を捉えてまいりましたので、1度本局に戻らせていただきました」

コナミは事前に用意しておいたセリフを素の口調が出ないように話す。

「おお…今朝起こった事件をこんなにも早く！素晴らしいですね、その者の取り調べが終わりましたらその調子で赤帽子の行方をさっさと見つけるように。…ん？Dホイールの後方に無理やりつけてくるとは野蛮な捉え方ですねえ」

「…この者が抵抗したので咄嗟に気絶させ、目を覚ます前に早急に本局に連れてきた方がいいかと思いましたが」

「なるほど。まあ、いいでしょう。通りなさい」

なんとかイエーガーの許可を貰い、治安維持局への侵入に成功した。Dホイールを駐車場に止めて、秀行を担いで中へと入る。だが、中は無人でセキュリティはいなかった。

「あつ…そうか！あのピエロ野郎が全員俺と秀行の探索に回してるか

ら中には誰もいねえのか！ラッキーだぜ！」

そうと分かると秀行をそこらへんの椅子に縛っておき、帽子のつばも上げて中を探索する。遊星の居場所や近況が分かるものを探していくと奥の方に1つの部屋を見つけた。

『セキュリテイ専用監視ルーム』：？』

そこは以前イエーガーやゴドウィンが遊星とコナミがジャックと会っているところを捉えた監視カメラの映像を見ていた場所である。「確かクロウによると収容所はセキュリテイが管轄しているって言うてたな。ここなら遊星のいる収容所が分かるかもしれねえ！」

早速部屋に入ろうとするコナミ、だがその部屋にはロックが掛かっていた。

「くっ…ダメか。でもどこにあるか分かんねえ鍵なんか探してる暇ねえぞ…」

ここでコナミは部屋のドアのすぐ横に設置してある1つの機械に気付く。

「ん…なんじゃこりゃ」

そこにあるパネルをタッチすると突然デュエルシミュレート画面が出てきた。プログラムされていた電子的な声がコナミに問いかけてくる。

《詰めデュエルを解いてロックを解除しますか？》

「な…詰めデュエルだと？」

詰めデュエルとはあるデュエルの局面から始まり、自分のメインフェイズ1からターン終了時までには勝利条件を満たすことを目的とするデュエルである。セキュリテイは大事な情報を守る際に詰めデュエルによって保護を行っているようだ。

「これを解けばいいのか…よしやるぜ！」

《了解しました。この条件で1ターンで勝利して下さい。なお3回間違えた場合には侵入者と判断し、この機械から大きな警報が出た上で、全セキュリテイへ通達を送られるのでくれぐれも間違えないように注意して下さい》

「え…！何回も間違えても大丈夫ってわけでもないのか！」

画面には詰めデュエルの様子が映し出される。

相手 LP 8000

フィールド モンスター無し

セツト1

手札0

墓地0

デッキ0

コナミ LP 2000

フィールド モンスター無し

セツト3

手札7

墓地0

デッキ3

「…は!?相手のフィールドにモンスターがないとはいえ、こっちのフィールドにもモンスターはいないし相手のライフが8000だど！」

コナミは頭を抱える。勢いよく始めてみたものの、コナミは最近デュエリストになったばかりなので詰めデュエルも初めてであり要領が分からないのだ。

「悩んでも仕方ねえ!こういうのはとりあえずやってみないと始まんねえからな!」

コナミはまず手札のカードに注目する。手札にあるのは魔法カード4枚、モンスターカード3枚である。

「普段のデュエルを思い出せ…とりあえず出せる中で1番攻撃力の高いモンスターを出すんだ。よし、こいつは強力だぜ!俺は手札からジエネティック・ワーウルフを召喚だ!」

コナミが画面に映っている手札の1枚を押すと、そのモンスターが召喚される。現れたのは遺伝子を操作され、人と狼を一体化させた人狼。レベル4の通常モンスターだが、その攻撃力は2000と高い。

ジエネティック・ワーウルフ 攻撃力2000

《この瞬間、トラップカードを発動します。奈落の落とし穴、発動。

このトラップカードは相手が攻撃力1500以上のモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に発動が可能です。その効果により召喚されたジエネティック・ワーウルフは破壊され、除外されます》

突如地面に地獄にでも続いていそうなほど深い穴が出現し、そこから青緑色のモンスターが出てきて人狼を穴に引きずり込んだ。

「なっ…なにー!？」

思いつきり罠に踏み込んでしまい、フィールドのモンスターが消えてしまう。召喚権を失ったため、コナミが使えるものは限られてくる。

「ええい！なら手札の魔法か、伏せてあるトラップだ！」

手札にある4枚の魔法カードを確認する。その内2枚は同じカードであったので先に見てみるようだ。

「えーと…何々？モウヤンのカレー…効果はライフポイントを200回復する。…え？終わりかよ！というかこいつサテライトで拾ったっけな…さすがにデッキには入れなかったけどなー」

コナミが以前使用したスパイヤーCのイラストにも描かれているので、意外とコナミと縁があるのかもしれない。コナミは次の魔法カードを確認するようだ。

「えーと…魔法石の採掘。効果は手札を2枚捨てることで自分の墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える、か。なるほどな、さてはカレーはこのカードのコストか」

コナミは墓地を確認してみるも自分の墓地にカードはない。

「…？よく分かんねえな、もう1枚の魔法カードは装備魔法、巨大化か。こいつの効果は俺のライフが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。逆に俺のライフが相手より上なら装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる…と。ジエネティック・ワーウルフに付けられれば攻撃力4000の化けもんなのになあ…」

そう思うも人狼は奈落へと引きずり込まれてしまった。

「分かんねえ…後は伏せカード3枚だけか」

コナミは伏せられているトラップカード3枚に望みを託し、効果を確認していく。

「えーと、デステニー・デストロイ。このカードの効果で自分のデッキのカードを上から3枚墓地に送る。…あつ！魔法石の採掘は墓地の魔法カードを手札に加えられる。このカードとのコンボか！俺はデステニー・デストロイを発動だ！」

デッキから3枚のカードが墓地へ送られていく。送られたのは3枚の魔法カード、コナミはその3枚のカードを確認する。

「えーと結束 UNITY、こいつの効果は…自分フィールドのモンスター一体の守備力は自分フィールドの表側表示で存在するモンスター全ての元々の守備力を合計した数値になる。…？守備固めても意味ないな、次」

コナミは2枚目に送られたカードを確認する。

「友情 YU-JYO、こいつは相手プレイヤーに握手を申し込み、相手が応じた場合お互いのライフポイントは現時点のお互いのライフポイントを合計して半分にした数値になる。ただし自分の手札に結束 UNITYが存在する場合相手は握手に応じなくてはならない。へえー、こんなカードもあるんだな」

続いて3枚目を確認する。

「3枚目は治療の神 ディアン・ケト、自分はライフを1000ポイント回復する。おー、1000か。なかなか回復するな」

コナミが呑気にカードの効果を読んでいると、機械から声が聞こえてきた。

《デステニー・デストロイのさらなる効果、この効果で墓地に送った魔法・罠カード1枚につき1000ポイントダメージを受ける。これによりあなたは3000ダメージを受けます》

「えっ？」

コナミ LP200↓0

《1回目失敗です。あと2回以内にクリアして下さい》

再び詰めデュエルの最初の画面に戻ってきた。

「デステニー・デストロイにあんな効果があったとは……。ちくしょう、ここでクリアしてやる！」

コナミは再び手札に注目する。

「俺は手札から攻撃力が一番高いジエネティック・ワーウルフを召か……。したらダメか」

ギリギリで思い留まり残りの2体のモンスターに注目する。

「えーと、墮天使ナースーレイフィキュル。レベルは4で攻撃力は1400か。こいつが場にいる限り相手のライフポイントが回復する効果は相手のライフポイントにダメージを与える効果になる、か。うーん、こいつじゃダメだ」

もう1枚のモンスターに注目するとそれは見覚えのあるモンスターだった。

「ん……。こいつはスピード・ウォリアー！遊星の愛用カードじゃねえか。待ってる遊星、もう少しで見つけてやるからな。レベルは2で攻撃力は900、でもこいつは召喚したターンのバトルフェイズに、バトルフェイズ終了時までこのカードの攻撃力を元々の攻撃力の倍の数値にする効果を発動できるんだ。さすがに覚えてるぜ」

しかしこれでは削りきれないと判断したのか、先ほど確認しそびれた残りの2枚の伏せカードに目を通す。

「えーと、ライフチェンジャー。お互いのライフに8000ポイント以上の差があった場合に発動できて、お互いのライフを3000にするのか。」

んー、ダメだ！ライフ差が8000以上ねえ！」

そして、コナミは最後の伏せカードに希望をかける。

「頼むぜ……。こいつは自分より相手のライフポイントが7000以上少ないときに発動出来る。これか！トランプカード、自爆スイッチ発動！……。ん？自爆？」

コナミが発動したカードにより相手のライフが0になる。

「おお？やったか！」

同時にコナミのライフも0になった。

《自爆スイッチを発動した場合、お互いのライフポイントは0になり

ます。ただし、勝利条件を満たしていないため失敗になります。あと  
1回でクリアして下さい》

「何ー!？」

こうしてコナミは背水の陣となってしまった。



この世に使えないカードなどあまりない

セキュリティの監視ルームへと侵入を試みるコナミであったが、詰めデュエルを前に頭を悩ませていた。すでに2回の問題を失敗しておりもう1回間違えばセキュリティが来てしまう。

「まずいな……ここで正解しないと遊星を助けるどころじゃなくなっちゃう」

コナミはとりあえず深呼吸をして落ち着いた。そして再びデュエルの画面を見渡す。

「相手のライフが8000……どうしてもこれが削り切れそうにねえ。何か……自爆スイッチ以外で使えそうなのはねえか！」

手札を見るコナミ、すると2枚ある魔法カードに目がいく。

「モウヤンのカレール……ライフを200回復するカードか。遊星はどんなカードでも生まれてきた以上使い道があるっていうけど……こいつで何ができるんだ？待てよ……確かこのカード拾った時に遊星に見せたような……？」

コナミは目をつぶり、その時のことを必死に思い出していった。

「コナミ、カードを拾っているのか」

「ああ、俺のデッキを完成させるためにな」

「ナーブが愚痴を言っていたぞ、働けと」

「遊星だって最近はD―ホイールの調整で他のことに手が回ってないだろー」

「ふふ……そうだったな」

仲良く談笑する2人、そこにコナミが1枚のカードを取り出す。

「でも落ちてるカードだとさすがにこういうカードも拾っちゃうなー」

「それは……モウヤンのカレールか。だが必ずそのカードにしか出来ない使い道があるはずさ」

「と言っても200の回復じゃさすがになー。もっと回復するカードあるんじゃないか？」

「あるさ。だけどそのカードは変わっていてな、1つ面白い事ができ

るんだ。あまりそういった使い方をする機会はないが他にはそういう特徴だ」

「そう言い遊星はコナミに1つ豆知識を教えた。最も、教えた使い方は自分を不利にする使い方なため実戦で使う機会はないだろう…そう思われていた。この話を思い出したコナミは脳内にまばらに散らばっていたカードの内、2枚のカードが線で繋がるのを感じた。

「あつたぜ遊星…この効果を使うときがな！俺はモウヤンのカレートを発動する！」

《その効果であなたはライフポイントを200回復しますか？》

「電子的な声に問いかけられた質問、コナミが返す言葉は決まっていた。

「モウヤンのカレールは何も自分のライフを回復させるだけじゃない、対象が決まっていなから相手のライフも回復出来るんだ！俺が選ぶ対象はお前だ！」

コナミの返答を受け、デュエル画面に映っていた相手側の人物がカレールを平らげる。

相手 LP8000↓8200

「これで俺とおまえのライフの差は8000！このカードを使えるぜ、ライフチェンジャー！このカードの効果でお互いのライフは3000になる！」

相手 LP8200↓3000

コナミ LP200↓3000

モウヤンのカレールとライフチェンジャーのコンボにより2人のライフが並ぶ、だが相手のライフはまだ3000残っている。

「俺の手札には攻撃力2000のジュネティック・ワーウルフがいる。だけどこいつを召喚してしまえばあいつが伏せてやがるトラップに引っ掛かっちゃう」

手札にある残りの2体に視線を動かすコナミ、彼はどちらのモンスターを選ぶだろうか。

「単体でダメージを大きく与えられるのは…スピード・ウォリアーか、攻撃力を倍にして1800のダメージを与えられる。倍といえば…

そうだ！巨大化もこっちの方がライフが少なければ装備モンスターの攻撃力を倍にできる！モウヤンのカレーをもう1枚相手に使って：スピード・ウオリアーで奈落の落とし穴をすり抜け、効果と巨大化で900の倍の倍：3600！これで：いけるか？」

この詰めデュエルの突破口を見出したコナミ。しかし、スピード・ウオリアーが遊星のカードであったことが幸いし、1つのことを思い出した。

「っ……いやダメだ！スピード・ウオリアーは元々の攻撃力の倍の数値分の攻撃力になるんだ。巨大化は……こいつも攻撃力を元々の攻撃力の倍にする効果」

コナミは遊星がスピード・ウオリアーと相性のいい元々の攻撃力を変化させる『進化する人類』を見せてくれたことを思い出す。しかし巨大化は元々の攻撃力には干渉しない。

「つまりさっきのプランで行けば……結局は元々の攻撃力の倍で1800ダメージしか与えられねえ！スピード・ウオリアーでもダメなのか……！」

迂闊に突っ込んでいれば失敗していた事実にはコナミは冷や汗を垂らす。しかしまだチャンスは残っている。

「残っているのは墮天使ナース・レフイキュル、攻撃力は1400だからあのトラップは躲せる。モウヤンで相手を回復させ、こいつに巨大化をつけて攻撃……ダメだ、ライフが400残っちゃう」

あと1手が足りない、何が足りないのか必死に考えるコナミ。だが答えは単純だった。デュエルとはモンスターだけでも魔法だけでもトラップだけでも勝てはしないのだ、と。かつてジャックが言っていた言葉だ。コナミは自身が尊敬する2人のデュエリストの言葉を胸に、この問題を解くために必要な全てのカードを線で紡ぐ。

「……そうか、助かったぜ2人とも。俺はもう1枚のモウヤンのカレーを発動する！」

《どちらを対象として使いますか？》

再び迫られる選択肢、だがコナミの目にもう迷いはない。

「今度は俺のライフを200回復する！」

今度はデュエル画面に映っているコナミの分身がカレーを平らげた。

コナミ LP3000↓3200

「食べ終わったところ悪いが俺はこのカードを発動するぜ！トラップカードデステニー・デストロイを発動する！こいつの効果で俺はデッキに残っていた魔法カードを3枚墓地に送り、3000のダメージを受ける」

先ほど食したカレーがよほど辛かったのかコナミの分身は火を噴き出し、それが自身の体に燃え移り丸焦げになってしまう。

コナミ LP3200↓200

そしてコナミのライフは詰めデュエルを始めた時の初期ライフに戻ってしまった。

「すげえダメージを食らったがこれでいける！俺は手札から墮天使ナーズレフィキュルを召喚するぜ！」

4本の翼を持つ墮天使がフィールドに舞い降りる。

「そして装備魔法巨大化をレフィキュルに装備だ！ライフは俺の方が下、よって攻撃力は倍だ！」

墮天使の紫色の髪が突然増毛し、元々鎌のような髪型をしていた前髪は大鎌のようになっていった。

墮天使ナーズレフィキュル 攻撃力1400↓2800

「待ちかねたぜ…バトルだ！レフィキュルで攻撃、ダーク・シック・コール！」

墮天使が4枚の翼をはためかせ、相手に近づくと邪悪な笑いを上げながら巨大化した前髪で相手を斬る。満足したのか前髪の大きさは元に戻り、コナミの場に帰ってくる。

相手 LP3000↓200

「さあ…最後の1押しだ！メインフェイズ2に入つて、俺は手札のジエネティック・ワーウルフとスピード・ウォリアーを墓地に送って魔法石の採掘を発動！このカードの効果で墓地にある魔法カードを加える。俺が加えるのはデステニー・デストロイで墓地に送られた3枚のカード…ではなく！モウヤンのカレーをもう1度手札に戻す！」

コナミの手札に再びモウヤンのカレーが戻る。残る手札はこれのみ、行動は1つしかない。

「俺はモウヤンのカレーを発動！」

《対象はどちらにしますか？》

「俺はもうお腹がいっぱいでね！お前に食べてもらうぜ！」

デュエル画面に映っている相手の前に再びカレーが置かれる。

「ここでレフィキュルの効果発動！相手のライフポイントを回復する効果はこいつがフィールドにいる限りダメージを与える効果になる！アンチ・キュア！」

こっそりとカレーに近づいた堕天使はタバスコのようなものを気づかれないようにカレーに入れる。そのままカレーを食べてしまった相手はあまりの辛さに口から火を吐き、それが火の粉となって自分に返ってくる。

「お前が回復する予定だったライフは2000！よって2000のダメージを与える！」

相手 LP2000↓0

《詰めデュエルのクリアを確認しました。ロックを解除します》

見事詰めデュエルのクリアに成功したことで監視ルームの入り口が解放された。

「よっしやあ！やったぜ遊星！」

コナミは監視ルームに入り、遊星がいるであろう收容所を探す。意外にもそれはかなり分かりやすかった。

「俺は残骸爆破の効果を発動し、お前に3000のダメージを与える！」

「馬鹿なあああ！」

驚くことに遊星は收容所でデュエルをしていたようで、しかもそのデュエルに勝利しており、收容所に遊星コールが沸き起こっていた。さらにこのデュエルを見ていたゴドウィン長官により收容所の所長の横暴が収められ、遊星の出所が認められていた。

「マジかよ…流石は遊星だな」

遊星の捕まっていた收容所を確認し、迎えに行こうとしたところで

1つの映像に気付く。

「これは…遊星のDホイール！そうか、捕まっちゃった時に押収されちゃったのか。こいつは取り返さねえとな…場所はここの奥の倉庫か！今のうちに…」

遊星のDホイールが押収された場所を確認しそれを取りに行こうとしたところ、入り口に人がいるのに気付く。

「むむっ、こんなところで何をしていますか！さっさとあの赤帽子を探しに…ああつ、あなたは！」

「やべっ…！」

帽子のつばを上げていたためマトモに顔を見られてしまう。しかもその人物はコナミがサテライトから脱走したことを知る者だった。その人物とはイエーガー、彼は取り調べに時間がかかっていると思いい、中に入って様子を伺ったところこの部屋が空いているのに気づいたのであった。

「ドブネズミがこの私をコケにしてくれましたね…！」

そしてイエーガーは懐にあったスイッチを押す。

「どうでしょう、ここは1つデュエルでも。もし私に勝てば見逃してあげますが？」

「そんなのに騙されるかよ！今お前が押したスイッチ…どうせセキユリテイを呼んだんだろ…時間稼ぎにデュエルとはせこいな！」

「チツ…勘のいいドブネズミですね」

早めに逃げたほうがいいと判断したコナミはイエーガーの鳩尾にパンチを決めて気絶させようとする。…が、パンチを決める瞬間視界からイエーガーが消えてしまった。

「何?!どこ行きやがった！」

「こちらですよ」

「なっ…俺の後ろをとるだど！」

人間後ろからの攻撃はどうしても不意を突かれてしまう、この場合でも例外ではなかった。イエーガーに腕をがんにがらめにされた上に部屋の外の壁に押し付けられほとんど身動きを封じられる。

「ヒヒッ、私を舐めすぎましたね。このままセキユリテイが来るまで

じつとしていなさい」

「くそっ…サテライトで鍛えた勘が鈍ったか！」

「いえいえ、あなたの殺気もなかなかでしたが私に及ばなかっただけの話でございます」

足も腕もほとんど動かせない。そんなコナミの視界に入っていたのは壁と…詰めデュエルの画面であつた。コナミはとつさに画面の方へ体をねじる。

「逃がしませんよ！」

イエーガーはコナミの腕と足が動かないように固めようとする。その状態で無理やりある場所に頭突きを決めた。

「壁に頭突きなど気でも狂いましたか！」

「それはどうかかな」

「なんですと？」

2人の耳にこの場には場違いな電子的な音声が届いてくる。

《自爆スイッチの発動により互いのライフは0になりますが勝利条件を満たしていないため失敗となります。3回の失敗によりあなたを侵入者と判断します》

コナミが頭突きにより自爆スイッチのパネルを押したことで警告が出る。その言葉が終わるや否やその機械からとてつもない音の警報が鳴り響き、同時にセキュリティへ通達が送られる。突然の大音量にイエーガーは耳を両手でふさいでしまう。だが警報が鳴り響くことを知っていたコナミはこの隙を見逃さず、出口の反対側へ走り出す。

「よ、よくもやってくれましたね！待ちなさい！」

耳を塞ぎながらイエーガーもそれを追いかける。コナミは先ほど確認した倉庫へ走り込み、遊星のDホイールを見つけた。

「デツキは…よし。Dホイールのデュエルディスクと一緒に入ってるな。行くぜ！」

ここでイエーガーが倉庫の入り口にたどり着くも、コナミがDホイールで真横を通過したことで体が回転し目を回してしまう。

「あとはあいつが呼んだ上にあの詰めデュエルの機械の通達で集まっ

ているセキュリティをどうするかだが…このDホイールがありやな  
んとかなるだろ！」

そうしてコナミは出口をでると、そこには大量のセキュリティが道  
をふさいでいた。

「う…さすがにやべえか！」

以前のようなライトみたいな踏み台もなく打つ手なしかと思われ  
た時、突然Dホイールに通知が届く。

” 捕まりたくなかったら出口から出たところのすぐ左側の壁に  
突っ込め！”

「…だ、誰からだ。いや…迷ってる時間はねえか！」

とつさにDホイールを左方向へカーブさせ、治安維持局の壁に突っ  
込んだ。すると突然壁が爆発により大破し、Dホイールが通れるよう  
な隙間を作った。そこを通りセキュリティから離れるコナミ、このD  
ホイールに並走するDホイールがあった。

「よう。無茶するねあんたも」

「お前は…だ、誰だ？」

「俺は雑賀、シテイの情報屋さ。あんたはコナミだな」

「お前が助けてくれたのか…、ありがとな。だけど何で俺の名前を？」  
不思議そうにするコナミ、だが情報屋にとっては愚問だったらし  
い。

「おいおい、サテライトからパイプラインを抜けてシテイに来た2人  
組なんてすぐ情報屋の耳に入ってくるぜ。」

「それもそうか…。だけど何で俺を？」

「氷室の奴に仕掛けた盗聴器から情報を仕入れてたら氷室が遊星って  
奴にDホイールを取り戻すなら俺を頼るといいとか言ってるやがった  
んだ。前金はもらってるし仕事を果たそうと様子見に来たら大量の  
セキュリティが集まってる所に1人、治安維持局が保管してた遊星の  
ものらしきDホイールに乗って出てくるじゃねえか。そんなことを  
するのは遊星と一緒に来たコナミって奴だろうなと思ってる助けて  
やったんだよ。仲間のためによくそんなことするねえ」

「当たり前だ！俺たちは仲間だ、仲間なら困っていれば助け合う。そ



れだけだぜ」

「そう…か。下らないと言いたいが実際お前はDホイールを奪い返した。仲間を助ける、それは当たり前のことなんだろうな…」

「…？とりあえず俺は遊星の元に向かうけどどうする？」

「俺がいても特に意味はないだろう、俺の場所は遊星に伝えられている通りブーツレグにすればわかる。用があつたら来な」

「ああ、さつきはマジで助かつたぜ。またな！」

そう言うコナミは遊星が捕まっていた收容所に向かっていく。

Dホイールを走らせ收容所の入り口につくとタイミングよく遊星が釈放されていた。コナミは遊星に近づいていくが、1つ気付かなかったことがあつた。遊星が出てくるのを見ていたセキュリティが1人いたのだ。

「出てきやがったな屑野郎…。この傷の痛みにかけてテメエを追い回してやる。ん？あいつは…！」

彼はセキュリティ捜査官、牛尾。以前遊星とコナミにデュエルで敗北したことでパイプラインのゴミの流出に巻き込まれてしまい、頼に大きな傷を負っていた。

「おーい遊星！」

「コナミ！無事だったのか…。そのDホイールは!?」

「俺が治安維持局に侵入して取り戻してきたぜ。デツキも無事だ！」

「ありがとうコナミ。このDホイールとカード達は俺の命と言ってもいいくらい大事なものだ」

この様子を見ていた牛尾はいやらしい笑みを浮かべ、2人の前に出る。

「へっ…まさかこうも早く罪を重ねるとはな！そのDホイールはもう治安維持局の物なんだよ！それを盗んだら窃盗罪だ。当然そのDホイールを返してもらおうとしているテメエも同罪だ！もう1度お縄につきな！」

牛尾はDホイールを走らせ、遊星達に近づいてくる。

「げっ…こんなところに！後ろに乗れ遊星！」

「ああ！」

2人乗りで牛尾から逃げるコナミ達、だがこの土地に慣れていない彼らは執拗に追いかけてくる牛尾を振り払うことが出来ないでいた。

「ちくしょう…結構走ったのに全然撒けねえ！」

「デュエルで追い払うことが出来れば…」

「ダメだ…デュエルしている間にさつき俺がDホイールを奪った時にいた大量のセキュリティ達が増援に来ちまう！」

「くっ…」

気付かないうちにトップスの区域に入る遊星達、だがそこは限られたものしか入れない。

「馬鹿め！この先はトップスしか入れねえ、つまり行き止まりだ！」

万事休す、そう思った瞬間緑色の髪をした双子が2人を誘導する。

「えーと龍可、あの2人だよ？精霊が騒いでるっていうのは。おい！こっちこっち！」

双子のうち兄の龍亞は彼らを誘導しようと手を振っている。

「…ど、どうする遊星」

「このまま行ってもいずれ追いつかれてしまう…。ここは賭けるしかない」

「そうだなー！」

コナミはDホイールを龍亞の指し示す方へ動かせる。

「あの2人私たちの客人なの！入れてあげて！」

妹の龍可がトップス区域へのゲートの管理員に頼むと龍亞が誘導した方向へのゲートが開く。コナミ達はそこを通過した。

「あ、おじさん！あつちの人は入れないでね！」

龍亞がそう頼むと再びゲートは閉じてしまう。

「な、何い！おい、開けてくれ！」

「トップス区域へのセキュリティの捜査は1度治安維持局を通し、申請する必要があります。許可を貰ってから再度お越しください」

「チツ…これだからお上は！」

牛尾がゲートを通ることは叶わず、なんとか振り切ることに成功したのであった。

見えてたけど見てなかったもの

コナミと遊星は牛尾から逃げ切った後、龍亜と龍可の家で匿われていた。互いに自己紹介を済ませた後、コナミは気になっていた事を尋ねる。

「助かったぜ2人とも、サンキューな。でもどうして俺たちを助けてくれたんだ？」

「それは…」

コナミの質問に龍可が戸惑う。それを見て代わりに龍亜が答えた。

「龍可はカードの精霊の声が聞こえるんだ！2人のデツキの精霊が困っているのが聞こえたから俺たちは助けに来たんだぜ！」

「せ…精霊？」

「ちよつと龍亜！」

龍亜が返事をするもその内容は簡単には信じられないものでコナミと遊星は返答に困ってしまう。それを予測していた龍可は龍亜を諫める。

「…とにかくあまり長居して迷惑かけるわけにはいかない。俺たちはDホイールのメンテナンスが終わればここを出て行く」

そう言いながら遊星はDホイールに不備がないか確認していく。

「ええ〜！もう出てっちゃうの!?!もつとゆつくりお話ししようよ！」

「龍亜の方が迷惑かけてない？」

「うるさいなー！あ、そうだ！」

何かを思いついた龍亜は1枚の手紙を取り出しコナミに見せる。

「これは…デュエル・オブ・フォーチュンカップの招待状？」

「実は龍可がこの大会に招待されてさー。なんと驚いたことにこの大会で優勝すればあのキングのジャック・アトラスと戦えるんだぜ！」

「ジャックと!?!そりやすごいな」

「私、出る気ないから」

「聞いたろ!?龍可ったらこんなこと言うんだぜ。だから俺が変装して出ようと思ってるんだ！双子だから顔も似てるし！」

「龍亜に私の変装なんて無理ね」

「無理じゃないやい！そうだ、俺とデュエルしようぜ！大会があるのに龍可としかデュエル出来ないから暇だったんだよねー」

そう言いながら龍亜はしまっていたデュエルディスクを取り出してくる。装着する部分の幅が少し広く、龍亜がはめるには大きいようですれ落ちている。

「暇で悪かったわね」

「んー、俺はいいけど。どうする？ちょうど2人ずついるしタッグデュエルするか？」

「ごめんなさい、私デュエルをするとすごく疲れちゃうの。遠慮させてもらおう」

「悪いが俺もパスさせてもらう」

「そ、そうか。じゃあ俺とデュエルするか龍亜！」

「なら折角だから庭でやろうよ！」

そうやって龍亜は庭に出て行く。庭と言っても巨大なプール付きだったのでコナミはしばらく唾然としていた。お互い庭に出てデュエルの体勢を取る。：が、龍亜のデュエルディスクがずれてしまう。遊星がデュエルディスクを紐で固定してあげ、ズレなくなるのを確認してコナミと龍亜はお互いデュエル開始の合図をあげる。

「デュエル！」

デュエルディスクによってランダムに先攻が決まった。

「やった！俺のターン、ドロー。ジャツキーン！」

龍亜は口でドロローの擬音を言いながら大仰にカードを引く。

「いっくよー！俺は<sup>ディフォーマー</sup>D・モバホンを攻撃表示で召喚だ。ドゴーン！」

携帯電話が出てきたかと思うと突然画面が開き、手足が生えて携帯電話の画面を顔にしたロボットが現れた。体には1から6までのボタンがついている。

D・モバホン 攻撃力100

「へへっ…俺のDモンスターは表示形式で効果が変わるんだぜ！」

「へー、面白いモンスターだな」

「いっくよー！モバホンの効果発動、ダイヤルオン！」

効果の発動とともにモバホンの1から6までのボタンが点滅しラ  
ンダムに1つのボタンが選ばれる。選ばれたのは3。

「モバホンは攻撃表示の時に目数だけデッキからカードをめ  
くってその中にいるレベル4以下のDを1体特殊召喚できるんだ！  
3枚めくってゝあつた！俺はD・マグネンUを守備表示で特殊召喚だ  
！ドギヤーン！」

U字型の磁石が横向きに場に現れるとモバホンの前を遮るように  
磁気を飛ばす。

D・マグネンU 守備力800

「マグネンUは守備表示の時他のモンスターを攻撃することは出来な  
いんだ！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「龍亜つたら…いつもに増しておしゃべりね」

龍亜 LP4000

フィールド 『D・モバホン』（攻撃表示） 『D・マグネンU』（守備  
表示）

セット1

手札4

「今度はこっちの番だ！俺のターン、ドロー！頼んだぜ。ギガテック・  
ウルフ！」

鉄くずで作られたオオカミがコナミの場に降り立つ。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「バトルだ！ギガテック・ウルフでマグネンUに攻撃！」

オオカミが金属の摩擦音を響かせながら磁石に向かって体当たり  
を仕掛けていく。

「待ってました！トラップカードディフォーム発動！ジャキーン！こ  
の効果で攻撃は無効になって、マグネンUは表示形式を変えるんだ  
！」

マグネンUから発生する磁場にオオカミは吹き飛ばされ、磁石が縦  
向きになったかと思えばモバホンの時のように手足が生えロボット  
に変形していった。

「防がれたかー！」

「どんなもんだい！この変形を見せたかったんだよねー」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セット1

手札4

「俺のターン、ドロロー！ジャツキーン！俺はもう1度モバホンの効果を発動だ！ダイヤルオン！」

再び1から6までの数字が点滅しだし、1つの数字を選び出した。

「やった…6だ！俺は6枚めくるよ！待ってました！おれはもう1体のマグネンUを守備表示で特殊召喚するよ！さらに攻撃表示のマグネンUも守備表示に変更だ！」

2体のU字型の磁石が横向きに並び互いに磁力が反発し合う、その中にいるモバホンは発生した磁場によって近づくことは出来なくなった。

「いいかいコナミ、俺のマグネンUがいる限り俺の他のモンスターには攻撃出来ない。そのモンスターが2体、ということはく？」

「つまり…俺は攻撃出来ないってのか!？」

「その通り！これが俺の必殺のマグネロックだ！」

「絶好調ね…」

「ふ…」

「コンボが決まったところで俺は手札からD・ボードンを召喚だ！ドゴーン！」

胴体にジェットエンジンがついているスケードボードボードがタイヤを手足にして場を駆け巡る。

D・ボードン 攻撃力500

「こいつが攻撃表示の時、俺のDはダイレクトアタック出来るようになるんだぜ！ボードンでコナミに攻撃だ！」

ジェットエンジンを噴射して磁場とオオカミを乗り越えコナミに直接落下していく。

「くっ…俺を直接狙ってきたか！」

コナミ LP4000↓3500

「俺はモバホンを守備表示にしてターンエンド！どうだいコナミ！俺はまだ無傷だけどダメージを与えてやったぜ！」

携帯が閉じて手足も中に引っ込む、守備表示の時は変形前の状態に戻るようだ。

D・モバホン 守備力100

「まだまだ！勝負はこれからだー！」

「龍亜もだけどコナミも結構うるさいわね…」

龍亜 LP4000

フィールド 『D・マグネンU』×2 (守備表示) 『D・モバホン』

(守備表示) 『D・ボードン』(攻撃表示)

セット0

手札4

「俺のターン、ドロー！行かぜ、龍亜！俺はライフを800払って魔の試着部屋を発動する！」

場に赤いカーテンに包まれた試着部屋が4つ出てきた。

コナミ LP3500↓2700

「わわっ…なんだー！」

「こいつは俺のライフを800払うことでデッキの上からカードを4枚めくってその中にレベル3以下の通常モンスターがいたらそいつを俺の場に特殊召喚できる！さあ行かぜ！」

カーテンが1つずつ開いていく。1つ目の試着部屋にいたのは永続トラップ、バックファイア。条件を満たしていないため試着部屋ごとどこかに飛ばされてしまった。2つ目の試着部屋にいたのはレベル2通常モンスター、ファイヤー・アイ。どこからピンポンという音が聞こえ試着部屋から出てくる。3つ目の試着部屋にいたのはトラップカード、ダメージワクチン<sup>オメガ</sup>MAX。問答無用で強制退出させられる。4つ目の試着部屋にいたのはレベル3通常モンスター、ジェネクス・コントローラー。みんなからファンファーレを受けて出てきた。

「よし…俺はファイヤー・アイとジェネクス・コントローラーを特殊召

喚だ！」

目の上につけまつげをつけたファイヤー・アイと左右のアンテナを青と黄色でデコレーションしたジェネクス・コントローラーが着替えを完了して出てきた。

ファイヤー・アイ 攻撃力800

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「コナミもモンスターをたくさん並べてきたね！でも俺のモンスターに攻撃は出来ないから無駄さ！」

「今は攻撃出来ないけどこの状況を俺が変えられれば別さ！俺はファイヤー・アイをリリースして手札から振り子刃の拷問機械を召喚だ！」

つけまつげが炎で燃えてしまったファイヤー・アイの代わりに出てきたのは下半身に刃をつけたロボット。刃は可動式となっていて揺れており、龍可が少し怯えた表情をする。

「さらに！俺はレベル6の拷問機械とレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーが左右のアンテナから特殊な電波を流し振り子刃を収めさせる。そのまま拷問機械を蒸気機関車に変形させ、ジェネクス・コントローラーはその中枢コアに装填されていく。

「闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアン！」

蒸気機関車はジェネクス・コントローラーに制御され、煙突から蒸気を噴き出す。

レアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「おおうでっけー！かっちょいいー！」

龍亜は巨大な機械の登場に心を躍らせている。

「だけどこいつの効果は強力だぜ！クロキシアンの効果発動、シンクロ召喚に成功した時相手フィールドで一番レベルの高いモンスターのコントロールを得る！お前の場で一番高いのはレベル3、この場合その中から俺がどれを奪うか選べる！俺が狙うのはマグネンUだ！」

蒸気機関車の蒸気が1体の磁石にかかると、湿ってしまったせいか



磁力を失い、もう1体の磁石に弾かれてしまう。

「そ、そんな！これじゃ俺のマグネロックスが！」

「これで攻撃が出来るようになったぜ、ここは一気に攻める！俺は永続トラップ蘇りし魂を発動。こいつは墓地の通常モンスターを守備表示で呼べる。戻ってこいジエネクス・コントロール！」

地面にあいた穴から再びジエネクス・コントロールが舞い戻る。よく見ると先ほどアンテナにつけた色が落ちかかっている。

「さらに俺はレベル3のマグネンUにレベル3のジエネクス・コントロールをチューニング！」

「またシンクロ!？」

磁石が変形して人型の形となりそこにジエネクス・コントロールの電波が飛んでくる。

「地のエレメントを司る者よ、自然の力を味方につけ地の利を得よ！シンクロ召喚！あらゆる土地を知り尽くす番人、ジオ・ジエネクス！」  
その姿は頑丈な鎧を身にまとった炭鉱夫。元々ツルハシだったものが変形して鎧として纏っているようだ。鎧にはジエネクス・コントロールがコアとして装填されている、

ジオ・ジエネクス 攻撃力1800

「2連続シンクロ召喚…すっげー」

「さらにさらに！俺は手札から下降潮流を発動！こいつは俺のワールドのモンスター1体のレベルを1から3の好きな数値に出来る！俺はジオ・ジエネクスのレベルを3に！」

あつという間にジオ・ジエネクスの大きさが半分くらいになってしまった。

「…？何をしてるの？」

「こういうことさ！ジオ・ジエネクスの効果発動！こいつは俺の場にレベル4以下のジエネクスモンスターがいる時エンドフェイズまで攻撃力と守備力を入れ替えられる。俺の場にはレベル3のジオ・ジエネクスがいる！」

「下降潮流で条件を満たしたのね」

鎧が変形し巨大なツルハシとなってジオ・ジエネクスに装備され

る。

攻撃力1800↓2800

「ええっ……！2800も！」

「さあバトルだ！ギガテック・ウルフでマグネンUを、クロキシアンでモバホンを、ジオ・ジエネクスでボードンに……総攻撃だ！」

互いの場の3体のモンスターが対峙するも戦力差は圧倒的、龍亜の場のモンスターはあっけなくやられてしまう。

「うわああっ！」

龍亜 LP4000↓1700

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！この瞬間、ジオ・ジエネクスの攻撃力は元に戻る。さあ来い龍亜！」

コナミ LP2700

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示） 『ジオ・ジエネクス』（攻撃表示） 『リアル・ジエネクス・クロキシアン』（攻撃表示）

セツト1

手札1

「俺のターン、ドロー」

カードを引く龍亜、だが先ほどの元気はない。

「どうした？」

「だって俺の4体のDが1ターンで全滅しちゃうなんて……」

「龍亜、お前のマグネロックも展開も見事だった。だけどデュエルはそれをひっくり返せちまうんだ。どんな状況でも逆転が出来ちまうんだ。そして龍亜、それはお前にも言えるんだぜ！」

「俺にも？」

「ああ、俺はお前がどう来るか予測してなんとか逆転の策を見出せた。ならお前も出来るはずだぜ……同じことがな！」

「……そうだねコナミ、俺やってみるよ！」

「先ほどまでの龍亜は自分のコンボを決めることしか考えていなく、コナミがどう来るかを予測していなかった……。だが目つきが変わったようだな」

「俺が引いたのは……よし。俺は手札からチューナーモンスター、D・ス

クーポンを召喚！こいつは1ターンに1度手札からレベル4のDを特殊召喚できる！来い、D・ビデオン！」

龍亜が召喚したモンスターは龍亜の手札にシャッターを切り、それに映ったもう1人の仲間を呼び出す。

D・スコープン 攻撃力800

D・ビデオン 攻撃力1000

「シンクロか！」

「俺はレベル4のビデオンにレベル3のスコープンをチューニング！世界の平和を守るため勇気と力がドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！」

2体のDが同調しシャベルとドライバーを手に装着したロボットがフィールドに出てくる。

パワー・ツール・ドラゴン 攻撃力2300

「だけど攻撃力はクロキシアンの方が上だぜ！」

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！デッキから3枚の装備魔法を見せてコナミがそれをランダムに選ぶよ！選んだカードは俺の手札に加わるんだ！パワー・サーチ！」

龍亜がデッキから3枚のカードを選びコナミに見せてくる。

「なら真ん中のカードだ！」

「おっけー！他のカードはデッキに戻すよ。選ばれたのは…パワー・ピカクス！これをパワー・ツールに装備だ！」

ドライバーに重なる形でツルハシがパワー・ツールに装着される。

「パワー・ピカクスは1ターンに1度装備モンスターのレベル以下の相手の墓地のモンスターを1体除外してエンドフェイズまで攻撃力を500アップできるんだ！おれが狙うのはジェネクス・コントローラー！」

「何！」

パワー・ツール・ドラゴン 攻撃力2300↓2800

「コナミのデッキはあのモンスターが軸となっている。これはまずいかもな」

「バトルだ！おれが狙うのは…ジオ・ジェネクス！クラフティ・ブレイ

ク！」

ツルハシがジオ・ジェネクスを鎧ごと破壊する。

「くっ…ジオ・ジェネクスが！」

コナミ LP2700↓1700

「俺はこれでターンエンドだ！パワー・ピカクスの効果が終わるからパワー・ツールの攻撃力は元に戻るよ！」

パワー・ツール・ドラゴン 攻撃力2800↓2300

龍亜 LP1700

フィールド『パワー・ツール・ドラゴン』（攻撃表示）

セット0 『パワー・ピカクス』

手札3

「俺のターン、ドロー！うっ…アイアンコールか。墓地にジェネクス・コントローラーが入ればサーマル・ジェネクスまで行けたんだが…やられたぜ。けどこのまま押し切る！俺はクロキシアンでパワー・ツールに攻撃！」

蒸気機関車がロボットを跳ねるも破壊はされない。

「パワー・ツールは装備カードを身代わりに出来るんだぜ！」

龍亜 LP1700↓1500

「何だって！やべえな…俺はトラップカード、凡人の施しを発動！カードを2枚ドローして俺の手札の通常モンスターを除外する。大木炭18を除外！…！ギガテック・ウルフを守備表示にしてカードを1枚伏せる。ターンエンド！」

コナミ LP1700

フィールド 『リアル・ジェネクス・クロキシアン』（攻撃表示） 『ギガテック・ウルフ』（守備表示）

セット1

手札2

「俺のターン、ドロー！多分コナミが伏せたのは…クロキシアンの攻撃力をあげるかパワー・ツールの攻撃力を下げるカード…！パワー・ツールの効果発動、パワー・サーチ！」

「もう1度真ん中のカードだ！」

「よし…今選んだダブルツールD&Cとさつき引いたシンクロ・ヒーローをパワー・ツールに装備だ！2枚の装備カードの効果で合計攻撃力1500アップ！」

多重装備となったパワー・ツールは咆哮をあげる。

パワー・ツール・ドラゴン 攻撃力2300↓3800

「ゴナミが何を伏せているかわからないけどパワー・ツールは装備カードを身代わりに破壊を防ぐことが出来る…龍亜にしてはいい選択ね」

「行くよ！パワー・ツールでクロキシアンに攻撃！クラフティ・ブレイク！」

「龍亜…いい読みだぜ。俺の伏せているのはパワー・ツールの攻撃力を下げるカードだ。けどな、だからこそお前が攻撃力を上げてくるのを待ってた！」

「え、ええ…どういうこと!？」

「こういうことだ！トラップカードあまのじやくの呪い！このターンだけ攻撃力を上げる効果は下げる効果に、下げる効果は上げる効果になる！」

パワー・ツールの装備していた武器があべこべな形でパワー・ツールに装備し直される。使いづらくなった武器はむしろ足手まといとなりパワー・ツールの攻撃力を削る。

パワー・ツール・ドラゴン 攻撃力3800↓800

「そ、そんなー！」

「反撃だクロキシアン！」

蒸気機関車が弱体化したロボットをそのまま蒸気で吹き飛ばす。

龍亜 LP1500↓0

「うー負けちゃった」

「だがいいデュエルだったぜ、龍亜」

「ああ、最後の読み合いはとてもハイレベルなものだった。相手をよく見るようになったな龍亜。最後はゴナミが1枚上手ではあったがお前はこのデュエルで成長した」

「そ、そう？やっぱ俺って強くなる素質があるんだよねー！」

「調子に乗らないの」  
こうして龍亜と龍可の家で過ごす1日は過ぎていった。

割と大切にに使わせてもらう

時刻は深夜1時。コナミと遊星は匿ってもらった礼として龍亜と龍可のデュエルディスクを改良し、気づかれないように部屋を後にしたのであった。

「よし…周りに誰もいないな。後ろに乗ってくれコナミ」  
「おう」

遊星のDホイールにまたがり、2人はトップス区域から出ていく。  
「もう夜も遅い。さつきコナミが話してくれた雑賀に挨拶するのは今度にしてどこか隠れられる所を探さないとな」

「それならノーマネーの姉御が経営してるホテルがあるからそこに向かおうぜ」

「彼女もシティに来ていたのか…」

そんな2人の前にある人物が現れる。

「へっ…出てきやがったな屑野郎」

遊星のDホイールの邪魔をするように前に出ることでDホイールの動きを止められてしまう。

「嘘だろーもう深夜だぜ…まだ張ってやがったのかよー！」

「くっ…！」

「逃がすかよー！」

とっさに別方向へ逃げようとする遊星にそれを追おうとする牛尾。そんな彼らに突然1台の車からライトが発せられ1人の人物が出てくる。

牛尾はその車に描かれていたマークに見覚えがあった。

「なっ…治安維持局のパトカーだと？セキュリティのお上の組織がなんでここに？」

「ヒツヒツヒツ…君は牛尾君でしたか。悪いですが彼らからは手を引いてもらえませんかね。ゴドウィン長官からの命令でございませす」

「げっ…あの時のピエロ野郎!？」

「しかし奴らは保管していたDホイールを盗んで…」

「牛尾君、命令には逆らわない方がよろしいかと思えますが？かくい

う私もその赤帽子には私怨があるのですがね」

「くっ…」

治安維持局はセキュリティの上部組織、逆らえばどうなるかなど分かっている牛尾は黙るしかなかった。

「治安維持局が俺に何の用だ？」

「ヒヒツ、これを長官からお渡しするようにとお預かりしております」  
そう言っつてイエーガーは1枚の写真と1通の手紙を差し出してきた。それを受け取る遊星だが2人はその手紙に見覚えがあった。

「それは…フォーチュンカップの招待状じゃねえか！」

「おや？」存じでいらっしやいましたか。遊星君、あなたにはその大会に参加してもらいます。もつとも…あなたに拒否権などございませんが」

「…どういうことだ」

「その写真に写っている4名の方の命はあなたが参加するかどうかと直結しているということでございます。おつと…助けに向かうなどと思わないことです、あなた達の動向はそれとなく監視させていただきますので」

その写真に写っていたのはナーブ、タカ、ブリッツ、そして…ラリー。サテライトにいる遊星の仲間達だった。

「何だと…この外道ピエロめ！」

「何とでもお言いなさい。とにかくあなたにはフォーチュンカップに参加して頂き、そして勝ち抜いて再びキングと対戦してもらわなくてはいけないのです。それではいい返事を期待していますよ…ヒッヒツヒツ！」

高笑いをしながら車に乗り込み去っていくイエーガー。それを無言で見送った遊星は受け取った手紙を握りつぶし、怒りをあらわにしていた。その後、一応セキュリティに追われることはなくなった彼らは休息を取るため弥生のホテルへ向かう。

「遊星…どうするよ？」

「大会に参加しようと思う。奴らも俺が参加していれば下手にラリー達に危害を加えることはないはずだ。それに…ジャックとの決着を



つけなくてはならないからな」

「そうか：俺が何とかしてラリー達の様子を見てくるか？」

「いや：雑賀に協力を仰ごう。俺たちは監視されているし情報屋の彼ならサテライトに渡るルートを確保できるかもしれないからな」

「ノーマネーの姉御が通ってきた輸送船のルートならいけるかもな：。と、ついたぜ遊星」

話がまとまったところで弥生のホテルにつく。セキュリティに追われることはなくなったので隠していたコナミのDホイールを取り出した後、中に入る。幸いにも弥生は起きていた。といつてもそろそろ寝るタイミングだったらしくコナミに一撃蹴りを入れた後、遊星を部屋に案内してくれる。コナミは治安維持局への侵入、遊星は収容所での体を張ったデュエルで疲れがたまっており、すぐに眠りに落ちた。

そして翌朝、コナミは遊星に起こされホテルのロビーへ出たところで弥生に声をかけられる。

「おい、コナミ。昨日は眠くて忘れてたがこのカードが落ちっぱなしだったぜ」

「それはエーリアン・ソルジャーか。そういや秀行の奴捨てたままだったな。まあカードに罪はねえ、俺が大切に使うとするさ」

コナミは弥生からカードを受け取り、デッキに入れる。その後遊星とコナミは雑賀に会いに行き、サテライトに行ってもらう約束を取り付けることに成功した。

「ありがとう：だが当然サテライトに行くリスクもある。そこまで快く受けてくれるのは何故だ？」

「その赤帽子が治安維持局へ侵入なんて無茶をする理由を聞いたら仲間だから当然とか言いやがるんだ。そこまで馬鹿正直な答えを聞かされたら協力しないわけにもいかねえだろ」

こうして雑賀にサテライトの仲間を任せ、後はフォーチュンカップの開催を待つだけとなった。時は経ち、遊星が収容所で一緒にいた仲間と合流しているところに突然ジャックがやってくる。

「フォーチュンカップに参加するそうだな：。このカードを貴様に返

す」

そうしてジャックは遊星にスターダストを投げ返す。

「そのカードで俺のところまで勝ち上がってこい」

「…待っている」

その言葉を聞くと満足そうにしながらジャックはホイール・オブ・フォーチュンを走らせ帰っていく。さらに時は経ち、フォーチュンカップが開催された。遊星は既に会場に入っており、コナミは観客席に向かおうとする。すると丁度知った顔が目に入った。

「あれは…もしかしてゆまか？おーい！」

声をかけると彼女もこちらに気づき挨拶してくる。

「あ、コナミさん！こんにちは。コナミさんもフォーチュンカップを見に来たんですか？」

「そんなところだ。ゆまも見に来たんだな」

「はい！あ、良かったら一緒に見ませんか？」

「おおー、いいぜ」

そんなこんなで一緒に見ることが決まったが、まだ開催時刻には少し時間がある。

「そうだ、もし良かったらこの辺に出てる屋台を回りませんか？食べたいものがあるんです」

「いいな、行くか！」

2人で屋台を回っていく。

「コナミさんが取り返してくれた融合のカードのおかげでこの前の試験なんとか乗り越えられました！」

「そりゃ良かった。盗まれたせいで試験に落ちたなんてシャレにならないからな」

「そうだ！私コナミさんにお礼をしたいんです。このカード受け取ってください！」

「え？いや、さすがにカードまでもらうわけには」

「わたしの感謝の気持ちを形として受け取って欲しいんです！」

そう言っつてゆまはコナミを直視してくる。あまりにも真っ直ぐな瞳にコナミは折れた。

「分かった。ありがたく使わせてもらうぜ」

1枚のカードを受け取りデッキに入れる。それからしばらく歩いているとコナミの目に1つの屋台が入ってくる。

「トリシューラプリン…2700DP!?なんだありや…」

知り合いに3000DPのコーヒーを飲んでるものがあるなどコナミは知る由もなかった。

「あはは…あれは私も手が出せそうにないです。あ！その奥の屋台にあります。私が食べたかった、三つ目のアイス！」

「おー、300DPか。せっかくだカードのお礼も兼ねて俺が払うぜ」  
「え…。でも」

「昔マーサに言われたのさ。男は男気を見せなきゃいけない時があるってな。まあ受け取ってくれよ、俺も何とか800DP持つてるからさ」

コナミはここまで4回デュエルに勝利していることを考えると1回勝利するたびに200DPが手に入るようだ。

「はい…お言葉に甘えちゃいますね。このアイスは3つの目のところにランダムに味が入ってて美味しいってデュエルアカデミアでも話題なんですよ」

「へえー、そうなのか。そりや楽しみだぜ」

仲良くアイスを食べる2人、そんな2人を見るものがいた。

「あれは…庶民とゆまさんですか。仲が良いですわね。庶民に話があるのですが…またの機会でも良いでしょう」

「誰か一緒に見てくれる人いないかと思つてさがしてたけどゆまちゃんやダメならもういないな…。まあ別に最初から1人で見ようと思つてたし…」

青い髪と緑色の髪をした2人のアカデミア生徒がいた。彼女らはその場を離れようとしたところ、突然背中にクモのようなものが入り込み腕にクモの紋様が浮き出てくる。するとスタジアムから離れ、廃ビルへと向かっていく。

「あれ…?」

「どうしたゆま?」

「あの2人…私の知り合いなんですけど、もうそろそろ試合が始まるのにスタジアムじゃなくてあっちの廃ビルの方に向かってるの…。」

「学生が行くところじゃねえな…。ちよつと追ってみるか」

コナミとゆまは彼女らの後を追い、廃ビルへと突入する。

「こんなところで何をする気なんだ…？つてあれは幸子か。なおさらここにいる意味が分かんねえな」

2人を尾行するコナミとゆま、だが尾行に慣れていないゆまは地面に置かれていた鉄パイプに足を引っ掛けてしまう。

「きゃっ…」

「おっと」

とつさにゆまを支えるコナミ。しかし鉄パイプの転がる音で気づかれてしまう。

「あれは…ゆまちゃん。相変わらずドジだね、でもデュエリストとして優秀…ならゆまちゃんもダークシグナーに引き込んであげる」

「何言つてやがる！」

「それは闇のデュエルに聞くことですわ…庶民」

幸子がそういうと紫色の炎で周囲を囲まれてしまう。

「な、なんだ！何が起こつてやがる」

「幸子さん、あげはちゃん！どうしちやっただんですか？」

「簡単なこと…僕たち2人で」

「あなた達を倒します」

「何…!?どうしちまっただよ幸子！」

「ふふ…どうもしませんわ」

腕にクモの紋様を輝かせデュエルディスクを構える2人。対するゆまとコナミはうまく状況を飲み込めていない。

「あわわ…ど、どうしましょうコナミさん」

「多分…正気じゃねえな。あっちのあげはつて子は知らねえが幸子は人を倒すなんて言えるような奴じゃねえ。1度デュエルした俺にはわかる」

「そうですね…。あげはちゃんも普段は大人しくてあんなことを言う

「子じゃないです」

「仕方ねえ…デュエルで勝って目を覚まさせてやるしかないさそうだぜ。出口も塞がれたしな」

「う…怖いけど。私、頑張ります!」

「話はまとまった?なら始めようよ」

お互い向き合い、デュエルディスクを構える。コナミがゆまの方を見ると足が震えているのが見えた。

「」「」「デュエル!」「」「」

## 第1章 ダークシグナーとの戦い 来るぞゆま

クモの紋様を腕につけた2人とコナミとゆまのタッグデュエルが始まろうとしていた。だがその様子をどこからか見ている者達いた…。

「どうやらわがクモに操られし者がデュエルを行うようだ」

「相手はシグナーじゃねえみてえだけどな」

「当然だ。今は我々の戦力、そして地縛神への生贄を集めているところなのだからな」

「それにシグナーとの戦いではダークシンクロを使わせるものね」

「それにしても近くにデュエルアカデミアという組織があつたのは幸運だったな。ある程度の力を持つ兵が容易に手に入る」

「さらにそいつらにデュエルさせて、勝てば戦力を芋づる式に増やせるってわけだ。…ん、今戦おうとしているデュエリストの1人。奴は俺が生前いた忌々しきチームの1人だ…！」

「ほう、お前がダークシグナーとなる要因を作った者か」

「ああ。あの時はデュエルも出来ねえやつだったが…どうやらデュエリストになつたみてえだな。コナミ…俺を満足させてくれよ?」

彼らが話をしていると丁度デュエルの開始が宣言される。

「」「」「デュエル!」「」

タッグフォースルールでのタッグデュエルが開始される。先攻のランプが付いたのはゆま。

「わ、私のターン。ドローします!」

カードを引く手は小刻みに震えている。闇のデュエルと称されるデュエル、周囲を囲む紫色の炎、様子のおかしい同級生、不安を感じるなどというのも無理な話である。

「私はモンスターさんを1体伏せます。これでターンエンド!」

(私が伏せたのはフォレストマン、守備力は2000。これでとりあえずしのげるはず!)

場にゆまが信頼を置くモンスターが相手には見えない状態で現れる。相手からはその正体を探ることは出来ないため、攻撃する場合未知のモンスターに挑まなくてはならない。

コナミ&ゆま LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セツト0

手札5 (ゆま) 手札5 (コナミ)

次のプレイヤーを指すランプが付いたのはあげは。

「僕のターン、ドロローするよ。念のために言っておくけどこのターンから攻撃が出来るからね」

「そうか…タッグフォースルールでのタッグデュエルはフィールドを共有するから空きの俺が狙われるってことがないから…」

「そういうこと。僕は手札からチューナーモンスター霧の谷の戦士を召喚するよ」

青い布によって顔の大部分を隠した戦士が翼をはためかせて上から舞い降りてくる。

霧の谷の戦士 攻撃力1700

「チューナーなのに攻撃力が1700もありやがるのか…!」

「行くよ。霧の谷の戦士でゆまちゃんのセツトモンスターに攻撃!」

翼を生かした低空飛行で急接近し右手に持つ短剣で切り掛かっていく。その瞬間伏せられていたモンスターの正体が判明する。

「私が伏せていたのはフォレストマン!守備力は2000。反撃してください!」

現れたのは森のヒーロー。右腕が木で出来ており短剣をその腕で受け止めた。

あげは&幸子 LP4000↓3700

「あぐつ…!だけど霧の谷の戦士の効果発動、このカードが表側表示で存在する限りこのカードとの戦闘で破壊されなかったモンスターは手札に戻るよ!」

霧の谷の戦士は左腕に持っていた短剣で木の腕ごとフォレストマンを弾き飛ばす。

「フォレストマンが手札に…」

「僕はカードを3枚伏せて永続魔法、強欲なカケラを発動。これでターンエンド。さあ来なよ」

あげは&幸子 LP3700

フィールド 『霧の谷の戦士』（攻撃表示）

セット3 『強欲なカケラ』

手札1（あげは） 手札5（幸子）

「やるしかねえな。俺のターン！そのモンスターの弱点は見切ったぜ。そのモンスターが戦闘で破壊されちまえば手札に戻す効果は使えねえ！俺はエーリアン・ソルジャーを召喚だ！」

水色の水晶を身にまとった異邦の戦士が場に現れる。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

「そのモンスターは…」

「ああ。あいつが置いてったモンスターだけど大切にに使わせてもらうぜ。エーリアン・ソルジャーで霧の谷の戦士に攻撃だ！」

異邦の戦士が霧の谷の戦士と一騎打ちを行う。2本の短剣を器用に避けながら一太刀を入れる。

「そう簡単にはやらせないよ。僕はトラップカード攻撃の無敵化を発動！僕はこのカードの効果でこのバトルフェイズ中霧の谷の戦士をあらゆる破壊から守る！」

「だけどエーリアン・ソルジャーの切れ味は受けてもらうぜ！」

エーリアン・ソルジャーの攻撃を可視出来ないバリアが防ぐもその余波があげはを襲う。

あげは&幸子 LP3700↓3500

「ぐうっ…こんなの痛くもないね！霧の谷の戦士の効果発動、エーリアン・ソルジャーは手札に戻るよ！」

あげはが顔をしかめながら霧の谷の戦士に指示を出すとエーリアン・ソルジャーは短剣で弾き飛ばされてしまう。

「うっ…そういうコンボか。俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ！」

ゆま&コナミ LP4000



フィールド 無し

セット3

手札6 (ゆま) 手札3 (コナミ)

「私のターンですわ、ドロロー！このスタンバイフェイズに強欲なカケラに強欲カウンターが1つ乗りますわ。さて…庶民の場は空いています。このターンで大ダメージを与えたいですわね」

「なら僕の伏せカード使ってもいいよ」

「感謝致しますわ。わたくしは伏せてある強欲な瓶を発動しカードを1枚ドロローします」

場に現れた瓶の中をのぞくと1枚のカードが入っており幸子はそのカードを取り出す。

「いきなり手札7枚で攻めてくるのか…！」

「行きますわよ、わたくしは手札の水属性モンスターを墓地に送ることとで鬼ガエルを特殊召喚します。このモンスターの特殊召喚に成功したことでレベル2以下の水属性を墓地に送ることができますわ。」

わたくしが送るのは氷結界の伝道師！

場に現れたカエルが長いベロをだし幸子のデッキから1枚カードを墓地へ叩き送る。

鬼ガエル 攻撃力1000

「さらにわたくしは軍隊ピラニアを召喚してバトルフェイズへ入りますわ！」

大量のピラニアがコナミへ狙いを定める。

軍隊ピラニア 攻撃力800

「行きなさいピラニア！このモンスターが相手に直接攻撃でダメージを与える場合、そのダメージは2倍となります！」

「それじゃあ…総攻撃の合計ダメージは4300!?!」

ピラニアが凶暴化しコナミへ噛み付こうとする。

「そうは行くかよ！トラップカード発動、ライバル登場！相手フィールドにいるモンスター1体と同じレベルのモンスターを手札から特殊召喚できる…霧の谷の戦士と同じレベル4のエリアン・ソルジャーを攻撃表示で特殊召喚だ！」

コナミとピラニアの間にエーリアン・ソルジャーが割って入る。ピラニアはかなわないと判断して幸子の場に戻っていく。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

「お前らのフィールドにエーリアン・ソルジャーを倒せるモンスターはいねえ！バトルフェイズは終了だぜ」

「甘いね！僕はトラップカード緊急同調を発動。この効果でバトルフェイズ中にシンクロ召喚が可能になる！」

「ナイスフォーローですわ。わたくしはレベル2の軍隊ピラニアとレベル4の霧の谷の戦士をチューニング！万物を凍てつかせし氷よ、その姿を虎に変え相手を支配しなさい。シンクロ召喚！吠えなさい、氷結界の虎王 ドウローレン！」

2体のモンスターが同調し氷を身にまとった虎が生まれ出た。

氷結界の虎王 ドウローレン 攻撃力2000

「バトルフェイズ中にシンクロしてくるだど!？」

「やりなさいドウローレン！エーリアン・ソルジャーに攻撃！」

氷で出来た爪で異邦の戦士を思いつきり引つ掻く、剣で受け止めようとするも剣ごと切り裂かれてしまう。

ゆま&コナミ LP4000↓3900

「エーリアン・ソルジャーがやられたか…。うわっ…!？」

エーリアン・ソルジャーがやられると同時にコナミもその衝撃を受けて吹っ飛んでしまう。

「忘れては困りますわ。これは闇のデュエル。ダメージを受ければプレイヤーも痛みを伴いますしモンスターが破壊されれば衝撃も発生します」

「なんだと…そっちのあげはって子がやけにダメージを苦しそうに受けているかと思えばそういうことかよー」

「今度はあなた自身がダメージを受ける番ですわ。行きなさい鬼ガエル、庶民に攻撃しなさい！」

鬼ガエルがコナミにベロをムチのように使い攻撃を仕掛ける。伏せてあるトラップを使おうとするコナミだったが思い留まる。

(待てよ…モンスターが破壊されたただけであるの衝撃。もしゆまがダ

メージを受けたら…?)

鬼ガエルの攻撃がそのままコナミに直撃する。コナミはその痛み  
にうずくまってしまう。

「がはっ…。こんな痛えのかよ…!」

ゆま&コナミ LP3900↓2900

「コナミさん!大丈夫ですか!?!」

「だ、大丈夫だ。うっ…!」

コナミがなんとか立ち上がるも痛み顔に顔をしかめている。

「わたくしはカードを1枚伏せてターンを終えますわ」

あげは&幸子 LP3500

フィールド 『氷結界の虎王 ドウローレン』(攻撃表示) 『鬼ガエ

ル』(攻撃表示)

セット1 『強欲なカケラ』(カウンター)

手札1 (あげは) 手札3 (幸子)

「コナミさんがボロボロに…やっぱりこのデュエルは危険なんだ。な  
ら早めに決着をつけないと…私のターン!私は手札の沼地の魔神王  
の効果でこのカードを墓地へ送ることで手札に融合のカードを加え  
ます!」

「融合のカード…ってことは!」

エレメンタルヒーロー

「私は融合を発動します!手札のE・HEROクノスペとE・HERO  
オーシャンを融合!未だ花を咲かさぬ芽よ水の戦士と1つとなつ  
て新たな力を生み出してください!融合召喚、氷のヒーロー…E・H  
EROアブソリュートzero!」

「これが生の融合召喚か…!」

現れたのは極寒の氷を周りに浮かせた氷のヒーロー。すると相手  
のフィールドから水のオーラが出てきて力を与えた。

E・HEROアブソリュートzero 攻撃力2500↓3500

「ゼロはフィールドのゼロ以外の水属性モンスターの数×500だけ  
攻撃力を上げます!さらに私は融合回収を発動します、このカードの  
効果で先ほど融合に使用したオーシャンと融合のカードを手札に戻  
しますね。そしてもう1度融合を発動!手札のフォレストマンと

オーションを融合します。木と水の力を源にあらたな生命が生まれる！融合召喚、地球のヒーロー：E・HERO ジ・アース！

「2連続融合召喚ですって…!?!」

E・HERO ジ・アース 攻撃力2500

「すげーぜゆまー！」

「私はアースの効果を発動！この効果でアブソリュートzeroをリリースしエンドフェイズまでにその攻撃力を加えます…地球灼熱！さらにアブソリュートzeroが場を離れたことでアブソリュートzeroの効果発動！相手フィールド上のモンスターは全て破壊されます！」

E・HEROジ・アース 攻撃力2500↓6000

ジ・アースが巨大化していくとともにアブソリュートzeroの纏っていた絶対零度の氷が相手のモンスターを全て凍結させる。

「すげえ効果だなー！」

「そう簡単には行かせませんわ。トラップカード海竜神の加護を発動します！このターンわたくしのレベル3以下の水属性モンスター：鬼ガエルは破壊されませんわ」

「だけどドウローレンは破壊されます！」

氷を身にまとっているドウローレンも絶対零度の氷には耐えられなかったのか消滅してしまう。

「よし…アースの攻撃力は6000！鬼ガエルの攻撃力は1000！伏せカードもねえしいけるぜー！」

「はい！幸子さん…少し我慢してくださいね。私はアースで鬼ガエルに攻撃！地球灼熱斬！」

「敵に心配などされるとは…わたくしも舐められたものですわね！水族の鬼ガエルが攻撃の対象になったことで墓地のキラァ・ラブカを外することで効果発動ですわ、攻撃を無効にしアースの攻撃力を500下げます！」

墓地から出てきたサメがアースの攻撃を受け止め、そのサメ肌で敵を傷つける。

E・HEROジ・アース 攻撃力6000↓5500

「え…？防がれた…」

「キラー・ラブカなんていつ墓地に送りがつた…あ！」

「そう…私が鬼ガエルのコストとして送ったのはこのモンスターでしたのよ」

「うう！私はカードを2枚伏せてターンエンドです。アースの効果を終了して攻撃力は元に戻ります」

E・HEROジ・アース 攻撃力5500↓2000

ゆま&コナミ LP2900

フィールド 『E・HEROジ・アース』（攻撃表示）

セツト4

手札0（ゆま） 手札2（コナミ）

「残念だったね。これでゆまちゃんの手札は0、今度はこっちの番だよ！僕のターン！この瞬間強欲なカケラに2つ目の強欲カウンターが乗るよ。さらに強欲なカケラの効果発動、2つ以上カウンターが乗ったこのカードを墓地に送ることでカードを2枚ドローするよ！」  
カケラがあつまり強欲な壺が出来上がる。あげははその中に入っている2枚のカードを手に入れた。

「ふふっ…アースで耐えようと思ってるんだろうけどぎんねん！僕は手札から地割れを発動、相手フィールドの攻撃力が1番低いモンスターを破壊するよ！」

突然フィールドの地面が割れていきアースの足元が割れていく。足場をなくしたアースはその中へと落ちていってしまう。

「あははっ。落ちちゃったね。地球のヒーローが地割れに落ちるなんて皮肉が効いてると思わない？」

「私のヒーローさんが…！」

「やべえ…」

フィールドにモンスターを無くし、手札にカードもない状況で相手の攻撃を耐え、それを返さなくてはならなくなったコナミ達。果たして彼らは彼女らの目を覚ますことが出来るだろうか。

## 格好や憧れだけでHEROを使うやつ

あげはと幸子の目を覚ますために闇のデュエルを行なうコナミとゆま。だがそのデュエルはモンスターの破壊が衝撃となり、ダメージは実際にプレイヤーを襲うという危険なものだった。そんな中ゆまは速攻で勝負を決めるため2体の融合モンスターで攻めるも防がれ、フィールドのモンスターも失いピンチを迎えるのであった。

「地割れの効果でゆまちゃんの場合はがら空き、行かせてもらおうよ。僕は手札からチューナーモンスター、ブライ・シンクロンを召喚！」

黄緑色で彩られたロボットが上から滑空して1回転しながらフィールドへと現れる。

ブライ・シンクロン 攻撃力1500

「チューナーとそれ以外のモンスターが揃いやがった…来るか！」

「当然！僕はレベル2の鬼ガエルとレベル4のブライ・シンクロンをチューニング！地平を駆け抜ける騎士よその速さで敵を貫け！シンクロ召喚！ガイアに加護を受けよ、大地の騎士ガイアナイト！」

ブライ・シンクロンが鬼ガエルを掴むとその姿を1つにしていく。現れたのは馬の背中から騎士の上半身が生えて一体化したものの、手には2本の赤い槍を持っている。

大地の騎士ガイアナイト 攻撃力2600

「さらにブライ・シンクロンがシンクロ素材となったことで攻撃力がエンドフェイズまで600ポイントアップする！」

大地の騎士ガイアナイト 攻撃力2600↓3200

「攻撃力3200…!?!」

「ゆまちゃん達のライフは2900、これで終わりだね。ガイアナイトでゆまちゃんにダイレクトアタック！」

（駄目…！私が伏せてる2枚のカードはこの場面じゃ使えない！）

「危ねえゆまー！」

ガイアナイトが下半身の馬を走らせゆまへと近づいていく。その間にコナミが割り込み両手を広げてゆまを守るように立つ。

「コナミさん!?!」

「あはっ。2人まとめてやっちゃえ！」

ガイアナイトが2本の槍を2人にめがけて突き刺す。

「…庶民はおそらくこれでは終わらないでしょうね」

「え？」

コナミは突き出されていた2本の槍を両手で受け止めていた。

「な、何で！攻撃は確かに通ってるはず…」

「へっ…俺はゆまへの攻撃の時にトラップカード、ガード・ブロックを発動していたのさ。こいつの効果でゆまへの戦闘ダメージはゼロになった！さらにゆまはカードを1枚ドロワーできるぜ。」

コナミは受け止めている槍ごとガイアナイトを押し返す。

「あ…ド、ドロワー！コナミさんありがとうございます！」

「いいって事よ。この勝負勝つぜゆま！」

「はい！」

「1回防いだけで調子に乗らないでよね。僕はカードを2枚伏せてターンエンド！ガイアナイトの攻撃力は元に戻る！」

大地の騎士ガイアナイト 攻撃力3200↓2600

「そう…次のわたくしのターンで庶民を確実に仕留めますわ」

あげは&幸子 LP3500

フィールド 『大地の騎士ガイアナイト』（攻撃表示）

セット2

手札0（あげは） 手札3（幸子）

「行くぜ…俺のターン！俺は手札から魔法カード、黙する死者を発動だ！この効果で墓地の通常モンスターを守備表示で特殊召喚だ…来い、エーリアン・ソルジャー！」

コナミが発動した魔法カードからマジックハンドが出てきて、墓地のエーリアン・ソルジャーを掴みフィールドに置く。

エーリアン・ソルジャー 守備力800

「そんな壁で防ぐつもり？」

「こいつは壁じゃねえさ！俺は手札からチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚！」

左右にアンテナをつけたロボットがコナミのフィールドに出てく

る。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「シンクロ：しかも合計レベルは7。となればあのモンスターを出してきますか」

（ま…どんなモンスターでも僕の伏せているトラップカード、ミラーフォースなら攻撃してきたモンスターを破壊できる…完璧だね）

「行くぜ！俺はレベル4のエアリアン・ソルジャーにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司る者よ、大地の力を拳に宿しあらゆる敵を殴り倒せ！シンクロ召喚！自然を味方につける、<sup>アエリー</sup>A・ジェネクス・トライフォース！」

ジェネクス・コントローラーから発せられる電波がエアリアン・ソルジャーの姿をロボットに変え、中枢コアにジェネクス・コントローラーが装填される。突き出されている右腕の3つのランプのうち茶色のものが点灯した。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「ふふん、攻撃力は2500。ガイアナイトには届かないね！」

「なら届かせるだけだ！トラップ発動、シンクロ・ストライク！トライフォースの攻撃力をエンドフェイズまでシンクロ素材に使用したモンスターの数×500：つまり1000アップさせる！」

素材となったモンスターの力を受け、トライフォースの右腕が2回り程大きくなった。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500↓3500

「さあバトルだ！トライフォースでガイアナイトに攻撃！」

「かかったね！トラップカードはつど…あれ？発動しない？」

「地属性をシンクロ素材にしたトライフォースが攻撃するとき相手は魔法と罠は発動できねえ！」

「そんな!？」

ガイアナイトが2本の槍で貫こうとするもトライフォースの右腕で本体ごと飛ばされてしまう。

あげは&幸子 LP3500↓2600

「くっ…。うう…」



あげはは実体化したダメージによって苦しんでいるがなんとか立つことは出来るようだ。

「なんとか大丈夫そうだな…。俺は手札から速攻魔法グリード・グリードを発動！俺が相手のシンクロモンスターを倒したターンに発動できるぜ、効果でカードを2枚ドロウする！よし…カードを1枚伏せてターンエンド！トライフォースの攻撃力は元に戻るぜ」

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力3500↓2500

ゆま&コナミ LP2900

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）  
セツト3

手札1（ゆま） 手札1（コナミ）

「わたくしのターン！私は魔法カードサルベージを発動しますわ。このカードの効力で墓地の攻撃力1500以下の水属性モンスターを2体手札に加えます…わたくしが加えるのは鬼ガエルと軍隊ピラニア！さらに手札から強欲なウツボを発動、手札の水属性モンスター2体をデッキに戻すことで3枚のカードをドロウできます。先ほど手札に戻した2体をデッキに戻し…カードを3枚ドロウ！」

「手札を補充してきやがったか…」

「さあ覚悟なさい、わたくしは墓地の水属性モンスター…ドウローレンを除外することで手札から水の精霊 アクエリアを特殊召喚しますわ。さらに手札からチューナーモンスター、氷結界の風水師を召喚！」

場に2体の女性モンスターが現れた。どちらも水を自在に操り身の回りに浮かせている。

水の精霊 アクエリア 攻撃力1600

氷結界の風水師 攻撃力800

「合計レベルは7。つてことは…！」

「行きますわよ！レベル4のアクエリアにレベル3の風水師をチューニング！氷の槍を身に宿す龍よ、その凍える吐息で幾千の敵を凍らせよ！シンクロ召喚！全てを貫け、氷結界の龍 グングニール！」

2体のモンスターが同調し、万物を凍てつかせる氷のドラゴンが顕

現する。

氷結界の龍　グングニール　攻撃力2500

「確かそいつは…手札を2枚まで捨てることでその数だけ相手フィールドのカードを破壊できる凶悪モンスター!」

「その通り…ですがこの場面でわたくしは庶民を侮りませんわ。わたくしはグングニールの効果を発動、手札から捨てるのは1枚!そして…狙いは貴方が先ほど伏せたカード!」

「トライフォースを狙わないだ?!」

ドラゴンの咆哮とともに1つの氷でできた槍がコナミの伏せていたカードを貫く。

「ヘイト・クレバスが…」

「そのカードは自分フィールドのモンスターが1体のみ破壊されたとき相手フィールドのモンスターを墓地に送り、その攻撃力分のダメージを与えるトラップカードでしたね。わたくしの選択次第では危なかったですわね」

「だけどトライフォースとグングニールの攻撃力は同じだ…どうする気だ?」

「トライフォース?あなたのフィールドに既にはいないですわ」

「何…?」

トライフォースはいつの間にも現れたのか重装備をした兵に刺され、破壊されていた。

「わたくしが先ほどのコストで捨てた海皇の重装兵は水属性モンスターの効果のコストとして捨てられた場合にあなたのフィールドの表側表示のカードを破壊できるのですわ」

「そんな!コナミさんのカードが全滅…」

「ですがこれ以上あなたたちにチャンスを与えるのはこちらが危険、このターンで仕留めますわ。私は手札から破天荒な風を発動します。

このカードの効果で次のターンのエンドフェイズまでグングニールの攻守を1000アップさせますわ!」

グングニールの後ろから強風が吹き、それが追い風となる。

氷結界の龍グングニール　攻撃力2500↓3500

「これで終わりですわ、グングニールで庶民にダイレクトアタック！」  
「く……ここまでなのか……？」

「まだです！トラップ発動、ヒーロー見参！相手から攻撃を受けたときコナミさんの手札のカードを相手がランダムに選び、それがモンスターカードなら特殊召喚出来ます……！」

「先ほど発動の気配がなかったので問題はないと思いましたがそんなトラップを……ですが庶民の手札がモンスターカードとは限りませんわ！」

「残念だったな。俺の手札に1枚残っているこいつはモンスターだ！  
ギガテック・ウルフを守備表示で特殊召喚！」

鉄屑で出来たオオカミがコナミを守るように場に現れ攻撃を受けようとする。

ギガテック・ウルフ 守備力1400

「なら……僕はトラップを発動、メテオ・レイン！この攻撃であなたは貫通ダメージを受ける！」

「やりなさいグングニール！」

グングニールから発せられる吐息が風に乗ってオオカミを凍結させる。その状態を保てなくなったオオカミは砕け散り、そのままコナミへ吐息とともに衝撃を与える。

「げほっ……!?う……まだ俺のライフは残ってるぜ」

ゆま&コナミ LP2900↓800

コナミはボロボロになり立てなくなっているが意識を手放さずゆまの方を見る。

「ゆま……助かったぜ。そしてもう1枚のトラップを使ってくれ……お前の助けになるかもしれねえ」

「えっ……あ！トラップカードヒーロー・シグナル！こちらのモンスターが戦闘で破壊されたときデッキからレベル4以下のエレメンタルヒーローE・HEROを特殊召喚出来ます！」

「ですがターンプレイヤーは庶民！庶民のデッキにE・HEROなど……」

「へっ、それが……いるんだな。俺はデッキからE・HERO スパーク

マンを特殊召喚…」

電気をまとった戦士がコナミのデッキから現れる。

E・HERO スパークマン 守備力1400

「な…庶民のデッキにそんなモンスターが！」

「格好だけでもヒーローになりたかったが俺はヒーローなんて柄じゃねえみてえだな。ゆま…あとは頼んだぜ」

「はい！コナミさんが必死につないでくれたんです。絶対に無駄にしません！」

「く…わたくしはカードを1枚伏せてターンエンド！」

（今わたくしが伏せたカードはリミット・リバース。攻撃力1000以下のモンスターをわたくしの墓地から特殊召喚出来る…。これで墓地の伝道師を特殊召喚出来ますわ。さらに伝道師は墓地の氷結界モンスターを自身をリリースして復活できる。仮にグングニールがやられても次のターンにまた復活しますわ！）

あげは&幸子 LP2600

フィールド 『氷結界の龍 グングニール』（攻撃表示）

セット2

手札0（あげは） 手札0（幸子）

「このドローに全てをかけます…私のターン、ドロー！このカードは…コナミさんが融合を取り返してくれたおかげで合格できた試験で融合を使いこなした証としてもらったカード！」

ゆまが全力でドローし、引き当てたカード。彼女はそれに全てを託した。

「まずは手札からR<sup>アール</sup>ライトジャスティスを発動します。私の場のE・HEROさんの数だけ相手の魔法・罠カードを破壊します。

私が狙うのはあげはちゃんの伏せているカード！」

ゆまが発動した魔法カードがスパークマンを通してあげはの伏せていたカードに光線を放ち、貫いた。

「くっ…ミラーフォースが！」

「そして…私は手札からミラクル・フュージョンを発動します！」

このカードはフィールド・墓地のモンスターを除外することでE・

HEROを融合召喚することができます。私は墓地の沼地の魔神王の効果で自身をフレイルムウィングマンとして扱うことで場のスパークマンと融合！変幻自在の水よ、電気を操る戦士と1つになって新たな力を手に入れてください！融合召喚！光を纏うヒーロー…E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン！」

2体のモンスターが1つに交わり新たなヒーローが見参する。そのモンスターが放つ光は輝き、眩しく光っている。

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500

「ですが攻撃力は3500となっているグングニールの方が上！」

「シャイニング・フレア・ウィングマンは墓地にいるE・HEROの数×300分攻撃力をアップします！私の墓地には5体…よって！」

墓地の仲間たちの力が光となって吸収されていく。

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン 攻撃力2500↓4000

「嘘…攻撃力4000なんて?!」

「行きます！シャイニング・フレア・ウィングマンでグングニールに攻撃、シャイニング・シュート！」

光が1つとなってグングニールを包み込む、そしてグングニールは静かに消滅した。

「くあつ…!?!…まだライフは残っていますわ！次のターン私が伏せているカードを使えば…」

あげは&幸子 LP2600↓2100

「まだです！シャイニング・フレア・ウィングマンが相手モンスターを戦闘で破壊した時その攻撃力分のダメージを与えます！」

「なっ…グングニールの攻撃力は2500！」

「つてことは…」

「俺たちの勝ちだ！」

グングニールの魂が光となって幸子を包み込む、そしてその光が消える頃にはライフが0になる音が響いていた。

あげは&幸子 LP2100↓0

こうして4人の辛い戦いに終止符が打たれたのであった…。

だって俺もシグナーじゃないし

あげはと幸子のライフが0になると周りを囲っていた紫色の炎も消え、浮かんでいたクモの痣も消えた。あげはと幸子は痣が消えると同時に意識を失って倒れてしまう。コナミは先ほどのデュエルのダメージが抜けきっていないため、ゆまが様子を確認した。

「幸子達はどんな感じだ？」

「えーと…とりあえず意識を失ってるだけみたいです。ただ幸子さんは外傷が…うう、私のせいで」

「まああの状況じゃ仕方ないだろ。とりあえずこっから近いスタジオムの医務室にでも運ぶか」

そう言つてコナミはよろけながらも立ち上がり幸子に近づいていく。

「コナミさんは大丈夫なんですか？」

「すげえ痛いけどなんとかかな…。サテライトで鍛えた賜物だぜ」

そんなことを話しているとあげはが意識を取り戻す。

「うーん…あれ？ここ、どこ？」

「あげはちゃん！目が覚めたんだね！」

「ここはスタジオムの近くの廃ビルだが…何も覚えてないのか？」

「うん…なんで僕はこんなところにいるんだろう？」

周りをキョロキョロと不思議そうに見回すあげは。どうやら先ほどのまでの事は記憶に残っていないらしい。

「何も覚えてないみたいだな…、ならその方がいいか。ゆま、さっきのことは2人には内緒にしておこうぜ」

「はい。私もそうしようと思っていました」

先ほどは明らかに正気ではなかった2人にわざわざさっきのことを伝えるのは賢明ではないと判断し、秘密にすることを決めたコナミ達。そんな2人に意識を取り戻したもう1人の声が聞こえてくる。

「体が重いですわね…って痛い！痛いですわー！」

その声を上げる者は悲痛な叫びをあげ、地面にうずくまっている。

「おーい。大丈夫かー？」

「大丈夫じゃないですわ…って庶民!? 一体このわたくしに何をしたのです!」

「いや…俺が何かしたっていうよりされたんだが…。それよりお前あんま大声あげない方がいいぞ。痛いだろ?」

「ふう…! い、痛い…」

「言わんこつちやねえ…しやーないな。ちよつと我慢しろよ」

そう言つてコナミは幸子を仰向けにし、背中から腕を回して胴体を支えると共にヒザの下に差し入れた腕で足を支え、やや重心を後ろにかけながら立つ。

「よつと。なんだ結構軽いな」

「な…!?!」

「うわー! コナミさん力持ちですわね!」

「お姫様抱つこだ…! う、羨まし…くなんかないけど」

幸子は顔を赤く染め、ゆまは楽しそうにはしゃぎ、あげははじつと見つめた後、顔を物凄い勢いで横に振る。

「しよ、庶民ごときがこのわたくしに易々と触れていいとでも思つて…痛い! ふう…仕方ないですわね。さつさと救護施設に運びなさい!」

「はいよー。行くぞゆま! それに…あげはも!」

「はい!」

「あ、あげは…!?! 男の人に名前と呼ばれるなんて初めて…!」

幸子の痛みを和らげるためスタジアムに移動するコナミ達、途中あげはが前方不注意で鉄パイプで転んでゆまに手を貸してもらう以外は何もなく着くことができた。

「さて…一応治療を受けたわけだが大丈夫か幸子?」

「大丈夫な訳ないですわ。先ほどのような痛みは無くなりましたがまだ身体が全体的に痛いのです。一体何があつたのやら…」

「そういうばあちゃんは大丈夫ですか?」

「うん。ちよつと痛いけど…まあそんなには痛くないよ」

「とりあえず…爺やに迎えに来るように言いました。これ以上は大丈夫ですわ」



「そうですか…。幸子さんお大事に！」

「お、お大事にー！」

「じゃあなー」

「庶民は待ちなさい」

2人に続いてさりげなく出て行くこうとするコナミを呼び止める。

「さつき何があったのかは…まあいいでしょう。あなたが今更わたくしに何かしたなど思いせんわ。それより…お父様にわたくしの考えを話しましたの」

「！…どうだった？」

「やれやれ…お父様にぶたれる日が来るとは思いませんでしたわ。とはいえお父様もサテライトの現状は知らなかったようで庶民から聞いた様子を伝えると納得させることが出来ましたの」

「ってことは…？」

「ええ。後日サテライトに海野財閥からの支援が出るのが来まりましたわ」

「マジか！ありがとう幸子！」

「ふん…庶民にも手伝って貰いますわよ。わたくし達はサテライトの細かい様子は知りませんからね」

「もちろんだ、全力で手伝うぜ」

こうしてサテライトへの支援を取り付けることが出来たコナミ。そんな中医務室に取り付けられていたモニターからMCの声が聞こえてくる。

「決まったー！ジャックを倒したのはサテライトからの挑戦者、不動遊星！彼こそがニューキングだ！」

「何…!?遊星が勝ったのか！」

モニターには遊星がジャックに勝った様子が映っている。だが観衆の様子がおかしい。

「サテライト野郎め！どんなインチキ使いやがった！」

「イカサマしやがって！」

「…なるほど。確かにこうして見るとサテライトとの格差は酷いものがありますね」

「幸子！俺は遊星のところ行ってくる、このままだと遊星が危なさそうだ！」

「分かりましたわ。そうですね…2日後にあのホテルにあなたを迎えに行きます。それでよろしくて？」

「分かった！」

コナミは返事をするに遊星のもとへ向かい、暴れそうな観衆から遊星を助け出してDホールでスタジアムから抜け出した。彼らはひとまず弥生のホテルで一息つくことにした。

「ラリー達は大丈夫かな？」

「ああ、直接ゴドウィンと話をしてきた。ラリー達はもう安全らしい、俺がジャックと戦えばそれで良かったみたいだ」

「そうか…それは良かったな」

「ところでコナミ…。シグナー、またはダークシグナーのことを知っているか？」

「ダークシグナー…!?ああ、さっきそんな奴とデュエルをした。危険なデュエルだったぜ。なんかダメージが実体化するし相手はなんか正気じゃないし…」

「…！既に戦っていたのか。ゴドウィンによるとそれは操られた兵らしい。そして…この痣を見てくれコナミ」

遊星が袖をまくり、腕にある特徴的な痣を見せる。

「うわ！遊星、腕が腫れてるぞ！大丈夫か！」

「…これはどうやらシグナーの証らしい。そしてダークシグナーによる大規模な戦いがサテライトで始まる、それを止めるためには俺たちシグナーが戦わなくてはならないんだ」

「俺たち？シグナーは他にもいるのか？」

「ああ、全部で5人いる。今分かっているのは俺とジャック、それとアキと龍可の4人だ」

「龍可…あいつはデュエルするだけで疲れるって言ったのに。それに1人足りないじゃないか、龍亜は？」

「龍亜には痣がなかった…。俺は1度サテライトに戻ろうと思う、もしあそこで戦いが起こるなら心配だからな」

「そうか…。俺はまだここにいなきやならねえ。と言つてもすぐにサテライトには向かう、そこで俺も協力するぜ」

「ああ、後でマーサハウスで落ち合おう」

その日の夜、遊星はダークシグナーに操られた者とデュエルを行い、ダークシグナーとの戦うことの現実味を感じた。次の日遊星は再びサテライトにサテライトに帰り、ラリー達の無事を確認する。その夜にBADエリアでダークシグナーとなっていた鬼柳と再会した。彼はチームサテイスフアクション時代に遊星が自分をセキユリテイに売って裏切つたと勘違いしており遊星とデュエルを行う。そのデュエルで遊星はダークシグナーの力、地縛神によってデュエルに敗れ、地縛神に恐怖を抱くようになってしまう。同時刻にアキというシグナーの少女も地縛神によってデュエルを仕掛けられ、デイヴアインという心の拠り所を失ってしまった。

さらに次の日、彼女の父親にアキのことを相談された遊星は彼女の心を取り戻すため自分たちが仲間だと証明するためにデュエルを行い、シグナーの痣は忌むべき印ではなく絆の証だと証明した。その後4人のシグナーはレクス・ゴドウィンのもとへと向かい、シグナーとしての使命を聞きサテライトへへりで向かう。

一方、コナミはある少年と再会していた。

「龍亜！こんなところで何をしてるんだ？」

「あ…コナミ。俺はみんなに置いていかれちゃったんだ。みんなはダークシグナーと戦うためにサテライトに行ったみたい…俺もついて行こうと思っただけゴドウィンっておっさんが許してくれなくてさ」

「なんで龍亜だけ？」

「俺はシグナーじゃないからダメなんだって。龍可がかばってくれたけど…やっぱり俺は龍可の力にはなれないんだ」

「…龍可の力になりたくないのか？」

「なりたいよ！でも俺はシグナーじゃないし…それに龍可は強いから。1人でも大丈夫だよ」

「そんなわけないだろ。危ないデュエルをするんだ、怖くないわけは

ない：龍可は体も弱いみたいだしな。龍亜：俺は今からサテライトに行く。俺もシグナーとやらじゃねえけど遊星の力になるためにな。お前も来るか？」

「…行く！行くよ！龍可は俺が守るんだ！」

「よし：行くか」

コナミと龍亜は弥生のホテルで待っている幸子に会う。コナミは幸子に事情を話しサテライトで戦いが起こるかもしれないと告げる。幸子はなおさら放つてはおけないとついて行き、3人はヘリに乗ってサテライトのマーサハウスへと向かった。そこにいるシグナー達に再会すると既にダークシグナーの1人がラリーを操って遊星と戦わせる非道な真似をしたあとで、彼らはそれぞれのダークシグナーを手分けして倒そうとしていた。

「龍可！俺が龍可を守るからね！」

「俺も龍可について行くぜ」

「わたくしもついて行きますよう」

それぞれの行き先が決まり、龍可達は牛尾の車で目的の地に向かうのであった。

「っていうかなんでお前がここに…？」

「治安維持局の命令でついてきたんだよ。それと…あんたらサテライトのことをクズ呼ばわりして悪かったな。」

「…!?雨でも降るのか…？」

「うるせえ！俺も実際にこういう風に過ごしているか見て考えを変えたんだ！」

「へー：なら別にいいか」

「やはりサテライトの人々は厳しい生活を…」

コナミと牛尾が話していると龍可が不安そうに自分の手元あたりを見つめる。

「クリボンが震えてる…大丈夫クリボン？」

「クリボン？」

「この前も言ったけど龍可はカードの精霊が見えるんだぜ！」  
「精霊い？これだから子供は…」

「ダメージが実体化することもあるんだしもう精霊がいても不思議じゃないな…」

「コナミ…やつぱり見えてないの？」

「んー、見えないな」

「そう…あなたに精霊がついているからもしかしたらと思っただけど」

そう言つてコナミの近くを見る龍可。

「え？俺、精霊いるのか!？」

「ええ…あなたの肩にアンテナがついたロボットが。それにこの車に並走して走つてる金属で出来たオオカミが…」

「マジかー。見えたら良かったんだけどな」

「いいなー。俺も精霊欲しいなー」

そう話していると目的の地が近づいてきた。だがもう少しで着くというところで突然龍可に精霊の声が聞こえてくる。

「エンシエント・フェアリー・ドラゴンを解放して欲しい…?でもどうやって?」

龍可が精霊と会話していると突然龍可が車から姿を消してしまう。

「あ、あれ!龍可!どこいったの!？」

「なっ…まさかどこかに落ちやがったか!？」

そうして周りを見渡す3人、すぐにもう1人足りない人物に気づく。

「あの少女だけでなく、庶民もいませんわ!」

そう、コナミも姿を消していたのだ。彼らはどこに消えたのだろうか…?

そこからへんに転がっているデユエリスト

姿が急に見えなくなったコナミ、彼はある場所で横たわっていた。

「うーん…うん、ここはどこだ？」

目を覚ますもそこは全く見覚えのない場所、どうしようかと困っていると思われないものが肩に乗っていた。それは左右にアンテナをつけ、胴体がコードで繋がっているロボット。

「…ジエネクス・コントローラー？ デュエルしてないのに実体化してる…」

じっくり見ていると突然背中側から金属が擦れたような鳴き声が聞こえてくる。びつくりして見てみると、それは鋼鉄によって作られたオオカミ。鋭いキバを持っているが、噛み付いてくる様子はない。

「お前はギガテック・ウルフ…までよこの2体って龍可の言っていた精霊って奴か!」

オオカミはそれに同意するように何回か鳴いた。肩に乗っているロボットもアンテナを交互に光らせて同意のアピールをしている。

「んー？でも俺は精霊は見えないはずなんだが…急に見えるようになったのか？」

コナミが頭を悩ませているとどこからか紫色の毛もじやの丸っこい体に手と足を生やしたモンスターが出てくる。

「ん？なんだお前は？」

コナミの目の前までくると、突然そのモンスターの体が割れ、中から全く同じ見た目をしたモンスターが出てきてコナミを驚かす。

「うおっ！な、なんだ？マトリョーシカか？」

驚かすのに成功したからか笑顔になったそのモンスターは少し移動した後、その手を誘うように振ってきた。

「…ついてこいってことか？」

そのモンスターは大きくうなずくと猛スピードで1つの方向へ向かっていく。

「あつ…待ってくれー!」

慌ててギガテック・ウルフに飛び乗り後を追いかける。肩に

乗っているジエネクス・コントローラーが落ちないように気にしながらついていった。

そしてそのモンスターはある場所で止まった。

「ん……ここはなんだ？鍾乳洞？」

ギガテック・ウルフから降りたコナミが周囲を見ているとそのモンスターはコナミのデッキの中に入っていった。

「え!?ちよつと待ってくれ……この後どうすればいいんだ!？」

コナミのその質問はある者に遮られることになった。

「来たか……。貴様が精霊に導かれしデュエリストか」

後ろにか弱い精霊を引きつれている、顔が白いマスクによって隠されていて分からない者がコナミへと問いかける。

「な、なんだお前は？お前がここに連れてきたのか？それとここはどこだ？」

「質問が多いぞ。その答えは俺とデュエルをしてからだ」

「……まさかこいつがダークシングナーか？ならこれは……この前みたいな操り人形を通したやつとは違う本物の闇のデュエル!？」

「ふん……怖気付いたか」

「くっ……やるしかないのか」

互いに距離を取りデュエルディスクを展開する。

「俺の名はカイバーマン。貴様を敗北させる者の名だ」

「俺はコナミだ！そしてこのデュエル絶対に負けねえ！」

「「デュエル!」」

デュエルディスクによって先行がランダムに選ばれる。先攻のランプがついたのはカイバーマン。

「行くぞ俺のターン、ドロー。俺は手札から青き眼の乙女を召喚してターンを終了する!」

見るものを全て魅了するほど綺麗な銀髪をしており肌が白く目が青い女性がカイバーマンの場に現れた。

青き眼の乙女 攻撃力0

「攻撃力0のモンスターを攻撃表示で出しただけでターンエンドだと……?」

カイバーマン LP4000

フィールド 『青き眼の乙女』（攻撃表示）

セツト0

手札5

「俺のターン、ドロー！…攻撃力が低いモンスターを攻撃表示で出すってことは何か策があるってことだって遊星が言っていたな。どうするか…」

コナミは慎重に相手の場を見る。このデュエルが仮にダークシングナーとのデュエルであれば生死に関わる可能性もあるため慎重にならざるを得なかったのだ。だがいつまでたってもカードを場に出すことが出来ずにいた。

「カードを出す意気地すらないか…？恥を知れ！己が頂点を目指すなら、この俺を乗り越えていけ!!」

「…！俺は手札から切り込み隊長を召喚する！」

左手に細い剣を右手に太い剣を持ち、体に余すところなく防具をつけ、その上にマントを羽織った騎士隊長がコナミの先陣を切った。

切り込み隊長 攻撃力1200

「それで終わりか？」

「まだだ！切り込み隊長が召喚に成功した時俺は手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚する事ができる。攻撃表示で来てくれギガテック・ウルフ！」

鉄屑で作られたオオカミがコナミの横をかけてフィールドへと走ってきた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「ほう…そいつはお前の持つ精霊のモンスターか」

「ああ。そしてこのままバトルだ！切り込み隊長で青き眼の乙女に攻撃！」

騎士隊長が女性に斬りかかるといふ騎士の風上にも置けない行為をする。その女性は腕で身をかばったかと思うと途端に周囲に光が差し込み、隊長は思わず目標を見失ってしまう。

「何が起きてやがる！」



「青き眼の乙女は1ターンに1度攻撃対象に選択された時その攻撃を無効にして自身の表示形式を変更することが出来る！さらに俺のデッキ・手札・墓地のいずれかから僕を呼び出すことができる…！」

青き眼の乙女 守備力0

「攻撃を防いだ上にモンスターまで呼べるのか…！」

「伝説を見せてやろう…！デッキより出でよ我が忠実なる僕、  
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン

青眼の白龍！」

女性の魂から光が解き放たれ天に捧げられると、そこから2本の白き翼をはためかせたドラゴンが降臨した。

青眼の白龍 攻撃力3000

「なっ…攻撃力3000のモンスターをデッキから特殊召喚しただど  
!？」

「どうした？ブルーアイズを前に臆したか…？」

「だ、誰が臆するかよ！ギガテック・ウルフで青き眼の乙女に攻撃だ！  
乙女が攻撃を無効に出来るのは1ターンに1度だけ、この攻撃は防げ  
ねえだろ！」

鉄屑のオオカミが金属をこすらせながら女性に体当たりを仕掛けるとあつけなく破壊された。

「2体のモンスターを場に出していたのが功を奏したか。だがその弱小モンスターでは俺のブルーアイズにはかなわぬぞ」

「くっ…俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『切り込み隊長』（攻撃表示） 『ギガテック・ウルフ』

(攻撃表示)

セツト3

手札1

「俺のターン。手札の伝説の白石ホワイト・オブ・レジエンドを捨てることでドラゴン目覚めの旋律を発動する。俺はこのカードの効果でデッキから攻撃力3000以上守備力2500以下のドラゴン族モンスターを2体まで手札に加えることができる！俺は青眼の白龍と混沌カオス・エンペラー・ドラゴン帝龍―終焉の使者―を手札に加える！」

「一気に強力モンスターを手札に加えやがったか！だけどそいつらのレベルはどっちも8、召喚するには2体の生贄が必要だぜ！」

「そんなことは貴様に言われなくてもわかっている。まずは墓地に置かれた伝説の白石の効果を発動する！その効果によりデッキに残りし最後の青眼の白龍を手札に加える。さらに俺はトレード・インを発動する。このカードによって俺は手札のレベル8モンスター混沌帝龍を墓地へ捨てることでカードを2枚ドローする！…ほう？」

カイバーマンはドローしたカードを見ると目を細め、コナミの方をじつと見つめる。

「な、なんだよ？」

「ブルーアイズが貴様と全力で戦いたがっている。誇りに思うがいい、貴様にはブルーアイズに焼き払われる栄誉を与える！」

「誰がやられるかよ！」

「その減らず口がいつまで持つか…楽しみだ。俺は手札からロード・オブ・ドラゴンードラゴンの支配者―を召喚する。こいつが場にいる限り互いにフィールドのドラゴン族モンスターを効果の対象とすることは出来ない！」

「くっ…あのドラゴンが更に倒しにくくなっちゃったか」

「だが本番はここからだ。俺は手札からドラゴンを呼ぶ笛を発動！こいつの効果で俺の場にロード・オブ・ドラゴンがいる時に俺は手札よりドラゴン族モンスターを2体まで特殊召喚することが出来る。…さあ見るがいい、そして戦おのくがいい！降臨せよ2体のブルーアイズよ！」

ロード・オブ・ドラゴンが笛を吹き鳴らすと天からさらに2体の白き龍が舞い降りてくる。

青眼の白龍×2 攻撃力3000

「嘘…だろ!?!」

「俺のフィールドに俺の最も信頼する僕が3体…それでも貴様は立ち向かってくることが出来るか？さあバトルだ！」

「立ち向かってやるさ！永続トラップ発動！」

「だがロード・オブ・ドラゴンの存在により、俺のブルーアイズを対象

とすることは出来ないぞ！」

「このカードはブルーアイズを対象にしたものじゃねえ！俺が発動したガリトラップーピクシーの輪ーの効果で俺のフィールドに表側攻撃表示のモンスターが2体以上存在する時、相手は攻撃力が1番低いモンスターを攻撃の対象にすることが出来なくなるんだぜ！」

ピクシーという名の妖精がコナミの場のモンスターを光の輪で包み込む。

「なるほど…自分の場にトラップをかけたか。さらに貴様のフィールドにいるのはどちらも攻撃力が1200…ということは」

「ああ！お前は攻撃を封じられたぜ！」

「小賢しい真似をしてくれる…。俺は手札から速攻魔法超再生能力を発動してターンを終了する。このタイミングで超再生能力の効果により俺がこのターン手札から捨てたドラゴン族モンスターの数だけカードをドローすることが出来る。俺が捨てたのは2体、よって2枚のカードをドローする！さあ貴様のターンだ」

カイバーマン LP4000

フィールド 『青眼の白龍』×3 (攻撃表示) 『ロード・オブ・ドラゴンドラゴンの支配者』 (攻撃表示)

セット0

手札4

「ガリトラップで防いでる間に何とかしねえと…。俺のターン！よし、俺はカードを1枚伏せて命削りの宝札を発動する。このカードによつて俺は手札が3枚になるようにドローする！」

「手札増強のカードか。だがそのカードのリスクとしてこのターンの俺へのダメージは0となり、エンドフェイズには手札を全て捨てなくてはならない」

「知ってるなら話は早い！俺はカードを3枚ドロー！俺は手札からエレメンタルヒーローE・HEROスパークマンを召喚だ！」

電気をまとった戦士がコナミの場に現れた。

E・HEROスパークマン 攻撃力1600

「ほう、E・HEROか。懐かしいカードを使う。だがガリトラップに

よって守られるのは攻撃力が1番低いモンスターののみ、そのモンスターは守られていないぞ」

「いや、そうでもないのさ。切り込み隊長のもう1つの効果でお前はこいつ以外の戦士族モンスターには攻撃が出来ない！もちろんスパークマンは戦士族だ！」

「さすがに無策で出したわけではなかったようだな」

「当然だ！さあバトルだぜ。スパークマンでロード・オブ・ドラゴンに攻撃、スパークフラッシュ！」

スパークマンの手から電気が放電されロード・オブ・ドラゴンに感電し、破壊する。

「とりあえずあいつは倒せたか……。俺はギガテック・ウルフを守備表示にしてカードを1枚伏せる！これでターンエンドだ。命削りの宝札の効果で残った1枚を墓地に捨てるぜ」

コナミ LP4000

フィールド 『切り込み隊長』（攻撃表示） 『ギガテック・ウルフ』（守備表示） 『E・HEROスパークマン』（攻撃表示）

セット4 『ガリトラップ―ピクシーの輪―』

手札0

「俺のターン、ドロロー！」

「この瞬間トラップ発動、捨て身の宝札！俺のフィールドの2体以上の攻撃表示モンスターの攻撃力の合計が相手フィールドの攻撃力が1番低いモンスターの攻撃力より低ければ、俺はこのターンの召喚や特殊召喚が出来なくなる代わりにカードを2枚ドロローする！」

「貴様の場の攻撃表示モンスターの合計は2800、俺の場には攻撃力3000のブルーアイズ。条件を満たしてきたか」

「ああ。2枚引かせてもらうぜ！」

「ならば俺は手札よりチューナーモンスター、青き眼の賢士を召喚！

このモンスターの召喚に成功した時俺はデッキから光属性・レベル1チューナーを手札に加えることが出来る。俺は太古ホワイト・オブ・エンシエントの白石を手札

に加える！さらに手札から調和の宝札を発動し手札の攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー太古の白石を墓地へ捨てることで

カードを2枚ドロウする！貴様はそのトラップで数ターンは凌げる  
とでも思っているようだが甘いぞ！手札よりスタンピング・クラッ  
シユを発動し、貴様のガリトラップを破壊して500のダメージを与  
える！」

青き眼の賢士 攻撃力0

カイバーマンの発動した魔法カードからドラゴンの足が出てきて  
ガリトラップのカードを踏み潰す。粉碎されたガリトラップの破片  
がコナミを襲う。

コナミ LP4000↓3500

「くっ…ん、この前みたいな痛みがねえ…？」

「宣言してやろう、俺はこのターンで貴様を倒す！ブルーアイズ3体  
で切り込み隊長、スパークマン、ギガテック・ウルフへと攻撃！

滅びの爆裂疾風弾<sup>バーストストリーム</sup>3連弾！」

3体の白き龍の口にエネルギーが集約し、コナミの場の3体のモン  
スターへ解き放たれる。

「…このターンで俺を仕留めるっていう殺気を感じる。今までこん  
な圧力は感じたことがねえ！」

3つの弾がコナミの場のモンスターへと直撃した。

「ダメージが実体化してるわけじゃねえ…。なのになんだこの圧力は  
!？」

コナミ LP3500↓300

「さあ…これで貴様の場のモンスターは全滅だ」

「いや…まだだ！俺の場には1体だけモンスターが残っているぜ」

「なんだと？」

白き龍の攻撃による爆風が晴れるとギガテック・ウルフが鉄の一部  
を赤くしながらもフィールドに残っていた。

「面白い、どんなトリックを使ったのか聞かせてもらおう」

「へっ…俺は墓地のシールド・ウォリアーの効果を発動していたのさ。  
こいつは墓地から除外することで1度だけモンスターの戦闘破壊を  
防ぐことが出来る！」

「なるほどな…命削りの宝札によって墓地へ送ったカードか。やって

くれるな」

「へへっ…このターンで俺を倒すんじゃないやなかったのか！」

「だがこの程度で防いだ気になるなど甘いぞ！貴様もそこら辺に転がっている凡骨デユエリストと同じなのか？貴様と戦いたがっていたブルーアイズをがっかりさせるな！俺は手札から速攻魔法瞬間融合を発動する！このカードの効果で俺は俺のフィールドのモンスターで融合召喚を行う。俺はブルーアイズ3体で融合！」

「単体でも強力なブルーアイズ3体で融合だど!？」

「さあ今こそ現れるがいい、史上最強にして究極のドラゴンよ！」

3体の白き龍が交わりその姿を1つとする。合体した姿は3つ首の巨大なドラゴン。1つ首のドラゴンが咆哮をあげると残りの2つ首のドラゴンも咆哮をあげ相手を威圧する。

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
青眼の究極竜 攻撃力4500

「攻撃力…4500。なんだそりや…!？」

「さあアルティメットよ、その弱小モンスターを粉碎せよ。アルティメット・バースト！」

3つの首からでるエネルギーが1つに集約され発射される。その弾は鋼鉄のオオカミを跡形もなく粉碎した。

「くっ…だがギガテック・ウルフは守備表示だからダメージはねえ！」  
「俺がそんな弱小モンスターを粉碎するためだけにこいつを呼び出したでも思うか？」

「…なわけはねえよな」

「その通りだ！俺は手札から融合解除を発動する。このカードによりアルティメットをエクストラデッキへと戻すことでこのモンスターの融合に使用した3体のブルーアイズを墓地より呼び戻す！」

アルティメットから光が放たれると合体が解除され、再び3体のブルーアイズが場に降臨する。

青眼の白龍×3 攻撃力3000

「バトルフェイズ中に特殊召喚したってことは…」

「ブルーアイズは再び貴様に牙をむく…!さあブルーアイズよあの赤帽子ヘダイレクトアタックだ！滅びの爆裂疾風弾<sup>バーストストリーム</sup>3連弾！」

3体の白き龍から放たれた3つのエネルギー弾がコナミへと直撃した。

「ふん…所詮この程度か」

爆風が晴れる。するとコナミは未だに立っていた。

「まだだ…俺のライフはまだ残ってるぜおらあー！」

コナミ LP300→1300

「ば、馬鹿な…!?3体のブルーアイズの攻撃に耐えただど!?」  
彼らの戦いはもう少し続く。

貴様の歩んだデュエル道などまだ入り口にすら来ていない

残りライフ300でフィールドにモンスターもいないコナミに3体の青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍の攻撃が直撃する。しかし彼はまだ倒れていなかった。

「何故だ？確かにブルーアイズ達の攻撃は貴様に直撃したはずだ……。しかも貴様はこのターン捨て身の宝札のデメリットによりモンスターの特殊召喚を封じられている。壁モンスターを呼び出すことも出来ないはずだ！」

「ああ、あんたの言う通りだよ。俺はブルーアイズ3体の攻撃を受けたぜ。だけどその上で耐えきったのさ。まず俺は1体目の攻撃に俺はガード・ブロックを発動して戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロローしていた。そして2体目の攻撃が決まる直前に俺はこのトランプを発動したのさ、体力増強剤スパーZ！こいつは俺が200以上の戦闘ダメージを受けるときに発動でき、ダメージを受ける前に俺のライフポイントを4000回復するのさ！さらにこの攻撃で3000のダメージを受けたことをトリガーにダメージワクチンオメガマックスを発動し、受けたダメージ分ライフを回復していた！そして3体目の攻撃をその回復したライフで受け切ったのさ！」

「トリプルリバーズによりブルーアイズの猛攻をその身で防いだというわけか、見事だ。このターンで貴様を倒すという俺の宣言を外してくれるとはな。…心が騒ぐぞ」

「ああ、俺もだ。あんたは強い…多分俺が戦ってきたデュエリストの中でも1番だ！」

「目から怯えが消えたな…。そうだ、貴様のプライドを全てかけこの俺に挑むがいい！それを俺がたやすく打ちのめしてやろう。…ゆくぞ。貴様にこの壁を乗り越えることができるか試してやる。俺はレベル8の青眼の白龍にレベル1の青き眼の賢士をチューニング！」

「ブルーアイズをシンクロ素材にしてきただと…!？」



賢士が手に持っている杖を3体の中心にいるブルーアイズへと振りかざすと自身の魂を糧としその姿を変貌させる。

「我が僕よ、その美しき姿をさらなる高みへと昇華させよ！シンクロ召喚！降臨せよ！白銀の翼を持ちし龍、蒼眼の銀龍！」

空のように澄んだ青色だった眼はさらに濃いものへ変わり、翼も白と表現するより白銀という言葉がふさわしい神々しきドラゴンが誕生した。

蒼眼の銀龍 守備力3000

「ふつくしい…」

「これがブルーアイズから生まれたシンクロモンスターか…。まずいな守備力3000なんてそうは超えられねえ！」

「だが銀龍の本当の力はここからだ！銀龍が特殊召喚されたことで、次のターン終了時まで俺のフィールドのドラゴンは効果では破壊されず、効果の対象とすることもできない！」

銀龍が翼を広げるとその翼から3つの光が降り注ぎ、3体のドラゴンはその光に包まれる。

「いい!?なんだそりゃ！」

「さあ…俺はこれでターンを終了する。俺はこのエンドフェイズに墓地の太古の白石の効果でデッキからブルーアイズモンスターを呼ぶことができるが、俺のデッキに入っているブルーアイズは3体の

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン  
青眼の白龍のみ。このままターンを終える」

カイバーマン LP4000

フィールド 『青眼の白龍』×2（攻撃表示） 『蒼眼の銀龍』（守備表示）

セット0

手札2

「俺のターン！このカードに賭けるぜ、800のライフポイントを払って魔の試着部屋を発動する！俺のデッキの上から4枚のカードをめくりその中にあるレベル3以下の通常モンスターを特殊召喚することができる！」

コナミの場に1つの大きな赤いカーテンで囲まれた試着部屋が現

れる。

コナミ LP1300↓500

「自らの命を削って挑んでくるか…」

「さあめくるぜ！一枚目、レベル1通常モンスター、大木炭18！2枚目、トランプカード、シンクロストライク。3枚目、魔法カード、黙する死者。4枚目、レベル3通常モンスター、ジェネクス・コントローラー！違ったカードはデッキに戻してシャッフルして…大木炭18とジェネクス・コントローラーを特殊召喚する！」

試着部屋から出てきた4枚のカードのうち2枚は落とす穴に落ちていくも残りの2体は無事に出てくる。

大木炭18 守備力2100

ジェネクス・コントローラー 守備力1200

「2体のモンスターを呼び出したか。ジェネクス・コントローラーはチューナーモンスター、シンクロでこの俺に挑んでくるつもりか」

「そうさせてもらうぜ。大木炭18をリリースしてタン・ツイスターをアドバンス召喚！」

舌が台風のように巻かれている奇妙なモンスターが大木炭18を吹き飛ばして出てくる。

タン・ツイスター 攻撃力400

「これで準備は整った！俺はレベル6のタン・ツイスターにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！闇のエレメントの司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、リアル・ジェネクス・クロキシアン！」

ジェネクス・コントローラーが左右からアンテナを飛ばしタン・ツイスターを蒸気機関車に変え、中枢コアに装填される。

リアル・ジェネクス・クロキシアン 守備力2000

「せっかくのシンクロモンスターもわがブルーアイズの前では壁にしかならんか」

「どうだろうな？まずはアドバンス召喚したタン・ツイスターがフィールドから墓地へ送られたことで、タン・ツイスターの効果を使うぜ！このカードを除外し、カードを2枚ドロロー！」

コナミがカードを2枚引くとそのうち1枚からクリクリくという鳴き声が聞こえてきた。

「お前は…。一緒に戦ってくれるのか、サンキューな。さらに俺はクロキシアンがシンクロに成功したことで効果を発動！相手フィールドの1番レベルの高いモンスターのコントロールを得るぜ！そしてこの効果は対象を取らねえ！」

「今度は俺のフィールドにモンスター効果をかけてきたか…！しかも俺のフィールドで1番レベルが高いモンスターということとは！」

「ああ、レベル9の蒼眼の銀龍のコントロールは貰った！」

クロキシアンが蒸気を噴き出すと銀龍が白銀の翼を使ってコナミの場へと飛んでくる。

「貴様…！俺のモンスターを…！」

「へっ…こいつの壁を乗り越えられねえなら貰っちゃまえばいいのさ！銀龍の守備力は3000、ブルーアイズでも超えられねえだろ！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP500

フィールド 『リアル・ジエネクス・クロキシアン』（守備表示） 『蒼

眼の銀龍』（守備表示）

セット2

手札2

「俺のモンスターを奪ったことを後悔させてくれる。俺のターン、ドロロー…！どうやらブルーアイズも貴様に対して全力で向かいたいようだ。俺は手札から2枚のマジックカードを発動する、アドバンスドロ、馬の骨の対価！それぞれ細かい所は違うがブルーアイズ1体を墓地に送りカードを2枚ドロローする効果を持つ。俺は2体のブルーアイズを墓地へ送ることでカードを4枚ドロローする！」

「自分からブルーアイズを手放した!？」

「いいや、違うな。これはさらなる高みへと昇華するための儀式だ！

俺は手札から龍ドラゴンズ・ミラーの鏡を発動する！このカードにより俺は墓地のモンスターを除外することでドラゴン族モンスターを融合することができる。俺は3体のブルーアイズを除外！」

カイバーマンが発動した魔法カードから出てきた鏡に3体のブルーアイズが映る。すると鏡が割れて中から3体が合体した龍が出てきた。

「再び姿を現わすがいい！史上最強にして究極のドラゴンよ！」

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン  
青眼の究極竜 攻撃力4500

「しまった…銀龍の守備力が超えられた！」

「ふふ…俺に超えられぬ壁などない。さらに手札のサンダー・ドラゴンの効果を発動する…このカードを墓地へ捨てることでデッキより2枚のサンダー・ドラゴンをわが手中へ加える。さらに融合を発動！手札の2体のサンダー・ドラゴンを融合！雷により全てを支配する龍よ今こそ1つとなれ、融合召喚！そとうのサンダー・ドラゴン 双頭の雷龍！」

3つ首のドラゴンの隣に2つの首からなるドラゴンが現れる。5つの首はコナミのモンスターを目から離さない。

双頭の雷龍 攻撃力2800

「く…攻撃力2800でも十分やべえ！」

「さあ、覚悟はいいか？双頭の雷龍で憎きクロキシアンに攻撃！そして銀龍よ、敵の手に落ちるのならばいっそのこと俺が倒してくれる、アルティメットよ銀龍へ攻撃しろアルティメット・バースト！」

2体のドラゴンの口からエネルギー弾が放たれる、その強力な攻撃になす術なくモンスターを失ってしまう。

「これで貴様には壁モンスターがいなくなった。次のターンで終わるだ」

「まだだ、トラップ発動！時の機械―タイム・マシン！こいつはモンスターが戦闘で破壊された時そのモンスターが破壊された時のコントローラーのフィールドに同じ表示形式でそいつを呼び戻す！」

コナミの発動したトラップから扉の付いた機械が出てくる。その扉が開くと煙とともに銀龍が咆哮をあげて戻ってきた。

蒼眼の銀龍 守備力3000

「そして銀龍が特殊召喚に成功したことで銀龍は破壊と対象に耐性がつくぜ！」

「おのれ…再び俺のモンスターを！だが、次のターンには取り返して

くれる！俺はカードを2枚伏せてターンを終了する！」

カイバーマン LP4000

フィールド 『青眼の究極竜』（攻撃表示） 『双頭の雷龍』（攻撃表示）

セット2

手札0

「このターンでなんとかしねえと銀龍ももうもたねえ……。俺のターン、ドロー！」

コナミがカードを引くとそれはトラップカードだった。だがトラップではすぐに行動を起こすことは出来ない、そう思っていると銀龍が咆哮をあげた。

「ど、どうした銀龍？」

「ちつ：銀龍はスタンバイフェイズに墓地の通常モンスターを呼び戻す効果がある。本来は俺のブルーアイズを蘇生するために使うが：運のいいやつだ」

「：：ナイスだぜ銀龍！俺は銀龍の効果で墓地のジェネクス・コントローラーを特殊召喚だ！さらに俺のフィールドに機械族モンスターがいることでアイアンコールを発動。その効果で墓地のレベル4以下の機械族モンスター、ギガテック・ウルフを特殊召喚！」

咆哮とともに墓地からジェネクス・コントローラーが復活するとその穴からさらにギガテック・ウルフもついてきた。

「精霊のモンスターが2体揃ったか……」

「さあ行くぜ。マイフェイバリットモンスターの登場だ！俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司る者よ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせ、<sup>アリー</sup>A・ジェネクス・トライフォース！」

ジェネクス・コントローラーのアンテナから出た電波がギガテック・ウルフを変形させ、ジェネクス・コントローラーが中枢コアに送り込まれると3つのランプの内オレンジのランプが点灯する。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「だが攻撃力は双頭の雷龍にすら及ばぬ、それでどうする気だ？」

「へっ：足りないなら届かせるんだよ！俺は永続トラップ蘇りし魂を発動してジエネクス・コントローラーを守備表示で特殊召喚させる！  
そして：来てくれクリアクリボー！」

墓地からジエネクス・コントローラーが三たび現れると隣に紫色の毛が周りに生えている丸っこい生き物が現れた。

「どこにもいないと思っていたが、貴様のデッキに入っていたのか：」  
「そしてレベル1のクリアクリボーにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！その鍵爪で敵を打ち払え！シンクロ召喚！味方と協力し敵を討ち倒せ、アームズエイド！」

2体が同調し現れたのは腕の形をしたパーツモンスター。腕だけが浮かんでいる様子は若干シニールである。

アームズ・エイド 攻撃力1800

「シンクロモンスターにしては攻撃力が低い：補助効果を持つモンスターか」

「その通りだ、アームズエイドはモンスターの装備カードになる！そして攻撃力が1000アップし戦闘でモンスターを倒せばその攻撃力分のダメージを与える！さらに炎属性をシンクロ素材にしたライフオースと戦闘でモンスターを倒せばその攻撃力分のダメージを与える効果を持つ、つまり！」

「そのモンスターで双頭の雷龍がやられれば俺は2800の2倍の効果ダメージを受け、ライフが0になる。それが貴様が見出した逆転の策か。」

だが一歩及ばなかったな、トラップ発動無力の証明！このカードは俺の場にレベル7以上のモンスターがいる時レベル5以下のモンスターを全て破壊する！消えろアームズエイド！」

アームズエイドがライフオースに装備される寸前、2体のドラゴンがエネルギー弾を足元に放ち、その衝撃によってアームズエイドは消えてしまう。

「し、しまった……！」

「これで貴様の場には無防備なライフオースが残った。次のター

ン、アルティメットの攻撃が決まればそれで終わりだ」

「くっ…まだ俺は諦めねえ！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP500

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示） 『A・ジエネクス・トライ

フォース』（攻撃表示）

セット1 『蘇りし魂』（使用済み）

手札0

「最後まで諦めないその心意気やよし、俺も全力で貴様を倒させてもらおう。俺のターン、ドロ―！俺は伏せてある速攻魔法次元誘爆を発動する！これにより俺の場の融合モンスター…双頭の雷龍をエクストラデッキに戻すことで互いに除外されているモンスターを2体まで特殊召喚することが出来る！」

双頭の雷龍がその姿を消すと互いのフィールドに次元の裂け目が2つ生まれる。

「カイバーマンが除外したモンスターといえば…くっ。俺はタン・ツイスターとシールド・ウォリアーを守備表示で呼ぶ！」

タン・ツイスター 守備力300

シールド・ウォリアー 守備力1600

「当然俺が呼び戻すのは…2体のブルーアイズ！」

アルティメットドラゴンの両隣に2体のブルーアイズが帰還する。その光景はまさに圧巻だ。

青眼の白龍×2 攻撃力3000

「貴様が最後の希望を託しているその伏せカード…そのカードは恐らくトライフォースへの攻撃に対して使うことの出来る迎撃のカード！

ならば俺は手札からこのカードを発動する。マジックカード滅びの爆裂疾風弾！」

「ブルーアイズの攻撃名と同じ魔法カードだ?!」

「このカードは青眼の白龍が俺の場にいることが条件となり発動が可能になる。このターンの青眼の白龍の攻撃を放棄する代わりに貴様

のモンスターを全て破壊する！銀龍もはや破壊耐性は消えている  
…やれブルーアイスよ！」

「な…!？」

2体のブルーアイズがエネルギー弾を拡散させコナミの場のモンスターを全て消滅させてしまう。

（俺が伏せているカードは魂の一撃、俺のライフが4000以下の時  
モンスターの攻撃宣言時にライフを半分払うことで4000からラ  
イフを引いた分の数値を俺のモンスター1体に加える俺の切り札だ  
…。だがモンスターがいなくちゃ使えねえ！）

「青眼の白龍は攻撃できない、だが俺の場にはアルティメットがいる  
…。これで終わりだ。アルティメットドラゴンでダイレクトアタ  
ック！」

「く…ダメか…?」

アルティメットによる3つ首から放たれるエネルギーがコナミを  
直撃する直前、突然目の前に現れて攻撃を止めるものがいた。

「何…?」

「お前は…クリアクリボー…!…そうか!俺は墓地のクリアクリボーの  
効果を発動!相手がダイレクトアタックしてきた時に墓地のクリア  
クリボーを除外することで俺はカードを1枚ドロウする!そしてそ  
のカードがモンスターならばそいつを特殊召喚し、そのモンスターに  
攻撃を誘導する!」

「まだあがくか…!だがどんなモンスターを引こうともアルティメッ  
トの攻撃は耐えられまい」

「いいや、再び墓地に送られたシールド・ウォリアーを除外すれば戦闘  
破壊を防ぐことができるぜ!」

「…!面白い、ならば引いてみるがいい。俺と貴様どちらが運命の女  
神に愛されているか試そうではないか」

「ああ!頼むぜ、俺のデッキ。カイバーマンは強い、もしかしたら遊星  
やジャックでも勝てねえかもしれない。そんな奴に…俺は勝ちたい  
!行くぜ…ドロウ…!」

コナミは想いを込めてカードを引く。引いたカードを彩っていた



のは…紫。コナミの引いたカードは無情にもトラップカード、シンクロ・スピリッツだった。

「くっ…そおおお！」

「どうやらモンスターを引けなかったようだな。…悔しいか？」

「ああ、すげえ悔しい！」

「その悔しさを忘れるな、その想いは貴様の成長の糧となる。貴様の歩んできたデュエル道などまだ入り口にすら来ていない。世界は広い、貴様の知らぬデュエリストなど山ほどいる。貴様にも見えるはずだ果てしなく続く戦いのロードが！だが恐怖などという下らぬ感情に縛られ負けを恐れてしまえば立ち止まる他はない。負けて勝て、それが貴様の未来となるのだ」

「カイバーマン…」

「ゆくぞ、アルティメットドラゴンのダイレクトアタック！強靱、無敵、最強！粉碎、玉砕、大喝采イー！」

アルティメットドラゴンから放たれるエネルギー弾がコナミへと直撃する。コナミはそれを真正面から受け止めた。

そして…デュエルの決着がつく。

コナミ LP500↓0

「負けたか…。だけどなんだろうな。デュエルを始める前より気が楽になった気がするぜ。ありがとなカイバーマン」

「貴様に礼を言われる筋合いなどない。それよりデュエルは終わったのだ。質問に答えてやろう。まずここは精霊界だ、俺たち精霊が住んでいる場所で普段人間に干渉されることはない」

「ん…？俺たち？ってことはカイバーマンって精霊だったのか!？」

「そうだ。そして俺は万が一の時のためにこのあたりの精霊を守っている、侵攻を受けぬようにな。だが別の場所の精霊がダークシグナーと呼ばれるものに侵攻を受けた。俺はこいつらを守るためにここを動けん。だから精霊がついている貴様とシグナーの小娘を呼び寄せたというわけだ」

「そうだ…龍可は今どうしてるんだ？」

「あの小娘なら大魔導師トルンカとともにシグナーのドラゴン、エン

シエント・フェアリー・ドラゴンの封印を解きにいつている。だが  
ダークシグナーによってエンシエント・フェアリーの封印を解いても  
力が戻らぬようにされてしまっている」

「え？それじゃどうするんだよー！」

「何のために貴様を呼んだと思っっている？エンシエント・フェアリー  
を解放するには封印を解くのもう一つ、その片翼とも言えるエン  
シエント・ホーリー・ワイバーンの封印を解く必要があるのだ。貴様  
にはそいつの封印を解いてもらう」

「なるほどな…分かったぜ。シグナーのドラゴンを自由にするために  
エンシエント・ホーリー・ワイバーンとやらの封印を俺が解いてくれ  
ばいいわけだな」

「そうだ、だが簡単にはいかぬ。ダークシグナーもそれを守るための  
防御策を弄しているはずだ。貴様がそれに立ち向かえるか先ほどの  
デュエルでテストしてやったというわけだ」

「うっ…結果は？」

「まあ及第点をくれてやろう。はなから俺に勝てるデュエリストなど  
いないからな。だが俺に1ポイントのダメージも与えられない貴様  
がそのまま乗り込めば俺の方が不安だ、このカードを受け取れ！」

そう言うとカイバーマンはコナミに1枚のカードを投げる。そし  
てそのカードをキャッチしたコナミは何のカードか確認した。

「これは…蒼眼の銀龍?!いいのか…大事なカードだろ？」

「貴様との共闘で僅かながら絆が芽生えたらしい、連れて行け」

「分かった…ありがたく使わせてもらうぜ」

「さて…今から貴様をエンシエント・ホーリー・ワイバーンが封印され  
ている場所に転送する。いいな？」

そう言うとカイバーマンは亜空間物質転送装置のカードを取り出  
し、コナミへと向ける。

「ああ。エンシエント・ホーリー・ワイバーンの封印を解いてくるぜ、  
それがシグナーのためにもなるんだ」

「いいだろう、この先どんな目にあっても恐れずデッキを信じて立ち  
向かうことだな。行くぞ、亜空間物質転送装置発動！」

カイバーマンがカードの発動を宣言するとコナミは飛ばされていく。コナミはカイバーマンの言葉を胸に一時的に意識を飛ばすのであった。

## 明日を作るのは憎しみじゃない

カイバーマンの亜空間物質転送装置によってコナミが飛ばされた先、それは広い大地に1つ佇んでいる大きな牢の前だった。その中には龍のような姿が見えるが牢に繋がっている複数の鎖によって動きを封じられている。

「これが…エンシエント・ホーリー・ワイバーンか。この牢から出してやらないとな」

牢に近づくコナミ、だがその前に手にカースド・ニードルと呼ばれる杖を持った人型の猿が道を塞ぐ。

「そうはさせんぞ！シグナーの回し者め、エンシエント・フェアリーを解放されてしまった今…こいつの封印まで解かせるわけにはいかぬ！」

「…龍可はエンシエント・フェアリーを解放出来たみたいだな。悪いがそいつの封印も解かせてもらうぜ、俺とデュエルだ！」

「いいだろう。我が名はゼーマン、デイマク様の命により貴様を倒す。だが精霊世界のデュエルは現実世界のデュエルとリンクする。今デイマク様がシグナーの双子とデュエルを行っている…これを見るがいい！」

ゼーマンが手をかざすとそこでは龍亜に変わって龍可がダークシグナーのデイマクとの戦いを引き継ぐ映像が見える。だがデイマクの発動した呪縛牢によりエンシエント・フェアリーの能力が縛られてしまった。

「くっ…エンシエント・ホーリーの封印を解かねえとエンシエント・フェアリーが解放されないんだったな。このデュエルで何とか解放しねえと…。だが、やることは単純だ！リンクするっていうなら俺がお前に勝てばあいつらも有利になるだろ！」

「そう上手くいくかな？…このリンクにより私は今のデイマク様と同等の力を使うことが出来る…そう地縛神もな」

「地縛神…遊星が再会した時に話してくれたな。そいつを召喚させねえようにしないと…」

互いに距離を取りデュエルディスクを構える。

「デュエル！」

先攻のランプがついたのはコナミ、早く封印を解くために手早くターンを進める。

「俺のターン、俺はモンスターをセットしてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット0

手札5

「それだけか、ならば私のターン。私はファイターズ・エイプを召喚する」

戦いに飢えたゴリラが勢いよく地面に着地する。

ファイターズ・エイプ 攻撃力1900

「ファイターズ・エイプでそのセットモンスターに攻撃！」

「伏せていたのはUFOTートルだ、破壊されるぜ！」

円盤を背負った亀にゴリラの重いパンチが炸裂する。

「だがUFOTートルが破壊されたことでデッキからギガテック・ウルフを特殊召喚だ！」

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「こちららもファイターズ・エイプの効果を発動！戦闘で相手モンスターを破壊するたびに攻撃力が300アップする！」

ゴリラが自らの胸を叩き自分の力を誇示する。

ファイターズ・エイプ 攻撃力1900↓2200

「下級で攻撃力2000を超えた…！だけどさっきのカイバーマンとの戦いで3000がポンポン出てくるのを見てきたんだよ、今更その程度でビビるか！」

「その強がりがいつまでもつか…。私はカードを2枚伏せてターンエンド」

ゼーマン LP4000

フィールド 『ファイターズ・エイプ』（攻撃表示）

セット2

### 手札3

「行くぜ俺のターン、ドロー！俺は手札からチューナーモンスター、ジエネクス・コントローラーを召喚だ！」

左右にアンテナがついたロボットがコナミの場に現れた。

「俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司る者よ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせ、<sup>アーリー</sup>A・ジエネクス・トライフォース！」

ジエネクス・コントローラーの電波によりギガテック・ウルフが変形し、その中枢コアにジエネクス・コントローラー自身が送られる。さらに3つのランプの内オレンジのランプが点灯した。

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

「この瞬間トランプカード、チューナー・キャプチャーを発動。シンクロに使用したチューナーをこちらの場に特殊召喚する！」

マジックアームによってジエネクス・コントローラーがゼーマンのフィールドに引きずり込まれる。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「何…だがトライフォースの効果を含めて一気にダメージを与えてやる！トライフォースでファイターズ・エイプに攻撃！」

「甘いぞ。我は伏せていた攻撃の無力化によりバトルフェイズを終了させる」

「くっ…カードを2枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP4000

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）

セット2

手札3

「行くぞ、私のターン！我はレベル4のファイターズ・エイプにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！暗黒より生まれし者、万物を負の世界へと誘う覇者となれ！シンクロ召喚！出でよ我が分身、猿魔王ゼーマン！」

2体が同調するとゼーマンとほぼ同じ姿をしたモンスターが現れ

た。

猿魔王ゼーマン 攻撃力2500

「何…確か遊星がいうにはダークシンクグナーはダークシンクロと地縛神を使ってくるって言うってたはず…。お前がデイマクと同じならダークシンクロを使うんじゃないのか！」

「チツ…ダークシンクロによってデイマク様が呼び出した我が分身はあの緑髪の少年の機械龍にやられてしまった」

「マジか…サンキュー龍亜！」

「だがダークシンクロでなくとも我が分身の力を見せてくれよう、私はフィールド魔法、クローザー・フォレストを発動！このカードの効力により私の墓地に存在するモンスター1体につき私の獣族モンスター1体の攻撃力が1000アップする！」

猿魔王ゼーマン 攻撃力2500↓2600

「くっ…トライフォースの攻撃力を超えてきやがったか！」

「バトルだ、ゼーマンでトライフォースに攻撃！」

「なんてな！トラップカードオーブ…発動しねえ!？」

「そんな策略は通じぬ、ゼーマンが攻撃するとき相手は魔法・罠を発動することはできない！」

「なんだと!？」

手札の杖から出てきた闇がコナミの伏せカードを覆い隠す。そしてその闇はトライフォースをも包み込み、破壊した。

コナミ LP4000↓3900

「我はカードを2枚伏せてターンを終える」

ゼーマン LP4000

フィールド 『猿魔王ゼーマン』（攻撃表示）

セット1 『クローザー・フォレスト』

手札1

「俺のターン…よし、俺は伏せていた永続トラップ蘇りし魂を発動だ！この効果で墓地のジェネクス・コントローラーを守備表示で特殊召喚！さらにアイアン・コールを発動、墓地の機械族モンスター1体ギガテック・ウルフを召喚だ！」

コナミの場に空いた2つの穴から2体のモンスターが蘇る。

ジエネクス・コントローラー 守備力1200

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「無駄な足掻きだ…：そいつらでは届かぬ」

「まだ俺はこのターン通常召喚をしてないぜ、来てくれファイヤー・アイ！」

目の上のまつげのあたりが炎で燃えている目玉モンスターが現れた。

ファイヤー・アイ 攻撃力800

「使わせてもらうぜカイバーマン！俺はレベル2のファイヤー・アイとレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

白銀の翼と濃い青の瞳を持つドラゴンがコナミの場に飛翔する。

蒼眼の銀龍 攻撃力2500

「なんだ…：この力は。シグナーの龍にも匹敵する圧力を感じる！」

「へっ…：俺もこの圧力を感じたときはビビったぜ。特殊召喚に成功したことで蒼眼の銀龍の効果発動、銀龍は次のターンのエンドフェイズまで効果の対象にならず効果では破壊されねえ！」

「なんだと!?!」

「だがその効果が適用される前にトラップカードシンクロ・ストライク発動！銀龍のシンクロ素材にしたモンスター×500の数値分エンドフェイズまで攻撃力を上げる！」

墓地のモンスターの力を引き継ぎ銀龍は咆哮をあげる。

蒼眼の銀龍 攻撃力2500↓4000

「行け、銀龍！白銀のバーストストリーム！」

「くっ…：だがゼーマンは手札かフィールドのモンスターを墓地に送ることでその攻撃を無効に…：しまった。この効果は対象を取る！」

「へっ…：銀龍は効果の対象にならねえんだよ！」

銀龍から発射されたエネルギー弾はゼーマンを貫く。

ゼーマン LP4000↓2600



「くっ…だがトラップ発動ダーク・マター！我がのシンクロモンスターが戦闘で破壊されたときデッキの上から2枚のカードをめくり攻守0のモンスター扱いとして我がフィールドにセットする！我はデッキの魔法カードポイズン・ファングとトラップカード吠え猛る大地をセット！」

裏側守備表示×2 守備力0

「2体のモンスターにフィールド魔法…しまったこの条件は！」

「くく…ターンを終えるがいい」

「ちい…俺はカードを2枚セット！これでターンエンドだ！銀龍の攻撃力は元に戻る！」

蒼眼の銀龍 攻撃力4000↓2500

コナミ LP3900

フィールド 『蒼眼の銀龍』（攻撃表示）

セット2 蘇りし魂（使用済み）

手札0

「我がのターン、ドロー。…赤帽子よ、この広大な大地にこの牢以外に何も無いのを不思議に思わなかったか？」

「ああ、ここは精霊界なんだから精霊がもう少しいてもいいんじゃないかとは思ったけどよ…。それがなんだ？」

「その答えはこれだ…。我は2体のモンスターと…我が幽閉し精霊たちの魂を生贄とし、地縛神Cusilluを召喚する！」

「なんだと!？」

ゼーマンによって捕らえられてしまった精霊たちの魂が天に捧げられ、巨大な猿のモンスターが現れた。そして時を同じくして龍可たちの前にもこの精霊を糧とした同じモンスターが現れたのであった。

## コナミのドラゴンは天使族だけどね

精霊達の生命エネルギーを糧として巨大な猿型モンスターがコナミと龍可達の前に現れた。

「精霊達が消えた…。おい、精霊達に何しやがった！」

「崇高なる地縛神の生贄になったのだ…。どうやらディマク様もあちらの現実世界で召喚されたようだな。お前達はこの地縛神に敗れ去るのだ！さあデュエルを続行するぞ、フィールド魔法クローザー・フォレストにより我の墓地のモンスターの数だけ地縛神 C u s s i l l u の攻撃力がアップする！今我の墓地には2体のモンスターがいる！」

フィールド魔法からエネルギーを吸い取り地縛神が僅かに大きくなる。

地縛神 C u s s i l l u 攻撃力2800↓3000

「そして地縛神はフィールド魔法がある限り相手プレイヤーにダイレクトアタックできる…」

「こ、攻撃力3000でダイレクトアタックだと!?なんじゃそりや!」  
「だが、相手モンスターは地縛神を攻撃対象にすることはできない…つまり次のターン攻撃されれば残る対象は我自身。よって、まずはそのドラゴンから倒すでしょう…厄介な能力も持っていないそうだしな。やれ地縛神 C u s s i l l u よ、ドラゴンを消滅させよ！」

巨大な猿型モンスターがゆっくりと歩き、銀龍をそのまま踏み潰そうとする。

「やらせるかよ!トラップカード リバーサル・ワールド 反転世界発動だ!こいつの効果でフィールドの全ての効果モンスターの攻撃力と守備力が逆転する!お前の地縛神の守備力は2400、銀龍は3000!これで形勢は逆転だ!」

コナミがトラップを発動すると時空が歪み、まるで鏡に映ったような世界へと変わる。だがその中でも地縛神は動きを変えないことになった。

「馬鹿め!フィールド魔法がある限り地縛神は相手の魔法・罠カード

の効果を受け付けない！」

「は!?嘘だろー！」

反転世界の影響で銀龍はコナミを守護するように広げていた翼を地縛神へと向けた。

蒼眼の銀龍 攻撃力25000↓3000

「ち…だが攻撃力は同じ、相打ちだ！」

「そうはさせぬ！永続トラップ呪縛牢を発動する！このカードの効力により我のエクストラデッキのシンクロモンスターを効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！我が呼び出すのは…エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

「なんだとー！」

ゼーマンの後ろに置かれていた呪縛牢が消えたかと思うと突然ゼーマンのフィールドに出てきた。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 守備力2000

「く…待ってろよ。もう少しでそこから出してやるからな！エンシエント・ホーリー・ワイバーンが現れても攻撃は止まらねえ、いけ銀龍！白銀のバーストストリーム！」

踏み潰そうとする地縛神に対して普段のものより巨大化したエネルギー弾を放つ銀龍。エネルギー弾と地縛神の衝突によって2体は爆風に包み込まれた。

「銀龍もやられちゃったが…これで地縛神は消えたはずだ」

「果たしてそうかな？」

爆風が晴れる。するとそこには地縛神C u s i l l uの姿があった。

「な…なんで倒れてないんだ！」

「C u s i l l uにはまだ隠された能力があったのだ。自身が戦闘で破壊される時、代わりに我のフィールドのモンスターを生贄にすることで身代わりにすることができるとな！我はこの効果でエンシエント・ホーリーを生贄にしていたのだ！さらに、この効果を適用した場合相手のライフは半分になる！」

「…やべえ!？」

地縛神 C u s i l l u が地面を強く蹴るとそこから地割れが発生し、コナミの周りの地面を根こそぎ砕く。咄嗟に横の地面に移動するコナミだったがいくつかの岩の破片が勢いよくコナミの顔をかすめ、頬から血を垂らさせた。

コナミ LP3900↓1950

「これでお前のライフは1950、次のターン地縛神のダイレクトアタックで終わりだ！」

「へっ…だがお前は大事なことを2つ忘れてるぜ！1つは俺が地縛神をすり抜けて直接攻撃出来ること！そしてもう1つは地縛神を守るためにエンシエント・ホーリーを呪縛牢から解放しちまったことだ！エンシエント・ホーリーが生贄にされフィールドから離れたことで呪縛牢が破壊される！」

呪縛牢によって捕らえられていたドラゴンは地縛神によって消えてしまい、対象がいなくなったことで牢が自然に消滅していく。

「ちっ…だがこのデュエルで勝てばもう1度封印できる。些細なことだ」

「どうかな？龍可達の状況を見るんだな！」

龍可達の様子を見てみるとエンシエント・フェアリー・ドラゴンが呪縛牢から解放され、龍可が発動したトラップカードリスペクト・シンクロンによって龍可の場のパワー・ツール・ドラゴンの隣に並び立つ。その姿は一片の汚れもなく万全の状態で降り立っていた。

「く…まさか2体のドラゴンの封印が同時に解かれるとは！」

そしてエンシエント・フェアリーが龍可の場に降り立つとほぼ同時にコナミに語りかける声があった。

「あなたが…カイバーマンの命で私を助けてくださった方ですね。その行いに感謝します」

「…!?え、エンシエント・ホーリー・ワイバーンか？お前精霊なのに話すことが…いや、カイバーマンも精霊だけじゃべってたな…」

「ええ、私は人間と意思疎通を行うことが出来ます。そして助けてくだされた方に重ね重ねお願いして申し訳ないのですが、地縛神によって生贄にされてしまった精霊達もお助け願えませんか？」

「もちろん助けられるなら助けたいけど…どうやって?」

「あの地縛神は精霊の生命エネルギーのいわば塊です。地縛神さえ消滅させられればその生命エネルギーを私が精霊の元に送り届けることが出来ます」

「デュエルに勝てば地縛神も消えるはずだ…よし、任せとけ!」

「ありがとうございます。私もあなたの力になりましたよう」

そう聞こえたかと思うとコナミのエクストラデッキに1つの光が差し込まれた。コナミはそのカードを確認する。

「お前自身が協力してくれるなら頼りになるぜ!…だけどお前のカードはあいつの墓地にあるんじゃないかなかったか?」

「あのカードは魂の牢獄と言っています。先ほどまでは私の魂が呪縛牢によってあのカードに封印されていたのです」

「そうなのか」

「おい!いつまで我を待たせる気だ!」

コナミがエンシエント・ホーリーと話していると痺れを切らしたゼーマンが怒鳴ってくる。

「おっと…話はこのデュエルに勝ってからだ!トラップ発動、時の機械・タイム・マシーン発動!このカードの効果で今戦闘で破壊された銀龍を俺のフィールドに呼び戻す!さらに銀龍は自身の効果で次のターンのエンドフェイズまで破壊と対象に耐性がつくぜ!」

蒼眼の銀龍 攻撃力2500

コナミのトラップから出てきた機械の扉から煙を突っ切り白銀の龍が呼び戻される。

「ちっ…しぶといヤツめ。私もクローザー・フォレストの効果を発動する。墓地にエンシエント・ホーリーが置かれたことでCusilluの攻撃力がさらに100アップする!我はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

地縛神Cusillu 攻撃力3000↓3100

ゼーマン LP2600

フィールド 『地縛神Cusillu』(攻撃表示)  
セット1

手札0

「俺のターン、ドローだ！このスタンバイフェイズに銀龍の効果が発動するぜ。墓地の通常モンスターを1体特殊召喚できる…俺が選ぶのは攻撃力が一番高いジェネクス・コントローラー！」

銀龍が咆哮をあげるとフィールドに穴があき、そこからジェネクス・コントローラーが出てきた。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「俺の場の2体の攻撃力の合計は3900！お前のライフは2600…これで終わらせてやるぜ！俺はジェネクス・コントローラーで攻撃！対象はもちろんお前自身だ！」

ジェネクス・コントローラーが地縛神をすり抜けてゼーマンに直接体当たりを仕掛ける。

「馬鹿め…お前がそうくるのを待っていたのだよ！我は永続トラップ鎮守の煌画こうがを発動！このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動でき、攻撃対象を地縛神へのものですることが出来る！」

「なっ…しまった！」

ジェネクス・コントローラーが体当たりした先は無謀にも地縛神、攻撃など全くきかず反撃をくらい跡形もなく破壊される。そして地縛神の攻撃の衝撃がコナミにも響いた。

「ぐあっ…い…こ、これ以上はシャレにならねえ…！」

コナミ LP1950↓250

「地縛神の唯一の弱点をカバーした今、貴様に勝機はない。サレンドーでもすれば命だけは見逃してやるぞ？」

「誰がそんなことするかよ！俺はメインフェイズ2に入ってマジック・プランターを発動する！俺の場に残ってる永続トラップカード、蘇りし魂を墓地に送ってカードを2枚引く…銀龍を守備表示にしてカードを2枚伏せる！これでターンエンドだ！」

コナミ LP250

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示）

セット2

手札0

「我のターン！さあ終わりだ…赤帽子よ。トドメを刺せ、地縛神 C u s i l l u よ…ダイレクトアタックだ！」

地縛神の一撃がコナミを踏み潰す。その衝撃で周りの地面はクレーターのようへこんでいる。

「地縛神に魔法・罫は効かない。これを防ぐすべはあるまい」

「…いや、そうでもないぜ！」

コナミの周りの地面は衝撃でへこんでいたがコナミのいた場所だけはへこんでいなかった。その理由は単純だった。

「トラップカード、ガード・ブロッカー！このカードは戦闘での俺へのダメージを0にしてカードを1枚ドロウできる！地縛神にトラップが効かなくてもダメージだけなら防げるんだよ！」

「なに…チツ。このターンは仕留め損なつたか。だが、そう何回も上手くはいくまい。我はこれでターンエンド！」

（確かに…それだけはやつと言う通りだ。俺が今引いたカードはツイスター…、こいつは相手の場の表側表示の魔法・罫を1枚破壊できるがライフを500払わねえと使えねえ。…次のターンが勝負だ！）

ゼーマン LP2600

フィールド 『地縛神 C u s i l l u』（攻撃表示）

セット0 『鎮守の煌画』

手札1

コナミは目を閉じ、デッキの1番上のカードを引く構えに入る。彼はカイバーマンに教わった、いついかなる時もデッキを信じて前に進めと。コナミは最後のドロウとなるであろうカードを信じてカードを引く。

「ドロウ…待ってたぜ！俺は銀龍の効果を発動だ、蘇らせるのは…ギガテック・ウルフ！」

銀龍の雄叫びによりギガテック・ウルフが舞い戻る。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「今更お前に何ができるー！」

「この状況を逆転することができるのさ！俺は手札からチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを召喚！」

銀龍に比べるとあまりにも小さな羽根を持つ天使型のモンスターがフィールドを舞う。

「行くぜ…お前の出番だ！俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

白い胴体は長く、その長さは天にも届くかというほど。銀龍とはまた違った神々しさを感ずるドラゴンがコナミの場に現れた。

「…馬鹿め！そいつの効果を知らないのか？自分のライフが相手より下回っている時、その分攻撃力が下がる！我とお前のライフの差は2350！」

エンシエント・ホーリーの天にも届きそうな胴体がみるみるうちに縮んでいく。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓0

「ははは！攻撃力0で何ができる！」

「へっ…知らないのか？攻撃力0を攻撃表示で出すつてのは策があるってことなんだよ！俺は銀龍を攻撃表示に変更！そしてバトルだ！俺はエンシエント・ホーリー・ワイバーンでゼーマンにダイレクトアタック！」

「ハッターリを！これで終わりだ、鎮守の焔画によって攻撃の対象は地縛神へと変更される！」

地縛神にエンシエント・ホーリーが向かっていく、その体格差は明らかだ。

「行くぜ、エンシエント・ホーリー！」

「ええ、お願いします！」

「俺はトラップカード、あまのじやくの呪いを発動！このカードの効果でエンドフェイズまで攻撃力を上げる効果は下げる効果に、下げる効果は上げる効果になる！」

「なっ…なにいに！」

縮んでいたエンシエント・ホーリーの胴体が元の姿を超え、天をも貫く。対して地縛神はその姿をわずかといえ小さくする。



エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力0↓4450

地縛神C u s i l l u 攻撃力3100↓2500

「しまった…クローザー・フォレストの効果も逆転して…!？」

「行けエンシエント・ホーリー！エターナル・ライフ！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーンの体が光って地縛神を完全に包み込む。その光は地縛神の生命エネルギーを吸収し、精霊たちへ送られていく。やがて地縛神は消滅してしまった。

ゼーマン LP2600↓650

「ああ…やめろ！私に攻撃するな！」

「お前は精霊の命を踏みにじった、今更命乞いなんて許されるわけねえだろ！銀龍でダイレクトアタック、白銀のバーストストリーム！」

銀龍から放たれるエネルギー弾はゼーマンに直撃し、そのライフを0にした。

ゼーマン LP650↓0

時を同じくして現実世界でも龍亜と龍可のパワー・ツールとエンシエント・フェアリーの攻撃によって地縛神は消滅し、デイマクのライフを0にしたのであった。

さあ踊れ、死のワルツをなあ！

銀龍の攻撃が決まったことでゼーマンは消滅し、地縛神を倒したことで生命エネルギーが解放される。エンシエント・ホーリー・ワイバーンは自分を囲むようにエネルギーを光として吸収し、それを精霊の元に拡散させた。かくして生贄にされた精霊たちは元に戻り、先ほどまで邪悪な牢しかなかった大地にも精霊たちが戻った影響なのか花が咲き誇り見るも美しい花園となる。

「これがここ本来の精霊界の雰囲気か…」

「ええ。ダークシグナーの使いで現れたゼーマンに不覚を取り私が封印されてしまったことで精霊たちは自由を失い、やがて地縛神の生贄とされるのを避けるために細々と生活するほかなかったのです。あなたには感謝してもしきれません」

エンシエント・ホーリーが元に戻った精霊界の活気を見て改めてコナミに礼を言う。

「まあ礼ならカイバーマンに言ってくれ。俺がお前らを助けられたのはあいつのおかげだ」

「ふふ…謙虚なのですね」

「エンシエント・ホーリー、龍可達はどうなったか分かるか？」

「エンシエント・フェアリーから伝わってきた限りではデュエルに勝利し、相手のダークシグナーも消滅したとのことですよ」

「そっか。良かった」

肩に乗っているジエネクス・コントローラーと膝に寄りかかっているギガテック・ウルフを労いながら次にどうするべきかを考える。

「思えば俺は遊星を助けるために来たのに龍可達について行ったのは…怖かったからかもな。遊星が話してくれた…遊星が戦うべきダークシグナーはあの鬼柳だよ」

「お知り合いの方なのですか…」

「ああ、俺たちの恩人なんだ。あいつがいなかったら俺はずっとサテライトで腑抜けてたかもしれない。あいつがダークシグナーになった理由は分からねえ…だけどあいつが苦しんでいるなら助けたい。」

俺もそいつに向き合いたいんだ」

「…あなたは知っていますか？ダークシグナーとは1度死んだ存在なのです。1度冥界へと送られる魂がこの世に強い未練がある場合、ダークシグナーとしての生を与えられるのです」

エンシエント・ホーリーから告げられた事実、それはコナミにとつてあまりに衝撃的だった。

「…!?嘘だろ…。確かに鬼柳があこの事件で捕まった後俺たちは何回も面会に行った。だけど会わせてもらえなかった…チクシヨウ！そういうことか！」

コナミは恩人の死に打ちひしがれ、拳を震わせる。拳が震えるのは恐怖か、それとも守れなかったことへの後悔か。

「遊星…多分あいつはゴドウインに説明を受けて知っているはずだ。あいつは1人でそれに立ち向かおうっていうのか…馬鹿野郎！ゼロ・リバースのことといいあいつは何でもかんでも背負いこみすぎだ！エンシエント・フェアリー、俺を現実世界に戻してくれ！」

「分かりました。…どうか龍可達の支えになったようにそのシグナーの方の支えとなってあげて下さい」

「ああ…もちろんだ。とりあえず遊星に追いつくにはDホイールしかねえ、マーサハウスの前に停めてある幸子のヘリの中に入ってるはずだ。マーサハウスの所まで戻してくれるか？」

エンシエント・ホーリーは頷くとコナミをその翼で包み込み、光と変えて現実世界へと飛ばす。コナミの目にあつたのは恐怖ではなく2人を助けたいという純粋な思いだった。

コナミが精霊界から現実世界に帰ってくる頃、ダークシグナーのボマーとクロウとのデュエルが行われていた。そこに合流した遊星は2人のデュエルを見届けていた。ボマーは故郷の村を滅ぼされた恨みからダークシグナーとなりその復讐を果たすために蘇ったのだが、地縛神の召喚の際に要した生贄が故郷の村の人々だったことに気付き復讐すべきはシグナーではないと判断してサレンダーをしようとした。だが、冥界の王と名乗る者に体を奪われデュエルを強制的に続行させられてしまう。辛くもクロウが勝利するがそれによってボ

マーは消滅してしまおう。ダークシグナーとの戦いの辛さを感じながら遊星は鬼柳の待つエリアへと向かうのであった。そして…。

「待ってたぜ遊星…今度こそ貴様に味わってもらうぜえ？かつてこの俺が味わった辛酸の一雫までなあ！」

「鬼柳…俺は！」

「へっ…言いたいことがあるならデュエルで言いな。このシグナーとダークシグナーとの闇のデュエルでなあ！」

鬼柳がダークシグナーの痣をかざすと紫の炎で地上絵のようなコースが出来上がる。

（鬼柳…お前はこんなことをする奴じゃなかった。お前はもつと人を思いやっていた…！）

遊星が思い出したのはかつてチームサティスフアクションと他グループとの抗争でビルの上から突き落とされそうになった遊星を鬼柳が危険を顧みずに助けてくれたこと。彼の心を取り戻すため遊星は戦う。

「さあ…始めようか？…ん？」

そこに横の高台からDホイールをジャンプさせ炎の中に入り込む者がいた。

「コナミ…どうしてここに！」

「コナミ…!?こりやいい！チームサティスフアクションのラストデュエルには丁度いいじゃねえか！お前がデュエルできるようになったのは知ってるんだよお！」

コナミはDホイールを走らせデュエルが始まる前に何とか遊星と鬼柳の下にたどり着くことが出来た。

「鬼柳…お前は勘違いしてる！遊星のことを！」

「勘違いだあ…？ああ、してたさ。まさかこの俺を裏切るとはなあ！」

コナミが必死に説得するも鬼柳は聞く耳を持たない。それどころか、臨戦態勢に入っている。

「2人で来いよ…最高のラストデュエルにしようじゃねえか！ひやははは！」

彼の遊星へのある恨み、それは口でどうにかできるほど生半可なも

のではなかった。

「コナミ…このデュエルは危険だ！早く外に…！」

「いや、俺は出ねえぜ！お前1人に背負わせるわけにはいかねえ！」

遊星が外に出るように指示するもコナミは遊星を支えるために来たため引く道理もなかった。

「コナミ…。分かった。俺と一緒に戦ってくれ」

「話はまとまったかあ？だけどそのまま2対1ってのはさすがに都合がいいよなあ？1つハンデをもらうぜ！」

「ハンデ…手札を倍にでもするのか？」

「手札あ？いらねえよ！ルールはタッグフォースルール、そして俺のターンはお前らのターンが終わるたびにもらうぜ。それならいいだろ？」

鬼柳の提案したのは変則のタッグデュエル、遊星がターンを終えれば鬼柳のターン。それが終わればコナミ、そして鬼柳とターンを交代していくものである。

「さあ行くぜ遊星、コナミ！俺たちチームサテイスフアクションのラストデュエル！華麗に踊るんだな、死のワルツをよお！」

3人はスピードワールドを起動し、Dホイールを走らせる準備に入る。こうして3人の戦いが始まるのであった。

ワルツは…苦手だな

チームサテイスファクションはリーダーの鬼柳が立ち上げたチームで遊星、クロウ、ジャック、コナミをメンバーに加えサテライトの統一を目的として作られた。

彼らはサテライトの統一という目的を果たすためにとっても充実した日々を送っていたが最後のエリアを統一したことでの目的を果たしてしまい、その後は鬼柳の命令で残党狩りという名目でデュエルディスクを付けている者を無闇に襲うようになった。だが、ただデュエルで楽しんでいる人を襲うことばかりでジャックとクロウはそのことに耐えかねてチームを抜けてしまう。

遊星とコナミはそれでも鬼柳を見捨てることが出来なかった。だがセキュリテイがデュエルギャングの逮捕のためにDホイールを開発したことがきっかけとなり鬼柳がチームサテイスファクションの最後の敵をセキュリテイだと認定し、鬼柳は遊星とコナミにセキュリテイを潰すことがチームサテイスファクションのラストデュエルだと訴えかけた。

遊星とコナミはあまりに強大なセキュリテイに突っ込もうとしている鬼柳を諦めさせるために1人ならそんな無謀なことはいらないだろうと判断してチームを抜けた。

だが…鬼柳は弾けた。

鬼柳は1人でセキュリテイ本部を襲い、そのことが理由となりセキュリテイに追われる身になってしまった。そのことを知った遊星達は鬼柳の元に集まる。鬼柳は一緒に戦ってくれるとぬか喜びするも彼らはセキュリテイと戦う気はなく、それでも鬼柳は仲間だからセキュリテイから逃がしたいと伝えた。

セキュリテイによって立てこもっていた廃ビルから追い出され鬼柳は1人のセキュリテイに追い詰められてしまう。鬼柳はとっさにDホイールに飛びかかりそのDホイールを暴走させ、クラッシュさせた。そのDホイールに乗っていたセキュリテイは重傷を負っていたがセキュリテイを潰すことに捉われた鬼柳はさらに追撃を与えよう

とする。

しかし、駆けつけた遊星とコナミに間一髪止められた。

その後駆けつけたジャックとクロウと共に一時的に身を隠す彼らだったが見つかるのは時間の問題だった。そこで遊星は鬼柳を3人に任せ、ある選択をした。

遊星はあえて自らセキュリティの前に出て自分がサティスファクションのリーダーと告げ、本部を襲ったのは自分で他の4人は関係ないと言い鬼柳の代わりに捕まろうとする。

…が、既に鬼柳達が隠れていた場所は見つかかり鬼柳も逮捕されてしまっていた。己の無力さを嘆く遊星にセキュリティの警官の1人がセキュリティを襲った彼の罪は重く2度と会えないであろうことを告げるとセキュリティに刃向かった報いだと言わんばかりに肩を叩いた。

不幸にもその会話は聞こえずセキュリティの警官に遊星が肩を叩かれた所を目撃した鬼柳は遊星が自分をセキュリティに売ったと誤解し、遊星に憎しみの感情を向けたまま逮捕されてしまう。

そして鬼柳は死ぬ直前、ダークシグナーへと誘う冥界の王に2つの願いを言つてダークシグナーへと転生した。この経緯を経て彼は遊星とコナミと戦おうとしている、誤解が生んだ悲しみのラストデュエルを。

「スピード・ワールドセット!あの第一コーナーを取ったやつが先行だ!さあ…デュエルだあ!」

ライディングデュエルの専用フィールド魔法スピード・ワールドがセットされ、同時に先行を取ろうと3人がそれぞれ走り出す。1番に抜けていたのは遊星だったが鬼柳がDホイールごと体当たりを仕掛け、遊星は炎の壁にぶつかってしまふ。

「うっ…!?!」

「遊星!」

なんとかクラッシュを免れるも大幅に減速してしまう遊星、だが鬼柳も遊星への恨みからか拘りすぎてコナミに抜かされてしまった。

「…いくぜ鬼柳!俺のターン、ドロ―!俺はモンスターをセットして

カードを2枚伏せる。これでターンエンドだ！」

コナミ&遊星 LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット2

手札3 (コナミ) 手札5 (遊星)

スピードカウンター

sc0

「守備固めかあ？そんなんじや俺を倒せないぜコナミ！俺のターン、さあ来いインフェルニティ・デーモン！」

スタンバイフェイズにお互いscが1つ乗ったのを横目に鬼柳は2本のヤギのようなツノが生えた悪魔を呼び出す。

インフェルニティ・デーモン 攻撃力1800

「さあ…楽しませてくれよ？バトルだあ！インフェルニティ・デーモンでセットモンスターに攻撃、ヘル・プレッシャー！」

デーモンが手をかざすと空に巨大な魔法陣が描かれ、そこから炎に覆われた手がコナミのセットモンスターに目掛けて出てきた。

「くっ…俺が伏せていたのはUFOTートルだ！」

UFOTートル 守備力1200

円盤を背負った亀が巨大な手で押しつぶされてしまった。

「ひやはははー！こんなもんかあ？」

「まだだ！UFOTートルが戦闘で破壊されたことでデッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを1体攻撃表示で特殊召喚出来る！俺が呼ぶのはこいつだ、人造木人18！」  
インパチ

円盤が単体で手をすり抜けてコナミのフィールドを浮かび、そこから出た光がコナミの場を照らしたかと思うとそこには2本のタイヤに支えられた大型の木人が佇んでいた。

人造木人18 攻撃力500

「ちっ…モンスターを残しやがったか。まあいいカードを2枚伏せてターンエンドだ！さあ、お前のターンだぜ遊星！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・デーモン』 (攻撃表示)  
セット2



手札3

s c 1

「鬼柳：俺は絶対にお前を救ってみせる。俺のターン！俺はチューナーモンスター、ニトロ・シンクロンを召喚する！」

赤色の缶に手足が生え、頭部にメーターが付いたロボットが現れる。

ニトロ・シンクロン 攻撃力300

「へっ…早速シンクロかあ？」

「俺はレベル5の人造木人18にレベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！集いし思いがここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウオリアー！」

ニトロ・シンクロンのメーターが右に振り切れ人造木人18を光で包み込むと巨大なタンクが尻尾についた緑色の戦士が参上する。

ニトロ・ウオリアー 攻撃力2800

「ニトロ・シンクロンがニトロと名のつくシンクロモンスターのシンクロ素材になったことでカードを1枚ドロウする！」

「いきなり攻撃力2800とは飛ばすじゃねえか遊星よお！」

「バトルだ！ニトロ・ウオリアーでインフェルニティ・デーモンに攻撃、ダイナマイト・ナックル！」

タンクの燃料を使って後ろに蒸気を噴射して高速で近づくと右ストレートがデーモンの左頬に炸裂した。

鬼柳 LP4000↓3000 s c 2↓1

「くっ…」

「俺はこれでターンを終了する！」

「とりあえずこれで鬼柳の場のモンスターは消えた…。地縛神もダイクシンクロもそうは出来ねえ！」

コナミ&遊星 LP4000

フィールド 『ニトロ・ウオリアー』（攻撃表示）

セット2

手札3（コナミ） 手札6（遊星）

s c 2

「今度はこっちからいくぜえ？俺のターン！俺はトラップカード、極限への衝動を発動する！このカードの効果で俺は手札を2枚墓地に送ることでフィールドに2体のソウルトークン呼び出す！」

鬼柳が捨てたカードの魂だけが鬼柳のフィールドに浮かぶ、

ソウルトークン 守備力0

「一気に2体のモンスターが…地縛神か!？」

「そいつはあとのお楽しみだ。俺は2体のモンスターをリリースした時手札のレベル2のモンスターを特殊召喚出来る。来い、インフェルニティ・ドワーフ！」

鬼柳が召喚した幻影から最後の手札に手が伸びてきてモンスターをフィールドに引きずり出した。

「さあショータイムだ！DTはシンクロ素材にする時レベルをマイナスとして扱う！俺はレベル2のインフェルニティ・ドワーフにレベル10のナイトメア・ハンドをダークチューニング！漆黒の帳下りし時、冥府の瞳は開かれる。舞い降りろ闇よ！ダークシンクロ！いでよ、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

ドワーフがナイトメア・ハンドの闇に無理やり包み込まれ同調すると体のあらゆる場所に目が生えたドラゴンが現れた。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 攻撃力3000

「レベルマイナスのシンクロモンスター…!？」

「さあ楽しもうじゃねえか！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンは墓地の闇属性モンスターの効果をコピーして発動出来る！俺は極限への衝動のコストで墓地に送ったインフェルニティ・ネクロマンサーの効果をコピーする！こいつは俺の手札が0枚の時1ターンに1度墓地のインフェルニティを特殊召喚出来る！もう1度死の淵より蘇れ、インフェルニティ・デーモン！」

「手札0の時に効果を発動出来るモンスター…!?!このために鬼柳は手札を0に！」

鬼柳のフィールドに空いた穴からデーモンが這い上がってくる。

インフェルニティ・デーモン 攻撃力1800

「さらに手札が0の時にデーモンが特殊召喚に成功したことでデッキからインフェルニティカードを加えることができる！俺は今加えたカードを伏せて…バトルだ！こいつで血の海渡ってもらおうかあ…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでニトロ・ウオリアーに攻撃、インフィニティ・サイト・ストリーム！」

口から闇に染まったエネルギー弾を放ち、ニトロウオリアーを消し去った。

コナミ&遊星 LP4000↓3800

「くっ…」

「まだまだ！俺が受けた苦しみはこんなもんじゃねえ！インフェルニティ・デーモンで遊星にダイレクトアタック、ヘル・プレッシャー！」  
魔法陣から出てきた手が遊星を押しつぶそうとする。

「そうはいかねえ！永続トラップ発動、蘇りし魂！こいつの効果で墓地の通常モンスター、人造木人18を守備表示で特殊召喚する！」

遊星への攻撃に割って入るように木人の魂が蘇り盾となる。

人造木人18 守備力2500

大きな体で遊星を守る木人になわなないと判断したのかデーモンが呼び出した手は魔法陣へと戻っていった。

「ち…デーモンの攻撃は中止だ！これでターンエンド！」

鬼柳 LP3000

フィールド 『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』(攻撃表示) 『インフェルニティ・デーモン』(攻撃表示)

セット2

手札0

sc2

「あのシンクロモンスターを何とかしねえと…俺のターン！よし、チューナーモンスター・ジェネクス・コントローラーを召喚だ！」

頭の左右にアンテナをつけたロボットがフィールドに現れた。

「俺はレベル5の人造木人18にレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！炎のエレメントを司る者よ、燃え上がる心を制御し討ち倒れし同胞の意思を継げ！シンクロ召喚！燃え盛れ、サーマ

ル・ジエネクス！」

ジエネクス・コントローラーがアンテナから電波を飛ばし木人の姿を溶鉱炉へと変えさせ、中枢コアへと装填された。

サーマル・ジエネクス 攻撃力2400

「攻撃力2400…狙いはデーモンか！だがなワンハンドレッド・アイ・ドラゴンがいる限りデーモンは何度でも蘇ってお前らを狙うぜ？」

「なら…まずはそいつを倒すまでだ！サーマル・ジエネクスは墓地の炎属性モンスターの数×200攻撃力をアップする。俺たちの墓地にはUFOタートル、人造木人18、ニトロ・シンクロン、ニトロ・ウォリアーの4体！」

墓地のモンスターの魂が溶鉱炉の中へと入っていき炎を拡大させると蒸気があふれんばかりに出るほど活発となった。

サーマル・ジエネクス 攻撃力2400↓3200

「ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの攻撃力を超えてきやがったか…」

「鬼柳！俺たち4人はこのサーマル・ジエネクスを囲む4体のようにお前を慕っていた。俺たちは仲間じゃねえか！なんで俺たちが戦わなきゃなんねえんだ！」

「コナミ…！」

「そう…俺も仲間だと思っていた。だけどあの時の遊星の裏切りで全てが崩れたんだよ、その4体のモンスターが1体でも欠けていればこいつを倒せねえようになあ！」

「そんなことはねえ！遊星はお前を裏切っていないしお前もまだ俺たちの仲間だ！バトル…サーマル・ジエネクスでワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに攻撃！」

溶鉱炉から得たエネルギーを使い、高熱の水蒸気を分散させドラゴンのドラゴンの全ての目をめがけて放った。

「へっ…あの時チームサテイスフアクションは崩壊した。もう元には戻せねえんだよ。トラップ発動、インフェルニティ・ブレイク！俺の手札が0枚の時墓地のインフェルニティカード…ドワーフを除外す

ることでお前の場のカードを1枚破壊する。俺が破壊するのはサーマル・ジエネクスだ！消えな！」

鬼柳が発動したトラップから発生した衝撃波がサーマル・ジエネクスを襲う。放った水蒸気はかき消され、溶鉱炉も壊れてしまった。

「鬼柳…俺があの時した選択でお前を追い込んでしまったのはすまないと思っっている。だが俺にとってお前は仲間なんだ！」

「そうだ…今からだって遅くはねえ！トラップ発動、リボンパズル！こいつは俺のモンスター1体のみが効果で破壊された場合そのモンスターをもう1度呼び戻すことができる！」

時間が遡ったかのように溶鉱炉の壊れたピースが戻っていき、元の状態へと復元された。

サーマル・ジエネクス 攻撃力3200

「なに…？」

「この1撃で目を覚まさせてやる…。サーマル・ジエネクス、もう1度攻撃だ！」

再び水蒸気を分散させ、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの目を覆う。1つも見える目がなくなってしまったドラゴンは崩れ落ちてしまった。

鬼柳 LP3000↓2800

「さらにサーマル・ジエネクスの効果で墓地のジエネクスモンスターの数×200のダメージを受けてもらうぜ！墓地にいるのはジエネクス・コントローラー1体！」

鬼柳 LP2800↓2600

「くっ…今のは効いたぜ。だが俺の手札が0枚の時にモンスターが戦闘で破壊されたことで墓地のインフェルニティ・リベンジャーを特殊召喚できる！」

2丁の銃を手に持った人相の悪いモンスターが墓地から這い出てくる。

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0

「俺は何としても遊星に復讐する…俺が受けた痛みをお前にも受けさせる。邪魔をするならコナミにも受けてもらうぜ、こいつの力をな！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが破壊されたことで俺はデッキから好きなカードを1枚加えることができる…俺が加えるのはこいつだ」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの残滓が鬼柳のデッキから1枚のカードを取り出す。それを受け取った鬼柳は2人に見えるようにそのカードを手に持った。

「地縛神か…！」

「くっ…地縛神。俺は…」

地縛神が見えると途端に遊星の体が震えた。呼吸は荒く、Dホイールを握っている手も汗で濡れている。

「遊星、この前のデュエルでお前はこのカードに恐怖を抱いたはずだ。その恐怖を今回はたっぷり味わせてやるよ」

「遊星…。俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ&遊星 LP3800

フィールド『サーマル・ジエネクス』（攻撃表示）

セット2 『蘇りし魂』（使用済み）

手札2（コナミ） 手札6（遊星）

sc4

「俺のターン、ドロロー！なあセキュリティに捕まったやつがどんな目にあうかお前らは知ってるか？俺はセキュリティに捕まった後、数え切れないほど看守から暴力を受けた」

「鬼柳…」

「俺たちは何回も面会にいったがお前に会うことは出来なかった…。そんな目にあっていたのか」

「だがそんなのはいくらでも耐えられた。だがやつらはなあ…俺の命より大事なデッキを奪ったんだ！あの屈辱…今でも忘れねえ。お前たちにもその恐怖を味わせてやるよ…地縛神の力でな！2体のインフェルニティと人々の魂を生贄に…降臨せよ！地縛神  
Cocapacapu！」

2体のモンスターとサテライトの人間の魂を吸いとって巨大な闇に覆われたモンスターが降臨する。その体には鬼柳の痣と同じ模様

が刻まれていた。

地縛神 Capacapu 攻撃力3000

「これが鬼柳の地縛神…」

「地縛神から感じる恐怖、これがお前の感じてきた恐怖なのか…」

「さらに俺は手札からサーマル・ジエネクスを対象にs<sup>スピードスベル</sup>pーハーフ・シーズを発動！こいつは俺のscが3以上の時に発動が出来る、今俺のscは4！こいつの効果でサーマル・ジエネクスの攻撃力は半分になりその数値分俺のライフが回復する！」

「なんだと!？」

鬼柳が発動したカードから出てきた薬草はサーマル・ジエネクスのエネルギーを吸い取り、そのエネルギーで鬼柳のライフを癒す。

サーマル・ジエネクス 攻撃力3200↓1600

鬼柳 LP2600↓4200

「さあバトルだ！我が神コカパクアップよ、サーマル・ジエネクスをぶっ倒しやがれ！」

コカパクアップが地面に衝撃を加えるとそこからサーマル・ジエネクスに向かって地割れが発生し、やがてサーマル・ジエネクスがいる地面に到達してしまう。

「くっ…俺は永続トラップ、バックファイアを発動する！俺たちの炎属性モンスターがやられる度に相手に500のダメージを与える！」  
「それがどうした!？」

サーマル・ジエネクスは地面から発生した衝撃波でレーンの外へと放り出させ、炎の壁にぶつかってしまう。

コナミ&遊星 LP3800↓2400 sc6↓5

鬼柳 LP4200↓3700

「まだ終わりじゃねえ！コカパクアップが相手モンスターを戦闘で破壊した時、そいつの攻撃力分のダメージを与える！くらいなコナミ！」  
「コナミ!？」

壁に跳ね返って来たサーマル・ジエネクスがコナミのDホイールめがけて落ちてくる。これを受ければクラッシュは免れない、そんな時コナミの前に無数の小さなモンスターが現れサーマル・ジエネクスを

一時的に支えた。

「なにが起こってやがる…!」

「俺は地縛神の効果に対して手札のクリアボーの効果を発動していたのさ!こいつは手札から捨てることで効果ダメージを与えるモンスター効果の発動を無効にできる!」

コナミはクリアボーがサーマル・ジェネクスを支えている間にDホイールを走らせ、くぐり抜けた。

「ち…だが地縛神はダイレクトアタックできる。次のターンで終わらだ!ターンエンド!」

鬼柳 LP3700

フィールド 『地縛神Cocapapu』（攻撃表示）

セット1

手札0

sc4

「鬼柳…これがお前の感じた恐怖だと言うのなら俺は逃げない!地縛神を倒すことでその恐怖を乗り越えてみせる!俺のターン!俺はspeerエンジェル・バトンを発動する。俺のscが2個以上ある時カードを2枚ドロし、1枚を墓地へと送る」

遊星はデッキから新たに2枚のカードを引き、1枚のカードを墓地に送った。だがその手札では鬼柳に立ち向かうには力不足だった。「くっ…」

「威勢のいいこと言っ打つ手なしかあ?情けねえな遊星よお!」

「へっ…遊星。タッグデュエルで信頼できるのはデッキだけじゃないだろ?トラップ発動、シンクロ・スピリッツ!墓地のサーマル・ジェネクスを除外することでそのシンクロ素材にしたモンスターを呼び戻す!」

ロボットと木人が溶鉱炉から吹き出た蒸気によりフィールドへと押し戻される。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

人造木人18 守備力2500

「!…そうだったな。鬼柳、俺たちの絆で地縛神を乗り越えてお前を



救い出してみせる！俺はレベル5の人造木人18にレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

2体が同調して現れたのは白き翼を持つ星屑の龍。翼を広げて咆哮をあげる。

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

「来たな、遊星のエースモンスター！だがそんなモンスター地縛神の敵じゃないぜ！」

「いや…忘れたとは言わせないぜ鬼柳！地縛神は攻撃の対象に出来ない。なら、今攻撃の対象になるのは鬼柳自身だ！」

白き龍が鬼柳を狙って攻撃の体勢に入る。だがその前に遊星は新たなモンスターを召喚した。

「俺はさらにゼロ・ガードナーを召喚する！」

ゼロの形をした磁石を運んでいるプロペラを身につけたロボットがスターダストの隣に降り立つ。

ゼロ・ガードナー 攻撃力0

「バトルだ！スターダストで鬼柳に攻撃！響け、シューティング・ソニック！」

スターダストは風を集めて音速波を鬼柳めがけて放った。

「甘いな遊星！永続トラップ発動、鎮守の煌画！」

「まずい！あれは攻撃の対象を地縛神に変更するカード！このままじゃスターダストが反撃をくらっちゃう！」

音速波が導かれるように地縛神へと向かうも弾かれ、地縛神がスターダストを押しつぶそうとしてくる。

「そうはさせない！ゼロ・ガードナーをリリースし効果を発動する！このターン俺たちへの戦闘ダメージは0になりモンスターも戦闘で破壊されない！」

ゼロ・ガードナーは磁石を持って地縛神を誘導し、スターダストの身代わりとなった。

「ほう…かわしたか。だがいつまでもつかない？」

「俺は墓地のADチェンジャーを除外し効果を発動する！スターダストの表示形式を守備表示へと変更！さらにカードを2枚伏せてターンエンド！」

（俺が伏せたカードの内1枚はくず鉄のかかし…攻撃を止めることができるが地縛神は俺たちの魔法や罠カードの効果を受けない…）

コナミ&遊星 LP2400

フィールド 『スターダスト・ドラゴン』（守備表示）

セット2 『バックファイア』『蘇りし魂』（使用済み）

手札1（コナミ） 手札4（遊星）

sc5

「さてと…俺のターン、ドロロー！さて…遊星とスターダストどっちを狙うでしょうか。…スターダストを守る策を用意していたら地縛神の効果ダメージもねえ、なら選択は1つ…行くぜ遊星！この俺が受けた苦しみをお前にも味わせてやるよ！」

遊星は手札にある1枚のモンスター牙城のガーディアンを見つめる。このカードを手札から墓地に送ることでスターダストの守備力を1500あげ、地縛神からスターダストを守る算段だったがそれを見抜かれてしまった。

「バトル！コカパクアップよ、宿敵シグナーに裁きの鉄槌を振り下ろせ！」

コカパクアップが腕を振り上げ、遊星を狙ってその巨大な腕を振り下ろした。

「遊星！」

「そうはさせない！手札の速攻のかかしを墓地へ捨てることで俺への直接攻撃は無効になり、バトルフェイズを終了させる！」

かかしが加速して振り下ろさせる前に地縛神にぶつかり軌道を逸らさせる。

「そうだ…もつと足搔け！足搔けば足搔くほどお前はもつと地縛神の恐怖を味わう！ターンエンド！」

鬼柳 LP3700

フィールド 『地縛神Cocapapu』（攻撃表示）

セット0 『鎮守の煌画』

手札1

sc6

「俺のターン、ドロロー！鬼柳を地縛神から解放するには…俺に出来るのはこれだ！カード・ブロッカーを召喚！こいつは召喚した時守備表示になる！」

剣や盾など一式の装備を身にまとった小さな剣士が盾を突き出しながら表れる。

カード・ブロッカー 守備力400

「そんなモンスターで何ができる！」

「スターダストを守るのさ！こいつは俺たちのモンスターが攻撃の対象になった時こいつに攻撃対象を変更できる！俺はこれでターンエンド！遊星、この勝負はあの時の勘違いが原因だ…ならケリをつけるには俺じゃダメだ」

「コナミ…分かった。必ず鬼柳を元に戻してみせる！」

コナミ&遊星 LP2400

フィールド 『スターダスト・ドラゴン』（守備表示） 『カード・ブ

ロッカー』（守備表示）

セット2 『バックファイア』 『蘇りし魂』（使用済み）

手札1（コナミ） 手札3（遊星）

sc7

「俺のターン！コナミ、モンスターを守ったって意味はねえのさ！忘れてねえよな地縛神はダイレクトアタックできる！やれコカパクアプ！」

今度はコカパクアプはコナミに近づき、その腕を振り上げて狙いを定める。だが度重なる地縛神の攻撃でレーンはボロボロになっており鬼柳が走っていた地面が脆くなっていたのか崩壊してしまう。

「な…！うわっ!?!」

バランスを崩してクラッシュしそうになる鬼柳、とっさに2人は手を伸ばした。

「鬼柳…！俺に捕まれ！」

「大丈夫か鬼柳！」

「お前ら…!?!」

バランスをギリギリ保ちながら2人を見て驚愕する鬼柳。だが崩壊した地面が邪魔をして2人はうまく近づくことはできない。

「鬼柳…俺はあの時自分が犠牲になることでお前を救うことができると思いがついていた！だがそれは間違いだった！俺は今度こそお前を救ってみせる…絶対に！」

「遊星…!?!お前は本当に俺を裏切っていないのか…?俺は…何を信じればいいんだ！」

「俺たちの絆を信じてくれ！ずっと俺たちは仲間だ、それだけはいっただって変わらねえ！墓地のクリアクリボーの効果を発動、相手が直接攻撃してきた時に墓地のこのカードを除外することでカードを1枚ドロウする。そのカードがモンスターカードならそいつに攻撃を誘導できる！」

クリアクリボーがその身をマトリョーシカのように割り中から1枚のカードを取り出す。そのカードは…モンスターカードだった。

「よし…俺はギガテック・ウルフを準備表示で特殊召喚！ギガテック・ウルフ、鬼柳とは反対側のレーンに走ってくれ！」

ギガテック・ウルフ 守備力1400

鉄屑で作られた狼は金属音を響かせながら鬼柳とは反対側のレーンへ移動する。さらにクリアクリボーが攻撃をギガテック・ウルフへと誘導させた。それによって鬼柳の付近に発生していた地崩れは収まり、クラッシュを免れた。

「コナミ…くっ、コカパクアップは相手モンスターを戦闘で破壊した時その攻撃力分のダメージを与える！」

コナミはギガテック・ウルフが粉碎されて飛んできた鉄屑をその身に受けるもバックファイアによる爆発で直撃を免れた。

コナミ&遊星 LP2400↓1200 sc8↓7

鬼柳 LP3700↓3200

「へっ…この程度！」

「遊星…コナミ。すまねえ！本当は分かっていたんだ…遊星が俺を裏

切るようなやつじゃないってことは……。なのに俺は仲間を信じられなかった！ちくしょう……！」

「鬼柳、今からでも遅くはない！こんな戦いはやめてもう1度やり直そう！」

「こんな俺を許してくれるのか遊星……!?俺は……!このデュエルをサレンドー……うっ!?!」

鬼柳がデツキの上に手を置こうとするが突然苦しみ出してしまう。「どうした鬼柳！」

「……戦う意思がないのならば私が直接貴様らと戦ってくれる」

「……!誰だ!鬼柳に何をした!」

「我は冥界の王……シグナーと相反するダークシグナーを統括するものだ。先ほどぶりだな遊星」

「これは……ボマーが操られた時と同じ!冥界の王、鬼柳の体を解放しろ！」

「断る。この戦いはシグナーとダークシグナーの戦い、勝者が出るまで戦いは終わらぬ」

「くっ……誰かが鬼柳を操ってやがるのか。遊星、鬼柳を解放するにはあいつを倒すしかねえ！」

「やれるものならやってみるがいい。私はこれでターンエンドだ。次のターンの地縛神の攻撃を防ぐ手立てはあるまい、すぐに終わらせてくれる」

冥界の王 LP3200

フィールド 『地縛神Cocapapu』（攻撃表示）

セット0 『鎮守の煌画』

手札2

sc8

「鬼柳……俺はお前を救いたい!絶対に……!」

遊星の友を見捨てず救いたいという思いに共鳴して遊星にある変化が起こる。

「遊星の背中に……でっかい赤いアザが……!?!」

シグナーの力が遊星に集結し遊星のデツキの1番上のカードが光

り輝く。

「俺の…ターン！」

そのカードを引く遊星、彼の目には迷いや恐怖はなく友を救うという思いが映っていた。

「このカードは…。このカードで俺たちの絆を取り戻す！永続的トランプ、エンジェル・リフトを発動し墓地からレベル2以下のモンスター…速攻のかかしを特殊召喚する！さらに手札から救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚！」

遊星のフィールドにまばゆい光を放つ小さな竜が現れる。

速攻のかかし 攻撃力0

セイヴァー・ドラゴン 攻撃力0

「行くぞ！俺はレベル1の速攻のかかしとレベル8のスターダストにレベル1のセイヴァー・ドラゴンをチューニング！集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！シンクロ召喚！光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

セイヴァー・ドラゴンによつて包み込まれた輪から神々しき光を放つドラゴンが出現した。

セイヴァー・スター・ドラゴン 攻撃力3800

「バカな…!?そのドラゴンは…赤き竜の化身!?!」

「俺たちの絆は何者にも途絶えさせはしない！セイヴァー・スター・ドラゴンの効果発動、相手モンスターの効果が無効にしその効果を吸収する！地縛神の効果を吸収する、サブリメーション・ドレイン！」

セイヴァー・スター・ドラゴンが羽を広げ、そこに地縛神の光を吸収し蓄える。

「よし…いけ遊星！」

「セイヴァー・スター・ドラゴンで地縛神C o c a p a c A p uに攻撃！轟け、シユートイニング・ブラスター・ソニック！」

蓄えた光を1点に集め、それを地縛神を覆うように放った。包み込んだ光が消える頃には地縛神は消えていた。

「地縛神が敗れるだと…」

「さらにセイヴァー・スター・ドラゴンが地縛神から吸収した効果を発

動！戦闘で破壊したモンスターへの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「……しまった！」

セイヴァー・スター・ドラゴンがその幾千もある翼を使い、鬼柳の体をDホイールごと覆う。やがてその場から離れて飛翔していくが鬼柳のDホイールは停止していた。

冥界の王 LP3200↓0

デュエルが終了すると遊星とコナミは急いで鬼柳の元へと走る。

「鬼柳ー！」

「遊星…コナミ」

「良かった…意識が戻ったんだな！」

だが、シグナーとダークシグナーの戦いに敗れた影響で鬼柳の体から小さな光が天に向かって消えていく。

「へ…お迎えが来ちゃったようだな。俺はダークシグナーに転生する時2つ願いを言ったんだ…。1つは遊星への復讐だが…、もう1つはあの時出来なかったチームサティスファクションのラストデュエルをしたかったな。情けねえよな…結局俺はお前を、お前らを恨みきれなかったんだ」

「そんなことはない！鬼柳…お前は俺たちの仲間だ！」

「そうだよ…またこんな形じゃなくてやろうじゃねえか！もつと楽しいチームサティスファクションのラストデュエルを！それで満足しようじゃねえか！」

「2人とも…ありがとな。でも俺はもうダメみたいだ。こんなんじや…満足できねえよな」

鬼柳の体が次第に透明になっていき、鬼柳の体を支えていた遊星の手に重さが感じられなくなっていた。

「鬼柳ー……！」

2人は鬼柳がいなくなったことを嘆き、悲しむ。互いに言葉をかわすことはなかったがその思いは同じだった。鬼柳の思いを利用して仲間同士で傷つけ合う戦いをさせたダークシグナー…及び冥界の王を絶対に許さず、必ずこの戦いに勝利してサテライトに平和をもたら

し、それで満足できる未来へと歩を進めると。



## 私は邪神の道を選択した

鬼柳が出した地縛神を倒したことで生贄にされたサテライトの人々の魂も蘇ったことをその目で確認する遊星達。遊星はラリーやマーサを生贄にしたルドガーの地縛神を倒すことで2人を救おうとコナミと共にルドガーの待っている旧モーメントに向かった。

「来たな…不動遊星。かつての友を地獄に叩き落としてきたか」

「違う！俺たちと鬼柳の間に憎しみ合う理由はなかった。俺たちの誤解をお前が利用したんだ！」

「誤解？違うな。これは運命だったのだよ、お前達は命を懸けて戦い合うという運命に導かれたにすぎない」

「運命だと？そんなので納得するかよ。それにマーサやラリーのことも許せないぜ…俺とデュエルしやがれ！」

「ふむ…2対1というわけか。いいだろう、お前達と鬼柳のデュエルは我が蜘蛛を通じて見させてもらった。私も同じ条件でお前達と戦うでしょう」

3人は旧モーメントが下に見える橋に乗り、互いにデュエルディスプレイを構える。

「」「デュエル！」「」

先攻のランプがついたのはルドガー。

「お前達とのデュエルを楽しみにしていたぞ…。私はカードを1枚伏せてターンを終了する」

「カードを伏せたただけで終わりだと!?!」

ルドガー LP4000

フィールド 無し

セット1

手札5

次にランプがついたのはコナミ。

「俺のターン、ドロロー！何を企んでやがるか知らねえがここは攻撃あるのみ！俺はギガテック・ウルフを召喚して攻撃だ！」

鉄屑で作られた狼が金属音を響かせながらルドガーに体当たりを

仕掛ける。とつさにルドガーはデュエルディスクを盾にして受け止めた。

ルドガー LP4000↓2800

「よし…先制ダメージを与えた」

「このまま押しきってやるぜ！」

「そうはいかない。私は相手から直接攻撃を受けたことをトリガーに無抵抗の真相を発動！このカードにより手札のレベル1モンスター  
ダーク・スパイダーを手札とデッキより1体ずつ特殊召喚させてもら  
う」

2体の蜘蛛が天井から糸を垂らしながら降りてきた。

ダーク・スパイダー 守備力0

「げっ…モンスターが一気に2体かよ！俺はカードを1枚伏せてター  
ンエンド！」

コナミ&遊星 LP4000

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セット1

手札4（コナミ） 手札5（遊星）

「私のターン。私はフィールド魔法、始皇帝の陵墓を発動する」

「フィールド魔法…ってことは！」

「来るか…！」

「私は2体のダーク・スパイダーとモーメントに集結し亡者の魂を生  
け贄に召喚する！我が運命の光に潜みし亡者達の魂よ！流転なるこ  
の世界に暗黒の真実を導くため、我に力を与えよ！現れよ！地縛神  
Ur<sup>ッ</sup>ル」

旧モーメントの光が地縛神に吸い取られていきその魂を喰らって  
巨大な蜘蛛の形をした地縛神が現れる。

地縛神Ur<sup>ッ</sup>ル 攻撃力3000

「これがマーサやラリーを生け贄にしやがった地縛神…！」

「ふふ…さあ行くぞ。地縛神Ur<sup>ッ</sup>ルでコナミへとダイレクトアタッ  
ク、ヘル・スレッド！」

巨大な蜘蛛の口から出てきた無数の糸がコナミを襲う。

「コナミ！」

「そう簡単にライフを減らされてたまるか！体力増強剤スーパーZを発動！相手から2000以上の戦闘ダメージを受けるときその前に4000のライフを回復する！」

「ほう、だがダイレクトアタックは免れない！」

コナミは糸で体を絡め取られた後、反動をつけて大きく飛ばされてしまう。慌てて右手を伸ばし橋のロープを掴んで落下を防いだ。

コナミ&遊星 LP4000↓8000↓5000

「ルドガー！俺の友をこれ以上傷つけるのは許さない！」

「そう怒るな。…不動博士の息子よ」

「何！何故貴様が父さんのことを知っている!？」

「ゼロ・リバーズ。…あの事件の時まで私は不動博士の助手をしていたのだよ。だが彼はモーメントの開発を取りやめようとした。だから私が代わりに開発を進めた。イリアステルの命令でね」

「イリアステル…だと？それにお前達はゼロ・リバーズに関わっていたのか!？」

「ああ、イリアステルによって私は2つの神を背負った。光、そして闇のな。だが私は闇を選択した、シグナーとダークシグナーの戦いに終止符を打つためにな。ゼロ・リバーズはそのきっかけに過ぎない。あれはそう…避けられぬ運命だったのだよ」

「それでお前は本当に神にでもなったつもりか！ゼロ・リバーズによって犠牲になった人々の思い、この戦いに巻き込まれた人々の思いをお前は無視している！ゼロ・リバーズ…あれがなければジャックやクロウ、それにコナミの親も亡くなることは無かった。父親が開発していたモーメントの影響であいつらの大事なものを失わせてしまった。なのにあいつらはどうして俺に優しくしてくれるんだ…！俺はどうやって償えばいい！答えろ、答えてみろルドガー！」

旧モーメントの暴走によって起こった大爆発、ゼロ・リバーズ。サテライトに多数の死者を出したあの事故の責任を遊星は今までずっと感じていた。

「…それがお前の心の闇か」

「遊星…それは俺が答える！単純なことだ、俺はあの事故をお前のせいでとか思ってた…けどな、俺たちに運命があったとしたらそれはお前に思わなかった…けどな、俺たちに運命があったとしたらそれはお前に会ったことだけだ！俺は今まで遊星と過ごして楽しかったことはあっても恨んだりしたことなんか1度もない！だからお前がそんなに背負いこむ必要はねえ！」

「コナミ…。そう…なのか」

「ああ！だからこのデュエル、勝とうぜ！勝って俺たちの未来を取り返すんだ！」

「ああ！俺はもう…迷わない！」

「ふん…私を倒すことができるかな？私はカードを2枚伏せてターンを終了する」

ルドガー LP2800

フィールド 『地縛神Uru』（攻撃表示）

セット2

手札3

「俺のターン！スピード・ウォリアーを召喚！スピード・ウォリアーは召喚したターンのバトルフェイズに攻撃力が倍になる！バトルだ、俺は地縛神を超えてルドガーにダイレクトアタック！」

スピード・ウォリアー 攻撃力900↓1800

スピード・ウォリアーがルドガーに向かって素早く近づき、攻撃を仕掛ける。

「甘い！永続トラップ地縛神の咆哮を発動！1ターンに1度フィールドの地縛神より攻撃力の低いモンスターが攻撃してきたときそのモンスターを破壊し攻撃力の半分のダメージを与える！」

ルドガーの発動したトラップから強風が飛んできてスピード・ウォリアーを破壊し遊星を襲う。

コナミ&遊星 LP5000↓4100

「くっ…まだまだ！ギガテック・ウルフで攻撃を仕掛ける！」

ギガテック・ウルフがルドガーに噛みつき、そのライフを減らした。  
「ちっ…」

ルドガー LP2800↓1600

「俺はカードを2枚伏せてターンを終了する」

コナミ&遊星 LP3800

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セット2

手札4（コナミ） 手札3（遊星）

「バトルだ！地縛神Uruよ不動博士の息子にダイレクトアタック！ヘル・スレッド！」

今度は遊星に向かって巨大蜘蛛が糸を吐き出してきた。

「やらせはしない！トラップカードスピリット・フォース！この戦闘で発生するダメージを0にする！」

「甘いな、カウンタートラップ地縛波！地縛神がいる時に発動された魔法か罠の効果が無効にする！」

「何?！」

守りの一手が封じられ遊星は糸によって弾き飛ばされてしまう。

コナミ&遊星 LP4100↓1100

「くっ…」

「私はカードを1枚伏せてターンを終了。さあ次のターンで終わるだけだ」

ルドガー LP1600

フィールド 『地縛神Uru』（攻撃表示）

セット1 『地縛神の咆哮』

手札3

「俺のターン！よし…こいつに賭けるぜ。800のライフを払って魔の試着部屋を発動する！デッキから4枚めくってその中にあるレベル3以下の通常モンスターを特殊召喚する！4枚めくるぜ！よし…2枚目と3枚目にいたファイヤー・アイとジェネクス・コントローラーを召喚する！」

コナミ&遊星 LP1100↓300

ファイヤー・アイ 攻撃力800

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「自ら命の灯火を消したか…」

「へっ…どうだろうな！俺はレベル2のファイヤー・アイにレベル4のギガテック・ウルフとレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

3体が同調し、白き龍が場に降臨した。

蒼眼の銀龍 攻撃力2500

「このドラゴンは…少しだが赤き龍の痣が反応している？」

「精霊からの贈り物だからか…？まあいいや、蒼眼の銀龍の効果発動、次のターンのエンドフェイズまで効果の対象にならず効果では破壊されない！」

「何…!?」

「これで地縛神の咆哮は無駄に終わる！バトルだ、銀龍で攻撃、白銀のバーストストリーム！」

龍の口からエネルギー弾が発射され、ルドガー目掛けて飛んでいく。だが巨大な蜘蛛がその間に降り立った。

「だが、そんな作戦は想定内だ！永続トラップ発動…鎮守の焔画！攻撃対象は地縛神となる！」

「しまった…！地縛神の咆哮に気を取られてそいつを忘れてた！」

「やらせはしない！トラップ発動、シンクロ・バリアー！シンクロモンスターをリリースし、次のターンのエンドフェイズまで俺たちへのダメージを0にする！」

銀龍に巨大蜘蛛の糸が襲いかかる前にフィールドから消え去り、ダメージをとつきに交わした。

「ちっ…リリース・エスケープというわけか」

「サンキュー遊星！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

コナミ&遊星 LP300

フィールド 無し

セット2

手札2 (コナミ) 手札3 (遊星)

「私のターン。…シンクロ・バリアーによってこのターンのダメージ

はないか。まあいい寿命が1ターン伸びたにすぎない、ターンを終了する！」

ルドガー LP1600

フィールド 『地縛神Uru』（攻撃表示）

セット0 『地縛神の咆哮』『鎮守の煌画』

手札4

「俺のターン！…行くぞコナミ！」

「おう！」

「この状況でも諦めぬか…」

「俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！このモンスターは召喚に成功した時墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる！来い、スピード・ウォリアー！」

遊星の場に現れたロボットがレバー引くとフィールドに空いた穴からスピード・ウォリアーが舞い戻る。

ジャンク・シンクロン 攻撃力1300

スピード・ウォリアー 守備力400

「行くぜ、永続トラップ蘇りし魂で墓地の通常モンスターを守備表示で特殊召喚する。来い、ファイヤー・アイ！」

ファイヤー・アイ 攻撃力800

「レベル2のファイヤー・アイにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・シンクロンがレバーを引くと2体は同調し1人の戦士を呼び出す。

ジャンク・ウォリアー 攻撃力2300

「何を出すかと思えばそんなモンスターか、地縛神の咆哮は地縛神より攻撃力の低いモンスターが攻撃してきた時にそのモンスターを破壊しその攻撃力の半分のダメージを与えられる、そいつに何ができる！」

「確かに俺1人ではここで終わりだ、だが俺には信頼できる友がいる。ジャンク・ウォリアーの効果発動、フィールドのレベル2以下のモン

スターの攻撃力を吸収する、パワー・オブ・フェロウズ！」

「何だと…!?!」

ジャンク・ウォリアー 攻撃力2300↓3200

「しまった！地縛神の咆哮は地縛神より攻撃力の高いモンスターの攻撃は防げない！」

「この一撃でお前を倒し、サテライトに光を取り戻す！バトル、ジャンク・ウォリアーでルドガーにダイレクトアタック！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーが後ろのジェット・エンジンを噴射しルドガーに急接近する。

「く…やむをえない！鎮守の煌画により地縛神Uruを攻撃対象に変更する！」

ジャンク・ウォリアーの前に地縛神Uruが立ち塞がる。

「へっ…俺たちの狙いは最初から地縛神を倒してマーサ達を解放することなんだよ！リバースカードオープン、イージー・チューニング！墓地のチューナーモンスタージェネクス・コントローラーを除外しその攻撃力をジャンク・ウォリアーに加える！」

ジャンク・ウォリアーはジェネクス・コントローラーのチカラも引き継ぎ、地縛神に向かって拳を突き出す。

ジャンク・ウォリアー 攻撃力3200↓4600

「なん…だと…?!」

「これが俺たちの絆の力だ！」

巨大蜘蛛の腹部を目掛けてジャンク・ウォリアーは拳を振るう。その一撃に耐えられず地縛神は消滅してしまう。

ルドガー LP1600↓0

こうして不動博士に因縁を持つダークシグナー、ルドガーとの対決は幕を閉じた。だが彼らの計画が成就する時はこの時にも刻一刻と近づいていた…。



冥界への入り口は魔女の島にある？

ルドガーとのデュエルに勝利した2人、だがルドガーはまだ倒れていなかった。

「負けたか…だが所詮私は時間稼ぎにすぎぬ。日没になれば冥界の王が復活する！お前らをここから帰すわけにはいかぬ！」

「何だと!？」

ルドガーは自分に埋め込んでいた起爆装置を起動し橋を墜落させる。足場を無くした2人は旧モーメントに落下していった。

「なっ…!？」

「うわあああー！」

旧モーメントの中に落ちた2人、そこには無数の亡霊がいた。彼らは2人を囲い、襲ってきた。

「な、なんだ!？」

「これは…そうか地縛神の生贄のために集められたサテライトの人々の魂！」

魂のみの亡霊は実体を求め2人の動きを封じる。

「くっ…離せ！」

「このままでは…！」

その時2人の前に光に包まれた人影が近づき、亡霊を退けさせた。

「な、なんだ…？」

「あなたは…？…！まさか父さん!？」

「え!？」

ゼロ・リバーズによって命を絶たれた不動博士がモーメントを通して遊星に語りかけてきた。

「遊星、お前はまだここに来るべきではない。…お前には辛い運命を背負わせてしまった。だがお前なら友と共に運命を変えることができる」と信じているぞ

「待ってくれ父さん！」

遊星の思いとは裏腹にだんだん距離が開いていき、気づくと2人はモーメントの気流に乗って地上に戻ってきていた。

「ここは…俺たち助かったのか？」

「ああ…そうらしい。父さんは俺にダークシグナーとの戦いの運命を変えられるといった。俺は友との絆を信じてこの戦いを終わらせてみせる」

「遊星…ああ！お前なら絶対出来るさ」

地上にいた龍亞や龍可、幸子やクロウや牛尾と合流に成功する。すると遠くに鬼柳が消えた時と同じような残滓がジャックが向かった方向から見えた。

「どうやらジャックも勝ったみたいだな！」

「ああ…残るダークシグナーはあと1人！アキのデュエルが終われば冥界の王を封印できる。だが日没まであまり時間はない、アキの元に向かうぞ！」

龍亞と龍可と幸子は牛尾の車に、クロウと遊星とコナミは自らのDホイールでアキとダークシグナーとの決戦の場に向かう。目的地は…廃墟となった遊園地。

遊園地に到着した7人はそれぞれ別れて遊園地を探索する。牛尾はアキを車で送るためについていった治安維持局の御影さんを探しに、その他の6人はアキを探す。

「アキって奴のことあまり知らないんだけどどんな感じのやつだ？」

「そうだな…髪や瞳が赤く、来ている服も赤を基調としたものだから見ればわかるだろう」

「あー、マーサハウスで見かけた気がするな。あいつもシグナーなのか…」

「俺はあつちを探すぜ。2人ともあつちは頼む！」

コナミが遊星にアキの特徴を教えてもらっている間にクロウは龍亞と龍可と幸子を連れて2人とは逆側の方を探しに行った。

「よし、俺たちも探しに…」

「…待ってくれコナミ。お前に聞いておいて欲しいことがある」  
「なんだ？」

「アキはサイコデュエリストといってデュエルのダメージやカードをデュエルディスクを使うことで実体化することが出来るんだ」

「…！ダークシグナーみたいな事が出来るってことか？」

「いや…ダークシグナーとはまた違う。元からそういった特異な能力を持っているデュエリストがいるらしい。アキは同じサイコデュエリストのデイヴアインという者に騙され一時期アルカディアムーブメントという組織に所属していた」

「アルカディアムーブメント？」

「ああ、サイコパワーを使い悪事を働く組織だ。今回アキが戦うダークシグナーは過去にアキによって弟を殺された…と言っている」

「え…本当なのか？」

「分からない。だが俺にとってアキは仲間だ、あいつがそのことで悩み苦しんでいるなら解放してやりたい」

「そうか…分かった。俺に出来ることなら何でも協力するぜ！」

「助かる」

「危ない！」

「「!?」」

とつさに2人は大きく跳躍し回避行動をとる。すると先ほどまで2人がいた場所が爆発していた。2人が振り返ると注意を促してくれた長身の男がいた。

「あ、危ねえ！」

「ありがとう…おかげで助かった。君は？」

「治安維持局の者です。ゴドウィン長官直々の命令によりシグナーの皆さんの助けにきました」

「気持ちは嬉しいが…ここは危険だ」

「承知の上です。なんとしてもアキさんにはダークシグナーに勝ってもらわなくてはなりません」

「…分かった」

すると長身の男が一つの建物に向かって指をさす。

「今あちらから悲鳴のようなものが！」

「本当か！」

3人は建物に入っていく。するとその地面にあった金網の下の水路に1人の女性が浮かんでいた。

「あなたは…御影さん！」

「牛尾が探してた奴か！すぐに助けねえと…」

2人は金網をなんとか素手で外すことに成功する。だがそのことに集中していたため背後から近づいてくる殺気に気づくことができなかつた。

「…馬鹿め！」

「なっ!?!」

先ほどの長身の男が緑色に発光している剣を振りかざしコナミを水に叩き落とした。

「コナミ!?!一体何を…!お前はダイヴアイン!?!」

「今さら気づいても遅い！食らえ、ファイヤー・ボール！」

「かはっ…!?!」

コナミが落ちたことに気を取られた分反応が遅れ、遊星もそこに落ちてしまう。

「ははは！こんな単純な手に引つかかるとはな。貴様らにアキは渡さん！そこで大人しくしているがいい」

金網を嵌めなおしそこを去っていくダイヴアイン、遊星達はなんとか御影を支えながら助けを待つ他なかつた。

その後かなりの時間が経過した後、幸運にも牛尾に見つけてもらいなんとか脱出に成功した。だがあまりにも痛いタイムロスだった。

「早くアキを見つけないと…!」

遊園地を走り回ってなんとかアキを見つけた遊星達、だがその様子は釈変していた。まるで黒薔薇の魔女と呼ばれていた時のように無闇にサイコパワーを振るっている。

「アキ…!?!一体どうしたんだ！」

「遊星、あそこだ！あの上の建物を見ろ！」

「ダイヴアイン…!?!そうか、あいつが！」

2人は急いで階段を駆け上り、扉を突き破ってダイヴアインの部屋に突入する。

「おや…あそこから抜け出してきたか。なかなかしぶとい奴らだ」

「ダイヴアイン…お前がアキをあんな目に！アキを解放しろ！」

「断る。アキは私の所有物だ。今だってアキの心を少しいじってやればアキは私の思うがままだ……。ダークシングナーのミステイ相手に私の意思通りサイコパワーを振るっているようになー！」

「この…外道め！」

「最高の褒め言葉だよ。さあ…もう一度眠っていて貰おうか、ファイヤー・ボール！」

デイヴァインはデュエルディスクにファイヤー・ボールのカードをセットすると2人に向かって無数の火の玉を飛ばしてくる。室内で狭いということもあり2人はかろうじてかわすので精一杯だ。

「アキはアルカディアムーブメントには絶対必要な人材だ……。お前らにみすみす奪われるわけには行かないんだよ。アキのように優秀な子は貴重だからね。くく、ミスティも馬鹿なやつだ…奴の弟が死んだのはアキのせいではない、あいつ自身が優秀ではなかった。ただ、それだけだというのに！」

「……ということはトビーを殺したのは！」

遊星はデュエルディスクについている1つのボタンを押すとデイヴァインに問いかける。

「トビー…そんな名前だったな。私はあの程度の作品のことなど一々覚えていられなくてね。思わず実験中に死んでしまったことまで忘れていたよ」

「この野郎！」

「おっと、ファイヤー・ボール！」

「うわっ！」

コナミは怒りのあまりデイヴァインに飛びかかるもかわされた拳句、背後からファイヤー・ボールを食らってしまい危うく外のベランダから落ちそうになってしまう。なんとかベランダの淵を掴み落ちるのを免れている。

「そのまま突き落としてやろう…。サイコ・ソード！」

デイヴァインが緑色に発光する剣を実体化させ、コナミが掴んでいる手に向かって振りかざす。だがその前に遊星がデイヴァインに語りかけた。

「かかったなデイヴアイン！俺のデュエルディスクは手作りでね！マルチデュエル用の音声ネットワークをオンにしておいた。今の会話ミステイに聞こえているぞ！」

「なんだと!？」

デイヴアインがミステイの方を見ると鬼神のごとく怒っているのが分かった。

「デイヴアイン……トビーを殺したのはあなただったのね。絶対に許さない！」

「ははは！私を責めるのは筋違いだ。無能だった貴様の弟が悪いのだよ！」

「あなたに情けをかける余地はないわ！やりなさい地縛神 Ccarrayhua！」

巨大なトカゲの形をした地縛神がデイヴアインに近づき、その長い舌でデイヴアインを包む。

「なっ……!?まさか……や、やめろ！」

そのまま地縛神はデイヴアインを飲み込んでしまった。

「く……食っちまいやがった」

その後ミステイはトビーを殺したのがアキだと勘違いしてしまったことを謝り、トビーの仇を討ったことで戦う理由もなくなったということでサレンダーを試みたが、冥界の王に乗っ取られ強制的にデュエルを継続させられてしまう。アキはミステイを地縛神から解放するため自らのシグナーとしてのドラゴン、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果で地縛神を破壊し勝利を収める。だが敗者であるミステイはそのまま消えてしまった。さらに悪いことにアキがミステイを倒す頃には既に日は落ちてしまっていた……。

総勢7人が遊園地から出たその時、サテライトに封印されていた冥界の王が復活してしまった。地縛神よりも強大な体を動かしシテイに向かつて歩いていく。

「いけない……あれをシテイに向かわせちゃダメ……！」

精霊から悪い予感を読み取った龍可が体を震わせる。その時痣が光り輝いたかと思うと赤き龍が現れそこにいた皆を乗せてシテイに

向かっていった。

「赤き竜…!?俺たちをどこに連れて行く気だ？」

「恐らく俺たちがすべき事がまだ残っているのだろう」

「へっ…こうなりや最後まで付き合ってやるぜ！」

遊星、ジャック、クロウが意気込んでいると不意に龍亜があることに気づく。

「…あれ？コナミは？」

「本当だ…コナミがいないわ」

「何ですって!？」

「そういえば…！牛尾捜査官もいませんわ！」

彼らは赤き龍に乗っていかなかった。果たしてどこに行ったのだろうか？

「おいコナミよお…。俺になんか用があんのか？」

「大アリだぜ。俺に教えて欲しいんだ、アルカディアムーブメントがどんなことやってる組織なのか」

「は？なんでお前にそんなことを」

「いいから」

「まあ…いいけどよ。アルカディアムーブメントってのはサイコパワーを使った兵士を育てて戦争に利用して、サイコデュエリストが世の中を動かす組織を作ろうっていうとんでもねえ組織だ」

「ざっくり言うと世界征服ってわけか。なるほどな。おっと、ついたぜ」

「ここは…十六夜がミスティと戦ってた場所じゃねえか。なんでまた戻ってきたんだ？」

「…！説明してる時間はねえ、隠れてろ！」

「お、おいちよつと…」

牛尾を隠すコナミ、その目線の先には1人の人物がいた。

「わ、私は…助かったのか？そうか…ミスティが倒されたことで地縛神から解放されたのか！良くやったぞアキ…やはり君は最高だ！」

そう、先ほど地縛神に飲み込まれたデイヴアイン。だが地縛神が消滅すればその生贄になった人々が蘇るのは鬼柳の時に分かっている。

つまりミスティの操る地縛神が倒されたことでデイヴアインの魂も蘇ってしまったのだ。

「おい」

「…ファイヤー・ボール!」

「ワンパターンだぜ!」

とつさにデュエルディスクにファイヤー・ボールをセットし発射するデイヴアイン。だが予想していたコナミはバツク宙で火の玉を回避する。

「今度はこっちの番だ!」

コナミがデイヴアインのデュエルディスクをめがけて何かを投げつけた。

「なに…!?なんだこれは!」

「デュエルアンカーだ。知らないか?なら教えてやるぜ!そいつはデュエルの決着がつくまでは外せねえ!そして負けた方のデュエルディスクは…ドカン、だ!」

「何だと…?ふん、貴様とデュエルなどする理由もない。こんなもの…サイコ・ソード!」

デュエルディスクにサイコ・ソードをセットし実体化させる。それでデュエルアンカーを切ろうとするデイヴアインだったが…。

「馬鹿な…。切れないだど!」

「へっ…サテライトを制覇したチームサテイスフアクション愛用のデュエルアンカーなめんなよ!デュエル以外でそいつは外せねえ!」  
「くっ…一刻も早くアキを探さねばならぬというのに!いいだろう!相手をしてやる、私のサイコデュエルでな!」

「「デュエル!」」

遊星達が冥界の王を消滅させるためのラストデュエルに挑む頃、コナミはデイヴアインとのデュエルを始めていた…。



おじさんのデュエルは本気と書いてマジと読むからね

デュエルアンカーによってデュエルディスクを繋がれた2人が互いに向かい合いデュエルの体勢を整える。

「デュエル！」

先攻のランプがついたのはダイヴァイン。

「先行は私からだ、ドロ―！私はチューナーモンスタークレボンスを召喚する」

くねくねとしたダンスを踊りながら場に現れたのは顔が画面になっており目の辺りが記号で表現されているコンピュータロボット。

クレボンス 攻撃力1200

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

ダイヴァイン LP4000

フィールド 『クレボンス』（攻撃表示）

セット1

手札4

「俺のターン、ドロ―！俺が召喚するのはこいつだ！華麗なる密偵スパイ―  
C！」

赤いドレスを纏った麗しきレディが華やかにフィールドに舞い降りる。

華麗なる密偵―C 攻撃力1200

「攻撃力はクレボンスと互角…相打ち狙いか？」

「それはこのカードの効果次第さ！スパイ―Cの効果発動、  
秘密調査！シークレットリサーチ相手のエクストラデッキのカードをランダムに確認する！そのモンスターの攻撃力でこのカードの効果は変化するぜ！」

「なんだと…？」

スパイ―Cは素早くダイヴァインに近づくと彼のエクストラデッキから1枚のカードを取り出し、どこからか照らされるスポットライトによってそのモンスターのシルエツトを映し出す。

「マジカル・アンドロイドか…。攻撃力は2400だ」

「よし！確認したモンスターは攻撃力が2000以上の場合はスパ  
イーCの攻撃力は1000アップする！」

密偵の仕事を終え、グラスにワインを注ぎ一息をつくレディ。癒し  
の一時が彼女に力を与えた。

華麗なる密偵ーC 攻撃力1200↓2200

「いきなり攻撃力2200か。多少はやるな」

「その余裕を崩してやるぜ！バトル、スパイーCでクレボンスに攻撃  
だ！」

スパイーCは太ももにつけていたベルトからナイフを取り出すと  
逆手に持ちクレボンスの首を取ろうとする。

「だがその程度の攻撃がこの私に通じるとでも思うな！クレボンスの  
効果発動！攻撃の対象となった時800のライフを払うことでその  
攻撃を無効にできる！」

クレボンスが画面に映っている目を使って敵の動きを見極め、攻撃  
が当たる寸前体を捻りナイフをかわす。ナイフをかわされるとは  
思っていなかったのかとつきにスパイーCは大きく後ろに戻る。

デイヴァイン LP4000↓3200

「防がれちまったか！だけどライフを800払ったのは軽くないはず  
だ…。俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP4000

フィールド 『華麗なるスパイーC』（攻撃表示）

セット1

手札4

「ならば私のターンだ！私はメンタルプロテクターを召喚する」

何かを守るようにロボットが頭につけている2つの電球で自在に  
電気を操りながらクレボンスの隣に並んだ。

「クレボンスはチューナーモンスター…。来るか！」

「レベル3のメンタルプロテクターにレベル2のクレボンスをチュ  
ーニング！心の深淵に燃え上がる我が憎しみの炎よ、黒き怒濤となりて  
この世界を蹂躪せよ！シンクロ召喚！現れる、マジカル・アンドロイ

ド！」

2体のモンスターか同調して現れたのは女性の人造人間。左の手には杖を握っておりまるで魔法使いのような風貌をしている。

マジカル・アンドロイド 攻撃力2400

「スパイーCの攻撃力を超えてきやがったか！」

「そんなモンスター蹴散らしてくれろ！マジカル・アンドロイドでスパイーCへと攻撃！」

ナイフを護身に使う密偵の動きを杖を振るうことで封じ込め、無防備な体に杖で物理的な攻撃を食らわせた。

コナミ LP4000↓3800

さらにダイヴアインは自らのサイコパワーを駆使しコナミに衝撃を与えた。

「どうだ？サイコデュエルの切れ味は？」

「へっ…こんなもの！ダークシグナーのデュエルの衝撃の方が10倍は痛かったぜ！」

「貴様…私を怒らせたな！いいだろう、貴様は徹底的に叩き潰してやる！私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！エンドフェイズにマジカル・アンドロイドの効果により私のフィールドにいるサイキック族モンスターの数×600のライフを回復する！私の場にはマジカル・アンドロイド1体、よってライフを600回復する」

マジカル・アンドロイドが手を差し伸べるとそこから出てきた光がダイヴアインを照らした。

ダイヴアイン LP3200↓3800

「ライフを回復してきたか…。あいつはほつとくとやべえな」

「まだ終わりではないぞ？このカードはエンドフェイズにのみ発動することができる…リバースカードオープン、スーパーナチュアルヒーリング超能力治療！このターン墓地に送られたサイキック族モンスターの数×1000のライフを回復する！わたしがこのターン墓地に送ったのはシンクロ素材として利用した2体、よってさらに2000のライフを回復する！」

ダイヴアインが発動したトラップからも光が降り注がれダイヴア

インを癒していく。

デイヴァイン LP3800↓5800

「一気に2600もライフを回復した：!?!」

「伊達にアルカディアムーブメントの総師を名乗っているわけではな  
いんでね。さあ、今度こそターンエンドだ」

デイヴァイン LP5800

フィールド 『マジカル・アンドロイド』（攻撃表示）

セツト1

手札3

「俺のターン！よし、行くぜ。俺は予想GUY<sup>ガイ</sup>を発動！俺のフィールドにモンスターがない時デツキからレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚できる！来てくれ、チューナーモンスタージエネクス・コントローラー！」

フィールドに急に発生した放電からジエネクス・コントローラーが出てきた。

「さらに手札からギガテック・ウルフを召喚！」

鉄屑によって作られたオオカミがジエネクス・コントローラーの隣に降り立つ。そして既に次の行動を予測しているかのようにジエネクス・コントローラーに近づいていった。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「さあ行くぜ！レベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA<sup>アーリー</sup>・ジエネクス・トライフォース！」

ジエネクス・コントローラーの頭にある左右のアンテナから発せられる電波がギガテック・ウルフの姿を変えていく。人型のロボットへと変形したところでジエネクス・コントローラーは中枢コアに転送され、炎の力を制御した。

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

「ち…マジカル・アンドロイドより攻撃力が高いシンクロモンスター

を出してきたか」

「こいつでそいつを燃やしてやるぜ。トライフォースでマジカル・アンドロイドに攻撃！」

トライフォースの手首のストッパーが外れ、その穴から出た火炎放射がマジカル・アンドロイドを襲う。杖で炎を振り払おうとするも高熱の炎に杖を燃やされてしまい、自身の体も炎に包み込まれてしまった。

ダイヴアイン LP5800↓5700

「どうだ！」

「たかが100ポイント如きくれてやる……！」

「甘いな！炎属性をシンクロ素材にしたトライフォースの効果発動、戦闘で破壊したモンスターへの攻撃力分のダメージを与える！マジカル・アンドロイドの攻撃力は2400！」

「なに!？」

トライフォースの火炎放射がダイヴアインにも放たれ、そのライフを削った。

ダイヴアイン LP5700↓3300

「よっし！せっかく回復したライフも簡単に消えたな！」

「調子にのるなよ……！この程度私にとつてはピンチですらない！」

「そうかい。なら俺はお前のシンクロモンスターを破壊したことで速攻魔法グリッド・グラードを発動！このカードの効果でカードを2枚ドロウする！カードを1枚伏せてターンエンド！」

「私はこの瞬間速攻魔法を発動する！緊急テレポート！」

「このタイミングでカードを発動してきただど!？」

「緊急テレポートはデッキからレベル3以下のサイキック族モンスターを特殊召喚する。来い、テレポンド・D・D！」

テレポンド・D・D 攻撃力500

異次元から小型のロボットが現れたかと思うとすぐに場から消えてしまった。

「あ、あれ？いなくなった？」

「緊急テレポートのもう1つの効果によりエンドフェイズに呼び出し

たモンスターを除外する。だがテレポンド・D・Dが除外されたことで効果を発動する！デッキの攻撃力1500以下のサイキックモンスターを除外させてもらう、私はチューナーモンスターのサイ・ガールを除外！」

「自分のモンスターをどんどん除外してきやがった…。何を仕掛けてくる気だ？まあいい、今度こそターンエンド！」

コナミ LP3800

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）

セット2

手札3

「今に分かる。私のターン！このスタンバイフェイズにテレポンド・D・Dに除外されたサイ・ガールは特殊召喚される。さらに除外ゾーンから特殊召喚したサイ・ガールは私のデッキの上の1番上のカードを除外する！」

場に出てきた小柄な女の子が杖を振るってダイヴァインのデッキの1番上のカードを亜空間へと飛ばした。

サイ・ガール 攻撃力500

「除外ゾーンから特殊召喚だど!?トリッキーなやつだぜ…！」

「さらに私はサイ・ガールをリリースしマックス・テレポーターをアドバンス召喚する！」

白いマントに身を包んだ髪の長い青年がサイ・ガールと交代するように場に出てきた。すると亜空間からでてきた1枚のカードがダイヴァインの手に収まる。

マックス・テレポーター 攻撃力2100

「それは…さつきサイ・ガールが飛ばしたカードか！」

「その通り、サイ・ガールがフィールドから墓地に送られた時サイ・ガールが除外したカードは私の手札に加わるのだよ。だが本命はここからだ私はマックス・テレポーターの効果を発動する、そのコストとしてライフを2000払う！」

「に、2000も払うだと！正気か!？」

これはサイコデュエル、サイコパワーを持っているダイヴァインと

いえどもコストによるダメージは免れない。

ディヴァイン LP3300↓1300

「私は至って正気だ。この程度私が受けてきた苦しみに比べればどうということはない」

「苦しみ？」

「貴様はサイコデュエリストがどういう扱いを受けているか知っているか？」

「…いや、知らねえ」

「私たちはな、この特異な能力故に変異者として差別されてきた。何の取り柄もない一般人共にな。実に馬鹿馬鹿しい…。どうして特別な能力を持つ我らが何も特別な能力を持たぬ一般人に差別を受けなくてはならない？」

「それは…まあ確かに辛いだろうな」

「だから私は決めたのだよ。サイコデュエリストが世の中を動かせるようにしようとな。そのためには…私にはアキが必要なのだ！」

「だけどあいつはお前のものじゃねえ！何というか…そう、俺たちの仲間だ！」

「仲間だと？実にくだらな発想だな。そもそもお前は不動遊星のようになアキのことを深くは知るまい」

「ああ。だけど遊星はあいつを仲間だから助けたいって言った。遊星の仲間は俺の仲間だ！助ける理由なんてそれで十分！」

「…貴様と話してよく分かったことがある。私と貴様の思想は相容れないということだ。デュエルを続行する！マックス・テレポーターの効果によりデッキから2体のレベル3サイキック族モンスターを特殊召喚する。来い、寡黙なるサイコプリースト！そしてチューナーモンスターサイコ・コマンダー！」

マックス・テレポーターの両隣に2体のサイキックモンスターが瞬間移動してきた。

寡黙なるサイコプリースト 守備力2100

サイコ・コマンダー 攻撃力1400

「モンスターを一気に増やしやがった…！」

「まだ終わらぬぞ？寡黙なるサイコプリーストの効果により手札を1枚墓地へ送ることで墓地のサイ・ガールを除外する！」

「サイ・ガールを除外…？ってこのパターンは！」

「さすがに察したようだな。私はレベル3寡黙なるサイコプリーストにレベル3のサイコ・コマンダーをチューニング！未だ収まらぬわが憎しみの炎よ、この世界を絶望へと貶めろ！シンクロ召喚！具現せよ、サイコ・デビル！」

白い胴体に黒の翼を身にまとったドラゴンというよりは悪魔と呼称するのが相応しい禍々しきモンスターが場に降り立った。

サイコ・デビル 攻撃力2400

「さらに寡黙なるサイコプリーストがフィールドから墓地に送られたことで先ほど除外したサイ・ガールが再び場に特殊召喚されその効果で私のデッキの1番上のカードを除外する！」

「やっぱりか…！」

再び現れた小柄な少女が1枚のカードを亜空間へと飛ばしていく。

「そしてサイ・ガールはチューナーモンスターだ。あとはわかるな？」

「まさか連続シンクロ…!？」

「私はレベル6のマックス・テレポーターにレベル2のサイ・ガールをチューニング！逆巻け、我が復讐の黒炎！シンクロ召喚、来いメンタルスファイア・デーモン！」

先ほどの悪魔とはまた違った胴体の骨が直接浮き出ている緑色の翼を持つ悪魔が場に降臨した。

メンタルスファイア・デーモン 攻撃力2700

さらに亜空間から1枚のカードがダイヴァインに飛んでくる。

「ほう、いいカードだ。墓地のサイキック族モンスターマックス・テレポーターを除外することで永続魔法フューチャー・グロウを発動する！このカードが場にある限り私のフィールドのサイキック族モンスターの攻撃力は除外したマックス・テレポーターのレベル×200アップする。マックス・テレポーターのレベルは6、よって1200のアップだ！」

マックス・テレポーターのサイコパワーが2体の悪魔へと受け継が



れ周囲に緑色の磁場が発生した。

サイコ・デビル 攻撃力2400↓3600

メンタルスフィア・デーモン 攻撃力2700↓3900

「攻撃力3000越えが2体だと！なんじゃそりや!？」

「これが総師の力だ…。だが私は貴様に容赦する気などない。さらにサイコ・デビルの効果を発動する！相手の手札を1枚ランダムに選びそれがモンスター・魔法・罫のどの種類かを当てれば次の相手ターン終了時まで攻撃力を1000アップする！」

コナミの手札からランダムに1枚のカードが選ばれ、フィールドに裏側の状態で設置される。

「当てられるもんなら当てて見やがれ！」

「当ててみせよう…。私が選択するのは…モンスターカード！」

デイヴァインの宣言を受けて伏せられていたカードが表になる。そのカードは大木炭<sup>インバチ</sup>18、モンスターカードだった。

「げっ…当ててやった！」

サイコ・デビル 攻撃力3600↓4600

「さあ、バトルといこう。私はメンタルスフィア・デーモンでライフフォースへ攻撃をする！」

緑の翼を自在に操り黄色の爪でライフフォースを切り裂きにかか

る。  
「…かかったな！リバースカードオープン、共闘！手札の大木炭18を墓地送ることでメンタルスフィア・デーモンを対象に発動だ！これでメンタルスフィア・デーモンの攻撃力は大木炭18と同じ100になる！」

「なんだと!？」

「トライフォースの反撃で俺の勝ちだ！」

トライフォースが再び火炎放射をメンタルスフィア・デーモンに向けて放つ。

その炎はメンタルスフィア・デーモンを包み込んだ。

「お前のライフは1300！これは耐えられねえだろ！」

「…果たしてそうかな？」

「なに？」

メンタルスファイア・デーモンは炎を振り払いトライフオーブを中枢コアを狙って切り裂いた。

コナミ LP3800↓2400

「トライフオーブがやられた!？」

「私の最強モンスター、メンタルスファイア・デーモンをなめないでもらいたいな。こいつはサイキック族モンスター1体を対象にする魔法・罠カードの発動を1000ライフ払うことで無効にできる!この効果を使い共闘の発動を無効にしていたのだ!」

デイヴァイン LP1300↓300

「そんな効果があったのか!?!けどお前の残りライフは300:お前も余裕はないだろ!」

「笑わせる。言っただろう?メンタルスファイア・デーモンをなめないでもらいたいな。メンタルスファイア・デーモンが戦闘で相手モンスターを破壊した時破壊したモンスターの攻撃力分のライフを回復する!」

メンタルスファイア・デーモンの翼からデイヴァインに光が降り注ぎライフを回復させる。

デイヴァイン LP300↓2800

「そんな!?!」

「だが貴様には私のライフを気にしている余裕はあるまい。やれサイコ・デビル!奴にダイレクトアタックだ!メンタルスファイア・デーモンの効果でこいつは魔法・罠の対象にはならないも同然、終わりだ!」

サイコ・デビルが黒き翼から電磁波をコナミに向けて放出した。

「へっ:地縛神でそういうのは慣れてんだよ!トランプ発動、ガード・ブロック!俺への戦闘ダメージを0にしカードを1枚ドロウする!」

不可視の障壁がコナミを電磁波から守り、サイコパワーの衝撃を免れる。

「ち:紙一重でかわしたか。だがそれも時間の問題だ。私はこれターンエンド!」

デイヴァイン LP2800

フィールド 『サイコ・デビル』（攻撃表示） 『メンタルスファイア・デモン』（攻撃表示）

セット0 『フューチャー・グロウ』

手札3

遊星達の前に2体のダークシンクロが降り立ち逆境に立たされている中、コナミもデイヴアインを相手に逆境を強いられていた…。

どんなに離れたって途切れることはない

遊星の仲間、アキを守るためデイヴァインとサイコデュエルを行うコナミ。だがモンスターが全滅し相手フィールドには攻撃力3000オーバーの強力なシンクロモンスターが2体とピンチに陥っていた。

「俺のターン、ドロロー！あのモンスター達を倒せるカードは俺の手札にはない！なら、俺はカード・ブロツカーを召喚だ！こいつは召喚したとき守備表示になる」

場に現れた小柄なナイトがコナミを守るように盾を構えた。

カード・ブロツカー 守備力400

「そんなモンスターで私の攻撃を防げるとでも？」

「どうだろうか？俺はさらに残りの手札3枚を全て伏せる！これで俺の手札は0だ！」

「手札0だと？ちっ、そういうことか」

「お前の場のサイコ・デビルは俺の手札の種類を言い当てることで攻撃力を上げる。だが俺の手札が0枚ならその効果は使えねえ！これが俺の！ハンドレスコンボだ！これでターンエンド！」

鬼柳のことを脳裏に浮かべながら手札を0にするコナミ。彼は1人でデイヴァインに対峙しているが1人で戦っているわけではない。恐らく今頃最後の決着をつけるために戦っているであろう遊星達、ダークシグナーとして敵対しながらも最後はやはり仲間だと認めてくれた鬼柳、彼らとの絆を胸にコナミは自分に今できることをやっている。

「このエンドフェイズにサイコ・デビルの効果は切れ、攻撃力は1000下がる」

サイコ・デビル 攻撃力4600↓3600

巨大化していた体がわずかに小さくなる。だがその力は未だに強大だ。

コナミ LP2400

フィールド カード・ブロツカー（守備表示）

セット4

手札0

「だがその程度で私を止められると思うな！私はチューナーモンスターメンタルシーカーを召喚！そして私はレベル6のサイコ・デビルにレベル3のメンタルシーカーをチューニング！我が高ぶりし復讐の黒炎よ…その炎で全ての敵を焼き殺せ！シンクロ召喚！圧殺せよ、ハイパーサイコガンナー！」

悪魔がその姿を変え、近未来的な白い装備を身につけ2丁のサイコガンンを装着した人造人間が現れた。

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3000↓4200

「さらにシンクロしてきやがったか…！しかもフューチャーグロウの効果で1200アップして化け物レベルの攻撃力に！」

「そう…サイコデュエリストとは一般人から見れば化け物なのだよ。これで終わらせてくれる、ハイパーサイコガンナーは守備モンスターに攻撃したときその守備力を攻撃力が超過していればその分の戦闘ダメージを与える！ゆけ、ハイパーサイコガンナー！カード・ブロッカーごとやつを命を絶て！」

ハイパーサイコガンナーが右に握っている拳銃を操りカード・ブロッカーの盾をすり抜け本体を狙い撃った。

「そうはいくか！カード・ブロッカーは攻撃対象になったとき3枚までデッキの上から墓地に送り、送ったカードの数×500ポイントの守備力をアップする！俺はもちろん3枚のカードを墓地に！」

カード・ブロッカー 守備力400↓1900

3枚のカードの力を得て盾が大きくなる。ハイパーサイコガンナーの銃撃をぎりぎり受け止めるもその力に弾かれてしまった。だが墓地に送られたカードはバックファイア、マインド・オン・エア、そして…。

「っしー墓地のシールド・ウォリアーの効果発動！このカードを除外することでこの戦闘ではカード・ブロッカーは破壊されない！」

「だがダメージは受けてもらう！」

「その前にトラップ発動、体力増強剤スーパーZ！2000ポイント

以上の戦闘ダメージを受けるときその前に4000のライフを回復する！くはっ…!?!」

とっさにライフを回復するもその直後にサイコパワーの衝撃により吹き飛んでしまい、受け身もとれず背後の壁に叩きつけられてしまう。

コナミ LP2400↓6400↓4100

「おっと…フルパワーでやってしまったな。これではデュエルも続けることはできないか？」

「なめ…るな！」

よろけながらも何とか立ち上がるコナミ、彼の闘志はまだ消えてなかった。なぜなら今友達も辛く苦しい戦いをしているはずだから。自分だけ投げ出すことは出来なかった。

「これだけくらっても戦意を喪失しないとはな」

「俺はサテライト1諦めが悪いんだぜ…。お前に勝つまで食らいついでやる…！」

「そうか。なら貴様にバッドニュースだ！ハイパーサイコガンナーは守備モンスターに攻撃した時超過した数値分私のライフを回復する！」

ハイパーサイコガンナーが左の拳銃をダイヴアインに放つと今度はダイヴアインのライフが回復した。

ダイヴアイン LP2800↓5100

「なん…だって？一時期300だったライフがここまで…！」

「貴様に勝機はない。サレンダーでもすれば命は助かるかもな？」

そう言いながらもダイヴアインはここまで邪魔したコナミを生かして返すつもりはなかった。

「…サレンダーはしねえ！俺は絶対にあきらめねえ！」

「貴様の粘り…私をイラつかせる！やれメンタルスフィア・デーモン、今度こそカード・ブロッカーを破壊しろ！」

緑の翼をはためかせカード・ブロッカーを盾ごと切り裂こうとする。

「カード・ブロッカーの効果を発動！デッキの上から3枚墓地に送り

守備力アップだ！」

カード・ブロッカーの盾が自身で支えるのにギリギリの大きさまでアップする。

カード・ブロッカー 守備力1900↓3400

「だが私のメンタルスファイア・デーモンの敵ではない！」

「…冷静さを欠いたなデイヴァイン！500のライフを払って速攻魔法発動、ツイスター！このカードの効果でフィールドの表側表示の魔法・罠カードを1枚破壊できる！俺はフューチャーグロウを破壊する！」

コナミ LP4100↓3600

「…しまった…」

小型の台風がデイヴァインのフィールドに置かれているフューチャーグロウを吹き飛ばし、破壊した。

メンタルスファイア・デーモン 攻撃力3900↓2700

ハイパーサイコガンナー 攻撃力4200↓3000

カード・ブロッカーの盾がデーモンが切り裂こうとして出した爪を弾き飛ばす。

デイヴァイン LP5100↓4400

「貴様…ハイパーサイコガンナーの時にそのカードを発動すればダメージを抑えられたものを！」

「悪いな、体力増強剤スーパージを発動するために温存させてもらったのさ」

「悪運の強いやつめ…！私はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

デイヴァイン LP4400

フィールド 『メンタルスファイア・デーモン』（攻撃表示） 『ハイパーサイコガンナー』（攻撃表示）

セット1

手札2

「俺のターン！行かぜダブルリバーズ！凡人の施し、そして補充要員！」

「ダブルリバーズだ?!」

「まずは補充要員の効果発動！俺の墓地にモンスターが5体以上いる時俺の墓地から攻撃力1500以下の効果モンスター以外のモンスターを3体まで手札に加える！俺が加えるのはジェネクス・コントローラー、大木炭18、そしてギガテック・ウルフ！」

「そんな雑魚どもを加えて何が出来る！」

「慌てんなよ！さらに凡人の施しの効果だ！カードを2枚ドローして手札の通常モンスターを1体除外する、俺は大木炭18を除外する」「ちっ…手札を交換したか」

「今度はこつちから行くぜ！俺はチューナーモンスタージェネクス・コントローラーを召喚！そしてレベル3のカードのブロッカーにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーが電波を飛ばし小さな騎士の姿を変えていく。

「地のエレメントを司る者よ、自然の力を味方につけ地の利を得よ！シンクロ召喚！あらゆる土地を知り尽くす番人、ジオ・ジェネクス！」  
ジェネクス・コントローラーも組み込んだ重装備の炭鋏夫が場に現れた。

ジオ・ジェネクス 攻撃力1800

「だが攻撃力は私のモンスターに遠く及ばない！」

「そうでもないさ！手札から黙する死者を発動し、墓地の通常モンスタージェネクス・コントローラーを守備表示で特殊召喚！」

ジェネクス・コントローラー 守備力1200

場に現れたジェネクス・コントローラーは守備の形をとるも戦いの疲れか少しボロボロになってきている。

「そしてジオ・ジェネクスは場にレベル4以下のジェネクスモンスターがいる時エンドフェイズまで守備力を攻撃力にする！」

効果の発動とともに装備が変形して切れ味の良さそうなツルハシへと変わった。

ジオ・ジェネクス 攻撃力1800↓2800

「く…」

「バトル！ジオ・ジェネクスでメンタルスフィア・デーモンに攻撃！」



ジオ・ジエネクスが振るったツルハシはデーモンの翼に致命的なダメージを与えた。

デイヴァイン LP4400↓4300

「俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

ジオ・ジエネクス 攻撃力2800↓1800

コナミ LP3600

フィールド 『ジオ・ジエネクス』（攻撃表示） 『ジエネクス・コントローラー』（守備表示）

セット2

手札1

「私のターン！私は貴様をこのターンで沈める！手札よりサイコ・ウォールドを召喚する。そして800のライフを払い効果を発動！自身の攻撃を放棄しハイパーサイコガンナーに2回攻撃の権利を付与する！」

サイコ・ウォールド 攻撃力1900

デイヴァイン LP4300↓3500

サイコ・ウォールドのサイコパワーがハイパーサイコガンナーに渡された。

「そしてこの装備魔法をハイパーサイコガンナーに装備する！サイコ・ブレイド！私のライフを2000払いハイパーサイコガンナーの攻撃力を2000上げる！」

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3000↓5000

デイヴァイン LP3500↓1500

「…！」

「これで貴様に逃げ場はない！ハイパーサイコガンナーでジエネクス・コントローラーへ攻撃！貫通ダメージで貴様のライフは消え去る！文字通り貴様の命もな！」

ハイパーサイコガンナーがサイコ・ブレイドの力を使いジエネクス・コントローラーへと襲いかかる。

「そうはいかないぜ！トラップ発動！あまのじゃくの呪い！このターンのエンドフェイズまで攻撃力を上げる効果は下げる効果に変わる

！」

ハイパーサイコガンナー 攻撃力5000↓1000

「馬鹿な…!?私の力が…!」

小さく縮んだサイコ・ブレイドをジエネクス・コントローラーは受け止め、それを弾き返した。

デイヴアイン LP1500↓1300

「だがこのターンでその呪いは消え去る!次のターンで終わりだ!私は2枚のカードを伏せる!これでターンエンドだ」

ハイパーサイコガンナー 攻撃力1000↓5000

デイヴアイン LP1300

フィールド 『ハイパーサイコガンナー』(攻撃表示) 『サイコ・

ウォールド』(攻撃表示)

セット2 『サイコ・ブレイド』

手札0

「俺のターン…:ドロー!勝負だデイヴアイン!ジオ・ジエネクスの効果を発動し攻守を反転させる!さらに俺は永続トラップ蘇りし魂を発動!墓地の通常モンスター・ガジェット・ソルジャーを守備表示で特殊召喚する!」

ジオ・ジエネクス 攻撃力1800↓2800

フィールドにあいた穴から機械兵が顔を出す。

ガジェット・ソルジャー 守備力2000

「そしてレベル6のガジェット・ソルジャーにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング!白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ!シンクロ召喚!降臨せよ、蒼眼の銀龍!」

2体が同調すると気高き白き龍が空から舞い降りてきた。

蒼眼の銀龍 攻撃力2500

「銀龍が特殊召喚に成功したことで次のターンのエンドフェイズまで効果の対象にはならず効果で破壊されない!」

(ちっ…私の伏せカードの1枚は念動力。サイキック族モンスターがバトルで破壊された時、攻撃したモンスターを破壊してその攻撃力分のライフを回復する効果だ。あのドラゴンには使うことができない

か……！)

「だがそんなものはハイパーサイコガンナーで蹴散らしてくれる！」  
「このままならな……。このドロウに全てを賭けるぜ！手札からマジック・プランターを発動！永続トラップ蘇りし魂を墓地に送りカードを2枚ドロウする。行くぜ……ドロウ！」

コナミが引いたカードと今の手札、相手のフィールド、全てがコナミの中で一つの線に結ばれていく。

「来たぜ……！魔法カード悪魔への貢物！相手が特殊召喚したモンスターを墓地に送り手札の通常モンスターを特殊召喚する！」

「なに……!?ちつ、トラップ発動サイコ・ヒーリング！私の場のサイキック族モンスターの数×10000のライフを回復する！」

デイヴァイン LP13000↓3300

ハイパーサイコガンナーを媒体に手札のギガテック・ウルフが現れた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「無駄だデイヴァイン！バトル！銀龍でサイコ・ワールドに攻撃！白銀のバーストストリーム！」

「ぐっ……!?!」

白きエネルギー弾がサイコ・ワールドを跡形もなく吹き飛ばした。

デイヴァイン LP33000↓2700

「馬鹿な……!?!総師である私が貴様……ごときに負けるだど！何故だ……?何故……！」

「お前にはあつて俺にはないものがある！それは仲間だ！かつての友との絆、場所は離れていても共に戦っている友との絆、そして友の仲間を守りたいという絆！それが俺を支えてくれるんだ！」

「違う……！アキは私のものだ……！決して貴様らの仲間などでは！」

「少なくとももうお前のものではないぜ！お前があのだ縛神に食われた後あいつは自分の意思でシグナーとしての責任を果たした。お前のせいでサイコパワーを全開にさせられた状態からな！」

「嘘だ……。アキはただ私の言うことさえ聞いていればいいんだ。それ

があいつにとっても1番だというのに！」

「サイコデュエリストへの差別がいつの間にかお前の心の中で他人への思いを歪めちまったか……。：ジオ・ジエネクスでダイレクトアタック！」

「私は…間違っただけだ！間違っているのは奴らの方だ…！」

デイヴァイン LP2700↓0

勝負は決した。コナミについているデュエルアンカーは外れデイヴァインのデュエルディスクは爆発した。

「貴様など…サイコパワーがなくとも！」

デュエルに負けたデイヴァインは暴力でこの場を切り抜けようとする。

「悪いな…！俺はチームサテイスフアクション時代にそうやって反撃してくるやつを倒す役割だったんだよ！」

コナミはデイヴァインの鳩尾みぞおちにパンチを入れ、気絶させた。

「ふう…終わったか」

コナミが安堵の息を吐いていると隠れていた牛尾が出てくる。

「お前よく無事だったな。とりあえずあとはセキュリティに任せな」

「絶対にあいつをディスクに近づけさせんなよ」

「わーってるよ。…ん？コナミ、シテイの方をみてください」

サテライトからシテイに向かっていた冥界の王が崩れていく。

シテイには光が降り注ぎ、鬼柳の時と同じく地縛神の生贄にされた人々が戻っているのが分かった。

「遊星…やったんだな」

「ん？どうして遊星がやったってわかるんだ？」

「そんなの決まってるだろ」

「？」

「ただ離れていても俺たちは絆で繋がっているからさ」

そんなコナミの返答にシテイの方から聞こえてきたのは赤き龍の咆哮だった。

## 第2章 WRGPに向けた戦い もつと言葉のキャッチボールをしるよ

遊星達がシグナーとダークシグナーの戦いに終止符を打ちサテライトに平和がもたらされた。コナミによって気絶させられたデイヴアインはセキュリティによって収容所送りとなりアキの身に危険が及ぶことはないだろう。そんな戦いから半年後、コナミは何をしていたかというところ…。

「おいガキども集まれー！海野財閥からのカードの寄付だぞー！いないなら俺がもらうぞー！」

「…庶民にはあげませんわよ？」

マーサやクロウが面倒を見ていた子供達を集め、カードをあげていた。ダークシグナーとの戦いが終わるや否や海野財閥によるサテライトへの援助が始まり、今では貧困によって苦しむ人はほとんどいない。遊星がゴドウィンと取り付けていた約束によってシテイとサテライトをつなぐダイダロスブリッジが完成したのも大きい。

「サテライトも平和になったな。ありがとな幸子」

「礼はいらないですわ。それよりあの時急になくなってから何の連絡もしなかったことを謝って欲しいですわね」

「いや…あはは」

精霊世界に飛ばされ、帰ってきてからは鬼柳の元へ向かうので精一杯で幸子に何も言っていなかったことを根に持たれていた。

「はあ…まああの時は色々大変だったみたいですからいいですわ」

そんな話をしてしているとカードを配り終わった。子供達は自分の手に入れたカードを見せ合い無邪気にはしゃいでいる。

「そういえば彼らは今はシテイに住んでいるらしいですわね」

「ああ…遊星達か。マーサの知り合いのゾラっていうおばさんに家を貸してもらったらしい。確かなんか大会に出るみたいだぞ」

「大会…ということは十中八九WRGPでしようね」

「どんな大会なんだ？」

「知りませんか？世界レベルのデュエリストを集めて行われるチーム形式のライディングデュエルの大会ですわ。この一大イベントに私の財閥もかんでいますのよ」

「ああ…お前の財閥ってDホイールを作ってるんだっけ？」

「そうですね。ボルガー&カンパニー社には及びませんが次点でうちの財閥が優秀ですの。このイベントに乗らない手はありませんわ」

カードを配るのが終わったため1度海野財閥がサテライトでの活動の拠点として建設した施設に戻ろうと2人ともDホイールに乗りこむ。

「また来てねー！」

「コナミー！今度俺ともデュエルしろよなー！」

「コナミ兄ちゃん、クロウ兄ちゃんにはリリは大丈夫だって伝えたい欲しいですの」

「おうー！」

子供達の声を後ろに2人はDホイールを走らせる。

「それにしても幸子がDホイールに乗れるなんてな」

「お父様にDホイール製造会社の娘がDホイールに乗れないのは恥ずかしいからという理由でやらされたのですが…、まあ結果としてやっておいて良かったですわね」

「そっか」

「それに今からDホイールに乗ろうとすると大会の影響で資格を取ろうとする人が多いせいで色々試験が大変らしいですわ」

「へー。…俺資格持ってないけど？」

「大丈夫ですわ。どちらかというと大会の影響でDホイールの事故が起きやすくなるように抑止するシステムらしいですから」

「良かった…」

そんな話をしていると目的地に着いた。幸子はDホイールを降り、コナミに話しかける。

「とりあえずサテライトへの援助活動は一段落つきましたわ。WRGPの参加はマーカーがついていてもサテライト出身の者でも参加できるようですし世間的にも格差は薄くなるでしょう」

「そうか…。やっところんな時が来たんだな」

コナミはサテライトの様子をサテライトを制覇したチームの一員として様々なものを見てきた。暗く誰も希望を持たないサテライトの姿を。だが、そんな時代は終わった。サテライトの者でも自由にやりたいことができる世の中になったのだ。鬼柳にそのことを伝えた。だが他のダークシングナー達は復活を果たしたらしいが、彼は行方が不明なためそれは叶わない。

「庶民はこれからどうしますの？」

「俺もシティに行つてくるぜ、遊星達にも久しぶりに会いたいしな。暇だったらWRGPにも参加するかもな？」

「そうですね。まあWRGPは最低3人のメンバーは必要ですから庶民に集められるかどうか」

「3人かあ…まあ気長に探すとするさ。幸子はどうするんだ？」

「当然サテライトでの活動の細かい手続きを終えたらシティに戻りますわ。今度はWRGP関連の仕事がありますので」

「ええ！大変だな！お前学校とか行つてないのか？」

「デュエルアカデミアに通っていますわよ？仕事があるので特別に試験だけ受けて単位を貰っていますの」

「授業を受けなくて試験わかんのか？」

「わたくしを誰だと思つていますの？」

「…はいはい」

ドヤ顔で胸を張る幸子にまたかといった表情で適当に返事をするコナミ。半年間似たようなやり取りを何度もやっているので慣れてきている。

「ムキー！なんですのその態度は！」

「じゃあなー！またいつかな！」

「ちよ…！待ちなさい庶民！」

面倒なことになる前にさっさとその場を離れるコナミ。慣れたサテライトの地を走りダイダロスブリッジを通つてシティへと向かう。…そんな時だった。

「オイ」

「ん？」

「オレトデュエルシロ」

「な!？」

並走してきた奇妙なDホイーラーがデュエルを仕掛けてくる。これだけならサテライトではチンピラが良くやってくるが驚いたことに強制的にコナミのDホイールもデュエルモードになっていた。

「強制的にスピード・ワールド2が展開された…!強制的にデュエルさせると言えばセキユリテイだがこいつはどう見たって違う!なんだお前は!」

「デュエルシロ」

「話を通じねえ…!ならやるしかねえか!行くぜ!」

Dホイールのデュエルディスクを展開しライディングデュエルの体勢に入った。突然デュエルを申し込んできたDホイーラーの目的も分からずそのままデュエルを始める。

「「デュエル!」」



ちっ…気づいていたか

「「デュエル！」」

黒いライダースーツに身を包んだ謎のDホイラーと共にDホイラーを走らせライディングデュエルを開始するコナミ。

フィールドに発動されたスピード・ワールド2はWRGPに向けて新たに開発されたスピード・ワールドで従来と違う点は主に2つあり、1000ダメージ毎に<sup>スピードカウンター</sup>scが1つなくなる効果が消え、新たにscを消費することでフィールド魔法として発動することのできる効果が出来た。

WRGPでは先攻と後攻はファーストホイラーが第一コーナーを先に回った方が先攻、後に回った方が後攻というふうに決めるがダイダロスブリッジという橋でのデュエルなのでコーナーがないためDホイラーによってランダムに決定された。

「よし、俺が先攻だ！俺はエーリアン・ソルジャーを召喚してターンエンド！」

水色の球体を身につけた剣士がフィールドに見参した。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

コナミ LP4000

フィールド 『エーリアン・ソルジャー』（攻撃表示）

セット0

手札5

sc0

「行くぞ。私のターン！」

コナミ sc0↓1 謎のDホイラー sc0↓1

「ワイズ・コアを召喚する。カードを1枚伏せてターンエンドだ」  
白色の卵のように丸い球体が場に現れる。

ワイズ・コア 攻撃力0

「攻撃力0を攻撃表示…？何か企んでやがるな！」

「ふふ…すぐにわかる」

謎のDホイラー LP4000

フィールド 『ワイズ・コア』（攻撃表示）

セツト1

手札4

sc1

「俺のターン、ドロロー！」

コナミ sc1↓2 謎のDホイーラー sc1↓2

「何を仕掛けているか知らないがここは攻撃しかねえだろ！バトル、エーリアン・ソルジャーでワイズ・コアに攻撃！」

水かきで地面を氷のように滑り、ワイズ・コアを剣で切ろうと振りかぶる。

「甘いな。リバーストラップツイン・ボルテックスを発動。私の場の機械族とお前の場のモンスターを1体ずつ破壊する」

トラップから出てきた2つの竜巻がエーリアン・ソルジャーとワイズ・コアを破壊した。

「エーリアン・ソルジャーが破壊されたか……。だけどお前の場のモンスターも消えたぜ！」

「それはどうかな？ワイズ・コアは効果によって破壊された時その能力を解放する。自分フィールドのモンスターを全て破壊した後デッキ・手札・墓地よりあるモンスターを5体召喚する」

「5体だと!?!」

「デッキより現れる！ワイゼルT<sup>トップ</sup>、ワイゼルA<sup>アタック</sup>、ワイゼルG<sup>ガード</sup>、ワイゼルC<sup>キャリア</sup>！そして機皇帝<sup>インフィニティ</sup>∞！合体せよ機皇帝ワイゼル！」

4体のパーツが本体の機皇帝∞に集約し、1つのロボットを形成した。

ワイゼルT 攻撃力500

ワイゼルA 攻撃力1200

ワイゼルG 守備力1200

ワイゼルC 攻撃力800

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力0

「なっ…モンスターが合体した!?!」

「これぞ私の切り札…機皇帝ワイゼルだ。機皇帝ワイゼルの効果発動

！このモンスターの攻撃力、守備力はパーツモンスターの攻撃力の合計となる。私の場の4体のパーツの合計は2500！」

機皇帝ワイゼル∞が胸部に8を横にしたようなマークを掲げるとパーツの力を得て巨大化した。

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力0↓2500

「5体のモンスターを呼んだだけじゃなくそんな強力な効果まで…！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 無し

セット1

手札5

sc2

「モンスターも無しか。私のターン！」

コナミ sc2↓3 謎のDホイーラー sc2↓3

「バトルだ！機皇帝ワイゼルで赤帽子へダイレクトアタック！」

無限を意味するマーク、∞がついている胸部からコナミへ向かって光線が放たれた。

「がはっ…!?この衝撃は…？サイコデュエル…いや、ダークシグナーの時と同じくらい…！」

コナミ LP4000↓1500

その時コナミのエクストラデッキから1匹の精霊が出て来て衝撃を和らげた。そのおかげでコナミは橋から落ちそうになっていたDホイールを立て直しクラッシュを免れる。だが衝撃で頭部から一筋の血が流れていた。

「大丈夫ですか？」

「お前は…エンシエント・ホーリー！今の衝撃から守ってくれたのか」「ええ。ですが全てを防ぐことは出来ません。恐らく彼はダークシグナーに匹敵する力を持っています。このデュエルに負けると…かなり危険と思われれます」

「マジか…!？」

「クラッシュは免れたか。だがお前のライフはわずか1500。パー

ツモンスターの攻撃で終わりだ！ゆけワイゼルA！」

ワイゼルに装着されているパーツが外れコナミへと猛スピードで近づいてくる。

「これ以上食らってたまるか！手札から血涙のオーガの効果を発動！相手から2回目のダイレクトアタックを受ける時こいつを特殊召喚できる！」

金棒を持ったガタイのいい悪魔がフィールドに出現した血の沼地から這い出てくる。

血涙のオーガ 攻撃力0

「それがどうした！」

「慌てんなよ！血涙のオーガは1回目にダイレクトアタックしてきた奴と同じ攻撃力になる！」

悪魔の持っている金棒が血で染まりその凶暴さを増した。

血涙のオーガ 攻撃力0↓2500

「そんな効果を持っていたか…。攻撃を中断する！私はワイゼルトとワイゼルCを守備表示に変更しカードを1枚伏せてターンエンドだ」

ワイゼルト 守備力0

ワイゼルG 守備力600

謎のDホイラー LP4000

フィールド 『機皇帝ワイゼル∞』（攻撃表示）『ワイゼルA』（攻撃表示）『ワイゼルト』（守備表示）『ワイゼルG』（守備表示）『ワイゼルC』（守備表示）

セット1

手札4

sc3

「何とか凌いだけどあいつを倒さねえとやべえな。俺のターン！」

コナミ sc3↓4 謎のDホイラー sc3↓4

スピードスベル  
「s p エンジェル・バトンを発動！俺のscが2以上の時カードを2枚ドロシー1枚カードを墓地へ捨てる！…よし！」

2枚の天使の羽がカードに変わり、その代わりコナミのカードが1枚天使に捧げられる。

「行くぜ…s p r i サモン・スピードを発動！手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚する！だがそのモンスターはこのターン攻撃できねえ。来いジエネクス・ブラスト！こいつは特殊召喚に成功した時デツキから闇属性のジエネクスを手札に加えることができる。俺はジエネクス・コントローラーを加えてそのまま召喚する！」

フィールドに扇風機を内蔵したロボットが現れるとデツキのカードを巻き上げその中であつた左右にアンテナがついているロボットを呼び出した。

ジエネクス・ブラスト 攻撃力1600

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「ジエネクス・ブラストは攻撃できずジエネクス・コントローラーはチューナーモンスターということは…シンクロか」

「もちろんだ！俺はレベル4のジエネクス・ブラストにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、己の力を信じ敵を乗り越えろ！シンクロ召喚、いでよA・ジエネクス・トライフォース！」

ジエネクス・コントローラーがジエネクス・ブラストの姿を変え人型のロボットにすると中枢コアへと送り込まれる。しかし3つのランプのどのランプにも灯りはともされなかった。

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

「だが攻撃力は機皇帝ワイゼルと同じ。相打ち狙いか？」

「へっ…甘いぜ！機皇帝ワイゼルは合体したモンスターだがパーツに攻撃することはできる。そしてパーツが減れば機皇帝ワイゼルの攻撃力も減る！」

「ちっ…気づいていたか」

「バトル！トライフォースでワイゼルAに攻撃！」

「やらせはしない！ワイゼルGは攻撃の対象を自身へ変更することができるー！」

トライフォースがワイゼルAへ殴りかかるとその攻撃はワイゼルGへと誘導された。

「かわしたか…！なら血涙のオーガで…機皇帝ワイゼルを攻撃！」

「今度こそ相打ち狙いで来たか…」

「お前のパーツモンスターは機皇帝ワイゼルにくつついてる。つまり本体が破壊されればパーツごと破壊されるはずだ！」

「それも気づいていたか…。だがやらせはしない、リバーストラップ地縛霊の誘いを発動！攻撃対象をワイゼルTに変更する！」

「何!？」

血涙のオーガが金棒でワイゼルに殴りかかるもパーツが切り離されその部分にのみ攻撃が命中する。

「だがパーツが離れたことでワイゼルの攻撃力は下がる！」

「くっ…」

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力2500↓2000

「これでお前のモンスターは俺の場のモンスターの攻撃力を下回った！これでターンエンドだ！」

「……ふふ」

コナミ LP1500

フィールド 『血涙のオーガ』（攻撃表示） 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）

セット1

手札3

sc4

「私のターン！」

コナミ sc4↓5 謎のDホイーラー sc4↓5

謎のDホイーラーがドローしたタイミングで3つのDホイールが隣のレーンについた。

「コナミ!？」

「遊星！それにジャックとクロウも！どうしてここに？」

「コナミ！今お前が戦ってるのは…ゴーストなのか？」

「ゴースト？」

「WRGPの参加者を減らそうとしてDホイーラーを襲ってやがる野郎だ！牛尾もそいつにやられた！」

「何！…おい！お前はゴーストなのか！」

「その通り。私はゴーストだ。隣にいるのは…シグナーの連中だな」  
「シグナーを知っている…？お前は何者だ！」

「そこまで答える義理はない。シグナーどもよ機皇帝の恐ろしさを身に刻むがいい。友の痛みを持ってな！」

「へっ…機皇帝ワイゼルの攻撃力は2000！俺のモンスターには及ばねえぜ！」

「貴様は知らない…機皇帝の真の力。そうシンクロキラーの能力を！」

「シンクロキラー!?!」

「機皇帝ワイゼルの効果発動！相手のシンクロモンスターを装備カードとして吸収しその攻撃力を自らの攻撃力に加える。トライフォースを吸収せよ！」

「シンクロモンスターを装備カードにするだと！」

機皇帝ワイゼルの胸部から白いコードが出てきてトライフォースを掴み、その力を光に変え胸部へと取り込んだ。

機皇帝ワイゼルインフィニティ 攻撃力2000↓4500

「嘘だろ…！」

「シンクロモンスターを吸収する効果…！なんて能力だ」

「終わりだ！機皇帝ワイゼルよ血涙のオーガごとあのDホイラーを葬りされ！」

「コナミ…！」

力を蓄えさらに巨大化した機皇帝ワイゼルがその力を存分に振るい血涙のオーガを蹂躪した。

「ハハハ！これで貴様のライフは0だ！」

「…それはどうかな？」

攻撃によって血涙のオーガが破壊され、その衝撃がコナミを襲う。

だがコナミはクラッシュすることなくDホイラーを走らせていた。さらにコナミの場には雷を操る光の戦士が場に見参していた。

E・HERO スパークマン 攻撃力1600

「コナミ！無事だったか！」

「何故だ…。確かに攻撃は通ったはず。それになんだそのモンスター

は!?!」

「ダメージを受ける前にこのカードを発動していたのさ…永続トラップ死力のタッグ・チェンジをな!こいつは俺の場の攻撃表示モンスターが戦闘で破壊される時、そのダメージを0にし手札のレベル4以下の戦士族モンスターを特殊召喚できるのさ!これで戦士族のスパークマンを召喚してダメージを0にしていた!」

「くっ…ならば!私はスピード・ワールド2の効果を発動する。spを4つ取り除き手札のspの数×800のダメージを与える。私の手札には1枚。食らえ!」

ゴーストsc5↓1

ゴーストのDホイールから衝撃波が放たれた。

「まともに食らえば俺のライフは800のデッドラインを下回っちゃう…!そうはさせねえ、墓地のトラップカードダメージ・ダイエットを除外して効果を発動!このターン俺が受ける効果ダメージは半減される!」

「何?墓地からトラップだと!?!」

衝撃波の大きさが半分になりその衝撃を抑えた。

コナミ LP1500↓1100

「ちっ…ワイゼルAを守備表示に変える。これでターンエンドだ!」

ワイゼルA 守備力0

ゴースト LP4000

フィールド 『機皇帝ワイゼル∞』(攻撃表示) 『ワイゼルA』(守備表示) 『ワイゼルC』(守備表示)

セット0 『A・ジエネクス・トライフォース』(装備状態)

手札4

「はあはあ…。紙一重で凌いだか。だがこれ以上はまずい」

「私の力をお使いください!この窮地を救えるかもしれません」

「エンシエント・ホーリー…。そうか、お前が呼べれば…。お前を呼ぶにはこのドローでなんとかするしかねえ…頼むぜ俺のデッキ。…ドロ!」

コナミ sc5↓6 ゴースト sc1↓2



「…行くぜ！俺はチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを召喚！」

小さな翼がついた天使がフィールドを舞う。

「俺はレベル4のスパークマンにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

白く長い胴体が天にも届きそうになる大きさのドラゴンがフィールドに舞い降りた。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100

「あれは…龍可のドラゴンと似ている…？」

「エンシエント・ホーリーの効果発動！このカードは相手よりライフが多い時その分攻撃力がアップし、少ない時はその分攻撃力は下がる！」

天にも届きそうな身体は縮み、トカゲとでもいふべき大きさとなつてしまう。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓0

「だがその効果もこの状況ではデメリットにしかならぬ」

「奴の言う通りだ…コナミは一体何をやる気だ！」

「いや…コナミの手札にはまだ2枚のカードが残っている…」

「あの2枚で逆転する気なのか…！気張れよコナミ！」

「行くぜ、スピーリアクター・ポッドを発動！このカードはscが4以上の時攻撃力1000以下の俺の場のモンスターを対象に発動できる！俺はエンシエント・ホーリーを選択。そしてこいつの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「何…？元々の攻撃力だと！」

「そうだ！今のこいつは攻撃力0だが元々の攻撃力は2100！よつてお前に2100のダメージを与える！」

コナミが発動した魔法カードからゴーストに向かって1つの爆弾が投擲され、爆発した。

「くっ…おおお！」

ゴースト LP4000↓1900

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力0↓1300

「だが：それでも攻撃力は機皇帝に及ばぬ！」

「まだまだ！俺はスピード・ワールド2の効果を発動！s cを4つ取り除き、手札のs p 1枚につき800のダメージだ！俺の手札にはこの1枚のみ！」

s c 6 ↓ 2

今度はコナミのDホイールからゴーストに向かって衝撃波が放たれた。

「お前もその効果を使ってきたか…！」

ゴースト L P 1900 ↓ 1100

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力1300 ↓ 2100

エンシエント・ホーリーの体がトカゲのように小さな状態から元の姿へと戻った。

「だがそれでも攻撃力は2100！攻撃力4000の機皇帝にはかなわぬ！」

「…その通りだ。このデュエルで俺はそいつを倒せない」

「負けを認めたか」

「…だがこのデュエルに勝つことはできる！俺はs p 1起爆化を発動！こいつはs cが2以上の時俺の場の魔法・罠カードを1枚破壊して発動できる。俺は死力のタッグ・チェンジを破壊！そしてその効果で相手フィールドのモンスターの表示形式を全て変更する！」

「なっ…しまった！」

コナミの死力のタッグ・チェンジが破壊されるとその爆風でワイゼル達の表示形式があべこべとなる。

機皇帝ワイゼル∞ 守備力2000

ワイゼルA 攻撃力1200

ワイゼルC 攻撃力800

「バトルだ！エンシエント・ホーリーでワイゼルCに攻撃！エターナル・ライフ！」

「馬鹿な…私が負けるだど？」

エンシエント・ホーリーがパーツの1つを包み込み、光をもって浄

化する。

ゴースト LP1100↓0

デュエルに敗北したゴーストがクラツシユしてしまい、爆発を起こしてしまふ。

「何……おい、大丈夫か！」

遊星達も隣のレーンからコナミの元へと渡ってきた。

「コナミ、無事だったか！」

「ああ、けどどあいつのDホイールが爆発しちゃった……。助けねえと」

爆風が晴れ、幸いにも火事につながらずゴーストの姿が見える。…だがその姿を確認して4人は凍りついた。

「あれは……!?!」

「まさか……ロボットだったのか!?!」

そう、ゴーストの肩から機械のコードが見えていたのだ。ゴーストというロボットによって行なわれたDホイーラー狩り。ダークシグナーがいなくなり平和となったネオドミノシティに一筋の不安が差し込まれたのだ……。…

いいな…あれ欲しいな

「レベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA<sup>アーリー</sup>・ジェネクス・トライフォース！」

ジェネクス・コントローラーが中枢コアに装填されオレンジ色のランプが点灯する。

「どうだ！これで…！」

「ふふ…シンクロを使ったな？シンクロキラー、機皇帝の力を見よ！  
トライフォースにコードが繋がれ機皇帝の胸部へと吸収されてしまった。

「覚悟はいいか赤帽子！機皇帝で貴様にダイレクトアタック！」

「うわあああー！」

機皇帝の攻撃をもらいに食らってコナミが痛み耐え切れずうめき声をあげる。

「うう…！」

「…おい。起きろコナミ！」

「えっ…？」

目を開けるとそこはホテルの一室だった。

「なんだ夢か…」

「いつもグースカ寝てるてめえがうなされるなんて珍しいな」

「あ、ノーマナーの姉御…。いや、ちよつとな」

「なんだよちよつとって。まあいいや」

体を起こし弥生とともにロビーに出ていく。ゴーストの襲撃から数日後、コナミは弥生のホテルに泊めてもらっていた。遊星がゴーストに埋め込まれていたチップを調べたが時間式でデータが消失されるものだったらしく、結局ゴーストについては何一つわからなかった。

（シンクロキラー…機皇帝。それを使ってたのはロボットだった。つてことは操っていた奴がいたはずだ。そいつもWRGPに出てくん

のか…?)

「というか気軽にうちに泊まりにきやがって。WRGPでうちもそれなりに混むんだぞ」

「あー、でも俺もWRGPに出るかもしれねえぜ?」

「マジか?メンバーは?」

「これから見つける」

「…言葉も出ねえよ」

そんな会話をしているとコナミのデュエルディスクの通話機能が作動する。

「あれ?幸子からだ」

「あいつか。そういえばサテライトでの活動上手くいったみてえだな」

「ああ。もうサテライトは自由だぜ。…もしもーし?」

デュエルディスクを手にとって音声をオンにして幸子と話す。

「庶民!助けてくださいまし!」

「え!?急になんだ?」

「説明は後で!デュエルアカデミアに来てくださいます?」

「デュエルアカデミアに…?」

「頼みましたわよ!」

「え!ちよつと…!」

その会話を最後に通話が途切れてしまう。

「デュエルアカデミアってどこにあるんだ…?」

「あん?デュエルアカデミア?それなら知ってるぜ。岬<sup>みさき</sup>の野郎が通ってやがるからな」

「案内してくれ!」

Dホイールに2ケツし、弥生の案内でデュエルアカデミアに到着する。  
「ここがデュエルアカデミアか…」

入り口に到着すると見覚えのある青い髪の少女が目に入った。

「庶民!こつちです!」

Dホイールを駐車場に止め、幸子と合流する。

「どうした？何かあったのか？」

「ハイトマン教頭の横暴でわたくしが退学させられそうなのですの！」

「え…？でもお前単位は大丈夫だって言ってたじゃん」

「そうなのですよ！授業の欠席は仕事の都合ということで学校側にあらかじめ申請していたのですがあの教頭がそれは学生らしくないとかなんとか言ってる…」

「そりゃひどいな」

「ということで説得のために庶民も協力していただきますわよ！」

「え？俺？」

「最近の欠席は主にサテライトでの活動のため。庶民のせいとは言いませんがそれが原因となれば協力してくれても良いんじゃないかと？」

「…まあ。いいけどよ。それでハイトマンとやらはどこにいるんだ？」

「今はあの双子のクラスにいますわ。確か…あのクラスの生徒たちは全員退学とか言っていたような…？」

「そんな無茶な…。行くぞ幸子！」

幸子達3人は龍亞のクラスに突入する。だが既に先客がいた。

「あれ…お前はアキ！それにゆままで！」

「岬も!?まさかお前も…？」

「ちっ…そうだよ。あのおっさんがいきなり退学とか言いだしやがったんだ」

「何ですかぞろぞろと！」

そこにいたのはアキ、ゆま、岬。彼女らは高そうな服を着ている教頭に抗議をしていた。

「ですから。私は彼女達や龍可達がいきなり退学なんておかしいと思いますー！」

「アキさん…。あなたのような優秀な生徒にこそ私の考えを理解して欲しいのですがね。近年デュエルアカデミアのデュエル偏差値が下がっています。その原因は一部の落ちこぼれどもにあるのです！」

「そんな…落ちこぼれだなんて…。…ひどい」

「てめえ…あんまり舐めた口きくと…！」

「よせ！こんなことで暴力を振るうな！」

「それに…このクラス。見てくださいこのデータを。デツキに入っているのは揃いも揃って低レベルのモンスターばかり！こんなことだからデュエルアカデミアの生徒の質が落ちているのです」

その言葉を受けざわつく龍可達。そんな中一人異議を唱える。

「待ちな！」

「んん？あなたは誰です？あなたはデュエルアカデミアの者ではありませんね？」

「俺は龍可や龍可、ゆまや幸子達の仲間だ！お前は退学にしようとしているがこいつらが強いことは俺がよく知ってるぜ！」

「とても信用できませんねえ…。低レベルのモンスターしか扱えぬデュエリストが強いとはとても思えません」

「なら…俺とデュエルだハイトマン！俺がデュエルでそれを証明してやるぜ！」

コナミがハイトマンにデュエルディスクを突きつける。

「デュエル？私と？…いいでしょう！しかし、私がデュエルに勝てば彼女らは退学とさせていただきます！」

「なっ…おい待て！」

「待て岬。あいつに任せとけ」

「姉御…？」

「…全員退学か。重いな。だが…いいぜ！俺が勝てば退学は取り消しだ！」

「いいでしょう。10分後、センターコートにて待ちます。くれぐれも逃げないように」

「誰が逃げるか！」

そう言ってハイトマンは教室から去っていく。

「えーと…コナミだったわね。遊星の友達の。大丈夫？あんなこと言っているけど彼は曲がりなりにも教頭。強いわよ？」

「大丈夫だ。あんなやつに負けるか！」

「庶民、負けたら承知しませんわよ！」

「コナミさんお願いします！」

「任せとけ！」

そう言つてコナミもセンターコートに行こうと教室を出ようとする  
と龍可達が近づいてくる。

「コナミ…。ごめんなさい、私たちの問題に巻き込んで」

「気にすんな。全部あの教頭のせいだ」

「へへっ…俺はコナミが勝つて信じてるぜ！」

「ありがとなー！」

話していると龍可達の中から肌が黒く髪が金髪の少女が出てくる。

「あの…」

「ん。どうした？」

「こ、これを…」

そう言つて少女は一枚のモンスターを差し出してくる。そのモンスターはレベル1のモンスターだった。

「私のモンスターが教頭に馬鹿にされたのが悔しくて…良かったら私のカードを…」

「…そうだよな。自分のカードが馬鹿にされたんだ。悔しくないわけ  
ないよな。お前名前は？」

「私の名前はパティです…」

「パティか。任せな！お前の思い背負って行くぜ！」

コナミのデッキにそのカードが投入された。そして10分の時が  
経ちコナミとハイトマンはセンターコートで向き合う。

「逃げずに来たことは褒めて差し上げましょう。ですが私が勝つ。そ  
れで終わりです！」

「いちいちめんどくさい奴だな！始めるぜ！」

「「デュエル！」」

先攻のランプがコナミのデュエルディスクに点灯した。

「頑張れー！コナミ！」

「負けたら承知しませんわよー！」

生徒達の声援を受けながらデュエルが開始された。生徒達が集  
まっている場所とは別の場所から1人の生徒がこのデュエルを見て  
いたがそれに気づくものはいなかった。



「行くぜ…。俺はカード・ブロッカーを召喚！こいつは召喚した時守備表示になる！」

小さな騎士がコナミを守るように盾を構える。

カード・ブロッカー 守備力400

「レベル3の低レベルモンスターな上に低ステータス。それで終わりですか？」

「…さらにカードを1枚伏せる。これでターンエンド！」

コナミ LP4000

フィールド 『ガード・ブロッカー』（守備表示）

セット1

手札4

「行きますよ。私のターン！…ふふ、いいでしょう。折角ですからこの私が特別授業をしてあげましょう。古代の機械石像アンティーク・ギアスタチューを召喚します！」

歯車が組み込まれた石像がハイトマンの場に現れる。

古代の機械石像 攻撃力500

「特別授業だと？」

「このように低レベルモンスターを並べるだけではデュエルには勝てません。ですから低レベルモンスターは高レベルモンスターのため踏み台になる他はありません！私は機械複製術を発動します。私の場の攻撃力500以下の機械族モンスターを対象に発動し、同名モンスターをデッキから2体特殊召喚するであります！」

石像が2枚の紙に複写され、それに光を当てると不思議なことにもう2体の石像がフィールドに出現した。

古代の機械石像×2 攻撃力500

「いきなりモンスターを3体も呼んできたか…」

「さらに！私は古代の機械石像の効果発動！自身をリリースし手札から古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムを召喚条件を無視して特殊召喚します。私は3体の古代の機械石像をリリース！現れなさい3体の古代の機械巨人！」

「何だと!？」

3体の石像が中から割れ、そこから3体の機械で作られた巨人が出

てきた。

古代の機械巨人×3 攻撃力3000

「くっ…やるじゃねえか!」

「当然です。この勝ち組デツキであなたに勝利してみせましょう!バトル!古代の機械巨人でカード・ブロッカーに攻撃!このモンスターが攻撃する時、相手は魔法・罠カードを発動できません!」

「ならカード・ブロッカーの効果が発動!攻撃対象になった時デツキの上から3枚のカードを墓地に送ることでエンドフェイズまで守備力を1500アップするぜ!」

カード・ブロッカー 守備力400↓1900

3枚のカードの力でカード・ブロッカーの持つ盾が少し大きくなる。

「その程度!古代の機械巨人のさらなる効果!守備モンスターへ攻撃した時貫通ダメージを与えます!」

「なっ…うわっ!」

巨人の重いパンチと盾がぶつかった衝撃がコナミにも伝わってきた。

コナミ LP4000↓2900

「ふふ…あつけないですね。もう1体の古代の機械巨人の攻撃で終わりです!」

「攻撃?してきても俺は構わないぜ!」

衝撃が収まるもカード・ブロッカーは未だフィールドにいた。

「なっ…馬鹿な!何故…?」

「俺はカード・ブロッカーの効果で墓地に送られたシールド・ウォリアーの効果を発動していた。こいつは墓地から除外することでモンスターとの戦闘による破壊を1度だけ免れるのさ!」

「何ですと!低レベルモンスターにそんな使い道が…。しかももう1度カード・ブロッカーに攻撃すればその守備力は3400!」

「それでも攻撃するか?」

「うぬぬ…ですがこの程度で調子に乗らないことです。私は手札から魔法カード、レベル・サンダーを発動します!このカードの効果で私

のフィールドのモンスターのレベルの合計×100のダメージを与えます！」

「古代の機械巨人のレベルは8。3体ってことは……！」

「ダメージは2400！これぞ勝ち組にこそ許される究極のコンボであります！」

古代の機械巨人から出てきた24個の星がコナミに襲いかかった。

「くっ……！」

コナミ LP2900↓500

「このターンはこれで終わりですがそのライフは次のターンで終わりでしよう！」

「へっ……どうかな？フィールドを見な！」

「なっ……モンスターが2体いる？」

コナミの場に新たなモンスターが出ていた。黒いローブに身を包み、2本の白い翼を持っている。

ダメージ・メイジ 攻撃力600

「ダメージ・メイジは俺が効果ダメージを受けた時に特殊召喚出来る。そして俺は受けたダメージ分のライフを回復する！」

ダメージ・メイジの左翼が黒く染まっていき、右翼からコナミに光が降り注いだ。

コナミ LP500↓2900

「なんと！低レベルモンスターでそんなことまで……。私はこれでターンエンドです！」

ハイトマン LP4000

フィールド 『古代の機械巨人』×3（攻撃表示）

セット0

手札0

「行くぜ、今度は俺からみんなへの特別授業だ！ドロー！」

コナミがドローしたカード、それはパティが貸してくれたカードだった。

「行くぜパティ！俺はチューナーモンスター、ハネワタを召喚！」

小さな羽が背中についた毛むくじやらのモンスターが現れた。

ハネワタ 攻撃力200

「むむ…また低レベルモンスターですか」

「たとえばレベルが低くても力を合わせれば強敵を打ち倒せる！行くぜ！レベル3のカード・ブロッカーとレベル3のダメージ・メイジにレベル1のハネワタをチューニング！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

3体のモンスターが1つとなり巨人と同等の大きさまで並ぶ胴体を持つドラゴンがフィールドを舞う。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100

「…エンシエント・フェアリー、あの精霊は…？」

「私の片腕とも言おうべきモンスターです。コナミによって助けられれば私もダークシグナーとの戦いで力を発揮できませんでした…」

「そうだったんだ…」

コナミのシンクロを見て驚くハイトマン。だが次第に確信した顔になる。

「ふふ…やはりデュエルは高レベル高ステータスモンスター。それが勝ち組なのです！」

「へっ…デュエルつてのはそんな単純なものじゃねえだろ！エンシエント・ホーリーの効果発動！俺のライフが相手より上回っている時、その分攻撃力が上昇し下回っている時はその分下がる！」

次第にドラゴンは縮んで行き巨人の足元あたりの大きさとなってしまふ。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓1000

「なっ…せっかくの高レベルモンスターのステータスを自ら下げるですと！理解できないであります！」

「デュエルはレベルや攻撃力だけでは決まらない！手札から魔法発動、財宝への隠し通路！俺のフィールドの攻撃力1000以下のモンスター1体を対象に発動！そいつはこのターンダイレクトアタック出来る！」

「なんと！」

エンシエント・ホーリーの前に虹がかかり巨人を超えてハイトマンへと繋がる道が出てくる。

「で…ですが所詮その程度のモンスターでダイレクトアタックしようと次のターンで私の勝ちであります！」

「…それはどうかな？」

「なんですと？」

「俺は伏せていたトラップを発動するぜ！永続トラップ女神の加護！このカードは破壊されたら俺は3000のダメージを受ける代わりに、発動時の効果として俺のライフを3000回復する！」

コナミのトラップから光が降り注ぎコナミのライフを回復していく。

コナミ LP2900↓5900

「ですがライフを回復しようと…あ、あああ！」

それに伴ってエンシエント・ホーリーが巨人より巨大になっていくのを見てハイトマンは腰を抜かしてしまう。

「俺のライフがお前より上回ったことでエンシエント・ホーリーの効果で攻撃力がアップする！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力1000↓4000

「バトル！財宝への隠し通路の効果でエンシエント・ホーリーはダイレクトアタック出来る！エンシエント・ホーリーでハイトマンに直接攻撃！」

「そ、そんな馬鹿なく！」

巨大化したエンシエント・ホーリーがハイトマンを包み込み光で浄化した。

ハイトマン LP4000↓0

「やった！コナミが勝った！」

「あれが…エンシエント・ホーリーの力なのね」

「ヒヤヒヤさせますわ…」

「さすがコナミさんですー！」

コナミがハイトマンへと近づいてく。

「約束だ。退学は無しな。あと低レベルを馬鹿にするのもこれからは

無しだ」

「は、はい。分かりました」

一件落着。すると龍可達がコナミの元へ集まってきた。

「やったねコナミ！」

「ありがとうコナミ。ダークシグナーとの時といい助けられてばかりね」

「いいってことよ。…おーいパーティ！」

龍可達の後ろで話す機会を伺っていたパーティを呼びカードを差し出す。

「ありがとな。お前のハネワタのおかげで勝てたぜ」

「うん…かつこよかったよ」

「そ、そうか？」

「それでね、ハネワタのことなんだけど…。あなたに貰って欲しいの」「え？でも大事なカードなんじゃないのか？」

「あなたなら大切に使うってくれそうだから…私たちを助けてくれたお礼に…」

「ん、そっか。ならありがたく使わせてもらおうぜ」

「ねー、コナミコナミ！俺ともデュエルしようよ！」

「もう龍亞ったら…」

龍可達と話を弾ませるコナミ、その集団の後ろにスライという少年が一枚のカードを見つめていた。

(いいな…あれ、欲しいな。あのドラゴン…)

色々な思いが交錯する中、このデュエルを隠れて見ていたものがこの場から立ち去ろうとしていた。

「あのモンスターは精霊…。彼もまた未来を変える因子となりうる…？だけでもまだデータが不完全、彼を監視する必要性有り」

銀髪の少女がその場を立ち去っていった…。

## カウル以外は俺が塗った

幸子達の退学が取り消されてから数日後、コナミは遊星達のガレージに来ていた。そこである作業をしながら自分の戦い方を見つめ直していた。

(シンクロキラの機皇帝、この前はエンシエント・ホーリーと協力して何とかあったが…今度も上手くいくとは限らないな。もし次戦う時があるなら…その時までには何か新しい戦術が必要かなあ。とりあえずデツキに入れてみたあのカードで何とかなると良いんだけど…) そんなことを考えているとコナミの作業があと少しというところになる。このタイミングでジャックが遊星達のガレージの近くにある喫茶店、『CAFÉ LAGÉEN』から悠々と帰ってきた。

「おお、コナミではないか。どれどれ…よし、ここからは俺に任せておけ」

「え?もうほとんど終わってるけど…」

「最後を締めくくるのはキングと相場が決まっている」

ジャックはコナミの作業道具を半ば強引に取り上げ、仕上げ作業に取りかかった。かくして彼らが進めていた作業が終わり、遊星がアキを呼び出した。

「遊星…これは?」

「アキのDホイールだ。クロウやコナミ、それにジャックも手伝ってくれたんだ」

「デザインは遊星のDホイールと似ており全体的に赤いDホイール、『ブラッディー・キッス』がアキの前に差し出されていた。

「私のために?」

「そうだぜ。ブレーキは俺が組んだんだ!」

「ありがたく思うがいい。カウルは俺が塗った」

「カウル以外は全部俺が塗ったんだけど…」

「みんな…。ありがとう!」

十六夜アキ。彼女はこの前までライディングデュエルにあまり興味はなかったが、遊星と謎多き女性シェリーがライディングデュエル

を通して分かり合っていたのを見て自分も遊星達と同じ風を感じた  
いと思い、Dホイールの試験を受けようと思っていた。既に基礎試験  
は遊星の協力もあってクリアしており、後は最後の試験で試験官にラ  
イディングデュエルで勝利すれば見事ライセンスを獲得できる。

「明日はいよいよライディングデュエルの試験だ。その前にこのDホ  
イールに慣れるのも兼ねてアキには最後に誰かとライディングデュ  
エルをしてもらおうと思う」

「ええ、分かったわ。誰とやれば良いのかしら？」

「俺とクロウはアキと何回か練習場でライディングデュエルをしてい  
る。だからジャックかコナミにやってもらおうと思っっているんだが  
…」

「ふん！まだ慣れぬDホイールで俺に立ち向かうのは厳しかろう。頼  
んだぞコナミ」

「分かった。行くぞアキ！」

「ええー」

そう言つて2人は市街地のレーンへとDホイールを走らせた。W  
RGPに向けてネオドミノシティはライディングデュエルデュエル  
を推奨しており申請さえすればそのレーンはライディングデュエル  
専用のレーンとして使用することができる。

《デュエルが開始されます。デュエルが開始されます。ルート上の一  
般車両はただちに退避してください。レーンセレクトション。使用可  
能な最適レーンをサーチ。デュエルレーン、セントラルに申請。オー  
ソリゼーション》

遊星達が隣のレーンから2人を見守る中、デュエルレーンが決定さ  
れデュエルが開始される。

「ライディングデュエル。アクセラレーション！」

先攻は第一レーンを先に回った方となる。今のところアキがわず  
かにリードしていた。

「…悪く思ふなよー」

「えっ…きやつー」

コナミのDホイールがアキのDホイールと接触し、アキはバランス



を崩してしまう。その際にコナミは第一レーンを先に曲がり先攻をとった。

「コナミのやつ…いきなりラフプレイの洗礼ってわけか」

「確かにライディングデュエルではよくあるからな。あらかじめ教えておいた方が良くもしれん」

「アキ…コナミのペースに飲まれるな」

先攻をとったコナミがドロし手早くターンを進めていく。

「行くぜ。俺はギガテック・ウルフを召喚！カードを1枚伏せてターンエンド！さあ、お前のターンだ！」

鉄屑によって作られたオオカミがコナミの場に現れ、後ろに1枚のセットカードが伏せられアキのターンになった。しかし先ほどのラフプレイの影響で少しDホイールがぐらついている。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

コナミ LP4000

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セット1

手札4

スピードカウンター

SC0

「くっ…私のターン！」

コナミ SC0↓1 アキ SC0↓1

スピードスベル

「これは…s p ライディングデュエルではこのs pが鍵となる…。行くわ、私はイービル・ソーンを召喚！」

2方向に分かれる緑のツタの片方からはピンクの花、もう片方にはトゲがびっしり生えた手榴弾のようなものが垂れ下がっている。

イービル・ソーン 攻撃力100

「攻撃力100か…それで何を仕掛けてくる？」

「イービル・ソーンの効果を発動！自身をリリースすることで相手に300のダメージを与え、デッキからイービル・ソーンを2体攻撃表示で特殊召喚する！」

手榴弾のようなものが爆発し、生えていたトゲが飛び散ってコナミを襲う。そしてピンクの花から2本のツタが生え出てきた。

「いきなり仕掛けてきたか…だけどこの程度！」

コナミ LP4000↓3700

イービル・ソーン×2 攻撃力100

「さらに私はs p エンジェル・バトンを発動！この効果で…」

アキが手札のs p を場に置くとDホイールの画面からエラーが出てアキの手札にs p が戻ってくる。

「はあ？何やってんだ十六夜のやつく！」

「ふん…s p を使うにはs c が必要だ」

「かなり動揺しているな…」

「そうだった…s c を忘れてた」

「あんまりもたついてると失格になるぜアキ！」

「…！わ、私はカードを2枚伏せてターンエンド！」

アキ LP4000

フィールド 『イービル・ソーン』×2 (攻撃表示)

セット2

手札3

「俺のターン！」

コナミ s c 1↓2 アキ s c 1↓2

「俺はジェネクス・コントローラーを召喚！行くぜアキ！俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA<sup>アッリー</sup>・ジェネクス・トライフォース！」

ジェネクス・コントローラーが左右のアンテナから電波を飛ばしギガテック・ウルフを変形させると中枢コアへと組み込まれていく。そして3つのランプのうちオレンジ色のランプが点灯した。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「もうシンクロを決めてきた…早い！」

「容赦はなしだ！バトル！トライフォースでイービル・ソーンに攻撃！」

トライフォースの右手から火炎放射が放たれた。

「だけど私だってそう簡単にはやられない！トラップ発動、棘ソーン・ウォールの壁！植物族モンスターが攻撃対象にされた時相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

イービル・ソーンのとゲが繁殖し、火炎放射を防ぐとライフオー  
スを絡め取り破壊した。

「やった……！」

「spが使えない状況ならトラップで俺のモンスターを破壊する……。悪いがそれは読めていた！トラップ発動、リボーン・パズル！自分のモンスター1体のみが効果で破壊された時、そのモンスターを復活させる！」

「なんですって!?!」

破壊されたライフオースのカケラが集まっていき元の状態へと復元されていく。先ほどと違うところはランプが点灯していないことぐらいだろうか。

A・ジエネクス・ライフオース 攻撃力2500

「そしてライフオースでもう1度イービル・ソーンに攻撃だ！」

ライフオースの重いパンチがイービル・ソーンをツタごと地面から引っこ抜いた。

「きやあつ……！」

アキ LP4000→1600

「よし……大ダメージだ！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP4000

フィールド 『A・ジエネクス・ライフオース』（攻撃表示）

セット1

手札3

sc2

「やはりライディングデュエルに慣れているコナミの方が一枚上手か……」

「だけど十六夜もこっから逆転の余地はあるぜ！」

「このターンが正念場だ……。隙を見せるな！ここから切り返しだ！」

「行くわ、私のターン！」

コナミ s c 2 ↓ 3 アキ s c 2 ↓ 3

「私は s p e e ンジェル・バトンを発動！私の s c が 2 以上の時カードを 1 枚ドロし、その後手札の 1 枚のカードを墓地へ！」

アキは天使によってもたらされた新たなカードで逆転の活路を見出した。

「手札の薔薇の妖精の効果発動！カード効果によって手札に加わった場合、特殊召喚することができる！」

4 つの小さな翼が生えたピンク色の小さな妖精が舞い降りてきた。

薔薇の妖精 攻撃力 600

「さらに私はナチュル・ローズウィップを召喚！そしてレベル 1 のイービル・ソーンとレベル 3 の薔薇の妖精にレベル 3 のナチュル・ローズウィップをチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

3 体のモンスターが 1 つになり薔薇によって翼が形成されたドラゴンがフィールドに現れた。

ブラック・ローズ・ドラゴン 攻撃力 2400

「ブラック・ローズ・ドラゴン…これがお前の切り札か！だがトライフォースの方が攻撃力は上！」

「そうはいかないわ！ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功したとき…フィールドの全てのカードを破壊する！ブラック・ローズ・ガイル！」

「…え？」

フィールドを薔薇が包み込み暴風が吹き荒れ全てを吹き飛ばそうとする。

「と、トラップ発動！苦渋の黙札！トライフォースをリリースし、トライフォース以外の同じ属性、種族、レベルのモンスターをデッキか墓地から手札に加える！俺はデッキからリボルバー・ドラゴンを手札に！」

「なら私もトラップカード、シンクロ・バックを発動！私のフィールドのブラック・ローズ・ドラゴンをエクストラデッキに戻し、次の私の

スタンバイフェイズに再び特殊召喚する！」

ブラック・ローズ・ドラゴンとトライフォースは共にフィールドから消え去り、暴風も収まった。

「まさかこんな荒技でくるとはな……。けどお前のフィールドにモンスターはいない！次のターンで……！」

「それはどうかしら？私は墓地の薔薇恋人を除外して効果発動！私の手札から植物族モンスターを1体特殊召喚するわ！来て、ギガプラント！」

地面からツタが生えてきたかと思うと地面が割れて巨大な赤い口を持ったモンスターが出てきた。

ギガプラント 攻撃力2400

「……やべえ！」

「やりなさいギガプラント！ダイレクトアタック！」

ギガプラントがコナミに襲いかかるとコナミはその攻撃をもろに受けてしまう。

「うおおっ！や、やるな……！」

コナミ LP3700↓1300

「やった……。私はカードを1枚伏せてターンエンド！」

アキ LP1600

フィールド 『ギガプラント』（攻撃表示）

セット1

手札0

sc3

「よし……やりやがった！」

「これはさすがにコナミも苦しいか」

「だが次のターンコナミのscは4だ……。まずいかもしれない」

「俺のターン……！よし！」

コナミ sc3↓4 アキ sc3↓4

「残念だったなアキ！俺はスピード・ワールド2の効果を発動、俺はscを4つ取り除く！」

「……この効果は……！」

「俺の手札のs pの数×800のダメージをアキに与える！俺の手札には…2枚！よって1600のダメージを与える！」

コナミのDホイールからアキに向かって衝撃波が放たれる。

「アキ…！」

「…それを」

「…？」

「それを待っていたわ！トラップ発動、リフレクト・ネイチャー！このターン相手が発動したライフポイントにダメージを与える効果はあなたのライフにダメージを与える効果へと変わる！」

「…！」

「おお！バーン効果の対策カードを伏せていたか！やるではないか！」

「やったぜアキ！」

「これで1600のダメージはあなたに跳ね返る！」

アキの場に現れた反射板が衝撃波をそのままコナミへと返した。

「やった…。コナミに勝った！」

だが衝撃波がコナミに当たる寸前、1体のモンスターがその衝撃波に立ち向かった。

「まだだ！手札からハネワタの効果を発動！このカードを手札から捨てることでこのターン俺が受ける効果ダメージを0にする！」

「な…!？」

羽が生えた毛むくじやらのモンスターがその衝撃波を受け止めると墓地へと消えていく。

「十六夜の反撃を防いだか…。コナミもなかなかやるな」

「助かったぜハネワタ…！だけどまだピンチだ…！」

「あ…s cは0、これならs pは使えない。なら使える手札は2枚！しかも1つは最上級モンスター、それでどう向かってくるの？」

「いや…まだ行けるぜ！俺はs pオーバー・ブーストを発動！」

「s cが0なのにs pを!？」

「このカードはs cに係なく発動できる数少ないs p！その効果で俺はs cを4つ置く。ただしエンドフェイズにs cは1になる！」

コナミ sc0↓4

先ほど大幅に減速したコナミのDホイールがアキのDホイールに追いついてくる。

「さらに俺も使わせてもらうぜ、spreeエンジェル・バトン！カードを2枚ドロ―し：1枚を墓地へ！カード・ブロッカーを召喚だ！こいつは召喚したとき守備表示になる！カードを1枚伏せてターンエンド！」

小さな騎士が盾を構えてコナミを守るように立ちふさがる。

カード・ブロッカー 守備力400

（あのモンスター…そして今エンジェル・バトンで墓地に送ったカード。あれは…）

コナミ LP1300

フィールド 『カード・ブロッカー』（守備表示）

セット1

手札1

sc4↓1

「私のターン！」

コナミ sc1↓2 アキ sc4↓5

「このスタンバイフェイズにシンクロ・バックの効果でブラック・ローズ・ドラゴンが特殊召喚される！」

天に空いた穴から薔薇のドラゴンが帰還する。

ブラック・ローズ・ドラゴン 攻撃力2400

「くっ…戻ってきたか」

「私が引いたカードは…spree私はスピード・ワールド2の効果でscを4つ取り除き、あなたに800のダメージ！」

アキ sc5↓1

今度はアキのDホイールから衝撃波が放たれる。

「うおっ…！」

コナミ LP1300↓500

「さらに私はギガプラントを再度召喚！」

「フィールドにいるモンスターを召喚し直したと!?!」

「ギガプラントはデュアルモンスター…2度目の召喚により真価を発揮する！ギガプラントの効果を発動！手札か墓地から植物族か昆虫族モンスターを特殊召喚する！」

「手札はs p…ってことは墓地からか！」

「私はイービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚！」

2本のツタがギガプラントの近くに生えてくる。

イービル・ソーン 攻撃力100

「このまま攻撃してくるか…！」

「ふふ…甘いわ。私はブラック・ローズ・ドラゴンのもう1つの効果を発動！墓地の植物族モンスター、イービル・ソーンを除外することであなたのフィールドの守備モンスターを攻撃表示にして攻撃力を0にする！ローズ・リストラクション！」

「何だど?!」

ブラック・ローズ・ドラゴンから出てきたツルがカード・ブロッカーを絡め取り、盾を構えられない状態にする。

カード・ブロッカー 攻撃力0

「あなたの狙いは分かっているわ。カード・ブロッカーを墓地のシールド・ウオリアーで守ってこのターンを防ごうとしているのでしょうか？でもその作戦は通じないわ！」

「う…！」

「さあ…これで最後よ！ブラック・ローズ・ドラゴンで攻撃！ブラック・ローズ・フレア！」

薔薇のドラゴンの口から無防備な騎士にむかって赤色の光線が放たれた。

「くっ…カード・ブロッカーの効果発動！攻撃対象になった時デッキの上から3枚のカードを墓地へ送り守備力を1500アップする！」  
「でもそれは無意味よ！」

カード・ブロッカーの盾が巨大化する。しかし今の彼はそれを構えることができないためそれで身を守ることは叶わなかった。そのまま無防備な戦士にブラック・ローズ・ドラゴンの光線が直撃した。

「これで…」



「悪いな。まだ終わらせねえ！トラップ発動、ガード・ブロック！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

「まだ倒れないというの…!？」

コナミはカード・ブロックカーが破壊された衝撃を、Dホイールを横の壁を利用してジャンプさせることでかわした。

「だけどこれであなたの場は空いた！ギガプラントでダイレクトアタック！」

ギガプラントがその巨大な体を揺らし、地響きを発生させた。

「勝負だアキ！墓地のクリアクリボの効果発動！相手からダイレクトアタックされた時、墓地のこいつを除外することでカードを1枚ドロウする！そしてそのカードがモンスターカードなら特殊召喚し、そいつとバトルさせる！」

地響きに割って入り、毛むくじやらのモンスターが出てきた。

「そんなカードをいつの間に…！あつ…カード・ブロックの效果で落としていたというの!？」

「その通り！行くぜアキ。…ドロウ…！引いたのはモンスターカード、ブローバック・ドラゴンだ！こいつを特殊召喚！」

クリアクリボの效果で何ともメカメカしいモンスターが空から降ってくる。そしてそのモンスターに地響きが衝突した。

ブローバック・ドラゴン 守備力1200

「モンスターを引いた…！だけどギガプラントで倒せる！」

「いいや、倒させない！墓地のシールド・ウォリアーを除外して戦闘での破壊を免れる！」

「うっ…」

地響きが衝突するもロボットが破壊されることはなかった。

「これを防ぐなんて…私はイービル・ソーンをリリース！あなたに300のダメージを与えてターンエンド！」

「ぐっ…！もう1回それを食らえば終わりか…！」

コナミ LP500→200

アキ LP1600

フィールド 『ブラック・ローズ・ドラゴン』（攻撃表示） 『ギガプ

ラント』(攻撃表示)

セット0

手札1

sc1

「俺のターン！」

コナミ sc2↓3 アキ sc1↓2

「ギガプラントを対象にブローバック・ドラゴンの効果発動！3つのコイントスのうち2回以上のコイントスが表ならそいつを破壊する！これは1ターンに1度出来るぜ！」

「ここでギャンブルを……！」

フィールドに3つのコインが出てきてそれぞれの結果が出る。

「表、裏、表……成功だ！」

ブローバック・ドラゴンの口から出てきた銃口から放たれた銃弾がギガプラントを貫いた。

「このまま守備だとブラック・ローズ・ドラゴンの効果を食らっちゃう……ブローバック・ドラゴンを攻撃表示に！カードを1枚伏せてターンエンド！」

ブローバック・ドラゴン 攻撃力2300

コナミ LP200

フィールド 『ブローバック・ドラゴン』(攻撃表示)

セット1

手札2

「このターンで仕留めないと……私のターン！」

コナミ sc3↓4 アキ sc2↓3

「十六夜のscは3……まだ効果ダメージを与える効果を使うこととはできないか」

「だが逆に言えばコナミは次のターンまでに決めないといけない」

「フィールドにはブラック・ローズ・ドラゴンがいる……このまま押し切れるだろ……！」

「私はローズ・バードを召喚する！」

葉っぱをまとった翼を持つモンスターがブラック・ローズ・ドラゴ

ンの隣に降りてきた。

ローズ・バード 攻撃力1800

「……」

「バトル！ブラック・ローズ・ドラゴンでブローバック・ドラゴンに攻撃！ブラック・ローズ・フレア！」

ブラック・ローズ・ドラゴンから赤い光線がブローバック・ドラゴンに降り注がれた。

「くっ……」

コナミ LP2000→100

「通った……さらにローズ・バードで……」

「そうは行くか！トラップ発動、時の機械ータイム・マシーン！バトルで破壊されたモンスターを同じ表示形式でフィールドに戻す！」

タイム・マシンの扉が開くとそこからブローバック・ドラゴンが無傷の状態が出てきた。

ブローバック・ドラゴン 攻撃力2300

「仕留められなかった……私はこれでターンエンド！」

アキ LP1600

フィールド 『ブラック・ローズ・ドラゴン』（攻撃表示） 『ローズ・バード』（攻撃表示）

セット0

手札1

「このターンで勝負だ！俺のターン、ドロー……」

コナミ sc4↓5 アキ sc3↓4

「ブローバック・ドラゴンの効果発動！対象はブラック・ローズ・ドラゴン！」

3枚のコインがフィールドを舞う。

「結果は……表、裏、裏！外れた！」

ブローバック・ドラゴンの銃口からブラック・ローズ・ドラゴンに向かって放たれるもそれは不発弾。薔薇のドラゴンを撃ち抜くことはなかった。

「これでブラック・ローズ・ドラゴンを破壊することは……」

「…アキ。機皇帝の話は聞いてるか？」

「え？ええ…ゴーストの使ったシンクロキラーね。それがどうかした？」

「俺はその対策を考えてた…。対策になるかは分からんがこれが今の俺に出せる1つの答えだ！俺は手札からs p i e sスピード・フュージョンを発動！俺のs cが4以上の時、俺は手札・フィールドのモンスターで融合召喚ができる！」

「融合召喚!？」

（融合召喚…。あの謎のDホイーラーに教えられたアクセルシンクロとは違うコナミの機皇帝への答えか…!）

「俺はフィールドのブローバック・ドラゴンと手札のリボルバー・ドラゴンで融合！不発の銃を持つものよ、暴発の銃持つものと交わりて新たな存在へと生まれ変われ！融合召喚！あらゆるものを撃ちぬけ、ガトリング・ドラゴン！」

車輪に乗った機械龍がフィールドに舞い降りた。背中にはいくつもの銃を背負っている。

ガトリング・ドラゴン 攻撃力2600

「おお…！初めてやってみただけどこれが融合召喚か…!」

コナミは初の融合召喚に打ち震えていた。

「攻撃力2600…！だけど私のモンスターが破壊されても次のターンのスピード・ワールド2の効果を使えば…!」

「ガトリング・ドラゴンの効果発動！俺は3つのコイントスをする！そして表だった数と同じ数、フィールドのモンスターを破壊する！」

「…！このコイントスが勝負…!」

フィールドに三度<sup>みたび</sup>3つのコインが舞う。その結果は…。

「表、裏、そして…表！よって俺はブラック・ローズ・ドラゴンとローズ・バードを破壊！ガトリング・ショット！」

「そんな…!」

ガトリング・ドラゴンから3つの銃撃が放たれる。そのうち1つは不発弾。残りの2発がアキのモンスターを貫く。

「バトルだ！ガトリング・ドラゴンでアキにダイレクトアタック！貫

け、ガトリング・キャノン！」

幾千もある銃がアキのDホイールに向けて放たれる。中には不発弾もあつたがそれを気にさせない数の銃撃がアキを襲つた。

「きやああー！」

アキ LP1600↓0

勝負は決し、2人のDホイールはストップする。

「ふう…負けちゃったわね」

「でもいいデュエルだったぜ。また機会があつたらやろう。試験頑張れよー！」

「ええ、楽しかった。またあなたとも風を感じたいわ」

ライディングデュエルで通じ合つた2人は握手をした。そんな彼らを迎えに行く遊星達…その後ろに1つの影があつた。

「まだ彼女が未熟なライディングデュエルとはいえシグナーへの勝利。やはり彼のことはもう少し注視すべき…」

彼女はデュエルを見届けるとどこかへ去って行ってしまった。

## スピイデーにミーとテイーを

アキとのデュエルから数日後、無事アキがDホイールのライセンスを獲得したことを聞いたコナミ。彼は今ある一室で話をしていた。

「それでさー。アキの対戦相手が牛尾だったらしいんだよ」

「はあ」

「切り札のブラック・ローズ・ドラゴンがやられちゃったけどそこから立て直して勝ったらしいぜ」

「そうなのですか」

「ちゃんと聞いてるか幸子？」

「あの…わたくし書類作業をしているのですが…」

そこは海野財閥本社にある幸子の事務室。コナミは幸子のところに押しかけていた。

「というかそもそもどうやってここに？入ろうとすればガードマンが止めるはず…」

幸子は一度作業の手を止め、コーヒーマーカーからコーヒーを作り休憩に入った。

「え？サテライトでの活動の時にもらった仮社員証見せたら行けたけど？」

「回収し忘れてましたわ！返しなさい！」

コナミが出した仮社員証を素早く没収した。

「あ！ちよつと！それがあればここでお茶とお菓子食い放題なのに！」

「なに悪用してますの！」

幸子は呆れ顔をコナミに向けながら仮社員証をしまう。後でシュレッダーにでもかけようかと思っっているようだ。とりあえずソファに座ってコナミと向き合った。

「はあ…それで？」

「え？」

「何か用があつて来たのでしょうか!？」

「あ、ああ…忘れてた」

「殴ってもいいですわね庶民？」

「待て！話せば分かる！」

席を立てて拳を握り締める幸子を慌てて止め、話を続けた。

「実はWRGPに機皇帝っていうシンクロキラーを使うデュエリストが出るかもしれないんだ」

「シンクロキラー？」

「ああ。相手のシンクロモンスターを装備して攻撃力を吸収しちまうとんでもねえ奴だ」

「そんなモンスターが……」

「それで俺はライディング限定だけど融合召喚を身につけたんだ。融合モンスターなら吸収されねえからな」

コナミはライディングデュエルで融合の効果を発揮する スピードスベル s p ー スピード・フュージョンを幸子に見せる。

「融合召喚を……。なるほど、確かに悪い手ではないでしょうけど……何故ライディング限定？」

「いや……融合ってレアカードだから持ってないんだよ」

「ああ……そうでしたわね。それに対して スピードカウンター s p は s c によって条件

が指定されるため融合のように強力なカードもその分価値が下がって手に入りやすく、ましてやシンクロが主流のライディングデュエルではなおさらですからね。……それで？WRGPはライディングデュエル、スタンディングで融合が出来なくても問題ないのでは？」

「いや、問題があるのはWRGPの方なんだ」

「と言いますと？」

「そもそもWRGPに出るには最低3人のメンバーが必要だ」

「そりゃそうでしょう。WRGPは3人のDホイラーがリレー形式でフィールドを受け継いで戦うルールなのですから」

「だけどよく考えたらまだメンバーが俺1人なんだ……」

「……………」

「……………」

2人の間に走る静寂。幸子の視線が痛いほどコナミに突き刺さる。

「……庶民」

「はい」

「馬鹿ですの?」

「酷い!」

大げさに泣き崩れるふりをするコナミ。

「そもそもダークシグナーと戦っていた時に一緒にいた方達と出るのではありませんの?」

「それが聞いてくれよ幸子!遊星達はもう遊星、ジャック、クロウで組んでてさあ!しかもベンチウオーマーにアキまでいるんだぜ!」

「あの成績優秀なアキさんをベンチウオーマーにおける余裕があり、しかもチャンピオンの不動遊星と元キングのジャック・アトラス…なるほど。庶民が入る余地は一切ありませんわね」

「そこまで言うか!?!」

「庶民の考えは大体分かりましたわ。大方わたくしをメンバーとして引き入れたいといったところでしょう。わたくしのように強いメンバーがいれば安心ですからね」

「よく分かったな!というわけで一緒にやろうぜ!」

幸子に手を差し出すコナミ。

「お断りしますわ」

「ええ!即答!?!」

悲しくも一瞬で手を弾かれてしまった。

「この前も言ったでしょう。わたくしはWRGP関係の仕事があると。そんな忙しい環境の中、残念ながらWRGPに無理に出る理由もありませんわ」

「えーと…ほら!WRGPでお前が活躍すれば海野財閥にとっても良いイメージがつかだらろ!」

「む…。まあ確かにそうかもしれないませんが…」

「頼むよ!もうお前だけが頼りなんだよ!」

「いや…わたくしを加えても2人しかいないじゃないですか、」

「そこは何とかするからさ!な!」

「な!と言われましても…そもそもわたくしにはもう1つ解決しなくてはならない問題がですね…」



「その問題が解決すれば大丈夫なのか！」

「口が滑りましたわ……」

「俺に話してみろって！何か力になれるかもしれないぜ？」

「はあ……。分かりましたわ。実は……」

ハイトマンの暴走から数日後、幸子の父親から一通の連絡が入ってきた。その内容は許婚いいなすけに関する話。要約すると政略結婚を幸子にしろとの話だった。急な話に幸子は反対するも相手は海野財閥より大きなデュエル企業で断るに断れず今に至っていた。

「結婚って……お前まだそんな年じゃないだろ？」

「わたくしは今年で16歳。一応条件を満たしているのです。だからこそ今年に入ってこういった話が来たとも言えますが……」

「そうか……あ！そうだ！なら俺が彼氏のふりをしてやるよ、サテライトでも似たようなことしたことがあるんだぜ」

「そんな学生間の恋愛事情みたいに簡単にいく問題じゃありませんの。こちらの方がデュエル企業として小さい以上、断るだけで海野財閥に大打撃ですわ」

「そうなのか……」

頭を抱え込む2人。そんな中コナミが思いついたと言わんばかりに手を叩く。

「……何ですか？」

期待すらしていない目線を向ける幸子を気にせず、コナミは提案をする。

「海野財閥はその企業よりデュエル企業として小さいんだよな？」

「さつきも言いましたわ」

「ならさ……お前がその許婚にデュエルで勝てば海野財閥の方がデュエルで強いつてなるから結婚断っても大丈夫じゃないか？」

「……………」

2人の間に再び走る静寂。コナミが慌てて取り消そうとする。

「あはは……じよ、冗談だって。そんな簡単にはいかな……」

「それですわ！」

「……え？」

コナミの発言を遮って幸子が席を立ちどこかに連絡するとデュエルディスクをつけて、コナミを連れて相手側の本社の前まで来た。

「…何で俺まで？デュエルするのは幸子だろ？」

「相手側の要求がタツグデュエルだったからですわ」

「え？なんでまた？」

「庶民、社交デュエルはご存じでして？」

「なんだそりゃ？」

「簡単に言えばダンスのステップを踏みながら行われるデュエルですわ。トップスでは社交デュエルが人気ですの」

「へえー。ダンスしながらデュエル…？」

「そしてダンスということはパートナーが必要なのは言わずもがな。パートナーが必要なデュエル…すなわちタツグデュエル。トップスで一般的にデュエルといえばタツグデュエルを指すことの方が多いのですよ」

「…そ、そうなのか。でも俺でいいのか？社員でもないのに」

「これをシュレッダーにかけるのはまた今度になりそうね」

そう言って幸子は仮社員証をコナミに投げ返した。

「さあ行きますわよ！」

そう言って入り口に入っていく2人。するとすぐそこに迎えが来ていた。

「へい！そのプリティハニー！ユーが海野幸子だね？」

「そうですわ…。あなたが田中康彦やすひこさん。わたくしの許婚ですわね？」

そこにいたのは黒髪でフランクな格好をした軟派な男性と緑髪で軽装の女性。

「ユーみたいなプリティな子とデュエルできるなんてミーはとってもハッピーだよ！そしてデュエルの後はスピーーデーにミーとティーしましょう」

「残念ですが…わたくしはこのデュエル負ける気はありませんわ。それは果たせそうにないですわね」

「ミーはユーみたいなストロングな子はタイプだよ！」

「よく言うね…。会った子にはみんなにタイプって言ってるのに」  
隣にいる女性が小声で呟いた。

「ん？あんたは？」

「私は田中奈津代、あいつの親戚だよ。あんたと同じくタツグデュエルのパートナーとして呼ばれたのさ。旅行から帰ってきたばかりで疲れてるんだけどね」

（ま…本当は海野財閥に私の旅行資金を提供してもらえないかと思っ  
てあいつについてきたんだけどね…）

「そうなのか…。お前も大変だな」

「庶民…。『も』とはどういう意味ですか？」

「聞き間違いだろ。それより集まったんだから早速デュエルしようぜ  
！」

殺気を感じたコナミはデュエルを促してその場をやり過ぎそうと  
する。

「オーケー！ゴージャスなデュエルコートを取ってあるんだ。そこで  
やろう！」

彼の案内で通常の倍くらいの大きさはあるデュエルコートに連れ  
て行かれた。そのコートは所々金で装飾してあり彼の企業の大きさが  
伺える。

「さあ始めようか！」

「本当の本気で行くよ！」

「行くぜ幸子！」

「言われるまでもありませんわ！」

コナミと幸子、康彦と奈津代が向かい合ってデュエルディスクを構  
えた。

「「デュエル！」」

## 不死鳥は墓地より舞い戻る

「「デュエル！」」

タッグフォースルールで許婚との婚約をかけたデュエルが開始される。このデュエルに敗北すれば幸子は政略結婚によつて望まない相手との結婚を余儀なくされるであろう。そんなデュエルの先攻をとつたのはその婚約予定の許婚、康彦だった。

「ミーのターンからだね、ドロロー！ミーのお気に入りのかわいい子ちゃんを紹介するよ。異次元の女戦士ちゃんを召喚だ！」

包帯代わりに布を巻いた左腕に剣を持った金髪の女戦士が現れた。

異次元の女戦士 攻撃力1500

「あれは…厄介なレアモンスターですね」

「知ってるのか？」

「ええ。あのモンスターが戦闘を行った時、任意で自身と戦闘を行った相手モンスターを除外することが出来る優秀なモンスターですわ」  
「攻撃力で押すだけじゃダメってことか」

「ザッツライト！ミーの女戦士ちゃんの魅力を理解してくれて嬉しいよ。ミーはカードを1枚セットしてターンエンドだよ！」

康彦&奈津代 LP4000

フィールド 『異次元の女戦士』（攻撃表示）

セット1

手札4（康彦） 手札5（奈津代）

次のターンプレイヤーのランプがついたのはコナミ。

「残念だ。僕としてはせっかくだからそっちのプリティガールに攻撃されたかったな」

「悪かったな。俺のターン、ドロロー！800のライフポイントを払つて魔の試着部屋を発動だ！デッキの上から4枚のカードを巡り、その中にあるレベル3以下の通常モンスターを特殊召喚するぜ！1枚目。魔法カード、予想GUY！2枚目。レベル3通常モンスター、メカニカルスネイル！3枚目。トラップカード、ヘイト・クレバス！4枚目。レベル4効果モンスター、UFOタートル！違ったカードはデッキに

戻してシャッフルし、メカニカルスネイルを特殊召喚！」

現れたのは機械へと改造されてしまったカタツムリ。しかしス  
ピードは普通のカタツムリとほとんど変わっていない。

コナミ&幸子 LP4000↓3200

メカニカルスネイル 攻撃力800

「う…1体でしたか」

「残念だったね。それじゃあミーのモンスターは倒せないよ」

「いや…そうでもないぜ。俺は手札からチューナーモンスター、ジエ  
ネクス・コントローラーを召喚だ！」

頭の左右にアンテナをつけたロボットが現れ、隣にいる機械のカタ  
ツムリを変形させていく。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「レベル3のメカニカルスネイルにレベル3のジエネクス・コント  
ローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、欲を抑え  
その力を正しき方向へと修正せよ！シンクロ召喚！発進せよ、A・  
ジエネクス・トライアーム！」

現れたのは人型のロボット。左腕のコードが左手についている装  
備に繋がっており中枢コアにジエネクス・コントローラーが装填され  
るとコードから発信された信号によって紫色のランプが点灯した。

A・ジエネクス・トライアーム 攻撃力2400

「おおー、ユーもやるね。1ターン目からシンクロしてくるなんて。  
でも強力モンスターでも異次元の女戦士ちゃんの効果の前にはイチ  
コロなんだなー」

「そうはいかないぜ。トライアームは3つの武器を使い分けて攻撃で  
きるんだ…そしてどの武器を使うかはシンクロ素材にしたチュー  
ナー以外の属性で決定する！メカニカルスネイルは闇属性、闇属性が  
素材になった時に使うことが出来るのは手札を1枚捨てることで相  
手フィールドの光属性モンスターを破壊し、さらにカードを1枚ド  
ローできる効果だ！」

「なんだって!？」

メカニカルスネイルの左手から出てきた闇が光属性の異次元の女

戦士を包み込み、そのまま消滅させてしまった。

「ミーの異次元の女戦士ちゃんになんてことを…!」

「悪いな。幸子のために負けてやれないんだよ!バトル、トライアームでダイレクトアタック!」

トライアームから出た闇が今度は康彦を包みこもうとする。

「ミーのお気に入りモンスターを破壊する空気の読めないモンスターには消えてもらうよ!トラップ発動、次元幽閉!攻撃してきたモンスターを除外するよ!」

「やべっ…!?!」

トライフォースの体が次元の裂け目に飲まれていき、体が完全に吸い込まれると裂け目は消えて無くなってしまった。

「こ、こら庶民!場にモンスターがいなくなりましたわよ!」

「わ、悪い!俺はカードを2枚伏せてターンエンド!」

コナミ&幸子 LP3200

フィールド 無し

セット2

手札2 (コナミ) 手札5 (幸子)

「なっちゃん!あとは任せたよ!」

「言われなくても!私のターン!」

(デュエル企業の大きさに任せて婚約を成立させようとしているのですからろくな男ではないと思っていました…見れば分かるとおり女たらしですわね)

「行くよ、私はネフティスの導き手を召喚!さらに手札のジェスター・コンフィは手札から特殊召喚することが出来る!」

炎のようにオレンジ色の衣装に身を包んだ女性と、ピエロのようなモンスターが場に並ぶ。

ネフティスの導き手 攻撃力600

ジェスター・コンフィ 攻撃力0

「攻撃力はそれほど高くはない…ですが」

「当然そんな単純な手じゃないよ!導き手の効果発動、導き手とジェスター・コンフィをリリースすることでデッキからネフティスの鳳凰

神を特殊召喚させてもらおうか！」

導き手が舞を踊ることで翼が燃えたまま飛んでいる鳳凰を呼び出し、供物を捧げることでフィールドに舞い降りさせた。

ネフティスの鳳凰神 攻撃力2400

「う…。いきなり攻撃力2400のモンスターを呼びやがったか！」

「さあ覚悟してもらおうか。ネフティスの鳳凰神で赤帽子の彼にダイレクトアタック！」

鳳凰がその翼をはためかせ、コナミに向かって急降下してくる。その姿はまさに火の鳥だ。

「まともに食らってたまるか！トラップ発動、ダメージ・ダイエツト！このターン俺たちが受けるダメージは半分になる！」

「だけどダメージは避けられない！」

「くっ…」

コナミ&幸子 LP3200↓2000

「カードを1枚伏せて終わりだよ。さあ、かかってきな！」

康彦&奈津代 LP4000

フィールド 『ネフティスの鳳凰神』（攻撃表示）

セット1

手札4（康彦） 手札3（奈津代）

「悪い幸子…。不利な状況で渡しちまった」

「大丈夫ですわ。この程度、乗り越えてみせましょう、わたくしのターン！わたくしはチューナーモンスター、深海のディーヴァを召喚します。このモンスターの効果でデッキからレベル3以下の海竜族モンスター、氷結界の輸送部隊を特殊召喚しますわ！」

半透明の羽衣に身を包んだ女性が清らかな声で歌い出すとその歌声につられて輸送部隊が寄り道をしてくる。

深海のディーヴァ 攻撃力200

氷結界の輸送部隊 攻撃力500

「ユーもシンクロかい？でも合計レベルは3、大したのは呼べそうにないね？」

「勘違いしては困りますわ。わたくしはフィールド魔法、忘却の都

レミューリアを発動！」

海の底に沈没した海底神殿が何千年もの時を経て地表に出現した。

「さらにレミューリアの効果を発動いたしますわ。わたくしの場の水属性モンスターの数だけわたくしの場の水属性モンスターのレベルを上げます！よってレベルは2ずつ上昇！」

「これでレベルは3と4…よし、やっちやえ幸子！」

「当然！わたくしはレベル3となった氷結界の輸送部隊にレベル4となった深海のディーヴァをチューニング！氷の槍を身に宿す龍よ、その凍える吐息で幾千の敵を凍らせよ！シンクロ召喚！全てを貫け、氷結界の龍 グングニール！」

海底神殿の一部を凍らせ万物を凍てつかせるドラゴンが天より舞い降りてきた。

氷結界の龍 グングニール 攻撃力2500↓2700

「攻撃力が上がった？」

「レミューリアの効果でわたくしたちの場の水属性モンスターは攻撃力が200上がりますのよ」

「その攻撃力でネフティスの鳳凰神を破壊する気かい？」

「いえ、わたくしは万全を尽くして挑ませてもらいますわ。グングニールの効果発動、わたくしの手札を2枚墓地へ送ることでああなたの場のネフティスの鳳凰神と伏せカードを破壊します！」

「おお、味方になると頼もしい効果だぜ！」

グングニールが呼び出した2つの氷の槍が火の鳥を貫こうとする。「ならその前に使わせてもらうよ！トラップ発動、デストラクト・ポーション。ネフティスの鳳凰神を破壊してその分ライフを回復する！」

「自分で自分のモンスターを破壊…？」

奈津代の発動したトラップによって鳳凰は消えてしまい、氷の槍も行き先を失ってしまう。

康彦&奈津代 LP4000↓6400

「…ですがフィールドは空きました！グングニールでダイレクトアタック！」

グングニールが息を吐くと、それは猛吹雪となって奈津代を襲つ



た。

「うう…見るだけでも寒いねえ」

康彦&奈津代 LP6400↓3700

「よし…盛り返しましたわ。わたくしはカードを1枚伏せてターンエ  
ンドー」

（今わたくしが伏せたのはミラーフォース。相手が攻撃してきたら相  
手の攻撃表示モンスターを全部破壊する超強力カードですわ…これ  
でグングニールの攻撃力を超えられても問題はありませんわね）

コナミ&幸子 LP2000

フィールド 『氷結界の龍 グングニール』（攻撃表示）

セット2 『忘却の都 レミューリア』

手札2（コナミ） 手札0（幸子）

「さあ行くよ、ミーのターンだ！」

康彦のドローとともにグングニールのもものではない咆哮がどこか  
らか聞こえてくる。

「な、なんですの!?!」

「ネフティスの鳳凰神の効果発動!このモンスターは効果で破壊され  
た次のターンのスタンバイフェイズに舞い戻るのさ!」

「マジかよ!」

不死鳥のごとく墓地より炎を見にまどった鳥が飛翔する。

ネフティスの鳳凰神 攻撃力2400

「さらにこの効果で特殊召喚された時フィールドの魔法・罫カードを  
一掃するよ!」

「な…!マズイですわ!」

「そうはさせねえ!トラップ発動、偽物のわな!幸子の伏せているト  
ラップカードをこのカードを身代わりにして破壊から守る!」

「…!だけどフィールド魔法は破壊させてもらうよ!」

鳳凰より飛んできた火の玉がフィールドを焼き尽くした。

氷結界の龍 グングニール 攻撃力2700↓2500

「これで伏せカードは守りましたわ!」

「ノンノン!甘いねガール!ミーは魔導戦士ブレイカーを召喚だよ。

召喚した時このモンスターには魔力カウンターが1つ乗る。さらにこの魔力カウンターを使うことで効果を発動、君のその伏せカードを破壊する！マナ・ブレイク！」

フィールドに現れた魔術師が剣を振るうとその衝撃波で幸子の伏せていたカードが破壊されてしまう。

魔導戦士ブレイカー 攻撃力1600

「うっ…ミラーフォースが！」

「だけどグングニールの攻撃力は2500。お前たちのモンスターじゃ超えられねえ！」

「超えられないね。だけど消えてもらうことはできるよ。ミーは墓地の光属性モンスター、異次元の女戦士と闇属性モンスター、ジェスター・コンフィを除外することでカオス・ソーサラーを特殊召喚！」  
闇と光の球体を片手に1つずつ持っている異様な魔術師がフィールドに現れた。

カオス・ソーサラー 攻撃力2300

「さらにカオス・ソーサラーの効果発動！このモンスターのアタックを放棄することでグングニールを除外させてもらうよ！」

「な…。しまったですわ！」

カオス・ソーサラーの持つ光の球体に触れてしまったグングニールはどこかへと飛ばされてしまった。

「これでフィニッシュ！ネフティスの鳳凰神でユーにダイレクトアタック！これでミーたちはハッピーなライフを送れるよ！」

「う…」

幸子が何か防ぐ手はないか確認するも伏せカードもなく、手札もない。この攻撃を防ぐ手は…幸子にはなかった。

「諦めんな幸子！俺は墓地のクリアクリボーを除外することで効果発動！幸子はカードを1枚ドロし、そいつがモンスターなら特殊召喚する！そしてそのモンスターに攻撃が誘動されるぜ！」

「シット！僕たちのハッピーライフを邪魔する気かい！」

「庶民…!?…ふっ、このわたくしが諦めているとでも思ってた？必ずやモンスターを引き当ててご覧にいれましょう。…ドロ！」

幸子が引いたカードのフレームは…茶色。即ちモンスターカードだった。

「〜っ！わたくしは黄泉ガエルを守備表示で特殊召喚！」

小さなカエルが鳳凰の前に降り立つ。だがその大きさの違いはそのまま力の違いでもあった。

黄泉ガエル 守備力100

「アンビリーバボー！モンスターを引いただって…!？」

鳳凰の攻撃がカエルをたやすく粉碎する。だが幸子達にダメージはなかった。

「おのれ…赤帽子め。まあいい、すぐにユーのライフは0になる。ブレイカーでダイレクトアタック！」

「ひゃっ…！…まだライフは残っていますわ！」

コナミ&幸子 LP2000↓400

「これがミーの切り札…永続魔法、波動キャノン発動だ！次のターンのミーたちのスタンバイフェイズを通過することでこのカードはユーたちに1000のダメージを与えるカードへと変わるのさ！」

「あのカードが発射される前に決めないとダメなのか…！」

「出来るもんならやってみるといいさ。どうせ無駄だけどね。これでミーは今度こそ素敵なレディを嫁に迎えることができるのさ！」

「…今度こそ？」

「こいつこの前振られたばかりなんだよ。だからちよつと強引な手であんたを嫁にしようとしてるわけだ。許してやってくれ！」

「なっちゃん！そのことはシークレットと言ったじゃないか！」

「いいじゃないか別に。減るもんじゃないだろ。それより早くターンエンドしなよ！」

「ちっ…ターンエンド！」

康彦&奈津代 LP3700

フィールド 『ネフティスの鳳凰神』（攻撃表示） 『カオス・ソーサラー』（攻撃表示） 『魔導戦士ブレイカー』（攻撃表示）

セット0 『波動キャノン』

手札2（康彦） 手札3（奈津代）

「庶民…後は任せましたわ」

「任されたぜ！俺のターン！」

ドロートともにフィールドに出来た水溜りからカエルが出てきた。  
「墓地の黄泉ガエルはわたくしたちのフィールドに魔法・罠がない時、スタンバイフェイズに特殊召喚出来ますわ！」

黄泉ガエル 守備力100

「ナイスだぜ幸子。俺は黄泉ガエルをリリースして、ブローバック・ドラゴンをアドバンス召喚だ！」

口の中に銃口があるロボットがフィールドに現れる。

ブローバック・ドラゴン 攻撃力2300

「その程度のモンスターで何をするんだい？」

「こうするのさ！カオス・ソーサラーを対象にブローバック・ドラゴンの効果を発動！3つのコイントスのうち2つ以上が表ならカオス・ソーサラーは破壊される！」

フィールドに舞う3つのコイン。3枚とも地面に落ちてその面をプレイヤーに見せた。

「裏、表、表！成功だ！」

「ディステニーすらもユーたちに加勢するというのか…!？」

ブローバック・ドラゴンの銃口からカオス・ソーサラーに向けて銃弾が放たれた。

「くっ…だけどアタックはネフティスの鳳凰神に及ばない。ユーにミーたちのライフを0にすることは出来ないのさ！」

「ふっ…甘いですわね」

「何だって？」

「庶民を甘く見過ぎですわ。仮にもこのわたくしに1度勝利した身、この程度の逆境を乗り越えるのは必然です！」

「幸子…。ああ、勿論だ！俺はアイアンコールを発動。このカードは俺のフィールドに機械族モンスターがいる時、墓地のレベル4以下の機械族を特殊召喚することができる…来てくれ、ジエネクス・コントローラー！」

フィールドに空いた穴からクレーンゲームのようにアームに掴ま

れたジェネクス・コントローラーが引つ張り出されてきた。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「このフィールドは…やっておしまいなさい庶民！」

「おう！俺はレベル6のブローバック・ドラゴンにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアン！」

ブローバック・ドラゴンがジェネクス・コントローラーの電波で蒸気機関車へと変形していく。溢れる蒸気を止めるためにジェネクス・コントローラーが中枢コアへ装填され、制御をおこなった。

レアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「ちつ…アタックを超えてきたか。だがその程度じゃ…」

「クロキシアンの効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時…相手フィールドの1番レベルが高いモンスターのコントロールを得るぜ！」

「な…!？」

クロキシアンの蒸気によって鳳凰がまとっていた火が消え、蒸気機関車の上に鳳凰は降り立った。

「なつちゃんのモンスターすらミーのエネミーになるといのか…！」

「さあ行くぜバトル！ネフティスの鳳凰神でブレイカーに攻撃だ！」

鳳凰はその翼を鋭く動かしブレイカーを剣ごと弾き飛ばした。

康彦&奈津代 LP3700↓2900

「ぐつ…だが！たとえクロキシアンのダイレクトアタックが決まったとしてもミーのライフは0にならない！」

「うっ…」

「所詮ユーのパワーじゃここまで！やはりそちらのビューティフルなレディにふさわしいのはこのミーなのさ！」

「…笑わせますわ。見た目だけでこのわたくしを判断するなどというのは愚考ですわよ」

幸子は長い青髪をかき分け、呆れた目で康彦を見つめる。

「怒らせちゃったかい？それなら謝るよ。だけどこれからユーはミーが守っていくのさ、ファイアンセとしてね！」

「庶民、わたくしがこんなナンパな男に守られるような女だと思いませんか？」

「…いや、思わねえな」

「なら攻撃しなさい、それで全てが決まりますわ」

「…分かった。俺はクロキシアンでダイレクトアタック！」

「最後の悪あがきか、なかなかキユートだね」

蒸気機関車が康彦へと続く線路を走り出す。その際に出る蒸気が蒸気機関車の近くだけではなくフィールド全体すら覆い尽くした。そして蒸気機関車が康彦をはねのける。

「ぐうっ…！だがこれでユーはミーのもの…え？」

康彦&奈津代 LP2900↓0

「な、何故だ！ミーたちのライフが0になるはずはない！」

「あら、その蒸気機関車に分け与えた力が強すぎてあなたからは見えなかったみたいですね。…このカードが」

蒸気が晴れ、康彦の視界も良好になる。彼の目に入ってきたのは：

1枚のトラップカード。

「ば、馬鹿な！セットカードはなかったはずだ！」

「そうですね。ですがわたくしはこのカードを墓地から発動したのですわ」

「セメタリーからトラップだって!？」

「ひゅー、やるねえ」

「トラップカード、スキル・サクセサー。このカードは自分のターンのみ墓地から除外することで自分の場のモンスターを800アップ出来ますの。わたくしはこのカードの効果でクロキシアンの攻撃力を上げていたのですわ」

幸子からクロキシアンに与えられた力。中枢コアにいるジエネクス・コントローラーが頑張ってるんとか制御しているようだ。

クロキシアン 攻撃力2500↓3300

「そ、そんな…ミーが負けるなんて…！」

「あなたが負けた敗因は一つ、わたくしのことを見誤ったことですわ。わたくしはあなたのような人に守られるような女ではない、そして庶民のように力の無き人には力を貸し与える。それがわたくしですわ」  
「幸子…」

ソリッドヴィジョンが消えていき、勝敗は決した。

「ま、まだだ…。マミーに圧力をかけて貰えばここでの勝敗なんて関係は…!」

「いい加減にしな!」

「えっ…? なっちゃ…ぐはっ!?!」

奈津代が康彦のみぞおちに軽くジャブを入れる。康彦はそのままうずくまってしまった。

「あんだねえ…なんで旅行中の私が呼び戻されたか分かってる? あんたの暴走を止めるためなんだよ」

「え…?」

「女性に1回振られたぐらいでだらしない…。しかもそれを引きずってよそ様に迷惑までかけて…こりやお仕置が必要だね」

「ひ、ひい! す、すまなかった。ミーはただ…」

「謝んのは私じゃないよ!」

「す、すまなかった。レディ、それにそっちのボーイも」

「俺は幸子が許すっていうなら別にいいけどな」

「わたくしを誰だと思っっていますの。あの海野財閥の令嬢ですわよ? この程度のことを一々引きずるようならトップにはなれませんわ」

「なんて心広い女性なんだ…! そうだ、婚約は一旦取りやめになつてしまいますがこれからミーと一緒にティーでも」

もだえながらも幸子に差し伸ばされた手、幸子の答えは決まっていた。

「お断りですわ。行きますわよ庶民」

「おう」

即答で手をはねのけた幸子はコナミと共にデュエルコートから出て行く。奈津代からさりげなく旅行資金を提供するスポンサーになつてくれないかという話をされていたが、それは後日ということに

なった。

本社への帰り道、幸子はコナミに話しかける。

「庶民、あなたには迷惑をかけましたわね」

「いいってことよ」

「それにしても…あなたには守られてばかりですわ」

「ん？最後お前の助けがあったからデュエルに勝てたんだが…」

「その前にクリアクリボーで守られています。それにそれだけの話ではありませんわ。お父様のこともです」

「でもあの後サテライトに援助してくれたからな。俺こそお前に感謝してるぜ」

「むう…人の感謝は素直に受け取りなさい！それが礼儀ですわよ！」

「ええ!？」

ならコナミの感謝を素直に受け取らない幸子はどうかの言いなくなるがあまりの勢いにそんなことも言えなくなってしまふ。

「それにサテライトでの活動もどちらかというとうたくしの力をどう使うかを知るためのきっかけでしたし…」

「ん？なんか言ったかー？」

「何でもありませんわ！」

小声で呟いたのがよく聞こえずたずねてみるも幸子は答えてくれなかった。

「こほん！庶民、うたくし借りを作るのは嫌いですの。これを受け取りなさい。」

そう言いながら差し出される2枚のカード、その1枚は融合だった。

「え、融合!?!いいのかよ？これ確かレアカードだろ？」

「うたくしは融合は使えませんし構いませんわ。使わないならいらな何も同然です」

「そうか…ありがたく使わせてもらうぜ。あともう1枚のカードは何だ…？フュージョンって書いてあるからこれも融合なのか」

「そうですね。きつとあなたのデッキなら使いこなせるでしょう」

「そっか。サンキューな幸子！」



「…ふ、ふん！わたくしはいつかあなたにリベンジします。負けたままは嫌いですからね。そのあなたが大したことないと面白くありませんから、それだけですわ」

「リベンジか！楽しみにしてるぜ」

「せいぜいこのわたくしにコテンパンにやられないことね」

「はは…気をつけるぜ」

話をしている間にいつの間にか本社に戻ってきた。気づけば時間は夕方、幸子の事務室で話していた昼くらいの時間帯から時がかなり経っていた。

「そろそろ遅いですしあなたはとりあえず帰りなさいな」

「ああ。またな！」

そう言つてDホイールを止めてある場所に歩き出すコナミ。すると幸子が呼び止めた。

「あ、庶民。お待ちなさいな」

「ん？なんだ？」

コナミは足を止め幸子の方を振り向く。夕焼けに照らされているからか少し顔が赤かった。

「WRGPの試合がある時間帯はなんとかしてスケジュールは空けておきます。…それだけですわ。では、ごきげんよう」

「え？それって…」

コナミが呼び止めようとするも幸子は既に本社の中に走っていた。

## 融合じやねえ、フュージョンだ

幸子とのタツグデュエルの翌日、コナミは再びデュエルアカデミアに来ていた。その理由はエリート教師のハイトマンを倒したコナミを特別講師として呼びたいとの要請があったからである。

「この教室よ。入って」

加藤友紀という教師に連れられ、1つの教室に案内される。

「ここか…失礼しまーす」

「あつ…コナミさんじゃないですか!」

入った瞬間に声をかけたのはゆま。急に大声を出したので隣に座っている委員長に注意を受けていた。

「あうう…いきなりすいません」

「はは、相変わらずだなゆま」

友紀に生徒の前に立って自己紹介をするように頼まれたので軽く自己紹介をすませる。

「えーと、コナミだ。ちよつと前にハイトマンをこらしめといた。今日は特別講師として呼ばれたんだぜ。よろしくなー」

「あの人がハイトマン教諭を…」

「本当だ…赤帽子被ってる」

(帽子は室内じや脱ぎなよって言いたいけど、僕あんまり初対面の人に話しかけるの得意じゃないし別にいいや…)

生徒達は各々違った反応を示す。退学という事態まで発展したハイトマンの騒動を解決した赤帽子の話はやはり大きな話題となっていたようだ。

(幸子は…いないか。そりやそうだよな、あいつテストだけ受けるって言ってたし)

昨日のことが気になっていたので、いたら聞いてみようと思っていたが彼女は今日も仕事をしていた。コナミが幸子を探している間に1人の生徒が前に出てくる。

「そうそう、彼女があなたが特別講師をやるのを勧めてくれたのよ」

「え?…そうなのか」

「そう。私が提案した」

コナミの前に立つのは銀髪のツインテールの少女だった。コナミは初対面の彼女に推薦されたことをいぶかしく思う。それを察したのか再び彼女が口を開いた。

「実は私もあのデュエルを見ていた」

「そ、そうだったのか」

「あのデュエルを見ていてあなたと戦いたいと思った。それであなたが特別講師をやるのを推薦した」

「なるほどな」

淡々と説明する彼女だが評価してもらったことに違いはないので嬉しく思うコナミ。それを聞いてやることは決まっていた。

「せっかくそこまでしてくれただ！デュエルで礼は返すぜ！えーと……」

「私はレイン恵。私は見たい、あなたの力を。だから全力で来て欲しい」

「分かったぜ恵。今俺の出せる全てをお前にぶつけてやるぜ！」

互いに向き合いデュエルディスクを構える。今回の講義は実践のデュエルということになりそうだ。生徒達に見守られる中デュエルが開始される。

「デュエル！」 「…デュエル」

先攻がデュエルディスクによってランダムに決定される。先攻をとったのは恵。

「私のターン、ドロ。私はモンスターを裏側守備表示で召喚。…ターンエンド」

恵の場にモンスターが現れるもカードの裏面しか伺うことはできない。

レイン恵 LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット0

手札5

「行くぜ恵！俺のターン、ドロ！俺はUFOタートルを召喚してそ

のセットモンスターに攻撃！」

円盤を背負った亀がフィールドに現れると手足を円盤の中に引込み、顔だけ少し出た状態で円盤が浮いてそのまま突撃していく。

UFOターゲットル 攻撃力1400

「私が伏せていたのはゴ布林ゾンビ。：破壊される」

骨格だけで体が形成されているゾンビがUFOによって地面へと叩きつけられた。

ゴ布林ゾンビ 守備力1050

「だけどゴ布林ゾンビはフィールドから墓地に送られた場合デッキから守備力1200以下のアンデット族モンスターを手札に加える。：私に加えるのはゾンビ・キャリア」

「やるな！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『UFOターゲットル』（攻撃表示）

セット1

手札4

「：私のターン。私は手札から2枚の永続魔法を発動させる。ミイラの呼び声、不死式冥界砲。まずはミイラの呼び声の効果、私のフィールドにモンスターがない時、手札のアンデット族モンスターを特殊召喚できる。この効果で私はゾンビ・キャリアを特殊召喚」

ミイラの声にならない呼び声とともに小型のゾンビが現れた。

ゾンビ・キャリア 攻撃力400

「さらに不死式冥界砲は1ターンに1度、私のフィールドにアンデット族モンスターが呼ばれた時にあなたに800のダメージを与える」

「なに!?!」

ゾンビ・キャリアの体からエクトプラズマーが抜き取られ、コナミを襲った。

コナミ LP4000↓3200

「先制パンチをもらったか……!」

「：さらに私はピラミッド・ターゲットルを召喚。そしてレベル4のピラミッド・ターゲットルにレベル2のゾンビ・キャリアをチューニング。2

つの魂が魔王復活の贄となる。…シンクロ召喚。来て、蘇りし魔王ハ・デス」

2つの魂が闇に沈んでいくとそこから闇に身を包んだ魔王が姿を現す。

蘇りし魔王 ハ・デス 攻撃力2450

「もうシンクロを決めてきたか!」

「…バトル。UFOタートルへ攻撃」

魔王が手らしきものを地面に振りかざすとUFOタートルの足元から出てきた腕が闇へと引きずり込んでいった。

コナミ LP3200↓2150

「くっ…だがUFOタートルは戦闘で破壊された時デッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを特殊召喚できる!」

「無駄…。ハ・デスがいる限り私のアンデットが戦闘破壊したあなたのモンスターの効果は…無効」

「な、なにー!」

UFOタートルは闇に飲まれていきもはやコナミの声は届いていない。

「私はカードを1枚伏せる。あなたはこれを持ち越えられる?ターンエンド」

レイン恵 LP4000

フィールド 『蘇りし魔王 ハ・デス』(攻撃表示)

セット1 『ミイラの呼び声』 『不死式冥界砲』

手札2

「まだまだ行けるぜ!俺のターン、ドロー!俺は予想GUYを発動してデッキからレベル4以下の通常モンスター、ジェネクス・コントローラーを特殊召喚するぜ!さらに手札からギガテック・ウルフを召喚!」

放電とともに現れたアンテナのついたロボットの隣に鉄屑で作られたオオカミが降り立った。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

(これは…彼の得意パターン。ということは彼が出してくるのは…あのモンスター)

「レベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA・ジェネクス・トライフォース！」

ギガテック・ウルフがジェネクス・コントローラーの電波で変貌していき、中枢コアにジェネクス・コントローラーが装填されるとオレンジ色のランプが点灯する。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「これでハ・デスの攻撃力は上回ったぜ！バトル！トライフォースで攻撃だ！」

トライフォースの炎放射が闇ごと魔王を燃やし尽くす。

「…ダメージ小。だけど…」

「炎属性をシンクロ素材にしたトライフォースは戦闘で破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

レイン恵 LP4000↓1500

「これで厄介なシンクロモンスターは消えた！カードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP2950

フィールド 『A・ジェネクス・トライフォース』(攻撃表示)

セット1

手札2

「私のターン。私は墓地のゾンビ・キャリアの効果を発動、手札を1枚デッキの上に戻してこのモンスターを特殊召喚できる」

ゾンビ・キャリアが地面に空いた闇から出てくる。

ゾンビ・キャリア 攻撃力400

「さらに不死式冥界砲の効果。あなたに800の効果ダメージを」

ゾンビから出てきたエクトプラズマーがそのままコナミを貫通する。

「くっ…。毎ターン800はきついな！」

コナミ LP2150↓1350

「さらに私は酒呑童子を召喚。このカードの効果で墓地のピラミッド・タートルとハ・デスを除外し、カードを1枚引く」

「ゾンビ・キャリアで戻したカードを引いてきたか！」

「さらに私はフィールド魔法、アンデットワールドを発動。フィールド、墓地のモンスターは全てアンデット族になる。そしてアンデット族モンスター以外のモンスターはアドバンス召喚できない」

「なに!?!」

フィールドが墓場のような雰囲気に含まれる。

「私はレベル4の酒呑童子にレベル2のゾンビ・キャリアをチューニング。魂が重なる時新たな力を生み出す。シンクロ召喚、おいでデスカイザー・ドラゴン」

煉獄より飛翔したのは骨で翼を形成した奇妙なドラゴンだった。

デスカイザー・ドラゴン 攻撃力2400

「このモンスターがシンクロに成功したことで効果発動。あなたの墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚する」

「アンデット・ワールドはそのためか……!」

「私が呼ぶのはあなたのデツキのコアとなるモンスター……ジエネクス・コントローラー」

アンデット化したジエネクス・コントローラーが恵の場に呼び出された。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「俺のデツキの主軸モンスターを見破ったか……。やるな恵」

（相手の主要なチューナーを奪うことでシンクロを封じる……これが私のシンクロキラー、デスカイザー・ドラゴン。……あなたはどう立ち向かう?）

「……さらに私はトラップカード、王墓の罠を発動。あなたの墓地のアンデット族モンスターが特殊召喚された時、フィールドのカードを2枚破壊する。私はトライフォースとあなたの伏せカードを破壊」

「うっ……魂の一撃もか……!」

恵の発動したトラップによりコナミのフィールドのカードが全て

吹き飛んでしまう。

「…バトル。デスカイザー・ドラゴンでダイレクトアタック。…これで終わり」

「いいや、終わらせない！手札の工作列車シグナル・レッドは相手が攻撃した時特殊召喚出来る！そして攻撃を誘導し、そのバトルでは破壊されない！」

「…」

コナミの後ろから出てきた列車がデスカイザー・ドラゴンの前で急停止した。デスカイザー・ドラゴンの炎を耐え、コナミを守ることに成功する。

工作列車シグナル・レッド 守備力1300

「だけどジェネクス・コントローラーの攻撃が残っている。私はジェネクス・コントローラーでシグナル・レッドに攻撃」

アンデット化したジェネクス・コントローラーが電波を発信しシグナル・レッドを暴走させ自爆させた。

「次のターンで決める。私はこれでターンエンド」

レイン恵 LP1500

フィールド 『デスカイザー・ドラゴン』（攻撃表示） 『ジェネクス・コントローラー』（攻撃表示）

セット0 『ミイラの呼び声』 『不死式冥界砲』

手札1

「行くぜ、俺のターン！…来たか！」

コナミが引いたカード、それは昨日幸子にもらったカードだった。「行くぜ恵！俺はキャノン・ソルジャーを召喚！そしてキャノン・ソルジャーの効果発動！モンスターをリリースすることで恵に500のダメージを与える！」

アンデット化したキャノンソルジャーのエクトプラズマーが恵に直撃する。

レイン恵 LP1500→1000

「…だけどそれではフィールドが空気になる。500のダメージにそのリスクは見合っていない」



「確かに。だけど俺の狙いは墓地にキャノン・ソルジャーを送ることだ！俺はオーバーロード・フュージョンを発動！」

「…！融合？」

「このカードは墓地のモンスターを除外して闇属性・機械族の融合モンスターを融合召喚出来る！俺は墓地のキャノン・ソルジャーとギガテック・ウルフを融合！全てを発射する戦士よ、鉄屑のオオカミと一つとなり新たな力を手に入れろ！融合召喚！その射撃で敵を射ぬけ、迷宮の魔戦車！」

青でコーティングされた機体に赤のドリルが先端についた戦車がフィールドに出陣する。

迷宮の魔戦車 攻撃力2400

(機皇帝へのあなたの答え、それは融合召喚ということ…?)

「バトル！迷宮の魔戦車でジェネクス・コントローラーに攻撃だ！」

レイン恵がわずかに顔を歪めるなか、戦車がジェネクス・コントローラーを撃ち抜いた。

「…」

レイン恵 LP1000↓0

デュエルの終了とともに生徒達が拍手で2人を讃える。

「楽しいデュエルだったぜ恵」

「…楽しい？」

「ああ、まさか俺のモンスターをゾンビにして奪うなんてな。予想できなかったぜ」

「…そう。あなたの融合召喚も予想外だった。でもそれが楽しいかは…私には分からない」

「…？分からない？」

「私には感情がない。ただ事実を判断することしかできない」

(…そういうキャラ付けてことか?)

「なら周りを見てみるよ、恵。俺たちのデュエルを見てみんな楽しそうだろ？」

2人のデュエルに盛り上がっている生徒達、次は自分が戦いたいという生徒達が出てきている。

「みんなが楽しめるってことは俺たちが楽しめるデュエルだったってことか」

「そう…かもしれない。私のメモリにそのデータは残しておく」  
「はは…」

「コナミさん！私ともデュエルしましょう！」

「おう！やろうぜ！」

この後もコナミと学生とのデュエルは続き、みんなで楽しくデュエルした。そしてデュエルアカデミアの特別講師としての仕事が終わり、弥生のホテルへ帰ろうとするコナミに1つの連絡が入った。

「遊星？…珍しいな。もしもーし遊星ー？」

「コナミ。聞いて欲しいことがある」

「なんだ？」

「…鬼柳が今いる場所が分かったんだ」

「なんだって！本当か!？」

仲間の無事を喜ぶコナミ。だがこの連絡がきっかけで様々なトラブルに巻き込まれるとはこの時は全く思っていなかった…。

とんだハリキリボーイズがやってきたじゃねえか

遊星とコナミ、彼らはDホイールを走らせ鬼柳が今いる場所、クラッシュタウンへと向かっていた。

事の発端は遊星に届いた1通の手紙だった。その手紙には鬼柳がクラッシュタウンで行われているデュエルに参加しており、そのデュエルは危険でとも見えていられないことや、鬼柳を助けるために元チームサティスファクションのメンバーである遊星に手紙を送ったという旨が綴られていた。

それを受け取った遊星はダークシングナーの鬼柳と戦う時一緒に戦ってくれたコナミも必要だと判断し、彼と一緒に鬼柳の元へ向かっている。クロウやジャックには何日かたつても帰ってこなければ様子を見に来て欲しいという置き手紙をガレージに残してきていた。

そして彼らはクラッシュタウンに到着した。見た目はアメリカの開拓時代のような街で、藁の塊のようなだたんブル・ウイードという植物がそこらを転がっている。

「Dホイールなんて洒落たもの乗ってるなあ、坊や達」

「とんだハリキリボーイズがやってきたじゃねえか」

「いっちょ俺たちがもんでやろうか」

着いた途端3人のデュエリストに絡まれる。

「い、いきなりなんだ！やるのか！」

「やめておけコナミ。俺たちはデュエリストしか相手にしない」

「いい啖呵を切りやがるじゃねえか。だが、そういう奴ほど地獄送りが早くなるぜ」

「…地獄送り？」

彼らが話していると花屋から1人の女性が出てきた。

「やめなあんだ達！今はまだデュエルタイムじゃないよ！」

その女性は遊星に手紙を送ったバーバラだった。この場を収め彼女から話を聞いたところ、このクラッシュタウンは死の街と呼ばれていて夕日が地平に触れるとともに負けた方が鉱山へと送られてしまう死のデュエルが開始されるようだ。

その日の夕方、彼らは鬼柳がそのデュエルをしているのを見た。だがそのデュエルはどこか投げやりでまるでデュエルの勝敗を天に任せているかのようで2人は違和感を覚えた。

「鬼柳…一体どうしてこんなデュエルを」

「まるで…鬼柳はここで鉱山に送られるのを待っているような…」

「…そうかもしれないわ」

「どういうことだ？」

「彼はデュエルをする度こう言っているらしいの。今日も俺は勝ってしまったってね…」

「何だって…どういうことだ？」

「まさか…」

そこまで聞いて遊星は何か思い当たることがあったようだ。

「コナミ、実はダークシグナーは俺の知る限りではあの戦いの後、全員蘇っているんだ。…記憶を消されてな」

「そうだったのか!？」

「ああ。だが鬼柳は…もしかしたら思い出してしまったのかもしれない。ダークシグナーの時に自分が何をやったのかを」

「…！もしかして鬼柳は…」

「…このデュエルに負けることで自分を葬らせようとしているのかもしれない」

「そんな…」

だがこの日のデュエルも鬼柳は勝利し、相手の者が無理やり箱に閉じ込められて鉱山へと連れて行かれてしまった。

「遊星…鬼柳を助けようぜ！」

「だが…どうやって」

「俺がああデュエルをして鬼柳に勝てば一瞬だけ隙ができるはずだ…。その隙を狙って遊星がDホイールで鬼柳を連れ去ってくれ！」

「…！危険だコナミ！デュエルならば俺が…」

「いや…俺にやらせてくれ！鬼柳を助きたいんだ…」

「コナミ…。分かった」

「…鬼柳はラモングループに所属しているからデュエルの相手をする

にはマルコムグループに入る必要があるね」

「マルコムグループか…行ってくる」

「コナミ…気をつけろ」

「ああ」

そう言つてコナミはマルコムのいる酒場へと赴く。マルコムは連敗によつて荒れていた。

「あの死神野郎め…ヒック」

「マルコムさん…明日は誰をデュエルに送りましょう?」

「ああ!?勝てるやつを連れてこい!」

「そんな無茶な…」

「それはどうかかな?」

「誰だ!」

「俺か?俺はコナミ、ちよつとした旅人さ」

赤帽子の代わりにバーバラから拝借したカウボーイハットを被つたコナミがマルコムの前に参上した。

「お前さんデュエリストか。だがな俺様は弱つちいやつは求めてないんだ。お前ら!」

マルコムの号令で3人のデュエリストが現れた。

「これからこいつらとバトルロイヤルで戦つてもらおう。全員1ターン目は攻撃は出来ない。そこで先攻はお前さんから。その条件で勝つたらお前さんを雇つてやるよ」

「実質3対1か…いいぜ」

「へへ…そんじや始めな」

コナミの前に3人のデュエリストが並びデュエルが開始される。相手のデュエルディスクは拳銃の形から組み立てられるものらしくそれぞれのスピードでそれを展開していった。

「俺のターン、ドロー!俺はギガテック・ウルフを召喚。カードを3枚セットしてターンエンドだ!」

場に現れた鉄屑で作られたオオカミがコナミを守るように遠吠えをあげた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

コナミ LP4000

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セツト3

手札2

「ひび…行くぜ？俺のターン。俺は永続魔法、悪夢の拷問部屋を発動するぜ」

フィールドに突如現れた大きな鉄檻の壁に2つの影が映る。

「なんだこれは？」

「すぐに分かるさ…俺はファイヤー・トルーパーを召喚！」

フィールドの一部が炎で燃やされその上に1人の騎士が降り立つ。

ファイヤー・トルーパー 攻撃力1000

「だが攻撃力はギガテック・ウルフの方が上…どうする気だ？」

「こうするのさ。ファイヤー・トルーパーが召喚に成功したことで効果発動！このモンスターを墓地に送ることで相手プレイヤーに1000のダメージを与える！俺が狙うのは当然お前だ！」

騎士が炎に飛び込むとその炎がコナミの方に向かってくる。

「くっ…なら永続トラップ発動、ドツペル・ゲイナー！相手のモンスター効果で俺が受けるダメージは相手も受ける！」

「なにっ！」

コナミの発動したトラップから出てきた鏡が炎を分割し半分を相手に跳ね返した。

コナミ LP4000↓3000

マルコムの部下A LP4000↓3000

「へっ…だがこの瞬間、悪夢の拷問部屋の効果発動！俺が相手に戦闘ダメージと悪夢の拷問部屋の効果以外で相手にダメージを与える度、相手に3000のダメージを与える！」

「くっ…ドツペル・ゲイナーじゃ魔法の効果ダメージは跳ね返せない！」

1つの影がもう1つの影を思い切り叩くと、悲痛な叫び声がコナミの耳を貫いた。

コナミ LP3000↓2700

「ふふ…ターンエンド」

マルコム下部A LP3000

ワールド 無し

セット0 『悪夢の拷問部屋』

手札4

「俺のターン！俺は永続魔法悪夢の拷問部屋を発動し、ファイヤー・トルーパーを召喚！」

「なんだと!？」

先ほどの繰り返しのように炎に乗った騎士が現れる。

「あとは分かるよな？ファイヤー・トルーパーを墓地に送ってお前に1000のダメージ！さらに悪夢の拷問部屋の効果も食らえ！」

「くっ…ドツペル・ゲイナーの効果でダメージをお前にも受けてもらう！」

コナミ LP2700↓1400

マルコム部下B LP4000↓3000

「まさか…お前ら…！」

「ターンエンドだ！」

マルコム部下B LP3000

ワールド 無し

セット0 『悪夢の拷問部屋』

手札4

「俺のターン！悪夢の拷問部屋を発動し、ファイヤー・トルーパーを召喚！そして効果を発動する！」

「ちっ…やつぱりか！」

コナミの前に3度繰り返し返される光景、それがコナミに襲いかかった。

コナミ LP1400↓1000

マルコム部下B LP4000↓3000

「ふふ…」

「まだまだ…」

「弾はあるぜ！」

部下の手札にはそれぞれまだ2枚のファイヤー・トルーパーが握られていた。

(イカサマか…。まあサテライトでならず者がよくやっていたけどな)

「ターンエンドだ。さあこの状況からお前に何ができる?」

「このタイミングで速攻魔法、スケープ・ゴートを発動!羊トークンを4体特殊召喚する。こいつはアドバンス召喚のためにはリリース出来ない!」

黄色、オレンジ、ピンク、青の羊が4体フィールドにふわふわと浮いた。

羊トークン×4 守備力0

マルコムの部下C LP3000

フィールド 無し

セット0 『悪夢の拷問部屋』

手札4

「だが俺は負けねえ…。あいつのためにも負けられねえんだよ!俺のターン、ドロー!」

引いたカードは機皇帝の対策の1つ…融合だった。

「っし…。俺は融合を発動!フィールドの機械族モンスター、ギガテック・ウルフと手札の炎族モンスター、ファイヤー・アイを融合!鉄で成り立ちしオオカミよ、炎で体を溶接し新たな姿へと生まれ変われ!融合召喚!全てを覆い尽くせ、重爆撃禽じゅうばくげきん ボム・フェネクス!」

翼のみが鉄で成り立っている巨大な火の鳥が空から降下してきた。

重爆撃禽 ボム・フェネクス 攻撃力2800

「へっ…。いくら大型モンスターを呼び出そうと次のターンで終わりよ!」

「残念だが…お前らに次のターンはねえ!ボム・フェネクスの効果発動、不死魔鳥大空襲!こいつの攻撃を放棄する代わりにフィールドフェネクス・ビッグ・エアレイドのカード1枚につき相手に3000のダメージを与える!狙いは俺から見て右のやつだ!」

「フィールドのカードはお前が7、俺たちが1つずつってことは…」



「3000のダメージを食らいやがれ！」

火の鳥が翼をふるうと空より多数の隕石が落下し、マルコムの部下に直撃した。

「うおおっ!？」

マルコムの部下A LP3000↓0

「1人倒したか…だがまだ俺たちが残っている！」

「さらにスケープ・ゴートが邪魔であいつは手札からモンスターを出しにくいはずだ…！」

「残念だったな！トラップ発動、火霊術―「紅」―！こいつは俺の場の炎属性モンスター1体をリリースし、その時の攻撃力分のダメージを相手に与える！ボム・フェネクスをリリースし、俺から見て左のやつにダメージを与える！」

火の鳥が空に向かって咆哮をあげたかと思うとそのままマルコムの部下めがけて降下し、自らの体で焼き尽くした。

マルコムの部下C LP3000↓200

「ぐおおっ…。だがお前の手札は残り1枚！それで何ができる！」

「お前たち全員を倒すことができる！俺はキャノン・ソルジャーを召喚！」

紫で彩られたメカメカしいロボットが羊たちの中心に現れる。

キャノン・ソルジャー 攻撃力1400

「バトル！俺から見て真正面にいるやつにダイレクトアタック！」

両手についているかぎ爪を使い、相手を切り裂いた。

マルコムの部下B LP3000↓1600

「ぐっ…だがこれでお前の出来ることは全て終わった！これでお前のターンは終わる！」

「何を勘違いしてやがる！俺のターンはまだ終わっていないぜ！キャノン・ソルジャーの効果発動、フィールドのモンスター1体をリリースすることで相手に500のダメージを与える！」

「何だと…！」

「俺は羊トークン4体をリリースし真正面のやつに2000のダメージを与える！」

キャノン・ソルジャーの頭部に設置されたピストルに羊たちが入っていき4体の羊が放たれた。

「馬鹿なっ……」

マルコムの下下B LP1600↓0

「そして最後は……お前だ！もう1度キャノン・ソルジャーの効果を使うぜ！キャノン・ソルジャー自身をリリースし、残りのやつに500ダメージを与える！」

キャノン・ソルジャー自身がマルコムの下下に飛びかかり、その衝撃でキャノン・ソルジャーも消滅してしまう。

「嘘だ……ろ」

マルコムの下下C LP200↓0

3人の相手が全て倒れ、勝敗が決した。

「よし！俺の勝ちだ！」

「おお……ワンタンスリーキルウ……こいつはすげえ！お前さんならあの鬼柳に勝てるかもしれねえ！頼むぜ、いくらでも払うから明日のデュエルに出てくれ！」

「いいぜ……だが報酬は高くつくかもな」

こうして明日、コナミと鬼柳は戦うことになったのだった……。

忘れちゃったよ……ラストデュエルなんてものは

コナミがマルコムに雇われた翌日の夕方、デュエルタイムが迫ろうとしている。コナミはマルコムに支給されたデュエルディスクへ変形することができる決闘銃を手に鬼柳と対峙していた。クラツシユタウンでは銃を抜いてディスクへ変形し、先にカードを5枚引いた者が先攻となる。

「コナミ……!? どうしてお前がここに?」

「鬼柳……俺はお前を連れ戻しに来た!」

「……それは無理だ。このデュエルはどちらかが鉾山へと送られてしま  
う」

「それでも俺は……お前を救ってみせる!」

「……」

やがて夕焼けが地平線へと触れそうになる。この夕焼けが地平線へと触れた瞬間から夕焼けが見えなくなるまでがクラツシユタウンでのデュエルタイムである。そして今、夕焼けが地平線へと触れた。

「……デュエル!」

互いに銃を抜き、ディスクを展開し、カードを5枚引く。経験の差か……圧倒的に鬼柳の方が早かった。

「う……さすがにちよつと練習したくらいじゃ勝てねえか」

「そのようだな。俺のターン、ドロロー。俺はインフェルニティ・リローダーを召喚」

体が2丁の拳銃で成り立っている奇妙なモンスターが場に現れた。

インフェルニティ・リローダー 攻撃力900

「カードを1枚セットし……ターンエンドだ」

鬼柳 LP 4000

フィールド 『インフェルニティ・リローダー』（攻撃表示）

セット1

手札4

（攻撃表示……だけど攻撃力は900。俺の攻撃を誘っているのか……？  
ただどこかは鬼柳のことを知るにも攻撃しかない!）

「俺のターン！俺は華麗なる密偵スパイ―Cを召喚！」

スパイとしてこの場に溶け込むためカウガールの衣装をまとったレディがフィールドに忍び足で現れた。

華麗なる密偵―C 攻撃力1200

「スパイ―Cの効果発動、秘密調査シークレットリサーチ！相手のエクストラデッキのモンスターをランダムに1体確認し、そいつの攻撃力で効果を変える！」

スパイ―Cの前に何枚かのカードが回っていき、その中の1枚をベルトから取り出した銃で打ち抜いた。

「インフェルニティ・デス・ドラゴン…？初めて聞く名前だな。攻撃力は3000！確認したモンスターの攻撃力が2000以上だった時、攻撃力が1000アップするぜ！」

華麗なる密偵―C 攻撃力1200↓2200

「攻撃力を上げてきたか…」

「バトルだ！スパイ―Cでインフェルニティ・リローダーに攻撃！」

スパイ―Cが先ほどしまっていた銃を早撃ちし、リローダーを打ち抜いた。

鬼柳 LP4000↓2700

「だがこの瞬間トラップ発動、インフェルニティ・リフレクター。インフェルニティモンスターが戦闘で破壊されたことで発動出来る。俺の手札を全て墓地へ捨てることで、破壊されたリインフェルニティ・リローダーを特殊召喚する。さらに相手に1000のダメージを与える」

「ハンドレス…！」

鬼柳の場にインフェルニティ・リローダーが復活すると共にトラップから出てきた反射板から1発の弾丸がコナミへと跳ね返る。

コナミ LP4000↓3000

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP3000

フィールド 『華麗なるスパイ―C』（攻撃表示）

セット2

### 手札3

「俺のターン、ドロ。…カードを伏せる。そして俺の手札が0枚であることをトリガーにインフェルニティ・リローダーの効果発動」

鬼柳の宣言とともにコナミと鬼柳、互いにリローダーの拳銃が向けられる。

「こいつの効果で俺はカードを1枚ドロする。引いたカードがモンスターカードならばお前はそのモンスターのレベル×200のダメージを受ける。だがそれ以外ならば俺は500のダメージを受ける」

「何…？勝負を運に任せるなんてお前らしくないぜ！お前はいつだって小細工なしでパワーで勝負してきたじゃねえか！」

「ふっ…どうだったかな。さあ…ドロだ」

鬼柳がカードを引く。するとリローダーの1丁の拳銃に弾が装填された。装填された拳銃が向いているのは…コナミ。

「俺が引いたのはインフェルニティ・デストロイヤー。レベルは6だ」「レベル6だって…!？」

「どうやら俺はデュエルに取り憑かれているのかも…。勝負を天に任せてもデュエルが俺を手放さねえ」

リローダーから6発の弾丸がコナミに向かって放たれた。

コナミ LP3000↓1800

「そして俺はインフェルニティ・リローダーをリリースしインフェルニティ・デストロイヤーをアドバンス召喚する！」

2丁拳銃の代わりにフィールドに現れたのは鋼のように屈強な体を持つ悪魔。その体を存分に使い、フィールドに現れた瞬間周囲の地面を破壊しだした。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「…バトル。インフェルニティ・デストロイヤーでスパイCへと攻撃する」

インフェルニティ・デストロイヤーはスパイCが放った拳銃が直撃してももろともせず、一振りですパイCを吹き飛ばしてしまっ

コナミ LP1800↓1700

「さらにデストロイヤーは俺の手札が0枚の時に相手モンスターを戦闘で破壊すれば相手に1600のダメージを与える！」

「マジかよ…!?!」

デストロイヤーが地面を強く叩くとそこから発生した地割れがコナミが立っていた地面を粉碎した。とつさにコナミは受け身をとって回避する。

コナミ LP1700↓100

「俺はこれでターンエンドだ。…コナミ、これで分かっただろう。俺は死神だ。今後俺には関わらないほうがいい」

「嫌だね…。お前が嫌がろうと俺はなんとしてもお前を助け出すぜ！」

鬼柳 LP2700

フィールド 『インフェルニティ・デストロイヤー』

セツト1

手札0

「俺のターン！俺はトラップカード、凡人の施しを発動！カードを2枚ドロローして手札の通常モンスター、ギガテック・ウルフを除外する。これなら…！自分フィールドにモンスターがない時、プリミティブ・バタフライは特殊召喚できる！」

まだ発達途中の体をした蝶々が5本の羽根をうまく使いながらフィールドを飛んだ。

プリミティブ・バタフライ 攻撃力1200

「さらにチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚！そしてレベル5のプリミティブ・バタフライにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！風のエレメントを司るものよ、その素早き動きで敵を翻弄せよ！シンクロ召喚！発射せよ、リアル・ジェネクス・ウインディカイト！」

プリミティブ・バタフライがジェネクス・コントローラーの電波で変形していき、凧とロケットが組み合わさったようなものへと変わっていく。最初は風をうまく利用できずふらふらと飛んでいたが、中枢

コアにジェネクス・コントローラーが装填され、安定飛行へと入った。  
リアル・ジェネクス・ウインディカイト 攻撃力2400

「バトルだ！ウインディカイトでインフェルニティ・デストロイヤーに攻撃！」

ウインディカイトは狙いをデストロイヤーに定めるとジェット噴射による加速で一気に近づいていった。

「…トラップ発動、インフェルニティ・ブレイク。俺の手札が0枚の時、墓地のインフェルニティカード、インフェルニティ・リローダーを除外することでウインディカイトを破壊する！」

鬼柳の発動したトラップから放たれた雷によってウインディカイトは撃ち落とされてしまう。

「これで次のターンのデストロイヤーの攻撃で俺の勝ちだ…」

「そうはさせないぜ！トラップ発動、リボーン・パズル！」

「…！そいつは…」

「俺のモンスター1体のみが破壊された時、そいつを復活させることができる！」

撃ち落とされて地面に墜落してしまいそうな状態から下から突き上げるように吹いていた突風に救われ、何とか体勢を持ち直した。

「鬼柳…俺がお前に対してこのトラップを使ったのはダークシグナーの時だけだ。やっぱり…あの時のことを思い出しちゃったんだな」

「…そうだ。だから俺は俺の人生がもうどうでもよくなった。変わらないんだよ、生きていても…死んでいてもな。どんな理由があろうと俺は人を生け贄にしちまった、それはもうどんなことがあっても償いきれねえ」

「いいや地縛神の生け贄になった人たちはちゃんと蘇った！お前が責任を感じる必要なんてない！」

「ダメなんだよコナミ…。たとえその人達が無事でも俺が犯した罪は消えねえ…。俺の心の中に残り続けてるんだ」

「鬼柳…」

「俺の仲間であり友でもあるお前にトドメを刺されるなら俺は満足だ…」

「ふざけるな！俺たちチームサテイスイフアクションで楽しいラストデュエルをするって約束したじゃねえか！あれは嘘だったのかよ！」

「忘れちゃったよ…ラストデュエルなんてものはな」

「くっ…なら俺が思い出させてやる！ウインディカイトでデストロイヤーに攻撃！」

今度こそデストロイヤーが破壊を避ける術はなく、ウインディカイトによって弾き飛ばされていった。

鬼柳 LP2700↓2600

「ウインディカイトが戦闘で相手モンスターを破壊したことでデッキからジェネクスモンスターを加えることができる！俺はジェネクス・ブラストを手札に！」

「なら俺も墓地のインフェルニティ・リベンジャリーの効果を発動する。俺の手札が0枚で俺のモンスターが戦闘で破壊された時、こいつは特殊召喚出来る。さらにこいつのレベルは破壊されたデストロイヤーと同じ6になる」

フィールドに空いた穴から両手に拳銃を構えた小型の人型モンスターが出てきた。

インフェルニティ・リベンジャリー 守備力0

「俺はカードを1枚伏せて…ターンエンド！」

コナミ LP100

フィールド 『リアル・ジェネクス・ウインディカイト』

セット1

手札3

「俺のターン…このターンで決着がつきそうだな。俺はインフェルニティ・ドワーフを召喚。そしてレベル2のドワーフにレベル6のリベンジャリーをチューニング！死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！いでよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン！」

全体が黒で染められたドラゴンが2人の間に降り立った。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 攻撃力3000

「インフェルニティ・デス・ドラゴンの攻撃力は3000…。先生が攻



撃すればあの赤帽子のやつも鉦山送りだな」

側でデュエルを見守っていたラモングループのリーダー、ラモンが勝利を確信したかのように笑う。

「いや…レアル・ジエネクス・ウィンディカイトの効果でこいつを相手は攻撃の対象にすることは出来ない！」

「…悪いなコナミ。俺はインフェルニティ・デス・ドラゴンの効果発動。1ターンに1度俺の手札が0枚の時、こいつの攻撃を放棄することで相手のモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える。インフェルニティ・デス・ブレス！」

インフェルニティ・デス・ドラゴンの口から黒いエネルギー弾が放たれ、今度こそウィンディカイトを撃ち落とした。そしてコナミに向かってウィンディカイトが落ちてくる。

「鬼柳：俺はお前を絶対に助ける！何があってもな。手札のハネワタの効果を発動！このカードを墓地へ捨てることでこのターン俺が受ける効果ダメージを0にする！」

小さな毛むくじやらのモンスターがウィンディカイトに立ち塞がりわずかに軌道をそらしてコナミへの致命傷を回避した。

「…かわしたか」

「ああ。そして俺のモンスターが効果で破壊されたことがこのカードのトリガーになったぜ」

「…なに？」

「トラップ発動、ヘイト・クレバス！俺のモンスターが1体のみ効果で破壊された時、相手のモンスターを1体墓地へ送りその攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「ふ…これでいい。これで俺はデュエルから解放される…」

コナミの発動したトラップから出た猛吹雪でインフェルニティ・デス・ドラゴンが氷漬けになり、そのまま鬼柳の方へと倒れていった。

鬼柳 LP2600↓0

鬼柳のライフが0になり、鬼柳のデュエルディスクが外れる。そして鉦山へと送るための執行人がゆつくりと鬼柳へと近づいていった。だがその前にバーバラの花屋から遊星がDホイールで出てきて鬼柳

を助けようと近づいていった。…だが、鬼柳をDホイールへと乗せようと手を伸ばしたところで何者かが遊星を撃ち抜いた。

「がはっ…!?!」

遊星は鬼柳を通り抜けてそのままクラッシュしてしまう。

「遊星…!?!」

「一体どうして…!?!あっ…!?!」

鬼柳とコナミは思わずクラッシュしてしまった遊星に目を向けた。だがそれによって一歩気づくのに遅れてしまう。後ろからひしひしと伝わってきた殺気に。

「ぐっ…!?!」

「がっ…!?!」

反応が遅れた2人は銃によって撃ち抜かれてしまった。

「安心しなよ…。これはショックガン。2時間もすれば痺れも引くさ」

「お前は…。バーバラ!」

3人を撃つたのはバーバラ、彼女はマルコムグループの一員で鬼柳を倒すためのデュエリストを探しておりそこで遊星に声をかけたのだという。厄介そうなデュエリストをまとめて始末するため今回コナミもろとも計画に利用させてもらったということらしい。

その後、マルコムの弟ロットンが現れ夕焼けもすぐに沈むという間にラモンとデュエルを始めた。そしてガトリング・オーガという恐るべきモンスターを使い先攻1ターン目で相手のライフを0にする必殺コンボによって勝利してしまう。マルコムグループとラモングループの抗争はマルコムグループの勝利に終わり、明日からはマルコムグループがクラッシュタウンを支配することとなった。

こうした経緯でラモンを含めた4人は鉱山送りとなってしまい、コナミ達の鬼柳を助ける計画は最悪の形で幕を閉じるのであった。

エンディングはマルチに存在する。どれもお前のバッドエンドだがな！

鬼柳、コナミ、遊星、ラモンは鉱山へと連れて行かれ、作業施設へと繋がる通路を通らされていた。首には監視員がスイッチを入れれば電流が流れる首輪をつけられ、迂闊に逆らうことは出来ない。そんな中、ラモンが耐えきれなくなったかのように鬼柳に詰め寄る。

「鬼柳！お前が負けるから俺まで鉱山へと送られたんだぞ！お前のせいで俺まで…」

「おい、やめろ！」

監視員が間に入り、ラモンを落ち着かせようとする。その隙を見て遊星がかがんで地面から何かを取ろうとするのを見たコナミはあえてラモンへと話しかけた。

「おいおい…お前が鉱山へと送られたのはあのロットンって奴とのデュエルに負けたからだろ？人のせいにするなよ」

「うるせえ！てめえも見てただろうが！先攻ターン目でライフを削りきられるなんてどうしのげばいいってんだ！」

「おい！それ以上無駄な口を叩くなら覚悟は出来ているだろうな？」

そういつて監視員は電流を流すスイッチとなるデュエルディスクのボタンを押す構えをする。

「おっと…悪かったって。それは勘弁してくれ」

「……。あと少し進めば作業場に着く。そこでお前らには一生ダインを掘り続けて貰う」

「ダイン？」

「知らないのか？ダインはDホイールに必要な鉱石でトップスの奴らに高く売れる。こんなことも知らずにあのデュエルをしていたとはな…」

「悪かったな…」

そんな話をしている間に遊星は地面に落ちていた釘を拾い、懐に隠していた。そして作業場へとついたコナミ達は渡されたツルハシで

ダインを掘らされる。

「遊星、コナミ：お前たちは馬鹿だよ。俺のために本当に地獄まで付き合うなんてな」

「鬼柳：ここから脱出しよう。どこかに脱出出来る道はあるはずだ」

「無理だ。俺にその気はない。それにこの首輪はどうする？」

すると遊星は監視員の目を盗み、先ほど拾った釘で器用に首輪のロックを解除した。

「…さすがは遊星だな。だが俺は今更ここを逃げる気はない。逃げるなら2人で逃げてくれ」

「鬼柳：」

鬼柳を説得できないまま黙々と作業を続けているとブザーが鳴り響き監視員の交代時間となる。その時間は遊星達がその場を離れるには十分だった。

「鬼柳！今なら…」

「言っただろうコナミ。俺はここを離れる資格なんてない」

頑なに逃げようとしないう鬼柳、早く行動を起こさないと監視員が来てしまう。遊星とコナミは互いに頷いた。

「鬼柳：悪く思うなよ」

「俺たちは何としてもお前を連れて行く」

「お前ら…まさか」

コナミが鬼柳の体を抑え、遊星がみぞおちに軽くジャブを入れると鬼柳は意識を手放してしまう。遊星は2人の首輪も外し、コナミと一緒に鬼柳を背負って作業場から離れていく。するとその通路から風を感じ、その方向へと歩を進めると幸いにも鉱山の出口へと出ることができた。

「…ここは」

すると鬼柳が目を覚まし、遊星達が自分を連れ出したことに気づく。

「もう俺のことは放っておけと言っただろう！」

感情が高ぶった鬼柳は2人へと掴みかかる。突然のことに足がもつれた2人は鬼柳もろともちよつとした崖を転がり落ちてしまった。

「いてて…。…なんだこれ」

「これは…デュエルディスクが突き立てられている？」

彼らの前には100本を超える数のデュエルディスクが地面に突き刺さっている異様な光景があった。

「…そうか。これは鉱山で死んだ人の墓。俺が…こいつらを殺しちまったんだ」

「鬼柳！あまり自分を責めるな」

「だってそうだろう？俺がデュエルで倒したやつは鉱山へと送られる。つまり俺が殺したも同じじゃねえか」

「鬼柳…」

鬼柳にかける声が見つからず場が静かになったところに何かを引きずるような音が聞こえてくる。そしてその音の発生源は鬼柳の知っている人からだった。

「…ニコ、ウエスト!?どうしてお前らがここに？」

「鬼柳兄ちゃん！やっぱり脱出していたんだね！」

それはチームサテイスフアクションのファンで鬼柳に憧れている姉弟<sup>きょうだい</sup>。彼らと鬼柳は何回か話したことがあり、彼らにはあのデュエルで鉱山送りにされてしまった父親がいることを知っていた。

「どうして…。どうして俺なんかを。お前らには俺より助けるべき人がいるだろうが！」

「ですが今、私たちはあなたを助けることができます。あなたはウエストにとってヒーローだから。…そして私にとっても」

元々サテライトの出身の彼らは希望のないサテライトでも活気に活動していたサテイスフアクションこそが希望だった。サテライトに住んでいても満足できる活動ができる。それこそがサテライト時代の彼らを支えていた。

「それは…俺たちのDホイールか」

姉弟が必死に押して鉱山まで持ってきたもの、それは遊星とコナミのDホイールだった。

「遊星兄ちゃんにコナミ兄ちゃん！これを使って鬼柳兄ちゃんと逃げて！」

「お前ら…」

だが突然背後からライトが5人を照らし出した。それはロツトンのDホイールのライト。彼は彼らのDホイールが無くなっているのを不自然に思い、何人かの部下を連れて念のために鉱山へとDホイールを走らせていたのだ。

「やっぱりな…あいつらを山から逃すな！」

「へいー！」

「鬼柳！逃げるぞー！」

「…ああ。こいつらまで巻き込むわけにはいかねえ」

「遊星、鬼柳！ロツトンは俺が相手をする。2人はあの後ろにいるDホイールから逃げてくれー！」

「ああ、頼んだコナミ！」

コナミはDホイールに乗り込むとロツトンのDに体当たりを仕掛ける。しかし巨大なロツトンのDホイールはビクともしない。

「お前は俺が相手をする！ついて来い！」

「ほう、面白い」

コナミとロツトンは小さなトンネルへと入っていった。

そして遊星と鬼柳は別のトンネルへと入り部下達のDホイールから逃げようとしていた。だがDホイールは1人で乗るようになられているため多くても2人しか乗れない。つまり遊星のDホイールで4人を運ぶことは出来ないため、彼らは段々と差を縮められていった。

「鬼柳、あのトロツコに乗り込むんだ！」

「あれに乗るしかねえか…！」

Dホイールに乗っている遊星が先の様子を確認し、トロツコを発見する。ニコとウエストが乗ったのを確認し、鬼柳がトロツコを押して十分に加速させると自分も乗り込んだ。これでスピードの差はあまりなくなつたが所詮トロツコとDホイールでは分は悪い。このままだとやはり追いつかれてしまう。そんな中トロツコに入っていたおそらくダインであろう石をウエストが投げつけて1台のDホイールにぶつけた。

「おい！お前らは俺の後ろに下がっている！」

「嫌だ！僕らも一緒に戦うんだい！」

「私もです……！」

ニコも石を投げつけてDホイールが近づくのを防ぐ、遊星もDホイールで体当たりを仕掛け、できるだけスピードを出させないようにしていた。

「何で……どうしてお前らはそこまで」

「僕は鬼柳兄ちゃんに教わったんだい！父ちゃんを助けるのがすごく難しくても鬼柳兄ちゃんのように諦めず戦えばいつかは助けることが出来るって！」

「ウエスト……。お前は幻を見ていただけだ。いつも戦っていた俺の心は本当は死んでいったんだ」

「そんなことないやい！」

「鬼柳さん……私もそう思います。あなたは最後までデュエルを諦めようとはしなかった……。そんなあなたの心が本当は死んでいたなんてことはありません」

「俺は……。……！」

鬼柳がトロツコのレバーを引き、急ブレーキをかけ出す。

「鬼柳兄ちゃん!?ブレーキをかけたら追いつかれちゃうよ!？」

ウエストの言う通りトロツコは減速していく。だがトロツコの先は急カーブだった。勢いのついていたトロツコだがブレーキをかけたお陰でなんとか曲がるのに成功する。そして鬼柳の行動の真意を見抜いていた遊星もそのカーブを曲がりきった。だが後ろにいた部下達はほとんどが曲がりきれず壁にぶつかりクラッシュしてしまう。「俺は……それでも今戦っている。戦うことで生きようとしているのか……？」

だが不幸にもそのトロツコが向かっていた先は遊星達がいた場所とは違う作業場。このトロツコはダインを保管場所に運ぶためのものであったのである。鬼柳達はダインの保管場所にトロツコの中身ごと突っ込んでしまう。

「おい……お前ら。下手な真似をするとこのショック銃を撃つぞ」

当然そこにいた2人の監視員に見つかり、鬼柳達は連れて行かれる。だが、先の方に別のレールとトロツコがあるのを見つけた鬼柳は子供達を走らせると1人の監視員を不意をついて気絶させた。後ろにいたもう1人の監視員がショット銃を撃とうとするも、機会を伺っていた遊星がDホイールでその銃を弾き飛ばし、鬼柳を乗せて子供達の元へと向かった。

だが子供達は何故かトロツコに乗らず、ある一点を見つめていた。

「父ちゃん…!?!」

「父さん！」

「ウエスト、ニコ?!何故ここに…?」

「…!父親なのか…!」

感動の再会も束の間、他の監視員達が迫ってきている。

「3人もそのトロツコに乗れ！」

ニコ、ウエスト、彼らの父親も乗せてトロツコは走り出した。彼らを追うように遊星が鬼柳を乗せてDホイールを走らせ、さらに後ろに監視員と部下達がDホイールで追いかけている状況となった。幸いにも出口は近く、トロツコはそこに向けて走っていたが…。

「逃がすか！」

彼らの1人があるスイッチを押すとトロツコのコースが変わり、出口から離れてしまう。代わりに向かった螺旋状のレールを降下していくトロツコだったが下の方のレールが壊れているが見えていた。

「このまま奈落の底に落ちな！」

「まずいよ…このままじゃ。父ちゃん！」

「父さん…!」

「…下の方に見えるレバー。コンソールさえ壊せば手動でも切り替えが出来るはずだ」

抱きついてくる子供達を離し、石を1つ懐に入れ鬼柳達に語りかける。

「私はあのレバーめがけて飛び降ります!無理な願いですが…子供達のことを頼みます」

「何だと!待て…それなら俺が!」



「もう1度…あのデュエル以外での私の精一杯を子供達に見せるんです…!」

「馬鹿野郎!ならお前が生きているところを見せてやれ!」

「生きるために私は戦うんです!」

「…!」

父親の生き様を見せる覚悟は止められない、そう判断した遊星は1つ行動に出る。

「鬼柳。ハンドルを頼む!」

「遊星…?」

すると遊星はDホイールから飛び、一つ下のレールを走っていた彼らのトロツコに着地した。

「あなたは…」

「俺は遊星だ。あなたの覚悟、俺は止めはしない。だが1つ、やらせてもらう」

すると遊星は釘を取り出し、彼の首輪を外した。

「今彼らの中には監視員もいる。これであいつらに妨害はされない。俺にできるのはここまでだ」

「遊星さん…ありがとうございます。…はあっ!」

「父ちゃん!」

「父さん!」

そうやって彼は下手したら奈落に落ちてしまう危険を顧みず、レバーめがけてダイブする。するとレバーの取っ手に捕まることに成功する。

「くっ…させるか!」

部下の1人がレバーをロックして手動で動かせなくするも、懐に入っていた石でコンソールを壊し、手動で動かそうとする。ぶら下がっている状態でレバーを自分とは逆側に押すという無理な体勢だったが子供達への思いがなせる技か、レバーを切り替えるのに成功する。

「すごい…すごいよ父ちゃん!」

彼らのトロツコはポイントを変えたことで奈落の底へは沈まず、1つの終着地点へとたどり着いた。そして父親も何とか這い上がると

遊星のDホイールに乗った鬼柳が手を伸ばした。

「捕まれおっさん！」

何とか鬼柳の後ろに乗せることに成功し、ウエスト達と合流した。後ろからやってきたDホイーラーを遊星と鬼柳が気絶させ、難を逃れることに成功した。

一方、コナミはロットンを止めるためデュエルを挑んでいた。

「俺とデュエルだ！」

「デュエルだど？命知らずな奴め…いいだろう」

「スピード・ワールド2、セットオン！」

「「ライディングデュエル、アクセラレーション！」」

スピード・ワールド2によるライディングデュエルが始まる。トンネルに第一コーナーはないため先攻はランダムによって決定された。

「…ふ、俺のターンからだ。ドロー！ガトリング・オーガを召喚！」

藍色のコートをまとった悪魔がフィールドに降り立つ。腹部には発射口が付いており、その横にはハンドルが付いている。

ガトリング・オーガ 攻撃力800

「ゲツ…そのモンスターは！」

「俺の必殺先攻ワンターンキルの完成だ…。俺はカードを5枚セット！そしてガトリング・オーガの効果を発動！このモンスターはセット魔法・罠カードを墓地へと送ることで相手に800のダメージを与える。俺の伏せているカードは5枚、つまりお前の負けだ！まずは1発目！」

肩についている銃の装填口に弾が入り、ハンドルを回すと腹部からガトリング砲が発射された。

「…俺は運がいいぜ！手札のハネワタを墓地に捨てることで効果を発動！俺がこのターン受ける効果ダメージは0になる！」

ガトリング砲の弾が毛むくじやらのモンスターに全て弾き飛ばされた。

「何だと…？俺の必殺技を交わしやがったか。まあいい、策はいくらでもある。ターンエンドだ」

ロットン LP4000

フィールド 『ガトリング・オーガ』

セット4

手札0

sc0

「っし…俺のターン！相手フィールドにのみモンスターがいる時、手札のレベル・ウォリアーはレベル4として特殊召喚できる！」

顔に星が描かれた戦隊モノのヒーローのような赤い衣装を身につけた人型のモンスターが颯爽と現れた。

レベル・ウォリアー 攻撃力300

コナミ sc0↓1 ロットン sc0↓1

（ガトリング・オーガは怖えモンスターだが攻撃力は800。手札のジエネクス・コントローラーを召喚してシンクロ召喚で攻めれば…！）

「おつと…こんな狭いトンネルにこれ以上モンスターを呼ばれたらたまらねえ。永続トラップ発動、狭小の地下道！お互いに場に出せるモンスターは1体までとなり2体以上いる時は1体になるように墓地に送る！」

「何!?くっ…カードを2枚伏せてターンエンド！」

シンクロを封じられ、ロットンにターンを回してしまうコナミ。結果としてロツトンの場にガトリング・オーガが残ってしまった。

コナミ LP4000

フィールド 『レベル・ウォリアー』（攻撃表示）

セット2

手札3

sc1

「俺のターン！」

コナミ sc1↓2 ロットン sc1↓2

「あいつのガトリング・オーガはセットしたカードしか送れねえ…だから狭小の地下道は送られねえけど…！」

「3発の弾丸をくらいな！ファイア！」

ガトリング・オーガに装填された3回分の弾丸がコナミを襲う。

「一気にライフを持って行かれちゃった…！」

コナミ LP4000↓1600

「俺はガトリング・オーガをリリース！フルアーマー・オーガをアドバンス召喚！」

「何！ガトリング・オーガをリリースした!?!」

紺色のスーツに身を包んだ悪魔が降臨する。両手にはサイコガンらしきものが組み込まれていた。

フルアーマー・オーガ 攻撃力1600

「ふふ…勝利へのシナリオは完成した。フルアーマー・オーガでレベル・ウオリアーを攻撃！」

（俺がこの戦闘で受けるダメージは1300…。だがわざわざガトリング・オーガをリリースしてまで出したモンスター…ここは！）

「トラップ発動、凡人の施し！カードを2枚ドロし手札にある通常モンスター、ジェネクス・コントローラーを除外！」

「ここで手札を入れ替えた…？何をしてきやがる」

「引いたぜ…。永続トラップ、死力のタッグ・チェンジ！俺の表側攻撃表示モンスターが戦闘で破壊される時、その戦闘ダメージを0にしてダメージステップ終了時に手札のレベル4以下の戦士族モンスターを特殊召喚する！来い、スパークマン！」

レベル・ウオリアーと入れ替わるように雷を操る戦士がコナミのフィールドに見参した。

E・HERO スパークマン 攻撃力1600

「ほお…やるじゃねえか。だが弾丸はまだお前を狙ってるぜ」

「何だ?!」

「フルアーマー・オーガがバトルで相手モンスターを破壊したことでお前は1000のダメージを受ける！」

フルアーマー・オーガがコナミをめがけてサイコガンを放った。

「戦闘ダメージ狙いと思わせて効果ダメージを…！」

コナミ LP1600↓600

コナミのライフがスピード・ワールド2におけるデッドラインへと入ってしまう。

「ターンエンドだ！」

ロットン LP4000

フィールド 『フルアーマー・オーガ』

セット0 『狭小の地下道』

手札0

sc2

「俺のターン！」

コナミ sc2↓3 ロットンsc2↓3

「次のターン、ロットンのscは4。spを引かれたらスピード・ワールド2の効果でダメージを受けて終わっちゃう…。俺はスパークマンをリリースしサイバネティック・マジシャンをアドバンス召喚！」  
白いローブに身を包んだ魔法使いが場に現れる。

サイバネティック・マジシャン 攻撃力2400

「バトルだ！サイバネティック・マジシャンでフルアーマー・オーガに攻撃！」

サイバネティック・マジシャンが呪文を唱えるとフルアーマー・オーガの持っている銃が暴発し爆発した。

ロットン LP4000↓3200

「かかりやがったな。フルアーマー・オーガが破壊されたことでフルアーマー・オーガの効果を発動！墓地からガトリング・オーガが復活する！」

「何…！」

先ほどリリースされたガトリング・オーガがフィールドにまた戻ってしてしまう。

ガトリング・オーガ 攻撃力800

「くっ…カードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP600

フィールド 『サイバネティック・マジシャン』（攻撃表示）

セット1 『死力のタッグ・チェンジ』

手札2

sc3

「俺のターン、このカードがspか罫か…それともモンスターか。まさにこのドローはお前の導火線となる」

「へっ…引けるもんなら引いてやがれ!」

「引いてやるよ…ドロー!…チツ」

コナミ sc3↓4 ロットン sc3↓4

「外したか!」

「だがエンディングはマルチに存在する。どれもお前のバッドエンドだがな!墓地にフルアーマー・オーガがいるときガトリング・オーガをリリースすることでビッグキャノン・オーガは特殊召喚できる!」

灰色のコートを着た悪魔が肩に2本の大砲を担ぎながら現れた。

ビッグキャノン・オーガ 攻撃力2400

「だが攻撃力はサイバネティック・マジシャンと同じ!」

「甘いな。墓地のトラップを発動!スキル・サクセサー!こいつを除外することで俺のビッグキャノン・オーガは攻撃力がエンドフェイズまで800ポイントアップする!」

ビッグキャノン・オーガ 攻撃力2400↓3200

「ガトリング・オーガで送っていたのか…!」

「バトルだ!ビッグキャノン・オーガでサイバネティック・マジシャンに攻撃!」

肩の大砲から巨大な弾丸がサイバネティック・マジシャンめがけて放たれた。

「やらせるか!トラップ発動、迎撃準備!フィールド上の戦士族か魔法使い族を裏側守備表示に変更する!」

「だがビッグキャノン・オーガは悪魔族だ!」

「俺はサイバネティック・マジシャンを守備に!」

サイバネティック・マジシャンは防御の体勢をとり衝撃を抑える。

サイバネティック・マジシャン 守備力1000

「ち…耐えたか。ターンエンドだ」

ビッグキャノン・オーガ 攻撃力3200↓2400

ロットン LP3200

フィールド 『ビッグキャノン・オーガ』(攻撃表示)

セット0 『狭小の地下道』

手札0

「俺のターン！」

コナミ sc4↓5 ロットン sc4↓5

「…手札からスピーデッド・シンクロンを発動！scが5以上ある時、墓地のモンスターを除外することでシンクロ召喚することが出来る！ただしシンクロしたモンスターはエンドフェイズに除外される！」  
「狭小の地下道をすり抜けてシンクロだと…!？」

「俺は墓地のレベル6のサイバネティック・マジシャンとレベル1のハネワタを除外！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

トンネルを埋め尽くすほど巨大な胴体を持つ龍が降臨した。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓0

「エンシエント・ホーリーの効果発動。相手よりライフが下回っている時その分攻撃力が下がる！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓0

「攻撃力を0にしてくるだと…?」

「そしてこのカードとコンボだ！スピーリアクター・ポッド！scが4以上の時、攻撃力が1000以下のモンスターを選択しその元々の攻撃力分のダメージを与える！」

「ちっ…そういうことか」

ロットンの前に小さな爆弾が置かれ、爆発した。

ロットン LP3200↓1100

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力0↓1600

「さらにエンシエント・ホーリーをリリースし偉大魔獣グレートガーゼットを召喚する！」

身体中に毛が生えた悪魔が腕を組みながら現れた。

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力0

「偉大魔獣ガーゼットの攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力の倍になる！」

「何い!？」

悪魔の体が巨大化していきトンネルを覆い尽くすほどの大きさとなる。

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力0↓4200

「偉大魔獣ガーゼットでビッグキャノン・オーガに攻撃！」

悪魔が手をかざすとビッグキャノン・オーガに向かって雷が放たれた。

「まだまだ！墓地のトラップを除外して発動！ダイナマイト・ウォール！相手が攻撃してきた時墓地のこのカードを除外することで攻撃してきたモンスターを破壊し、俺のフィールドのカードを全て除外する！」

「何だと!？」

「させるかあ！」

「な…お前は！」

ロットンの部下から奪い取ったDホイールに乗って鬼柳がコナミ達が走っていたトンネルの上部からロットンに高低差を利用した体当たりをかまし、怯ませる。後ろからは遊星も彼らを追ってきた。その間にニコとウエストはレバーへ飛び込んだ父親の治療のため横にあった小道から外へ脱出していた。

「ち…どけえ！」

するとロットンのDホイールが変形し、複数人と対戦できるような巨大なタイプへと展開した。

「発動しろダイナマイト・ウォール！…そしてこれをお前らにプレゼントだ！」

ロットンが何かのスイッチを押してコナミ達の方へと投げる。

「あれは…！」

「ダイナマイト…!？」

「鬼柳、コナミ！」

下を走っているコナミ達に声をかける遊星だったがダイナマイトの設定時間はわずか5秒。狭いトンネルで避ける術はなく4人とも爆発で飛ばされてしまった。



## 最高の s a t i s f a c t i o n を貴方に

ロットンが投げたダイナマイトの爆発で吹き飛ばされたコナミと鬼柳は体をさすりながらある場所で目を覚ました。

「いてて…大丈夫か鬼柳」

「ああ…なんとかな。…遊星はどこだ?」

2人は周りを見渡すも他に人は見当たらなかった。その代わりにコナミと遊星のDホイールが転がっていた。

「俺たちとは別方向に飛ばされたか…。ロットンも見当たらねえ、奴もか」

「まずいな、遊星が奴に捕まったかもしれないねえ…」

「ちくしょう…俺はあいつに守られてばかりなのに、俺はあいつを守ることもできねえのか…」

「そんなことはねえだろ、俺を守るためにロットンに体当たりとかしてくれたじゃねえか」

「だが俺は結局何も出来てねえ。ニコやウエストもあの父親が守った…。なのに俺はお前達に守られてばかりで…」

「ならここから頑張ればいいだろ!途中で諦めるなんて鬼柳らしくないぜ、最後まで全力を尽くさないでお前は満足できるのかよ!」

「…いや、まだだ!まだ俺は満足していない!」

「よく言った!」

鬼柳の言葉が響くのと同時に地面に突き立てられていたデュエルディスクが動き出す。そう、彼らが飛ばされたのは鉱山へと送られた人達の墓場だった。

「このディスク…まだ生きてるぜ鬼柳」

「ふっ…どうやらこいつらはここを俺の死に場所にはさせてくれないみたいだ」

鬼柳がディスクを地面から抜き取り、腕に装着する。

「満足しようぜ、コナミ」

「ああ」

「あいつらに見せてやる…死神の生き様ってやつをな!」

彼らが山から見下ろす先にはクラッシュタウンから名前を変えられたロットンタウンが見えていた。

そのロットンタウンではラモングループとマルコムグループの抗争が止んだため、とても平和になる…わけもなく争いが続いていた。なぜなら鉱山へと送る作業員を出さなくてはいけないため、誰が送られるかという話でもめていたからだ。だがロットンやバーバラの宣言によりマルコムグループの味方同士でデュエルを行い、1日ずつ犠牲者を出していくという悪夢のような状態となっていた。

「やめろ…。やめるんだロットン！」

「不動遊星…てめえはそこで大人しくこの愉快な惨状を見物してるんだな！」

「愉快だと…？この状況のどこが愉快だと言うんだ！答えてみるロットン！」

「笑わせる。俺より格下の雑魚どもが1日でも長く生きるためにもがき苦しむ…最高のショーじゃねえか！」

「ロットン…貴様だけは許さない！」

「あんたは黙ってな！」

突き立てられた太い木の棒に縄でぎつちりと縛られて身動きの取れない遊星にバーバラが鞭を振るった。

「ゆっくり見てるんだね。この町の本当の姿を…」

「くっ…」

そんな遊星に聞こえてきたのは醜くもデュエルで生き残ろうとするデュエリスト達の苦しそうな声をかき消す2台のDホイールの走行音だった。

「これは…」

そしてそのDホイールからは2つのハーモニカの音が走行音に重なり響いてきた。

「コナミ、お前ハーモニカうめえじゃねえか」

「そうか？」

「ちっ…お前ら生きてやがったのか！」

「よおロットン。地獄の底から舞い戻ってきたぜ、まあ今じゃここも

地獄みたいなものだけだな」

D ホイールを降りて2人はロットンと向き合った。

「いいのかよ、亡者ども。ここでただ生贄の順番を待つだけでよ」

「そうだ…何もあいつに従う必要なんて！」

ロットンの実力に恐れをなして従っていた部下達も鬼柳に触発され、反抗の意思を示し出す。

「馬鹿なことを考えるなよ、お前らの命は俺が預かってるんだぜ？」

「なら、お前を倒せば問題はないな？」

「調子に乗るんじゃないよ！こつちには人質がいるんだよ！」

そう言つてバーバラは再び遊星に鞭を振るう。

「俺に構うな！鬼柳、コナミ！」

「はっ…別にいいぜバーバラ。丁度いい余興だ、俺が2人まとめてやっつけてやるよ」

「ちよつとロットン！そんなことしなくても人質を使えば…！」

「俺にいい考えがある。任せておけ」

そう言つてロットンも2人へと向き合った。

「俺たち2人と一気にデュエルか…なら俺たちはタッグフォーオールでお前とー」

「いや、お前らは別々でいい。バトルロイヤルルールでライフも4000ずつもらつて構わねえ」

「なんだと!？」

「…何を考えている、ロットン？」

「その代わりにちよつとばかしハンデを貰うだけさ。そう、お前らは手札が合計10枚で始まるんだ…俺も手札10枚で始めさせてもらうぜ」

「そういうことか…！鬼柳、奴の狙いはガトリング・オーガで俺たちを先攻ワンターンキルで…！」

「…異存ねえよ」

「決まりだな！なら始めようか、丁度夕日も地平線へとつく。デュエルタイムだ…！」

夕日が少しずつ沈んでいき地平線に触れる。3人とも抜いた決闘

銃をディスクとして展開し、カードを初期手札の枚数となるように引いた。コナミでは鬼柳より早く銃を抜くことは出来ない。実質的に鬼柳とロツトンのスピード勝負となった。結果、早かったのは…ロツトン。

「早え…！あいつ手札10枚も引いてやがんに！」

「…やるな」

「鬼柳、所詮お前も流れ者よ。この町出身の俺にかなうとも思ったか？さあ、始めるぜ？」

「」「デュエル！」」

「気をつけろよ、鬼柳！」

「ふっ…さて、満足させてもらおうか！」

「俺のターン、ドロー！俺はガトリング・オーガを召喚！」

「…！」

藍色のコートを着た悪魔が砂風と共に現れた。腹部の銃口は今か今かと獲物を狙っている。

ガトリング・オーガ 攻撃力800

「そして俺は5発分の弾を装填する！」

ロツトンが場に5枚の伏せカードを伏せると、肩の装填口から5発分の弾が装填された。

「あれはラモンを倒した強力なモンスター…、セットした魔法・罠カードを墓地に送ることで相手プレイヤーに800のダメージを与えることが出来る。このままでは鬼柳かコナミのどちらかがこのターンでやられてしまう！」

（へっ…そうはいかないぜ遊星。俺の手札にあるハネワタは手札から墓地に捨てることでこのターン俺が受けるダメージを0にすることが出来る。…ん？俺が受けるダメージ？あっ！）

ここでコナミはロツトンの真の狙いに気づく。コナミの使うハネワタはターンが回っていなくても効果ダメージを防ぐことができるので先攻ワンターンキルを狙うガトリング・オーガにとっては厄介な存在。だがバトルロイヤルルールならばコナミへの弾丸は凌がれても鬼柳という標的が残っている。ロツトンはわずか一戦でその弱点

に気づいていたのだ。

「…手を出すなよコナミ」

「えっ…?」

そんなコナミに小声でささやく鬼柳。

(何か策があるのか…?)

「来いよ、ロットン！」

「へっ…お前はやっぱり死神だな。自ら死を望むとはよ。いいぜ、ま  
ずはお前からだ！ガトリング・オーガの効果を5回発動、ガトリング・  
ファイア！」

ガトリング・オーガが発射口の横に設置されたハンドルを勢いよく  
回すとガトリング砲が何発も鬼柳を襲った。

「ぐあっ…！」

鬼柳 LP 4000 ↓ 0

「鬼柳…!?!」

「鬼柳…!?!」

弾丸をもろに食らった鬼柳はその場で横たわってしまう。

「ふふ…ついに死神を倒した。…なにつ!?!」

だが鬼柳は立ち上がり、デュエルを続行していた。

鬼柳 LP 0

「馬鹿な…何故ライフが0なのに立っでいられる！」

「…俺は手札からインフェルニティ・ゼロの効果を発動していた。俺  
のライフが効果ダメージによって0になる時、こいつ以外の手札を全  
て捨て、こいつを特殊召喚することができる。そしてこいつがいる限  
り俺はライフ0でも敗北にならない」

「そんなモンスターが…！」

インフェルニティ・ゼロ 守備力0

「そしてこいつは戦闘では破壊されない。だがこれから俺に500の  
ダメージが入るごとにこいつにデスカウンターが1つ乗っていく。  
そして3つのデスカウンターが乗った時こいつは破壊される」

「なら今度こそお前を葬ってやる！俺はカードを5枚セット、そして  
ガトリング・オーガの効果を発動！」

ガトリング・オーガが銃口を鬼柳へと向けた瞬間、ロツトンの頭に銃を突きつけたものがいた。

「なんだこいつは……!」

「俺の手札が0で効果ダメージが発生した時、墓地のインフェルニティ・デス・ガンマンを除外することでそのダメージを無効にすることが出来る。そしてお前は2つの選択肢から1つを選んでもらう」

「なんだと?」

「1つは俺がカードを1枚ドロウした時、それがモンスターならば俺がこのターン受けたダメージと無効にしたダメージをお前に与える効果。逆に魔法か罠なら俺はこのターン受けたダメージと同じダメージを受ける。もう1つはこのターンお前は相手にダメージを与えることが出来ない効果。さあ、どうする?正直俺もデッキにどれくらいモンスターが入ってるか忘れちゃった」

(鬼柳:勝負をまた運に任せる気か?)

鬼の仮面をつけたがたいのいい人型モンスターがロツトンに突きつけた拳銃のトリガーに手をかける。

「:落ち着け。バトルロイヤルルールでは互いに1ターン目は攻撃ができない。ここはギャンブルをする場面じゃねえ、俺は2つ目の効果を選択!」

ロツトンに突きつけた銃は消え、デス・ガンマンも姿を消した。

「ふっ:そんなに死神が怖いのか?」

「うるせえ、俺は俺のフィールドで戦う。これでターンエンドだ」

ロツトン LP4000

フィールド 『ガトリング・オーガ』(攻撃表示)

セット4

手札0

「俺のターン、ドロウ」

鬼柳がカードを引く、そしてそのカードはそのまま魔法・罠ゾーンに伏せられた。

「残念だったな。俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「ちっ:もう1つの方を選択していればやつはお陀仏だった……」

鬼柳 LP0

フィールド 『インフェルニティ・ゼロ』（守備表示）

セツト1

手札0

「俺のターン！」

「コナミ、お前の手札にハネワタがいるのは分かってるんだよ！トラップ発動、ピンポイント・シュート！」

コナミの手札の1枚がロットンの発動したトラップによって撃ち抜かれる。

「俺が宣言したカードが相手の手札にあった時そのカードを墓地に送らせる！」

「くっ…やっぱあいつは強えな！相手フィールドにのみモンスターがいる時、レベル・ウオリアーはレベル4として特殊召喚することが出来る！さらにこいつをリリースしてサイバネティック・マジシャンをアドバンス召喚する！カードを2枚伏せて…ターンエンド！」

白いローブをまとった魔術師がフィールドに現れた。左手には白い杖を握っている。

サイバネティック・マジシャン 攻撃力2400

コナミ LP4000

フィールド 『サイバネティック・マジシャン』（攻撃表示）

セツト2

手札1

「俺のターン。手札から装備魔法、ダブル・アームズをガトリング・オーガに装備！ガトリング・オーガの効果によって相手に与えるダメージは2倍になる！」

「つまり…1600かよ!?!」

「俺を1発で仕留めようというのか…面白い。やってみろよ」

「言われなくてもやってやるよ！このダメージで貴様のインフェルニティ・ゼロにデスカウンターは3つ乗る！ガトリング・オーガの効果発動、死神野郎を葬れ！」

ガトリング・オーガから放たれた弾丸が鬼柳を襲う。

「トラップ発動、ピケルの魔方陣！俺がこのターン受ける効果ダメージを0にする！」

「なにっ!？」

鬼柳の周囲を魔法壁が囲い、弾丸を全て弾き飛ばす。

「お前の話はここに来るまでコナミに聞いている。効果ダメージの対策をしていないとも思ったか？」

「くっ…なら狙いを変えるだけだ！今度はコナミを対象にガトリング・オーガの効果が発動！」

ガトリング・オーガが再びハンドルを回すとに先ほどより倍くらいの大サイズの弾丸となった弾がコナミを襲った。

「うおっ…！」

コナミ LP4000↓2400

「どうだ…！」

「へっ…だがお前の伏せカードを見な」

「はっ…！」

このターンの開始時にロツトンのフィールドに伏せられていたカードは3枚。ガトリング・オーガが効果を発動するためには伏せカードを1枚ずつ弾丸にしていく。つまり彼に残った伏せカードは1枚のみ。

「そうか…鬼柳は運に任せたデュエルをしたんじゃない。ロツトンを挑発して弾切れを狙っていたんだ！」

「ふっ…これが俺の生き様だ。さあロツトン、残りも撃つか？」

「この弾を使っても仕留めきれねえ…。俺はガトリング・オーガを守備表示に変更しターンエンド！」

ガトリング・オーガ 守備力800

「俺はエンドフェイズに速攻魔法、スケープ・ゴートを発動！羊トックンを4体俺の場に守備表示で特殊召喚する！」

コナミの場に4体の子羊がふわふわと浮いてきた。

羊トックン×4 守備力0

ロツトン LP4000

フィールド 『ガトリング・オーガ』（守備表示）



セツト1

手札0

「俺のターン！俺はインフェルニティ・ビートルを召喚！」

体が全体的に黒く染まったヘラクレスオオカブトがフィールドを飛ぶ。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「インフェルニティ・ビートルは手札が0枚の時、このカードをリリースすることでデッキから2体のインフェルニティ・ビートルを特殊召喚出来る！」

フィールドからビートルの姿が消えたかと思うと空から2匹のビートルが飛んできた。

インフェルニティ・ビートル×2 攻撃力1200

「さらに墓地のインフェルニティ・ジエネラルの効果発動！手札が0枚の時、墓地のこのカードを除外することで墓地のレベル3以下のインフェルニティモンスターを効果を無効にして特殊召喚出来る！来い、インフェルニティ・ビースト、インフェルニティ・ナイト！」

凶暴な顔をした犬とチェスのナイトのような剣を持った騎士がフィールドに現れた。

インフェルニティ・ビースト 攻撃力1600

インフェルニティ・ナイト 攻撃力1400

「1ターンでフィールドを埋め尽くした…！」

「これが死神野郎の生き様…！」

「よし…総攻撃でロットンのライフは0だ！」

「バトル！インフェルニティ・ビートルでガトリング・オーガに攻撃！ビートル・シュート！」

小さな羽をひたすらに使い、ビートルがガトリング・オーガへ近づいていく。

「…馬鹿め！トラップ発動、バックアタック・アンブッシュ！相手モンスターが攻撃してきた時バトルフェイズを終了し、相手フィールドの攻撃表示モンスターの数までアンブッシュ・トークンを特殊召喚する！死神野郎の場には4体！」

黒いモヤのようなものが4つロツトンの場に現れる。

アンブツシユ・トークン 守備力100

「さらにアンブツシユ・トークンは特殊召喚に成功した時リリースすることで相手に500ダメージを与える！俺は3体をリリースする！これで終わりだ死神野郎！」

3つのモヤが鬼柳に近づいていき、それが赤くなっていくと途端に爆発した。

「これでデスカウンターは3つ乗った！インフェルニティ・ゼロは破壊される！」

「さっすがロツトン！そうこなくっちゃ！」

「鬼柳…!？」

爆風が晴れていき鬼柳の姿が見えてくる。すると鬼柳は不思議そうな顔をしてその場に立っていた。そしてその側には無傷のインフェルニティ・ゼロの姿があった。

「なっ…何い！何故だ…！もうお前に防ぐすべはないはずだ！」

「コナミ、お前か…?」

「なっ…!」

コナミの場には1枚のトラップカードが発動されていた。

「俺はトラップカード、高速詠唱を発動していた…！こいつは手札の通常魔法を墓地に送りそのカードの効果をこのトラップの効果として使用できる！俺が送ったのは命削りの宝札！こいつの効果で俺は手札が3枚になるようにカードを引く」

「それがなんだ！」

「そして命削りの宝札のさらなる効果で相手プレイヤーはこのターンダメージを受けない！」

「上手いぞコナミ！バトルロイヤルルールでは自分以外のプレイヤーは全て相手プレイヤーとして扱われる！」

「なん…だと…」

「お前がバトルロイヤルルールを提案してくれて助かったぜ、ありがとうな！」

「貴様…!」

「…助かったぜコナミ。俺はレベル3のインフェルニティ・ナイトとレベル3のインフェルニティ・ビーストにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング！死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！いでよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン！」

黒に染まったドラゴンが猛々しく咆哮をあげた。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 攻撃力3000

「インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果発動！相手モンスター1体を破壊し、攻撃力の半分のダメージを与える。俺が狙うのはガトリング・オーガ！」

「だが命削りの宝札の効果でダメージはない！」

黒い波動がガトリング・オーガを飲み込んだ。

「俺にできるのはここまでか…ターンエンドだ。あとは頼んだぜコナミ」

「ああ、任せとけ。命削りの宝札のもう1つの効果でエンドフェイズに手札を全て墓地へ送るぜ」

鬼柳 LPO

フィールド 『インフェルニティ・ゼロ』（守備表示） 『インフェルニティ・ビートル』（攻撃表示） 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』（攻撃表示）

セツト0

手札0

「俺のターン、ドロロー！スタンバイフェイズに命削りの宝札の効果で墓地に送られたキラースネークの効果発動！墓地のこのカードを手札に戻すことが出来る！」

コナミの手に1枚のカードが地面に空いた穴から勢いよく渡る。

「行くぜ、ロットン！このターンでお前を倒す！」

「だがお前の場にはサイバネティック・マジシャンが1体と攻撃力が0の羊トークンが4体！せいぜいお前に出来るのは俺の場のアンブッシュ・トークンを倒すことくらいだろうが！スケープ・ゴート…いいねえ、つまり生贄だ。お前の場にいるそいつらは言わば俺の部下

…いや、元部下達と同じだ。羊トークンの攻撃力が0のようにこいつらに力はねえから俺には歯向かえねえ、ただ鉾山に送られるための生贄でしかない。ははは！中々気のきいたジョークだな！」

「…そうだな、お前にとってこれ程皮肉なジョークはねえ！」

「あん？」

「2体の羊トークンを攻撃表示にしてサイバネティック・マジシヤンの効果を2回発動！手札を1枚捨てることでフィールドに存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズまで2000になる。俺は攻撃表示にした2体の羊トークンを選択！」

「なんだと…？」

サイバネティック・マジシヤンが杖を振るい、魔法を振りかける。すると2体の羊が風船のように体が巨大化していき、アドバルーンのように宙に浮いた。

羊トークン×2 攻撃力2000

「馬鹿な…！」

「覚悟は出来たかロットン！俺はサイバネティック・マジシヤンでアンプッシュ・トークンに攻撃！」

サイバネティック・マジシヤンが素早く近づくと杖で黒いモヤを振り払う。

「くっ…！」

「そして俺は2体の羊トークンで…！」

「待ちな！デュエルごっこはここでしまいきー！」

「ぐっ…！」

バーバラの方を見ると遊星がバーバラの持っていた鞭で首を絞められていた。

「お仲間の命が惜しかったらとつととサレンダーするんだね！」

「き、汚ねえぞ！」

「勝負に綺麗も汚いもないさ。あるのは勝利と敗北。そうだろ、ロットン？」

「…ああ、そうだな」

そう言うのとロットンは懐から本物の銃を取り出し、コナミへと向け

る。

「なっ…！」

「おいロットン！お前までこんな真似をするのか…それでもデュエリストか！」

「リアリストだ。俺は勝負に勝てれば手段なんてどうでもいい、ほらサレンダーしな。サレンダーすればあいつの命だけは見逃してやつてもいいぜ？」

「ぐう…だ、ダメだ。俺に構うなコナミ…攻撃するんだ…」

「あんた、死にたいかい!？」

するとバーバラがさらにきつく首を締め、遊星の意識が飛びかける。だがロツトンの部下の1人が銃で鞭を弾いた。

「なっ…！」

「お、俺たちも戦うんだ！このまま眺めてるだけじゃなくあいつらのように立ち向かうんだ！じゃなきゃ何も変わらない！」

彼の行動に触発されたのか周りの部下達も次々と銃をロットンとバーバラに向け始める。

「テメエら…！タダで済むと思うなよ！」

「へっ…そんなやり方だから人望がねえんだよ！」

「うるせえ！まずはテメエからこの銃で…なにっ!？」

ロットンがコナミに銃を向けるもどこからか飛んできたカードによって弾き飛ばされてしまう。

「鉄砲玉のクロウ様、ただいま参上！」

「クロウ！」

「あんたらこっちには人質が…！ひやつ…！」

「キングはレディといえども非道な真似は許さない！」

慌てて遊星を痛め付けようとするバーバラだったがジャックによつて張り手で倒されてしまう。

「…ジャック」

「遊星よ。鬼柳のような厄病神に会いに行くからこんなことになるのだ」

そう言いながらジャックは遊星を縄から解放した。

「最高だぜ！チームサティスフアクション復活だ！」

「デメエら：俺をコケにしてくれたな。なら俺も手段は選ばねえ！食らいやがれ！」

ロットンが何かのスイッチを取り出し、それを押した。…だが、何も起こらない。

「何…この町中に仕掛けた爆弾が爆発しない!？」

「ああ…このガラクタのことかい?」

クロウがロットンに見せたもの、それは紛れもなくロットンが最終兵器として仕掛けていた爆弾だった。

「何故…?」

「コナミから連絡があつたんだよ。ダイナマイトとか町中に仕掛けられてもおかしくないから調べてから来てくれて」

「デュエル中にダイナマイト投げてくるんだ。それくらいしてると思ってたな」

クロウとコナミは拳を合わせ、ロットンの作戦を防いだ喜びを分かち合った。

「馬鹿な…。そう容易く解除できるものでは…」

「ふん、念のためにブルーノも連れてきて正解だったな。一瞬で外してくれたぞ」

「ブルーノが…」

彼らの新しいメンバーブルーノは機械に滅法強く、Dホイールの知識も遊星並にある天才メカニックである。幸いにも遊星がガレージに置いたメモを一緒に見ていたため、連れてきていた。

「さあ、よそ見は終わりだぜ！」

「や、やめろ…！」

「攻撃力2000になった羊トクン2体で攻撃！」

2体の巨大な羊がロットンを挟み撃ちにし、ライフを削り取った。

ロットン LP4000→0

「くそっ…まだだ！」

デュエルに負けるや否や、ロットンは自らのDホイールに走り出す。

「逃げる気か!？」

「ロットン、私は…?」

「どけー!」

バーバラがロットンに助けを求めもわき目も振らずに突き飛ばされてしまう。そしてロットンかDホイールに乗ってここから逃げようとする。

「させません!」

「あれは…ウエスト達の父親!」

バーバラの花屋の屋根の上からロットンのDホイールへと飛び込み、ロットンを引きずり下ろした。

「離せ…!くそっ…離しやがれ!」

さらに彼の元部下達も地面に伏せられたロットンを抑え、セキュリティが到着するまで一切の身動きを封じた。スケープゴートであった彼らの働きによって彼の天下は終了したのだ。

「これで…満足したぜ」

こうしてクラッシュタウンで起きた事件は幕を閉じた。

到着したセキュリティによって騒動の中心となったロットンやバーバラが逮捕されていく。ロットン達に利用されていた部下達は少なからず罪を犯していたが牛尾の判断によってこの町を発展させると約束した上で見逃されていた。

遊星達はWRGPに向けての準備を進めなくてはならないために、すぐに鬼柳との別れの時が来た。

「ありがとうな。お前らが俺を助けてくれなかったら今も俺は…。本当にありがとう」

「礼には及ばないさ。…やっぱりこの町に残るのか?」

「ああ。ニコ、ウエスト。こいつらにこの町を発展させて俺の生き様を見せるまではやっぱり満足出来そうにない」

2人の頭を撫で、鬼柳は微笑を浮かべながら遊星に伝えた。

「久しぶりにチームサティスアクションで復活しても悪くねえと思っただけだな」

「馬鹿を言え、あんなハチャメチャな日々はもうこりこりだ。だが、久

しぶりに会えて楽しかったぞ」

「暇があつたら遊びに来いよ、最高のもてなしで満足させてやるぜ。ロットンタウン改め：新生、サティスファクションタウンでな！」

彼らはまた会える時を信じて笑顔で去っていく。Dホイールより遅いガソリンで動くバイクに乗ったブルーノを連れながら遊星、ジャック、クロウは自分たちへの舞台へと帰っていく。

だがコナミはやるべき事を果たすため、まだサティスファクションタウンに残っていた。



## 新たな満足へ

ロットンやバーバラがいなくなり、グループ同士の抗争も収まったサティスファクションタウン。そんな町を復興させるためコナミは町長となった鬼柳の手伝いをしていた。復興活動を数日行った日の夜、寝どころを貸してもらっているニコやウエストの家で2人はこんな話をした。

「良かったのかコナミ？遊星達と帰らなくて」

「…実はここに残ったのは鬼柳に頼みがあるからなんだ」

「頼み？なんだよ改まって」

「鬼柳、WRGPって知ってるか？」

「知ってるもなにも…世界的な大会じゃねえか」

「単刀直入に言うぜ、一緒に大会に出ないか？」

「…嬉しいが無理だな。俺はこの町を発展させなきゃなんねえ」

「鬼柳、WRGPは世界的な大会だ」

「いや、さつきも言ったじゃねえか」

「つまりだ。俺達が出て成績を残せばサティスファクションタウンの知名度もアップする！」

「…！なるほどな。だが…」

「それに遊星達もこの大会に出る。つまり、俺たちチームサティスファクションのラスト…かは分からねえが大舞台でデュエル出来るかもしれないんだぜ！」

「な、なに…！悩ませてくれるじゃねえか！だがニコやウエストのこともあるしな…」

「鬼柳兄ちゃんWRGPに出るの!？」

話を聞きつけたウエストが勢いよくやってきた。

「だがお前らを置いていくわけには…」

「私達なら大丈夫ですよ、鬼柳さん」

「ニコ…」

台所で食器を洗っていたニコが声をかけてくる。

「まだこの町は貧しいけれど以前のように不自由ではありません。それ

に父、セルジオもいますから留守番くらい私達でも出来ます。どうかお自分のやりたい事をやって下さい」

「そうだよ！僕もテレビを見て鬼柳兄ちゃん達の活躍を応援してるからねー！」

「ううっ…お前ら泣かせるじゃねえか！」

「鬼柳…相変わらず涙もろいな」

鬼柳は2人の優しさに思わず泣き崩れてしまった。

「鬼柳さん。どうか今度はWRGPで2人に生き様を見せてやって下さい」

「分かった！男、鬼柳京介。WRGPで満足させてやるぜ！」

「さすがはリーダー！」

鬼柳は力強くみんなに宣言した。

「そうと決まればDホイールのメンテナンスやグレードアップ、それにライディングデュエルの練習をしなくちゃな！」

宣言したことである気が出てきたのか落ち着いていられなくなる鬼柳、ここで1つのことに気づきコナミに問いかける。

「あれ？WRGPってメンバーが3人は必要じゃなかったか」

「安心してくれ、既にもう1人誘ってある！」

「用意がいいな、早速明日顔合わせといこうじゃねえか！」

「鬼柳さん、さすがに相手の予定もありますし明日は急すぎるのでは…」

「ところがどっこい。丁度明日ここに来るみたいなんだよな」

「…？明日の来客の予定はダインの交渉に来るやつだけだったはずなんだが…」

そんなこんなで夜は更けていき、コナミは昼頃に叩き起こされる。

「起きろよコナミ、もう昼だぞ」

「んん、悪い…もう2時間」

「ダメだ。ダインの交渉に行かなきゃなんねえ。ついてこい」

布団を引っぺがされ無理やり起こされる。眠気まなこを覚ますために顔を水で洗い、鬼柳とともに交渉主との約束の場所へと向かっていく。

「それで俺たちのメンバーはいつ来るんだ？」

「いま会いに行く所じゃねえか」

「え？」

彼らの前にダインの交渉に來た女性が見えてくる。彼女がこちらを見ると顔が驚愕の色に染まった。

「しよ、庶民!?なんでここにあなたがいるの!」

「よー、久しぶり…ってほど時間は経ってないけど久しぶりな感じがするな幸子」

「コナミ、こいつが？」

「ああ」

綺麗な青い髪にスラリとした体つきの長身の女性、海野幸子。コナミが呼びかけたWRGPのメンバーの1人である。

「幸子、こいつは鬼柳。俺が誘った3人目の俺たちのメンバーだ」

「あら、そうでしたの。大会中よろしくお願いいたしますわ」

「……」

「…?どうした鬼柳？」

鬼柳はまるで獲物を観察する獣のような眼で幸子を見定める。

「お前、強いのか？」

「…もし!ちよつと失礼じゃありませんこと!?!」

幸子はいきなりの侮辱に交渉相手ということも忘れ怒った。それを聞いた鬼柳は腰につけているホルガーから取り出した銃をデュエルディスクに展開し、腕につけて幸子に布告する。

「俺はお前がどんな実力かは知らない。だから俺とデュエルだ!」

「ふん…望む所ですわ!わたくしがいくら強くてもメンバーが弱くは足を引つ張られるだけですからね!」

「お、おい…2人とも!」

「庶民は口を出さないでくださいまし!」

「コナミは口を挟まないでくれ!」

「ど、どうしてこんなことに…」

2人は互いに距離を取り、ディスクを構え向き合う。丁度この場所はロットンとコナミ達がデュエルをした場所で、周りの人たちもこの

デュエルの行く末を見守っていた。

「「デュエル！」」

サティスファクションタウンでのデュエルは基本決闘銃の早抜き  
の順番で決定するが、幸子は当然そのディスクは所持していないため  
ランダムに先攻が決定された。

「まずは俺からだな、ドロー！俺はインフェルニティ・ビーストを召喚  
！」

黄土色の毛が生えた獣が幸子を威嚇する。

インフェルニティ・ビースト 攻撃力1600

「インフェルニティ：聞いたことのないモンスターですわ」

「カードを3枚伏せてターンエンド！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・ビースト』

セット3

手札2

「わたくしのターン、ドローですわ！」

ステップを踏みながら鮮やかにドローする。そんな幸子を横目に  
鬼柳は素早くトラップを発動させた。

「トラップ発動、インフェルニティ・インフェルノ！俺の手札を2枚墓  
地へ捨てることでデッキからインフェルニティモンスターを2体墓  
地に送らせてもらおうぜ」

「鬼柳のやつ…いきなりハンドレスか」

「ふふ…こんな最序盤で手札が0になるなんてデュエルの基本を知ら  
ないようね」

「へっ…きつとお前は今の発言を後悔することになるだろうさ」

「楽しみにしておきますわ。わたくしはハリマンボウを召喚！」

体が針で囲まれ、外敵を近づかせなくしているマンボウがフィール  
ドに浮遊した。

ハリマンボウ 攻撃力1500

「だけど鬼柳のインフェルニティ・ビーストの攻撃力は1600だ  
ぞー！」

「言われなくても分かっていますわ。わたくしは手札から魔法カード、大波小波を発動致します！」

「呼んだか？」

「呼んでませんわ！わたくしはこのカードの効果でわたくしのフィールドの水属性モンスターを全て破壊し、その数と同じ数の水属性モンスターを手札から特殊召喚しますわ！ハリマンボウを破壊し現れなさい、超古深海王シーラカンス！」

ハリマンボウが小さな波に流されていったかと思うと、大きな波に流され巨大なシーラカンスが姿を現す。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「幸子も1ターン目からシーラカンスを……！」

「少しはやるじゃねえか」

「今更機嫌をとつても遅いですわよ。ハリマンボウは墓地に送られた時、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を500下げます！」

ハリマンボウの体の周りにつついていた針がインフェルニティ・ビーストに放たれる。

インフェルニティ・ビースト 攻撃力1600↓1100

「ですがここからがわたくしの本領発揮！手札を1枚墓地へと送りシーラカンスの効果を発動！デッキより可能な限りレベル4以下の魚族モンスターを特殊召喚しますわ！」

「いつ見てもインチキな展開力だぜ！」

シーラカンスの周りに4つの渦が発生しそこから4匹の魚が出てくる。

「…甘いな！カウンタートラップ発動、インフェルニティ・バリア！俺のフィールドにインフェルニティモンスターが攻撃表示で存在し俺の手札が0枚の時、相手が発動したカードの効果を無効にし破壊する！」

「手札が0枚の時に発動出来るカードですって!?なんてトリッキーな……！」

はずだったのだが鬼柳の発動したトラップによって渦は止み、シーラカンスも海の底へと沈んでいってしまう。

「さすがは鬼柳：シーラカンスを撃ち抜いちまった」

「くう：わたくしとしたりしたことが失態を。ターンエンドですわ！」

「マジか！やばいぞ幸子！」

シーラカンスを破壊された痛手は大きく、幸子は身を守る術もなくターンを終えてしまう。

幸子 LP4000

フィールド 無し

セツト0

手札2

「容赦はしねえ、俺のターン！俺は終末の騎士を召喚！こいつは召喚に成功した時、墓地に闇属性モンスターを墓地に送ることができる。俺はインフェルニティ・リベンジャーを墓地へ！」

ぼろぼろの装甲に身を包んだ騎士が剣を振りかざす。

終末の騎士 攻撃力1400

「う…」

「バトルだ。ビーストと終末の騎士でお前にダイレクトアタック！」

ビーストは口から発射した火の玉で、騎士は手に持った剣で幸子を攻撃した。

幸子 LP4000↓1500

「このまま終わるなよ。もっと俺を満足させてみる！ターンエンド！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・ビースト』（攻撃表示） 『終末の騎士』（攻撃表示）

セツト2

手札0

「わたくしのターン、ドロー！わたくしはディープ・スウィーパーを召喚しますわ！」

深海の掃除屋と異名を持つダイオウグソクムシが敵の気配を察知し、水面へと浮上した。

ディープ・スウィーパー 攻撃力1600

「バトル。ディープ・スイーパーでインフェルニティ・ビーストに攻撃！」

ディープ・スイーパーは体を跳ねさせインフェルニティ・ビーストの後方へと回りこみ尻尾を突き立てることで毒を注入した。

鬼柳 LP 4000 ↓ 3500

「だが、俺の手札が0枚の時に相手との戦闘で俺のモンスターが破壊された時、墓地のインフェルニティ・リベンジャーは破壊されたビーストと同じレベルとして特殊召喚出来る！」

カウボーイハットを被った小さなモンスターが2丁の拳銃を構えながら地面に空いた亜空間から出てきた。

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0

「厄介な効果ですわね…ターンエンドですわ！」

幸子 LP 1500

フィールド 『ディープ・スイーパー』

セット0

手札2

「俺のターン、ドロ。インフェルニティ・リベンジャーをリリースしてインフェルニティ・デストロイヤーをアドバンス召喚！」

筋骨隆々な体をした悪魔が地面を拳で叩き割りながら現れた。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「デストロイヤーでディープ・スイーパーに攻撃だ！そしてこいつは俺の手札が0枚の時に相手モンスターを戦闘で破壊すれば相手に1600のダメージを与える。終わりだ！」

「させませんわ！魚族モンスターが攻撃の対象となったことで墓地のキラー・ラブカを除外し効果を発動いたします。その攻撃を無効にし、攻撃してきたモンスターの攻撃力をわたくしのターンのエンドフェイスまで500下げますわ！」

「なにつ!?…シーラカンスのコストか！」

ここで鬼柳が初めて動揺を見せる。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300 ↓ 1800

「ふふ…あまりわたくしを舐めないほうがよろしいんじゃないか？」

「ああ…そうかもな。終末の騎士を守備に変えてターンエンドだ！」

終末の騎士 守備力1200

鬼柳 LP3500

フィールド 『終末の騎士』（守備表示） 『インフェルニティ・デストロイヤー』（攻撃表示）

セツト2

手札0

「わたくしのターン、ドロロー…！いい引きですわ。わたくしは永続魔法、異次元海溝を発動！このカードの効果で墓地の水属性モンスターはシラカンスを除外致します！」

「…何をする気だ」

「わたくしのエースモンスターを呼び戻すのですわ。デイク・スパーはリリースすることでフィールドの魔法・罠カードを1枚破壊出来ます。この効果でわたくしは異次元海溝を破壊！」

「ええっ…自分のカードを破壊!?大丈夫なのか？」

「安心なさい庶民。異次元海溝は破壊された時、このカードの効果で除外したモンスターを呼び戻すのですわ。もう1度戻りなさい、シラカンス！」

海溝から再び巨大なシラカンスが舞い戻ってきた。

超古深海王シラカンス 攻撃力2800

「またそいつを呼んできたってことは…」

「当然効果を発動致しますわ！手札を1枚墓地へと送り、デッキよりレベル4以下の魚族モンスターを任意の数まで特殊召喚します！わたくしが呼ぶのは2体の竜宮の白タウナギ、オイスターマイスター、キラール・ラブカ！」

シラカンスが生み出した4つの渦から4匹の魚が現れた。

竜宮の白タウナギ×2 攻撃力1700

オイスターマイスター 攻撃力1500

キラール・ラブカ 攻撃力700

「くっ…さすがにまづいかもな」

「その効果で呼んだモンスターは攻撃できねえし効果も無効にされて



いる…だけど竜宮の白タウナギはチューナー…！」

「当然、シンクロ召喚ですわ！わたくしはレベル3のオイスターマイスターにレベル4の竜宮の白タウナギを、レベル3のキラール・ラブカにレベル4の竜宮の白タウナギをそれぞれチューニング！氷の槍を身に宿す龍よ、その凍える吐息で幾千の敵を凍らせよ！シンクロ召喚！全てを貫け、氷結界の龍　グングニール！」

シーラカンスの隣に身体が氷で出来たドラゴンが2体ともゆつくりと降りてくる。

氷結界の龍　グングニール×2　攻撃力2500

「この状況…初めて幸子とデュエルした時を思い出すな」

「…そうですね。ですがあの時よりわたくしの戦術は進化していませんわ！オイスターマイスターは戦闘以外の方法で墓地へと送られた時、場にオイスタートークンを1体場に残しますわ！」

オイスターマイスターの子供が巨大な3体のモンスターに隠れて場に残っていた。

オイスタートークン　守備力0

「そしてグングニールの効果を発動！手札のカードを2枚まで墓地へ送ることでその数だけあなたのフィールドのカードを破壊しますわ。わたくしは手札に残った最後の1枚を墓地へと送り、こちらから見て左側の伏せカードを破壊！」

「くっ…伏せカードを狙ってきたか」

グングニールの咆哮とともに天より氷の槍が降り注ぎ、鬼柳の伏せカードを1枚破壊した。

「さらにコストとして墓地に送られた素早いアンコウの効果を発動！このカードが手札がデッキより墓地へと送られた場合、デッキより2体まで素早いと名のつくモンスターを特殊召喚致します。わたくしは1体の素早いマンタを特殊召喚！」

猛スピードで1匹のマンタがオイスタートークンを囲うように泳いできた。

素早いマンタ　攻撃力800

「またフィールドが埋まった…！！！すげえな幸子！」

「わたくしの力に震撼なさい。バトル！わたくしはシーラカンスでインフェルニイ・デストロイヤーに攻撃！」

巨大なシーラカンスが動いたたびにどこかに渦が巻いていく。それほどの巨体でデストロイヤーを潰そうとした。

「かかったな！悪魔族モンスターとのインフェルニイ・デストロイヤーが攻撃の対象になったことでデストロイヤーとシーラカンスを対象にトラップカード、ヘイト・バスターを発動！対象にした2体のモンスターを破壊し、シーラカンスの攻撃力分のダメージをお前に与える！」

「ゲツ：鬼柳はそんなカードを伏せてたのか！」

デストロイヤーに爆弾がセットされ、それごとシーラカンスは押しつぶそうとする。

「甘いですね。シーラカンスのもう1つの効果を発動！このモンスターが効果の対象になった時、フィールドの魚族モンスターをリリースすることでその効果を無効にして破壊しますわ！わたくしはオイスタートークンをリリースしてヘイト・バスターを破壊！」

「何だど!？」

デストロイヤーにセットされた爆弾はシーラカンスが発生させた渦でどこかへと飛ばされてしまう。

「お、おお！そんな効果もあったのか！」

「ヘイト・バスターは無効！攻撃は続行していますわ！」

再び無防備な姿となったデストロイヤーをシーラカンスが押しつぶした。

鬼柳 LP3500↓2500

「ぐっ…」

「よし！インフェルニイ・リベンジャーを特殊召喚されてもマンタで潰せる！このまま総攻撃が決まれば幸子の勝ちだ…！」

「…そうはさせねえ！墓地のインフェルニイ・ビショップの効果が発動！俺の手札が0枚の時にインフェルニイモンスターが破壊される場合、こいつを除外することで身代わりにすることが出来る！」

「なっ…」

押しつぶしたのはデストロイヤーではなく身代わりとなったビショップだった。

「…このターンでは仕留めきれないですわね。ですがモンスターは倒させてもらいますわ！行きなさいグングニール、今度こそデストロイヤーを破壊するのです！」

グングニールが吐いた息がデストロイヤーにあたり、彼の身体は凍ってそのまま砕け散ってしまう。

「ぐうっ…！俺のモンスターが破壊されたことでインフェルニティ・リベンジャーを特殊召喚！」

鬼柳 LP2500↓1800

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0

「わたくしはもう1体のグングニールで終末の騎士へ、さらに素早いマンタでインフェルニティ・リベンジャーへ攻撃！」

グングニールが身も凍てつくような吐息で立ちふさがる騎士を封じると拳銃を交わしながら1体のマンタがリベンジャーにピンタを決めた。

「うおおっ…。正直、お前がここまでやるとは思ってた。悪かったな…！」

「ふっ…まだわたくしはあなたに勝利していませんわ。褒め言葉ならその後でお願いします。わたくしはこれでターンエンド！」

「だが…俺も勝ちを譲る気はない」

「いくらあなたのデッキが手札0で効果を発動するカードが多いとはいえ、フィールドに何もなしでは流石に辛いでしょ！」

「いや…俺のフィールドにはモンスターがいる！」

「な!?いつの間にな…」

ステッキを持った小さな魔術師がいつの間にかフィールドに現れていた。

トイ・マジシャン 攻撃力1600

「こいつはお前がグングニールの効果で破壊した伏せカードさ」

「鬼柳…いくらハンドレスにしたいからってモンスターを魔法・罠ゾーンに伏せるのはどうかと思うぞ！」

「…トイ・マジシャンは魔法カード扱いとして手札から魔法・罨ゾーンに伏せることが出来るモンスターだ」

「そんなモンスターがいるなんて…」

「手札を0にしたい俺としては都合なカードってわけさ。そしてこいつは相手のカード効果で破壊されて墓地に送られたターンのエンドフェイズに特殊召喚できる！」

「やりますわね…ですが攻撃力の低い素早いマンタを攻撃しようにも先ほどわたくしはキラール・ラブカをシンクロ素材として墓地に送っています。モンスターが1体増えてもどうにもならないですわ！」

「どうかな…満足できる答えを提供してやるぜ」

幸子 LP1500

フィールド 『氷結界の龍 グングニール』×2 (攻撃表示) 『素

早いマンタ』 (攻撃表示) 『超古深海王シーラカンス』 (攻撃表示)

セツト0

手札0

「イツツ…ショータイム…ドロー！」

鬼柳がこのデュエル負けるにしても勝つにしても最後と思われるドローをする。デッキが鬼柳に示した答え、それを鬼柳は場に出した。

「ふっ…満足させてくれるぜ。俺はトイ・マジシャンをリリースしてインフェルニティ・アーチャーをアドバンス召喚！」

自身の身体と同じくらいの大きさはあろう弓矢を持った弓兵がマジシャンと交代でフィールドに現れた。

インフェルニティ・アーチャー 攻撃力2000

「そのモンスターで何を…？」

「教えてやるよ、こいつの効果を！インフェルニティ・アーチャーは俺の手札が0枚の時、相手プレイヤーにダイレクトアタック出来る！」

「な…え？嘘でしょう…。この土壇場でそんなカードを！」

「行くぜ、インフェルニティ・アーチャーでダイレクトアタック！」

アーチャーが自分の体をめいっばい使い、弓をモンスター達の頭上を超えるようにセツトし、矢を放った。その放物線は綺麗にグング

ニール達を超えていき、幸子へと突き刺さった。

「そんな馬鹿なですわー!？」

幸子 LP1500↓0

こうして勝敗は決した。これを見ていた住人達から拍手が起こる中、鬼柳が幸子に近づいていく。

「いいデュエルだったぜ、えーと…幸子か」

「ぐぬぬ…次は負けませんわよ」

デュエルを通して互いを認め合った2人は握手で先ほどの互いの非礼を取り消した。

「おーい2人ともー、大丈夫か？また喧嘩したりしない？」

「しねえよ」

「そもそも喧嘩なんかしてませんわ」

「そ、そうか…」

2人とも聞いた瞬間即答で否定したのでコナミは戸惑ってしまう。

(こいつら結構息あってるんじゃないか…?)

「さて…コナミ。こうしてメンバーが揃った以上決めるべきことがあるよな」

「え？何を？」

「決まっていますわ、このチームのリーダーが誰かですわ。まあ語るまでもなくわたくし…」

「いや、リーダーは俺だ」

「何ですって…!」

再び見えない火花を散らす2人。

「どーどー。落ち着いてくれ…」

「ふー!」

何だか野生化している幸子は置いておき、鬼柳は提案を続ける。

「もちろん決めるべきはチーム名だ!」

「ふ…任せな。俺が今考えたのがある!」

「今かよ」

「ほら…結構時間かかったから夕日が射してきてるだろ。それで思いついた」

「む…庶民のくせになんだか期待できそうですわね」

一呼吸おいてコナミは自信ありげに言い放った。

「ずばり、『夕焼け広場仲良し連合』だ！」

「ねえよ」

「論外ですわ」

「お前ら仲良いな!？」

バツサリと2人切り捨てられる。体育座りしだしたコナミを横目に次の出番はもらったと言わんばかりに幸子が言い出す。

「これだから庶民は…わたくしのエレガントなチーム名におののきなさいー」

「満足できるチーム名で頼むぜ」

一呼吸また一呼吸置いて自信ありげに言い放たれた。

「ふっ…『海野幸子と愉快的仲間たち』でどうでしょうか」

「俺はお前が愉快的仲間だと思う」

「確かに」

「なっ…トップスで築き上げたわたくしのセンスを一蹴ですって！」

あまりのショックに幸子自身がおののいてしまった。

「お前ら…このチームで何を成し遂げたいかちやんと考えたか？」

「むう…」

「ぐきぎ…ならあなたの考えたチーム名を聞かせなさい！」

「ふっ…俺の答えは初めから1つだ！」

夕焼けへと人差し指を掲げ、その名前は言い放たれた。

「俺はこのチームでもっと満足したい。以前みたいな独りよがりじゃなくチーム全員での満足を俺は求めたい。そんな俺の思いを込めた…チーム『ネオサティスフアクション』！」

「よし、それだ！」

「だろ？」

「待ちなさい、庶民達！」

「なんだよ。この名前で満足出来ないのか？」

「さつきから満足、満足と言ってますが正直意味が分かりませんわ」  
「なら分かりやすく多数決で決めようぜ」

「卑怯ですわよ!?!」

彼らの言い合いはダインの交渉を忘れ去りながらここから2時間ほど続いたが結局は鬼柳の提案が通った。こうしてチームネオサティスフアクションは結成された。

貴様のドラゴンは頂いていく

ついにメンバーが揃ったチームネオサティスフアクション。鬼柳は町長の仕事をセルジオへと任せ、サティスフアクションタウンの宣伝と遊星達とのデュエルのためにネオドミノシティへと出てきていた。

そんな彼らは今、海野財閥の所有するガレージで彼らの持つDホイールをチューンアップし性能を上げようとしていたが…。

「よし…エンジンは安定してきたな」

「ああ、エンジンはな」

「現実逃避していないで拾うのを手伝ってくださいます?」

彼らの前に広がっている惨状、それは床に大量に落ちているカード。彼らはDホイールをパワーアップしようとモーメントの出力を上げてみたところ、デッキをカバーしている部分が外れてしまい3人のデッキがガレージに舞ってしまったのだ。

「おーい、コナミー!遊びに来たよー!」

「おー、龍亞達。今日も来たか」

ぞろぞろとガレージに入ってくる子供達。最近龍亞や龍可は放課後になるとデュエルアカデミアの友達を連れて遊星達かコナミ達のガレージに入り浸っているのだ。

「今日も大変なことになってるみたいね…」

「俺たちもカード拾うの手伝うぜ!」

彼らは協力して落ちているカードを拾い上げていく。龍可も手伝おうとしたが入り口にいる人物に気づき、腕を掴んで中に引き入れた。

「スライも来てたんだ。そんなところに入っていないで中に入りなよ!」

「あつ…おい、引っ張るなって」

龍可に引っ張られたスライの目に一枚のカードが入ってくる。

(あれは…あの時のドラゴン。確かエンシエント・ホーリー・ワイバーン…)

丁度表になるように落ちていた白く長い胴体が特徴的なドラゴン。



彼は以前のコナミとハイトマンとのデュエルであのドラゴンに魅入られていた。

「…?どうしたのスライ?」

「…俺も拾うのを手伝ってやるよ」

「本当?ありがとう!」

龍亞が渋い目で見ていたのを横目にスライは龍可と一緒にカードを拾い出した。

「コナミさん、ハネワタちゃん見つけたよ!」

「お、パティ。サンキューな」

子供達の協力もあつてなんとか床に落ちていた全てのカードを回収し終えた。

「ふう…結構時間かかりましたわね。わたくしはこれから会議があるので本社の方に行つてきますわ」

「また後でな」

海野財閥のガレージでDホイールの作業をしているのは他にガレージのアテがなかったのもあるが、幸子が急用が入った時に対処しやすいようにという理由もあった。

「おし、もう1度モーメントの出力を調整しなきゃな」

「エンジンの方ももう1度見直すか。この前みたいに爆発するかもしれねえしな」

「ま、待つてコナミ!」

「龍可?」

何かに気づいた龍可がコナミを呼び止めた。

「どうした?」

「エンシエント・フェアリーが言ってるの…。コナミのデッキからエンシエント・ホーリーの気配がしないって」

「…え?」

慌ててコナミは自分のエクストラデッキを確認する。驚くことにエンシエント・ホーリーはどこにもいなかった。

「拾い損ねたか?」

「いや、落ちてるのは全部集めたぜ」

床を見渡しても落ちているカードは1枚もない。

「エンシエント・フェアリーならどこにいるか分からない？…そう、分からないのね」

龍可がエンシエント・フェアリーに問いかけるも有意義な情報は得られなかった。そんな騒ぎを聞きつけた龍亞がスライを問い詰める。

「スライ！お前がコナミのカードを盗んだんだろ！」

「…なんで俺が」

「ちよつと龍亞！スライに失礼なこと言ってると思わないの!？」

「思わないね！スライが俺たちについてくるなんておかしいと思ったんだ。いつもなら寄り道せずに帰れとか言うのに」

「…気まぐれにお前らに付き合ってただけだ」

「どうしても口を割らないっていうなら…デュエルだ！俺が勝ったら白状してもらうよー！」

「デュエルしてやる義理はねえけど…まあいいか。お前とデュエルしてやるよ」

突つかかる龍亞を押しつけてスライはデュエルディスクを展開する。それに向かい合う龍亞もディスクを展開し準備は完了する。

「お、お前らここガレージ…」

「…デュエル！」

コナミの制止も空しくディスクがランダムに先攻を決定し、デュエルが開始された。

「俺のターンからか。ドロー。俺は魔法カード、デビルズ・サンクチュアリを発動。こいつは俺のフィールドにメタルデビル・トークンを一体呼び出す」

フィールドに現れた魔方陣の中心から悪魔を模した鉄の像が降臨した。

メタルデビル・トークン 攻撃力0

「さらにこいつをリリースして混沌球<sup>スファイア・オブ・カオス</sup>体を召喚する！」

悪魔の像が消えたかと思うと天井に光と闇が混じり合った球体が浮いていた。

混沌球体 攻撃力1600

「へへん！アドバンス召喚でも攻撃力1600なんて大したことないね！」

「言ってる。混沌球体はアドバンス召喚に成功しときデッキからレベル3のモンスターを手札に加えることが出来る。俺が加えるのはエキセントリック・ボーイ！」

球体が闇に包まれたかと思うと、スライに向かって一筋の光が差し込み1枚のカードが飛ばされてきた。

「さらに俺は魔法カード、封印の黄金櫃を発動。このカードの効果でデッキからカードを1枚除外し、2ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える。俺はネクロフェイズを除外！」

赤ちゃんの顔のようなモンスターがけたけたと笑いながらスライと龍亜のデッキの上から5枚のカードを吹き飛ばした。

「お、俺のカードが!？」

「ネクロフェイズは除外された時、互いのデッキの上から5枚のカードを除外する。俺はこれでターンエンドだ」

スライ LP4000

フィールド 『混沌球体』（攻撃表示）

セツト0

手札4

「俺のターン、ドロー！ジャッキー！俺は<sup>デIFOオーマー</sup>D・ラジオンを召喚！じゃっじゃじゃーん！」

頭の部分がラジオになっているロボットが現れる。頭部にはアンテナが付いており常に電波を受信できるようだ。

D・ラジオン 攻撃力1000

「けっ…攻撃力1000かよ」

「ラジオンが攻撃表示の時に俺のデIFOオーマー達の攻撃力は800アップする！もちろんラジオンも攻撃力アップだ！ギャギャーん！」  
右手に持っているイヤホンを振り回すと頭部のアンテナに磁気が集まって行き攻撃力が上昇していく。

D・ビデオン 攻撃力1000↓1800

「バトルだ！ビデオンで混沌球体に攻撃！イヤホーン・シュート！ド

カーン！」

勢いをつけたイヤホンで球体を絡め取り、そのまま地面へ叩きつけた。

「だが混沌球体は1ターンに1度戦闘では破壊されない！」

「だけどダメージは受けてもらうよ！」

「ちっ…」

スライ LP4000↓3800

「見たか！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

龍亞 LP4000

フィールド 『D・ビデオン』（攻撃表示）

セツト1

手札4

「調子に乗るなよ…俺のターン。俺は手札からチューナーモンスター、エキセントリック・ボーイを召喚！」

「あれは…スライのお気に入りのモンスターね」

黄色の髪が下敷きで頭をこすって静電気を発生させた時のように逆立った風変わりな格好をした少年が現れる。

「フィールドにチューナーとチューナーじゃないモンスター…もうシンクロ!?!」

「シンクロだ。だがこのモンスターはお前の想像の先に行く！このカードをシンクロ素材にする時、他のシンクロ素材は手札のモンスターを使ってシンクロする！」

「手札のモンスターとシンクロだって!?!」

「俺は手札にあるレベル5の混沌球体とレベル3のエキセントリック・ボーイをチューニング！大いなる翼持ちし天使よ、現世と冥界を行き来せよ。シンクロ召喚！羽ばたけ、ゼラの天使！」

エキセントリック・ボーイが半透明になり手札のモンスターと1つになると屈強な肉体と2枚の立派な翼を持った天使がフィールドに舞い降りる。

ゼラの天使 攻撃力2800

「手札のモンスターとシンクロ…そんなのもあるのか」

珍しいものを見たときコナミと鬼柳は感心した。

「最もエキセントリック・ボーイの効果でシンクロしたモンスターの効果は無効になるが…別に問題はない。バトル。ゼラの天使でビデオンに攻撃」

ビデオンのイヤホンを翼を巧みに使ってかわし、左手の爪で切り裂いた。

「ううっ…！」

龍亞 LP4000↓3000

「さらに混沌球体で龍亞にダイレクトアタック！」

「させるもんか！トラップ発動、D・スクランブル！俺のフィールドにモンスターがいない時に相手がダイレクトアタックしてきた場合、その攻撃を無効にして手札のデIFOオーマーを特殊召喚する！来てくれ！D・リモコン！」

龍亞のトラップからエマージェンジーが鳴り響き、リモコン型のロボットが緊急出動する。

D・リモコン 攻撃力300

「…ふん。俺はこれでターンエンド」

スライ LP3800

フィールド 『混沌球体』（攻撃表示） 『ゼラの天使』（攻撃表示）  
セット0

手札3

「まだまだ！俺のターン、ドロー！ジャキーン！俺はリモコンの効果を発動！攻撃表示の時は墓地のデIFOオーマーモンスターを除外して同じレベルのモンスターをデッキから手札に加えられるんだ！俺はラジオンを除外してビデオンを手札に加えるよ！そしてそのまま召喚だ！ドドーン！」

手に持つタイプのビデオカメラが変形したいき、レンズの部分が顔となったロボットとなる。

D・ビデオン 攻撃力1000

「ち…シンクロか」

「俺はレベル4のビデオンにレベル3のリモコンをチューニング！世

界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！」

右手にはスコップを、左手にはドライバーを持った黄色でコーティングされた機会龍が現れた。

パワー・ツール・ドラゴン 攻撃力2300

「いっくよー！パワー・ツールの効果発動、パワー・サーチ！デッキから3枚の装備魔法を選んで、相手がランダムに選んだカードを俺の手札に加える！」

3枚の装備魔法を手を持った龍亜がスライに向けて裏側の状態で見せる。

「…右だ」

「残りのカードはデッキに戻して…。俺は今加えた装備魔法、災いの装備品をゼラの天使に装備だ！」

「俺のモンスターに装備だど？」

ゼラの天使の手が1つの剣を握る。すると茶色かった翼が漆黒に染まっていき、その姿は堕天使のようになってしまう。

「装備したモンスターの攻撃力は俺のフィールドのモンスター1体につき600下がる！」

「…そういうことか」

ゼラの天使 攻撃力2800↓2200

「バトルだ！パワー・ツールでゼラの天使に攻撃！クラフティ・ブレイク！」

左手に持っているドライバーを腕に内蔵しているドリルで回し、天使の翼を貫いた。

「くっ…。エキセントリック・ボーイによってシンクロしたモンスターはフィールドから離れる時、ゲームから除外される」

スライ LP3800↓3700

「さらに災いの装備品のもう1つの効果発動！このカードがフィールドから墓地に送られた時、相手フィールドのモンスター1体に装備できる！混沌球体に装備だ！」

装備品の形状が変わってネックレスとなり、球体に引っかかるとそ

の姿から光が消え、闇に染まっていく。

混沌球体 攻撃力1600↓1000

「カードを1枚伏せてつと。ターンエンドだ！これが俺の実力さ！」

龍亞 LP3000

フィールド 『パワー・ツール・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札4

「俺のターン！スタンバイフェイズに封印の黄金櫃の効果でネクロフェイズが手札に加わる！」

空中に空いた穴から1枚のカードがスライの元に加わった。

（確かあのモンスターは授業で習ったぞ。確か…えーと。そうだ！召喚した時に除外されてるカードを全部デッキに戻してデッキに戻したカードの数×100攻撃力をアップするんだ！確か攻撃力は1200…もし召喚したら11枚のカードが戻るから2300!…:だけど俺が今伏せたカードは落とし穴。こいつは相手が攻撃力1000以上のモンスターを召喚した時に発動できて、そのモンスターを破壊できる！これがあれば…:）」

「何を考えているかは知らねえが…:俺はこの時を待っていた」

「な、なに!?!」

「俺はゼラの天使の効果を発動！こいつは除外されたターンの次のスタンバイフェイズに特殊召喚される！」

「えー!?!そんなー!?!」

亜空間にいたゼラの天使は空間を切り裂き、裂け目からこちらに帰還してきた。

ゼラの天使 攻撃力2800↓3400

「しかも攻撃力が上がった!?!」

「ゼラの天使は相手が除外してるカードの数×100の攻撃力をアップする。今お前が除外してるのは6枚、だから600アップした」

「ううっ…:これじゃあパワー・ツールでも太刀打ちできない!?!」

「さらに俺は闇の誘惑を発動！デッキから2枚のカードをドロ―し、手札の闇属性のモンスターを1枚除外する。当然、俺はネクロフェイズ

スを除外！」

再び異次元へ飛ばされる赤ちゃんの顔のようなモンスター、けたけたという笑い声と共に互いのデッキの5枚のカードを道連れにした。

「ネクロフェイイスが除外されたことで互いのデッキの上から5枚のカードを除外する。さらにお前の除外したカードが増えたことでゼラの天使の攻撃力がさらに500アップ！」

ゼラの天使 攻撃力3400↓3900

「そ、そんな…」

「バトル。ゼラの天使でパワー・ツールへ攻撃！」

先ほど呪いの装備をつけられた恨みからか浄化された剣をパワー・ツールの頭部めがけて思いきり振り抜いた。

龍亞 LP3000↓1400

「混沌球体の攻撃力はお前の場にモンスターがいなくなったことで元に戻る！」

「しまった！」

呪いのネックレスを振り落とし、球体は元の輝きを取り戻した。

混沌球体 攻撃力1000↓1600

「そして混沌球体で龍亞にダイレクトアタック！」

「うわあああ！」

龍亞 LP1400↓0

球体が転がっていき、龍亞に突撃を決めて勝敗は決した。

「うう…負けちゃった」

「ま、お前にしたら頑張ったほうだろ」

「なんだとー!？」

「まあ落ち着けて龍亞」

コナミはまたデュエルを始めてしまいそうな龍亞を落ち着かせ、スライへと向き合う。

「スライ、お前が盗んだわけじゃないんだな？」

「…勝ったんだから答える必要はないんだが。いいぜ、答えてやるよ。俺は何もしていない」



「…そうか。疑うようなことを言って悪かったな」

「いいの、コナミ!？」

「ああ。ちゃんと探せばすぐに見つかるさ。…多分」

「…それにしてもおかしいわね」

「何がだ？」

龍可が首を傾げているのを見て疑問に思ったコナミは素直に聞いてみた。

「ほら…私達大きな声では言えないけど精霊が見えるじゃない？」

「ああ、俺も精霊界に行った後は見えるようになったな」

「だけどこのガレージのどこからもエンシエント・ホーリーの力を感  
じないのよ」

「…確かに。でもここに持ってきたことは確かだぜ。Dホイールに  
セットした時確認したからな」

「でも今はいない…。こっそり泥棒に入られたとか？」

「いやいや、さすがに気づくって」

「そうよね…。なら誰かが持ち去った…とか？」

「持ち去った…」

「「あ」」

そんな中、1人の女性がガレージに入ってくる。

「会議終わりましたわよ。Dホイールの調整の続きを…」

「お前かー!」

「え?え?なんですか?」

コナミ達にはしつかり見えていた。幸子の後ろに佇む白きドラゴ  
ンの姿が。

「お前間違っって持っただろ!俺のエンシエント・ホーリーを!」

そう言われ幸子はエクストラデッキのカードを確認する。

「あら…本当ですわ。会議があつて急いでいたものですからあまり確  
認していませんでしたの」

このガレージにいる子供達の視線が幸子に突き刺さった。

「何だかすごく心が痛いですわ…」

コナミにカードを返しながら幸子は胸を押さえた。

「とりあえず…龍亞。スライに謝りなさい」

「えー!?なんで俺が!」

「なんでじゃないでしょ。盗んでないスライをあんなに疑ったんだから」

「うう…。悪かったなスライ」

「…ふん。元々気にしてない」

「さてと…幸子も戻ってきたしDホイールの調整続けるぞー!」

Dホイールにつないだパソコンからモーメントの出力を調整し、試運転を開始した。

「あ、コナミ。俺デュエル見てたからまだエンジンの調整が終わってない…」

「え?」

鬼柳が止めようとするも遅く、Dホイールの後方から小規模な爆発が起こり彼らは軽く吹き飛んでしまう。

「爆発オチなんて最低ですわー!」

こんな感じで彼らの日常は過ぎていった。

いい突っ込みだったぜ

海野財閥の協力もありDホイールのエンジンをWRGPの予選が始まる前に完成させたネオサティスフアクション。彼らはWRGPで使うコースの練習走行と予選の組み合わせを確認するためにWRGPの会場へと赴いていた。

「ここがWRGPで使うコースか。同じところをぐるぐる回る周回コースになってるんだな」

「ああ。確かWRGPの規約には相手チームに一周抜かされるたびに相手チームにscが一個足されるってのがあったから気をつけねえとな」

「しかもその時相手のscが12個だった場合逆にこちらのscが減り、0になればその時点で棄権とみなされますわ。まあそんなことは滅多にないでしょうけど」

ネオサティスフアクションのプラクティスの開始時間までまだ時間があつたので先に予選の組み合わせを確認した。

「む…幸子。これどうなってるんだ？チームが4つ縦と横に書いてあるんだけど」

「分かりませんか？WRGPは32組のチームが参加する大規模な大会。なのでまず予選では8つのブロックへと分かれて4組のチームによるリーグ戦が行われるのですわ。そして1つのブロックにつき1番勝利数の多いチームが本選に出場出来ます。勝ち残ったチームを2つのブロックに分けて今度はトーナメント方式による勝ち抜き、そしてそのブロックの勝者同士で決勝が行われるのですわ」

「てことはまず俺たちはこのリーグ戦を生き残らなきゃいけないわけか」

「そういうことになりますわね」

彼らはBブロックでの参加で他の3チームはチームユニコーン、チーム太陽、チームセキュリティだった。

「あら…チームユニコーンですか。ついてませんね」

「有名なチームなのか？」

「有名どころじゃすみませんわ。彼らはアトランティス大会での優勝の実績もありますし、今大会の優勝候補と噂されていますの。予選の1回戦の相手がこのチームとは…」

「へっ…いきなり強いチームと戦えるってことだろ。満足できそうじゃねえか！」

「やる気だなー鬼柳」

「今日、ニコとウエストと電話してな。応援のメールを貰っちゃった。テレビにも映るみたいだし奴らに情けねえ姿は見せらねえ、必ずあいつらを満足させてやるぜ！」

「まあ…空回りしないことね」

そんな彼らの前にプラクティスを終えた1つのチームがやってくる。

「コナミ、それに…鬼柳! どうしてここに…」

「遊星!」

それは遊星が結成したチーム5D'sのメンバーたちだった。

「俺も参加することにしたんだ、このWRGPにな！」

「マジか! 強敵が増えちゃったな」

「ふん…そうではなくては面白くない」

「海野さん…あなたもメンバーなのね」

「そうですわ。もし当たることになったらお手柔らかにお願いします」

「ねー、コナミ達のチームの名前は何？」

龍亞が興味津々といった様子で聞いてくる。それに対して鬼柳は自信満々に答えた。

「俺たちはチーム『ネオサティスフアクション』! 俺たちのデュエルで満足させてやるぜ!」

「チーム…」

「ネオサティスフアクション…」

アキと龍可がなんとも言えない表情になり、幸子も自分は関係ないと言わんばかりに目をそらす。

「なるほど、鬼柳らしいな。予選では当たらないみたいだから本選で

戦うのを楽しみにしている」

「おう、俺も楽しみにしてるぜ。お前らとのデュエルを！」

ネオサティスフアクションのプラクティスの時間が迫っていたため彼らとはここで別れた。

そして彼らはチューンアップしたDホイールのファイリングを確かめるべく、コースを走る。

「いい感じだな。パワーが今までと段違いだ」

「それに安定感が全然違うぜ。どんだけスピードを出しても倒れる気がしねえ！」

「ふふ…わたくしに感謝なさい」

コナミや鬼柳のDホイールはジャンクパーツを組み合わせて作られたものなのでエンジンの性能もあまり良くなかったが、今回の補強によって馬力と安定感を増すことに成功していた。第一レーンを回ったものが先攻を取れる以外にもWRGPではルールによりオートパイロット機能は不採用であり、マニュアルでの走行が必要となるためこういった補強はかなり大事となってくる。

《チームネオサティスフアクション。まもなくプラクティス終了です》

「だってよ。この周回でコースを降りるぜ幸子、鬼柳！」

「分かりましたわ」

「いや、次のチームだってそんな早くはこねえだろ！俺はもう1周してくるぜ！」

コナミ達が減速していくのに対し、鬼柳は逆にスピードを上げていってしまう。

「ちよ…ちよつと鬼柳！」

「勝手なことをしてくれませわね…」

(ニコ…ウエスト。俺はあいつらに生き様を見せてやるためにこのDホイールのパワーを使いこなしてみせる！)

どんどん加速していく鬼柳のDホイール、その先にいたのはスタート地点から出ようとしていたチームユニコーンのDホイーラー、ブレオだった。

「…!?や、やべえ…！」

「…！」

慌ててブレーキをかけて衝突を回避しようとするも加速したDホイールとスタートしたばかりで加速ができていないDホイールでは避けようもなく、ぶつかってしまった。そのままバランスを崩したブレオはクラッシュしてしまい、Dホイールも破損してしまう。

「大丈夫か、ブレオ！」

彼のチームメンバー、アンドレが心配して駆けつけてくる。

「ああ：俺は大丈夫だ。だがDホイールが…」

「なんてことだ…」

彼らの目線の先には壊れてしまったDホイール、容易には修復できないだろう。チームユニコーン最後のメンバー、ジャンも駆けつけ鬼柳を問い詰める。

「おい、お前！どうゆうつもりだ！」

「い、いや…すまねえ。わざとじゃねえんだ」

「信じられるかそんなもの！」

コナミと幸子の2人もその場に駆けつけ、場を収めようとする。

「ま、待ちなさい。わざとではないと言っているでしょう！」

幸子が鬼柳とジャンの間に割って入り、ジャンを落ち着かせようとする。

「どうだかな。大体今は俺たちのプラクティス時間だ。こいつが走っていたこと自体がおかしいだろ」

「それは…その通りですわ」

非の打ち所がない正論に押され幸子も押し黙ってしまう。

「本当にすまない…。完全に俺たちが悪い。言い訳は出来ねえ」

コナミも彼らの仲裁へと入っていく。

「ふん、アトランティス大会を制覇したあたりからそうやって俺たちを潰そうとしたチームは増えてきた。運営委員会に言ってお前らの出場を取り消してやる！」

「やめろジャン！」

興奮したジャンをアンドレが抑えた。

「そんなことをして予選を勝ち抜いても意味はないだろ」

「予選…？」

「あつ…！もしかしてあなた達はチームユニコーン…！」

「俺たちのことを知っていてくれて光栄ですよ。お嬢さん」

幸いにも怪我がなかったブレオがヘルメットを外して顔を見せる。

「俺はアンドレ。今クラツシユしたのがブレオ。で、こっちのイラつ  
いてるのがジャンだ」

「…ふん！」

「さつきは本当にすまねえ…！怪我はねえか？」

「ああ、大丈夫だ。いい突っ込みだったぜ」

「はは…冗談がきついぜ。それとそっちのDホイールは大丈夫…じや  
なさそうだな」

「大丈夫だ。俺たちはスポンサーもついでるしスペアならいくらでも  
ある」

「さすがチームユニコーンですわね…」

「だが弁償もなしというのはさすがに悪いな…」

「そうか？なら、こうしよう。弁償の代わりに俺たちとデュエルしな  
いか？今は俺たちのプラクティスの時間、それをどう使うかは俺たち  
の自由だしな」

「やめとけよアンドレ。こいつらとやるだけ時間の無駄だ」

「3人でやる時間は確かにないな…。なら俺と…ヘルメットの下に赤  
帽子を被っている君とでデュエルしないか？」

「俺？まあ…それでキャラにしてくれるっていうなら俺はいいけど  
…」

「なら決まりだ。早速始めよう」

破損したDホイールを片付け、2人はDホイールに乗って横並びに  
なる。鬼柳と幸子、ジャンとブレオはそれぞれスタンドで彼らを見  
守っていた。

「これで第一段階は成功だな…。派手に転ぶのも楽しやないぜ」

ブレオは背をさすりながら愚痴をこぼす。

「悪いなブレオ。だがおかげで奴らは警戒なしに俺たちの提案したら

イディングデュエルに乗ってくれた」

「昨日も言ったがそんなに気にする必要があるのか？あのチームは無名のチームじゃないか」

「確かにあのチームは無名だ。だが、俺はあのチームを侮るのは危険だと思うね」

遠くでコナミを見守っている鬼柳と幸子に目を向けながらジャンは語りだす。

「まず鬼柳京介。インフェルニティという手札0という厳しい条件下でのみ発動出来る強力な効果で相手を追い詰める。ペースを握られればまずいことになるだろう」

「ああ、俺の記憶にもあるぜ。手札0なんて普通にデュエルしてれば絶望的な状況だつてのにな」

「それに海野幸子：彼女はあのデュエルアカデミアで好成績を残している。水属性が軸で切り札のシーラカンスからの大量展開は俺たちですら押し切られる可能性が高い」

「なるほど。舐めてかかったら痛い目を見ていたかもしれねえな」

「そしてコナミ…。こいつはデータが少ないが…」

「俺の記憶にあるあいつのデータではジェネクスモンスター、そして通常モンスターを巧みに使った戦術が多いが…悪く言えば統一性のないデッキを使っているな」

「だが統一性が無いというのは時として厄介だ。先ほどの2人に比べて対策が立てにくいことこの上ない。…だからアンドレにこのデュエルで奴の手の内をさらけ出させてもらおうのさ」

「なるほどな」

「そしてアンドレはあのデッキを使う…。ふふ…もう予選に向けての真剣勝負は既に始まっているのだよ」

10秒のカウントダウンが過ぎた後、彼らは一斉にスタートし先攻を取りに行く。わずかだがコナミの方が先に飛び出していた。

「悪くないエンジンを使っているな…だが」

するとバランスを崩したのかアンドレのDホイールがコナミの方に寄っていく。



「…つとー！」

コナミはとつさに大きく避け衝突を回避した。

「アンドレにはデツキを印象付けるために先攻を取るように言っている。そしてコナミは先ほどの鬼柳の衝突が頭に入っているからその分衝突に神経質になっているはずだ」

「ここまではジャンの計算通りだな」

このロスが響きアンドレに先攻を取られてしまう。

「「デュエル！」」

こうしてコナミはチームユニコーンと予選前にライディングデュエルすることになったのだった。

カードプレイングにスキがあるぜ

「「デュエル！」」

第一レーンを先に回ったアンドレが先攻となり、コナミのことを探るために手を打つ。

「俺のターン、ドロ。俺は素早いモモンガを攻撃表示で召喚する。カードを1枚伏せてターンエンド。さあ、君のターンだ」

モモンガが前脚から後脚にかけて張られた飛膜を広げ、風を利用して滑空によりフィールドに降り立った。

素早いモモンガ 攻撃力1000

アンドレ LP4000

フィールド 『素早いモモンガ』（攻撃表示）

セット1

手札4

スピードカウンター

sc0

「よっし…パワーアップしたこのDホイールでの初ライディングだ！  
気合いれていくぜ、ドロ！俺はUFOタートルを召喚！」

円盤から亀が顔を出して相手の様子をうかがっている。

UFOタートル 攻撃力1400

コナミ sc0↓1 アンドレ sc0↓1

「バトルだ！UFOタートルで素早いモモンガに攻撃！」

亀は手足と顔を円盤の中に引っ込め、回転しながらモモンガへとぶつかった。

アンドレ LP4000↓3600

「よし！先制パンチを食らわしてやったぜ！」

「ふっ…だけど俺は素早いモモンガの効果を発動する！このモンスターが戦闘で破壊され墓地へと送られた時、ライフを1000回復しデッキから同名モンスターを2体まで裏側守備表示で呼び出すことができる！」

「なんだと!?!」

モモンガがやられる寸前に仲間へと合図を送り、2体のモモンガが

駆けつけてきた。

素早いモモンガ×2 裏側守備表示

アンドレ LP3600↓4600

「迂闊な攻撃だったな。カードプレイングにスキがあるぜ」

「くっ…ターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『UFOタートル』（攻撃表示）

セツト0

手札5

sc1

「俺のターン…俺はおとぼけオポッサムを召喚！」

腹に子供を育てるための袋を持った茶色の毛で体を囲っている有袋類が怯えながら出てくる。

おとぼけオポッサム 攻撃力800

コナミ sc1↓2 アンドレ sc1↓2

「おとぼけオポッサムの効果を発動！このカードより攻撃力の高いモンスターが相手フィールドに表側表示で存在する場合フィールドにいるこのカードを破壊できる！フェイク・ダイ！」

「自分で自分のモンスターを破壊だど!？」

「アンドレめ…早速あのコンボで仕掛ける気か」

オポッサムは死んだふりをしてフィールドから消え去った。

「そして俺は手札の森の番人グリーン・バブーンの効果を発動する！自分フィールドの獣族モンスターが効果で破壊され墓地へ送られた時1000ポイントのライフを払い、手札か墓地からこいつを特殊召喚する事が出来る！」

木槌を持った巨大な猿がゆっくりとフィールドに歩いてきた。

森の番人グリーン・バブーン 攻撃力2600

アンドレ LP4600↓3600

「一気に大型モンスターに繋がりましたわね…」

「あいつのデッキは速攻パワーデッキか！」

いきなり最上級モンスターを呼び出したタクティクスにスタンド

で見ていた2人も驚きを隠せなかった。

「2体のモモンガを攻撃表示へと変更！」

モモンガも攻撃態勢となり3体のモンスターがコナミへと狙いを定める。

「バトル！グリーン・バブーンでUFOタートルへと攻撃！」

猿が木槌を力任せにふるうと円盤の中に入っていた亀が遠くへと飛ばされてしまった。

コナミ LP4000→2800

「うおっ…だがUFOタートルの効果を発動するぜ！こいつが戦闘で破壊されて墓地に行ったことでデツキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚できる！来い、ギガテック・ウルフ！」

残ったUFOが下部から出した光線から鉄で作られた狼が出てきた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「なら俺はこれでターンエンドだ。まだまだ楽しませてくれよ？」

アンドレ LP3600

フィールド 『素早いモモンガ』×2 (攻撃表示) 『森の番人グリーン・バブーン』(攻撃表示)

セット1

手札 3

sc2

「俺のターン、ドロー！」

コナミ sc2↓3 アンドレ sc2↓3

「…俺はギガテック・ウルフで素早いモモンガへ攻撃！」

「へえ…」

鉄で作られた狼がモモンガへと噛みつき、破壊した。

アンドレ LP3600→3400

「なら俺はモモンガが戦闘によって破壊されたことでライフを1000回復させてもらおうよ」

アンドレ LP3400→4400

「何をやっていますの庶民！わざわざ相手のライフを回復させてしま  
うなど！」

「いや…これしかねえ。ただでさえ攻撃力の高いグリーン・バブーン  
がいるのにモンスターがあんなに居たら耐えられねえからな」

「む…確かにそうです」

「そして俺はギガテック・ウルフをリリースしてモンスターをアドバ  
ンスセット！」

「「!?」」

狼がどこかへと走り去っていくと代わりにモンスターが見えない  
状態でセットされる。

(アドバンスセット…守備力の高いモンスターで攻撃を防ぐ算段か  
?)

「カードを2枚伏せて…ターンエンドだ」

コナミ LP2800

フィールド 裏側守備表示1

セット2

手札3

sc3

「俺のターン、ドロロー。このスタンバイフェイズに自身の効果で破壊  
されたオポツサムは戻ってくる！」

死んだふりをしていたオポツサムは様子を伺いながらこっそりと  
フィールドに帰ってきた。

おとぼけオポツサム 攻撃力800

コナミ sc3↓4 アンドレ sc3↓4

「…よし、ここは警戒するか。俺はオポツサムとグリーン・バブーンを  
リリースし百獣王<sup>アニマルキング</sup> ベヒーモスをアドバンス召喚！」

「グリーン・バブーンをリリースした…!?!」

紫がかった巨大な肉食獣が現れた。口からは牙が前脚と後脚には  
爪が敵を切り裂くには十分な形で整えられている。

百獣王 ベヒーモス 攻撃力2700

「さらにベヒーモスはリリースしたモンスターの数だけ墓地の獣族モ

ンスターを手札に戻すよ。俺はオポッサムとモモンガを手札に！」  
ベヒーモスの雄叫びとともに2枚のカードがアンドレの手に戻った。

「そして俺はs p—ハイスピード・クラッシュを発動！俺のs cが2個以上の時に発動でき、俺と相手のフィールドのカードを1枚ずつ破壊する！」

「……！」

「俺が破壊するのはモモンガと……こっちから見て右のセットカードだ！」

2つの竜巻がそれぞれアンドレとコナミのフィールドを襲い、1枚ずつカードを破壊していく。

「…破壊したのはトラップカード、自由解放か。なるほどね」

「ぐ…やべえ」

「ああ…！なんてこと！」

「ど、どうしたんだ？」

「トラップカード、自由解放は自分のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動出来るカード。その効果はフィールドのモンスター2体を選択してデッキに戻すというものですわ」

「てことは…アンドレが普通に突っ込んでればグリーン・バブーンがデッキに戻って面倒くせえ復活効果も封じられたのか！」

「あのアンドレという男…只者ではありませんわね」

ジャンたちもこの行動に思うところがあり感想を呟いていた。

「おおっと…危ねえ危ねえ。ここで逆転の策を仕込んでいたなんてな」

「ふふ…だがアンドレは天性のカードプレイングセンスを持っている。危険をいち早く察知し、的確に対処する。それがあいつのデュエルだ」

「全く…あいつが敵じゃなくて良かったぜ」

「それは俺も同意見だ」

「さらに俺は獣族のモモンガが効果で破壊されたことで墓地のグリーン・バブーンの効果を発動し、1000ポイントのライフと引き換え

に特殊召喚する！」

再び木槌を握った猿がフィールドに歩いて戻ってきた。

森の番人グリーン・バブーン 攻撃力2600

アンドレ LP4400↓3400

「う…」

「自由解放を使うつもりだったということは少なくともグリーン・バブーンでそのモンスターは戦闘破壊できるということ！バトルだ！グリーン・バブーンでセットモンスターを攻撃！」

猿がその巨体を存分に使い、セットモンスターに飛びかかった。

「俺が伏せていたのはタン・ツイスターだ！」

タン・ツイスター 守備力300

赤い風船のようなモンスターが現れるもすぐに木槌で破壊されてしまう。

「アドバンス召喚したタン・ツイスターがフィールドから墓地に送られた時、こいつを除外することで俺は2枚のカードをドロウする！…つとー！」

破壊された衝撃で風が巻き起こり、コナミのデッキの上から2枚のカードが飛ばされ、慌ててコナミはキャッチした。

「だが、まだベヒーモスの攻撃が残っているぞ！俺はベヒーモスでコナミへとダイレクトアタック！」

ベヒーモスはコナミへと地響きを鳴らしながら近づいていき、ツメで切り裂いた。

「ぐおっ…！」

コナミ LP2800↓100

Dホイールに表示されているコナミのライフが赤の文字で表示された。ライフがライディングデュエルでのデッドラインと呼ばれる800以下の数値になるとそう表示されてしまう。800…つまりスピード・ワールド2のscを4つ使うことで発動することが出来るバーン効果のデッドラインである。

「終わりだコナミ。俺はスピード・ワールド2の効果を発動！scを4つ取り除くことで手札のsp1枚につき800のダメージを与え

る。俺の手札には1枚！」

アンドレが後ろ向き状態で走行を始め、彼のDホイールについている角からコナミへ衝撃波が放たれた。

「そうはさせるか！ 永続トラップ、女神の加護発動！ 俺はライフを3000回復する。その代わりにこのカードがフィールドから離れれば俺は3000のダメージを受ける……！」

コナミの発動したトラップから光が降り注がれ、コナミのライフを回復させる。しかしその直後にアンドレのDホイールから放たれた衝撃波が直撃してしまう。

コナミ LP1000↓3100↓2300

「はあ…はあ…。危ねえ」

「首の皮1枚でかわしたね。俺はこれでターンエンド！」

アンドレ LP3400

フィールド 『百獣王 ベヒーモス』(攻撃表示) 『森の番人グリーン・バブーン』(攻撃表示)

セット1

手札4

sc0

「俺のターン！」

コナミ sc4↓5 アンドレ sc0↓1

「よし…手札からspサモン・スピダーを発動！ scが4以上の時、手札のレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！ だけどこの効果で呼んだモンスターは攻撃できねえ！ 俺は手札からジェネクス・ブラストを特殊召喚だ！」

扇風機を内蔵したロボットがフィールドに現れたかと思うとコナミのデッキのカードを1枚吹き飛ばす。

ジェネクス・ブラスト 攻撃力1600

「ジェネクス・ブラストが特殊召喚に成功した時、デッキからジェネクスと名のついた閻属性モンスターを手札に加えることが出来る！ 俺はジェネクス・コントローラーを手札に！」

吹き飛ばされたカードがコナミの手札へと吸い込まれるように差



し込まれた。

「それでジエネクス・コントローラーを召喚してシンクロを狙う気かい？」

「いいや、違うぜ！ジエネクス・ブラストをリリースして偉大魔獣ガーゼットをアドバンス召喚！」

2本の角が生えた小さな悪魔がフィールドに現れる。

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力0

「偉大魔獣ガーゼットの攻撃力はリリースしたモンスター1体の元々の攻撃力の倍になる！1600の倍…3200だ！」

「なるほど。パワーにはパワーで対抗してくるか」

今にも吹き飛ばされてしまいそうなほど小さな悪魔が巨大化していき、アンドレのモンスターと比較しても遜色ないほどの大きさとなる。

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力0↓3200

「バトルだ！ガーゼットでベヒーモスに攻撃！」

悪魔が手を天にかざすとベヒーモスを雷が撃ち抜いた。

アンドレ LP3400↓2900

「うっ…やるね」

「ふう…。カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP2300

フィールド 『偉大魔獣ガーゼット』（攻撃表示）

セット2 『女神の加護』

手札3

sc5

「俺のターン！」

コナミ sc5↓6 アンドレ sc1↓2

「俺は手札の獣族モンスター、おとぼけオポッサムを墓地に送ることでチューナーモンスター、虚栄の大猿を特殊召喚する！」

フィールドに現れたのは巨大な大猿…かと思いきやそれは巨大な影。小さな猿が自分を強く見せようと大きな影で相手をビビらせようとしていた。

虚栄の大猿 攻撃力1200

「虚栄の大猿は特殊召喚のために墓地へと送った獣族モンスターのレベルを自分のレベルへと足すことが出来る！オポッサムのレベルは2！よって虚栄の大猿のレベルは5から7へ！」

「レベル7のチューナーだって……！」

猿の影はオポッサムの分だけ伸びていき、さらに巨大な影となった。

「そして俺は素早いモモンガを召喚！そしてレベル2の素早いモモンガにレベル7となった虚栄の大猿をチューニング！野生の血流交わりしとき、大地を切り裂くパワーが目覚める！咆哮せよ！シンクロ召喚！大自然の力、ナチュル・ガオドレイク！」

鬣が花冠のようになって顔を囲っているライオンが出現した。

ナチュル・ガオドレイク 攻撃力3000

「攻撃力3000のシンクロモンスターか……！だが、攻撃力はガーゼットのほうが上だぜ！」

「忘れたのかい？俺の手札にはs pがあることを！俺はs pースピード・エナジーを発動！s cが2以上の時、エンドフェイズまで俺のs c1つにつき俺のモンスター1体の攻撃力は2000アップする！この効果でガオドレイクの攻撃力を4000アップさせる！」

ライオンの後方から風が吹き荒れ、追い風となる。それはコナミとしては向かい風とも言える。

ナチュル・ガオドレイク 攻撃力3000↓3400

「ガーゼットの攻撃力をさらに上回るのかよ……!?なんてパワーデツキなんだ……！」

「ガオドレイクでガーゼットを倒し、グリーン・バブーンで攻撃すればジ・エンドさ。バトル！ガオドレイクでガーゼットに攻撃！」

風に乗ったライオンがその勢いのまま悪魔の体を引き裂こうとする。

「くっ……永続トラップ、死力のタッグ・チェンジ発動！俺の表側攻撃表示モンスターによって発生した俺への戦闘ダメージを0にすることで手札のレベル4以下の戦士族モンスターを特殊召喚する！」

「だがガーゼットの破壊は免れない！」

ライオンが勢いよく切り裂こうとするも、勢いを抑えきれずそのまま押しつぶしてしまう。

「死力のタッグ・チェンジの効果でダメージは0になり手札のカード・ブロッカーを特殊召喚する！」

ノックアウトされた悪魔の代わりに小さな騎士が盾を構えて何かを守るように立ちふさがった。

カード・ブロッカー 守備力400

「とつさにダメージを防いで壁モンスターを出したか。だがモンスターがいなくなる度に反撃の目も無くなっていくぞ！」

「それはどうかな。俺はもう一枚のトラップを発動！時の機械・タイム・マシーン！俺のモンスターが戦闘で破壊された時、そのモンスターを同じ表示形式でフィールドに呼び戻す！」

先ほどノックアウトされたはずの悪魔が鉄の扉を開いてこちらへ戻ってくる。しかし大きさは最初に現れた時のようになり小さい。

偉大魔獣ガーゼット 攻撃力0

「焦ったな。1度場を離れたガーゼットの攻撃力は元々の攻撃力である0に戻っている！グリーン・バブーンでガーゼットへと攻撃！」

巨大な猿が豆粒程度の悪魔を木槌で押しつぶそうとする。

「させるか！カード・ブロッカーの効果発動！攻撃対象をこいつへと変更する！さらにこいつが攻撃対象になったことでデッキの上から3枚のカードを墓地へ送り、守備力を1500アップさせるぜ！」

「何だって……！」

小さくなった悪魔が押しつぶされそうになった寸前のところで騎士が割って入り、少し小さくなった盾で受け止めようとする。

カード・ブロッカー 守備力400↓1900

だが猿の力はすさまじく、盾ごと騎士を飛ばしてしまった。

「カード・ブロッカーは守備表示、俺にダメージはないぜ！」

「死力のタッグ・チェンジを発動した時点でこの展開まで予測していたわけか。悪かったね、さっきの発言は訂正するよ。俺はこれでターンエンドだ」

風が鳴り止み、ライオンへの追い風が止まった。

ナチュル・ガオドレイク 攻撃力3400↓3000

アンドレ LP2900

フィールド 『森の番人グリーン・バブーン』（攻撃表示） 『ナチュル・ガオドレイク』（攻撃表示）

セツト1

手札2

「よし：ガーゼットが場に残った！俺のターン！」

コナミ sc6↓7 アンドレ sc2↓3

（ドローカードはハネワタか。手札から墓地へ捨てることで捨てたターンは俺への効果ダメージを0に出来る。次のターンにスピード・ワールド2の効果でダメージを食らいそうになってもかわすことは出来るな）

「コナミ！先ほどの防御は見事だったがガーゼットの攻撃力はやはり0！守備表示へと変更しても守備力も0だ。壁にもならないんじゃないか？」

「甘いぜ！俺はチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚！」

頭の左右にアンテナがついたロボットが現れた。アンドレのフィールドの巨大なモンスターにびつくりしたのか目を丸くしている。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「先ほど加えたカード：しまったな。ガーゼットの攻撃力はフェイクで狙いはシンクロ召喚か！」

「今更気付いても遅いぜ！レベル6のガーゼットにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアーン！」

ジェネクス・コントローラーの不思議な電波によってガーゼットの姿が変わっていき、蒸気機関車へと変形した。蒸気を制御出来なくなる前に中枢コアへとジェネクス・コントローラーが装填され、正常に

動くことができるようになった。

レアル・ジエネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「行くぜ！クロキシアンの効果発動！このモンスターのシンクロに成功した時、相手フィールドで1番レベルの高いモンスターのコントロールを貰う！お前のフィールドで1番レベルが高いのはレベル9のガオドレイク！」

「くっ……こちらの高攻撃力モンスターを奪う戦術か。中々スマートじゃないか」

蒸気機関車が汽笛を鳴らすとライオンがつかれてコナミのフィールドへと来てしまう。

「バトルだ！ガオドレイクでグリーン・バブーンを攻撃！」

ライオンは自らの力を誇示するべくグリーン・バブーンとぶつかり合った。だがグリーン・バブーンの方が先に限界が来てしまいその場に倒れてしまう。

アンドレ LP2900↓2500

「あとはクロキシアンのダイレクトアタックで庶民の勝ちですわ！」

「やったなコナミ！」

「……」

コナミには1つ不安があった。それはアンドレが伏せている1枚のカードにある。

「あれは1ターン目からずっと伏せられている。何が伏せられているか何て分からねえが、このまま攻撃していいのか？？相手が強いことなんて俺にもヒシヒシと伝わってくる。そんな奴が1ターン目から伏せてるカードが腐ってて発動出来ないなんてことがあるのか？？」

攻撃が通ればコナミの勝ち、だが最後の決断を下せないでいた。そんなコナミに無情にも機械的な音声が続いてくる。

《チームユニコーン。まもなくプラクティス終了です》

「な……！」

「残念だが俺たちはプラクティスの時間を使ってデュエルをしている。ここでデュエルは終了だ」

「マジか……いや仕方ねえか」

コナミ達はレーンから降りて次のチームに邪魔にならないところでDホイールを停車する。

「あ…。そういえば弁償の話は俺が勝ったらってことだったな…」

「いや、いいよ。君からは弁償代以上のものを貰ったからさ」

「え？」

「予選で戦うのを楽しみにしてるよ。アディオス！」

スタンドから降りてきたジャン達と合流したアンドレはコナミの前から去って行った。コナミも鬼柳達に合流しようとスタンドへと向かっていく。

「とにかくあのパワーデッキは厄介だ…。予選で当たるなら鬼柳達と話して対策を取らねえとな」

アンドレのパワーデッキを対策するため、コナミはスタンドへ走っていくのだった。

対してチームユニコーンはジャンが演技のためにクラッシュユまでしてくれたブレオとコナミのデュエルデータを回収してくれたアンドレをねぎらっていた。

「2人ともご苦労だった。おかげでコナミの実践データを回収することができた。…だが、それ以上に」

「あいつらアンドレのパワーデッキを対策してくるぜ。あんなにアンドレが見せつけたからな」

「ならばジャンの作戦次第か」

「ふっ…任せておけ。アンドレの天才的カードプレイングセンス。そしてブレオの人並み外れた記憶力」

「そしてジャンの緻密な作戦。これで俺たちチームユニコーンは勝ち進んできたんだ」

「とりあえず試合までは俺は2人に任せるしかない。後は頼んだぜ」

「もちろんだ。…ところで1つ聞いてもいいか？」

「なんだ？」

ジャンが立ち止まり、それにつられて2人も立ち止まった。そしてジャンはアンドレが運んでいるDホイールのデュエルディスクにセットされている1枚のカードを指す。

「これはデュエリストとしての単純な興味として聞かせてもらう。最後の伏せカードは何だったのか…?」

「ああ…コナミもその伏せカードについて大いに悩んでいたようだな」

「これかい?」

アンドレが伏せられてた1枚のカードを取り出し2人へと見せる。

「俺が伏せていたのはトラップカード、デイメンション・ウォール。相手が攻撃してきた時に発動でき、その戦闘で俺が受けるダメージは代わりに相手が受けるのさ」

「つまり…あの場でクロキシアンでアンドレが直接攻撃されていたら」

「攻撃力2500のクロキシアンの攻撃がコナミへと直撃し、残りライフ2300のコナミはやられていたってわけか」

「ま…攻撃してくれたららの話さ」

そう言ってアンドレはカードをデッキにしまい、Dホイールを押して前に歩を進める。

「なるほど…。俺は今改めて思ったよ、無名だからと油断しなくて良かったとな」

「そういうのは勝った後さ」

そうして彼らは再び歩き出した。

### 第3章 WRGP開幕

すでにバトルは始まっているがね

アンドレとコナミのデュエルから数日経ち、ついにWRGPが開幕した。フォーチュンカップ以来の大きな大会ということもありスタンドはほとんど満席で、WRGPにかかっている期待がどれほどものかを如実に表している。

Aブロックの第一試合が終わり興奮冷め止まぬ中、続いてBブロックの第一試合が開始される。チームネオサティスファクションvsチームユニコーン。彼らは既にピットへと入っており、後は<sup>ファーストホイーラー</sup>第一走者がスタート地点の配置に着けば試合が開始される。

下馬評では当然優勝候補と名高いユニコーンが上だったが、ネオサティスファクションのスタンドの応援の大きさはそれほど負けていなかった。

「幸子お嬢様、ご武運を祈っておりますぞー！」

「我が海野応援団がついております！」

「フレー！フレー！幸子様！」

スタンドに響く和太鼓の音と共に海野財閥が幸子のために特別に編成した海野応援団の声援が届き、幸子は軽くスタンドへ手を振った。

「ってほとんど幸子の応援じゃねえか！」

「仕方ないじゃないですか。わたくしたちのチームはまだ無名なのですから」

「大丈夫だ。これからサティスファクションタウンと共にこのチームは有名になる。この鬼柳京介の手でな！」

緊張もなくいつも通りの雰囲気です話す彼らの前に逆側のピットからジャンが近づいてくる。

「なんか用か？」

「勘違いするな。試合前の挨拶に來ただけだ」

「今日はお互い全力を尽くしましょう。勝つのはわたくしたちのチー



ムですけどね」

「もちろんだ。すでにバトルは始まっているがね」

(…?…こいつこんな口調だったか?もっと荒っぽい感じだったような…)

挨拶をすませたジャンは自分のピットへと戻っていく。するとスタジアム中にMCの実況が聞こえてきた。

「さあ!両チームの挨拶が終わったところでいよいよ本日の2試合目、チームユニコーン対チームネオサティスフアクションの試合が始まるぞ!アトランティス大会で優勝し、ノリに乗っているユニコーンにネオサティスフアクションはどれだけ食らいつけるのか?今から楽しみになってきたぞ!早速両チームともファーストホイーラーを出してくれ!」

どちらのファーストホイーラーが先に相手を倒すか、WRGPではこれが大事となってくる。何故なら先にやられてしまえばセカンドホイーラーがラストホイーラーのどちらかは少なくとも2人抜きをしなければ勝利はないからだ。だからこそファーストホイーラーの選択はそのままチームの勝利に関わってくると言っても過言ではない。そんな中、彼らがファーストホイーラーとして選んだのは…。

「では…作戦通り。わたくしがファーストホイーラーとして行ってきますわ」

「ああ。相手は絶対アンドレがファーストホイーラーだ。あのパワーデッキに立ち向かえるのはお前しかいねえ!」

「頼んだぜ幸子!」

ユニコーンの実績を調べたところ、これまでの100戦全てをアンドレがファーストホイーラーとして3人抜きで勝ち抜いてきていることが分かっていた。ならば同じくパワーデッキを扱う幸子をファーストホイーラーとして出すことでアンドレに圧倒されないようにするというのが今回のネオサティスフアクションの作戦だった。

「ネオサティスフアクションのファーストホイーラーは海野幸子!なんと彼女はデュエルアカデミアの学生!どんなデュエルを見せてくれるか楽しみだ!それに対してユニコーンのファーストホイーラー

はもちろんアンドレだ！またしても3人抜きでユニコーンを勝利へ導いてしまうのか!？」

既に2人はスタート地点へと並び、開始のカウントダウンを待っている。

「やっぱりあいつら海野をファーストホイラーにしてきたな」

「ああ…これでこの勝負の半分は決したようなものだ」

「2人の準備が出来たところでフィールドにはスピード・ワールド2が発動されるぞ！これによりデュエルはスピードによって支配される！発動出来る魔法カードはs pのみ！スピード・ワールド2もうまく使えば戦況を左右できるほどの強力な効果があるぞ！」

MCの観客へ向けた解説が終わると2人の前に出てきたスクリーンが10秒のカウントダウンを行う。そして最後のカウントダウンが点滅した瞬間、2つのDホイールがほぼ同時に走り出した。

「この第一コーナーをとった方が先攻だ！どうやらここから見る限りではほぼ互角のようだ！果たしてどちらが先攻になるのか!？」

「海野財閥のエンジンを舐めないことね！」

幸子のDホイールが加速していき、アンドレのDホイールより前に出る。

（確かにいいエンジンだ…。だがジャンのシナリオで俺が取るべきなのは…先攻じゃない）

「先攻をとったのは海野選手！」

「「デュエル！」」

互いに5枚のカードを引き、Dホイールについているホルダーへとカードを置いた。

「わたくしのターン、ドロースワ！わたくしは手札からグリズリーマザーを召喚します！」

青色の毛皮に身を包んだヒグマが獲物を探るようにフィールドを見渡した。

グリズリマザー 攻撃力1400

「カードを1枚伏せて…これでターンエンドしますわ！」

幸子 LP4000

フィールド 『グリズリマザー』（攻撃表示）

セツト1

手札4

スピードカウンター

S C O

「さてと…作戦通りに行くとしよう。俺のターン！」

幸子 S C O ↓ 1    アンドレス C O ↓ 1

「手札のモノケロースは俺の手札の魔法カードを除外することで特殊召喚できる！俺は S P ジ・エンド・オブ・ストームを除外することでこのモンスターを特殊召喚する！」

頭に黄色いツノを1本生やした獣がフィールドに降り立つ。

モノケロース    攻撃力1000

「さらに手札からチューナーモンスター、一角獣の使い魔を召喚させてもらうよ」

ヤギのような耳と一本のツノを生やした悪魔がフィールドに並び立った。

一角獣の使い魔    攻撃力0

「いきなりシンクロ召喚で攻めてきますか…。やはりあの速攻パワーデツキは厄介ですわね」

「俺はレベル3のモノケロースにレベル2の一角獣の使い魔をチューニング！天駆ける雷よ、猛き烈風と交わりて、幻想の世界より姿を現せ！シンクロ召喚！いななけ、サンダー・ユニコーン！」

現れたのは馬のようなモンスター。青い胴体にすらりと伸びた4本足、黄色いたてがみとジグザグと雷を連想させるようなツノが目に入ってくる。

サンダー・ユニコーン    攻撃力2200

「さらにモノケロースの効果を発動！このカードと共にシンクロ素材となった獣族チューナーを呼び戻すことができる！俺の場に戻ってこい、一角獣の使い魔！」

ユニコーンのたてがみに隠れていた悪魔が小走りでユニコーンの隣に立つ。

一角獣の使い魔    守備力1000

「さらにサンダー・ユニコーンの効果を発動！このカード以外のモンスターは攻撃をこのターン放棄し、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで俺のフィールド上のモンスターの数×500ポイントダウンする！サンダー・スクレイプ！」

「何ですって…！」

ユニコーンのツノから放たれた電撃がグリズリマザーを弱体化させていく。

グリズリマザー 攻撃力1400↓400

「バトルだ！サンダー・ユニコーンでグリズリマザーに攻撃！サンダー・スピアー！」

4本の足を器用に動かし敵へ近づいていくと、そのツノで敵を貫いた。

幸子 LP4000↓2200

「攻撃が通ったぞー！先制はアンドレだー！」

「くうっ…！ですが戦闘破壊されたグリズリマザーの効果を発動！このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の水属性モンスターを特殊召喚できますわ！来なさい、ヒゲアンコウ！」

魚を誘うためのランプがヒゲのようになっていいる魚がフィールドで跳ねる。

ヒゲアンコウ 攻撃力1500

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

アンドレ LP4000

フィールド 『サンダー・ユニコーン』（攻撃表示） 『一角獣の使い魔』（守備表示）

セット2

手札1

sc1

「わたくしのターン！」

幸子 sc1↓2 アンドレ sc1↓2

「痛手を貰いましたが…ここからが本番ですわ！ヒゲアンコウは水属

性モンスターをアドバンス召喚する時に2体分のリリース素材となりますわ。ヒゲアンコウをリリースして超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚！」

ヒゲアンコウの養分を食らいながら現れたのはサンダー・ユニコーンの大きさをゆうに超える巨大なシーラカンス。シーラカンスが現れた影響か幸子のフィールドが水蒸気によって包まれる。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「おおつとー！ここで海野選手がアンドレのモンスターを上回る強力なモンスターの召喚に成功したぞー！」

「ですがこのモンスターの真価はここから発揮されますわ！手札1枚をコストにシーラカンスの効果を発動！デツキから任意の数までレベル4以下の魚族モンスターを特殊召喚できますわ。来なさい、キラ・ラブカ、オイスターマイスター、2体の竜宮の白タウナギ！」

シーラカンスが発生させた水の渦から4匹の魚が姿を現した。

キラ・ラブカ 攻撃力700

オイスターマイスター 攻撃力1600

竜宮の白タウナギ×2 攻撃力1700

「よし…幸子のお得意パターンだ！」

「このまま押し切ってやれ！」

だがこの展開を見てアンドレ達チームユニコーンは…笑っていた。

「海野幸子」

「はい？」

「…君の負けだ」

するとフィールドの水蒸気が突然昇華していき、大量の氷の結晶が浮かび上がった。そしてその結晶が次第にシーラカンス達へと落ちていき、5匹の魚へと直撃した。

「一体何が…!？」

「俺はシーラカンスによって5体の水属性モンスターが君のフィールドに呼ばれた時、このトラップカードを発動していたのさ」

「それは…ダイヤモンド・ダスト!？」

「そう…このカードの効果は単純明快。フィールドにいる全ての水属

性モンスターを破壊する」

「…確かその効果には続きがあつたはず」

「さらにこの効果で破壊され、墓地へと送られた水属性モンスター1体につき相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える!」

「わたくしの破壊されたモンスターは5体…あつ!」

「気付いたようだね。君は2500のダメージを食らう!」

太陽に照らされた氷の結晶が光り輝き、その光が幸子のライフを焼き尽くした。

「きゃあああ!」

幸子 LP2200↓0

一瞬の出来事に静まってしまう観客。しかしすぐに起こつた事態を理解すると歓声がわき起こつた。

「な、なんと!チームユニコーンのアンドレ!相手ターンに5体のモンスターを破壊し、2500のダメージを与える離れ技で海野選手をシャットアウトだ!」

「くつ…オイスターマイスターが戦闘以外でフィールドから墓地へと送られた時、オイスタートークンが場に特殊召喚されますわ!」

幸子は最後のあがきでフィールドに小さな魚を一体残した。

オイスタートークン 守備力0

ライフが0になつた幸子は悔しそうにピットへと戻ってくる。

「ドンマイ!後は俺たちに任せとけ!」

「ああ…あいつは俺が倒してやる!」

幸子は腕につけていたネオサティスフアクションのシールをセカンドホイラーの鬼柳に渡す。これはWRGPによって走者が変わる時に交代したことが分かりやすいようにするためのシステムである。さらにコナミがフィールドのカードを移していき、鬼柳の準備が完了した。

「気をつけなさい鬼柳。わたくしの水属性モンスターを対策していた…ということは恐らくわたくし達は敵の作戦にはまっていますわ」

「…そうかもな。だがそんなもの俺の満足で超えてきてやる!」

「ええ、やっつてしまいなさい!」

鬼柳のDホイールがピットから出て行きアンドレに追いつく。

「次は君か。お手柔らかに頼むよ」

「へっ…仲間がやられたんだ。お手柔らかにはいかねえかもな」

「「デュエル！」」

「俺のターン、ドロー！」

鬼柳 sc2↓3 アンドレ sc2↓3

「セカンドホイーラーの鬼柳選手、海野選手の雪辱を果たすことができるか!?!」

「当たり前だ！俺はオイスタートークンをリリースし、インフェルニティ・アーチャーをアドバンス召喚！」

自身の体と同じくらいの大サイズの弓矢を持った弓兵が現れた。

インフェルニティ・アーチャー 攻撃力2000

「ジャンの予想通り、セカンドホイーラーは鬼柳だったな。アンドレにはどんな作戦を指示したんだ？」

「鬼柳のハンドレスコンボは手札を0枚にすることから始まる…が、そうなるには少しラグがある。だが鬼柳はパワーで押し切るタイプのプレイングをしてくるはずだ」

「そうだな。過去のデータから言ってもパワーと度胸で押し切るのが得意のようだぜ」

「だから俺がアンドレに命じた戦術は…手札が0枚になる前に決めることだ。鬼柳のパワーを利用してな」

「なるほど。手札が0枚になる前に決めればあいつは本領を發揮できないからな」

「バトルだ！サンダー・ユニコーンは倒せねえがそっちのチューナーは潰せる！インフェルニティ・アーチャーで一角獣の使い魔に攻撃！」

アーチャーが放った弓はまっすぐ使い魔へと向かっていった。

「俺は一角獣の使い魔の効果を発動！表側守備表示のこのカードが攻撃対象に選択された時、このカードと俺のフィールドのもう1体のモンスターを除外することが出来る！そして相手は攻撃を続行しなくてはならない！」

「馬鹿なの!?そんなことしたら…」

使い魔がユニコーンを連れて異次元へと消えていくと、アーチャーが放った弓がアンドレへ向かう。

「そして鬼柳…君のパワーを君自身が受けるといい!トラップ発動、異次元のバリアーロスト・フォースー!戦闘以外で俺のモンスターがフィールドから離れた場合、相手の攻撃を無効にしてその攻撃力分のダメージを相手に与える!」

「しまった…!」

放たれた弓が異次元の穴へ吸い込まれたかと思うと鬼柳の後ろにもう1つの穴が生まれた。その穴から弓が出てきて鬼柳の背中に突き刺さってしまう。

「あぐっ…!?!」

鬼柳 LP4000↓2000

「くそ…。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

鬼柳 LP2000

フィールド 『インフェルニティ・アーチャー』(攻撃表示)

セット3

手札3

sc3

「ふふ…俺のターン!このスタンバイフェイズに一角獣の使い魔の効果で除外されたモンスターはフィールドに戻ってくる!」

サンダー・ユニコーン 攻撃力2200

一角獣の使い魔 守備力1000

鬼柳 sc3↓4 アンドレ sc3↓4

「行かせてもらうよ…鬼柳京介!俺はモンスターを1体セットし、サンダー・ユニコーンの効果を発動!インフェルニティ・アーチャーの攻撃力はエンドフェイズまで1500ポイントダウンする!」

「くそっ…厄介な効果だぜ!」

インフェルニティ・アーチャー 攻撃力2000↓500

「バトル!サンダー・ユニコーンでインフェルニティ・アーチャーへ攻撃!」



「くっ、伏せているカードを使いたい…」

鬼柳の手札は3枚。インフェルニティを生かす条件は整いきれておらず、伏せカードを使うことが叶わない。

鬼柳 LP2000↓300

「2ターンで鬼柳のライフが300に…!?なんてやつだ！」

「どうか…まずいかもしないですわ。アンドレのscは4…！」

「あ…あいつの手札のカードがspだったら…！」

アンドレは手札のカードを確認する。そして…スピード・ワールドの効果を発動した。

「君をここで倒せないと厄介なことになりそうだからね。使わせてもらうよ！スピード・ワールド2の効果を発動！scを4つ取り除くことで手札のsp1枚につき800ポイントのダメージを与える！俺の手札には1枚！」

アンドレのDホイールにつけられているツノから衝撃波が鬼柳に向かって放たれた。

アンドレ sc4↓0

「うおおおっ!？」

鬼柳 LP300↓0

「な、なんと！さすがは全てのデュエルを3人抜きで制覇してきたアンドレと言うべきなのか！ネオサティスフアクシヨンのセカンドホイラー、鬼柳選手すらもわずか2ターンで倒してしまったー！」

「ふっ…」

アンドレは観客席へと手を振り、ユニコーンを応援してくれているファンへとサービスをやる。

「くう…厳しい状況ですが頼みましたわよ庶民！」

「…あいつらは多分俺たちのことを相当調べてきたんだろうな」

「え？ええ…まあそうでしょうね。このわたくしと鬼柳という実力者にこうもあっさりと勝ってしまったのですから…」

「だけどいくらあいつらでも調べられないことがあったみたいだな」

「…？なんのことですか？」

ざわつく観客席、その原因は鬼柳のDホイールにあった。ライフが

0なのに…彼のDホイールのデュエルモードが切れておらず、走行が続けられていたのである。

「おっと！何が起こっているんだ！コンピュータートラブルかー!?」

「…なんだあのモンスターは…!」

そして鬼柳の傍らには奇妙な木像のモンスターが現れていた。

インフェルニティ・ゼロ 守備力0

「あいつは…一度地獄を見てきた死神ってことさ」

鬼柳は不敵に笑い、アンドレに宣言する。

「今からたつぷり見せてやるぜ…。チームネオサティスフアクションの死神、鬼柳京介の生き様をな!」

彼のデュエルは…まだ続くようだ。

まあドローしてから考えるか

「な、な、何が起こっているんだー！アンドレがスピード・ワールド2の効果を使い、残りライフ300の鬼柳に800のダメージを与えて鬼柳のライフポイントは0になった！なのに鬼柳はデュエルを続行することが出来ているぞー！」

異様な事態にざわめく観客。イカサマかという声も所々から上がっていく中、鬼柳が宣言した。

「俺はアンドレがスピード・ワールド2の効果を発動した時、手札からインフェルニティ・ゼロの効果を発動していた！こいつは相手の効果ダメージによって俺のライフが0になる場合、こいつ以外の手札を全て捨てることで特殊召喚できる！そしてこいつがフィールドにいる限り：俺はライフ0でも敗北にならない！」

「何だって…そんなことがあり得るのか!？」

鬼柳の前に降り立つ所々に目が描かれた木像。その目は不気味にもアンドレを見ているようにも見える。

インフェルニティ・ゼロ 守備力0

「ライフ0でも敗北にならない…!?そんな無茶苦茶な…」

幸子が驚き半分、呆れ半分といった感じで頭を押さえている。

「あれは鬼柳にしか出来ねえだろうな…」

「馬鹿な…。過去のデータでは奴がああのモンスターを使ったというデータは無かったはずだ！」

記憶力に自信があるアンドレが過去のデータを見直すも、さすがにクラッシュタウンでの事件は調べられなかったようでそのデータを見つけることは叶わなかった。

「く…奴のデュエルも日々進化しているというわけか。だがアンドレの有利に変わりはない。それに方が一の時はコナミに当てる予定のオペレーションDを鬼柳にぶつけるようにアンドレには言っている」  
「そしてインフェルニティ・ゼロは戦闘では破壊されない！ただしこれから俺が500のダメージを受けるたびにこいつにデスカウンターが乗っていく。そして3つのデスカウンターが乗った時、こいつ

は破壊される…!」

鬼柳の横に怨霊の魂のようなものが現れ、0という数字が刻まれる。あれに3が刻まれると鬼柳の敗北となってしまう。

「文字通りそいつは命綱ってわけか。だがこのターンでそいつを倒すのは難しそうだ。俺はこのままターンを終了する!」

アンドレ LP4000

フィールド 『サンダー・ユニコーン』（攻撃表示） 『一角獣の使い魔』（守備表示） 裏守備表示1

セット0

手札1

スピードカウンター

sc0

「俺のターン!」

鬼柳 sc4↓5 アンドレ sc0↓1

「奇跡のようなモンスターで敗北を回避した鬼柳!ここからどう動くのかー!」

「インフェルニティ・ゼロが破壊されれば全ては終わりだ。相手フィールドには俺のモンスターの攻撃力を下げることができるサンダー・ユニコーンがいる。…ここは迂闊には行けねえか!俺はモンスターをセットしてターンエンドだ!」

「慎重だね。だけどそれが正解さ」

鬼柳 LP0

フィールド 『インフェルニティ・ゼロ』（守備表示） 裏守備表示1

セット3

手札0

sc5

「さて…どうするかな。まあドローしてから考えるか」

鬼柳 sc5↓6 アンドレ sc1↓2

「…なるほどね。ジャン、どうやら鬼柳にオペレーションDを使った方が良いみたいだ」

アンドレはピットにいるジャンに相手に悟られないようにアイコンタクトをとる。するとジャンは一瞬の間後、ゆっくりとうなづい

た。

「行くよ！俺はセットしていたモンスターを反転召喚する！そのモンスターは…ニードルワーム！」

「何…？獣モンスターじゃないだど？」

紫色の毒々しい体をした針虫が現れたと思うと鬼柳のデッキから5枚のカードを食べていく。

ニードルワーム 攻撃力750

「ニードルワームのリバース効果を発動する！相手はデッキの上からカードを5枚墓地に送る」

「一体何を…」

「さらに俺は手札からマイン・モールを召喚！」

ヘルメットを被ったモグラがツルハシを持ちながら現れる。

マイン・モール 攻撃力1000

「使わせてもらうぜブレオの技を！俺はレベル2のニードルワームとレベル3のマイン・モールにレベル2の一角獣の使い魔をチューニング！天駆ける雷よ、雲海を切り裂き、その蹄ひづめを地上に穿うがて！シンクロ召喚！轟け、ボルテック・バイコーン！」

3体のモンスターが同調し現れたのは2本の角が生えたユニコーン。その足はせわしなく動き、アンドレのDホイールについていく。

ボルテック・バイコーン 攻撃力2500

「2体目のシンクロモンスターか…！」

「マイン・モールの効果を発動！このカードが獣族モンスターのシンクロ素材となった時、俺はカードを1枚ドロワーできる！そして…俺は手札からスピードスベルs pーハイスピード・クラッシュを発動！俺のscが2以上の時、俺と相手のフィールドのカードを1枚ずつ破壊する！俺が破壊するのはボルテック・バイコーンとインフェルニティ・ゼロ！」

「…！」

「おおっとー！アンドレの狙いはインフェルニティ・ゼロの効果破壊かー！確かにインフェルニティ・ゼロがフィールドから離れれば今度こそ鬼柳の敗北だー！」

（いや…あいつがインフェルニティ・ゼロの効果で墓地へと送ってい

たモンスター。俺の見間違いじゃなきやあのカードだ)

フィールドに発生した2つの竜巻がアンドレと鬼柳のカードを1枚ずつ吹き飛ばそうとする。

「させるか！墓地のインフェルニティ・ビショップの効果が発動！俺の手札が0枚の時、墓地のこのカードを除外することでインフェルニティモンスターの破壊を防ぐことができる！」

だが竜巻の経路がそれていき、鬼柳のモンスターは被害を免れた。

「残念だったな！インフェルニティ・ゼロは無事だぜ！」

「ふっ…破壊されたボルテック・バイコーンの効果を発動！このカードが破壊された時、互いにデッキの上から7枚のカードを墓地へと送る！」

「なっ…またかよー！」

アンドレと鬼柳のデッキの7枚のカードがボルテック・バイコーンのそれぞれのツノへと刺さり、墓地へと道連れにされていく。

「さて…バトルと行こうかな。俺はサンダー・ユニコーンで鬼柳のセットモンスターを攻撃！サンダー・スピアー！」

サンダー・ユニコーンは鬼柳のセットモンスターへと一直線に駆けていき、そのツノで敵を突き刺した。

「俺のセットモンスターはインフェルニティ・ガーディアン！守備力は1700だが…」

空中に炎が浮かび、そこからガイコツが顔を出すとユニコーンのツノを真正面から受け止めた。

インフェルニティ・ガーディアン 守備力1700

「サンダー・ユニコーンの攻撃を防いだか…」

「インフェルニティ・ガーディアンは俺の手札が0枚の時、戦闘及びカード効果で破壊されない！」

「やるね！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

アンドレ LP4000

フィールド 『サンダー・ユニコーン』(攻撃表示)

セット1

手札0

「俺のターン、ドロロー！」

鬼柳 s c 6 ↓ 7 アンドレ s c 2 ↓ 3

「来たか！俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを召喚！こいつは召喚に成功した時守備表示になる！」

紫のローブに身を包んだ召喚師がフィールドに現れる。

インフェルニティ・ネクロマンサー 守備力2000

「ネクロマンサーは俺の手札が0枚の時、1ターンに1度墓地のインフェルニティを特殊召喚できる。俺はインフェルニティ・リベンジャーを特殊召喚！そして：俺はレベル3のネクロマンサーとレベル4のガーディアンにレベル1のリベンジャーをチューニング！死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！いでよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン！」

脳から緑色の触手のようなものが大量に生えた漆黒のドラゴンがフィールドに舞い降りた。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 攻撃力3000

「強力なシンクロモンスターを呼ばせてしまったか！」

「行かせてもらうぜ。インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果を発動！俺の手札が0枚の時、こいつの攻撃を放棄することで相手モンスターを破壊し、その攻撃力の半分のダメージを与える！インフェルニティ・デス・ブレス！」

ドラゴンが吐き出した黒い炎がユニコーンを包み込み、破壊した。

アンドレ LP 4000 ↓ 2900

「だが俺のシンクロモンスターが相手によって破壊されたことでトランプカード、パラレル・セレクトを発動する！このカードの効果によって除外された魔法カード、s p ージ・エンド・オブ・ストームを手札へと加える！」

「く…：s p ージ・エンド・オブ・ストーム。s c を10個消費する代わりに強力な効果を持っているカードか」

異次元から空いた穴から1枚のカードがアンドレの元に戻ってきた。

「俺はこれでターンエンドだ！」

鬼柳 LP 0

フィールド 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』（攻撃表示） 『インフェルニティ・ゼロ』（守備表示）

セット3

手札0

sc 7

「さあてと…さすがにきついな。俺のターン！」

鬼柳 sc 7↓8 アンドレ sc 3↓4

「ここで俺がスピード・ワールド2の効果を使っても相手に与えられるダメージは800か…。ならカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「…ジ・エンド・オブ・ストームを伏せやがったか」

「おおっとーアンドレ、カードを2枚伏せただけで鬼柳にターンを回してしまった！これは万事休すかー!？」

アンドレ LP 2900

フィールド 無し

セット2

手札0

sc 4

「俺のターン！」

鬼柳 sc 8↓9 アンドレ sc 4↓5

「俺はモンスターをセット。そして…」

アンドレのライフポイントは2900。この攻撃が通れば鬼柳の勝ちが決定する。鬼柳は覚悟を決め、攻撃した。

「インフェルニティ・デス・ドラゴンでアンドレにダイレクトアタック！デス・ファイア・ブラスト！」

黒きドラゴンは今度は黒い火炎弾をアンドレに向かって放った。

「ふっ…」

アンドレ LP 2900↓0

「通った…！」



「決まったー！アンドレの連勝記録を断ち切ったのはチームネオサ  
ティスフアクションの鬼柳京介だー！」

「…だが、やるべきことはやらせてもらう！トラップ発動、ダメージ・  
ゲート！俺が戦闘によつて受けたダメージ以下の墓地のモンスター  
を1体特殊召喚できる！」

「…！サンダー・ユニコーンか！」

「いや…ここはチームの作戦に徹させてもらう。俺が復活させるのは  
ボルテック・バイコーン！」

アンドレの発動したトラップから現れた門をくぐつて、2角獣が  
フィールドに駆け戻ってきた。

ボルテック・バイコーン 攻撃力2500

「ボルテック・バイコーンだと…？そいつは破壊されれば互いのデッ  
キを7枚墓地へ送るモンスター。…まさか」

チームネオサティスフアクションのピットを見ると何かに気づい  
た幸子が鬼柳にボードを通して指示を送っていた。その内容はDe  
ck Destroy。…つまり。

「デッキ破壊…!?!」

ライフが0になったアンドレは次走者のブレオへとシールと  
フィールドのカードを渡す。

「奴ら、俺たちの作戦に気付いたみたいだな」

「ああ。俺たちのオペレーションDeck Destroy、略して  
オペレーションD。それは変幻自在の戦術をとるコナミへの最善手  
と思われる戦術だった…」

「だが鬼柳もライフ0でのデュエル続行というタクティクスを見せて  
きた。出し惜しみは出来ないさ」

「ああ…その通りだ。だがブレオならば奴のデッキを破壊することが  
出来る。相手の思考を読むのに長けたお前ならな。そしてコナミは  
俺が仕留める。それが俺の仕事だ」

「ああ。とりあえず俺も自分の仕事を果たさせてもらうぜ！」

ブレオがピットから出て鬼柳へと追いついてくる。

「「デュエル！」」

「互いのチームのセカンドホイラー同士の戦い！ここがこのデュエルの正念場となりそうだー！」

鬼柳のデツキの残り枚数は…19枚。相手のフィールドにはデツキを7枚破壊するボルテック・バイコーン。既に半分を切ったデツキで鬼柳は彼らに立ち向かうことが出来るだろうか。

## 死神は死なねえ

アンドレの猛攻をインフェルニティ・ゼロによって回避した鬼柳はアンドレを倒し、セカンドホイラーのブレオと対峙していた。

「俺のターン、ドロー！」

鬼柳

スピードカウンター  
s c 9↓10 ブレオ s c 5↓6

「鬼柳…お前のデッキは残り19枚。まだ19枚ある？もう19枚しかない？…どっちが正解か教えてやるぜ。俺はカードを4枚伏せてターンエンドだ！」

「く…俺のライフを削ってインフェルニティ・ゼロを破壊しようとはしねえのか」

「ふっ…鬼柳。アンドレが残したこの伏せカード。お前もわかっているだろう？」

スピードスベル

「ち…s pージ・エンド・オブ・ストームか。s cを10個消費する代わりにフィールドのモンスター全てを破壊し、モンスターのコントロールにそれぞれ破壊された自分のモンスター1体につき300のダメージを与えるカードだ…。つまりあいつにあと2ターン渡せばインフェルニティ・ゼロが破壊されちまう…！」

ブレオ LP4000

フィールド 『ボルテック・バイコーン』（攻撃表示）

セット5

手札2

s c 6

「ちっ…だがやりようはある！俺のターン！」

鬼柳 s c 10↓11 ブレオ s c 6↓7

（俺のデータによれば鬼柳はあのカードの効果を必ず発動してくる…！）

「へっ…アンドレが伏せたカードの位置はわかっている！ならやることは1つだ！俺はスピード・ワールド2の効果を発動！取り除くs cは…10個だ！」

鬼柳のDホイールが急激に減速していく代わりに、ブレオのフィー

ルドにブラックホールが出来上がった。

鬼柳 sc11↓1

「スピード・ワールド2の効果でscを10個取り除いた場合、フィールドのカードを1枚破壊できる！俺が破壊するのはアンドレの伏せたカードだ！」

ブレオのフィールドに伏せられていたカードがブラックホールへと吸い込まれていき、あとかたもなく消えてしまった。

「…かかったな鬼柳京介！」

「何!？」

「トラップ発動、デストラクション・トリガー！相手の魔法・罠カードの効果でこのカード以外の俺のフィールドのカードが破壊された時、相手はデッキの上から5枚のカードを墓地へ送る！」

鬼柳のデッキの上から5枚のカードがブレオのトラップによる爆風で吹き飛ばされていった。

「俺があのかカードをわざわざあいつらに見せた上で伏せたのはブレオへと引き継がせて使わせるためじゃない。ブレオの作戦への布石だったのさ」

「これでお前のデッキはあと13枚…さあ次はどうする!？」

「くっ…俺はセットモンスターをリリースしてインフェルニティ・デストロイヤーをアドバンス召喚！」

屈強な肉体をもったあらゆるものを破壊し尽くす悪魔がフィールドに降り立った。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「どうやってもあのかのモンスターは破壊しなきゃ通れねえ…なら一気に攻めるしかねえ！インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果発動！俺の手札が0枚の時、1ターンに1度こいつの攻撃を放棄することで相手モンスター1体を破壊しその攻撃力の半分のダメージを与える！インフェルニティ・デス・ブレス！」

黒き龍がはきだした炎が2角獣を包み込み、破壊した。

ブレオ LP4000↓2750

「だがボルテック・バイコーンが破壊されたことで互いにデッキの上

から7枚のカードを墓地へ送らなくてはならない！」

ツノの片方にブレオのデッキの7枚を、もう片方に鬼柳のデッキの7枚を刺して共に墓地へと沈んでいく。

「だが…お前のフィールドは空いた！バトルだあ！インフェルニティ・デストロイヤーでブレオへダイレクトアタック！」

悪魔が拳に全ての力を込めて、ブレオに右ストレートをぶち込んだ。

ブレオ LP2750↓450

「へっ…その攻撃も想定内なのさ！トラップ発動、痛恨の調律！相手から直接攻撃によってダメージを受けた場合、俺の墓地からシンクロモンスターを特殊召喚することができる！再び駆ける、ボルテック・バイコーン！」

墓地から地上へとつながる道を駆け、再び2角獣はブレオの前に姿を現した。

ボルテック・バイコーン 攻撃力2500

「そして痛恨の調律によって呼び出したモンスターが攻撃した場合…そのモンスターは破壊される！」

「な…!？」

「鬼柳、お前のデッキの残り枚数は6枚。次のターンでデッキ破壊は完成する！」

「ぐ…！俺はこれでターンエンドだ！」

鬼柳 LP0

フィールド 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』（攻撃表示） 『インフェルニティ・デストロイヤー』（攻撃表示） 『インフェルニティ・ゼロ』（守備表示）

セット3

手札0

sc1

「俺のターン！」

鬼柳 sc1↓2 ブレオ sc7↓8

「バトル！ボルテック・バイコーンでインフェルニティ・デストロイ

ヤーへ攻撃！」

2角獣は4本の足を使ってデストロイヤーへ目にもとまらぬ速さで近づいていった。

「痛恨の調律であるモンスターは破壊されちまう：なら、迷うことはねえ！トラップ発動、インフェルニティ・フォース！こいつは俺の手札が0枚の時にインフェルニティモンスターが攻撃の対象となったら発動出来る！攻撃してきたモンスターを破壊し、墓地のインフェルニティモンスターを1体特殊召喚出来る！」

悪魔が手を振りかざすと2角獣の足並みは依然早く動いているものの、その体は一步も前に進まなくなる。そして悪魔が手を何かを握りつぶすように閉じると、2角獣が圧迫されていき潰れていった。

「ふっ：悪いな鬼柳。データ通りだ！トラップ発動、神事の獣葬！俺の獣族モンスター1体を破壊することで次のターンのスタンバイフェイズに俺は2枚のカードをドローする！俺はボルテック・バイコインを破壊！」

2角獣は押しつぶされる前に下に空いた穴へと落ちていった。

「インフェルニティ・フォースはその効果で攻撃モンスターを破壊しないとインフェルニティモンスターを蘇生することは出来ない：だろ？」

「くっ：その通りだ！」

「そしてボルテック・バイコインの効果だ。互いにデッキの上から7枚のカードが墓地へ送られる」

鬼柳のデッキが1枚、2枚と墓地へ落ちていく。そして6枚目のカードが墓地へと送られた時、鬼柳のデッキがなくなった。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。：お前の負けだぜ鬼柳。手札も0、ライフも0、デッキも0。お前には何も残っていない」

ブレオ LP450

フィールド 無し

セット2

手札2

sc8

「…くくっ」

「…何がおかしい?」

「いや、この何も残っていない状況。…1度は全てを失った死神にとってはこれ以上ないくらいふさわしく思えてきたんだ」

「この状況で笑うなんて中々面白い奴だ。…だが死神は死神らしく散るんだな」

「いいか…覚えておけ」

「何をだ?」

「死神は…死なねえ!俺のターン…ドロー…!」

鬼柳はデツキに唯一残っていたカードを勢いよく引き抜いた。

鬼柳 sc2↓3 ブレオ sc8↓9

「ば、馬鹿な!?お前のデツキは0…ドローできるカードなんかありはしない!」

「俺はお前のエンドフェイズ時に最後のボルテック・バイコンの効果で墓地へと送られていたインフェルニティ・クライマーの効果が発動していたのさ。こいつは俺の手札が0枚の時、墓地に存在するこのモンスターをデツキの1番上に戻すことができる!」

「なん…だと…。アンドレの技に続き、俺の技すらもかわした…!?こいつはどうやったら…倒すことが…!?」

うろたえるブレオ。しかしジャンは自身も驚きながらも隙をつくらせまいとボードで指示を出した。

「このターンを耐え抜け…。そうか、あのモンスターを墓地へと送る術がなければ結局は次のターンデツキが切れる。俺は神事の獣葬の効果によつてカードを2枚ドローする!」

「俺も墓地へと送られたspスピード・ストームの効果を発動!俺のscを3つ取り除くことで自分のスタンバイフェイズにこのカードを手札へ加えることができる!」

鬼柳 sc3↓0

「だがscを0にしてはspを発動することは出来ない!」

「俺はモンスターとカードを1枚ずつセット!」

先ほど窮地を救ったインフェルニティ・クライマー、手札へ加わっ

た s p ースピード・ストームが伏せられ鬼柳の手札は0となる。

「お前のフィールドにモンスターはいねえ！インフェルニティ・デストロイヤーでブレオにダイレクトアタック！」

悪魔は今度こそ確実にブレオを仕留めるため、地面を打ち鳴らすことで衝撃波を生み出し、ブレオへ向けて放った。

「お前が仮にこのターンデッキ破壊でやられていればそのままコナミの攻撃が待っていた…攻撃の対策をしていないと思ったか！カウンタートラップ発動、攻撃の無力化！相手が攻撃してきた時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを強制終了させる！」

だがブレオの前に立ちふさがったホワイトホールがその衝撃を全て吸収し、攻撃が通らなくなってしまう。

「これでお前のバトルフェイズは終了した…！」

「へっ…そんなところだと思っただぜ」

「何…？」

「俺は死神…お前を倒すまでは俺は死なねえ！リバーズカードオープン！s p ーオーバー・ブースト！s c を4つ増やす代わりに俺のエンドフェイズにs c は1になる！」

完全にスピードが落ちていた鬼柳のDホイールがスピードを増していく。

鬼柳 s c 0 ↓ 4

「そしてさっき加えたこのカードを使わせてもらうぜ。リバーズカードオープン！s p ースピード・ストーム！俺のs c が3以上の時、相手プレイヤーに1000ダメージを与える！」

「馬鹿な…ここまでの展開を読まれていたというのか!？」

鬼柳の発動した魔法から竜巻が発生し、Dホイールごとブレオを包み込んだ。

「すまねえ、ジャン…！」

ブレオ L P 4 5 0 ↓ 0

「これは驚愕の事態だー！アンドレによってライフポイントを0にされてしまった鬼柳。しかし、そこからまさかの2人抜きだー！」

「だが…これはチーム戦だ。アンドレが繋いでくれたように俺もジャ



ンへと繋ぐ！トラップ発動、ロスト・スター・デイセント！俺の墓地のシンクロモンスター1体をレベルを1つ下げ、守備力を0にして守備表示で特殊召喚する！」

墓地で休息を取っていた2角獣が、地上への道を4本足で駆けて戻ってきた。

ボルテック・バイコーン 守備力0

「だがこの効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり表示形式も変更できない……！」

「モンスターを残しちまったか……。エンドフェイズにs p o oバー・ブーストの効果で俺のs cは1となる」

鬼柳 s c 4 ↓ 1

鬼柳 L P 0

フィールド 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』（攻撃表示） 『インフェルニティ・デストロイヤー』（攻撃表示） 『インフェルニティ・ゼロ』（守備表示） 裏側守備表示1

セット1

手札0

ライフが0となったブレオはユニコーンのピットへと戻っていた。

「すまねえ2人とも！俺は俺の役割を果たせなかつた……！」

「そう自分を責めるなよブレオ」

「アンドレの言う通りだ……。どちらにせよ鬼柳は次のターン、俺が間違えてインフェルニティ・クライマーを墓地へ送らない限りドロウすることは出来ない。いわばこの勝負は引き分けとも言える」

ブレオからユニコーンのシールを受け取り、フィールドに残されたボルテック・バイコーンをジャンのDホイールへと移していく。

「それに俺へモンスターを引き継いでくれた。こいつは絶対に無駄にしないさ、後は俺に任せておけ」

「頼んだぜジャン……！」

準備が完了したジャンはDホイールを走らせ、鬼柳へと追いつく。「中々予想外だったよ。まさかアンドレとブレオがかわされて俺がお

「前の前に出なくてはならないとはな」

「へっ…このまま押し切って俺たちが勝たせてもらおうぜ！」

「確かに予想外だったが…俺のやることは変わらない。チームユニコーンの勝ちを逃さない、それが俺の役目だ」

「おもしろえ。かかってきな！」

「「デュエル！」」

「俺のターン！」

鬼柳 sc1↓2 ジャン sc9↓10

「俺がこのターンでなすべきことはコナミに出来るだけ戦力を残させないこと。ならやるべきことも自然と決まる。俺はスピード・ワールド2の効果を発動。scを10個取り除き、フィールド上のカードを1枚破壊する！」

ジャン sc10↓0

「…！狙いはインフェルニティ・ゼロか!？」

「いや、俺が狙うのは…インフェルニティ・デス・ドラゴンだ！」

黒き龍の上に漂った暗雲から強烈な雷が落ち、龍を貫いた。

「くっ…そうか。俺がドローできない以上無理にゼロを破壊する必要もないってことか」

「さらにチューナー・モンスター、エレファンを召喚！そして俺はレベル6となったボルテック・バイコーンにレベル2のエレファンをチューニング！天駆ける雷よ！漆黒の大地を貫き、その雷撃で大地を燃やせ！シンクロ召喚！照らせ、ライトニング・トライコーン！」

落雷とともに周囲を光で満たしながら現れたのは3角獣のユニコーン。その輝きは思わず目をつぶってしまいそうになるほどまばゆい。

ライトニング・トライコーン 攻撃力2800

「バトルだ！ライトニング・トライコーンでインフェルニティ・デストロイヤーを攻撃！ギガボルト・チャージ！」

3本のツノから出た電気が1つに集まっていき、悪魔へと降り注いだ。

鬼柳 LP0↓0

「くっ…5000のダメージを受けたことでインフェルニティ・ゼロにデスカウンターが1つ点灯する…!」

鬼柳の周りに浮いていた怨霊の魂に1が刻まれた。

「これは見事だ!スピード・ワールド2とシンクロを駆使して鬼柳の強力モンスターを2体とも破壊したぞー!」

「とりあえずここまでか…カードを2枚伏せてターンエンドだ!」

ジャン LP4000

フィールド 『ライトニング・トライコーン』（攻撃表示）

セット1

手札3

スコ

「インフェルニティ・クライマーが墓地にいなかった以上俺はドロー出来ねえ。ここからはコナミに任せるか!」

鬼柳はDホイールをネオサティスフアクションのピットへと走らせていった。

「帰ってきたぜ!」

「お疲れ鬼柳!後は俺がなんとかしてくるぜ!」

「お疲れ様です鬼柳。私の失態をフォローしていただき感謝の言葉しかないですわ」

「いいってことよ、チームだろ」

「チーム…ですか」

鬼柳はコナミにネオサティスフアクションのシールを渡し、フィールドに残った鬼柳のモンスターと幸子の伏せカードをコナミのDホイールへと移した。

「さてと…行ってくるぜ!」

「ええ…頼みましたわ」

「満足してこいよ!」

「ああ!」

そしてユニコーンと同じくネオサティスフアクションもラストホイーラーのコナミがコースへと出て行く。

「泣いても笑ってもこれが最後のデュエルだ!優勝候補のチームユニ

コーンが勝利するのか？それともここまで脅威の粘りを見せたネオサティスフアクションが金星を上げるのか？その答えはこのデュエルによって決まる！1秒たりとも見逃すな！」

コナミはジャンへと追いつき、彼のDホイールと並走した。

「やあコナミ、お互い力を出し尽くそうじゃないか。だがこれはチーム戦だ。俺たちチームの力でお前を倒させてもらう」

「へっ…その口ぶりだと幸子と鬼柳の対策を考えたのはあんたか」

「その通りだ。俺たちチームは個人では実は強くない。チームであるからこそあいつらは力を出し切れるし、俺も力を出せる。そしてチーム戦には個人戦とは違う戦い方が必要だ。俺たちの戦い方についてこれるかな？」

「確かに俺は今までタッグデュエルはやったことはあるけどチーム戦はこれが初めてだ。だからお前らに教えて貰ったぜ、チームで戦うってことの意味をな。今まで意識したこともなかった」

「だろうな。だからお前たちが俺たちに勝てる可能性は…」

「ってことは俺たちはまだまだ強くなれるってことだ！楽しいじゃねえか、デュエルってのはまだまだ俺の知らないことがたくさんあるんだ！それを確認させてくれたお前らには感謝してるぜ！」

コナミは目を子供のように輝かせ、顔がこれでもかというほど緩んでいた。

（こいつ、この状況でも楽しんでやがる…!?危険だ。こういう状況でも精神が下を向かない奴は強い。だが…確実に仕留める。あいつらのためにも！）

「さあ、俺も…満足させてもらうぜ！」

「その期待には応えられないかもな…何故ならお前たちは負けるからだ！」

「言うじゃねえか！なら、行くぜ！」

「「デュエル！」」

ユニコーンとネオサティスフアクション、その勝敗は彼らのデュエルによって決定する。最後の戦いの火蓋が切られた。

## チームで戦うということ

ジャンとコナミ、互いにライフが4000ポイントの状態ですラストホイーラー同士のデュエルが始まる。

ここだけ見ればジャンとコナミの一騎打ちだが、ジャンのフィールドにはブレオから引き継いだボルテック・バイコーンの力を借りて出したライトニング・トライコーン。対してコナミのフィールドにはインフェルニティ・ゼロとセット状態のインフェルニティ・クライマーのみ。鬼柳の強力なモンスターはジャンによつて的確に対処されてしまった。

このような状況でチームユニコーンとチームネオサティスファクションの勝敗が決まるラストデュエルが開始されたのだった。

「俺のターン！」

スピードカウンター

コナミ s c 2 ↓ 3 ジャン s c 0 ↓ 1

「鬼柳、お前のモンスターは無駄にしないぜ！俺はチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚！」

頭の左右にアンテナをつけたロボットがフィールドに降り立つ。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「そのモンスターを引き込んでいたか…。となると狙いはもちろんシンクロ。だが問題はどのモンスターを出してくるかだ」

「ライトニング・トライコーンは光属性…なら、こいつを出すか！俺はインフェルニティ・クライマーを反転召喚！そして…レベル3のインフェルニティ・クライマーとレベル4のインフェルニティ・ゼロにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

「…レベル10のシンクロだと…」

「正義の同盟を結びし者たちよ、決戦の時は来たれり！決戦兵器の名の下に光纏いし敵を撃ち落とせ！シンクロ召喚！起動せよ、アーリー・オブ・ジャステイス  
A・O・J デイサシブ・アームズ！」

3体のモンスターが天に昇っていくと空中に浮遊砲台が浮かび、いくつもの砲身が敵に向かって並び立っていた。ジェネクス・コントローラーは制御中枢コアとして装填され、その巨大な力を何とか制御

した。

A・O・J デイサシブ・アームズ 攻撃力3300

「攻撃力…3300だと!」

「さらにこいつは光属性には滅法強いぜ、覚悟しな! デイサシブ・アームズの効果を発動! 相手フィールドに光属性がいる時、1ターンに1度相手の伏せカードを1枚破壊できる! ジャンの伏せカードは2枚…右のカードを狙うぜ、デイサシブ砲発射!」

砲身の先にエネルギーが溜まっていき、十分な大きさになるととてもない反動とともに放たれた。

「波動障壁が破壊されたか…。こいつがあればデイサシブ・アームズが攻撃してきた時に俺のシンクロモンスターをリリースする代わりにデイサシブ・アームズを守備にし、その守備力3300分のダメージをコナミに与えられたんだがな」

「危ねえ…だけど危険を犯さずにあいつらには勝てねえよな。バトルだ! デイサシブ・アームズでライトニング・トライコーンへと攻撃! 必殺、コナミファイヤー!」

何とも気の抜ける攻撃名とは裏腹に、全ての砲身から火炎放射に包まれた弾丸が3角獣のユニコーンへと集中砲火された。

ジャン LP4000↓3500

「だが、破壊されたライトニング・トライコーンの効果を発動! このモンスターが相手によって破壊された場合、墓地のサンダー・ユニコーンかボルテック・バイコーンを特殊召喚することが出来る! 俺たちの前に何度でも駆け上がれ、ボルテック・バイコーン!」

墓地へ送られた3角獣が2角獣をツノで突き上げてフィールドへと押し戻した。

ボルテック・バイコーン 攻撃力2500

「また戻ってきやがったか…。だけど今からデッキ破壊はさすがに厳しいはずだ! 俺はこれでターンエンド!」

「このエンドフェイズにトラップを発動させてもらおう」

「このタイミングでトラップだ?!」

「トラップカード、奇跡の残照。このターン戦闘で破壊された俺のモ

ンスターを1体特殊召喚できる。再び照らせ、ライトニング・トライコーン！」

2角獣に続き、4本足を巧みに使った跳躍で3角獣もフィールドに戻ってくる。

ライトニング・トライコーン 攻撃力2800

コナミ LP4000

フィールド 『A・O・J デイサシブ・アームズ』（攻撃表示）  
セット1

手札5

s c 3

「俺のターン！このターンで見せてやる。チームで戦うということの本当の意味を！」

コナミ s c 3 ↓ 4 ジャン s c 1 ↓ 2

「俺は手札から<sup>スレイドスベル</sup>s p | ヴイジョン・ウインドを発動！俺のs c が2以上ある時、俺の墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、エレファン！」

青いゾウの顔が空中へ浮かび、耳の部分が羽となりパタパタと飛んでいく。

エレファン 攻撃力500

「さらに俺は手札からデス・ウオンバットを召喚！」

草を口に含んだまま、フィールドへと茶色の獣が駆け下りてきた。

デス・ウオンバット 攻撃力1600

「エレファンはチューナー、そして合計レベルは…5?…まさか!？」

「そのまさかだ。俺はレベル3のデス・ウオンバットにレベル2のエレファンをチューニング！天駆ける雷よ、猛き烈風と交わりて、幻想の世界より姿を現せ！シンクロ召喚！いななけ、サンダー・ユニコーン！」

2体のモンスターが同調し、1角獣のユニコーンが2匹のユニコーンと並んだ。1角獣のユニコーンは猛り、2角獣のユニコーンは吠え、3角獣のユニコーンは唸る。

サンダー・ユニコーン 攻撃力2200

「マジかよ……ユニコーンシンクロが3匹も……！」

「この3体のモンスターの力を合わせて俺たちはこのデュエルに勝利する！サンダー・ユニコーンの効果発動！このモンスター以外の攻撃を放棄し、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を俺のフィールドのモンスターの数×500ダウンさせる！サンダー・スクレイプ！」

1角獣のツノから放たれた電撃が決戦兵器の大きさを小さくしていく。

A・O・J デイサシブ・アームズ 攻撃力3300↓1800

「デイサシブ・アームズがあんなに小さく……!？」

「バトルだ！対光属性兵器のデイサシブ・アームズには早々に消えてもらう。サンダー・ユニコーンでデイサシブ・アームズへ攻撃、サンダー・スピアー！」

ユニコーンは目にも止まらぬスピードで砲身をツノで叩き割っていき、全ての砲身を機能停止とすることで決戦兵器は役目を果たせなくなった。

コナミ LP4000↓3600

「くっ……」

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

ジャン LP3500

フィールド 『サンダー・ユニコーン』（攻撃表示） 『ボルテック・

バイコーン』（攻撃表示） 『ライトニング・トライコーン』（攻撃表示）

セット1

手札1

sc2

「このターンで手を打たねえと！俺のターン……このspは」

コナミ sc4↓5 ジャン sc2↓3

「……よし、それで行くか！まず俺はファイヤー・アイを召喚だ！」

2本の燃え盛る羽が生えた目玉がフィールドを飛び回る。

ファイヤー・アイ 攻撃力800

「今更そんなモンスターで何を……?」



「こうするのさ！手札からs p rリアクター・ポッドを発動！俺のs cが4以上の時、俺のフィールドの攻撃力1000以下のモンスターを対象に発動し、そいつの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！ファイヤー・アイの攻撃力、800分のダメージを喰らえ！」

燃え盛る羽が羽ばたくと炎の風が巻き起こり、やがて火炎旋風を起こしてジャンを襲った。

「効果ダメージを狙ってきたか……！」

ジャン LP3500→2700

「だが迂闊だったな。ファイヤー・アイの攻撃力は800！攻撃を受ければ大ダメージを受けてしまう。フィールドにチューナーも居ない今、もはやどうにもできまい」

「それはどうかな！」

「何だと？」

「俺は手札からもう1枚s pを発動させる……！そのカードはこれだ！s pスピード・フュージョン！俺のs cが4以上の時、俺の手札及びフィールドのカードで融合召喚を行うことができる！」

「馬鹿な……！融合召喚だと？今までお前はそんな戦術を使ったことは無かったはずだ……！」

「悪いな……つい最近覚えたのさ。行くぜ、俺は手札のギガテック・ウルフトフィールドのファイヤー・アイで融合！鉄で作られしオオカミよ、炎で体を溶接し新たな姿へと生まれ変われ！融合召喚！爆発せよ、起爆獣ヴァルカノン！」

オオカミと目玉が渦によって混じり合い、鉄で胴体を武装し肩にガトリング砲を背負ったロボットが姿を現した。

起爆獣ヴァルカノン 攻撃力2300

「まさかシンクロではなく融合とは……。コナミ、そして鬼柳もか。お前たちには読みを外されてばかりだ。だがヴァルカノンの攻撃力は2300、サンダー・ユニコーンを狙っても俺に1000のダメージを与えるだけ。むしろ次のターンの俺の反撃で手痛いダメージを負うのはお前の方だ！」

「甘いぜジャン！起爆獣ヴァルカノンの効果発動！こいつが融合召喚

に成功した時、相手モンスターを1体選択して発動出来る。俺はライトニング・トライコーンを選択！そしてヴァルカノンと共に選択したモンスターを破壊し、墓地へ送る。さらに：墓地へ送った相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「……」

「ライトニング・トライコーンの攻撃力は2800！これで終わりだ……起爆獣ヴァルカノン、誘爆！」

ガトリング砲を後ろへ向けて撃ち、反動で素早く3角獣のユニコーンに近づくと体内にセットしてあった自爆装置を起動させ共に爆発する。

「ジャンのライフは2700！これは耐えられないー！この勝負、チームネオサテイスフアクションの勝利だー！」

「やったか……！」

爆発が晴れるとそこにはヴァルカノンもろとも3角獣のユニコーンの姿は消えていた。……だが、奥に見えているジャンはまだデュエルを続行していた。

「何……!？」

「ふふ……惜しかったなコナミ。俺はお前のモンスターが誘爆する前にこのカードを発動していたのさ。トラップカード、亜空間物質転送装置をな。このカードの効果によりエンドフェイズまでライトニング・トライコーンは除外される！」

「し、しまったー！」

先ほどヴァルカノンが爆発したはるか頭上にライトニング・トライコーンに乗せたロケットが飛ばされていた。

「ライトニング・トライコーンが破壊されなかったことで俺へのダメージも0。さすがに焦ったよ……だが、一歩及ばなかったな」

「く……くっそおお……！」

亜空間物質転送装置によってライトニング・トライコーンは破壊を免れたが、ヴァルカノンの爆発は止められることはなかった。コナミのフィールドはがら空き、ジャンのフィールドには亜空間物質転送装置でライトニング・トライコーンが戻ってくることを考えると3体

のシンクロモンスター。どちらが有利かは明らかだった。

「だが俺の手札のカードじゃ次のターンの猛攻を防げねえ……！ここま  
でなのか……？」

手札は可能性、そんな言葉があるが既に切り札の融合召喚を使った  
コナミの策は尽きていた。

「もうこの俺の手札だけじゃ……。俺の？」

コナミは視野が狭くなっていくことに気づき、フィールドに目を向  
ける。そこには……最初の幸子のターンからずっと伏せられていた  
カードが1枚眠っていた。

「そうか……これはチーム戦だったな。俺は1人で戦ってるんじゃない、  
今もチームユニコーンの3人に俺たちチームネオサティスフアク  
ションの3人で戦ってるんだ！俺はカードを1枚伏せる。これで  
ターンエンドだ！」

「この瞬間ライトニング・トライコーンはフィールドへと戻る！」

打ち上げられていたロケットからツノがひっかかるのに苦労しな  
がら3角獣のユニコーンが2匹のユニコーンの元に戻ってくる。

ライトニング・トライコーン 攻撃力2800

「コナミ、秘策の融合召喚も有効打とはならず！モンスターも居ない  
今、どうすることも出来ないかー!？」

コナミ LP3600

フィールド 無し

セット2

手札1

sc5

「行くぞコナミ、これがファイナルターンだ！俺のターン、ドロー！」

コナミ sc5↓6 ジャンsc3↓4

「スピード・ワールド2の効果を発動！scを4つ取り除き、手札のs  
pの数×800のダメージを与える。俺の手札には1枚！」

ジャンのDホイールからコナミのDホイールへと衝撃が走った。

「くっ……まだだ！」

コナミ LP3600↓2800

ジャン sc4↓0

「長い勝負もこれで幕を閉じる。バトル！ライトニング・トライコーンでコナミへとダイレクトアタック！ギガボルト・チャージ！」

3つのツノに電気を集め、光り輝くツノでコナミを貫こうとする。「ジャン。お前にユニコーンの仲間が残してくれたカードがあるように俺にも1枚、フィールドに残っているのさ！」

「何だと…？これまでに使っただけの機会がなかったトラップカードをここで使おうというのか？」

「その通りだ！トラップ発動、ロスト・スター・デイセント！効果はお前らも使ったから分かるだろ？墓地のシンクロモンスターを1体、効果を無効にし、守備力を0にして守備表示で特殊召喚する！蘇れ、決戦兵器！」

フィールドに地響きが鳴ると、要塞のごとく空中に浮いた砲台がコナミへの道で立ちふさがった。

A・O・J デイサシブ・アームズ 守備力0

「なるほど…壁にする気か。だが残念だったな！俺の場にはまだ2体のモンスターが残っている。そいつらでダイレクトアタックすればお前のライフは削り切れる！ライトニング・トライコーンの攻撃を続行し、デイサシブ・アームズへと攻撃を行う！」

3角獣はツノに溜めた電気を雷のように浮遊砲台へと放ち、撃ち落とすにかかる。

「…かかったなジャン！トラップ発動、ガムシヤラ！相手が俺の守備モンスターを攻撃対象とした時、俺の守備モンスターを攻撃表示に変更する！」

「何…!？」

下がっていた砲身が徐々に動き出し、放たれた雷を幾千もの弾を放つことで防いだ。

A・O・J デイサシブ・アームズ 攻撃力3300

「この土壇場で味方のカードとのコンボを成立させてくるだと…！」

「反撃だ！デイサシブ・アームズ！」

3角獣のユニコーンが放った電撃を全て防ぎきった最終兵器は、エ

ネルギーを1つの砲台へと集約させ渾身の一撃を放った。

ジャン LP2700↓2200

「ぐおおっ！やってくれたな。だが、まだ俺のライフは残っている。次のターンで立て直してみせるさ」

「いや…終わりだぜジャン！ガムシヤラのもう1つの効果を発動！ガムシヤラの効果で攻撃表示に変更されたモンスターが攻撃してきたモンスターを戦闘で破壊した場合、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！」

「な…!？」

ディサシブ・アームズが数ある砲台から弾を無茶苦茶に放つと一発の弾が偶然ジャンのDホイールに着弾した。

ジャン LP2200↓0

「く…ここまでか。まさか初戦で敗れるとはな…」

「決まったー！激しい攻防を勝利し、Bブロック第一試合を勝利したのはチームネオサティスフアクションだー！」

チームでの戦い方を熟知したユニコーン。彼らの戦い方に苦しめられながらもなんとかネオサティスフアクションは最後にチームとして戦い、勝利することが出来た。

確かにこれは希少なカードだけど、僕の趣味じゃなくてね

チームユニコーンとの戦いに勝利した数日後、明日に試合を控えたネオサティスファクションのメンバーは海野財閥のガレージに集まっていた。だが、集まったメンバーの中で1人だけ元気のないメンバーがいた。

「…幸子？」

「……」

「おい。起きてるかー？」

「……」

幸子はイスに座ったまま顔を膝にうずめており、あまり反応を示さない。

「駄目だこりゃ」

「コナミ。幸子はどうしちゃったんだ？」

「さあ…？」

「……ですわ」

「ん？」

幸子が体を無理やり起こすと、深呼吸をした後にゆっくりと告げる。

「この前の試合…ですわ」

「この前の試合？」

コナミと鬼柳は首を傾げた。この前の試合は苦戦したがなんとか勝利をつかみ取ったので彼らには元気をなくすようなことが思い当たらなかったのだ。しかし、幸子には振り切れないことが1つあった。

「忘れちゃったの？わたくしはわずか3ターンでアンドレにやられてしまったのですわ」

「ああ。そういえばそうだったな」

「でもあれは仕方ないだろ。だってユニコーンの奴らは俺たちを作戦

にはめて対策を取ってきたんだぜ」

プラクティクスの時にアンドレのデッキを速攻パワーデッキと思わせることでネオサティスフアクションの出走順を意のままに操ったユニコーンは幸子を水属性メタカードによって倒し、鬼柳を手札0にする前に速攻で倒した後、コナミをデッキ破壊によって倒すという作戦をとっていた。

「…ですが、鬼柳は自身に仕掛けられた策を逃れたあげく庶民へ用意されていたと思われる策までかわしきった。そして庶民もジャンとの一騎打ちを制しましたわ。それに対しわたくしは…わたくしはあー！」

やるせない気持ちが溢れたのか頭を抱え込み、足をジタバタさせる幸子。イスに乗ったまま暴れたのでそのままイスごと床に落ちてしまふ。

「ふぎゅ…」

「…つまり、この前の試合が原因で落ち込んでんのか？」

「そうなのか幸子？」

「…まあ、ズバリと言われるとくるものがありますが。大体そうすわ」

幸子は服についたホコリを払い、ため息をしながら立ち上がる。

「鬼柳：俺たちもサティスフアクションの時にこんなことがあったよな」

「ああ。ぶちそうのカップヌードルをチームスチールに盗まれてメンバー全員が落ち込んだ時のことか」

「しかもよくある激辛味じゃなくておしるこヌードルだったしな。ジャックとかすげえ落ち込んでたし」

「そんなものと比べないでくださいまし…」

トップスの幸子にとってはそんなに手に入れるのに苦労はしないカップヌードルと比べられ、気のせいかな先ほどより落ち込んでしまふ。

「こんな時はあれしかないな！幸子、ついてこい！」

「え？わたくし今外に出る気分では…」

「落ち込んでる時に引きこもっても立ち直ることは出来ねえよ」

「…まあ、一理ありますが」

コナミと鬼柳の用意を待った後、一同はある場所に向かっていく。その場所は公園だった。結構広い公園で、キャッチボールをする親子や、砂場で子供を遊ばせながら談笑する母親達、Dホイルの試運転をしている3人組などがいて賑わっていた。

「おー、思ったより広いな」

「公園で何をしますの…?」

「いや、広いスペースが欲しかったんだ。ガレージじゃちよつと狭いしな」

「?」

「鬼柳、ここらへんが空いているから敷いてくれー!」

「おう、ここか。任せとけ!」

そうやって鬼柳が取り出したのはブルーシート。人があまり居ない小さな草が所々生えた草原に敷かれ、そこに座っても汚れないようになった。幸子はそれを見て彼らの行動を理解する。

(なるほど。この公園は自然が豊かな上に親子が微笑ましく過ごしている様子を見ることが出来ます。そこで優雅にティーを嗜むことでのわたくしを落ち着かせようとしているのですね。そういったことには疎そうだと思っていました。彼らへの認識を改めなくてはいけなさそうですわ)

幸子は次のコナミの行動を見て後悔することになる。一瞬でも彼らのことを気が効くと思つたことを。

「さて、幸子。これを腕にはめてくれ」

「いいですわよ。…え、腕ですの?ティーを入れるカップを持つなら手ですわよ?」

幸子が腕にはめられたもの…それはデュエルディスクだった。

「俺の特製デュエルディスクだ。なんと、デッキが60枚どころか200枚くらい入るようになってるんだぜ!」

「…? 一体何を?」

「そしてこれに俺が拾ってきたカード達を200枚くらい入れてと。」



準備が完了したぜ！」

「…えーと。これではティーは飲めせんわよ？」

「ティー？何言ってるんだ、落ち込んだ時にはとにかく無心でドロ練習に決まってるだろ！」

「…え？わたくしちよつと言っている意味が…」

いつの間にかブルーシートの上に立たされ、200枚のカードに手をかけさせられる。

「始め！」

「…ドロー！魔法カード、モウヤンのカレー！…って引いてどうするのですかわたくしは…！」

デュエルディスクをつけデッキの上に手をかけさせられれば本能でカードを引いてしまうのも無理はない。だがこの行為はすなわちドロー練習をするのを認めてしまったと言っても過言ではないだろう。

「ええい！やってやりますわよ！ドロー！通常モンスター、プチテンシ！ドロー！通常モンスター、マグネツツ1号！ドロー！通常モンスター、はにわ…って通常モンスターカードばかりですわね！」

彼女の手からブルーシートへ落ちていくカードはカードの枠が黄色で彩られたカードばかり。ちなみにカードはブルーシートのおかげで汚れることはないようだ。

「当たり前だろ。サテライトに落ちてるカードは大体が通常モンスターだぞ。それより手が止まってるぞ！」

「…ドロー！ドロー！ドローですわ！」

彼女のドロー練習は10分ほどかかり、ブルーシートはほぼ黄色のカードで埋められていた。

「はあ…はあ…結構体力使いますわね」

200枚近くのカードを引ききった幸子は足元のカードをどかしてブルーシートに座り込んだ。

「どうだ？まだ落ち込んでるか？」

「…なんか悩んでいるのが馬鹿らしくなってきましたわ」

「成功だなコナミ！」

コナミと鬼柳がハイタッチしているのを見て果たしてこれは成功と言えるのか悩む幸子だったが、これ以上考えるのはやめたようだ。「ふう…とりあえずこのカードを拾うとしましょうか」

幸子がブルーシートに散らばったカードを回収しようとした時、コナミと鬼柳は1つの小さな事故に気づく。

「…危ねえ!」

Dホイールの試運転をしていたところに砂場で遊んでいた子供が母親が気づかないうちに近づいてしまっていた。乗っていたDホイラーは慌てて避けるが、運悪くスリップしクラッシュしてしまう。

「ヨシー!」

「大丈夫か!」

仲間と思わしき2人が近づいていくのを見てコナミ達3人もその場に向かっていく。

「だ、大丈夫…。うまく受け身取れたから。だけどDホイールが…」

「ああ…大丈夫さ。大破したわけじゃない。きつと直せるさ」

「あのガキ…!…っていねえ!」

この事態に気づいた母親がとっさに子供を連れて逃げてしまったようだ。

「まあ子供のやったことだ。俺たちがあえて文句を言いに行くことはないさ」

「だけだよ太郎…」

「ジン。それより…まずいかもしれない。Dホイールのここを見てくれ」

モーメントのエネルギーを伝えるレギュレーターの代わりにしていた空き缶やY字フックの代わりに使っていたハンガーが歪曲してしまっていた。これではDホイールが機能しなくなってしまう。

「く…どうする。予選はもう始まるんだぞ!」

「あわわ…な、なんかまた代用品を持ってきてなんとかならないかな?」

「…ダメだ。ある程度Dホイールやデュエルディスクに合っている空

き缶やハンガーを探すのに3ヶ月もかかったら？1日で見つかるとは思えない」

「ならどうするんだよ！ここまで来て参加できねえなんて俺は嫌だぜ！」

「それはもちろん俺も嫌だ。…だがどうすれば」

「おーい、大丈夫かー!？」

彼らが悩む中、事態に気づいたコナミ達が近づいていく。

「ああ、人の被害はないよ。…でもDホイールが見た通りでね。正直困ってるんだ」

「おい、やめとけ太郎。都会の奴らに頼んでもいいことはねえぜ」

何歩か遅れてついてきた幸子の服装を見てトップスだと判断したジンは反発しだした。

「おい、ジン。失礼だろ！」

「あ…あああ〜！あの人は！あの時の人だよジン！」

「ああ？…あつ！」

ようやく近づいてきた幸子を確認した彼らはかなり驚いているように見える。

「…？ああ、あなた達はあの時の」

「知り合いなのか？幸子」

「ええ、あなたとサテライトで活動していた時に少し…知り合ったのですわ」

幸子はチーム太陽と会った時のことを思い出す。あれはサテライトで活動していた幸子がサテライトに仮設置した本部へ帰ろうとしていた時のこと。

辺りは暗かったが何だか人の声が騒がしく響いており、注意しようと幸子が踏み込んだところ、ガソリンスタンドにいた4人が不良グループに絡まれていた。

3人は裕福な服装をしていたが1人の男性は貧乏そうな格好をしていた。1人の金を持ってそうな青年が2人の青年の仲間を置いてきぼりにし、1人の貧乏そうな男とともにその場を去っていく。

だが、仲間を置いていった青年に反発し1人の貧乏そうな男性が

戻ってきて不良グループをなだめようと土下座し、青年が不良グループの車にぶつかってしまったことを謝った。だが不良グループはそれで納得せず、貧乏そうな男性に殴りかかろうとしていたため見ていられず幸子はその場へと乱入した。

ディスクを展開させデュエルで不良グループを落ち着かせようとする幸子だったが、海野財閥のサテライトへの援助活動は彼らにも伝わっており、下手に危害を加えるのは危険だと判断した不良の団長は部下と共に帰って行った。

その後、貧乏そうな男性は近くの茂みで隙を見て助け出そうとしていた同じく貧乏そうな2人組と再会し無事を喜びあっていた。

対して先ほど2人を裏切っていた青年が事態が収まったことに気づいてノコノコと帰ってきたところ、2人から激怒されていた。さらにその青年が幸子へ感謝の印ということで1枚のカードをあげたがそのカードは激怒した2人の内の1人の女性からの贈り物だったらしく、火に油を注ぐ結果となったのは言うまでもない。

貧乏そうな3人組から礼を受けた幸子はその場で土下座させられている青年を横目に帰っていくのだった。

「…まあ。そういうことがあったのですわ」

「へえー。そんなことがあったのか」

「あの時庶民はマーサハウスというところで寝泊まりしていましたからね。夜に別れた後だったので知らなくても無理はないでしょう」

「なあ、ジン。俺は彼女らなら頼んでもいいと思うんだ。…駄目か?」

「…好きにしろ」

「ありがとう。それで中がこうなってしまったんだけど…代用できるパーツがなくてね」

「空き缶にハンガー…?どういうことですか?確かに空き缶ならモーターメントエネルギーを伝えることは出来そうですねが…」

Dホイール製造会社の令嬢である幸子が見てみるも、その異様な部品を見て驚いている。

「ハンガーはしなりがあつてフィットしやすいからな。俺のDホイールやデュエルディスクにも組み込んであるぜ」

「えっ!?君もかい?」

「ああ、俺も手作りでDホイールを作ったからな。そうだ!幸子、今お前がつけているデュエルディスクにも入ってるな。ちよūdいいや、貸してくれ」

「だがそんなことをすれば君がデュエル出来なくなるんじゃない?」

「大丈夫だ、これはドロ―特訓用の特別製だからな。…よつと」

コナミはディスクのプレートを開き、そこから取り出したハンガーを彼らのDホイールへと組み込んだ。

「すごいや!しつかりはまったよ!後は空き缶が何とかなれば!」

「俺も何回か空き缶潰したことがあるけど大丈夫だ。空気を中に入れればほとんど元に戻るぜ」

「ああ、そうか!慌ててそんなことにも気付かなかったよ。なら空気入れを持って来れば!」

「いや、これくらいの空き缶なら何とかなるだろ。よいしよつと…ふっ!」

コナミは潰れた空き缶を取り出し、穴が開いたところから空気を入れると潰れていた部分が押し戻され、ほぼ元に戻る。

「…庶民。あなたどれだけ肺活量すごいんですの?」

「いや、俺も出来るぜ?」

「!?」

幸子が言葉を失う中、彼らはDホイールを動かしてみる。

「やった!動くようになったよ!」

「マジか…こんなすぐに直るなんてな」

「ありがとう、君たちのおかげだ!」

「いいってことよ、お前たちもWRGP出てるんだろ?もし当たったらよろしくな!」

だが、彼らはまだ知らなかった。彼らは明日戦うチーム同士だということを。

## とんだロマンチストですわね

公園で幸子のドロー特訓をした翌日、Bブロック予選第2試合チーム太陽vsチームネオサティスフアクションの試合が始まろうとしていた。彼らはここで初めて昨日であった3人組が今日の試合での相手だということに気がつく。

「うーん…もし当たったらよろしくとは言ったけどいきなり当たるとはな」

「昨日Dホイールを直したのは敵に塩を送る行為だったかもしれないわね」

「へっ、全力でぶつかってくる相手を俺たちの全力で押し返す！それだけだ！」

とはいえ気落ちすることはなく彼らは試合の準備を進めている。するとコナミはレーン横の待機スペースに見知った顔を見つけた。

「あれ？おーい、牛尾！」

「ん、ああ…コナミか」

セキュリティの服装に身を包んだ牛尾がDホイールを横に置いて会場を見渡していた。

「こんなところで何してんだ？」

「このWRGPはオートパイロット機能が切られているから万が一の時のために俺たちセキュリティが駆り出されているってわけよ。…それに」

「それに？」

牛尾が何かを促すような目で見てくるがコナミは特に何も思いつかなかった。

「…はあ。お前は同じブロックのチームのメンバーくらいは確認しておけよ」

「同じブロックというと確か…ユニコーンと太陽とセキュリティだったな。…あっ！」

「遅えよ。チームセキュリティなんてそのままの名前で出てやってんだから気づいてくれよ」

「いや、優勝候補のユニコーンに気を取られてな…。悪い悪い」

「全く…。この試合の後は俺たちとユニコーンの試合なんだよ。だから試合と兼ねてこうしてなんかあった時用に待機させられてるってわけだ」

彼は本当は試合に集中して願わくば遊星達と戦いたいと思ってるが安全が第一という考えに反対する訳ではないので大人しくセキユリテイの務めを果たしている。

「へー、そうだったのか。メンバーは？」

「俺と風間とサージエント相川だ。風間は反対側を見てるからここにはいねえが相川ならいるぞ。…そう言えばユニコーンとお前らとの試合のビデオを見て研究してた時に相川はやけにお前に興味を持っていたな」

「…俺に？なんでだ？」

「さあな。せっかくだ…ちよつと呼んできてやるよ」

そう言つて牛尾はその場から離れていく。コナミはその間に相川がコナミに興味を持っていた理由を考えるもセキユリテイの知り合いが牛尾くらいしかいないので見当もつかなかった。

「まあ、本人に聞けばいいか」

考えているうちに牛尾に呼ばれた相川が挨拶をしてきた。

「お初にお目にかかる。本官はチームセキユリテイのメンバーの1人、サージエント相川というものだ。気軽に相川と呼んでもらって構わない」

「相川か。俺はコナミだ。それで牛尾が言つてたんだけど…ユニコーンとの試合で何か俺に気になることあったのか？」

「ああ。…その前に確認しておこう、ダイダロスブリッジで機皇帝というモンスターを扱うDホイーラー、ゴーストを倒したのはお前だったな？」

「ん、まあそうだけど。なんで知ってるんだ？」

「…ゴーストはWRGPの予選参加者を減らすために数々のDホイーラーを襲っていた。セキユリテイが関わらないわけがないだろう、牛尾さんもデュエルを仕掛けて逮捕しようとしていたしな」

「そういやそうだったな…」

「そして本官は牛尾さんから機皇帝はシンクロキラーであるということとを伝えられている。…単刀直入に聞こう。ユニコーンとの試合でお前が使った融合召喚、それはあの機皇帝の対策。そうだろう?」

「!?よ、よく分かったな。まああれが正解かは俺も分からねえけど…今俺が出来る対策はそれくらいだからな」

コナミが今まで考えてきたシンクロキラーの機皇帝への対策、融合召喚。シンクロモンスターでないならば吸収されないという答えを出していたがまさか初対面の人にそのことを見抜かれるとは露ほども思っておらず、かなり驚いている。

「やはりな…。あの融合には特別な感情が入っていると思っていたのだ」

「よくそんなことまで分かるな…もしかしてあんたも融合使いなのか?」

「その通りだ。そして…ここからが本題だ。牛尾さんほどのデュエリストがやられた機皇帝の対策はセキュリティでも当然考えられている。あのゴーストはロボットだった…つまりこのWRGPにそれを作ったものが何らかの形で関わってくると見て間違いないしな」

「それで…何か対策は見つかったのか?」

「セキュリティとして答えは出ていない。だが…本官にはある」

「…!い、いったいどんな答えを?」

「それは簡単には教えられないが…ヒントをやるならば、お前の使う融合召喚のさらに先をいく融合召喚とでも言おうか」

「俺の融合召喚の先をいく融合召喚だって!?!気になるな…教えてくれない?」

「ダメだ、やすやすと教えられるようなものではないのでな。…だが」

「だが?」

相川は少し考えた後、コナミにこう告げた。  
「もし本官のチームにお前のチームが勝つようなことがあれば…プロトタイプで良ければ伝授を考えよう」

「プロトタイプとか伝授とかよく分からねえけど…。俺は…じゃな



「いい、俺たちは負ける気はないぜ！」

「そうか、覚悟のほどは分かった。だが、そろそろピットに戻った方がいい。試合開始の時に走者以外のメンバーがピットに入っていないと不戦敗になるからな」

「え？…やべっ！もうこんな時間か！また今度の試合でな！」

残り試合開始3分前、ギリギリでコナミはピットに戻ってきた。

「遅いぞコナミ。不戦敗になんてなったら満足できねえぜ！」

「わ、悪い。ちよつとな。幸子は？」

「もうレーンの方に行つたぜ。今回もあいつがファーストホイーラーだからな。…そうだ。幸子が昨日お前に返し忘れた200枚くらいのカードをそこに置いてるから崩さないように気をつけるよ」

「そう言えば忘れてたな。気をつけるぜ」

試合開始1分前、MCの実況が会場に響き渡った。

「予選Bブロック第2試合がいよいよ始まるぞー！優勝候補のチームユニコーンを倒した今大会のダークホース、チームネオサティスファクションと実力が未知数なチーム太陽が対決だ！」

デュエルを今か今かと待っている観客の歓声で会場が盛り上がる中、いよいよスタートのカウントダウンが始まる。ファーストホイーラーの幸子と吉蔵が並びあい、緊張感が走っていた。

「君にはジンを助けてもらった恩があるけど、全力で行かせてもらおうよー！」

「もちろんですわ。わたくし達も全力で立ち向かうとしましょう」

最後のカウントダウンが点滅し、お互いDホイールを走らせる。性能は幸子の方が圧倒的によく、順当に幸子が先攻かと思われたが…。

「うわわっ！危ない！」

「…え？きやあ！」

第一レーンへと差し掛かる寸前、Dホイールがあまりうまく曲がらなかったのか幸子のDホイールの後方へそのまま吉蔵のDホイールが突っ込んでしまう。

「おーつと！チーム太陽の吉蔵、激しいタックルで海野選手のDホイールのバランスを崩したぞー！」

「ご、ごめん！わざとじゃないんだ！」

「うぐぐ…分かってますわ」

レーンへ差し掛かったところでぶつかっただため幸子は外へと押し出されてしまいリカバリーに時間がかかってしまう。結果、そのままチーム太陽の先攻でデュエルが始まる。

「よし、先攻をとったぞ！」

「いけ、ヨシ！」

「「デュエル！」」

「俺のターン、ドローだ！」

吉蔵

スレイドカウンター  
s c 0 ↓ 1

幸子

s c 0 ↓ 1

「来た…。俺はキーマイスを召喚！」

「キーマイスですって？」

フィールドを待ったのはとても小柄な妖精。手にはステッキを持っており、そこから降り注がれる光の粉が太陽の光でキラキラと輝いている。

キーマイス 攻撃力400

「何と、チーム太陽の吉蔵！レベル1で攻撃力が400しかない通常モンスターを攻撃表示で召喚だー！」

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

吉蔵 LP4000

フィールド 『キーマイス』（攻撃表示）

セット1

手札4

s c 1

「何のつもりかは知りませんが…わたくしのターン！」

吉蔵 s c 1 ↓ 2 幸子 s c 1 ↓ 2

「わたくしはオーシャンズ・オーパーを召喚ですわ！」

赤い金魚のような魚が海を守るためにヒレで槍を持ちながら現れる。

オーシャンズ・オーパー 攻撃力1500

「キーマイスの攻撃力は400。一気にダメージを与えてさしあげま

すわ！」

「そうはいかないよ！トラップ発動、隠れ兵！相手がモンスターを召喚した時に手札からレベル4以下の閥属性モンスターを特殊召喚出来るよ！来て、手をつなぐ魔人！」

小さな体をした悪魔が、自身のサイズに合っていないような大きな手を振りながら飛び出してきた。

手をつなぐ魔人 守備力1600

「俺の場を手をつなぐ魔人がいる時には他のモンスターを攻撃の対象にはできないんだ！」

「…キーマイスへの攻撃が封じられましたか…。まあいいでしょう。ターンエンドですわ！」

幸子 LP4000

フィールド 『オーシャンズ・オーパー』（攻撃表示）

セット0

手札5

sc2

「俺のターン！」

吉蔵 sc2↓3 幸子 2↓3

「俺はキーマイスを守備表示に変えるよ！」

キーマイスが守備隊形を取った時、隣にいた小さな悪魔が手を繋いできた。

キーマイス 守備力300

「さらに手をつなぐ魔人は俺の場にいるこのカード以外の表側守備表示モンスターの元々の守備力分だけ守備力をあげるんだ！」

「む…厄介ですわね」

繋いだ手から小さな悪魔へとエネルギーが伝わって悪魔がパワーアップしていく。

手をつなぐ魔人 守備力1600↓1900

「そしてプリヴェント・ラットを召喚だー！」

毛が集まり硬い皮のようになってるネズミがフィールドを歩き出す。

プリヴェント・ラット 攻撃力500

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「プリヴェント・ラットの守備力は2000…あのモンスターを守備にされれば突破は容易ではないですわね」

吉蔵 LP4000

フィールド 『キーマイス』（守備表示） 『手をつなぐ魔人』（守備表示） 『プリヴェント・ラット』（攻撃表示）

セット1

手札2

sc3

「ですが今の守備力は1900。突破できない数値ではないですわ！わたくしのターン！」

吉蔵 sc3↓4 幸子 sc3↓4

「わたくしはオーシャンズ・オーパーをリリースして暗黒大要塞鯨をアドバンス召喚しますわ！」

幸子のフィールドが大波に飲まれていくとそこには巨大なシャチとその上に築き上げられた要塞がそびえ立っていた。

暗黒大要塞鯨 攻撃力2100

「バトル！暗黒大要塞鯨<sup>シャチ</sup>で手をつなぐ魔人へと攻撃！」

シャチの上にそびえ立つ要塞から手をつなぐ魔人に向かって大砲が発射された。

「やらせないよ！トラップ発動、城壁！手をつなぐ魔人の守備力をエンドフェイズまで500上げるよ！」

手をつなぐ魔人 守備力1900↓2400

「なっ…！」

大砲の弾は城壁によって阻まれ、城壁から放たれた弓矢がシャチをかすめた。

幸子 LP4000↓3700

「くっ…やってくれましたわね。わたくしはこれでターンエンド！」

時間がたつと城壁は地面の中へと沈んでいった。

手をつなぐ魔人 守備力2400↓1900

幸子 LP3700

フィールド 『暗黒大要塞艦』（攻撃表示）

セツト0

手札5

sc4

「俺のターン！」

吉蔵 sc4↓5 幸子 sc4↓5

「俺はプリヴェント・ラットを守備表示にするよ！」

「く……！」

ネズミが手を差し出すと小さな悪魔がその手を包み込むように握った。

プリヴェント・ラット 守備力2000

手をつなぐ魔人 守備力1900↓3900

（徹底的に守備を固めていますわね……ですが守ってばかりでは勝てませんわ。ここからどう仕掛けてくるのでしょうか……？）

「そして俺はスピード・ワールド2の効果を発動だ！」

「……！」

「scを4つ取り除いて手札の<sup>スピードスベル</sup>sp1枚につき相手に800のダメージを与えるよ！俺の手札には1枚！」

吉蔵のDホイールから放たれた衝撃波が幸子のDホイールを襲った。

幸子 LP3700↓2900

吉蔵 sc5↓1

「そういうことですか……！徹底的に防御を固め、大会規定により破壊することができないスピード・ワールド2の効果ダメージで堅実にライフを削っていく戦略！」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

吉蔵 LP4000

フィールド 『キーマイス』（守備表示） 『手をつなぐ魔人』（守備表示）

『プリヴェント・ラット』（守備表示）

セツト2

手札 1

sc 1

「ですがわたくしがそう簡単にやられるとは思わないことね。わたくしのターン！」

吉蔵 sc 1↓2 幸子 5↓6

「来なさい、魚雷魚！」

魚型の爆弾がシャチの上の要塞へと置かれる。

魚雷魚 攻撃力1000

「さらに暗黒大要塞鯨の効果が発動！わたくしのフィールドの魚雷魚をリリースすることでフィールド上のモンスター1体を破壊しますわ！当然狙うのは手をつなぐ魔人！」

魚雷がセットされ、シャチの口の部分から発射されるとまっすぐ悪魔へと向かっていった。

「わわっ！そんなことはさせないよ！永続トラップ発動、スクラム・フォース！俺の場に表側守備表示モンスターが2体いる場合、俺の守備モンスターは相手の効果の対象にならず、相手の効果で破壊されない！」

「なんですって…これも防ぐというの!?!」

手を繋いだモンスター達が必死に魚雷を弾き飛ばし難を逃れた。

「カードを1枚伏せて…ターンエンドですわ！」

幸子 LP 2900

フィールド 『暗黒大要塞鯨』（攻撃表示）

セット 1

手札 4

sc 6

「よし…いい感じだ！俺のターン！」

吉蔵 sc 2↓3 幸子 sc 6↓7

「俺はウイング・エッグ・エルフを召喚だー！」

空中に卵が浮いたかと思うと中央のあたりが割れていき、そこから天使の羽が生えてきた。中からは小さな天使が様子を伺っている。

ウイング・エッグ・エルフ 攻撃力500

「ターンエンドだ!」

吉蔵 LP4000

フィールド 『キーマイス』(守備表示) 『手をつなぐ魔人』(守備表示) 『プリヴェント・ラット』(守備表示) 『ウイング・エッグ・エルフ』(攻撃表示)

セット1 『スクラム・フォース』

手札1

sc3

「ウイング・エッグ・ウルフの守備力は1300。これ以上手をつなぐ魔人の守備力が上がってしまえば手がつけられなくなりますわ!このターンが勝負…ドロー!」

吉蔵 sc3↓4 幸子 sc7↓8

「わたくしはスピード・ワールド2の効果を発動致しますわ! scを4つ取り除くことで手札の sp1枚につき800のダメージを! わたくしの手札には2枚!」

「うわわっ! 君もその効果を!?!」

今度は幸子のDホイールから吉蔵のDホイールへ衝撃が放たれた。

吉蔵 LP4000↓2400

幸子 sc8↓4

「うう…もう一回受けければライフが800に!」

「わたくしは手札から sp1サモン・スピダーを発動します! scが4以上の時手札のレベル4以下のモンスターを特殊召喚できますわ。来なさい、砲弾やり貝!」

「えっ…もう1回使わないの?」

先端が鋭く尖っている貝が要塞の上に置かれた。

砲弾やり貝 攻撃力1000

「そして暗黒大要塞鯨の効果を発動! 自分フィールドの砲弾やり貝を1体リリースすることでフィールドの魔法・罠カードを1枚破壊できますわ! わたくしが狙うのは…その伏せカード!」

要塞の砲身にセットされたやり貝が発射され、吉蔵が伏せていたカードを貫いた。

「ああっ！攻撃の無力化が！」

「うかつに突っ込んでいればバトルフェイズを強制終了されてしましたわね……」

「で、でも！俺のフィールドには守備力3900の手をつなぐ魔人がいるんだよ！しかもこいつ以外には攻撃出来ない！」

「承知の上ですわ！わたくしはアームズ・シーハンターを召喚！」

2本のヤリを手に持った半魚人がフィールドに降り立った。

アームズ・シーハンター 攻撃力1800

「そして…バトル！アームズ・シーハンターで手をつなぐ魔人へ攻撃！」

「ええ!?!」

アームズ・シーハンターは左手に持っていたヤリで小さな悪魔を突いたが、力及ばず弾かれてしまう。

幸子 LP2900↓800

「くうっ…！」

「ふ、ふう…良かった。何かしてくるかと思ったよ」

「甘いですわね。すでに何かしていますわ」

悪魔の握力が弱っていき、掴んでいた仲間の手を離してしまう。どうやらシーハンターがさしたヤリは毒が仕込まれていたようだ。

手をつなぐ魔人 守備力3700↓1600

「アームズ・シーハンターがこのカード以外に水属性モンスターがいる時に戦闘を行った場合、このカードと戦闘を行ったモンスターの効果をダメージ計算後に無効化しますわ！」

「む、無効だって！スクラム・フォースじゃ凌げない！」

「そして…手をつなぐ魔人の効果が無効になったことで他のモンスターへ攻撃が出来ますわ！暗黒大要塞鯨でウイング・エッグ・エルフに攻撃！」

今まで攻撃が通らなかつたことでシャチがイライラしてきたのか、大津波を起こして卵ごと天使をどこかへ流してしまった。

吉蔵 LP2400↓800

「ああっ！しまった！」



「そしてわたくしは…。いえ、これでターンエンドですわ！」

「おおっと！見事チーム太陽のロックを突破した海野選手だがこれはプレイングミスか!?もう1度スピード・ワールド2のscを4つ取り除く効果を使えばこのターンで吉蔵選手を倒すことが出来たぞー！」

幸子 LP800

フィールド 『暗黒大要塞鯨』（攻撃表示） 『アームズ・シーハンター』（攻撃表示）

セット1

手札2

sc4

「うう…なんだか怖いなあ。俺のターン！」

吉蔵 sc4↓5 幸子 sc4↓5

「と、とりあえずカードを1枚セット！そして…スピード・ワールド2の効果を発動！scを4つ取り除いて相手に手札のsp1枚につき800のダメージを与えるよー！」

吉蔵のDホイールから幸子に向かって衝撃波が放たれた。

「ふ…このわたくしがプレイングミスですって？とんだロマンチストですわね。トラップ発動、リフレクト・ネイチャー！このターン相手が発動したダメージを与える効果は相手ライフにダメージを与える効果となりますわ！」

「し、しまったあー！」

幸子が発動したトラップから反射板が出てきて衝撃波を吉蔵の方へと弾き返した。

吉蔵 LP800↓0

吉蔵 sc5↓1

「決まったー！海野選手のカウンターによって吉蔵選手のライフが0になったぞ！チーム太陽はセカンドホイーラーへと交代だー！」

（このWRGPに出場してきた以上、恐らくこのスピード・ワールド2でのバーン戦術以外にも何か狙いがあるはず。それを見極めるためにもここはわたくしが粘って2人に繋げるのが1番チームのためになるはずですわ）

ライフが0になった吉蔵はピットへ帰っていく。

「ごめん！負けちゃった！」

「いや、十分だよ。あとは俺たちに任せてくれ」

「今、何ターン経ったかな？」

「5ターンさ。そして次のジンのターンで6ターン目に入る」

「よし、太郎。最高の形でお前へ繋いでやるぜ！」

セカンドホイーラーの甚兵衛が吉蔵と交代する。吉蔵からシールを貰った甚兵衛はそのまま吉蔵が載っていたDホイールに乗ってレーンへと出てきた。彼らは決して裕福ではないので1つのDホイールしか用意できなかったのだ。

「あんたには借りがあるが…。俺は手加減しないぜ！」

「ええ、かかってきなさい。わたくしがコテンパンにやっつけてさしあげますわ！」

「「デュエル！」」

奇妙な戦術をとるチーム太陽。彼らとの対決はここからどうなっていくのだろうか…。

## フオア・ザ・チーム

徹底的に防御を固めてくるチーム太陽のファーストホイラー、吉蔵を何とか倒すことに成功した幸子。セカンドホイラーの甚兵衛はどのような戦略を取ってくるのだろうか…？

「俺のターン！」

スピードカウンター

甚兵衛 S C 1↓2 幸子 SC5↓6

「永続トラップ発動、聖なる輝き！お互いこれからモンスターをセツトする場合は表側守備表示で呼ばなくてはならない！」

「一体何を…？！」

「俺はこの効果を使い、手をつなぐ魔人を守備表示で召喚する！」

「ま、またですよ!?!」

小さな悪魔が現れると彼の場のモンスター達が再び手を繋ぎだした。

手をつなぐ魔人 守備力1600↓5500

「そして手をつなぐ魔人はこのカード以外の俺の表側守備表示モンスターの元々の守備力分だけ守備力が上がる！」

再び繰り返される太陽の防御戦術。さすがに飽きてきたのかスタンドにいるマナーの悪い観客が野次を飛ばし始める。

「何とでも言いやがれ。俺たちにはこれしかねえんだ…！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

甚兵衛 LP4000

フィールド 『キーマイス』（守備表示） 『プリヴェント・ラット』（守備表示） 『手をつなぐ魔人』（守備表示、効果無効） 『手をつなぐ魔人』（守備表示）

セット2 『聖なる輝き』 『スクラム・フォース』

手札3

SC2

「このまま守備を固めてスピード・ワールド2の効果ダメージで攻める戦術を続ける気ですか…？いえ、彼の目は何かをまっすぐに見つめていますわ。恐らく…何かあるとは思いますがそれが何かは分か

らないですわね。…ドロー！」

甚兵衛 sc3↓4 幸子 sc7↓8

「相手のscは4、もし次のターンスピード・ワールド2の効果を受ければわたくしのライフは…。やることはやっておきましょうか。スピード・ワールド2の効果発動、scを4つ取り除き相手にわたくしの手札のsp1枚につき800のダメージを与えます！わたくしの手札には1枚！」

幸子のDホイールから甚兵衛のDホイールへ衝撃波が放たれる。

甚兵衛 LP4000↓3200

幸子 sc8↓4

「くっ…手をつなぐ魔人を超えられないなら効果ダメージで来るってことか」

「さて、どうでしょうね。わたくしは手札からsp1カウントアップを発動致しますわ。scが2つ以上ある時、手札を任意の数墓地へと送ることで1枚につきわたくしのscを2つアップします！わたくしは1枚のカードを墓地へ！」

一旦減速した幸子のDホイールが急加速していき、甚兵衛のDホイールとの距離を離していく。

幸子 sc4↓6

「さらに墓地のフィッシュボーグランチャーの効果を発動！わたくしの墓地のモンスターが水属性のみの場合、このカードは墓地から特殊召喚できますわ！ただしこの方法で呼ばれたこのモンスターはホイールドを離れると除外されます」

ゴーグルをつけた耐水機能つきのロボットが両手に鋭利な刃物を持ちながら現れた。

フィッシュボーグランチャー 攻撃力200

「行きますわよ。わたくしはオイスターマイスターを召喚！そして：わたくしはレベル3のオイスターマイスターとレベル5の暗黒大要塞鯨ジャチにレベル1のフィッシュボーグランチャーをチューニング！」

「シンクロ召喚…しかもレベル9のレアカードか！」

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！凍らせなさい、氷結界の龍 トリシューラー！」

3体のモンスターが同調していくと3つ首の白きドラゴンが降り立った。その刹那、シャチの大波で飛び散って出来た水たまりがほとんど凍りついた。

氷結界の龍 トリシューラー 攻撃力2700

「で、でけえ……！」

その大きさは先ほどまでいたシャチの比ではなく、スタンドに設置されている天井すら超えてしまうほどだった。

「わたくしが探し求めていた最後の氷結界シンクロモンスター……その姿をようやくこの目で見れましたわ」

皮肉にもこのモンスターは甚兵衛が幸子に助けられた時、のこのこと帰ってきた金持ちの青年に礼として貰ったカードだった。

「このモンスターはシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド・墓地のモンスターをそれぞれ1枚まで選んで除外することができますわ」

「だがスクラム・フォースがある限り、俺たちの守備モンスターは効果の対象にはならねえ！」

「残念ですがこの効果は対象を取りませんわ！」

「何だど!?レアカードめ……！だが俺がレアカードに屈すると思うなよ！カウンタートラップ発動、昇天の角笛！モンスターの特殊召喚を俺のモンスターを1体リリースすることで無効にできる……！」

「な、何ですって……！」

「俺は……効果が無効になっている手をつなぐ魔人をリリース！」

手をつなぐ魔人 守備力5500↓3900

(一番ステータスの低いキーメイスをリリースしない……?)

甚兵衛の発動したトラップカードから番人が動物のツノで作られた笛を吹きならし、周囲を無差別に凍らすドラゴンを墓地へと封印した。

「まさか初の召喚が失敗とは……何とも言えない気持ちになりますわね」

「へっ…どうだ！あんたの場には攻撃力1800のアームズ・シーハンターが1体だけ！そして手をつなぐ魔人がいる限り他のモンスターには攻撃できない。あんたにこの状況は突破できねえだろ！」

「ええ…そうですね。ですが」

「ん？」

「これは…チーム戦ですわ！わたくしはオイスターマイスターの効果を発動！このカードが戦闘以外でフィールドから墓地へ送られた時、場にオイスタートークンを特殊召喚します！」

場にわずかに残った水たまりにオイスターマイスターの子供が残っていた。

オイスタートークン 守備力0

「そして…バトルですわ！アームズ・シーハンターで手をつなぐ魔人へ攻撃！」

「な、何い!？」

アームズ・シーハンターがヤリを小さな悪魔へ差し込むも、簡単に弾き返されてしまう。

幸子 LP800↓0

「おっとー!?これはどうしたことかー!海野選手まさかの自滅だー!」

「ですが…ただの自滅ではありませんわ」

「…あっ!」

小さな悪魔の握力がなくなっていく、手を離してしまう。先ほどの槍で毒が回っていたのだ。

手をつなぐ魔人 守備力3900↓1600

「アームズ・シーハンターがこのカード以外に水属性モンスターがいる時にバトルを行った場合、戦闘を行ったモンスターの効果をダメーシ計算後に無効にしますわ。…さて、あとは任せるとしましょうか」

幸子はネオサティスフアクションのピットへと戻っていく。

「ふう…後は頼みましたわよ」

幸子は鬼柳にシールを渡す。

「おう!…だけど無理に行かなくても良かったんじゃないか?向こう

はあんなに防御的に来てたんだしよ」

鬼柳は腕にシールを付けながら幸子と情報を交換する。

「説明しづらいのですが…そうですね。あの戦術以外に秘策があるとすればそのために向こうは時間稼ぎをしている…とは考えられませんか？」

「なるほど、確かにこのまま終わる感じはしねえな」

「ですので短期決戦を狙った。…まあただの勘ですけどね」

「相手は粘るのが目的…か。覚えておくれ」

鬼柳のDホイールにコナミがカードを移し終わり、鬼柳はレーンへと出て行った。

「さあ、満足させてもらうぜ甚兵衛！」

「来い！」

「「デュエル！」」

「俺のターン、ドロー！」

甚兵衛 sc4↓5 鬼柳 sc6↓7

「まず俺はスピード・ワールド2の効果を発動！scを4つ取り除き相手に手札のsp1枚につき800のダメージを与えるぜ！俺の手札には1枚！」

「くっ…！」

甚兵衛 LP3200↓2400

鬼柳 sc7↓3

「さらにオイスタートークンをリリースし、インフェルニティ・デストロイヤーをアドバンス召喚！」

屈強な肉体を持った悪魔がフィールドに現れた。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「バトルだ！アームズ・シーハンターで効果が無効になった手をつなぐ魔人を、インフェルニティ・デストロイヤーでプリヴェント・ラットに攻撃！」

シーハンターは槍で、デストロイヤーは鍛え上げられた自身の腕で敵を攻撃し、打ち倒した。

「これでお前の場に残ったのはキーマイスだけ、時間稼ぎもここまで

だ！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『アームズ・シーハンター』（攻撃表示） 『インフェルニティ・デストロイヤー』（攻撃表示）

セット1

手札4

sc3

「あと…3ターン。それまで耐えるんだ。俺のターン！」

甚兵衛 sc5↓6 鬼柳 sc3↓4

「この瞬間トラップ発動！<sup>フルバースト</sup>全弾発射！俺の手札を全て墓地へ送り、捨てた数×200のダメージを与える！俺は4枚の手札を墓地へ！」

「な…!?!」

鬼柳の発動したトラップから4つのミサイルが発射され、どれも甚兵衛のDホイールへと命中する。

甚兵衛 LP2400↓1600

「鬼柳のインフェルニティ・デストロイヤーは手札が0枚の時に相手モンスターを戦闘で破壊すれば相手に1600のダメージを与えられる！」

「次のターンで終わりですわ！」

「俺は…聖なる輝きの効果で手札から手をつなぐ魔人を守備表示で召喚する！」

「それでも徹底して守ってくんのか…!?!」

フィールドに三たび現れた小さな悪魔がキーマイスと手をつないだ。

手をつなぐ魔人 守備力1600↓1900

「さらにs pーサモン・スピードを発動！scが4つ以上ある時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、悟りの老樹！」

フィールドに根っこが張り巡らされ、そこから木が生えてくる。老樹は枝を伸ばして魔人と手をつないだ。

悟りの老樹 守備力1500



手をつなぐ魔人 守備力1900↓3400

あまりに変わらぬデュエル展開にスタンドからブーイングが巻き起こる。そのブーイングはネオサティスフアクシヨンのピットにいる彼らですらやりにくそうにするくらい激しい。

「…俺はカードを1枚伏せてターンエンド!」

甚兵衛 LP1600

フィールド 『キーマイス』(守備表示) 『悟りの老樹』(守備表示)

『手をつなぐ魔人』(守備表示)

セット2 『聖なる輝き』 『スクラム・フォース』

手札0

sc6

「俺のターン!」

甚兵衛 sc6↓7 鬼柳 sc4↓5

「そっちが守備を固めるのを変えないならこっちが戦術を変えるだけだ!俺はアームズ・シーハンターをリリースし、インフェルニティ・アーチャーをアドバンス召喚!」

自分の背の丈よりでかい弓矢を持った弓兵がフィールドに降り立つ。

インフェルニティ・アーチャー 攻撃力2000

「俺はこのままバトルに入らせてもらおうぜ!」

「だが手をつなぐ魔人を超えない限り俺のモンスターには攻撃出来ない!」

「甘いぜ!インフェルニティ・アーチャーは俺の手札が0枚の時ダイレクトアタックが出来る!行け、インフェルニティ・アーチャー!」  
インフェルニティ・アーチャーの弓は手をつなぐモンスター達を超え、甚兵衛へと向かっていく。

「まだやられてたまるかよ!トラップ発動、ホーリー・エルフの祝福!俺の場のモンスター1体につきライフを300回復する!」

甚兵衛の発動したトラップから出てきたホーリー・エルフが手に持った水晶玉から甚兵衛へと光を降り注ぎ、甚兵衛のライフを回復させた。

甚兵衛 LP1600↓2500

「だがダメージは防げねえ！」

空から降下してきた弓が甚兵衛へと突き刺さった。

「ぐっ…だがまだライフは残ってるぜ」

甚兵衛 LP2500↓500

「仕留め損ねたか…だが限界は近いはずだ。ターンエンド！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・デストロイヤー』（攻撃表示）

『インフェルニティ・アーチャー』（攻撃表示）

セツト0

手札0

sc5

「はあ…はあ…。8ターン目…！俺のターン！」

甚兵衛 sc7↓8 鬼柳 sc5↓6

「…俺はドレイクを守備表示で召喚！」

長い尻尾が特徴的な青い鳥がフィールドを舞う。老樹の枝に降りて、尻尾で魔人と手をつないだ。

ドレイク 守備力800

手をつなぐ魔人 守備力3400↓4200

「ターンエンドだ！」

甚兵衛 LP500

フィールド 『キーマイス』（守備表示） 『悟りの老樹』（守備表示）

『手をつなぐ魔人』（守備表示） 『ドレイク』（守備表示）

セツト1 『聖なる輝き』 『スクラム・フォース』

手札0

sc8

「よし…さすがに防御手段もなくなつたか？俺のターン！」

甚兵衛 sc8↓9 鬼柳 sc6↓7

「まずはカードを1枚伏せるぜ。…バトル！インフェルニティ・アーチャーでダイレクトアタックだ！」

再び弓兵から手をつなぐモンスター達を超えて弓矢が放たれる。

「すまねえ太郎…俺はここまでだ。あとは頼む…！」

甚兵衛 LP500↓0

「決まったー！セカンドホイラー対決を制したのは鬼柳！チーム太陽がここから勝つには2人抜きが必須となるぞー！」

甚兵衛がピットに帰っていく。だがその表情はここから2人抜きしなくてはならないという絶望ではなく、むしろ太郎に任せれば勝てると思っている表情だった。

「…あいつらピンチなのになんか笑ってるな」

「そうですね。何が彼らをそうさせるのでしょうか…？フィールドも防御としては固いですが決して有利な盤面ではないというのに…」

そんな時だった。ピット内に入ってくるほどの風が吹き、積み上げられていたコナミの拾った200枚近くのカードの一部が崩れてしまった。コナミがカードを風が当たらない場所へ移動させようとして近づいた時、1枚のカードが目に入ってくる。そのカードが見えた瞬間、コナミは思わず動きを止めてしまった。

「どうしましたの？」

「…幸子。俺たちやばいかもしれねえ…！」

コナミの目に入ったのは何て事のないどこにでも出回っているノーマルカードだった。そのカードは誰もが持っているながらも忘れられるほど誰からも使用されないカード、だがその能力は伝説の3幻神にも匹敵すると言われていた。

## 自分達の可能性を信じて

チームネオサティスフアクションのボードによって鬼柳へチーム太陽の狙いが伝えられる。その情報はMCにも流れていった。

「…なんと！ここに入ってきた情報によるとチーム太陽の狙いは…なんと！あの眠れる巨人ズシンの召喚だー！」

「…！気づかれたか…！」

チーム太陽のラストホイラーの太郎が少し焦りを覚える。何故なら狙いが露呈してしまえばあるモンスターが狙われてしまうからだ。

「このモンスターの召喚にはレベル1の通常モンスターを自分のターンで数えて10ターン存在し続けることが条件となっている！このモンスターを公式戦で呼び出した者は未だいない！だが、チーム太陽の場には8ターンの間キーマイスが存在している！我々は歴史的な快挙の目撃者となれるのかー!?!」

この実況を聞いたスタンドの観客の態度が変わっていく。先ほどまでブーイングをしていた者達やネオサティスフアクションに声援を送っていた者達ですらチーム太陽をコールし、応援している。

「俺たちのことをこれほどの人たちが…!?!」

レーンへと出てきた太郎はスタンド中から聞こえてくる声援に打ち震える。

「へっ…太郎よ。ズシンを召喚する気とは満足させてくれるじゃねえか」

「鬼柳…。ああ、俺は必ずズシンを召喚してみせる！ここまで繋いでくれたあいつらのためにも、俺を送り出してくれた親父達のためにも！」

「「デュエル！」」

「俺のターン！…これで9ターン目！」

スピードカウンター

太郎    s    c    9 ↓ 10    鬼柳    s c 7 ↓ 8

「スピード・ワールド2の効果を発動！s cを10個取り除くことでフィールド上のカードを1枚破壊する！インフェルニティ・アー

チャーには消えてもらおう！」

太郎 sc10↓0

「あのモンスターが破壊されれば手を繋ぐ魔人すら超えられなくなつてしまいますわ！」

弓兵へと降り注ぐ雷。彼に向かって一直線に落ちていった。

「させるかよ！俺は墓地のインフェルニティ・ビショップの効果を発動！手札が0枚の時、このカードを除外することでインフェルニティモンスターの破壊を防ぐことが出来る！」

そんな彼の前に本を持った司書が立ち、雷の身代わりとなった。

「…防がれたか。俺は聖なる輝きの効果で北風と太陽を守備表示で召喚！」

寒い風を運ぶ北風と暑い日照りを照らす太陽が共に現れる。彼らは旅人の上着を脱がせる勝負をしており、北風が力を示そうと強風を起こす。

北風と太陽 守備力1000

手を繋ぐ魔人 守備力4200↓5200

「場に1枚のカードを伏せる！ターンエンドだ！」

太郎 LP4000

フィールド 『キーマイス』(守備表示、9ターン目) 『悟りの老樹』

(守備表示) 『ドレイク』(守備表示) 『手を繋ぐ魔人』(守備表示)

セット2 『聖なる輝き』 『スクラム・フォース』

手札4

sc0

「このターンで仕留めるしかねえ、俺のターン！」

太郎 sc0↓1 鬼柳 sc8↓9

「俺は伏せてあるs p オーバー・ブーストを使いscを4つ増やす！だがエンドフェイズにscは1になる…！」

鬼柳のDホイールがスピード・ワールドによって出せる最大のスピードへと達する。モンスターのレベルの上限が12なようにscも上限が12までなのだ。

鬼柳 sc9↓12

「そしてスピード・ワールド2の効果を発動！s cを10個取り除き  
フィールドのカードを1枚破壊する！」

鬼柳のこの宣言に観客は動揺する。彼らはもはやズシンの姿を渴望しており、キーマイスが破壊しようとすることを汚いと罵り、悲鳴をあげる者もいた。既にこのスタジアムはネオサティスフアクションにとってはアウェイとなっている。

「スクラム・フォースを何とかしねえとキーマイスは効果破壊出来ねえ…！まずはスクラム・フォースを狙う！」

鬼柳のDホイールから放たれた雷が彼らの砦を撃ち抜く。

「だけど君にキーマイスが破壊できるかな！」

「やってやるよ！俺はインフェルニティ・ビートルを召喚！」

体が黒に染まったヘラクレスオオカブトが両羽を羽ばたかせフィールドを舞う。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「インフェルニティ・ビートルは手札が0枚の時にリリースすることでデッキから2体まで同名モンスターを呼ぶ効果があるが…。  
フルバースト全弾発射で墓地へ1枚既に送っちゃってる！だが！俺はレベル6のインフェルニティ・デストロイヤーにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング！」

「シンクロ召喚か…！」

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！いでよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン！」

胴体や顔、翼までもが漆黒に染まった竜がフィールドに飛翔した。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 攻撃力3000

「インフェルニティ・デス・ドラゴンは俺の手札が0枚の時相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力の半分のダメージを与える効果がある！これでキーマイスを…！」

「かかったね鬼柳！トラップ発動、はさみ撃ち！俺の場のモンスター2体と鬼柳の場のモンスター1体を破壊する！」

「しまっ…!?罠か！」

「俺は悟りの老樹とドレイクを破壊しインフェルニティ・デス・ドラゴ

ンを破壊する！」

老樹の枝とドレイクのくちばしによって左右から挟まれた黒き竜は消滅してしまった。

手を繋ぐ魔人 守備力5200↓2900

「くそ……キーマイスが破壊出来ねえ！このままズシンを呼ばれちゃうのかよ！」

キーマイスが守られたことに安堵する観客。スタンドからはズシンコールが響いてくる。

「なら、せめてお前に大ダメージを与えてやる！インフェルニティ・アーチャーで太郎にダイレクトアタック！」

もう幾度となく矢を放っている弓兵が最後の力を振り絞り、手を繋ぐモンスター達の頭を超えて太郎へと矢を放つ。

太郎 LP4000↓2000

「っし……ここまで削ればまだ勝つ可能性はある！」

「甘いね鬼柳！ズシンをデッキに組み込んだ時点で君たちがズシンを避けて攻撃してくることは予測済みさ。トラップ発動、白衣の天使！俺がダメージを受けた時に発動でき、俺のライフを1000回復する！」

「な……!?!」

白衣を着た天使が手から小さな光を灯し、それが太郎へと降り注がれる。

太郎 LP2000↓3000

「鬼柳の最後のあがきも効果は薄かったか！太郎はダメージを受けるのを想定していたぞー！」

「ありがとうジン……俺にこのカードを残してくれて」

「俺に出来ることはねえ……ターンエンドだ！」

鬼柳 sc3↓1

「……来た……！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・アーチャー』（攻撃表示）  
セット0

手札0

s c l

スタンドから沸き起こるズシンコール、その期待に応える瞬間が訪れた。

「俺のターンー！」

太郎 s c l ↓ 2 鬼柳 s c l ↓ 2

「このモンスターは自分フィールドに存在する10ターンの間生き続けたレベル1の通常モンスターをリリースすることで特殊召喚することが出来る！俺はキーマイスをリリース！これが俺達の絆の結晶！俺達の希望！現れる、眠れる巨人ズシン！」

海に面しているレーンの一角が崩れ落ち、そこから出てきたのは：巨大な大男。手にはその体と比べても遜色ない杖を握っており、少し杖を振るうだけでフィールドに暴風が巻き起こる。

眠れる巨人ズシン 攻撃力0

「やっと会えたなズシンー！」

太郎の呼びかけにズシンは野性味あふれる咆哮を放つ。その咆哮を受けてスタンドは今までにない以上盛り上がっている。もはや観客の誰一人としてチーム太陽の勝利を疑っていない。

「く…でけえ！でかすぎる！太郎…敵であるお前らに俺がこんなことを言うのは場違いだが…お前らはすげえよ！」

「諦めなければ必ずそこに可能性はある！たとえ低くても自分達の可能性を信じれば奇跡は起こるんだ！行くよ鬼柳！ズシンは相手のあらゆる効果の対象にはならず戦闘を行う効果モンスターの効果は無効になる！」

「だ、だが攻撃力が0ならばインフェルニティ・アーチャーを倒すことは…！」

「鬼柳、分かっているだろう？ズシンの力はそれにとどまらないことを！ズシンが戦闘を行う場合、このモンスターの攻撃力及び守備力は必ず戦闘を行う相手モンスターの攻撃力+1000となる！」

「な…！つまり、必ず戦闘で勝てるじゃねえか！」

「その通り、ズシンは無敵なのさ！さらに俺は物陰の協力者を攻撃表



示で召喚する！」

ズシンの影から出てきたのはとんがり帽子をかぶった2人の小人。冷静沈着な青髪の小人とお調子者の小人は太郎にバトンを繋いでくれたチームメイトを連想させる。

物陰の協力者 攻撃力1000

「さらに、北風と太陽と手を繋ぐ魔人を攻撃表示に変更！」

太陽は自分の力を生かして暑さによって旅人に上着を脱がせることに成功する。勝負は太陽の勝ちのようだ。

北風と太陽 攻撃力1000

手を繋ぐ魔人 攻撃力1000

「行くよ、鬼柳！場に2枚のカードを伏せてバトルだ！ズシンでインフェルニティ・アーチャーに攻撃！ズシンパンチ！」

眠れる巨人ズシン 攻撃力0↓3000

巨体から放たれるパンチの大きさに反撃の矢も全く効かず、圧倒的体格差に押しつぶされる。

鬼柳 LP4000↓3000

「ぐおっ！なんて衝撃だ…！」

「さらに物陰の協力者、北風と太陽、手を繋ぐ魔人でダイレクトアタック！」

1人1人ではあまり大きな力を持たないモンスターが手を繋ぎ、鬼柳へと突進してきた。

鬼柳 LP3000↓0

「ちくしょう…。満足させられちゃった…！」

「太郎が鬼柳を倒したぞー！ネオサティスフアクションのラストホイーラー、コナミはズシンを相手に0から挑まなくてはならない！これは勝負が決まったかー!?」

太郎 LP4000

フィールド 『眠れる巨人ズシン』（攻撃表示） 『北風と太陽』（攻撃表示） 『物陰の協力者』（攻撃表示） 『手を繋ぐ魔人』（攻撃表示）

セット2 『聖なる輝き』

手札1

ピットに戻ってきた鬼柳。しかしその顔に覇気はない。

「すまねえコナミ…！ズシンの召喚を止められなかった！」

「どんまいだ。だけどあれはすげえな…。俺はあのモンスター相手に立ち向かわなきやなんねえのか」

「ちよ、ちよっと始まる前からそんな弱気じゃ勝てるものも勝てませんわよ！」

「幸子もすまねえ！あいつらがターンを伸ばすのが目的だつてことに気づきながらも止められなかった！」

「終わったことをぐちぐちとうるさいですわよ！」

「…！」 「…！」

幸子の一声にネガティブが入っていた鬼柳も落ち着きを取り戻した。

「呼ばれてしまったものをあーだこーだいっても仕方がないでしょう。庶民、やれるだけやってきなさい」

「…分かった！ありがとな幸子、おかげで目が覚めたぜ」

「わたくしに勝ったあなたがここで負けてもらっても困りますの。巨人だろうと神だろうと打ち払ってきなさい」

鬼柳からシールを受け取ったコナミは幸子の言葉に頷くと、レーンへと出て行く。そして…ラストホイーラー同士のデュエルが始まる。

「行くぜ太郎。俺は最後まで諦めずにズシンに立ち向かう！」

「悪いね。ズシンは無敵だ！絶対に倒すことは出来ないよ！」

「 「デュエル！」 」

「俺のターン！」

太郎 s c 2 ↓ 3 コナミ s c 2 ↓ 3

「…待てよ。このモンスターなら！俺は大木炭18を守備表示で召喚！」

聖なる輝きに照らされて燃え尽きてしまった巨木の化身が姿を見せる。

大木炭18 守備力2100

「通常モンスター…!?君も通常モンスター使いだっただのか!？」

「へっ…俺のカードはほとんどが拾ったカードだぜ。少しだけ貰ったカードが入ってるけどな。そしてこのモンスターはズシンを防ぐ鉄壁の盾となるぜ！」

「…ズシン唯一の弱点に気がついてたか。やるねコナミ」

「ズシンの攻撃力と守備力は必ず相手モンスターとの攻撃力+1000になる。逆に言えば守備力が攻撃力より1000以上高ければ戦闘で破壊するのは無理だ！こいつの攻撃力は1000！これでしばらく防ぐ！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「だけど言っただろう？ズシンを組み込んだ時点でズシンを避けるのは想定していたと！永続トラップ発動、悪夢の迷宮！各ターンのエンドフェイズにターンプレイヤーのフィールド上の表側表示モンスターの表示形式を変更する！」

「な、何い！」

守備の体勢を取っていた巨木は無防備な姿をさらけ出す。

大木炭18 攻撃力100

「それでもう1枚の永続トラップも使わせてもらおうか。神の恵みを発動しておくよ」

コナミ LP4000

フィールド 『大木炭18』（攻撃表示）

セット2

手札3

sc3

「これで君の戦略は崩れた！俺のターン、ドロー！」

太郎 sc3↓4 コナミ sc3↓4

「そしてこの瞬間に神の恵みの効果が発動するよ！俺はカードをドロウする度にライフを500回復する！」

「…折角鬼柳が削ったライフが…！」

太郎のDホイールに恵みの雨が降り注ぎ、そのライフを回復していった。

太郎 LP3000↓3500

「これでスピード・ワールド2の効果で削り切られるというわずかな

可能性も消えた！バトルだ！ズシンで大木炭18に攻撃！ズシンパンチ！」

眠れる巨人ズシン 攻撃力0↓1100

巨人のパンチが巨木へと触れた瞬間、すでに木炭としてもろくなっていたためか一瞬で崩れ去ってしまう。

「だが…トラップ発動！」

「ズシンはトラップの対象にはならない！」

「これはズシンを対象にしたトラップじゃねえ！ガード・ブロックは俺への戦闘ダメージを0にしてカードを1枚ドロ―できる！」

ズシンのパンチで発生した衝撃波はコナミの周囲に張られた半球型の障壁で防ぐことができた。

「だけどそれも一時の壁！物陰の協力者、北風と太陽、手を繋ぐ魔人でダイレクトアタック！」

3体のモンスターの力を合わせた攻撃がコナミを襲った。

「ズシンがモンスターを倒し、残りのモンスターでの総攻撃…！これはやべえ…！」

コナミ LP4000↓1000

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。この瞬間、悪夢の迷宮の効果で俺のモンスターは全員守備表示となる！」

眠れる巨人ズシン 守備力0

物陰の協力者 守備力1000

北風と太陽 守備力1000

手を繋ぐ魔人 守備力1600↓3600

「しかもまた手を繋ぐ魔人で攻撃をシャットアウトされちまつてる…隙がねえ！だが俺もモンスターの力を合わせて戦うだけだ！永続トラップ発動、人海戦術！このターン戦闘で破壊された俺のレベル2以下の通常モンスターの数までデッキからレベル2以下の通常モンスターを特殊召喚する！俺はデッキからファイヤー・アイを特殊召喚！」

炎に包まれた目玉がまつげの代わりに付いている羽を羽ばたかせて飛んできた。

ファイヤー・アイ 攻撃力800

太郎 LP3500

フィールド 『眠れる巨人ズシン』(守備表示) 『物陰の協力者』(守備表示) 『北風と太陽』(守備表示) 『手を繋ぐ魔人』(守備表示)

セット1 『聖なる輝き』 『悪夢の迷宮』 『神の恵み』

手札1

sc4

「もう余裕はねえ、このドローで逆転のカードを引けなきゃ多分負ける…。だが、俺もあいつらみたいの可能性を信じて道を切り開く！覚悟を決めろ俺……ドロー！」

太郎 sc4↓5 コナミ sc4↓5

「…俺は手札からギガテック・ウルフを召喚する！」

鉄によって作られたオオカミが吠えながら現れる。…が、目の前にそびえ立つ巨人を前にして小さくなってしまおう、

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「さらにs pーサモン・スピダーを発動する！scが4以上ある時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！来てくれ、ジエネクス・コントローラー！」

頭の左右にアンテナのついたロボットが既に場に出ている2体の真ん中へと降り立つ。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「おっとーこれはどうしたことだー!?今度はコナミが通常モンスターを場に並べだしたぞー!?!」

「コナミ…君は一体何をやる気なんだい？」

「お前たちが通常モンスターの力を合わせて戦うための答えがズシンなら俺も通常モンスターの力を合わせてお前たちに立ち向かうってことだ！」

コナミの3体のモンスターが集まっていく。彼らはコナミに呼応し、力を合わせようとしているようだ。

「行くぜ、俺はレベル2のファイヤー・アイとレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジエネクス・コントローラーをチューニング！白

銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

ジェネクス・コントローラーを中心に彼らが1つの姿へと変わっていく。その姿は気高きドラゴン。白い翼が太陽に反射し、神々しくすら見える。

蒼眼の銀龍 攻撃力2500

「これが君の答え……」

「こいつは通常モンスターがシンクロ素材にならないと呼ぶことの出来ねえモンスターだ。こいつで俺はお前に立ち向かってみせる！」

「だけどそのドラゴンの攻撃力では手を繋ぐ魔人にすら届かないよ！」

「まずはズシンと同じ立ち位置に立たせてもらうか！銀龍の効果発動！このモンスターがシンクロに成功した時、次のターンのエンドフェイズまで効果の対象にはならず効果で破壊されない！」

「……」

銀龍の周りを白銀のベールが覆っていく。

「そして俺は2枚のカードを伏せて……ターンエンドだ！」

「……悪夢の迷宮の効果によってそのドラゴンは守備表示となる！」

蒼眼の銀龍 守備力3000

コナミ LP1000

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示）

セット2 『人海戦術』

手札0

sc5

「何かを狙っているのか……？いや、ズシンは負けない。俺のターン！神の恵みの効果によってライフを回復する！」

太郎 LP3500↓4000

太郎 sc5↓6 コナミ sc5↓6

「そしてスピード・ワールド2の効果を発動する！scを4つ取り除き、相手に手札のsp1枚につき800のダメージを与える！」

「……」

「俺の手札には1枚！よって800のダメージだ！」

太郎のDホイールから発生した衝撃波がコナミを襲う。

コナミ LP1000↓200

「あ、危ねえ……！」

「行くよ、コナミ。俺は手札からレッド・エースを召喚！」

赤い衣装に身を包んだ仮面道化がフィールドに現れる。

レッド・エース 攻撃力1000

「そしてフィールドの守備表示モンスターを全て攻撃表示に！」

眠れる巨人ズシン 攻撃力0

物陰の協力者 攻撃力1000

北風と太陽 攻撃力1000

手を繋ぐ魔人 攻撃力1000

フィールドに揃った5体のモンスターが銀龍とコナミを見つめる。

「くっ、まだまだ……！」

「コナミ、君がまだこの状況に勝機を感じているのは恐らくズシン以外のモンスターなら防げる可能性があるからだ！銀龍は守備表示、ズシンで破壊してもダメージはない。そしてこの4体のモンスターを防ぎきればあるいはと思っているはずだ」

「……！」

「だけどズシンなら！俺たちが繋いできたズシンの攻撃は防げない！トラップ発動、メテオ・レイン！このターン、俺のモンスターが守備モンスターへと攻撃してきた時、超えた数値分のダメージを相手に与える！」

「つてことは銀龍が攻撃されれば……」

「3500―3000。つまり500のダメージを受けて君のライフは0になる！」

太郎は自分達が繋いできたズシンに全てを託した。

「バトルだ！この攻撃で終わらせる。ズシンで銀龍へと攻撃！ズシン……パンチ！」

今日3度目となるズシンの拳が銀龍を襲う。その拳はメテオ・レインの力でさらに勢いづいていた。

ズシン 攻撃力0↓3500

「…俺はこの時を待っていた！」

「無駄だよ、ズシンはトラップの対象にはならない！」

「俺は…俺の場にトラップをかける！トラップ発動、アルケミー・サイクル！このカードを発動したターンのエンドフェイズまで俺のフィールドにいる全ての表側表示モンスターの元々の攻撃力を0にする！」

「な…自分の場にトラップを発動した!?!」

コナミの発動したトラップから発生した霧は銀龍のボールをすり抜けて力を奪い去った。

「そしてこの効果で銀龍の攻撃力は0になった。…ということはだ！」

「し、しまった…！」

銀龍の攻撃力が下がったことで…ズシンのパンチの勢いが落ちていった。

眠れる巨人ズシン 攻撃力3500↓1000

「君はこれを狙っていたのか…！だが、まだデュエルは終わらない！次のターンで…！」

「確かにここを逃したら俺に勝機はねえ。だから…ここで決める。トラップ発動、クロスカウンター！」

ズシンのパンチを正面から受け止めながらもパンチの外側から銀龍の翼が返され、ズシンの頬を弾き飛ばした。

「クロスカウンターの効果、攻撃された守備表示モンスターの守備力が攻撃モンスターの攻撃力を超えていた場合、相手に与える戦闘ダメージは2倍になりダメージ計算後に攻撃モンスターは破壊される！」

「そん…な…!?!」

翼を防御する間も無くまともに食らった巨人はふらつき、やがて…崩れ落ちた。

太郎 LP4000↓0

「…あつ。き、決まったー！な、なんと！無敵と思われたズシンをクロ



スカウンターによつて撃沈し、勝利したのはチームネオサティスファクションだー！」

「負けた…のか」

Dホイールを止め、ヘルメットを外した太郎は明らかに落ち込んでいた。

「何落ち込んでるんだよ太郎。周りをよく見てみるよ。」

「え?」

コナミに言われ、周りを見渡す太郎。彼の目にはスタンドからの惜しめないチーム太陽への拍手が沸き起こる光景が映っていた。自分達の可能性を諦めず、奇跡を起こしたチーム太陽。彼らの可能性は：認められたのだ。

「全く…これじゃ俺たちが悪者みてえじゃねえか」

「はは…ありがとうコナミ。俺たちはズシンという可能性を示した。だけど可能性つてのは1つじゃないんだね」

「おお…格好いいな。とりあえず…俺もお前達と戦えてよかつたよ」  
2人は握手をし、このデュエルの幕を閉じる。だが…空気の読めない警告音はその幕を閉じさせまいと邪魔をする。

会場のスクリーンに映し出された映像。そこにはゴーストのようなDホイールがWRGPに乱入し、参加者達をクラッシュさせていく様が映し出されていた。

## 新たな可能性を求めて

WRGPに参加しているDホイラーが次々とゴーストのようなDホイラーにクラッシュさせられる光景がスクリーンに映し出された。

「おい、牛尾！何が起きてんだよ！」

太郎と別れたコナミは万が一の時のために待機していた牛尾に問い詰めた。

「どうやら…システムが書き換えられてWRGPのルールがバトルロイヤルに変えられちゃったみたいだな。あのゴーストみたいなのが他にもちらほら出てきてやがる。早めに対処しねえとこりややべえぞ」

「何だって…。なら、早めに助けねえと！俺も行くぜ！」

「おいおい、お前は一般人なんだ。大人しく待機しておけ」

「んなこと言ってる場合じゃねえだろ！」

コナミと牛尾が言い合っているとサージエント相川が近づいていき、助言をした。

「ですが牛尾さん…。さすがにこの数はセキュリティでも対処に時間がかかってしまう。彼にはゴーストを倒した実績もあるし頼んだ方がいいと思いますよ」

「まあ…そう言われるとそうなんだがよ。仕方ねえな、あくまでも安全を第一に考えて救助してくれよ」

「分かった！なら早速…」

「待て！本官も一緒に行こう。相手は大人数で来ているんだ。単独で向かうのは危険だろう」

「そうか。ならついてきてくれ！」

「おい、コナミ！何が起きてるんだ！」

幸子や鬼柳も事態の異常さに気づき、駆けつけてくる。

「あのゴースト達がDホイラーを無差別に襲ってる！俺は助けに行くぜ、鬼柳達も後ろから付いてきてくれ！」

「わ、分かった！」

コナミと相川が海上レーンからDホイーラーが襲われている場所に出て行き、少し遅れて幸子や鬼柳も付いてきた。かなり先に遊星の姿も見え、彼もこの事態に黙っていられず助けに来たと思われる。

そんな中、道が二手に分かれていたためコナミと相川、幸子と鬼柳はここで別れてそれぞれのレーンのDホイーラーを救助することになった。そして彼らの進んだ先には今にもやられてしまいそうな女性Dホイーラーがいた。

アーリー・オブ・ジャスティス

「A・O・J ブラインド・サッカーで貴様へとダイレクトアタックする！」

「ひっ…!?」

体から伸びている管から女性Dホイーラーに向かって光線が降り注いでいった。

A・O・J ブラインド・サッカー 攻撃力1600

「させるか！俺は手札の工作列車シグナル・レッドの効果を発動！こいつを特殊召喚し、攻撃の対象をこいつに変える！そして、この戦闘ではこいつは破壊されない！」

「何だと？」

コナミがそのデュエルに割って入り、手札から列車を走らせた。そのまま女性Dホイーラーの前を通った列車が光線を受け止め、被害を抑える。

工作列車 シグナル・レッド 守備力1300

「ここは危険だ！俺たちに任せてくれ！」

「え、ええ！ありがとう！」

礼を言いながら女性DホイーラーはゴーストラしきDホイーラーが見当たらない安全なレーンへと逃れていく。

「ちっ…余計なことを。まあいい、貴様らもDホイーラーならばプラシド様の命令に従い排除させてもらう」

「プラシド？誰だそいつ？」

「貴様らに語る言葉はない。俺はこれでターンを終了する！」

謎のDホイーラー LP4000

フィールド 『A・O・J ブラインド・サッカー』（攻撃表示）

セット0

手札5

sc1

「へっ…まあいいさ、とりあえず話はお前達を懲らしめてからだ！俺のターン！」

スピードカウンター

相川 s c 0↓1 コナミ sc0↓1 謎のDホイーラー

sc1↓2

スピードスベル

「手札からs p ーオーバー・ブーストを発動！エンドフェイズにscが1になる代わりにscを4つ上げる！」

Dホイールの後方から勢いよく噴射が起こり、一時的にスピードを増していった。

コナミ sc1↓5

「手札からs p ースピード・フュージョンを発動！scが4つ以上ある時、手札及びフィールドのモンスターで融合を行うことが出来る！シグナル・レッドと手札の大木炭18で融合！赤信号を点灯させし列車よ、新たな火種を投入しエネルギーへと変えろ！融合召喚！  
重爆撃禽<sup>じゅうばくけきん</sup>ボム・フェネクス！」

翼もろとも体が炎によって燃え盛った怪鳥が空中を舞った。

重爆撃禽 ボム・フェネクス 攻撃力2800

「融合モンスターだと…」

「びびったか！増援が来るまでにはやめに攻撃を仕掛けさせてもらうぜ！手札からファイヤー・アイを追撃で出してバトルだ！ボム・フェネクスでブラインド・サツカーに攻撃！不死鳥急降下撃！」

ファイヤー・アイ 攻撃力800

空より多数の隕石が落ちていき、点ではなく面でブラインド・サツカーを押しつぶしていった。

「くおっ…！」

謎のDホイーラー LP4000↓2800

「さらにファイヤー・アイでダイレクトアタック！火炎旋風！」

燃え盛る目玉がまつげの代わりに生えている翼を使い、旋風を巻き起こす。すると自身の炎が旋風になり、謎のDホイーラーへとぶつけ

られた。

謎のDホイーラー LP2800↓2000

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『重爆撃禽 ボム・フェネクス』（攻撃表示） 「ファイ

ヤー・アイ』（攻撃表示）

セツト1

手札0

sc5↓1

「ならば俺のター…」

「おっと、本官を忘れてもらっては困るな。バトルロイヤルルールを仕掛けてきたのはそちら、精々利用させてもらう。本官のターン！」

相川 sc1↓2 コナミ sc1↓2 謎のDホイーラー s

c2↓3

「本官の手札のサイバー・ドラゴンは相手フィールドにのみモンスターが存在する場合特殊召喚ができる！」

「だが、俺の場にはモンスターはいない！」

「そうはいかぬ。バトルロイヤルルールでは自分以外のプレイヤーは全て相手とみなされる。本官はコナミの場にモンスターがいることでこのモンスターを特殊召喚する！」

「チツ…気づいていたか」

場にあられたのは白き機械龍。まるで本物のドラゴンのような動きでフィールドを舞う。

サイバー・ドラゴン 攻撃力2100

「バトルだ！ダイレクトアタックを仕掛けさせてもらう。エヴォリューション・バースト！」

口の部分から貯められたエネルギーがそのまま謎のDホイーラーへ放たれた。

「おのれ…我らディアブロの邪魔を！」

謎のDホイーラー LP2000↓0

ゴーストのようなDホイーラーはライフが0になった途端爆発し

た。そしてそこから破損したロボットのパーツが四散する。

「やっぱりゴーストみてえなロボットだったか」

「……コナミ、すぐにこの場を離れるぞ！」

「げっ……なんだあの数は……！」

ディアブロの自爆は厄介なDホイラーがいることの証。10人のディアブロがコナミ達へ近づいていく。その人数から逃れる術はなく、強制的にデュエルが開始されてしまう。そして10人のディアブロ達は同時にあるモンスターを召喚する。そのモンスターが示すのはバトルロイヤルルールを利用した物量作戦だった。

「A・ボムを召喚する！」

彼らはそれぞれ小型の爆弾のようなモンスターを合計して10体場へと出した。

A・ボム 攻撃力400

そしてその内の2体はサイバー・ドラゴンへと突っ込んでいった。

「一体何を……！」

「A・ボムは光属性のモンスターに戦闘で破壊された時、フィールドのカードを2枚破壊する！」

「やべえ……サイバー・ドラゴンは光属性……！」

「くっ……！」

A・ボムの爆発でコナミの場の3枚のカードとサイバー・ドラゴンが消え去ってしまった。

「さあ、邪魔なデュエリストは消え去れ！ゆけ、A・ボム……！」

コナミに向かって合計8体のA・ボムが体にぶつかっていった。

「ぐああっ……！10対2なんてきつすぎるだろ……！」

コナミ LP4000↓800

「ふふ……片方はもう虫の息。もう片方もすぐに仕留めるとしよう。我々はターンを終了する」

「俺の……ターン……！」

コナミはなんとかカードを引くも、8回の連続攻撃で体はボロボロになっていた。

「コナミ。あとは本官に任せろ」

「相川…?」

「次のターン。本官は奴らのモンスターを全滅させる。信じてくれ」

「…分かった。俺はモンスターをセットしてターンエンド!」

コナミ LP800

フィールド 裏側守備表示1

セット0

手札0

「ゆくぞ、本官のターン!…来たか。本官は手札より2体目のサイバー・ドラゴンを呼び出す!」

ドラゴンと見違えるような機械龍が再び姿を表す。

サイバー・ドラゴン 攻撃力2100

「だ…駄目だ。サイバー・ドラゴンは光属性。A・ボムを攻撃したら破壊されちまう!」

「コナミよ、本官の機皇帝への対策。今ここで見せてやろう。それで奴らを消滅させる」

「な…ど、どうやって?相手フィールドには8体もあの爆弾モンスターがいやがるんだぜ」

「本官はサイバー流の継承者…。サイバー流の継承者のみが見える特殊な融合召喚があるのだよ!」

そう言つて相川が手をかざすとフィールドに巨大な渦が発生した。サイバー・ドラゴンがその中へと吸い込まれていくと、相手のフィールドにいるはずの8体のA・ボムもその中へと吸いこまれていく。

「何が起こつてるんだ…!?!」

「融合召喚!…いでよ、キメラテック・フォートレス・ドラゴン!」

9つの首が飛び出し、それぞれがからまりあいながらもヘビのようにフィールドへと機械龍が降り立った。

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力9000

「バトルだ。フォートレス・ドラゴンでその貴様へと攻撃する。本来あるWRGPのルールを捻じ曲げ悪事を働くその行為、決して許すことはできぬ!エヴォリユーション・リザルト・アーティレリー!」

9つの首からそれぞれ放たれるエネルギー弾が1人のディアブロ

を襲う。その勢いは凄まじく、他のディアブロをも巻き込んでいった。やがて倒されたディアブロの自爆機能が発動し、他のディアブロと共に消滅していく。

「す、すげえ…」

彼らはさらなる増援が来る前にその場を去っていく。だが、一瞬でA・ボムを消し去った相川。機皇帝への対策として用意したコナミの融合とはまた違った答えを導き出した彼は一体どんな策を使用したのだろうか。



## 自分が目指す場所

ディアブロ達を何とか退けた彼らに遠くのレーンから光が降り注ぐ。その光の源は遊星が召喚した流星のように輝き、周囲を照らしているドラゴン。

遊星はそのモンスターを使い機皇帝ワイゼルを扱うDホイーラー、プラシドを倒すことに成功していた。ディアブロも5D'sやネオサティスファクション、遊星をその境地へと導いた謎のDホイーラーによって片付けられ事態は収束された。

…だが、プラシドの仲間と思わしき2人の人物が破損してしまったロボット、プラシドを回収した後遊星にWRGPに出る旨を伝え、空中に空いた穴からどこかへ消え去ってしまった。

「遊星が今倒したのは機皇帝…。あれが遊星の機皇帝への答えなんだな」

「なるほど…彼はお前の仲間か。見事な力だ」

これを見たコナミは機皇帝を倒すために必要な力の大きさを肌で感じ、このままでは足りないという焦燥感に駆られていた。

「頼む相川！さっきディアブロにやったお前の機皇帝への対策…俺に教えてくれないか！」

牛尾に事態が収まったことや被害状況を無線により連絡し終えた相川にコナミは頼み込む。

「…駄目だ、と本来なら言いたいが。事態が事態だ。どうやら本官自身の手で奴らを倒すことも不可能そうだしな」

「え？何でだ？お前らもWRGP出てるだろ？」

「よく考えてみる、WRGPでこのような事態が起きたんだ。続行にあたってセキュリティの強化が必要となるのは自明の理。牛尾さんによると我々は棄権せざるを得ないらしい」

「そうなのか…」

「だが、本官が行ったのは由緒あるサイバー流の継承者のみを使うこととの許される奥義。簡単に伝統を無視することも出来ない」

「なら、どうやったら教えてくれるんだ？」

「…お前が今まで培ってきた答え。それにかけて努力が偽りで無いのなら本官に挑み、見せてみろ」

「分かりやすくいいいな。いいぜ、俺の力を見せてやる!」

彼らはレーンを外れ、近くのスぺースのある場所へ移動しDホイールを停める。

「始めるぞ。この勝負でコナミ、お前の覚悟を見極める」

「ああ。あいつらがWRGPに出てくるって分かった今、足踏みする訳にはいかねえ。全力でいくぜ!」

「「デュエル!」」

ディスクがランダムに先攻を選出し、相川とコナミのデュエルが開始された。

「俺のターンからだ!ドロー!俺はモンスターをセットし、カードを1枚伏せるぜ!ターンエンドだ!」

コナミの場に正体不明のモンスターが現れる。

コナミ LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット1

手札4

「本官のターン、ドロー!このモンスターは相手フィールドにのみモンスターが存在するとき特殊召喚することができる!」

「やっぱり来たか…!」

「現れよ、サイバー・ドラゴン!」

体を激しくうならせ、咆哮とともに機械の龍が姿を見せた。

サイバー・ドラゴン 攻撃力2100

「バトルだ。サイバー・ドラゴンで攻撃!エヴォリユーション・バース

ト!」

機械龍の口から白いエネルギー弾が放たれる。そのエネルギーはそのままセットされたモンスターを包み込んだ。

UFOタートル 守備力1200

「くっ…だが、戦闘破壊されたUFOタートルの効果でデッキからギガテック・ウルフを特殊召喚するぜ!」

円盤から鉄で作られたオオカミが遠吠えをあげながら降りてくる。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「ふむ……ここで見せてやってもいいがまだ早いか。本官はカードを1枚伏せてターンを終了する」

相川 LP4000

フィールド 『サイバー・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札4

「俺のターン！ 一気にいくぜ！ 俺はチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚だ！」

頭の左右にアンテナがついたロボットがオオカミの隣へ降り立つ。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「頼んだぜお前ら！ 俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！ 3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！ シンクロ召喚！ 燃やし尽くせA・ジェネクス・トライフォース！」

ジェネクス・コントローラーがギガテック・ウルフに電波を飛ばし、人型の機械へと変貌させていった。手の部分にある3つのランプのうちの1つ、オレンジのランプが点灯する。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「さらに、手札からアイアン・コールを発動だ！ 俺の場に機械族モンスターのトライフォースがいることで墓地のレベル4以下の機械族モンスターを特殊召喚できる。戻ってこい、ギガテック・ウルフ！」

墓地へクレインが降りていき、鉄で作られたオオカミを捕まえると地上へと連れてきた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「そして手札から魔法カード、融合を発動だ！」

「融合：早速来たか」

「俺は手札のキャノン・ソルジャーとフィールドのギガテック・ウルフで融合！ 全てを発射する戦士よ、鉄屑のオオカミと一つとなり新たな力を手に入れる！ 融合召喚！ その射撃で敵を射ぬけ、迷宮の魔戦車

！」

青色で染められた機体に赤色のドリルがつけられた戦車が出陣した。

迷宮の魔戦車 攻撃力2400

「なるほど…確かに融合を使いこなしているようだな」

「悪いけどこのターンで押し切らせて貰うぜ！バトルだ！ライフフォースでサイバー・ドラゴンに攻撃！ライフフォースは炎属性をシンクロ素材にした場合、戦闘で破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「悪く無い一手だが、まだ甘い！トラップ発動、アタック・リフレクター・ユニット！サイバー・ドラゴンをリリースすることでデッキよりサイバー・バリア・ドラゴンを特殊召喚する！」

相川が発動したトラップから反射板が出てきて、サイバー・ドラゴンへ光を反射する。するとサイバー・ドラゴンの姿が光によってコーティングされ、より強靱なものとなった。

サイバー・バリア・ドラゴン 守備力2800

「う…守備力2800じゃ倒せねえか。ターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示） 『迷

宮の魔戦車』（攻撃表示）

セット1

手札1

「本官のターン、ドロロー！本官はサイバー・ドラゴン・コアを召喚する！」

数珠のように球形の機械のパーツが繋がられたロボットが現れる。

サイバー・ドラゴン・コア 攻撃力400

「サイバー・ドラゴン・コアの召喚に成功したことでデッキよりサイバーカード、サイバー・リペア・プラントを手札に加える。…ところでコナミよ、お前は融合召喚に対してどのような想いを抱く？」

いきなり真剣な表情で質問する相川に戸惑うもここはちゃんと答えを示す必要があると感じ、コナミも真面目に答える。

「そうだな…。モンスターとモンスターの力を合わせて戦うことが出来る…俺にとつての新しい可能性だな」

「なるほどな。…だが、モンスターとモンスターの力を合わせるだけなら融合召喚でなくともシンクロ召喚もまた同じだ」

「あ…！」

今のコナミの場にいるモンスター、シンクロモンスターと融合モンスター。どちらも違う呼び方で呼ばれたモンスターだがモンスターの力を合わせて呼ばれたという点では共通している。

「モンスターの力を合わせる、それは入り口に過ぎない。ここから先へ進むにはどの召喚方法で力を合わせるかでは無い。いかにしてモンスターたちの力をさらに高めることの出来る力の合わせ方を探れるかだ。事実、先ほどの彼は未知なるシンクロドラゴンを呼び出しその力で機皇帝を倒してみせた。シンクロキラーであるはずの機皇帝をさらなるシンクロの高みで超えて見せたのだ」

「う…確かにな」

「見せてやろう。本官のたどりついたさらなる融合の高みを！本官はフィールドでサイバー・ドラゴンとして扱われるサイバー・ドラゴン・コアで融合召喚を行う！」

フィールドに渦が発生し、サイバー・ドラゴン・コアが取り込まれていく。

「融合召喚…!?融合召喚のためには素材モンスターを融合するための融合カードが必要なはずだ！」

「この融合召喚をとり行う場合…融合カード無しで融合召喚を行える！」

「な…何だって！そんなのありかよ！」

「驚くのはまだ早いぞ。フィールドを見てみる！」

ディアブロ達との戦いでA・ボムが吸い込まれていったようにコナミの場のトライフォースや迷宮の魔戦車を取り込まれていく。

「俺のモンスターが吸い込まれていく！さっきのデュエルもそうだった。一体何が起きてるんだ…。これが融合召喚なら自分の手札やフィールドのモンスターで融合を行うはずなのに…!?」

「ふ…いいだろう。種明かしといこう。サイバー流継承者に伝えられし秘術をな。サイバー・ドラゴンがフィールドにいる時、場の機械族モンスターを融合素材として取り込み、融合カード無しで融合召喚を行うことが出来る！そして…この場合のフィールドとはお前のフィールドも含む！」

「何だって…!？」

相川のサイバー・バリア・ドラゴンも渦へと混ざり1つの存在として成り代わっていく。生まれ出でたのは4つ首の機械龍だった。

「融合召喚！出でよ、キメラテック・フォートレス・ドラゴン！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力4000

「機皇帝すらも素材とし、自らの糧とすることで機皇帝を消し去った上で自分のモンスターをさらなる高みへと押し上げる。それが本官の出した…機皇帝への答えだ！」

通常の融合召喚をはるかに超えた融合召喚によって現れた機械龍に相川のこのモンスターにかける思いを感じ、コナミは気圧され言葉を失ってしまった。

## 正解と不正解と可能性

コナミの呼び出したトライフォースと迷宮の魔戦車をも取り込み、相川はサイバー・ドラゴンを4つ首の機械龍へと進化させる。融合カードを使わない上に相手フィールドのモンスターを吸収する未知なる融合召喚はコナミを追い詰めるには十分だった。

「キメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃力は融合素材となったモンスター1体につき1000上がる。本官が素材としたのは4体。よって攻撃力は4000となる！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力4000

「……これがお前の機皇帝への答えなのか」

「そうだ。機皇帝は5つのパーツからなる合体モンスター。だが本官にとつてはそれはアドバンテージへと変わっていく。……さて、コナミよ。今までお前が出した答えでは本官はお前にこれを伝授することは出来ぬ」

「……」

「まだ示していない答えがあるのなら見せてみるがいい！バトルだ。キメラテック・フォートレス・ドラゴンでコナミへダイレクトアタック！エヴォリューション・リザルト・アーティレリー！」

機械龍のそれぞれの口からコナミへ向けてエネルギー砲が発射されていった。

「く……まだだ！トラップ発動、カウンター・ゲート！相手の直接攻撃を無効にして俺はカードを1枚ドロウする！さらに、引いたモンスターが通常召喚できるならそいつを攻撃表示で召喚することができる！」

「ふっ……そうこなくてはな」

コナミのトラップから現れたゲートにエネルギーが吸い込まれていきコナミへ攻撃が通ることはなかった。

「ドロウ……引いたモンスターはE・HERO エレメンタルヒーロー スパークマンだ。こいつを攻撃表示で召喚するぜ！」

ゲートをくぐって雷を自在に操る戦士がフィールドへと見参した。

E・HERO スパークマン 攻撃力1600

「…思えばこいつからか。俺が融合のことを知っていったのは」  
「ほう？ そうなのか」

「ああ。最初見た時はすげえと思ったぜ。シンクロみたいにもンスターを場に揃えなくても強力なモンスターが一気に出て来るからよ」  
「なるほどな。それがお前の中で強い印象が残り、機皇帝の対策として思いついたわけか」

「だけど遊星のあの不思議なシンクロを見て…何だか自信が無くなってきたぜ。俺の出した答えは果たして正解なのかってな…」

シンクロキラーの機皇帝を打ち倒した遊星の出した答え。それは遊星にとって新たな希望となると共に、コナミにとって重荷となっていた。

「…コナミ。先ほど不動遊星と対峙していた2人の話を聞いていたな？」

「聞いてたぜ。確か…あいつらは未来から間違った過去を修正しに来たとか言ってたな」

「簡単には信じがたいが先ほどのゴーストに使われた技術は明らかに今の技術を超えた未来のものだ。恐らく…嘘ではないのだろう。そして彼らは言った。止めたければWRGPに出る彼らを倒して見せろと」

「だから俺は機皇帝を倒すための正解を探して…」

「…本官達が彼らに示さなくてはならないのは本官達の努力で未来を変えることの出来る可能性だ。そこに明確な正解はないだろう」

「…!? 正解がない…。ならどうすれば?」

「だが…正解がないということはそれに対する人の数だけ答えがあるということでもある。不動遊星はあの不思議なシンクロが、本官にとってはキメラテック・フォートレス・ドラゴンこそが答えだ。お前も…お前なりの答えを見つければいい。そこに不正解はない」

「…！俺なりの答えを…」

「すぐとは言わない。このデュエルが…そのきっかけになればいい。本官はこれでターンを終了する！」



フィールド 『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』（攻撃表示）  
セツト0

手札5

「とりあえず今、俺にできるのは今まで出してきた答えをあいつにぶつけることだけだ！俺のターン、ドロロー……今は耐えるしかねえか。俺はジェネクス・ブラストを召喚するぜ！」

扇風機を腹部に取り付けたロボットが風を巻き起こすため体ごと回転しながらフィールドに降り立った。

ジェネクス・ブラスト 攻撃力1600

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『E・HERO スパークマン』（攻撃表示） 『ジェネクス・ブラスト』（攻撃表示）

セツト1

手札0

「本官のターン！本官は手札からサイバー・リペア・プラントを発動する！このカードの効果によりデッキより機械族・光属性のモンスター、サイバー・ドラゴン・ドライを加え、召喚させてもらおう！」

胴体の細いヘビのようなロボットがフィールドへ降り立つ。

サイバー・ドラゴン・ドライ 攻撃力1800

「さあ、バトルと行こう！」

「そうは行かねえぜ！永続トラップ、ガリトラップ、ピクシーの輪を発動！こいつがある限り俺のフィールドに2体以上攻撃表示のモンスターがいればお前は攻撃力の1番低いモンスターに攻撃出来ないー！」

「いま場にいるのはどちらも攻撃力1600……。なるほど、本官の攻撃を封じたか。だが長く持つとは思わないことだ。本官はこれでターンを終了する！」

相川 LP4000

フィールド 『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』（攻撃表示）

『サイバー・ドラゴン・ドライ』（攻撃表示）

セット0

手札5

「俺のターン!...ここは攻めるぜ。俺はジェネクス・ブラストとスパークマンをリリースしてリボルバー・ドラゴンをアドバンス召喚する!」

消えていく2体のモンスターの代わりに出てきたのは3台もの砲台に乗せた戦車。その銃口は4つ首の機械龍に向けられている。

リボルバー・ドラゴン 攻撃力2600

「だが攻撃力はキメラテック・フォートレス・ドラゴンの方がはるかに上。どうする気だ?」

「こうするのさ!リボルバー・ドラゴンの効果発動!1ターンに1度、相手フィールドのモンスターを対象に発動し、俺は3回のコイントスをする!そのうち2回以上が表ならそれは破壊だ!俺はキメラテック・フォートレス・ドラゴンを狙う!」

3つのコインが空中に舞うと共に、3つの砲台から4つ首の機械龍に向けてそれぞれ1発ずつ弾が発射されていく。その内不発となった弾丸は...1つ。残り2発の弾丸が機械龍に命中する。

「よし、表になったコインは2つ!よってキメラテック・フォートレス・ドラゴンは破壊だ!」

その弾丸は機械龍を貫き、活動を停止させるのに成功した。

「くっ...やるな」

「さらにバトルだ!リボルバー・ドラゴンでサイバー・ドラゴン・ドラインに攻撃!」

中央の砲台から放たれた1発の弾丸がもう1体の機械龍も貫いていった。

相川 LP4000↓3200

「よし...これでターンエンドだ!」

コナミ LP4000

フィールド 『ガトリング・ドラゴン』(攻撃表示)

セット0 『ガリトラップーピクシーの輪ー』

手札0

「やってくれたな。…だが、まだ甘い！本官のターン！本官は墓地のサイバー・ドラゴン・コアの効果を発動する！墓地のこのモンスターを除外することでデッキからサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！」  
墓地から放たれたプラグがデッキに突き刺さり、機械龍を引っ張り出してきた。

サイバー・ドラゴン 攻撃力2100

「さらに手札からプロト・サイバー・ドラゴンを召喚する。このモンスターはフィールドにいる限りサイバー・ドラゴンとして扱われる！」  
小型化したサイバー・ドラゴンのようなモンスターが現れるとその影が大きくなっていき、影だけならばサイバー・ドラゴンそのものとなっていく。

プロト・サイバー・ドラゴン 攻撃力1100

「だけどそいつらじゃリボルバー・ドラゴンは倒せないぜ！」

「ふっ…ならば力を合わせるまでだ。手札から速攻魔法、フォトン・ジエネレーター・ユニットを発動する。本官の場の2体のサイバー・ドラゴンをリリースし、デッキよりサイバー・レーザー・ドラゴンを特殊召喚させてもらう！」

「何だと…！」

尻尾のあたりにレーザーを取り付けた機械龍がフィールドを舞い上がった。

サイバー・レーザー・ドラゴン 攻撃力2400

「そしてサイバー・レーザー・ドラゴンは自身の攻撃力より高い攻撃力か守備力を持つモンスターを1ターンに1度破壊できる！リボルバー・ドラゴンを撃ち抜け！」

「し、しまった！」

高速で放たれたレーザーから逃れる術はなく、戦車は爆発し粉々に崩れていった。

「さあ、バトルと行こうか。サイバー・レーザー・ドラゴンでコナミヘダイレクトアタック！エヴオリュション・レーザーショット！」

もう1発放たれたレーザーは今度はコナミを貫いた。

「うおおっ!？」

コナミ LP4000→1600

「本官はこれでターンエンドだ！さあ、立ち上がってこいコナミ！」

相川 LP3200

フィールド 『サイバー・レーザー・ドラゴン』（攻撃表示）

セット0

手札4

「く…俺のターン！頼んだぜ…カード・ブロツカーを召喚！こいつは召喚した時守備表示になる！」

小さな騎士が盾を構え、コナミを守るように降り立った。

カード・ブロツカー 守備力400

「なるほど。サイバー・レーザー・ドラゴンの効果の範囲外か」

「今はこいつで耐えるしかねえ…！ターンエンドだ！」

コナミ LP1600

フィールド 『カード・ブロツカー』（守備表示）

セット0 『ガリトラップーピクシーの輪ー』

手札0

「本官のターン！本官はサイバー・フェニックスを召喚する！」

赤い線が刻まれた2本の翼を持つ機械鳥がフィールドを飛びだす。

サイバー・フェニックス 攻撃力1200

「バトルだ！本官は…サイバー・レーザー・ドラゴンでカード・ブロツカーに攻撃する！エヴォリユーション・レーザーショット！」

「くっ…カード・ブロツカーの効果発動！攻撃対象になった時、デッキの上から3枚のカードを墓地へ送り守備力を1500アップできる！」

カード・ブロツカー 守備力400→1900

「やはり防御効果を備えたモンスターか」

レーザーを受ける直前に盾を巨大化させ身を守ろうとするもレーザーの威力の前に盾ごと貫かれてしまう。

「そしてサイバー・フェニックスでコナミヘダイレクトアタック！」

高くまで飛んだ機械鳥はそこから滑空し、勢いをつけてコナミを翼で弾き飛ばした。

「うっ！やべえ…」

コナミ LP1600↓400

「ターンエンドだ。これで終わりか？お前が機皇帝の対策のために今まで為してきた努力はそこまでか！」

相川 LP3200

フィールド 『サイバー・レーザー・ドラゴン』（攻撃表示） 『サイバー・フェニックス』（攻撃表示）

セット0

手札4

「はあ…はあ…。まだだ！俺は可能性がある限り諦めねえぞ！俺の… ターン！」

コナミがドロローしたカード。それはコナミが機皇帝の対策として出した答えを象徴するカードだった。コナミは今までの自分の答えを精一杯相川へとぶつける。

「俺は手札からオーバーロード・フュージョンを発動する！」

「何だと…!?!」

「この魔法カードによって俺は墓地のモンスターを除外することで闇属性・機械族の融合モンスターを融合召喚することが出来る！俺は墓地のブローバツク・ドラゴンとリボルバー・ドラゴンを融合！」

「ブローバツク・ドラゴン…?カード・ブロッカーの効果か…!」

「不発の銃を持つものよ、暴発の銃持つものと交わりて新たな存在へと生まれ変われ！融合召喚！あらゆるものを撃ちぬけ、ガトリング・ドラゴン！」

背中に数多ものガトリング砲を背負った機械龍が戦車に乗ってフィールドを走り出す。

ガトリング・ドラゴン 攻撃力2600

「これが今までお前が培ってきた答えか…!」

「ああ！ぶつけさせてもらうぜ俺の答えを！ガトリング・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度、俺は3回のコイントスをする！そのうち表になった数だけフィールドのモンスターは破壊される！ガトリング・ショット！」

3つのガトリング砲がサイバー・レーザー・ドラゴン、サイバー・フェニックス、ガトリング・ドラゴンへと向けられた。

そしてフィールドにコインが舞う。結果は…表、裏、表。

ガトリング砲が2発発射され、サイバー・レーザー・ドラゴンとサイバー・フェニックスを撃ち抜いた。

「本官のモンスター達が全滅だと…!?!」

「やったぜ…!?!さらにガトリング・ドラゴンでダイレクトアタック! ガトリング・キャノン!」

無数のガトリング砲が相川に向けて発射されていく。不発の弾があろうと数撃てば当たると言わんばかりの乱射が相川を貫いた。

「ぐおっ…!?!」

相川 LP3200↓600

「どうだ!俺はこれでターンエンドだ!」

コナミ LP400

フィールド 『ガトリング・ドラゴン』(攻撃表示)

セット0 『ガリトラップーピクシーの輪ー』

手札0

「…やるなコナミ。お前がかけた想い、しっかりと伝わってきたぞ。

…だが!本官のターン!コナミよ、お前に言いたいことは2つある!」  
「な、なんだよ…?」

「1つは機皇帝の対策のことだ。不動遊星は新しいシンクロを、本官は未知なる融合をお前に見せたが…何も答えを示すのはシンクロや融合だけではないということだ。力を合わせて戦うやり方、その可能性を狭めるな。それさえ忘れなければ必ず自分の答えへとたどり着けるはずだ!」

「可能性を狭めるな…か。分かったよ。俺もお前や遊星のおかげでいろんな可能性があるってことが分かったからな。それで…もう1つは…?」

「もう1つは…デュエルで示すとしよう。本官は手札からオーバーロード・フュージョンを発動!」

「なっ…何い!?!」

「本官は墓地のサイバー・ドラゴンと…墓地の6体の機械族モンスターを融合！全てを蹂躪せし機械仕掛けの龍よ、暴虐なる力を存分に振るえ！融合召喚！絶対的な力を示せ、キメラテック・オーバー・ドラゴン！」

巨大な鉄の塊から7つの鉄で出来た龍の首が飛び出し、こちらを威嚇してきた。

キメラテック・オーバー・ドラゴン 攻撃力？

「7体のモンスターで融合だつて…!?そんな無茶苦茶な…！しかも攻撃力が不明つてなんだ!?!」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンはサイバー・ドラゴンと任意の数の機械族モンスターを融合素材として融合召喚を行うことが出来る！そして攻撃力は…融合素材としたモンスターの数×800となる！」

「嘘だろ!?!」

キメラテック・オーバー・ドラゴン 攻撃力?↓5600

「ふ…お前が培ってきたものは認めよう。だが、シンクロが本職の前には本官が融合で負けるわけには行かない！」

「すげえな…本物の融合使いはここまで融合を使いこなすのか!」

「このデュエルの幕を閉じるとしよう。キメラテック・オーバー・ドラゴンでリボルバー・ドラゴンへ攻撃を行う！エヴォリユーション・レザルト・バースト！」

7つの龍の首から放たれるエネルギー光線と数多のガトリング砲から放たれた弾丸がぶつかり合う。だが不発弾が時折混じるガトリング砲では分が悪く、常に放たれ続ける強力なエネルギー光線に戦車ごと焼かれてしまった。

「俺の負けか…」

コナミ LP400↓0

勝負はつき、7つの首の機械龍も消えていった。この場に残ったのはコナミと相川の2人のみ。

「ありがとな相川。お前のおかげで俺がやるべきことが分かったかもしれねえ」

「ふ…礼には及ばぬ。本官は自分がやるべきだと思ったことをやったまでだ。勝ち譲らないがな」

「あ…：そういうえば負け たつてことはあの融合召喚は伝授して貰えないのか。がつくし…」

「む？何を勘違いしている？」

「へ？」

「本官はお前の覚悟を見るといったはずだ。勝敗は関係ない。こいつがお前がたどり着くであろう答えの道しるべになってくれればいい」

「相川…ありがとな。お前に俺は世話になってばかりだ。…早速伝授してもらおうぜ！」

「早速は無理だな」

「え？」

「サイバー流においても秘伝の術だからな。少しばかり修行をしてもらうぞ。何、心配するな。死にはしない」

「え、一体何を…？」

物騒な言葉にとつさにあとずさるコナミだったが相川に腕を掴まれ、逃げられなくなってしまう。

「来れば分かる。さあ行くぞ！」

「ちよっ…力強っ!？」

相川に引つ張られコナミはサイバー流の道場へ仮入門することになった。朝に手が痛くなるようなドロ練習、昼には滝で体を清め精神を集中させ、夕方には流れてくる流木を目隠しした状態で避ける練習、夜には熊を何頭か伏せてターンエンドするのを一週間ほど行う修行が待っていたが彼ならやり遂げてくれるだろう。こうしてコナミはWRGPの本戦までサイバー流の修行を行うことになった。



## 忌むべき印

サイバー流の道場で一週間の修行を終えたコナミ。彼はキメラテック・フォートレス・ドラゴンの伝授のために最終試験を受けていた。

「デツキから3枚のカードを…ドロー!」

相川のデツキを借りたコナミは3枚のカードを引き抜く。引いた3枚はどれも同じカード…サイバー・ドラゴンだった。

「見事だ…。一週間の修行でサイバー・ドラゴンの信頼を勝ち得たか。本官も誇らしいぞ」

「や、やっこの修行が終わるのか…!サテイスフアクションで活動してた時より体力使ったな…!」

「ふっ…だがこれは入り口だ。これをどう活かすかはお前次第だ」

そう言っただけで相川は貸していたデツキから2枚のカードを取り出しコナミに渡した。

「ああ。一週間修行に付き合ってくれてありがとな」

コナミは自身のデツキに受け取ったカードを投入し、デツキをディスプレイへとしまった。

——その時であった。彼らに不可視の衝撃波が襲いかかったのだ。コナミを囲うように障壁が張られ、コナミに衝撃波は及ばなかったが相川は衝撃波をもろに受けてしまっていた。だが彼の体に異常は見当たらず、そもそも物理的な衝撃がなかったため彼らは何かが起きたことに気づくことすらなかった。

「あの大量のゴーストを操っていた奴らを倒すための答え…こいつをきっかけに見つけてみせるさ」

変わらぬ話を続けるコナミ、それに対する相川の態度は…明らかにおかしいものだった。

「大量の…ゴーストだと?何のことだ」

まるで相川は一週間前に起きたばかりの事故がなかったかのような反応を示したのだ。

「えっ…?何言ってるんだよ。お前と一緒に10体近くのゴーストを

倒したじゃねえか」

「何だど？だが、そんな記憶は本官には…!?あ、頭が割れるように痛い…！何だこれは!」

相川は頭を押さえながらその場でうずくまってしまった。

「お、おい！大丈夫か!?一体何が…?」

その疑問に対して答えたのは…コナミのデッキに眠る精霊、エンシエント・ホーリー・ワイバーンだった。

「歴史が…過去の歴史が改ざんされたのです。ゴーストを操っていた3人の者によって」

その言葉でコナミは痛感した。自分が向き合おうとしているものがどれだけ巨大な力を持っているのかを。

時を同じくして鬼柳京介、海野幸子は本戦への出場が決定したことを祝うため作戦会議を兼ねて海野財閥のガレージに集まっていた。サイバー流の修行から帰ってくるであろうコナミを待っていた彼らにも不可視の衝撃が走る。だが、どこからか現れた2つの障壁が2人を囲み、事なきを得た。

そして、事態の異常さに気づいたコナミが急ぎ足でガレージへ帰ってきた。

「大丈夫かお前ら!」

「ど、どうしたコナミ?」

「お前らも忘れてたりしてないよな?あの大量のゴーストが襲ってきたことを!」

「忘れるわけないじゃありませんか。あのゴーストを撤退させるためにわたたくしたちがどれほど苦労したか…」

「かなりやばかったけどな。何故だが知らねえが途中でほとんどのゴーストが別のレーンへ向かっていったから助かったぜ」

「あ、あれ…?どうなっているんだエンシエント・ホーリー」

「先ほど私はとっさに障壁を張ってあなたが改ざんの被害を受けないようにしました。彼らの…少なくともどちらかに精霊、または特別な力を持つカードが…?」

「それよりコナミ!こいつを見てくれよ。本戦に進んだ8チームの中

に見慣れねえチームがあるんだ」

「何だって!?!」

鬼柳がパソコンを操作しコナミ達が2回戦…すなわち準決勝で戦う相手のデータを表示してコナミに見せた。

「チームニューワールド…!?!こいつらはあの時遊星と話していたゴーストの親玉じゃねえか!」

「何ですって!よくもぬけぬけと大会に出ていますのね!すぐに大会本部に抗議を…!」

「いや、ダメだ!あいつらが何をしたか分かんねえが…この前の事件がなかったことになってやがるんだ」

「んな馬鹿な…!?!」

そしてコナミはニューワールドが遊星に対して話していた内容を伝える。間違った過去を未来から修正しにきたという話は普通なら簡単に信じられることはない。だが、彼らは過去の改ざんという信じられないことを既にやってのけていた。

「…つまり、あいつらがやっていることを止めるにはWRGPであいつらに勝つしかねえってわけか」

「全く…頭が痛くなる話ですわね。サテライトでのあの騒動で少し慣れてしまっているわたくしが憎いですわ」

「だけど俺たちの未来を好き勝手にされたくないややるしかねえぜ。俺たちの未来はいつだって俺たちが決める!」

「だな…祝賀会は中止だ!行くぜお前ら!チームネオサティスファクション、まずは1回戦に勝つためにDホイールの調整に行くぞ!」

「仕方ないですわね…。帰ってきたら1回戦の相手の対策を練りますわよ」

彼らはガレージから出て行き、市街レーンでDホイールを走らせる。ゴーストとの戦いの影響でDホイールが負傷していることが危惧されたが、幸いにも大きなダメージはなく通常通りのライディングをすることが出来た。

そしてその帰り道…彼らは鬼柳に連れてこられた高台で、あるチームと遭遇した。

「あれは…チームラグナロク!? わたくし達が一回戦で当たる相手ですわ…!」

「え? そうなのか」

「…ここに君達が来たのも運命の導きかもしれないな、チームネオサティスフアクション」

3人のうちの1人、ラグナロクのリーダー、ハラルドがコナミ達に話しかけてくる。

「運命の導き…? 何わけの分からないことを言っただけやがる!」

「ふっ…ならば君達に見えているとでもいうのか? あの空に浮かぶフィンブルの冬の到来を」

「……」

「鬼柳が無言になるのも無理はないですわ。何も無いじゃありませんの」

ハラルドがさしたのは特に何の変哲もない空。既に日が落ちかかっており、夕焼けによってほんのり赤く染まっている。

「何も見えねえぞ…」

当然コナミも何も見ることは出来なかった。だが、何かに気づいたエンシエント・ホーリーが精霊の力を解放し、コナミに空中に隠された物体の正体を見せた。

「エンシエント・ホーリー…!? あれは一体…?」

コナミの目がとらえたのは空中に浮かぶ街だった。しかも街は逆さまになっており、その異常性を物語っている。

「ほう。その力…精霊か」

ハラルドの右隣に佇んでいたドラガンはコナミに力を貸したものの正体を左目で見抜いた。

「…! 精霊が見えるのか!?!」

「いや、俺にはそんなものは見えない。だが、それがどんな力か感じ取れることは出来る。この真実を見抜くルーンの瞳の力だな!」

「ルーンの瞳…? 遊星達の痣みてえな力があんのか?」

「俺たち3人はこのルーンの瞳によって守られている。どうやらお前らもあの改ざんの影響を受けてねえみてえだな」

ハラルドの左隣で頭の後ろに手を組んでいたブレイブが話に割って入る。

「お前らはあれが何か分かるのか!？」

「…いや、分からない。だが、ルーンの瞳が危険だと告げている。あれを近づけてはならないと。そして同時に現れたチームニューワールドと大きな関係があると思っっている。彼らを倒すところそがルーンの瞳を与えられた我々の使命!」

「ニューワールドか。俺たちもあいつらを倒そうとしてるんだ!ここは協力しないか?」

「残念だが…星界の三極神は君達を味方だと思っっていないようだ」

ハラルド達がそれぞれ一枚のカードを取り出す。彼らはそのカードからただならぬプレッシャーを感じた。

「何でだよ!俺たちが敵だともいうのか?」

「まずその赤帽子…コナミだったか。お前からは迷いを感じる。わずかだが…それがもたらす綻びは小さくはないだろう。恐らく奴らに対抗するお前の答えがまだ出ていないことによる迷いだ」

「そ、そこまで分かるのかよ…!？」

相談をした相川しか知らないであろう情報。相川が過去の改ざんを受けてしまった以上手に入ることはない情報をドラガンは言っつてのける。

「そして次はそこのお嬢さんだ。見ての通りただの学生、あの組織に挑む資格はないんじゃないか?」

「むっ…!資格がないとは何ですか!わたくしだってここまでどれほどの努力を重ねたか…」

「だけどあんたにはあれが見えてないだろ?」

「それは…」

精霊を通してあの不気味な浮遊物体を感じたコナミと違い彼女には特別な力は何もない。彼女は同じ景色を見ることが出来ずにいた。「しかもあいつらと向き合うためには多少なりとも辛いことが待ってるだろうよ。それにあんたは耐えられるか?」

「それは…。ひ、必要があれば耐えてみせます!」

「だってよ…ハラルド」

ブレイブはハラルドに話を促す。まるで…彼らの絆を試すかのよう  
に。

「最後は…鬼柳京介、君だ。君達3人の中で一番戦う資格がないのは  
君だろう」

「…どういうことだ」

失礼な物言いに反論する鬼柳、だがその反論に力は感じられない。

「君自身ももう分かっているだろう。君は…あれが見えている。そう  
だろう」

「え!?そ、そうなのか?」

困惑するコナミの問いに…鬼柳は答えられなかった。

「…あくまでも隠すつもりか。いいだろう、ルーンの瞳は全てを見抜  
く。君の隠し事をここにさらけださせてもらおうぞ」

そう言うハラルドの左目が光りだし、鬼柳のデッキホルダーの中  
から2枚のカードを照らし出した。

「そいつは…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン!それに…じ、地縛神  
C c a p a c A p u : ! ?」

「…っ!」

鬼柳がかつてダークシンクロモンスターとして使っていたワンハ  
ンドレッド・アイ・ドラゴン、そして地縛神 C c a p a c A p u 。  
それは…ダークシグナーの力の証だった。

「君は…以前までダークシグナーだった者だな」

「ダークシグナーですって…!?!」

幸子は信じられないものを見るように鬼柳を見つめてしまう。

「ダークシグナー…それはイリアステルの命令により破滅をもたらす  
存在。そしてニューワールド…彼らこそがイリアステルなのだ」

「イリアステル?どこかで聞いたような…?あつ、確かルドガーが  
言ってた…!ゼロ・リバーを起こすように命じられたとか何とか…  
!」

遊星と共に戦ったダークシグナー、ルドガー・ゴドウィン。彼の  
語った言の葉がここで線によって結ばれる。

「そうだ。イリアステルは様々な出来事を裏から介入している。彼らはそれほどの組織なのだ。そして：ダークシグナーはイリアステルによって過ちを犯した。鬼柳京介：君に戦う資格などありはしないのだよ」

「くっ、俺は：！」

「待てよ！だけど鬼柳はそのことで悩みに悩んだ！それでも自分の生き様を見せる道を決めたんだ！鬼柳を信じてる奴のために！」

「だが：過去に犯した罪は消えるものではない。それに君がダークシグナーだったこと。それ自体が破滅の運命としてまわりついているのかもしれない」

「そんなことあるか！俺は鬼柳を信じてる！」

「だが：破滅の運命は時として残酷なようだ」

「あつ！幸子！」

彼女が実際に体感した光景が鮮明に思い返されていく。人が1人もいない静かすぎる街。ダークシグナーと命を懸けて戦った双子の傷付く様。そして：ダークシグナーによって生贄にされていく人々の姿。彼女にはデイマクとミステイとレクス・ゴドウィンが地縛神の生贄にした人々の悲鳴の痛々しさが染み込んでいた。

そしてそれを行ったであろう鬼柳に：恐怖を感じてしまった。彼女はいつの間にか：背を向けて走り出し、停めていたDホイールに乗ってどこかへ行ってしまった。

「やっぱり：あのお嬢さんにはきつかったんじやねえかハラルド」

「だがこれで良かったのかもしれない。彼らが棄権すれば：俺たちはチームニューワールドへの対策に全力を尽くせる。そして決勝に上がってくるであろうジャック・アトラスをこの手で：」

「待て2人とも、これは：彼らに与えられた試練だ。人は生きている限りいずれ試練の時が来る。だが試練を乗り越えしものは必ず強くなる。彼らがこの試練を乗り越えることがあれば：我々も全力で立ち向かわなくてはならないであろう」

そして彼らもこの場を去っていく。残された鬼柳達の間には痛いぐらいの沈黙が突き刺さっていた。

## 正しき闇の力

チームラグナロクも高台から離れていき、そこに残ったのは鬼柳とコナミだけとなる。彼らの間にしばらく走った静寂を破ったのは鬼柳の言葉だった。

「…コナミ、知ってるか？俺以外のダークシグナーだった奴らは自分がダークシグナーだったことを覚えてねえみたいなんだ」

「そういえば遊星がいつか言っていたような…」

「俺はダークシグナーの記憶を取り戻した時、あいつらに会いにいった。俺以外にも覚えている奴がいると思っただ。…でも、誰も覚えていなかった」

鬼柳は何人かの元ダークシグナーに会いにいつていた。

カーリー渚という新聞記者は自分に会ってもチームサティスファクションのリーダーだという情報しか知らなかった。ミステイ・ローラという女優は自分に会っても全く表情を変えなかった。ダイヤモンドやルドガーは探しても会う事が出来なかった。

鬼柳はただ1人で罪の意識さいなに苛まれ、やがて死の街クラッシュタウンにたどり着いたのだった。

「そもそも…何で鬼柳は自分がダークシグナーだつてことを覚えていたんだ？」

「それはこいつらが俺の手元に残っていたからだ…」

そういつて鬼柳が取り出したのはワンハンドレッド・アイ・ドラゴンと地縛神 ココロカバク アプのカードだった。

「こいつらが俺の脳裏に刻まれた忌々しい記憶を思い出させた！俺だつてこんな記憶…本当は思い出さたくもなかった。だけど、やっぱり自分のやったことからは逃げられねえのかも知れねえな…」

「鬼柳…ん？」

何と声をかけていいか分からないコナミに2枚のカードをみたエンシエント・ホーリー・ドラゴンが語りかけ、ある事実を伝えた。それを聞いたコナミは一つ決断をする。

「鬼柳…デュエルだ」



「何？」

「あの時のデュエルが原因でお前が悩んでいるなら…それを解決するにはデュエルしかねえ！俺とデュエルだ！」

「悪いが俺は今そんな気分じゃねえ…。あいつが言ってた破滅の運命とやらで幸子はどこかに行っちゃまった。俺は怖いんだ。もしかしたら…お前までどこかに行ってしまうんじゃないかって！」

「大丈夫だ。俺はいつだって…鬼柳！お前の仲間だ！」

「コナミ…」

鬼柳は自分がダークシグナーになってしまっても遊星とコナミが手を差し伸べてくれたことを思い出した。そんな彼の言葉をどうして疑う事ができるだろうか？

「分かった。俺とデュエルしてくれ」

2人は向かい合い、ディスクを構える。彼らが対峙するのはこれで3回目。

1回目はダークシグナーとなった鬼柳を救い出すために。2回目は罪の意識から逃れるためにデュエルによる死を望んだ鬼柳を救い出すために。そして…今回も鬼柳を救うためにコナミは戦う。

「「デュエル！」」

先攻のランプがコナミのディスクに点灯し、デュエルが開始された。

「俺のターン、ドロ―！俺はエーリアン・ソルジャーを召喚！」

体の至る所に水色の水晶をつけた異邦の戦士がフィールドに降り立った。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！来い、鬼柳！」

コナミ LP4000

フィールド 『エーリアン・ソルジャー』（攻撃表示）

セット1

手札4

「俺のターン、ドロ―。…俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを召喚する。こいつは召喚した時守備表示となる」

紫色のローブに身を包んだ死霊使いが空中に浮かんだ。風でローブがなびき、鬼柳を覆うように広がっていく。

インフェルニティ・ネクロマンサー 守備力2000

「俺は…カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「…」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・ネクロマンサー』（守備表示）

セット1

手札4

「…俺のターン！来ないならこっちから行くぜ。俺はギガテック・ウルフを召喚！」

鉄で作られたオオカミがフィールドに着地すると鬼柳に向かって吠え出した。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「バトルだ！エーリアン・ソルジャーでネクロマンサーに攻撃！」

異邦の戦士が足についた水かきを活かし、まるで地面が氷かのよう滑り出す。

「だがネクロマンサーの守備力は2000。エーリアン・ソルジャーでは倒せねえ！」

「そうはいかねえ！トラップ発動、ストライク・ショット！俺のモンスターが攻撃した時、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで700ポイントアップさせる！さらに、そのモンスターが守備モンスターに攻撃した場合攻撃力が守備力を超えていればその分のダメージを与える！」

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900↓2600

エーリアン・ソルジャーの勢いが増していき、周囲に風を纏いながら死霊使いを切り裂いた。

鬼柳 LP4000↓3400

「くっ…」

「さらにギガテック・ウルフで鬼柳にダイレクトアタック！」

エーリアン・ソルジャーの後ろについていたギガテック・ウルフは

スリップ・ストリームの要領で風の抵抗をほとんど受けないうまま鬼柳に突っ込んでいった。

「やるなコナミ……！」

鬼柳 LP3400↓2200

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！このエンドフェイズにストライク・ショットの効果は終了し、攻撃力が元に戻る！」

エーリアン・ソルジャー 攻撃力2600↓1900

コナミ LP4000

フィールド 『エーリアン・ソルジャー』（攻撃表示） 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セット1

手札3

「俺のターン！俺は……」

「鬼柳、攻めてこい！お前はいつだってパワーと度胸で小細工なしで敵を倒してきただろ！」

「コナミ……。俺はインフェルニティ・ビートルを召喚！」

黒く染まったヘラクレスオオカブトがフィールドを舞う。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「カードを2枚伏せ……永続トラップ、ハンドレス・フェイク発動！俺の場にインフェルニティがいる時、次の俺のスタンバイフェイズまで俺の全ての手札を裏側の状態でゲームから除外する！」

鬼柳の手札がどこかの空間へと飛ばされて行く。これで一時的にハンドレスが完成した。

「さらにさつき伏せた永続魔法、虚無の波動を発動！俺の手札が0枚の時、俺のインフェルニティの攻守は400ポイントアップする！」

謎の波動を受けたビートルのツノがわずかに鋭く尖っていった。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200↓1600

「バトルだ！」

「そう簡単には行かせないぜ！永続トラップ発動、ガリトラップーピクシーの輪——俺の場に2体以上攻撃表示モンスターがいる時、俺の場の攻撃力が1番低いモンスターを攻撃対象にすることはできない

！」

「うっ！」

妖精がコナミの場にボールを発生させ、鉄で作られたオオカミを包み込んだ。

「なら、メインフェイズ2に入ってビートルの効果を発動！俺の手札が0枚の時、こいつをリリースすることでデッキから同名モンスターを2体まで呼ぶことができる！俺は2体のビートルを守備表示で特殊召喚する！」

ビートルの呼び声に応じた仲間たちが駆けつけてきた。

インフェルニティ・ビートル×2 守備力0↓400

「さらにもう1枚の伏せカードを発動する。永続魔法、ダブル・デIFエンダー！俺の場に守備モンスターが2体以上いる時、こいつがある限り1ターンに1度だけ攻撃を無効にできる……」

「鬼柳がそんな守備的なカードを……!？」

「ターンエンドだ！」

鬼柳 LP2200

フィールド 『インフェルニティ・ビートル』×2 (守備表示)

セット0 『ハンドレス・フェイク』 『虚無の波動』 『ダブル・デIFエンダー』

手札0

「俺のターン……お前が守るってならそれを突破してみせる！俺はジエネクス・コントローラーを召喚！」

頭の左右にアンテナがついたロボットが電波を飛ばしながらフィールドに降り立つ。

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「バトル！ギガテック・ウルフでビートルに攻撃！」

「ダブル・デIFエンダーの効果でその攻撃を無効にする！」

鉄で作られたオオカミが近づこうとするも威圧されて身動きを封じられてしまう。

「だけど俺にはまだ攻撃が残ってる！ジエネクス・コントローラーとエーリアン・ソルジャーでそれぞれビートルに攻撃！」

ジエネクス・コントローラーは電波をビートルの脳内に直接飛ばすことで、エーリアン・ソルジャーはその剣技で敵を切り裂くことで鬼柳を守る壁を打ち壊した。

「俺のモンスターが全滅……！」

「さらに俺はレベル4のギガテック・ウルフとレベル3のジエネクス・コントローラーでチューニング！3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA・ジエネクス・トライフォース！」

ギガテック・ウルフの姿がジエネクス・コントローラーによって変えられていき、人型のロボットへと変形していく。ジエネクス・コントローラーがその中枢コアへ装填されていくと右手のオレンジのランプが点灯した。

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

「カードを1枚伏せてターンエンド！鬼柳、今のお前は怯えてる！」

「何だど？」

「普段のお前ならそんな守備的な戦略はしない！お前はあいつが言っていた破滅の運命とやらにびびっちゃまってる！そんなものお前の手で壊しちまえ！」

「俺の手で……」

コナミ LP4000

フィールド 『エーリアン・ソルジャー』（攻撃表示） 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）

セット1 『ガリトラップ―ピクシーの輪―』

手札2

「俺のターン……このスタンバイフェイズにハンドレス・フェイクで除外されていた2枚のカードが戻ってくる！」

頭上に空いた空間から鬼柳の元にカードが戻ってきた。

「そして俺はインフェルニティ・ミラージユを召喚！」

青いローブに身を包んだモンスターが現れる。その姿は透けており、幻影のように揺らぐ。

インフェルニティ・ミラージユ 攻撃力0↓400

「そして虚無の波動のもう一つの効果を発動！虚無の波動を墓地へ送ることで手札を全て墓地へ送る！」

インフェルニティにパワーを与えていた波動が消えた代わりに鬼柳はハンドレスを完成させた。

インフェルニティ・ミラージュ 攻撃力4000↓0

「さらにインフェルニティ・ミラージュの効果を発動！ミラージュをリリースして墓地のインフェルニティを2体特殊召喚する！俺はネクロマンサーとインフェルニティ・デストロイヤーを特殊召喚！」

紫のローブに身を包んだ死霊使いと屈強な体をした悪魔が現れた。

インフェルニティ・ネクロマンサー 守備力2000

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「デストロイヤーの攻撃力は2300、トライフォースの方が上だ！そして俺の場にあるガリトラップによってエーリアン・ソルジャーを攻撃することはできない！」

「ならネクロマンサーの効果を発動！手札が0枚の時、墓地のインフェルニティモンスターであるビートルを特殊召喚することが出来る！」

死霊使いが墓地で眠っていたビートルを蘇生させた。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「…分かってるぜ鬼柳。お前がインフェルニティ・デス・ドラゴンを呼ぼうとしていることは！永続トラップ、夜霧のスナイパー発動！」

コナミの発動したトラップから出てきたスナイパーが鬼柳のフィールドをスコープで覗き、標準を合わせている。

「俺はモンスターを一つ宣言する！そして相手がそのモンスターを呼び出した時、そのモンスターは除外される！俺が宣言するのはインフェルニティ・デス・ドラゴン！」

「何だと…!?!」

スナイパーの狙いが定まる。インフェルニティ・デス・ドラゴンが現れれば寸分のくるいもなしに撃ち抜くことができるだろう。

「く…俺はこれで」

「鬼柳、お前にはまだ呼べるモンスターがいるはずだ！」

「…！だが、こいつは…」

「あの時のデュエルを振り払うには…このデュエルであいつを乗り越えるしかねえんだ！」

「…俺はレベル6のデストロイヤーにレベル2のビートルをチューニング！死者と生者の狭間、その虚ろな魂が混じるとき冥府の闇が舞い降りる！シンクロ召喚、いでよワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」  
100個の目玉が体に張り付いた奇妙なドラゴンが地面から這い出てきた。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 攻撃力3000

「来たか…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン」

「行くぜ…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンは墓地のレベル6以下の闇属性モンスターを除外することでその効果のコピーできる。墓地のデストロイヤーを除外してその効果を得る！バトルだ。ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでライフオースに攻撃！インフィニティ・サイト・ストリーム！」

闇に染まったエネルギー砲が人型のロボットを貫いた。

コナミ LP4000↓3500

「さらにデストロイヤーの効果によって、俺の手札が0枚の時に相手モンスターを破壊したことで相手に1600のダメージを与える！」  
コナミもエネルギーの余波の巻き添いになり、大きくライフを削られてしまう。

「うおおおっ!?!」

コナミ LP3500↓1900

「これで…ターンエンドだ」

鬼柳 LP2200

フィールド 『インフェルニティ・ネクロマンサー』（守備表示）

『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』（攻撃表示）

セット0 『ハンドレス・フェイク』『ダブル・ディフェンダー』

手札0

「いてて…さすがにダメージが大きいぜ。だけど、この程度で弱音は吐かねえ！俺のターン、ドロ！俺はエリアン・ソルジャーをリ

リリースしてサイバネティック・マジシャンをアドバンス召喚！」

エーリアン・ソルジャーの代わりにフィールドに現れたのは左手に白い杖を持った魔術師。何かの呪文を詠唱して杖に込めているようだ。

サイバネティック・マジシャン 攻撃力2400

「そいつは…！」

「サイバネティック・マジシャンの効果発動！俺の手札を1枚墓地へ送ることで選択したモンスターへの攻撃力を2000にする！俺はワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを選択！」

詠唱を終えた魔術師は杖を振りかざし、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの体を小さくしていった。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 攻撃力3000↓2000

「バトル！サイバネティック・マジシャンでワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを攻撃だ！」

魔術師は杖を天に向けてと空から雷が落ちて来て、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを貫いてしまった。

鬼柳 LP2200↓1800

「ぐあっ…！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが倒れたことで墓地のインフェルニティ・リベンジャーはレベルをコピーして特殊召喚できる！」

2丁の銃を手に持った小人が地面に空いた穴からフィールドに登ってくる。

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0

「そして…」

鬼柳はコナミの方を見る。それに気づいたコナミはゆっくりとうなづいた。

「ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが破壊されたことで俺は地縛神を手札に加えなくてはならない…！俺が加えるのは地縛神 C c a p

a c A p u !」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの強制効果によって鬼柳の手に地縛神が加わる。鬼柳はダークシグナーの時に地縛神を召喚するた



めに人々を生贄に捧げた。それは罪の意識という形で鬼柳に今もお突き刺さっている。

「俺はこれでターンエンドだ！鬼柳、そいつを乗り越えるんだ…！」

コナミ LP1900

フィールド 『サイバネティック・マジシャン』（攻撃表示）

セット0 『ガリトラップ・ピックアップの輪ー』『夜霧のスナイパー』

手札1

「俺のターン、ドロー！だが、こいつを呼び出せばまた…！」

「大丈夫だ！鬼柳、俺を…いや、お前自身を信じるんだ！もうあんな過ちをしないって誓った自分自身を！」

「そうだ…！俺はもう、あんな満足出来ねえことはしねえ！絶対に！俺はフィールド魔法、始皇帝の陵墓を発動！」

フィールドが祭壇へと変わっていく。そこはまるで何かの儀式をするための場所に見えた。

「ふう…。俺はネクロマンサーとリベンジャーをリリース…！人々の魂を生贄にしないで現れやがれ！地縛神 C c a p a c A p u！」

ネクロマンサーとリベンジャーが捧げられていき、祭壇を覆うように現れたのは巨人。その姿は闇に染まっているが…悪に支配されてはいなかった。

地縛神 C c a p a c A p u 攻撃力3000

鬼柳とコナミは周囲を見渡す。彼らの目には人々が生贄に捧げられていく様が映し出させれることはなかった。

「本当に…地縛神を人々の魂を生贄にせずに降臨させられたのか…？」

「ああ。…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン、そして地縛神 C c a p a c A p u。そいつらはもうダークシグナーがシグナーに倒された時に悪の力が浄化されていたらしい。…鬼柳も本当は気づいていたんだろ？例えば…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンはダークシクロモンスターじゃなくなっているとか、地縛神も…人々を生贄にして得ていた相手の魔法・罫カードへの絶対耐性がなくなっていたり

な」

「…確信はなかったけどな。俺はこいつらを今までまともに見ることは出来なかった。ただ、ダークシグナーの時のようなゾツとするような力は感じなかったってだけだった。俺は…怖かったんだ」

「だけど今…鬼柳はその恐怖を乗り越えた！鬼柳、俺はお前だけがダークシグナーのカードが手元に残ったのは…守るためだと思うんだ」

「守るためだど？」

「そうだ。そのモンスターにはまだ力が残ってる。そいつらが残っていたのは過去の罪の証なんかじゃない。イリアステルを倒して…俺たちの未来を守るためなんだ！」

「…そうかもな！俺はもう恐れねえ！もしイリアステルのせいでニコやウエストたちにも危険が及ぶってなら…俺はこのカードの力を使ってでも守ってみせる！行くぜ、コナミ！地縛神 C c a p a c A p uは相手プレイヤーにダイレクトアタックできる…いけ！」

巨人がゆっくりとコナミに近づいていく。そしてコナミを闇の炎で包み込んでいった。コナミはその炎を…暖かく感じていた。

コナミ L P 1 9 0 0 ↓ 0

こうして彼らのデュエルは終了した。そして…このデュエルを見ていた者がこっそりと近づいてくる。

「幸子…!?いつの間に！」

「…急にいなくなって悪かったですわね。今のデュエル…全部見ていましたし聞こえていましたわ」

「そうだったのか…。まったく気づかなかったぜ」

「鬼柳、わたくしは今でもあの光景を忘れることは出来ないでしょう。地縛神によって人々が生贄に捧げられる様を。ですが…それに恐怖していたのはあなたもだった」

「幸子…。そうだ。俺は過去の俺自身が怖かった。あんな恐ろしいことをしてしまった…俺が」

「…ですがあなたはそれに向き合った。わたくしも…あなたのその覚悟を受けとめますわ」

「だが…本当にいいのか？俺は…」

「いいのです！…忘れましたの？わたくしも…チームネオサテイスファクシヨンのメンバーの1人。リーダーを信用できなくてメンバーは務まりませんわ！」

「幸子…！」

鬼柳は思わず涙ぐんでしまう。存外鬼柳京介という男は涙脆いのかも知れない。こうして破滅の運命の連鎖を断ち切った彼らの目の前に…予想外の出来事が起こった。驚くべきことに…カードが刻まれた石板が天から落ちて来て、地面へと突き刺さったのだった。

モンスターではない、神だ！

高台へと落とされたカードが刻まれた石版、そこから出てきた1枚のカードを鬼柳は導かれるように手に取る。そのカードは白紙だったのだが、鬼柳が触れると真の姿へと変わっていく。呆気に取られる鬼柳だったが、このカードは自分の力になると感じとっていた。

石版の落下に気づき、遙か遠くからこれを見ていた組織がいた。イリアステルの3皇帝：遊星との戦いで負傷したプラシドとまだ未知なる力を持つルチアーノとホセ。彼らにとつて石版が彼に力を与えるなどあつてはならないことであつた。

「何故だ…!?あの石版は俺たちに機皇帝の力を授けたものと同じものだ！」

「何が起こつてんのさ、ホセ！」

「ワシにも分からねぬ。あの石版は神が認めし者にしか送られないものだ。奴がその資格を得たというのか…？」

「ふざけるな…！不動遊星ならいざ知らずどこの骨とも分からね奴が易々とその資格を得てたまるものか！」

激昂するプラシドを横目にルチアーノが高台にいる鬼柳を含めた3人を見てあることに気づく。

「あれ？あいつら今度の試合でチームラグナロクと戦う奴らじゃないか」

「ほう…。ワシらの力が及ばぬルーンの瞳を持つラグナロク、それと戦う者に授けられた石版。これは偶然ではあるまい」

「少なくともあいつは神様に認められるくらいの力を持つてるってこと？面白いね。これは試合が見逃せないやーきひゃひゃひゃー！」

彼らの中で一番幼い容姿をしているルチアーノは無邪気に高い声で笑い出す。プラシドが鬼柳をにらみつけながらも踵を返し、その場から立ち去っていった。

「ふん、まあいい。俺の前に立ち塞がるというのなら倒せばいいだけの話だ」

その言葉を最後に彼らは作り出した次元の裂け目からどこかへと

消えてしまった。

そのことに気づかなかった鬼柳達は突然現れた石版のせいで集まってきた野次馬から逃れるため、停めていたDホイールに乗りガレージへと帰っていった。

そして時は過ぎ、WRGP準々決勝、チームラグナロクvsチームネオサティスファクションの試合が始まろうとしていた。既にファーストホイラーは準備が出来ており、時間となればすぐにでもDホイールを走らせることが出来る状態だった。

「ルーンの瞳の忠告を無視し、愚かにも挑んでくるか」

ラグナロクのファーストホイラー、ドラガンが挑発とも取れる物言いを言い放つ。それに…ネオサティスファクションのファーストホイラーとして出ている鬼柳は答えた。

「違うな。俺たちは乗り越えたのさ」

「乗り越えただと？」

「ああ、俺たちは俺たちの中に潜む恐怖と言う名の魔物を倒したのさ！そんな俺らを止められるものは何もねえ！」

「面白いことを言う。だが、お前は今の発言を後悔することになるだろう。星界の三極神の手で貴様らは敗北を迎える！」

「へっ…俺は俺を信じて送り出してくれたあいつらのためにも絶対に負けねえ！」

そしてカウントダウンが始まった。

「鬼柳、このわたくしをファーストホイラーから退けてまで出たのですから勝たないと承知しませんわよ！」

「満足させてくれよ鬼柳！」

「ああ…チームネオサティスファクションリーダー、鬼柳京介！このデュエルを見ている全員を満足させてやるぜ！」

カウントが0になり、2つのDホイールが飛び出す。差は僅差であったが世界的に活躍しているラグナロクのDホイールの性能の方が流石に高かったのかドラガンが先にファーストレーンを通過し、先攻を取った。

「「デュエル！」」

「俺のターンからだ。ドロー！俺はモンスターを伏せ、1枚のカードを伏せる！ターンエンドだ。お前達の覚悟、俺が見極めてやろう」

特に大きな動きを見せず、ドラガンは鬼柳にターンを渡した。

ドラガン LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セツト1

手札4

スピードカウンター

SC0

「いくぜ！俺のターン、ドローだ！…いきなりか、中々満足出来そうじゃねえか」

ドラガン SC0↓1 鬼柳 SC0↓1

「何にせよ、ここは攻めるしかねえ！俺はインフェルニティ・ナイトを召喚！」

チェスのナイトのようなモンスターが腕をクロスさせてフィールドへと降り立った。

インフェルニティ・ナイト 攻撃力1400

「バトルだ！インフェルニティ・ナイトでそのモンスターを斬り裂くぜ！」

両手剣を上手く扱い、伏せられていたモンスターに一閃を放ち紫電を走らせた。

「俺が伏せていたのは極星獣タングリスニ！守備力は800のため破壊されるが…。このモンスターが戦闘によって破壊された時、場に2体の極星獣トークンを残す！」

破壊されたヤギの骨と皮がトークンとして場に残った。

極星獣トークン×2 守備力0

「モンスターを残しやがったか！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

（伏せてあるトラップを使うか？…いや、奴のモンスターは恐らく再生能力がある。やめておこう）

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・ナイト』（攻撃表示）

セット1

手札4

sc1

「俺のターン……早速見せてやろう、俺のもつ神のカードの力を！」

「何だと!？」

ドラガン sc1↓2 鬼柳 sc1↓2

「俺はチューナーモンスター、極星獣グルファクシを召喚する!そしてレベル3の極星獣トークン2体とレベル4の極星獣グルファクシをチューニング!星界の扉が開くとき、古の戦神いにしえいくさのみがその魔鎚を張り上げん。大地を揺るがし轟く雷鳴とともに顕れよ!シンクロ召喚!光臨せよ、極星皇トール!」

空から降り注がれた雷が2人の背後を貫くと、そこに現れたのは左手にミヨルニルと言われる稲妻を象徴する槌を持った巨大な神。神のあまりのやかさに会場は驚き、静まってしまう。

極星皇トール 攻撃力3500

「これはあの時お前らが見せてきたカードか。相変わらず凄え圧力だぜ……!」

「神の力、存分に食らうがいい!トールでインフェルニティ・ナイトへ攻撃する!サンダーパイル!」

神の鉄槌が下され、あまりの体格差にナイトは一瞬で潰されてしまった。

「ぐっ……この衝撃は何だ……まるで本当に衝撃が伝わってくるみてえだ!」

鬼柳 LP4000↓1900

「これが神と戦うということだ!避ける手はあるぞ?デツキに手を置き、サレンダーすれば良い。誰もお前を責めはしない!」

「誰がそんなことするかよ!俺は破壊されたインフェルニティ・ナイトの効果を発動する!手札を2枚捨てることで破壊されたこのモンスターを復活させることができる!」

2枚のカードが墓地へと繋がる穴をこじ開け、ナイトをフィールドへと呼び戻した。

インフェルニティ・ナイト 攻撃力1400

「往生際の悪い奴だ。ならば三極神のさらなる能力をお前に見せてやる。トラップ発動、極星宝レーヴァティン！このターン戦闘によってモンスターを破壊したモンスターを1体破壊する！これで俺のターンは終了だ」

「馬鹿な！そんなことしたらツールが…」

神が地面の底へと沈んでいく。その直後であった。会場が地響きによって揺れだしたのだ。

「何だ？地震か？」

「違うな、これは神の呼び声だ！」

「神だと？てめえの罫によって神は消えた！」

「そう思うか？ならばこのレーンから見渡せるあの海を見るがいい！」

「なっ…!?!」

鬼柳が見たのは想像を絶する光景だった。海が不自然に割れていき、そこから先ほど破壊されてしまったはずのツールが地中より戻ってきたのだ。

「ツールは破壊され、墓地へ送られてもそのエンドフェイズに俺のフィールドへと戻ってくる！そう…まさに不死の能力を備えているのだ！」

「何だと…！そんなモンスターがいるのかよ！」

「モンスターではない、神だ！」

海の上へと浮遊したツールは体勢を整えると、ドラガンのフィールドめがけて飛んでくる。

極星皇ツール 攻撃力3500

「さらにこの効果でツールが場に戻る場合、相手に800のダメージを与える！」

「くっ！そう簡単に食らってたまるかよ！トラップ発動、ダメージ・トランスレーション！このカードの効果でこのターン俺が受ける効果ダメージは半分になる！」

「だが、神の衝撃は免れない！」



勢いよく場に戻ったトールから鬼柳に向けて衝撃波が放たれる。鬼柳のトラップが生み出した幕はその衝撃を和らげるが、それでも鬼柳がバランスを崩してしまう。

鬼柳 LP1900↓1500

「ああつとー！鬼柳、クラッシュかー!?」

MCの声に観客は固唾を呑む。クラッシュをしてしまえば走行の意思なし、ということになり鬼柳は強制的に敗北となってしまいうからだ。

「まだ…だー!」

鬼柳は体を身を乗り出さないギリギリまで倒れそうになっている方向と逆方向に倒し、何とかクラッシュを免れた。

「耐えたか。クラッシュをしてしまえば楽になれたものを」

「悪いな。俺たちネオサティスファクションは諦めるなんて言葉が辞書にないもんでな！俺はダメージ・トランスレーションのもう一つの効果を発動！このターン俺が受けた効果ダメージの回数だけ俺の場にゴースト・トークンを呼び出す！」

トールの衝撃波によって幕に空いた穴から怨霊が飛び出してきた。

ゴースト・トークン 守備力0

ドラガン LP4000

フィールド 『極神皇トール』（攻撃表示）

セット0

手札4

sc2

「俺のターン、ドロー。…さあお披露目だぜ」

ドラガン sc2↓3 鬼柳 sc2↓3

「ドラガン…俺の覚悟、受け止めてみな！」

「神を前にしても一歩も引かないとはな。だが、神の前では何人たりとも無力と化す！並大抵のモンスターでは抵抗することすら叶わない」

「そいつは…どうかな？俺はフィールドのインフェルニティ・ナイトとゴースト・トークンをリリース！…こいつが俺にもたらすのは恐怖

じゃねえ、満足だ！降臨せよ、地縛神 C c a p a c A p u 攻撃力3000  
「何だど?!」

闇に染まりし巨人が神と向かい合うように降り立つ。その姿は神と比較しても遜色ないほどに巨大だ。

地縛神 C c a p a c A p u 攻撃力3000

「ひやははは！頼んだぜ、C c a p a c A p u！相手が神ならこつちも神で対抗してやる！」

「狂ったか?!?そのカードはダークシグナーのカード。それを使用するということはお前自身も闇に染まるということだぞ！」

「俺は一度地獄に落ちた！死神は闇を恐れねえのさ。この闇の力を味方につけて俺は前に進む！」

地縛神が会場からも見えるようになった直後、鬼柳のDホイルのマルチ対戦用の通信ネットワークがオンになりある人物が訴えかけてくる。

「鬼柳！大丈夫か！」

「遊星か。大丈夫だ。俺はまたダークシグナーになったわけでも全てを捨てちまったわけでもねえ」

コナミとともに鬼柳と何度も向き合った遊星。彼は鬼柳が地縛神に再び飲み込まれてしまったのではないかと心配したのだ。

「大丈夫…なんだな？」

「ああ。見ての通り誰も生贄なんかにしてねえし、俺は地縛神に操られてもない。信じてくれ、遊星」

「鬼柳…。分かった。俺はお前を信じている」

「ありがとな」

鬼柳の覚悟が伝わったのか遊星は何も聞かずに通信を切ってくれた。そしてこの会話を聞いていたドラガンにも鬼柳の覚悟が伝わっていた。

「…何をお前をそうさせるのか俺には分からない。だが、俺とお前は今向き合っている。ならばやることは一つだ」

「ああ、お前に俺の覚悟をぶつける！C c a p a c A p uはフィールド魔法がないと破壊されてしまう。だが、フィールドにはスピー

ド・ワールド2が既にでている！」

「スピード・ワールド2は大会規定により破壊することが出来ない。やってくるな。だが、攻撃力はツールの方が上！」

「甘いぜ、C c a p a c A p uは相手にダイレクトアタックすることが出来る！攻撃だC c a p a c A p u！」

「なん…だと…？」

巨人の手が振るわれるとそこから突風が巻き起こり、ドラガンを直接襲った。

ドラガン LP4000↓1000

「ぐおおっ！まさか神に対してこんな手で来るとはな…！」

「見たか！これが俺の力だ。そして俺は手札の残った2枚のカードを全て伏せる！これでターンエンドだ！」

地縛神の一撃がドラガンに直撃するのを見届けると鬼柳はハンドレスを完成させ、ターンを渡した。

鬼柳 LP1500

フィールド 『地縛神 C c a p a c A p u』

セット2

手札0

s c 3

「見事だ…だが！俺のターン！」

ドラガン s c 3↓4 鬼柳 s c 3↓4

「先ほども言ったがツールの攻撃力は地縛神を上回っている！このターンでそいつには消えてもらう！」

「そうは行かないぜ！C c a p a c A p uのさらなる効果によって相手はこのカードを攻撃の対象には出来ねえ！」

「ほう…お前の場にはそいつのみ。だが、そいつを攻撃できないということは」

「お前は攻撃自体を封じられた！」

巨人の咆哮によって神といえども攻撃の体勢に入ることが出来ないでいた。

「だが、ツールはその上に行く！ツールの効果を発動する、エフェクト

アブソーバー！」

トールが槌を天に振りかざすと空から注がれた光が巨人の闇を浄化していった。

「これは……！」

「トールは相手モンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にし、さらにその効果を自らの効果として使用することが出来る！」

「しまった……i C c a p a c A p uの攻撃対象にならない効果を消された上に戦闘で相手モンスターを破壊した時にその攻撃力分のダメージを与える効果まで奪われた！」

「ふ……たとえお前が神を操ろうとも俺の操るトールには敵わないということだ！俺はカードを1枚伏せ……バトルだ。トールで地縛神へと攻撃する！サンダーパイル！」

トールが直接地縛神へと近づいていき、その槌を振り下ろそうとした瞬間、光線が放たれトールを貫いた。

「……！一体何が！」

「俺はトラップカード、インフェルニティ・ブレイクを発動したのさ！こいつは俺の手札が0枚の時、墓地のインフェルニティカードを除外することで相手フィールドのカードを1枚破壊することが出来る！俺はインフェルニティ・ナイトを除外することでトールを破壊していた！」

「なるほどな……。だが、神に死はない！トールはエンドフェイズに再びフィールドに舞い戻る！」

「確かにトールは不死身……だけどそれを操るプレイヤーのライフは限りがある！この1ターンを凌ぎさえすれば再びC c a p a c A p uのダイレクトアタックを受けてお前の負けだ！」

「そう来たか……。プレイヤーのライフは限りがある。その通りだ。だがお前は大事なことを忘れている！」

「何だよ？」

「お前のライフにも限りはあるということだ！俺はスピード・ワールド2の効果を発動する！s cを4つ取り除き、手札のs p 1枚につき、相手に800のダメージを与える！俺の手札には1枚！」

ドラガン sc4↓0

ドラガンのDホイールから鬼柳に向けて衝撃波が放たれ、鬼柳のライフを着実に削った。

鬼柳 LP1500↓700

「俺のライフがデッドゾーンに入った…そしてエンドフェイズにはトールが戻って来る！」

「そう…つまりお前の負けということだ！俺はターンを終了する。だが、ただのターンエンドではない！トールの効果を発動する！破壊されたトールはエンドフェイズに…復活する！」

レーン横の海から再びトールがフィールドへと舞い戻ってきた。

極神皇トール 攻撃力3500

「そしてトールはこの効果で復活に成功した時、相手に800のダメージを与える！この勝負、俺の勝ちだ鬼柳京介！」

「…！」

トールが槌を振りかざし、雷を発生させる。その雷は周囲に無作為に降り注ぎ、やがて鬼柳へと向かって放たれた。だがその雷が直撃しようかという寸前、雷は時間が止まったかのように鬼柳の近くでとまってしまう。そしていつの間にかドラガンはモンスターによってこめかみに銃を突きつけられていた。

「神の一撃が止まった…！これはどういうことだ！」

「…それは俺がお前に最後の勝負を仕掛けていたからさ！」

「最後の勝負だと？」

「そうだ！俺はお前がトールの効果を発動した時に墓地からインフェルニティ・デス・ガンマンの効果を発動していたのさ！」

ドラガンに銃を向けていたのはガタイのいい人型のモンスター。ヤギの仮面を被り今にも銃を解き放ちそうにしているガンマンだった。

「こいつは相手がライフポイントにダメージを与える効果を持つカードを発動した時、墓地から除外することでその効果ダメージを無効にすることが出来る！そしてお前は2つの効果のうち、1つの効果を選ばなくちゃならねえ！」

「俺に選択を迫るといふのか…!」

「まず1つ目、お前はこのターン俺に効果によるダメージを与えることは出来ない効果だ。これを使っちゃえばお前は俺にダメージを与えることができなくなる。そしてもう1つの効果を選べば俺はカードを1枚ドロウする。そして引いたカードの種類によつて効果が決定する! モンスターを引いたならこのターン俺が受けた効果ダメージと無効にした効果ダメージの合計分のダメージを相手に与える!」  
「俺はこのターンお前に800のダメージを与え、800のダメージを無効にされている。…お前は最初からこれを狙っていたのか!？」

「さあな? ただし、俺が引いたのがモンスターじゃなければ俺はこのターン受けた効果ダメージ分のダメージを受けちゃう」

「お前は既に800のダメージを受けている…」

「そうよ! お前が俺がドロウする効果を選べばそこに立っているのは一人だけってことだ! さあ…どうするよドラガン!」

ドラガンは少し考え、すぐに答えを出した。

「お前をこのターンで倒すことが出来なければ次のターン、俺は地縛神の攻撃を受けて負ける…。ならば選択肢は一つだ。鬼柳、カードを引くがいい!」

「へっ…行くぜ? イッツ…シヨータイム! ドロー!」

鬼柳は迷いなくカードを引きぬく。ドロウしたカードは…インフェルニティ・リベンジャー。モンスターカードだった。

「ふ…運命はお前を選んだというわけか」

トールの放った雷はそのまま消えていき、ガンマンがドラガンへ銃を放った。

ドラガン LP1000↓0

こうしてファーストホイーラー同士の戦いは幕を閉じたのであった。

## 世界を笑う神

ドラガンと交代し、ピットから出てきたチームラグナロクのセカンドホイーラー、ブレイブが鬼柳に追いつく。

「まさかドラガンを倒しちまうとはな。だが、俺から勝利を頂戴出来ると思うなよ?」

「いいや、このまま押しきってやる!」

「「デュエル!」」

「俺のターン、ドロー!」

ブレイブ スピードカウンター s c 0 ↓ 1 鬼柳 s c 4 ↓ 5

「お前の手札にはデス・ガンマンの効果でドローしたモンスターが残っている。お得意のハンドレスコンボは使えないぜ?」

「それでも俺の場にはC c a p a c コカバク A p u アプがいる!」

「それなら俺の場にもいるんだぜ…神がな! トールの効果を発動、エフェクトアブソーバー! 地縛神の効果をエンドフェイズまで無効にし、その効果を得る!」

トールが槌を振るい、風を起こすと地縛神が灰色に染まってしまった。

「これで地縛神の攻撃対象にされない効果は消え、さらにトールは戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果を得た! 早速勝利を頂戴させてもらうぜ! カードを1枚伏せ、トールで地縛神に攻撃! サンダーパイル!」

トールの頭上に立ち込めた暗雲から一筋の雷が落ち、槌に電気が吸収されていく。そして帯電した槌が地縛神に向けて振るわれた。

「てめえがそうくることなんざ百も承知なんだよ! 永続トラップ発動、デプス・アミュレットオ!」

地縛神の胸元にお守りがかけられ、そこから展開された障壁がトールの放った槌を弾いた。

「トールの攻撃を防いだだと!?!」

「デプス・アミュレットは俺の手札を1枚墓地へ捨てるごとに相手モンスターの攻撃を1度防ぐことができる。この効果でトールの攻撃

を無効にしたのさー！」

「そんな罠を張っていたなんてな。こりや一本取られたぜ。ターンエンドだ！この瞬間、トールの効果は終了し無効にされた地縛神の効果も元に戻る！」

地縛神の色が元に戻っていく。すると胸元にかけていたお守りに小さなヒビが入ってしまった。

「何だ？」

「デプス・アミュレットは発動した後、相手の3回目のエンドフェイズに破壊されちまう…だが！その前にお前を倒す！」

ブレイブ LP4000

フィールド 『極神皇トール』（攻撃表示）

セット2

手札5

sc1

「俺のターン、ドロロー！」

ブレイブ sc1↓2 鬼柳 sc5↓6

「このカードは…！俺はカードを1枚伏せる！」

（今俺が伏せたカードはトラップカード、ファイアーダーツ。俺の手札が0枚の時に3つのサイコロを振ることで出た目の数の合計×100のダメージを相手に与えるカードだ！Cc a p a c A p uの直接攻撃で3000のダメージを与え、このカードで1000以上のダメージを与えれば…！）

「行くぜブレイブ。C c a p a c A p uは相手プレイヤーにダイレクトアタックすることが出来る！いけ！」

「しまった！3000の戦闘ダメージを食らっちゃまう！」

トールの横を通り抜け、地縛神がブレイブに直接鉄槌を下した。

「ああつ…！俺のライフが…ライフが！」

ブレイブ LP4000↓1000

「よし！俺はこれで…！」

「…なんてな」

「何？」



大きさに痛みが手を手を天に伸ばしていたブレイブは、その手を下ろし小気味よくいたずらが成功した子供のようには笑いだす。

「ははっ！かかったな鬼柳。俺はお前の攻撃に対して2枚のトラップを使っていたのさ。まず1枚目、ドラガンの残したトラップカード、亜空間物質転送装置によってツールをエンドフェイズまで除外していた！」

「そんなことをしてもC c a p a c A p uの攻撃を防ぐことは……」  
「慌てんなよ。俺が戦闘ダメージを受けた時に発動したもう1枚のトラップカード……それはフリッグのリング。神様からのお恵みさ」

発動されたトラップから黄金色に輝くリングが出てきてブレイブの手に収まり、一口ほどかじられる。

「このカードは俺の場にモンスターがいない時に相手から戦闘ダメージを受けた時に発動することが出来る。そして……俺が受けた戦闘ダメージ分のライフを回復してその数値と攻守が同じ邪精トークンを呼び出す！」

「何だ?!」

ブレイブに天から光が注がれライフを回復していくと共に、それによってできた影から幻影が生み出されていった。

ブレイブ LP1000↓4000

邪精トークン 攻撃力3000

「ま……トリックスターのブレイブ様の手にかかればこんなところかな？」

「なんて野郎だ……ターンエンド！」

「そしてこの瞬間、亜空間物質転送装置によって除外されたツールが場に帰還する！」

次元の裂け目を槌によって広げ、再びツールがフィールドへと戻ってきた。

極神皇ツール 攻撃力3500

鬼柳 LP700

フィールド 『地縛神 C c a p a c A p u』(攻撃表示)

セット1 『デプス・アミュレット』

手札0

sc6

「さあ…第1幕の終了だ。俺のターン！」

ブレイブ sc2↓3 鬼柳 sc6↓7

「トールの効果を発動、エフェクトアブソーバー！もう1度地縛神の効果を奪い取らせてもらう！」

「くっ…！」

三たび地縛神の力がトールへと吸い込まれていく。

「神を相手によくここまで戦ったぜ。だが、これまでだ！トールで地縛神を攻撃、サンダーパイル！」

トールは電気をまとった槌を大きく振るい、地を蹴り上げ巨大な地縛神のさらに頭上をとる。避ける余地のない攻撃が地縛神へと直撃した。

「ぐおおっ!？」

鬼柳 LP700↓200

「そしてトールには地縛神の効果が吸収されている！この効果で戦闘で破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！終わりだ鬼柳京介！」

地縛神が倒れたことで衝撃が発生し、鬼柳はそれに巻き込まれてしまった。

鬼柳 LP200↓0

「まずは1勝目を頂戴させてもらったぜ！」

ブレイブがパフォーマンスを見せ、観客を沸かしていく。丁度観客席の間を通過するタイミングだったため、ブレイブは凱旋する形となる。

「まだだ…！」

「ん？」

「死神の足掻きを見せてやる…！墓地のインフェルニティ・リベンジャーの効果を発動！俺の手札が0枚の場合に俺のモンスターが戦闘で破壊された時、墓地のこいつをやられたモンスターと同じレベルとして特殊召喚することが出来る！」

地縛神が沈んでいった穴から2丁の拳銃を持った小人が這い出てきた。

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0  
レベル1↓10

「あちやー。モンスターを残しちまったか。お前のライフが尽きた以上追撃は出来ないし…」

「さらに俺はトラップカード、ファイアーダーツを発動する！このカードの効果で俺はサイコロを3つ振り、出た目の数の合計×100のダメージを相手に与える！」

「なっ…！」

鬼柳の頭上に現れたサイコロが転がっていく。その出目は3、4、3…合計は10。10本の燃えさかるダーツがブレイブを買いた。

ブレイブ LP4000↓3000

「ドラガンを倒しておきながらここまでやってくれるとはな…！鬼柳京介、やはり只者じゃねえみたいだ。…だが」

ブレイブの目線の先にはチームネオサティスフアクションのピットで鬼柳と交代しようと準備しているセカンドホイラーの幸子がいた。

「お嬢さんには神に立ち向かう力はない…。残念だがここからはブレイブ様の独壇場さ」

ブレイブ LP3000

フィールド 『極神皇トール』（攻撃表示） 『邪精トークン』（攻撃表示）

セット0

手札6

sc3

「後は頼んだぜ幸子！」

「任せなさい。あなたの足掻きが無駄にはしませんわ」

ピットに戻った鬼柳は自分の場に残ったカードとこの戦いにかけている想いを幸子に託していく。それを受け取った幸子はDホイールを走らせ、ブレイブに追いついた。

「やれやれ…来ちまったか」

「どういう意味ですか?」

「鬼柳を見てわかっただろ? 神との戦いではデュエルの衝撃は実際のダメージになってプレイヤーを襲う。そんな危険な戦いにあんたみたいな女を巻き込みたくはなかったんだが…」

ピットを振り返るとそこには今までの衝撃がこたえたのか倒れこみコナミに支えられている鬼柳の姿があった。

「…女と馬鹿にしていると痛い目を見るのはあなたの方かもしれませんわよ?」

「へえ…言うねえ。なら全力でいかせてもらおうか!」

「「デュエル!」」

「わたくしのターンです!」

ブレイブ sc3↓4 幸子 sc7↓8

「鬼柳。あなたが残したモンスターを使わせて頂きますわよ! わたくしはインフェルニティ・リベンジャーをリリースして暗黒大要塞鯨をアドバンス召喚致しますわ!」

幸子のフィールドが水で満たされていき、そこに要塞を携えた巨大なシャチが現れる。

暗黒大要塞鯨 攻撃力2100

「さらに<sup>スピードスベル</sup>s p―サモン・スピーダーを発動します! わたくしのscが4以上ある時、手札よりレベル4以下のモンスターを特殊召喚出来ますわ! 来なさい、魚雷魚!」

水に飛び込んだ魚雷の形をした魚がシャチの腹部にある発射口へとセットされる。

魚雷魚 攻撃力1000

「そして暗黒大要塞鯨の効果を発動します! 魚雷魚をリリースすることで相手フィールドのモンスターを一体破壊しますわ!」

「おっと…トールを破壊する気かい?」

「トールは破壊してもエンドフェイズには復活してしまいますわ。ならここで狙うべきは邪精トークン!」

発射口から放たれた魚雷魚は幻影を爆発で吹き飛ばした。

「攻撃力3000の邪精トークンがやられちゃったな。だけど俺の場にはツールがいる。それだけで十分さ」

「わたくしはスピード・ワールド2の効果を発動しますわ！scを7つ取り除くことでカードを1枚ドロウすることが出来ます。：良いカードですわ。わたくしは1枚カードを伏せてターンを終了します」

幸子 sc8↓1

幸子 LP4000

フィールド 『暗黒大要塞鯨』（攻撃表示）

セット1 『デプス・アミュレット』

手札3

sc1

「俺のターン！」

ブレイブ sc4↓5 幸子 sc1↓2

「どうすっかな。追撃のモンスターを出すことは出来る。：いや、そんな手は通らねえか。バトルだ！ツールで暗黒大要塞鯨を攻撃！サンダーパイル！」

ツールが暗雲を作り出し、鯨が潜む水を目掛けて雷を落とさせる。

「やらせはしませんわ！わたくしは鬼柳の残したデプス・アミュレットの効果を使い、手札を1枚捨てることで攻撃を無効にしますわ！」

水の上へと浮かんだお守りが Tool の放った雷を全て吸収し、シャチを感電から守ることに成功する。

「やっぱり使ってきたか。だがその防御もこのターンまでだぜ。俺は場にモンスターを伏せてターンを終了する！そしてデプス・アミュレットは3回目の俺のエンドフェイズを迎えたから破壊されるぜ！」  
お守りは雷を受けきると役目を終え、水の底へと沈んでいった。

ブレイブ LP3000

フィールド 『極神皇ツール』（攻撃表示） 裏側守備表示1

セット0

手札6

sc5

「じわじわと追い詰められていますわ…。このままではやられてしま

うのも時間の問題」

「次のターン、神の衝撃がお前を襲う。今ならサレンダーしても良いんだぜ？」

「誰が……」

ブレイブと幸子はコースを半周したため、再び中間地点の観客席が囲うレーンへと戻っていく。すると彼らの耳に幸子を応援する声が聞こえてきた。1つは海野財閥の応援団。そしてもう1つの声援は応援団に負けじと声を張っているサテライトの子供達だった。

「……」

そして彼らはそこを通過し、海に見えるレーンへと飛び出していく。

「…海野。あの子達は一体…？」

「…？どういう意味ですか？」

「ルーンの瞳が見抜いたのさ。あの子たちはサテライトの子供達だろう？どうしてトップス…いや、世界でも有名な海野財閥のご令嬢さんがサテライトの子供達に応援されている？」

「海野財閥…というよりわたくしとわたくしが編成したチームはサテライトで貧困に苦しむ人たちを助けるために救助活動を行いました。あの子たちはその時の縁で来てくれたのですわ。…この付近では大きくニユースなどでも取り上げられていたみたいですが」

「…俺たちは世界中の大会に出ているからな。細かいニユースは聞かなくてこないのさ。だが意外だったな。お前みたいな立場の人間が下々の人々に手を差し伸べるのって結構珍しいんだぜ？」

幸子はその言葉に少なからず反論できない部分があった。コナミと出会う前の自分ならばそういったことはしなかったであろうと思えてしまったからだ。

「…そうかもしれないわね。あなたの言い方を察するにそういった状況を目にしたことが？」

「…ああ。俺は10人の紛争孤児を世話している。今では年齢的に大人になつてる奴もいるけどな」

紛争孤児。紛争に巻き込まれ親を失い、生きていくすべを幼くして

求められる過酷な状況に置かれた子供達。

昔トレジャーハンターをしていたブレイブは宝を探しにいった孤島で偶然にも彼らを見つけ、以降彼らの世話をし、宝を換金した金も全て彼らの為に使っている。

「紛争に巻き込まれるのはいつも弱者：子供達や女だ。紛争を起こすのはそいつらに関係の無い大人たちなのに被害を受けるのはいつも力を持たない奴だ！」

「……」

「俺は紛争が憎い……！弱者だけが損をし、見て見ぬフリをされる紛争が！そしてイリアステルは歴史上様々なことを裏から操っている。勿論、あいつらのせいで幾多もの紛争が起こされた！俺は子供達のためにもイリアステルを絶対に倒さなきゃいけないえ！」

「ブレイブ……。それがあなたのイリアステルと戦う覚悟なのですかね」

「そうだ！海野。お前にもあるか？イリアステルと戦う覚悟が」

「……ありますわ。コナミから聞いた話によるとゼロ・リバーズ：サテライトで起こったモーメントの暴走。それは彼らの手で起こされたもの。そのせいで多くの子供達が親を失いました……。あの子達もそう……。あの子達ちは一人も親がいないのです」

「そう……なのか。辛い……なんてもんじゃないだろうな」

2人は遠く離れてしまった観客席を振り返る。遠くて見えないがそれでいいのかもしれない。本来彼らの側においてあげるべき親がないことを思うと言葉に出来ない感情が湧いてしまいそうだから……。

「そしてダークシグナー……。彼らもイリアステルによつて過ちを犯した。あなたたちはそう言いましたね」

「ああ。あいつらは基本的に直接手を下すことはしてこなかった。ダークシグナーの時も影で操り、サテライトを滅ぼそうとした」

「あの時わたくしはあの現場にいた……。地縛神の生贄にされていく人々の声は今でも恐怖としてわたくしに染み込んでいますわ。……」「ん？」

幸子が声のトーンを落とす。恐怖、確かに彼女はその感情に包まれ

一度鬼柳の側から逃げ出した。だが、彼女はそれ以上にある感情に苛まれていた。

「わたくしは…あの時ほどわたくしを無力だと思ったことはありません。状況を飲み込めず、非現実的な光景に圧倒されるばかりで結局知らずのうちにシグナーやコナミの手で守られていた…。先ほどあなたは女や子供は弱者だと言いました」

「…」

「確かに力を持たないならば守る必要があるのでしょうか。…ですが」

幸子はカードという名の剣を引き抜く。

「わたくしは今、戦うことが出来る。コナミ達がわたくしを守ってくれたように今度はわたくしが子供達を守るのですわ！」

守るべきものの為に彼女は戦う。

「へっ…なんだよ。お前もか」

「そう…みたいですね」

デュエルが始まる前には無かった親近感が彼らを包む。しかし今は勝負の最中、すぐに2人とも表情を引き締める。

「負けないぜ」

「こちらこそ」

ブレイブ sc5↓6 幸子 sc2↓3

「わたくしはダブルフィン・シャークを召喚しますわ！このモンスターが召喚に成功した時、墓地のレベル3か4の魚族モンスターを効果を無効にして守備表示で特殊召喚することが出来ますわ！来なさい、魚雷魚！」

赤と青に染まったサメが現れるとヒレで水を弾き、渦を巻き起きます。すると、渦の中から魚雷のような魚が回転しながら出てきた。

ダブルフィン・シャーク 攻撃力1000

魚雷魚 守備力1000

「もう1度暗黒大要塞鯨の効果を使う気か！だけどツールを破壊しようとしても無駄だぜ？エンドフェイズには…」

「そう…神は破壊され墓地へ送られようと何度でも蘇る。墓地へ送られれば…ね。トラップ発動、異次元グラウンド！」



空間に歪みが発生し、モンスターの下にそれぞれ次元の裂け目が発生する。

「異次元グラウンドが発動されたターンに墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外されますわ！」

「しまった……！」

「暗黒大要塞鯨の効果が発動しますわ！魚雷魚をリリースし、トールを破壊！」

魚雷が直撃したトールはバランスを崩してしまい、魚雷もろとも異次元の狭間へと飛ばされてしまった。

「神といえども除外されれば復活効果は使えない……やるな海野！」

「神がいなくなった今がチャンス……バトル！暗黒大要塞鯨で伏せられたモンスターへ攻撃致しますわ！」

「伏せていたのはキラール・トマト。守備力は1100だ」

シャチが起こした津波がトマトを飲み込み、荒波にもまれたトマトは耐えきれず破壊されてしまう。

「だがキラール・トマトは戦闘で破壊され墓地へ送られればデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスターを呼び出すことが……！」

「無駄ですわ！異次元グラウンドの効果によってキラール・トマトは除外されています！」

「ぐっ……俺の手をここまで封じてくるとはな！」

「これであなたの場にカードはありませんわ。ダブルフィン・シャークでダイレクトアタック！」

水から飛び出したサメはそのままブレイブへと噛みついた。

「それでこそ戦いがいがあるってもんだぜ……！」

ブレイブ LP3000→2000

「カードを1枚伏せてターンエンドしますわ！さあブレイブ、あなたのターンですわよ！」

幸子 LP4000

フィールド 『暗黒大要塞鯨』（攻撃表示） 『ダブルフィン・シャーク』（攻撃表示）

セット1

手札1

sc3

「俺のターン！…来たぜ」

ブレイブ sc6↓7 幸子 sc3↓4

「俺は極星霊スヴァルトアールブを召喚する！」

ブレイブのフィールドに紫色に染まった夢魔が現れる。

極星霊スヴァルトアールブ 攻撃力1000

「海野、トールを倒したのは見事だったぜ。だがここからが俺の本領発揮だ！」

「まさか神を…いえ、神を呼ぶには明らかに条件が足りていないですわ！」

「それはどうかな？スヴァルトアールブはシンクロ素材になる場合他のシンクロ素材は手札の極星モンスター2体に限定されるのさ！」

「手札のモンスターとシンクロ…!?!」

「俺はレベル4の極星霊リョースアールブ2体とレベル2の極星霊スヴァルトアールブをチューニング！星界より生まれし気まぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を笑え！シンクロ召喚！光臨せよ、極神皇ロキ！」

3体の星が天に昇っていくと雲の間から2体目の人型の神が姿を見せる。雲を切り裂くと地上へ猛スピードで降りていき、ブレイブの場へと見参した。

極神皇ロキ 攻撃力3300

「世界を笑え…ですか」

「いい言葉だろ？」

「あなたらしい言葉だと思いますわ」

「褒め言葉として受け取っておくぜ。バトルだ！ロキで暗黒大要塞鯨を攻撃！ヴァニティバレット！」

ロキは2本の指を拳銃のように構え、そこから紫色に染まったエネルギー弾を放ちシャチを破壊した。

「なんて威力…！」

幸子 LP4000↓2800

幸子はバランスを崩しそうになるも予め衝撃が来ることは分かっていたため、何とか持ちこたえることに成功する。

「そしてスピード・ワールド2の効果を発動するぜ！s cを4つ取り除くことで手札のs p 1枚につき800のダメージを相手に与える！俺の手札には2枚だ！」

ブレイブ s c 7 ↓ 3

そんな幸子にブレイブは容赦なく追撃をあげせる。幸子は子供達を守るために必死に戦っている。なら彼も全力を出すのは当然と言えた。

幸子 LP 2800 ↓ 1200

「この…程度！」

「耐えるよな…だけど次のターンにもう1度スピード・ワールド2の効果を使えば俺の勝ちだ！」

「どうでしょうね。勝負は最後まで分かりませんかよ？」

「…そうだな。俺も油断はしないぜ。俺は手札からs p エンジェル・バトンを発動！s cが2以上の時、カードを2枚ドロシー、その後手札からカードを1枚墓地へ送る！…ターンエンドだ！」

ブレイブ LP 2000

フィールド 『極神皇ロキ』（攻撃表示）

セット0

手札4

s c 3

「ブレイブは全力で向かってきています…ならばわたくしも全力で応えるというのが礼儀ですわね。わたくしのターン！」

ブレイブ s c 3 ↓ 4 幸子 s c 4 ↓ 5

「わたくしはチューナーモンスター、深海のディーヴァを召喚しますわ！このモンスターが召喚に成功した時、デッキよりレベル3以下の水属性モンスターを特殊召喚することが出来ますわ。わたくしが呼び出すのはシー・アーチャー！」

歌姫の声につられ、海鳥にのった人魚が近づいてきた。

深海のディーヴァ 攻撃力200

シー・アーチャー 攻撃力1200

「チューナー…シンクロか。かかってきな海野！」

「いきますわよ！わたくしはレベル3のシー・アーチャーとレベル4のダブルフィン・シャークにレベル2の深海のデーヴァをチューニング！破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！凍らせなさい、氷結界の龍 トリシューラー！」

封印から解き放たれた氷で身を包んだドラゴンが幸子のフィールドの水を瞬時に凍らせ、砕きながら降臨した。

氷結界の龍 トリシューラー 攻撃力2700

「トリシューラー…！神の1人、シヴァが持つと言われる槍か。神に立ち向かうには神って訳だ」

「トリシューラーの効果を発動！このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手の手札、フィールド、墓地からカードを1枚ずつ除外することが出来ますわ！」

「除外…か。ロキにも復活効果があることを見越されちまったか」

トリシューラーが咆哮をあげると砕いた氷が槍となってブレイブの場へと突き刺さろうとした。

「…神といえども無敵ではない。だが、俺とロキのコンビネーションは無敵だ！俺は手札のアーティファクトーロンギヌスをロンギヌス自身をリリースすることで発動！」

「手札から…！」

ロキへと氷の槍が突き刺さる直前、それを上回る大きな槍が間へと割って入った。

「ロンギヌスの槍は聖槍…こいつならばトリシューラーの槍をも止めることが出来る！ロンギヌスは手札からリリースすることでこのターン、互いにカードを除外出来なくさせることができる！」

「…！」

ロンギヌスの槍がトリシューラーの放った槍からロキを守り、氷の槍を弾き飛ばす。

「海野…お前が神への対抗策でもう1度除外を狙って来るのは読めていた。どうやら俺の方が1枚上手だったみたいだな」

「それは…どうかしらね？」

「何…！」

ロキを守っていたロンギヌスの槍が横から飛ばされた魚雷によって吹き飛ばされ、守ることがかなわなくなってしまふ。

「わたくしはあなたの発動したロンギヌスの効果に対し…さらにこのカードを発動していたのですわ。カウンタートラップ、ギョツ！を。このカードはゲームから除外されているわたくしの魚族モンスターをデッキに戻すことで効果モンスターの効果の発動を無効にして破壊することが出来ます！」

「除外された魚族モンスターだと…？だがそんなカード…あつ！」

「あつたのですわ…一度だけチャンスが」

「異次元グランド…！」

「そう、わたくしは異次元グランドを発動したターンに魚雷魚をリリースしていた。魚雷魚も異次元グランドの効果で除外されていたのですわ」

「異次元グランドは2重の攻撃策だったのか…！」

障害がなくなったことでトリシューラの槍が猛威を振るいだす。

「トリシューラの効果でわたくしはフィールドのロキと墓地のロンギヌス、手札の1枚をランダムに除外しますわ！」

氷の槍がロキ、ロンギヌス、手札のカードへと突き刺さり異次元へと飛ばしていった。

「見事な攻撃だったぜ…海野」

「わたくしは持てる力を出し尽くしただけです。それ以上でもそれ以下でもありませんわ。…行きますわよ、ブレイブ。わたくしは手札のカードを1枚伏せ、バトルへ入ります。トリシューラでブレイブへとダイレクトアタック！」

トリシューラが大きく息を吸うと、鋭い息吹をブレイブへと放つ。身も凍るような風を受け、ブレイブのライフは0となった。

ブレイブ LP2000↓0

「勝利を頂戴…されちまったぜ」

こうしてセカンドホイーラー同士の戦いは幕を閉じた。

オゾンより下なら問題ない

ブレイブと交代し、チームラグナロクのラストホイーラー、ハラルドがピットから出てくる。彼の表情は以前のようにネオサティスファクションを試すようなものではなかった。

「見事なものだ。ドラガン、そしてブレイブの神をも自らの知恵を駆使し乗り越えてしまうとは」

「来ましたわね…ハラルド」

「今こそ前言を撤回しよう。君たちは確かにイリアステルと戦う資格を持っている。だが…私たちとてその資格を持っている」

星界の3極神に認められた証、ルーンの瞳がハラルドの左眼に現れる。

「ふふ…おかしなことを言いますのね。資格など与えられる物ではなく自らの手で掴み取るものですわ」

「なるほど…君はそういう考えをするのだな。だが、私にとってはそうとも言えないのだ。私の家には世界が破滅するという伝承が伝えられていてね。幼い頃からその脅威と戦う運命だと教えられ、そして私もそれを信じ、日々研鑽を重ねてきた。このデュエルでそれを証明してみせよう」

「望むところですよ」

「「デュエル！」」

「私のターン、ドロロー！」

ハラルド スピードカウンター s c 4 ↓ 5 幸子 s c 5 ↓ 6

「現れよ、我が神の使い…極星天ヴァルキュリア！」

背中から2本の白い羽根が生えた小さな天使がフィールドに舞い降りる。

極星天ヴァルキュリア 攻撃力400

「ヴァルキュリアの召喚に成功した時、相手フィールドにモンスターが存在し、私の場に他のカードが存在しない場合、手札の極星モンスター2体を除外することで私のフィールドに2体のエインヘリアル・トークンを呼び出すことができる！私は手札の極星天ヴァナディー

スと極星天ミーミルを除外！最終戦争ラグナロクに備え、その魂を捧げよ！」

戦死した2人の勇者の魂が召集され、ヴァルキュリアを囲んだ。

エインヘリアル・トークン×2 攻撃力1000

「まさか…もう神を呼び出すというのですか!?!」

「そうだ！私が最も信頼せし神を乗り越えなければ君たちに勝利はない！私はレベル4のエインヘリアル・トークン2体とレベル2の極星天ヴァルキュリアをチューニング！」

ヴァルキュリアが腰に携えていた短剣で光の輪を描くと、ヴァルキュリア自身と2つの魂を包み込み高速回転した。

「北辰の空にありて、全知全能を司る皇よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！シンクロ召喚！天地神明を統べよ、最高神、極神聖帝オーデイン！」

魂が天へと捧げられていくと思わず目をつぶってしまうほどまばゆい光がフィールドに降り注がれる。するとトールやロキよりも遙かに大きい巨軀きよくの体をしている長い白ひげを蓄え、つばの広い帽子を被った槍を持つ隻眼の神が現れていた。

極神聖帝オーデイン 攻撃力4000

「1ターン目から攻撃力4000のモンスターを呼び出すなんて…!?!」

「その様子ではもはや君に対抗策は残っていないようだな。バトルだ！オーデインでトリシューラを攻撃する！ヘブズ・ジャツジメント！」

オーデインの持つ槍がトリシューラにむかって放たれ、右翼を貫いた。

「この男…強いですわね。後は庶民に託すしかないようですわ」

幸子 LP1200↓0

トリシューラが崩れていき、墓地へと繋がる穴へと沈んでいく。だが、その穴から現れる者がいた。

「何だ…?」

「ふ…庶民への置き土産ですわ」

その者は手に2丁の拳銃を持った小人だった。

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0

レベル1↓9

「わたくしの手札が0枚の時にモンスターが戦闘破壊されたことで墓地のインフェルニティ・リベンジャーの効果が発動していました。レベルを破壊されたトリシューラと同じにし、墓地からこのモンスターを特殊召喚したのですわ」

「インフェルニティ…？そうか、そのモンスターは鬼柳から君へと受け継がれていた…！」

「そういうことですわ。これはチーム戦。個々の力で神に勝てなからうとチームワークで乗り越えればいいのです」

「ほう…面白い」

するべきことを終えた幸子はネオサティスフアクションのピットへと帰っていった。

ハラルド LP4000

フィールド 『極神聖帝オーデイン』（攻撃表示）

セツト0

手札3

sc5

ピットへと戻った幸子はコナミのDホイールに自分が残したセツトカードと鬼柳のカードを託す。

「庶民、勝ってきなさい」

「ああ、任せとけ！」

コナミはピットから出ていき、ハラルドへと追いつく。

「待たせたなハラルド！」

「…不思議だな。私たちと君たちが出会った日から数日しか経っていないというのに君たちは大きく成長している。試練を乗り越えた者のみが得ることの出来る強さ…というわけか。コナミよ、1つ聞きたいことがある」

「何だ？」

「以前君の中に生じていた迷い…それが薄れている。どのような心境



の変化があつたのか聞かせてくれないか？」

「変化も何も俺は何も変わってないぜ！ただ：今までのデュエルを見てて気づいたのさ。俺は鬼柳やお前たちみたいに不思議な力は持っていない。エンシエント・ホーリーの力を借りなきやあの空中に浮かぶ物体も見えねえ。だけど：それでも戦うことは出来る！なら迷うことはねえ！俺は俺に出来ることをするだけだ！」

「なるほど。各々が自分出来ることを最大限に発揮する。それが出来るから君たちは強いのもかもしれないな。そしてそれこそが人の持つ可能性なのかもしれない。：ならば私も私に出来る最大限の力を発揮する！来いコナミ！」

「行くぜハラルド！」

「「デュエル！」」

「俺のターン、ドローだ！」

ハラルド sc5↓6 コナミ sc6↓7

「ハラルドのフィールドには攻撃力4000の化け物がいやがる。どうすつかな。：よし、決めた！俺はトラスト・ガーディアンを召喚するぜ！」

背中にピンク色の羽根が生えた天使がリベンジャーの隣に降り立つ。

トラスト・ガーディアン 攻撃力0

「そしてインフェルニティ・リベンジャーを攻撃表示に変更！」

「何だど？」

腕をクロスさせ体を守っていた小人が、2丁の拳銃を取り出し神に對して向けた。

インフェルニティ・リベンジャー 攻撃力0

「俺は2枚のカードを伏せてターンエンドだ！」

「攻撃力0のモンスターを2体も攻撃表示で場に残すだと：？」

コナミ LP4000

フィールド 『インフェルニティ・リベンジャー』（攻撃表示）

セット3

手札3

「私のターン！」

ハラルド s c 6 ↓ 7    コナミ    s c 7 ↓ 8

「永続トラップ発動！ガリトラップーピクシーの輪——俺の場に攻撃表示モンスターが2体以上いる時、1番攻撃力の低いモンスターは攻撃の対象に出来ない！」

コナミの場のモンスターの周りに妖精によってヴェールがかけられ、手出しできないように保護された。

「君の場のモンスターの攻撃力は同じ。故に私は攻撃自体を封じられたということか」

「そういうことだ！」

「悪くない策だ。だが、神はその上をいく！私はオーデインの効果を発動する！最高神の力をとくとみよ！インフルーエンス・オブ・ルーン！」

オーデインが槍を地面へと突き刺すとその衝撃でオーデインの前へと貼られていたヴェールが打ち砕かれた。

「オーデインは1ターンに1度、私のエンドフェイズまで私の場の神オーデインに魔法・畏カードの効果を受けなくさせることが出来る！これで君の場に築かれた不可侵領域に神は踏み込むことが出来る！」

「何い!？」

「加えて私はさらなる神の使い、デュナミス・ヴァルキリアを呼び出させてもらう！」

鎧を身にまとった天使がフィールドへと降り立った。

デュナミス・ヴァルキリア    攻撃力1800

「バトルだ！オーデインでインフェルニティ・リベンジャーへと攻撃する！ヘブンズ・ジャッジメント！」

オーデインは巨体を揺らし、リベンジャーの放った弾丸を槍で叩き落としながらリベンジャーを突き刺した。

「やったか…?」

「まだまだ！そう簡単には終わらせねえ！永続トラップ発動、死力のタッグ・チェンジ！俺の攻撃表示モンスターが戦闘で破壊される時、

発生する戦闘ダメージを0にし、手札のレベル4以下の戦士族モンスターを特殊召喚することが出来る！来てくれ、カード・ブロッカー！」  
リベンジヤーの銃が暴発し、槍がわずかに浮く。その隙に小さな戦士がリベンジヤーを墓地へと弾き飛ばし、難を逃れた。

カード・ブロッカー 守備力400

「かわしたか。だが、君の場に攻撃表示モンスターが2体以上存在しなくなったことでガリトラップの効果は消える。デュナミス・ヴァルキリアでトラスト・ガーディアンを攻撃すれば……」

「カード・ブロッカーはその攻撃の対象を自身に変更できるぜ！そして攻撃の対象になるたびに守備力を1500ずつアップできる！」

「そうくるか。私はこれでターンを終える」

ハラルド LP4000

フィールド 『極神聖帝オーデイン』（攻撃表示） 『デュナミス・ヴァルキリア』（攻撃表示）

セット0

手札3

sc7

「俺のターン、ドロロー！」

ハラルド sc7↓8 コナミ sc8↓9

「俺はスピード・ワールド2の効果を発動！scを7つ取り除くことでカードを1枚ドロローする……来た！」

コナミ sc9↓2

「俺はカード・ブロッカーをリリースしてガジェット・ソルジャーを召喚する！」

体にガジェットが組み込まれた機械兵がロケットランチャーを担ぎながら現れた。

ガジェット・ソルジャー 攻撃力1800

「そしてレベル6のガジェット・ソルジャーにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

まるで雪のような色の翼と海のような色の瞳をしたドラゴンがコ

ナミの場に飛翔した。

蒼眼の銀龍 守備力3000

「このドラゴンから力を感じる…。この力は精霊界のものか」

「そうだぜ。俺は何度もこいつに助けられてきた…今回も頼むぜ！銀龍は特殊召喚に成功した時、次の相手のエンドフェイズまで効果の対象にならず、効果では破壊されねえ！」

「ほう…神にも匹敵する耐性を得るというわけか」

「俺はこれでターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『蒼眼の銀龍』（攻撃表示）

セット1 『ガリトラップーピクシーの輪ー』 『死力のタッグ・チェンジ』

手札4

sc2

「私のターン！」

ハラルド sc8↓9 コナミ sc2↓3

「私はオーデインの効果を発動する！インフルーエンス・オブ・ルーン！」

再びオーデインはルーンの瞳の加護を受けた。

「これで君のモンスターを守る術はない。バトルだ！オーデインよ、精霊界のドラゴンを攻撃せよ。ヘブンス・ジャッジメント！」

オーデインが槍を天へと突き刺す。すると幾千ものあられが雲より降下したかと思うと一本の氷の槍へと変化していき、銀龍へと向かっていった。

「そうはさせないぜ！トラスト・ガーディアンをシンクロ素材にしたモンスターは1ターンに1度だけ、攻守を400下げること戦闘では破壊されない！」

「モンスター効果を自分のモンスターにかけていたのか…！」

銀龍は傷つきながらも氷の槍を弾き飛ばした。

蒼眼の銀龍 守備力3000↓2600

攻撃力2500↓2100

「神の攻撃をしのいだか…。ターンを終了する！」

ハラルド LP4000

フィールド 『極神聖帝オーデイン』（攻撃表示） 『デュナミス・ヴアルキリア』（攻撃表示）

セット0

手札4

「俺のターン！」

ハラルド SC9↓10 コナミ SC3↓4

「このスタンバイフェイズに銀龍の効果が発動する！墓地の通常モンスターを1体特殊召喚できるぜ！ガジェット・ソルジャーを特殊召喚だ！」

銀龍が唸りを上げると機械兵がクレーンに引っ張られ、フィールドへと戻ってきた。

ガジェット・ソルジャー 攻撃力1800

「そして俺はチューナーモンスター、サニー・ピクシーを召喚！俺はレベル6のガジェット・ソルジャーにレベル1のサニー・ピクシーをチューニング！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

白く長い胴体を持ったドラゴンがオーデインには及ばずとも天へと届こうかという長い体を携え、降誕した。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100

「この力はまさしく精霊そのもの…。これが君の力なのか」

「ああ。こいつらは俺が精霊界にいった時からずっと俺を支えてくれた！俺はこいつらと共に戦う！」

「ふっ…その力も我が神オーデインには及ばないようだな」

「それはどうかな？エンシエント・ホーリーは相手よりライフが上回ってればその分攻撃力を上げることが出来るんだぜ！」

「だが、今互いのライフは互角！」

「俺はシンクロ素材になったサニー・ピクシーの効果が発動するぜ！このモンスターが光属性モンスターのシンクロ素材に使用されたことで俺はライフを1000ポイント回復する！」

妖精がコナミに光の粉をふりかけるとコナミのライフが回復していった。

コナミ LP4000↓5000

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓3100

「そしてエンシエント・ホーリーでデユナミス・ヴァルキリアに攻撃！  
エターナル・ライフ！」

「…！」

エンシエント・ホーリーがコナミのライフを光へと変えていき、ヴァルキリアを包みこむ。やがてヴァルキリアは天へと昇つていった。

ハラルド LP4000↓2700

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力3100↓4400

エンシエント・ホーリーはさらに大きくなっていき、ついにオー  
デインの頭上をとった。

「これが君の狙いか…！」

「へっ、どうだ！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP5000

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示） 『エンシエント・ホーリー！

ワイバーン』（攻撃表示）

セット3 『ガリトラップ・ピクシーの輪』 『死力のタッグ・  
チェンジ』

手札2

sc4

「私のターン！」

ハラルド sc10↓11 コナミ sc4↓5

（このターン、私はスピード・ワールド2の効果でscを10個取り除くことでフィールド上のカードを1枚破壊することが出来る。この効果でエンシエント・ホーリーを破壊するか…？いや、仮にそうしたとしてもトラスト・ガーディアンに加護を受けている銀龍を倒す術はない。私は…このターン私自身の運命を賭ける！）

「私はスピード・ワールド2の効果を発動する！取り除くscは…4

つだ！」

ハラルド s c 1 1 ↓ 7

「4つってことは…」

「私の手札の s p 1枚につき、相手に800のダメージを与える！  
私の手札には1枚！」

ハラルドのDホイールから衝撃波が放たれ、コナミのDホイールに直撃する。

「俺のライフが減った…。そうか、狙いはエンシエント・ホーリーか  
！」

コナミのライフが減ったことでエンシエント・ホーリーの胴体も縮んでいき、オーデインより小さくなってしまう。

コナミ LP 5000 ↓ 4200

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力4400 ↓ 3600

「そして私は手札から s p パワー・バトンを発動する！このカードは私の s c が6以上の場合に発動が出来る。次のターンのドロウを放棄する代わりにデッキからモンスターカードを1枚墓地に送り、オーデインの攻撃力をダメージステップ時に墓地へ送ったモンスターの攻撃力分上げる！私が墓地へと送ったのは…攻撃力4000の極星邪狼 じやろう フェンリル！」

「な…攻撃力4000のモンスターを墓地へ送ったということは！」

「そう…オーデインの攻撃力は8000となる！そしてオーデインの効果を発動、インフルーエンス・オブ・ルーン！これで君の伏せているカードもオーデインには通用しない！」

オーデインが三たび、ルーンの瞳の加護に守られた。

「コナミよ…君の力は確かに認めるべきものだ。だが、神には及ばない！バトルだ。オーデインでエンシエント・ホーリーに攻撃！終わりだ…ヘブンス・ジャッジメント！」

オーデインは巨大な槍をエンシエント・ホーリーの長い胴体の一点をめがけて振り下ろそうとした。

「ハラルド…俺は神に挑戦する！」

「神に…挑戦だと？」

「行くぜ。永続トラップ発動、女神の加護！俺はライフを3000回復する！ただしこのカードがフィールドから離れた時、俺は3000のダメージを受ける！」

天から降り注ぐ暖かい光がコナミのライフを癒していく。

コナミ LP4200↓7200

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力3600↓6600  
それに伴い、エンシエント・ホーリーは天を貫き、オーデインよりもさらに高い場所へと君臨する。

「ライフを回復したか…。だが攻撃力はオーデインが上回る！ダメージステップに入ったことでオーデインはフェンリルの力を受け継ぐ！」

フェンリルの力を得たオーデインもさらなる高みへと昇華していき、天を貫いたばかりかオゾン層の手前まで来るほど巨大となった。まった。

極神聖帝オーデイン 攻撃力4000↓8000

「オーデインよ。精霊の力を超え、神の威光を示せ！」

ついにオーデインの槍がエンシエント・ホーリー・ワイバーンへとめがけて振り下ろされた。

「…来たぜ！幸子、お前が伏せてくれたカードを使う時だ！」

「何…!？」

「トラップ発動、援護射撃！俺のモンスターが攻撃されたダメージステップ時に発動出来る！攻撃を受けたモンスターはダメージ計算時まで俺のフィールドにいる他のモンスター1体の攻撃力分、攻撃力を上げる！」

「君の場にいるモンスターは…まさか」

「銀龍！エンシエント・ホーリー！お前たちの力を1つに！」

銀龍が号砲を上げ、自身のエネルギーをエンシエント・ホーリー・ワイバーンへと託していく。するとエンシエント・ホーリーの胴体が伸びていき、ついにはオゾン層をも貫いてしまう。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力6600↓8700

「攻撃力…8700だど!？」



「反撃だ！エンシエント・ホーリー！エターナル・ライフ！」

オゾン層を突き破り宇宙へと顔を出したエンシエント・ホーリーは宇宙のエネルギーを吸収していき、神に向けて解き放った。

「馬鹿な…神が敗れるとは！」

ハラルド LP2700↓2000

吸収したエネルギーを全て解き放ったエンシエント・ホーリーの体は縮んでいき、宇宙から帰還した。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力8700↓9400  
↓7300

「やったぜエンシエント・ホーリー！銀龍もよくやったぜ！」

「見事だ…だが神は破壊されようと再びフィールドに復活する！」

「だけど攻撃力はエンシエント・ホーリーの方が上だぜ！」

「まだだ…。スピード・ワールド2の効果を発動！scを7つ取り除くことで1枚カードをドローする…：ドロー！」

ハラルド sc7↓0

「…ふ。私は場に1枚カードを伏せてターンを終了する！だが、このエンドフェイズに神は蘇る！そしてオーデインの生還に成功したことで私は1枚のカードをドローする！」

天を覆っていた雲が消えていき、光と共にオーデインが再び場に戻っていく。だがオーデインがフィールドに足をつける瞬間、突然地面が亜空間に繋がった。

「何だ?!? 一体何が…?」

「ハラルド！俺はオーデインが戻って来る前にこのカードを発動していたのさ！永続トラップ、夜霧のスナイパーをな！このカードは発動時、1体のモンスターカードを宣言する。そしてそのモンスターがフィールドに呼び出された時、このカードと宣言したモンスターを除外する！」

「まさか…君が宣言したのは！」

「そう…極神聖帝オーデインだ！」

オーデインはゆっくりと亜空間へと沈んでいき、やがてその姿が見えなくなってしまった。

「1度場を離れてしまったオーデインはルーンの瞳の加護を受けていない……この僅かな隙を撃ち抜いたというのか。見事だ。コナミ、君の知恵は私とオーデインをも上回ったのだ」

「俺だけの力じゃないぜ。鬼柳や幸子、銀龍やエンシエント・ホーリーが俺に力を貸してくれたからさ」

「それこそが君の持つ可能性なのかもしれないな……」

ハラルド LP2000

フィールド 無し

セット1

手札5

sc0

「俺のターン！銀龍の効果でガジェット・ソルジャーが戻ってくるぜ！」

ハラルド sc0↓1 コナミ sc5↓6

ガジェット・ソルジャー 攻撃力1800

「そして……バトルだ！エンシエント・ホーリーでハラルドにダイレクトアタック！」

（今私が伏せているのは極星宝メギンギョルズ。このカードは極神か極星モンスター1体の攻撃力を倍にすることができる。……だが、私の場にはオーデインはいない。私に……打つ手はない）

「エターナル……ライフ！」

エンシエント・ホーリーの放った光がハラルドを包み込んだ。

「鬼柳京介、海野幸子、そしてコナミ。君たちならイリアステルの野望を止めることが出来るかもしれない。この使命、君たちに託そう……！」

ハラルド LP2000↓0

こうしてチームラグナロクとチームネオサティスフアクションの長き戦いに終止符が打たれたのだった。

## 特別な力なんてない

チームネオサティスフアクションとチームラグナロクの試合が終わった翌日、会場ではチーム5D'sのメンバーが決勝進出への切符をかけて戦っていた。全国の強豪が集まるWRGPの準決勝の試合、5D'sのメンバーは苦戦しておりラストホイーラーの遊星にバトンが渡された。

遊星は追い詰められながらも諦めることなく戦い、彼の進化の証、アクセルシンクロモンスター…シューティング・スター・ドラゴンを呼び出し、最後には勝利を収めた。

「あれが遊星の新しいシンクロモンスター…。何度見てもやっぱりすげえなあ」

応援席で5D'sを応援していたコナミは帰路につく。その帰り道、コナミは巨大な建物を見かけた。

「でけえ建物だな。サテライトにはあんな立派な建物なかったぜ。…ん？」

その建物から見知った顔が出てきた。

「あれ？恵じゃないか？」

「…コナミ」

デュエルアカデミアの制服に身を包んだ銀髪の生徒、レイン恵だった。

「おう。コナミだ。元気にやってるか？」

「元氣…という基準は不明瞭だけど上手くやっている。あなたとのデュエルをきっかけにゆまさんを始めとして7名の生徒と友達という関係になった」

「そりや良かったな」

「…。あなたは…？」

「え？」

「あなたは何か変化があった？」

レイン恵は以前コナミが融合がシンクロキラの機皇帝への答えと言っていた時と比べてコナミに変化があることを感じ取っていた。

「そうだな…昨日ハラルドと話した時かな。俺の中でどう戦うか決心がついたんだ。…あ、俺WRGPに参加してるんたぜ」

「それは…知っている。ネオ童実野シティの住人ならばWRGPでベスト4に残ったチームを90%以上が答えられる。あなたはネオサティスフアクションの一員。…コナミ、私と久しぶりにデュエルをして欲しい。全力で」

「俺とデュエルを？いいぜ、やろうか！」

「デュエル！」

（あなたの出した答え。それは私達の希望となるか。…それを見極める）

デュエルディスクが先攻をランダムに選出する。

「俺のターンからだ。ドロロー！早速行くぜ！魔法カード、融合を発動！」

「…！融合…」

「俺は手札のキャノン・ソルジャーとギガテック・ウルフを融合！全てを発射する戦士よ、鉄屑のオオカミと一つとなり新たな力を手に入れろ！融合召喚！その射撃で敵を射ぬけ、迷宮の魔戦車！」

青色にコーティングされた機体に赤いドリルが取り付けられた戦車がフィールドに出陣した。

迷宮の魔戦車 攻撃力2400

「融合…。以前も最後はそのモンスターで決着をつけた。やはりそれがあなたの力？」

「どうか…。デュエルを進めれば分かると思うぜ。俺は永続魔法、機甲部隊の最前線マシンナイズ・フロントラインを発動してターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『迷宮の魔戦車』（攻撃表示）

セット0 『機甲部隊の最前線』

手札2

「…ドロロー。あなたの言葉を信じて今はデュエルを遂行する。永続魔法、ミイラの呼び声を発動。このカードは私のフィールドにモンスターがいけない時、手札からアンデットモンスター1体の特殊召喚を可

能とする。私はこの効果を適用し、ゴ布林ゾンビを呼び出す」

体の肉が溶け、骨格のみで体が成り立っているゾンビが地面から這い出てくる。

ゴ布林ゾンビ 攻撃力1100

「さらにこのモンスターをリリース。：アドバンス召喚。来て、冥界の魔王 ハ・デス」

ゾンビが贄として捧げられていき、冥界と時空が繋がり魔王が降臨した。左手にはワイングラスを持っており、余裕そうに佇んでいる。

冥界の魔王 ハ・デス 攻撃力2450

「さらにゴ布林ゾンビがフィールドから墓地へ送られたことでその効果によりデツキから守備力1200以下のアンデットモンスターを手札に。私に加えるのは守備力800の馬頭鬼<sup>めずき</sup>」

「1ターンで迷宮の魔戦車を超えるモンスターを呼んだ上に、後続まで用意したか：相変わらず隙がないな恵！」

「：まだ戦いは始まったばかり。先にモンスターを失った方が不利なのは当然。出来るだけその事態を避けるのも当然。：バトル。冥界の魔王 ハ・デスで迷宮の魔戦車を攻撃」

ハ・デスの呪いが戦車へと降りかかり、戦車が不自然な爆発を引き起こして大破してしまった。

コナミ LP4000↓3950

「うっ：だけどこのタイミングで機甲部隊の最前線の効果を使うぜ！俺の機械族モンスターが戦闘で破壊された時、1ターンに1度デツキからそのモンスターと同じ属性の機械族で、そのモンスターより攻撃力が低いモンスターを特殊召喚できる！破壊された迷宮の魔戦車は闇属性！同じく闇属性のブローバック・ドラゴンを特殊召喚だ！」

前線の戦力を減らすまいと援軍の機械竜が駆けつけてきた。

ブローバック・ドラゴン 攻撃力2300

「：私は1枚のカードを伏せる。これでターンを終了」

レイン恵 LP4000

フィールド 『冥界の魔王 ハ・デス』（攻撃表示）

セット1 『ミイラの呼び声』

手札3

「俺のターン！冥界の魔王 ハ・デスを選択してブローバック・ドラゴンの効果を発動するぜ！今から舞う3枚のコイントスの内、2枚以上が表ならそいつは破壊される！」

フィールドに現れた3枚のコインが天高く飛ばされる。やがてコインは地面へと落ち、カランカランという音と共に結果を指し示した。

「嘘…。全部表。確率にして8分の1を引き当てた…！」

「よし！ブローバック・ドラゴン、射撃開始だ！」

ブローバック・ドラゴンの口が開き、中から銃口を覗かせた。鋭い弾丸が放たれ、冥界の魔王を葬りさった。

「でも…まだ想定内。1000ポイントのライフを払い、トラップ発動。魂の綱。私のフィールドのモンスターが効果で破壊され墓地へ送られた時に発動可能。デッキからレベル4モンスター、ピラミッド・タートルを守備表示で特殊召喚する」

冥界の魔王が沈んでいった地面からピラミッドを背負った亀が浮いてきた。

レイン恵 LP4000↓3000

ピラミッド・タートル 守備力1400

「だけどまだバトルが残ってるぜ！ブローバック・ドラゴンでピラミッド・タートルを攻撃！」

ブローバック・ドラゴンの放った弾丸がピラミッドを貫いた。

「私はピラミッド・タートルの効果を発動する。戦闘で破壊され、墓地へ送られた時にデッキから守備力2000以下のアンデットモンスターを特殊召喚出来る。私が呼び出すのは守備力が2000の…龍骨鬼」

ピラミッドが崩れていくとそこに眠っていた偉人の骨が怒りを露わにし、骨が集まっていき龍を象かたどったモンスターへと化けてしまった。

龍骨鬼 攻撃力2400

「げっ…！モンスターを倒したのにブローバック・ドラゴンより攻撃

力が高いモンスターが出て来ちゃった……！」

「今の攻撃は……少し迂闊」

「みてえ……だな。俺はこれでターンエンドだ！」

コナミ LP3950

フィールド 『ブローバック・ドラゴン』

セット0 『機甲部隊の最前線』

手札3

「……ドロー。私は馬頭鬼を召喚する」

馬の頭をした獄卒鬼のリーダーが斧を振り回しながら出てきた。

馬頭鬼 攻撃力1700

「ブローバック・ドラゴンの効果は厄介……。目標をあのモンスターに定めて……バトル。龍骨鬼でブローバック・ドラゴンに攻撃」

龍骨鬼はブローバック・ドラゴンをめがけて、供え物として置かれていた動物の骨から作られたハンマーを振り下ろした。その一撃は凄まじく、ブローバック・ドラゴンの首が180度捻転してしまった。

コナミ LP3950↓3850

「ブローバック・ドラゴン……！だけど機甲部隊の最前線の効果が発動しているぜ！デツキからブローバック・ドラゴンより攻撃力の低い闇属性・機械族のモンスターを特殊召喚だ！俺が呼ぶのはこいつだ！振り子刃の拷問機械！」

下半身が可動式の刃となって揺れているロボットが援軍として現れた。

振り子刃の拷問機械 攻撃力1750

「……馬頭鬼では僅かに攻撃力が足りない。私はこのままターンを終了」

レイン恵 LP3000

フィールド 『龍骨鬼』（攻撃表示） 『馬頭鬼』（攻撃表示）

セット0 『ミイラの呼び声』

手札3

「俺のターン、ドロー！よし……チューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを召喚する！」

体にピンク色の羽が生えた小さな天使がフィールドを舞う。

トラスト・ガーディアン 攻撃力0

「チューナーモンスター…やはりシンクロを」

「俺はレベル6の振り子刃の拷問機械とレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

澄んだ青の瞳を持つドラゴンが雪色の翼を羽ばたかせ、ゆっくりとフィールドに降りて来た。

蒼眼の銀龍 攻撃力2500

「銀龍が特殊召喚に成功したことで銀龍は次の相手ターンのエンドフェイズまで効果の対象にならず、カードの効果では破壊されねえ！」

（今度はシンクロ…いや、精霊界のモンスター。あなたの力は融合ではなく精霊界のモンスターの力ということ？）

「バトルだ！銀龍で馬頭鬼に攻撃！白銀のバーストストリーム！」

銀龍の口にエネルギーが集約されていき、1つの大きなエネルギーとなるとエネルギー弾として馬頭鬼へと放たれ、馬頭鬼の体に触れた瞬間爆散した。

レイン恵 LP3000↓2200

「う…ダメージ小。問題は無し」

「俺はこれでターンエンドだ！来い、恵！」

コナミ LP3850

フィールド 『蒼眼の銀龍』（攻撃表示）

セット0 『機甲部隊の最前線』

手札3

「…ドロー。あのドラゴンを倒すには…。私はチューナーモンスター、ペインペインターを召喚」

痛みを表現することを得意としたやや小太りの芸術家が紫色のペンキのついた筆で自身を塗り替えながら現れた。

ペインペインター 攻撃力400

（破滅の象徴…シンクロ召喚。私達の世界はこの召喚方法を追い求め



続けた人々の欲を危険だと判断したモーメントに滅ぼされた。だからこそ私達はモーメントエネルギーでサーキットを完成させ、この街を滅ぼす。そうすればモーメントが消えることでシンクロ召喚は消え去り：私達の世界は助かるから」

「墓地の馬頭鬼の効果を発動。このモンスターを除外することで墓地のアンデットモンスター、ゴブリンゾンビを復活させる」

「さすがゾンビ：倒しても復活して来やがるか」

墓穴に埋められた骨が再び動き出し、ゾンビとして活動を再開する。

ゴブリンゾンビ 攻撃力1100

「ペインペインターはフィールドにいる限りゾンビキャリアとして扱われる。私はレベル4のゴブリンゾンビにレベル2のゾンビキャリアをチューニング。2つの魂が魔王復活の贄となる。：シンクロ召喚。来て、蘇りし魔王ハ・デス」

2体の魂が捧げられると墓場へと埋葬されていた冥界の魔王が復活した。

蘇りし魔王 ハ・デス 攻撃力2450

「さらにゴブリンゾンビがフィールドから墓地へ送られたことでデッキから守備力200のゾンビキャリアを手札へ」

「恵もシンクロ召喚を決めてきたか：だけど攻撃力は銀龍の方が上だぜ！」

「勿論分かっている。永続魔法、奇跡のピラミッドを発動。私のフィールドのアンデットモンスターの攻撃力はあなたのフィールドのモンスター1体につき200ポイントアップする」

上空から逆さのピラミッドが出現し、アンデットモンスターに力を分け与えていった。

龍骨鬼 攻撃力2400↓2600

蘇りし魔王 ハ・デス 攻撃力2450↓2650

「う…あっさり超えられちゃった！」

「バトル。行って、龍骨鬼」

再び骨で作られたハンマーを振るい、ドラゴンを叩き落とそうとす

る。

「トラスト・ガーディアンをシンクロ素材にしたモンスターは1ターンに1度破壊されねえ！この効果を使用した後、銀龍の攻撃力は400下がっちゃうけどな…」

「だけどダメージを免れることは出来ない」

ガーディアンに加護によって銀龍はハンマーから身を守ることに成功した。

コナミ LP3850↓3750

銀龍 攻撃力2500↓2100

「そしてまだ攻撃は残っている。蘇りし魔王 ハ・デスで攻撃」

銀龍は呪いをかけられてしまい、飛ぶことを封じられてしまう。

ハ・デスはドラゴンの着地点を亜空間へと繋げることで銀龍を消し去ってしまった。

「すまねえ銀龍…！」

コナミ LP3750↓3200

「あなたのモンスターがいなくなったことで奇跡のピラミッドの効果は一旦消える」

龍骨鬼 攻撃力2600↓2400

蘇りし魔王 ハ・デス 攻撃力2650↓2450

「俺の場にモンスターが増えたらまた攻撃力は上がっちゃうってことか…」

（それだけではない。奇跡のピラミッドは1度だけアンデットモンスターの身代わりにすることができる。次のターン、少なくともどちらかのモンスターが生き残る可能性は高い。そして次の私のターンに手札のゾンビキャリアとシンクロすれば私のエースモンスター、ダークエンド・ドラゴンを呼び出すことが出来る。もう…あなたに希望はない）

「ターン終了」

レイン恵 LP2200

フィールド 『龍骨鬼』（攻撃表示） 『蘇りし魔王 ハ・デス』

セット0 『ミイラの呼び声』 『奇跡のピラミッド』

手札3

「俺のターン。…ドロー!…行くぜ、恵。相手フィールドにのみモンスターがいる時、レベル・ウォリアーはレベル4として特殊召喚することが出来る!」

赤いマントに赤いスーツをまとったヒーローがフィールドへと見参した。

レベル・ウォリアー 守備力600

「そしてチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚するぜ!」

「…!あなたのシンクロの核となるカード…」

頭の左右にアンテナが付いたロボットがフィールドへと降り立った。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「俺はレベル4のレベル・ウォリアーにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング!3つのエレメントを司るものよ、まばゆき希望を胸に明日への扉を開け!シンクロ召喚!輝け、<sup>アーリー</sup>A・ジェネクス・トライフォース!」

「希望…?」

ジェネクス・コントローラーがアンテナから電波を飛ばすと戦士の体の変貌していき、人型のロボットへと成り代わった。中枢コアにはジェネクス・コントローラーが転送され、突き出した右手にある3つのランプの内、白色の光が発光した。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「そして光属性をシンクロ素材にしたトライフォースの効果を発動!1ターンに1度、墓地の光属性モンスターを1体裏側守備表示で特殊召喚することが出来る!」

「あなたの墓地の光属性。該当モンスターは2体、1体はシンクロ素材に使われたレベル・ウォリアー。もう1体は…」

「蘇れ!蒼眼の銀龍!」

思わず目をつぶってしまうほどの眩しい光とともに白銀の翼を持つドラゴンが蘇る。地面へと降り立つと、カードの裏へと隠れていっ

た。

蒼眼の銀龍（裏側守備表示） 守備力3000

（シンクロモンスターが2体…まさか不動遊星の使うアクセルシンクロを…？）

「2体のシンクロモンスター…遊星ならアクセルシンクロするんだろうな。だけど…俺には勿論そんなことは出来ねえ」

「…！」

「おっと…アクセルシンクロって言っても分からないか。まあ特別なシンクロ召喚らしいぜ。…でも俺には特別な力なんてない。融合だって相川に敵わなかったし、銀龍やエンシエント・ホーリーはせいれ…借りてるものだからな」

「なら何故…あなたはそんな迷いのない顔をしているの？」

「昨日ハラルドと試合の後に話したんだ。色々話したけど…俺が気になったのはあいつは最初から神に認められていたわけじゃないってことだ。ハラルドはデュエル巡礼の旅に出て世界がどんな状況に置かれているかをその目で見たり…色々苦労してやつとオーデインに認められたらしい」

「…」

「ドラガンやブレイブもそうだった。そして…多分みんなそうなんだ。初めから特別な力を持つ奴なんていやしない。だからこそ努力するんだ。それに気づいて初めて分かった。大事なのは特別な力を持つことじゃない、自分が進化するために努力し続けることだ！」

「…あ」

（私達の世界の人々はただひたすらにシンクロ召喚…特別な力を振るっていた。努力を怠らなかったのはごく一部の人達だけ。…コメントは人の感情に反応する。危険だと判断されたのは努力を怠り、ただ特別な力を求める人々の欲望。もし彼の思考が後世へと伝われば…？）

「シンクロキラーの機皇帝…俺は今までそいつを意識して色々努力をしてきた。でも…実は俺はあいつに感謝してるんだ。機皇帝がいなかったらシンクロモンスターの力を合わせるなんて考えなかったと

思うからな」

「…。そう…なの」

「おっと…悪い。恵にとっては意味が分かんねえよな。忘れてくれ。デュエルを続けるぜ」

「…奇跡のピラミッドの効果で私のアンデットモンスターの攻撃力が上昇する」

ピラミッドがコナミのモンスターのエネルギーを吸い取り、アンデットモンスターへと分け与えていく。

龍骨鬼 攻撃力2400↓2800

蘇りし魔王 ハ・デス 攻撃力2450↓2850

「あなたのライフオースの攻撃力は2500。このままターンを終了させるしかない」

「それはどうかな？俺はライフオースと銀龍の力を合わせて恵に勝つぜ」

「…どうやって？」

「行くぜ…これが俺の新しい答え！俺は銀龍とライフオースをリリースする！」

「…!？」

「古より封印されし悪魔よ、2体を合わせた力をその身に具現せよ！来てくれ…真魔獣 ガーゼット！」

2体の生命エネルギーが1つの魂を合成し、次第に形を成している。エネルギーが広がっていくと、翼を生やし、鍛え上げられた腕を引き継いだ新たな生命が形成された。

真魔獣 ガーゼット 攻撃力0

龍骨鬼 攻撃力2800↓2600

蘇りし魔王 ハ・デス 攻撃力2850↓2650

「これは…」

「真魔獣ガーゼットの攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計になる！」

「銀龍の攻撃力、ライフオースの攻撃力共に2500。…つまり」

「攻撃力は5000になる！」

新たに生まれた生命は受け継がれたエネルギーをその身に受け、巨大な体へと進化していった。

真魔獣 ガーゼット 攻撃力0↓5000

「…これがあなたの答え」

レイン恵は感情を持たない。だが、自分のデータから予測できなかったこの展開に対してデュエルが楽しいという感情が芽生えた。そんな気がした。

「バトルだ！真魔獣 ガーゼットで蘇りし魔王 ハ・デスに攻撃！ユニティ・フォース！」

巨大な体から放たれる一撃は重く、魔王を一瞬で消し飛ばしてしまった。レイン恵がこの攻撃を受ける時、コナミからは笑っているように見えたという。

レイン恵 LP2200↓0

デュエルの決着がつき、コナミがレイン恵の近くに行こうとした時、コナミに連絡が入った。電話をかけたのは遊星。ネオサティスファクションのメンバーをスタジアムに集め、ニューワールドについて互いに持っている情報を交換したいという内容をコナミに伝えてきた。コナミはそれを了承し、電話を切った。

「悪い恵。今から用事が出来ちまった。お前とのデュエル楽しかったぜ。またやろう！」

「…分かった。また…あなたとデュエルがしたい」

「おう！じゃあな！」

コナミは幸子と鬼柳に連絡をつけながら、スタジアムへと向かっていった。その様子を見た後、レイン恵は逆方向に踵を返し彼女の行くべきところへと向かっていった。後ろに佇む建物、アルカディアムーブメントとの距離を広げながら。

どうしてDホイールと合体しないんだ？

既に日は落ち、無人となったスタジアムでチーム5D、sとチームネオサティスフアクションは互いに持っているチームニューワールドに関する情報を交換していた。

「龍亞と龍可が機皇帝に襲われただっけ!?」

「ああ。何とか2人は無事だったが…」

「ルチアーノが使う機皇帝スキエルに俺たちはやられちゃったんだ…」

「精霊たちも協力してくれたけど…勝てなかったわ」

2人の双子は圧倒的な実力を持つルチアーノに敗れ、落ち込んでいた。

「だが、おかげでスキエルの効果を把握することができた。2人の頑張りは無駄じゃないさ」

「そ、そう?」

「遊星やコナミの役に立てたなら…良かったのかな?」

「ただ、ホセが言っていた機皇帝グランエル。その能力は未知数だ…」

「心配しないでいいぜ遊星。そんなもの俺の満足で乗り越えてやる!」

「鬼柳…」

「遊星達の手を煩わせるまでもねえ!俺たちがあいつらをぶっ倒す!」

「当然ですわ。あなたたちは優雅に待っていればいいのです。私たちが決勝に上がってくるのを…ね」

「そういうことだ遊星。俺たちは絶対に勝つ!そのために俺たちは力をつけてきたんだぜ」

「鬼柳、海野、コナミ…。ああ、俺たちは信じて待っている」

ネオサティスフアクションのやる気に一同は盛り上がる。そんな彼らに水を差すようにスタジアムのスクリーンが起動し、3人の人物が映し出された。

「調子に乗るなよ…。シグナーどもに比べれば貴様らなどゴミ同然

だ」

「プラシドだったら熱くなっちゃって……。僕たちが負けるわけないのは当たり前なだけだね」

「よせ、2人とも。私たちはそんな話をしにきたのではない」

「プラシド、ルチアーノ。それにホセ！一体あの浮島はなんだ！お前たちイリアステルと何か関係があるのか？」

空に佇む未知なる浮遊物体。シグナーや精霊など特別な力を通してしか見ることの出来ない不思議な物体の正体はイリアステルと無関係とは考えづらいと遊星は思っていた。

「教えてやろう不動遊星。あれは神の居城、アーククレイドル！」

「アーククレイドルだと？」

「我々がWRGPで優勝した際、アーククレイドルは真の姿を見せ、地上へと降り立つ」

「その時、ネオ童実野シティは消滅して世界は生まれ変わるのさ！きひゃひゃ！」

「何だと!？」

空に浮かぶ居城、アーククレイドル。その巨大さ故、地上へと降りてくれば街一つを消滅させるのは難しくないことが伺えた。

「止めたければ僕たちを倒すんだね。まあ、無理だろうけど！」

「俺たちネオサティスファクションを舐めるなよ！お前たちは俺たちが倒してやる！」

「鬼柳京介……貴様は俺が倒す！俺は貴様が神に選ばれたなど認めない！」

「神……何のことだ？」

「貴様が受け取った石版のカード。それは神に認められた証。最も、貴様ごときが神に認められるなどおこまがしいがな」

「こいつか……」

鬼柳は一枚のカードを取り出す。そのカードはイリアステルに力を認めさせるに足る威圧感を放っていた。

「……私たちは万が一にも負けるわけにはいかない。ネオサティスファクションよ、全力を持って相手をしよう。では、今度の試合で会おう」



「あ、待てー！」

コナミが呼び止めるもスクリーンの表示は消えてしまい、場は静寂に包まれてしまう。

「ふん、奴らはニューワールドが優勝すればアーククレイドルが起動すると言った。ならば迷うことはない！」

「そうね。私たちかコナミたちが勝つことが出来れば……」

「やってやろうぜー！」

5D's、ネオサティスフアクションのメンバーはそれぞれ決意を固め、必ずイリアステルを倒すことを誓った。

そしてネオサティスフアクションの決戦の時がやってきた。

「ついにやってきたWRGP準決勝、チームニューワールド対チームネオサティスフアクション！この試合の勝者が既に決勝へと駒を進めているチーム5D'sと戦うことが出来るぞー！」

MCの実況によって観客は大いに盛り上がり、今か今かと試合が始まる瞬間を待っている。そんな中、ニューワールドのピットからスケードボードを基盤としたDホイール、デュエルボードに乗ってルチアーンが現れた。よく見ると足とボードが一体化しているが、ディスクが上に設置されているため隠れる形となり、気付くものはいなかった。ルチアーンは既にスタートラインについている鬼柳の横でボードを止め、話しかけた。

「へえ、君が1番手か。困ったな……ここで僕が勝ったらプラシドが悔しがっちゃう。ま、それもいいかもね」

「随分と余裕そうじゃねえか。油断していると噛みつかれるぜ？この俺の満足になー！」

「噛みつくことが出来るならやってごらんよ。さあ、カウントダウンの始まりだー！」

先攻、後攻を決めるレースのカウントダウンが始まった。1つずつカウントが進んでいくたびにスタジアム内の緊張感が高まっていく。そしてカウントが0となり、2つのDホイールがスタートした。先に飛び出したのは……ルチアーンのデュエルボード。

「きびやびや！遅いねえー！」

「くっ、速えー！だけど俺たちのエンジンはここから伸びるぜ！絶対に追いついてやる！」

鬼柳のDホイールが加速していき、ルチアーノに肉薄していく。しかし、僅かばかりルチアーノの方が第一レーンを先に回ろうとしていた。

「必死だねえ…。いいよ、譲ってあげる」

「…！」

ルチアーノが減速し、鬼柳のDホイールが先に第一レーンを回った。

「よし！鬼柳が先攻だ！」

「この勢いで一気にやってしまいなさい！」

「「デュエル！」」

「お前は俺に先攻を譲ったことを後悔するぜ。俺のターン、ドロー！俺はチューナーモンスター、インフェルニティ・ビートルを召喚！」  
体全体が黒く染まったヘラクレスオオカブトが鬼柳のフィールドを縦横無尽に舞った。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「そして俺は…カードを5枚セット！」

「へえ…」

鬼柳の全ての魔法・罠ゾーンにカードが伏せられていく。

「1体のモンスターを召喚して5枚のカードを伏せたってことは…」

「いきなりハンドレスですわ！」

「そして俺はインフェルニティ・ビートルの効果を発動する！俺の手札が0枚の時、自身をリリースすることでデッキから2体の同名モンスターを呼び出すぜ！」

ビートルの呼び声に導かれ、2匹の仲間がやってきた。

インフェルニティ・ビートル×2 攻撃力1200

「これで俺はターンエンドだ！さあ、来やがれ！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・ビートル』×2 (攻撃表示)  
セット5

手札0

スピードカウンター

s c 0

「いづくよー！僕のターン！」

鬼柳 s c 0 ↓ 1 ルチアーノ s c 0 ↓ 1

「君が場にチューナーを残したってことは当然狙いはシンクロでしょ？なら僕もこいつを呼んでおくよ。僕はスカイ・コアを召喚！」

青色の球体が場に置かれた。

スカイ・コア 攻撃力0

「さらにs p ーオーバー・ブーストを発動！僕のs c は4つ上昇するよ。代わりにエンドフェイズに1に戻っちゃうけどね」

ルチアーノのデュエルボードが加速していき、レーンを利用してアクロバティックなライディングを見せ、観客を沸かせた。

ルチアーノ s c 1 ↓ 5

「そしてs p ーライトニング・ロッドを発動！僕のs c が2以上ある時、僕のフィールドのモンスターを1体破壊できるよ。僕はスカイ・コアを破壊！」

「ちつ、早速か」

コアの破壊がトリガーとなり、5つのパーツが現れる。

「スカイ・コアが効果で破壊された時、デツキから5体のパーツを呼び出すことができる！現れる！スキエル<sup>トップ</sup>T、スキエル<sup>アタック</sup>A、スキエル<sup>ガード</sup>G、スキエル<sup>キャリア</sup>C！そして：機皇帝スキエル<sup>インフィニティ</sup>∞！合体しろ：機皇帝スキエル！」

4つのパーツが本体の機皇帝スキエル∞に集約していき、1つのロボットを形成した。

スキエルT (守備表示) 攻撃力600 守備力0

スキエルA (守備表示) 攻撃力1000 守備力0

スキエルG (守備表示) 攻撃力200 守備力300

スキエルC (守備表示) 攻撃力400 守備力0

機皇帝スキエル∞ (攻撃表示) 攻撃力0 守備力0

「そしてスキエル∞の攻撃力・守備力はパーツモンスターの攻撃力の合計になる！」

スキエルが無限を意味する記号、∞を掲げるとパーツモンスターの力を吸収していった。

機皇帝スキエル∞ 攻撃力0↓2200

「出やがったな機皇帝……!」

「さあ、行くよ。バトル!スキエルでインフェルニティ・ビートルに攻撃イ!」

スキエルの胸部に空いた∞の形をした穴から光線が放たれ、ビートルを貫いた。

(トラップを…駄目だ。遊星達の情報によれば∞モンスターは相手の効果の対象にならねえ!)

鬼柳 LP4000↓3000

「くっ!」

「さあ、シンクロモンスターを呼んでごらんよ!僕は2枚のカードを伏せてターンエンド!」

ルチアアノ LP4000

フィールド 『スキエルT』(守備表示) 『スキエルA』(守備表示)

『スキエルG』(守備表示) 『スキエルC』(守備表示) 『機皇帝スキ

エル∞』

セット2

手札1

sc5↓1

「俺のターン……来てくれると思ってたぜ」

鬼柳 sc1↓2 ルチアアノ sc1↓2

「俺はインフェルニティ・ビートルをリリースしてインフェルニティ・デストロイヤーを召喚する!」

ビートルがどこかへ飛んでいくと、屈強な体をした悪魔が地面を破壊しながら姿を見せた。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「そいつでスキエルに攻撃して倒そうっての?」

「いや、お望み通りシンクロだ!リバースカードオープン。sp—  
ヴィジョンウィンド!俺のscが2以上ある時、墓地のレベル2以下

のモンスターを1体特殊召喚することができる！戻ってこい、インフェルニティ・ビートル！」

先ほど姿を消したビートルが鬼柳のフィールドに戻って来た。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「俺はレベル6のデストロイヤーにレベル2のビートルをチューニング！死者と生者の狭間、その虚ろな魂が混じるとき冥府の闇が舞い降りる！シンクロ召喚、いでよワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」  
レーン突き破り、100個の目玉が体に張り付いた奇妙なドラゴンがフィールドへと降り立った。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 攻撃力3000

「馬鹿のひとつ覚えのシンクロか！次のターン、スキエルの効果で吸収してやるよ！」

「その前にそいつを倒す！俺はワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの効果を発動！1ターンに1度、墓地のレベル6以下の闇属性モンスターを除外することでそのモンスターの名前と効果をエンドフェイズまでコピーする。俺はインフェルニティ・デストロイヤーを除外！」

墓地へと置かれた仲間の力を引き継ぎ、ドラゴンは新たな力を身につけた。

「バトルだ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでスキエル∞に攻撃！インフェルニティ・サイト・ストリーム！」

闇に染まったエネルギーが一点に集約され、スキエルの中心部めがけて放たれた。

「そうはさせないよ！スキエルGは1ターンに1度、攻撃を無効にできる！」

スキエルの腕のパーツの一部が開き、放たれたエネルギーを吸収していた。

「…そうくると思ったぜ！スキエルGを対象に永続トラップ発動、デモンズ・チェーン！そいつの効果を無効にする！」

「何っ！」

悪魔さえも封じ込めると言われている鎖がスキエルの腕を封じ込め、エネルギーを吸収しようとしていた部分を閉じてしまう。

「…なんてね。そんな手でスキエルを倒せると思った？リバーカードオープン！トラップカード、地縛霊の誘い！このトラップの効果で今回の攻撃対象は僕が選ぶよ」

「何だと!？」

「そんな鎖でぐるぐる巻きにされた腕なんていらぬや。僕は攻撃対象をスキエルGに変更！」

スキエルの腕が放たれたエネルギーから中心部のコアを守るように壁となり、破壊される。同時に巻きついていた鎖も破壊され、スキエル本体は僅かな損失の代わりに自由を取り戻した。

機皇帝スキエル∞ 攻撃力2200↓2000

「きひやひや！残念だったね」

「…ひゃーはっは！かかったなルチアーノオ！」

「な、何!？」

「まずはワンハンドレッド・アイ・ドラゴンがコピーしたインフェルニティ・デストロイヤーの効果を発動！俺の手札が0枚の時に、相手のモンスターを戦闘破壊したことで相手に1600のダメージを与える！」

エネルギーの余波がルチアーノを襲い、そのライフを大きく削った。

「う、うわっ！やりやがったなあ！」

ルチアーノ LP4000↓2400

「どうだルチアーノ！」

「へっ、ちよつとダメージを与えただけでいい気になるなよ。次の僕のターンで倍返しにしてやる！」

「お前に次のターンが来れば…な。トラップ発動、破壊神の系譜！こいつは相手フィールドの守備モンスターを破壊したターンに発動できる！俺のフィールドのレベル8モンスター1体はこのターン、もう1度攻撃ができる！」

「…し、しまっ…」

「俺が選ぶのは当然、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！もう1度スキエル∞に攻撃！インファイニティ・サイト・ストリーム！」

再びドラゴンは闇に染まったエネルギーをスキエルの中心部めがけて解き放った。

「く……！永続トラップ発動、無限牢！手札を1枚捨て、墓地のモンスターを魔法カード扱いで僕の魔法・罠ゾーンにセットする！僕はスカイ・コアをセット！」

「そんなことをしても攻撃は防げねえ！」

スキエルの中心部へとエネルギーが入りこみ、内部まで浸透したエネルギーに耐えきれずスキエルは崩れ落ちてしまった。

ルチアーノ LP2400↓1400

「うっ！僕のスキエルが……！」

中心部が消え去ったことでそれと接続していたパーツも消えていってしまった。

「まだだぜルチアーノ！忘れてねえよな？ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンはこのターン、インフェルニティ・デストロイヤーの効果をコピーしていることを！」

「嘘だ……。僕がこんな奴に負ける!？」

再びエネルギーの余波がルチアーノを襲った。

「うわああっ!？」

ルチアーノ LP1400↓0

「な、なんと鬼柳！優勝候補のチームニューワールドの1番手、ルチアーノに対して僅か3ターンで勝利を収めたぞ！これは早くも大波乱の予感だー！」

「そんな……僕がシンクロを使うやつなんかに！嘘だ……。嘘だ嘘だ嘘だあー！」

「へっ、ルチアーノ！お前が俺に負けた理由は1つだ！」

「……一体なんだって言うんだよ！」

「確かに機皇帝は強力なモンスターだ。だけどな……そこで止まってちゃ俺には勝てねえ！このチームに入ってから俺は満足を求めるために常日頃からさらなる進化を続けた。そしてコナミの協力もあって地縛神も従えた……。でも俺はまだ満足してねえ！いや、違うな！満身に終わりはねえんだ！」

コナミがレイン恵に語った進化をするために努力をし続けるとい  
うこと。鬼柳は無意識の内に満足という理念を通して、それを本能的  
に求めていた。

「…ちっ」

ルチアーノは舌打ちをしながらも、それ以上は問うことなくニュー  
ワールドのピットへと戻っていった。

鬼柳 LP3000

フィールド 『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』（攻撃表示）

セット2

手札0

sc2

「無様な負けだなルチアーノ」

「プラシドうっさい。ほら、カード渡すからさっさと行つてこいよ」

ルチアーノは自分の場に残ったカードをプラシドのDホイールへ  
と並べ、ベンチへと下がっていった。

「よくルチアーノに勝った鬼柳京介。これで俺自身の手で貴様を倒す  
ことが出来る…！」

「待て、プラシド」

ピットから出ようとするプラシドを呼び止めたのはホセ。1枚の  
カードをプラシドに向けて差し出していた。

「このカードは…！どういふつもりだホセ！このカードはチーム5D  
, sと戦う時に使う切り札のはずだ！」

「だが鬼柳は本気のルチアーノを倒してみせた…。やはり、神ソリンに認め  
られたデュエリストなのだろう。私たちは万が一にも負ける訳には  
いかないのだ。分かるな、プラシド？」

「…くそっ！」

プラシドはそのカードをひったくり、自身のデッキへと投入して  
ピットを出ていった。先ほどのルチアーノのようにDホイールと一  
体化することはなく鬼柳へと追いついた。

「来たか！このまま勝たせてもらうぜ！」

「…やれるものならやってみろ」



「チームニューワールド、2番手はプラシドだ！ニューワールドとしては2連敗は何としても避けたいところだー！」

「「デュエル！」」

プラシドと鬼柳、2人のデュエルが幕を開けた。

## 天国と地獄の狭間

チームニューワールドのセカンドホイーラー、プラシドが鬼柳に追いつき、プラシドのターンからデュエルが再開された。

「俺のターン、ドロロー！」

鬼柳 スビードカウンター  
s c 2↓3 プラシド s c 2↓3

「俺はワイズ・コアを召喚する！」

白色の球体が場に現れた。

ワイズ・コア 攻撃力0

「そして俺は2枚のカードを場に伏せターンを終了する！」

「あのモンスターを呼んだってことはあいつもルチアアノと狙いは同じか……」

プラシド LP4000

フィールド 『ワイズ・コア』（攻撃表示）

セット2 『無限牢』『スカイ・コア』（セット状態）

手札3

s c 3

「俺のターン！」

鬼柳 s c 3↓4 プラシド s c 3↓4

「この瞬間俺はワイズ・コアを対象としてトラップカード、破壊指輪リングを発動する！このカードによってワイズ・コアは破壊され、互いに1000ポイントのダメージを受ける！」

「早速来たか……！」

「そして俺はもう1枚のカードも発動させる！永続トラップ、無限霊機！このカードがある限り俺がダメージを受けた時、1000ポイント毎に1つの霊機カウンターを乗せる！」

「……」

（ホセ。貴様のためにこのカードは発動しておいてやる。だが、貴様の言うことを聞くのはここまでだ。貴様に回すためにわざと負けるなど俺のプライドが許さん！）

「鬼柳京介！俺の本当の姿を見るがいい！」

「プラシド…命令を無視し鬼柳に本気の力をぶつけるつもりか？」

「いいじゃんホセ。あそこまで好き勝手されるのも腹立たつしさ。ちよつとくらい痛い目にあつてくれないと割に合わないよ」

「むう…」

プラシドがDホイールの上に立つとDホイールとプラシド自身の体の変形を始めていった。

「お前…ロボットだったのか」

「そうだ。そして今から貴様に見せるのはDホイールの最終進化形態！」

プラシドの体からプラグが伸び、Dホイールと接続されていく。背中からは因子が伸び、Dホイールの後方と繋がることで体が完全にDホイールと同一化されてしまった。

「Dホイールと合体しやがった…?!」

異様な事態にMCや観客がざわめき出すも、ソリッドヴィジョンによるものと捉えられ騒ぎは収まった。

「これで俺はDホイールのモーメントエネルギーを直に受け取り、自らのパワーを増すことが出来た！見せてやろう、俺の力を！」

鬼柳とプラシドのDホイールが∞のマークによって囲われた。

「これは…！」

「この空間によつてデュエルで発生するダメージは現実のものとなる！だが、俺はロボット。もとより痛みなどない！鬼柳京介、貴様だけがこの苦しみを味わうのだ！さあリングが爆発するぞ！」

球体の近くへと落ちていた指輪型の爆弾が爆発し、爆風が2つのDホイールを巻き込んだ。

「ははははー！」

「うおおおっ?!」

鬼柳はバランスを崩しそうになるもワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが可能な限り爆風を抑えたことでクラッシュを免れた。

鬼柳 LP3000↓2000

プラシド LP4000↓3000

無限霊機 霊機カウンター0↓10

「力を持つモンスターに救われたか。まあいい。ワイズ・コアが破壊されたことでデッキより5体のパーツモンスターを呼びだす！現れる！ワイゼルT、<sup>トップ</sup>ワイゼルA、<sup>アタック</sup>ワイゼルG、<sup>ガード</sup>ワイゼルC！そして機皇帝ワイゼル<sup>インフィニティ</sup>∞！合体せよ、機皇帝ワイゼル！」

4つのパーツが本体のワイゼル∞を中心として合体し、1つの口ポットへと姿を変えた。

ワイゼルT (守備表示) 攻撃力500 守備力0

ワイゼルA (守備表示) 攻撃力1200 守備力0

ワイゼルG (守備表示) 攻撃力0 守備力1200

ワイゼルC (守備表示) 攻撃力800 守備力600

機皇帝ワイゼル∞ (攻撃表示) 攻撃力0 守備力0

「そしてワイゼル∞の攻撃力・守備力はパーツモンスターの攻撃力の合計となる！」

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力0↓2500

「こいつがお前の機皇帝か。確かコナミから情報を聞いていたな……」

「さあ、遠慮はいらぬ。攻めてくるがいい！」

「まず俺はカードを1枚伏せる！そしてバトルだ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでワイゼル∞に攻撃！インフィニティ・サイト・ストリーム！」

闇に染まったエネルギーが集約されていき、ワイゼルの中心部をめぐらして解き放たれた。

「当然そんな攻撃は通さないがな！ワイゼルGの効果を発動する！俺のモンスターが攻撃の対象となった時、攻撃の対象を自身へと変更する！」

「やっばそう来るよな……！」

コアを守るべく腕を盾にすることでエネルギーが中心部に入り込むのを避けることに成功した。

「俺はこれでターンエンドだ！」

鬼柳 LP2000

フィールド 『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』 (攻撃表示)  
セット3

手札0

s c 4

「俺のターン！」

鬼柳 s c 4 ↓ 5 プラシド s c 4 ↓ 5

「ふっ、見せてやろう。シンクロキラーの異名を持つ機皇帝の力を！機皇帝ワイゼル∞の効果を発動！1ターンに1度、相手の場のシンクロモンスターを装備カードとして吸収する！」

機皇帝の胸元に空いた∞の形をした穴から光に包まれた触手が伸びていき、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを絡め取ろうとした。「させるかよ！永続トラップ、ディメンション・ゲートを発動！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンをゲームから除外する！」

触手がワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに触れるより早く、異次元へと飛ばされていった。

「ちっ、手品で吸収を免れたか。だがこれで貴様の場はガラ空きだ！」「いいや、ディメンション・ゲートは相手がダイレクトアタックしてきた時、墓地へ送ることができる！そしてこのカードは墓地へ送られた時、このカードの効果で除外したモンスターを帰還させる！」

「ほう？少しは知恵が回るようだな。だが、所詮一時しのぎの策にすぎん！手札より <sup>スピードスベル</sup> s p — スピード・エナジーを発動する！俺の s c が2以上ある時、俺のモンスター1体に俺の s c の数 × 200 の攻撃力をターン終了時まで加える！よって俺はワイゼル∞の攻撃力を1000アップさせる！」

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力2500 ↓ 3500

「う…！」

「そして俺は場のワイゼルAとワイゼルCを攻撃表示へと変更する！」

ワイゼルの一部となっていたパーツが僅かに動き、鬼柳に攻撃目標を合わせた。

ワイゼルA 攻撃力1200

ワイゼルC 攻撃力800

「ワイゼル∞の攻撃に対し、貴様がディメンション・ゲートによってワ

ンハンドレッド・アイ・ドラゴンを守備表示で帰還させたとしても、この2体が攻撃すればライフポイント2000の貴様はそこで終わるだ…！」

「ちつ…やるじゃねえか」

「貴様のライフが尽きてしまえばすぐに相手のターンとなつてしまう。ここでやることはやらせてもらおう。手札よりミスティック・バイパーを召喚する」

赤を基調とした服を着た愉快的な笛吹きが現れた。

ミスティック・バイパー 攻撃力0

「最も、こいつは場に残すわけではないがな。ミスティック・バイパーをリリースすることで効果を発動する。俺は1枚のカードをドロ―し、引いたカードがレベル1のモンスターならば俺はもう1枚ドロ―を行うことができる！ドロ―！俺が引いたのはレベル1のワイズ・コア。よつてもう1枚のカードをドロ―する！」

「ここでレベル1のモンスターを引き当てたか…！」

「そして俺はs p―ヴィジョン・ウインドを発動する！s cが2以上あることで墓地よりレベル2以下のモンスターを特殊召喚させてもらおう。戻れ、ワイゼルG！」

ワイゼルの腕が再びフィールドへと戻ってくる。しかし、壊れておりパーツとしての役割を果たせそうにない。

ワイゼルG 守備力1200

「だがそのモンスター効果は無効化され、エンドフェイズには破壊されるぜ！」

「ふん。そんなことは分かっている。貴様に見せてやろう！機皇帝のさらなる可能性を！俺はワイゼルGをリリースすることで手札よりワイゼルG 3<sup>スリー</sup>を特殊召喚する！」

「新しいパーツモンスターだと…!?!」

新たな腕のパーツが現れ、本体との合体を果たした。以前の腕よりかなり丈夫なものとなっていた。

ワイゼルG 3 (守備表示) 攻撃力0 守備力2000

「機皇帝はパーツを入れ替えることでその能力を強化することが出来

る。ワイゼルG3は以前より防御能力が格段に上がっているぞ！」

「徹底的に詰めに来たか……！」

「俺は場にカードを1枚伏せる。バトルだ！やれ、ワイゼル∞！鬼柳京介へとダイレクトアタック！」

ワイゼルの胸部から∞の形をした光線が放たれた。

「デイメンション・ゲートの効果で戻って来い！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 守備力2500

「ならばそいつを粉碎しろ！ワイゼル∞！」

異次元より戻って来た百目の竜は光線によって目を潰され、活動を停止してしまった。

「さあ、パーツモンスターの直接攻撃で終わりだ！」

「そいつは……どうかな？」

「な……!?なんだこの威圧感は！」

「ひやはは！俺はワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが破壊されたことでトラップカードを発動していたのさ！このシャドー・インパルスだな！このカードは俺のシンクロモンスターが破壊された時、そのモンスターとレベルと種族が同じモンスターを俺のエクストラデッキから特殊召喚出来る！」

「貴様……まさかあのモンスターを!?」

「俺もこのモンスターを呼んだことはねえ。何もかも未知の領域だ！満足させてくれよ……！天国と地獄の間……煉獄はぐまより姿を現せ！煉獄龍

オーガ・ドラゴン！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの影からそのドラゴンはゆつくりと赤黒く染まった姿を2人へと見せた。

煉獄龍 オーガ・ドラゴン 攻撃力3000

「これが俺の新しい力……。近くにいただけで感じるぜ。圧倒的な威圧感をな！」

「石板のカード……まさかここで呼び出すとは……」

「まだだ！俺の満足は尽きていねえ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの効果が発動している！このカードが破壊された時デッキからあ

るカードが俺の手札に加えられる！」

「それほどのモンスターを従えながらさらなるモンスターを加えるだ  
と…？」

「こいつもオーガ・ドラグーンのパワーに負けないくらいの力を持つ  
ているぜ…。俺が加えるのは地縛神 C c a p a c A p u i !」

「地縛神…！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンがの残滓が鬼柳に力を託して  
いった。

「鬼柳京介。人にして神に認められ、闇の力である地縛神をも従える  
とは…。俺はこれでターンエンドだ！」

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力3500↓2500

ブラシド LP3000

フィールド 『ワイゼルト』(守備表示) 『ワイゼルA』(攻撃表示)

『ワイゼルG3』(守備表示) 『ワイゼルC』(攻撃表示) 『機皇帝ワ

イゼル∞』(攻撃表示)

セット1 『無限牢』 『無限霊機』 『スカイ・コア』(セット状態)

s c 5

「ここで地縛神を呼び出すには2体の生贄を用意しなくちゃならね  
え。そして俺はそのための策を1つ用意してある。あとは…その  
カードを発動するために必要なカードを引くだけだ！俺のターン、ド  
ロー！」

鬼柳 s c 5 ↓ 6 プラシド s c 5 ↓ 6

「…来たぜ！ s p ーシフト・ダウンを発動する！ s c を6つ取り除  
くことで俺は2枚のカードをドローする！」

鬼柳のDホイールが大幅に減速して行く代わりに鬼柳は新たな戦  
力を手に入れた。

鬼柳 s c 6 ↓ 0

「そしてトラップカード、極限への衝動を発動！俺の手札から2枚の  
カードを墓地へ送り、2体のソウルトークンを場に呼び出す！俺は今  
ドローした2枚のカードを墓地へ！」

鬼柳のフィールドに2つの魂が出現した。



ソウルトークン×2 守備力0

「場に2体の生贄を…！」

「そして俺は2体のソウルトークンをリリース！現れやがれ！地縛神、C c a p a c A p u！」

ワイゼルより大きい闇に染まりし巨人が地響きと共に姿を見せた。

地縛神 C c a p a c A p u 攻撃力3000

「馬鹿な…!?僅かばかりのターンで1体でも操ることの難しいモンスターを2体も呼び出しただと！」

「これが満足だ！出来ねえなんて言葉は俺の辞書にはねえ！行くぜ、バトルだ！」

「くっ…だが、ワイゼルG3は俺のモンスターが攻撃の対象にされた時自身へと攻撃対象を変更する！さらにこいつは1ターンに1度、戦闘では破壊されない！」

ワイゼルの腕が切り離され、他のパーツを守るように盾となった。

「…見つけたぜ！その効果の弱点をな！C c a p a c A p uは相手フィールドにモンスターがいてもダイレクトアタックを行うことができる！そしてワイゼルG3はモンスターが攻撃されなければ攻撃を誘導することが出来ない！」

「しまった…！」

「C c a p a c A p uでプラシドへとダイレクトアタック！お前のライフは3000。これで終わりだ！」

巨人の手が機皇帝を超えて直接プラシドへと伸びていった。

「…とても言うと思ったか？甘いぞ！俺はこの時を待っていた！」

「何?!」

「トラップカード発動！バトル・ブレイク！こいつは相手が攻撃して来た時に発動することが出来る。攻撃してきたモンスターを破壊し、さらにバトルフェイズを強制的に終了させる！」

「モンスターを破壊した上でバトルフェイズまで終わらせるカード…!?!」

「もつとも、このカードを無効にする術はあるぞ。このカードは相手が手札からモンスターを1枚見せることができれば無効となる…！」

だが」

「俺の手札は0枚……！」

「そう、これこそが貴様のハンドレスコンボの弱点！貴様のハンドレスこそが貴様を破滅へと追い込む！この効果で地縛神を破壊し、次のターンでオーガ・ドラグーンをワイゼルが取り込めば俺の完全な勝利だ！」

地縛神がプラシドの発動したトラップへと引き込まれ、オーガ・ドラグーンにも光の縄で封じ込められてしまう。

「鬼柳京介！やはり貴様は神に選ばれるべきではなかったようだな！」

「……へっ。笑わせるぜ。俺のハンドレスコンボに死角はねえ！オーガ・ドラグーン！お前の効果を発動しろ！」

オーガ・ドラグーンは鬼柳の呼びかけに応え、光の縄をブレスで焼き去り、プラシドのトラップを鋭き爪で切り裂いてしまった。

「何が起こっている!？」

「オーガ・ドラグーンの効果。それは俺の手札が0枚の時、1ターンに1度相手が発動した魔法か罠カードの発動を無効にし、破壊する！」

「なん……だと……」

プラシドが用意していた対鬼柳のカードも破られ、プラシドは身を守る術を失ってしまった。

「そしてC c a p a c A p uの攻撃は続行している！」

巨人の手がプラシドのすぐそこまで迫って来ていた。

「く……俺の本気の力さえも打ち破ると言うのか、この男は……俺は永続トラップ、無限牢の効果を使い手札を1枚捨てることで墓地のワイズ・コアを魔法・罠ゾーンへとセットする！」

そして巨人の手がプラシドを包み込むように握りつぶした。

「ぐっ……さらに無限霊機の効果を発動！俺が受けたダメージは3000。よって30個のカウンターを乗せる……」

無限霊機がプラシドの奪われたライフをカウントしていった。

プラシド LP3000↓0

無限霊機 霊機カウンター10↓40

「っしやあ！2人抜きだ！」

「な、なんと！チームニューワールドのセカンドホイーラー、プラシドまでもが鬼柳に敗れてしまった！これでチームニューワールドが勝利するにはホセの3人抜きが必要となったぞー！これは絶望的かー!?」

「本当の絶望とはこれをはるかに超える。鬼柳京介よ、お前の力は認めよう。だがワシ達の本当の力が解放された時、お前達に勝利はない」

鬼柳の快進撃によってチームニューワールドのメンバーを2人倒すことに成功した。だが、彼らにはまだ何かの秘策があるようだ…。

走り出せその足で

鬼柳に敗れたプラシドはイラつきを微塵も隠さずにニューワールドのピットへと戻っていった。

「何故だ！何故俺は奴に勝てなかった…！」

「気に病むなプラシドよ。奴らを倒すための準備は整っている」

「そんなことはどうでもいい！俺の手で奴を倒さねば意味はない…！」

「…鬼柳はワシが倒す。だが、いずれお前達にも出番は来るやもしれぬ。気持ちを切らすなよ」

「…ちっ」

ラストホイーラーのホセはピットから出ていく。そしてレーンを自らの足で走り出したかと思うと後方からホセに向かってDホイールが発進していた。

「一体何を…。いや、まさかあいつもプラシドみてえに…!？」

Dホイールがホセの体に合わせて変形していき、ホセの体もDホイールに合わせて変形していった。

「やっぱりホセもロボットか！ってことはDホイールと合体してパワーを上げてくる…！」

鬼柳の予測通りホセの体はプラグによってDホイールと繋がれ、完全にDホイールと一体化してしまった。ホセが鬼柳に追いつくと2人のDホイールが∞のマークで囲われていった。

「これでダメージも実体化するってわけか…。頼むぜ！オーガ・ドラグーン、C c a p a c A p u！」

「さあ、鬼柳京介よ。始めるとしようか…！」

「望むところだ！」

「「デュエル！」」

「ワシのターン。ドロー！」

鬼柳

スピードカウンター

s

c

0↓1

ホセ

s c 6↓7

スピードスベル

「…ワシは手札からs p — ライトニング・ロッドを発動させてもら

おう。このカードはワシのs cが2以上ある時に発動可能だ」

「…！」

「このカードの効果によってワシは自分フィールドのカードを1枚破壊する！ワシが破壊するのはワイゼルT<sup>トップ</sup>！」

「コアモンスター以外のカードを破壊するだと…？それにお前は忘れてるぜ！オーガ・ドラグーンは俺の手札が0枚の時、1ターンに1度魔法か罠カードの発動を無効にして破壊出来る！」

「ふふ…。そうだったな。使いたければ使うといい」

（この余裕は何だ…？待てよ、オーガ・ドラグーンの効果は1ターンに1度！奴は本命のカードを発動するためにこの効果を使わせようとしているに違いねえ！なら俺が取る手は…）

「俺は…オーガ・ドラグーンの効果を発動しねえ！破壊されちまいな、ワイゼルT！」

一筋の雷がワイゼルのパーツの一部を貫き、破壊してしまった。

「…ワイゼル<sup>インフイニティ</sup>∞の攻撃力はパーツを失ったことでその分攻撃力が下がる」

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力2500↓2000

「どうやら目論見が外れたみてえだな！」

「…ああ、残念だ。鬼柳京介、お前自身に潜む欲がお前の目を霞<sup>くす</sup>ませてしまったのだからな」

「何だど?!」

「人の中に潜む欲。それによって私たちの未来は破滅を迎えた。今お前がした選択は私たちの未来そのもの」

「どういうことだ…！」

「私たちの未来はシンクロ召喚を求める人々の欲を危険だと判断したモーションによって滅ぼされたということだ」

「な…!?!お前達の未来がシンクロ召喚によって滅ぼされたど?!」

「そうだ。それは紛れも無い事実。決して背けることの出来ない人類の行き着く先だ。私たちはそれを修正しにこの世界へとやってきた！」

「簡単に信じられるような内容じゃねえが…あいつが本気で言っているのは伝わってくる！」

「もしワシ達を止めなければ力づくにでも止めればいい。だが、鬼柳京介。お前の勝ちには既に消え失せた！ワイゼル∞の効果を発動！その力をお前から奪い去ってやろう…オーガ・ドラグーンを吸収する！」

「くっ、ルチアーノとプラシドとの戦いで俺にはもう守るカードがねえ…！」

ワイゼルの胸元に空いた∞の形をした穴から光に包まれた触手が伸びていき、オーガ・ドラグーンを絡め取ってしまった。

「ワイゼル∞の攻撃力は吸収したオーガ・ドラグーンの攻撃力だけ上昇する！」

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力20000↓5000

「すまねえ…オーガ・ドラグーン！」

「ふふ…これで貴様に残ったのは地縛神のみ」

「だがC c a p a c A p uの効果で相手はC c a p a c A p uを攻撃することが出来ない！例え機皇帝でもC c a p a c A p uを倒すことは出来ねえぜ！」

「ワシが無意味にプラシドの残したモンスターを破壊したと思うか？ワシは手札から自分フィールドに唯一残されたモンスターゾーンへグランエルTを召喚する！」

「…遊星の言っていた未知の機皇帝…！」

白色のワイゼルに対して茶色に染まったパーツがフィールドに現れた。

グランエルT 攻撃力500

「プラシドはワイゼルG3ガードによって機皇帝は強化を重ねられることを示したな。ならばワシも見せてやろう。機皇帝は自身の名前と異なるパーツとも一体化することが出来る！」

「なっ…グランエルTが!?!」

先ほど失われたパーツを補うようにグランエルTがワイゼルに取り込まれていった。

機皇帝ワイゼル∞ 攻撃力50000↓5500

「また完全体に戻っちまったか…！だが、C c a p a c A p uはそ

いつを通り越してダイレクトアタック出来る！」

「鬼柳京介よ、お前に次のターンはない！グランエルTの効果を発動する！1ターンに1度、エンドフェイズまで相手フィールド上のモンスター1体の効果を無効にすることが出来る！」

「…し、しまった…」

機皇帝から放たれた光線を浴びた地縛神は色が灰色となり、身動きが取れない状態にされてしまった。

「鬼柳京介、お前はよく戦った。ワシはワイゼルアタック Aとワイゼルキャリア Cを  
守備表示に変更する。そしてバトルと行こうか」

ワイゼルA 守備力0

ワイゼルC 守備力600

「ワイゼル∞で…地縛神 C c a p a c A p uへと攻撃！」

ワイゼルの胸部から光線が放たれ、地縛神を焼き去ってしまった。

「ここまでか…！うおっ!？」

ダメージが実体化され、地縛神でも抑えきれない衝撃が鬼柳を襲った。

鬼柳 LP2000↓0

「…耐えたか。地縛神の働きに感謝するのだな」

地縛神が極力鬼柳への衝撃を防いでくれたことで鬼柳はクラッシュを何とか免れていた。

「助かったぜC c a p a c A p u…」

「敗者はレーンを去るといい。だがお前達3人の中ではお前が最も力が強い。残りの者達でワシを倒すことは出来ないだろう」

鬼柳はルール上早めに立ち去らなくてはならないことを理解しながらも、あえてそのまま並走を続けた。

「…どうかな？ホセ、さつきお前は欲が未来の人達を滅ぼしたって  
言っただな」

「ああ。人の持つ欲こそが悪であり我々が立ち向かわなくてはならない敵だ」

「確かに欲ってのは危険だ。俺も…そのせいで一度チームを崩壊させちまった。けどな、俺たちがここまでたどり着いたのは強くなりた

「いって欲があったからだ」

「愚かな。その精神こそが未来を滅ぼしたのだ」

「…俺は違うと思うぜ。強くなりたいうって感情が悪いことなんて思わねえ。現に俺はこの感情のおかげでお前らにここまで食い下がる事が出来た」

「だが、その強さを求めた人の欲が破滅を導いたのは事実だ…」

「強さを求めた…か。俺たちとは違うな。俺たちは強くなろうと努力を続けたんだ」

「何が違うというのだ…?」

「例えば俺には C c a p a c A p u や オーガ・ドラグーンみてえな強力なカードがある。だが…そこで俺たちは終わってねえってことさ。強いカードがあるってだけで満足しちまう奴はそこで欲が無くなり、ただ強い力を振るうことしか出来ねえ。それとこれとは明らかに違うだろ?」

「(こやつ…気づいているのか? ワシ達が未だ託すことのできない僅かな希望に…)」

「『欲』っていう漢字を見てみな。谷が欠けるって字だ。どこかで進化をやめちまう奴は谷だ。クラツシユタウンにいたころの俺のようにな。だが…その谷が無くなれば、つまり欲を持ち続ける奴は進化をやめねえ。どこまでいっても満足することはねえんだ。なぜなら進化を続ければさらなる満足が待ってるからだ!」

「満足…だと?」

「ああ。俺たちネオサティスフアクシオンは尽きることはない満足を保持してる! だから絶対に諦めねえぜ俺も、あいつらもな」

「そう言い残し鬼柳は去っていった。」

ホセ LP4000

フィールド 『グランエルT』(攻撃表示) 『ワイゼルA』(守備表示) 『ワイゼルG3』(守備表示) 『ワイゼルC』(守備表示) 『機皇帝ワイゼル∞』(攻撃表示)

セット0 『無限牢』 『無限霊機』 『スカイ・コア』(セット状態)

『ワイズ・コア』(セット状態) 『煉獄龍 オーガ・ドラグーン』



手札4

s c 7

やがて鬼柳の後を任された幸子がピットから出てきてホセのDホイールへと追いついた。

「次はわたくしですわ…!」

「…来たか。全力を持って迎え撃たせてもらおうぞ」

幸子のDホイールとホセのDホイールを∞のマークが囲んでいった。

「ダメージの実体化…。鬼柳によるとラグナロクの神の衝撃も上回っているらしいですね。ですが、それに怯むわたくしではありませんわ!」

「良いだろう。鬼柳の言う通り諦めないというなら叩き潰すのみ!それがワシ達の答えだ!」

「「デュエル!」」

「わたくしのターン、ドロー!」

幸子 s c 1↓2 ホセ s c 7↓8

「わたくしはチューナーモンスター、氷結界の風水師を召喚します!」

「チューナーモンスター…やはり狙いはシンクロか」

青と白が混じった羽衣に身を包んだ風水師がフィールドへと降りる。手には託宣に用いる鏡を持ち、鏡には何かが映し出される前兆である波紋が広がっていた。

氷結界の風水師 攻撃力800

「さらにフィールドに水属性モンスターが存在する時、サイレント・アングラーは手札から特殊召喚することが出来ます!」

鏡に映し出されるのは頭の上に魚を誘う光を照らしているアンコウだった。鏡がその光によって発光し、鏡に照らされた場所にアンコウが出現していた。

サイレント・アングラー 攻撃力800

「わたくしはレベル4のサイレント・アングラーにレベル3の氷結界の風水師をチューニング!氷の槍を身に宿す龍よ、その凍える吐息で幾千の敵を凍らせよ!シンクロ召喚!全てを貫け、氷結界の龍 グン

グニール！」

身体の全てが氷によって覆われたドラゴンがフィールドに飛翔した。

氷結界の龍　グングニール　攻撃力2500

「機皇帝の前にシンクロモンスターを呼び出したか…。だが、そのモンスターで何が出来る？」

「この状況を打破することが出来るのですわ。グングニールの効果を発動！わたくしの手札を2枚墓地へと送ることで相手フィールド上のカードを2枚破壊します！」

「なるほどな。だがワイゼル∞は相手の効果の対象にはならぬ！」

「勿論存じていますわ。わたくしが狙うのはワイゼルG3とオーガ・ドラグーン！機皇帝の呪縛から鬼柳のモンスターを解放して差し上げなさい！」

グングニールが咆哮を上げると天より2つの氷の槍が降下し、1つは機皇帝のパーツを、1つはオーガ・ドラグーンを捕まえていた光の触手を貫いた。

「ぐっ…装備していたシンクロモンスターが場を離れたことでワイゼル∞の攻撃力は下がる」

機皇帝ワイゼル∞　攻撃力5500↓2500

「だがそのシンクロモンスターとワイゼルの攻撃力は同じ。相打ちを狙うつもりか…？」

「いいえ、機皇帝は5つのパーツからなるモンスター。そのパーツを崩していけばいつかは本体を確実に攻略出来ますわ。わたくしが狙うのは…グランエルT！行きなさい、グングニール！」

グングニールは氷の息吹を吐き、パーツを凍らせることで機能を停止させた。

「攻撃表示のグランエルTを狙ってきたか…！」

ホセ　LP4000↓2000

無限霊機　霊機カウンター40↓60

機皇帝ワイゼル∞　攻撃力2500↓2000

「わたくしはカードを2枚伏せてターンエンドですわ！」

幸子 LP4000

フィールド 『氷結界の龍 グングニール』（攻撃表示）

セット2

手札0

sc2

「ワシのターン！」

幸子 sc2↓3 ホセ8↓9

「…来たか。ワシはsp―テイク・オーバーを発動！このカードはscが4以上ある時、カウンターが乗っているカードを1枚破壊するこ  
とが出来る！ワシが破壊するのは…無限霊機！」

「…！プラシドが発動した不気味なトラップカードを破壊した…」

無限霊機が破壊され、乗っていたカウンターがホセの使用したsp  
へと吸収されていく。

「さらに破壊したカードに乗っていたカウンターの数×100ポイント  
のライフを回復する！」

「無限霊機に乗っていた霊機カウンターは60…！」

「よってワシが回復するライフは6000だ」

ホセ LP2000↓8000

「何てこと…」

「そして海野よ。お前は過ちを犯した。機皇帝の前にシンクロモンス  
ターを残すという過ちをな。ワイゼルの効果を発動する！グング  
ニールを吸収せよ！」

三度ワイゼルの胸部から光の触手がうなり出て、グングニールを絡  
め取ろうとした。

「…わたくしは彼らと共にいて学んだことがあります。何だと思いま  
す？」

「…知らぬな。ワシの知ったことではない」

「わたくしが学んだのは力がある者はその力を力の無い者に貸すべき  
ということですよ」

「…ふ。自らが力のある者だと？」

「いいえ。ネオサティスファクションのメンバーで天に浮かんでいる

であろうアーククレイドルを視認できないのはわたくしのみ。力が無いのはわたくしの方ですわ」

「それならばお前が学んだことは生かせそうにないな。そろそろワイゼルがグングニールを吸収し終える頃だ…」

「それはどうかしらね?」

「何?」

氷の竜はロボットの光の触手に絡め取られた瞬間に異次元へと繋がる裂け目へ吸い込まれてしまい、触手は空を切るようになってしまった。

「一体何が…。むっ!?この力は…!」

「わたくしに力が無いのならば…今度はわたくしが貸してもらおうとしましょうか。その力を」

異次元の裂け目から今度はあるドラゴンが突き破るように飛び抜け、機皇帝の前に降り立った。

煉獄龍 オーガ・ドラグーン 攻撃力3000

「なん…だと…。何故そのドラゴンがお前の場にいるのだ!」

「わたくしはワイゼルがグングニールを吸収しようとした瞬間にこのカードを発動していました。トラップカード、竜の転生をね。このカードはわたくしの場のドラゴン族モンスターを除外することで手札または墓地のドラゴン族モンスターを特殊召喚することが出来ますわ」

「機皇帝の吸収を躲し、なおかつ鬼柳が神に与えられたドラゴンを呼び戻しただと…!」

「これがわたくしなりの足掻きですわ!さあ、どうします?」

「ならば…スピード・ワールド2の効果を発動!s cを7つ取り除くことでカードを1枚ドローする!」

ホセ s c 9 ↓ 2

「このカードならばオーガ・ドラグーンを破壊することが…!」

「s pでの突破を図ろうとしているのならばやめておいた方が賢明ですわよ?」

「何…?」

「忘れたわけでは無いでしょう。オーガ・ドラグーンは1ターンに1度、相手が発動した魔法または罠カードの発動を無効にして破壊出来ますわ!」

「だがそのためには手札が0枚でなければならぬ!…まさかここまでの展開を読んでいたのか」

ホセはある事実に気づいた。それは…幸子がハンドレス状態であるということ。

「ハンドレスは鬼柳だけの特権ではありませんのよ?もともと本場のハンドレスコンボには敵いませんが」

「くっ…ワシはワイゼル∞を守備表示に変更し、カードを1枚伏せてターンを終了する!」

機皇帝ワイゼル∞ 守備力2000

ホセ LP8000

フィールド 『ワイゼルA』(守備表示) 『ワイゼルC』(守備表示)

『機皇帝ワイゼル∞』(守備表示)

セット1 『無限牢』 『スカイ・コア』(セット状態) 『ワイズ・コ

ア』(セット状態)

手札5

sc2

「わたくしのターン!」

幸子 sc3↓4 ホセ sc2↓3

「わたくしは場にカードを1枚伏せ…バトルですわ!頼みましたわ、オーガ・ドラグーン!ワイゼル∞を攻撃なさい!」

赤黒く染まった煉獄より生まれし竜は獄炎のブレスを吐き出し、ワイゼルを炎で包み込んだ。

「まさか…力を持たぬ者に機皇帝が破壊されるとは」

炎は本体を含めた全てのパーツを燃やし尽くし、跡形もなく焼け尽くした。

「くっ、凄まじい衝撃だ…!」

ドラゴンが与えた衝撃は大きく、ホセはロボット故に痛みは感じないが衝撃の大きさは十二分に感じ取っていた。

「機皇帝を突破しましたわ……！わたくしはこれでターンエンドです！」

幸子 LP4000

フィールド 『煉獄龍 オーガ・ドラグーン』（攻撃表示）

セット2

手札0

sc4

「ワシのターン……まさかこいつをここで解放せねばならぬとはな」

幸子 sc4↓5 ホセ sc3↓4

「ワシはグラランド・コアを召喚する！」

「3つ目のコア……あれがグランエルを呼び出すキーカード！」

茶色に染まった球体が場に現れる。

グラランド・コア 攻撃力0

「そしてリバースカードを発動させてもらおう。トラップカード、ハイレート・ドロー！自分フィールド上のモンスターを全て破壊し、破壊した機械族モンスターの数だけカードをドローする」

ホセの場にブラックホールが発生し、球体を飲み込もうとした。た。

「コアモンスターを破壊させるわけにはいきかないですわ！オーガ・ドラグーンの効果を発動します！ハイレート・ドローの発動を無効にし……破壊します！」

オーガ・ドラグーンが衝撃波を発生させるとブラックホールへと放ち、ブラックホールを消滅させてしまった。

「だがその効果も1ターンに1度まで！手札からSPハイスピード・クラッシュを発動する。scが2以上ある時、互いのフィールドのカードを1枚ずつ破壊する！」

「く……！」

「ワシが破壊するのはグラランド・コアとこちらから見て右側に伏せられたカードだ！」

2人の場に速度制限を無視した車がそれぞれのカードに突っ込み、爆風と共に破壊してしまった。

「グラント・コアが破壊されたことでその効果が解放される！デツキ・手札・墓地のいずれかからグランエルを形成するパーツを呼び出すことが出来る」

「グランエル…。一体どんなモンスターが来るといふの…？」

4つのパーツが本体の機皇帝グランエル∞を中心として合体していき、1つのロボットとして姿を現した。

グランエルT 守備力500

グランエルA 守備力0

グランエルG 守備力1000

グランエルC 守備力700

機皇帝グランエル∞ 攻撃力0

「なんて巨大なロボット…。やはりステータスはパーツの攻撃力の合計で決定するのでしょうか？」

「ふふ…。グランエルは他の機皇帝と一線を画した存在だ。グランエルの攻撃力・守備力はパーツモンスターに左右されず、ワシのライフの半分の数値となる！」

「…！まさかさつきライフを回復したのは?!」

「このモンスターのため…というわけだ」

機皇帝グランエル∞ 攻撃力0↓4000

「攻撃力4000…！しかもワイゼルが破壊された後すぐさま呼び出して来るとは…」

「まさかワイゼルが破壊されてしまうとは思わなかったが…ワシの機皇帝グランエルで勝利を確実に掴むとしよう。グランエル∞の効果発動！再び煉獄龍 オーガ・ドラグーンを取り込ませてもらうぞ！」

グランエルの胸部から光の触手が伸びていき、オーガ・ドラグーンを内部へと取り込んでしまう。

「そしてグランエル∞の攻撃力は取り込んだシンクロモンスターの攻撃力分だけ上昇する！」

機皇帝グランエル∞ 攻撃力4000↓7000

「くう…！攻撃力7000なんて…」

「一矢報いたその足掻き見事だった。だが、もはや防ぐ術はないだろ

う。このままではグランエルの衝撃がダイレクトアタックによって直接襲い掛かり、お前は致命的なダメージを負う。悪いことは言わない、サレンダーを勧めよう」

「…断りますわ。わたくしたちは絶対に諦めることはしません」

「…そうか。ならば潔く散るがいい！ワシはカードを1枚伏せる。バトルだ！グランエル∞で海野へとダイレクトアタック！グラント・スローター・キャノン！」

シンクロモンスターのエネルギーを取り込んだグランエルが胸部にエネルギーを貯めていく。やがて溜まりきったエネルギーは1つの弾となり砲弾となって幸子を襲った。

「つぐ…!?きやあああ！」

幸子 LP4000↓0

幸子のDホイールが多大な衝撃を受け、宙に浮いてしまう。抵抗を失い、横からの衝撃に耐える術がなくなった彼女のDホイールはレーンを外れてしまった。さらに運が悪いことに彼女たちが走っていたレーンはちょうど海上レーン。レーンを外れた彼女のDホイールが向かった先は——海。

「愚かな選択をしたものだ…」

ホセは海へと落ちていく幸子を見ながらそう呟いた。



## 今こそ一つに

ホセの操る3体目の機皇帝、グランエルが幸子の前に現れた。グランエルは鬼柳の力である煉獄龍 オーガ・ドラグーンを吸収し、無防備な幸子に向かって無慈悲な一撃を浴びせ、幸子をDホイールごと海上レーンの外へと飛ばしてしまったのだった。

「あの女は終わりだな。俺のワイゼルを葬った罰だ」

「ホセのグランエルは僕たちの機皇帝とは比べ物にならないパワーがあるからね。あの女じゃ衝撃に耐えられないのは当然だね！」

海へと放り出された彼女はDホイールから投げ出されそうになるも、ハンドルを強く握り体勢を持ち直した。だが、当然Dホイールはそのまま海面へと向かっていく。

「まずいぞコナミ！ あんな高さから海へと叩きつけられたら…！」

「Dホイールが木っ端微塵に砕けて、幸子もタダじゃすまねえ…！ くそっ！」

とつさにコナミはピットから出て行き、幸子の方へと走り出す。

「…ダメだ。この距離じゃどう足掻いても助けらんねえ！」

しかし、海上レーンは遙か先にありとても間に合いそうにない。コナミはその場で膝を折ってしまう。

「俺の馬鹿野郎…！ 幸子は精霊も何も持ってねえ。危険なことくらい少し考えれば分かったじゃねえか！ なのに俺は機皇帝の対策ばかりに気を取られて…！」

コナミは拳を強く握りしめ、地面を思い切り叩いた。彼の手からは爪が皮膚に刺さったことで血が流れていたが、それを気にする様子はない。なかつた。

「…おかしい。何故聞こえぬ」

一方ホセは違和感を感じていた。彼は落ちていく彼女を見て口ポットであることを生かし、聴覚を研ぎ澄ませた。しかし、彼にはある音が聞こえなかった。そう…彼女が水に落ちる音が。

「しかもこの音は…」

その代わりに彼に聞こえていたのは…モーメントのエネルギーが

回転する音だった。

「力を持たないわたくしが何の策も無しに戦いに赴いたと思いませんか？」

「何!？」

どこからか聞こえて来た声にホセは後ろを見る。しかし、そこには誰もいない。左にも右にも、勿論前にもいない。

「…まさか」

ホセはモーメントの音を頼りに彼女を発見した。

「ふふ…わたくしは無事ですわ」

彼女はホセの上に陣取り、空飛ぶDホイールに跨っていた。

「何だと…!？」

「わたくしの財閥…海野財閥はDホイールを製造していますの。このDホイールにはわたくしの財閥が開発中の機能を施させていたのですわ。本来動力として用いるモーメントのエネルギーを下に向かって噴射することで空を飛ぶことを可能にする機能を…ね」

「…その機能を使うことで海面への衝突を避けていたということか」「そういうことです。さて、バトンを庶民へと繋げるとしましょうか」幸子はDホイールを操り、ピットへと戻っていく。しばらくすると地面にへたりこんでいるコナミの姿が見えた。

「幸子！良かった…。無事だったんだな！」

「当然ですわ。それより早くピットに戻りなさいな！まだ戦いは終わっていませんのよ！」

「…おうー」

コナミは立ち上がり、ピットへと戻っていった。

ホセ LP8000

ホイールD 『グランエルT』<sup>トップ</sup>(守備表示) 『グランエルA』<sup>アタック</sup>(守備

表示) 『グランエルG』<sup>ガード</sup>(守備表示) 『グランエルC』<sup>キャリア</sup> 『機皇帝グ

ランエル<sup>インフイニティ</sup> ∞ 『

セット1 『無限牢』 『スカイ・コア』(セット状態) 『ワイズ・コ

ア』(セット状態) 『煉獄龍 オーガ・ドラグーン』

手札4

コナミは鬼柳と幸子によって繋げられたバトンを受け取り、ピットから出ていき、ホセへと追いついた。

「行くぜ……あいつらの思いは無駄にはしねえ！」

「お前達に教えてやろう……。希望とは絶望にしか繋がらないものだということを！」

「「デュエル！」」

デュエルのダメージを実体化させてしまう∞のマークが2人を囲い、互いのラストホイーラー同士の戦いが幕を開けた。

「俺のターン、ドロー……こいつは」

コナミ SC5↓6 ホセ SC4↓5

「そうだ……。俺は一人で戦ってるんじゃない。俺を支えてくれた仲間と共に戦ってるんだ！行くぜ、ホセ！」

「来るがいい」

「俺はプロト・サイバー・ドラゴンを召喚する！」

部品の一つ一つが銅線によって結ばれた小型の機械龍が現れた。

プロト・サイバー・ドラゴン 攻撃力1100

「こいつはフィールドにいる限りサイバー・ドラゴンとして扱われるぜ！」

機械龍の後ろに出来た影が大きくなっていき、影だけならばサイバー・ドラゴンそのものとなった。

「そんなモンスターで何が出来る。私の場には攻撃力7000の機皇帝グランエル∞がいるのだぞ！」

「こいつは相川から譲り受けた魂のカードだ……。こいつでグランエルを倒してみせる！行くぜ！俺はサイバー・ドラゴンを使って融合召喚を行う！」

「何？」

フィールドに渦が発生し、サイバー・ドラゴンを取り込んでいった。

「融合召喚は2体以上のモンスターと融合のカードが必要な召喚方法のはずだが……？」

「ああ、そうだぜ。だけどサイバー・ドラゴンはフィールドの機械族モ

ンスターを取り込み、融合カード無しで融合召喚を行うことが出来る！俺はサイバー・ドラゴンと…機皇帝グランエルの5体のパーツを融合する！」

「馬鹿な…!?!」

「サイバー流融合召喚！来てくれ…キメラテック・フォートレス・ドラゴン！」

機皇帝が渦の吸引力に負けてオーガ・ドラグーンを解放し、吸い込まれていく。サイバー・ドラゴンと機皇帝が一つとなり、6つ首の機械龍が生まれ出でた。

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力0

「ワシの機皇帝を使った融合…だと?」

「そうだ！これが相川から受け取った力だ…！そしてキメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃力は融合に使用したモンスターの数×1000になる！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻撃力0↓6000

「こんなことが…」

「バトルだ！キメラテック・フォートレス・ドラゴンでホセにダイレクタアタック！エヴオリュション・リザルト・アーティレリー！」

機械龍の6つの口からそれぞれエネルギー弾がホセに向かって放たれた。その威力は凄まじく、着弾すると爆風を引き起こした。

「…やったのか?」

次第に爆風が晴れていき、ホセの姿が見えるようになった。

「…だが、この程度か」

ホセの周りには障壁が張られており、傷が1つも付いていなかった。

ホセ LP8000↓14000

「な…!?!ライフを削るどころか回復しただど!?!」

「ワシはお前が攻撃を宣言した時にトラップカード、ドレインシールドを発動していた。このカードの効果により、キメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃を無効にし、その攻撃力分ライフを回復したのだ」

「キメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃力が逆に吸収されちまったのか…！」

コナミは一万を超えたライフを見て僅かにたじろいだ。だが、グランエルを倒したことはないと思ひ直し、気を持ち直した。

「俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』（攻撃表示）

セツト4

手札2

sc6

「ワシのターン、ドロー」

コナミ sc6↓7 ホセ sc5↓6

「何にせよ、グランエルは倒したぜ！それにキメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃力なら3ターンあれば削りきることも出来る！」

「…コナミよ。お前はまだ知らない。真の絶望というのがどれ程のものなのかを！ワシは無限牢の効果を発動する！手札を1枚墓地へ送ることで墓地のレベル4以下のモンスター、グラウンド・コアを魔法扱いでセツトする！」

墓地から茶色の球体が掴み出され、牢の中へと入れられた。

「一体何を…？」

「さらにワシはs pスピードスベル一起爆化を発動する！このカードはscが2以上ある時、自分フィールドにある魔法または罠カードを1枚破壊することで相手フィールドのモンスターの表示形式を全て変更する！」

「…あつ！まさか！」

「ワシが破壊するのはグラウンド・コアだ！」

グラウンド・コアが爆発し、コナミのフィールドに爆風が吹き荒れる。風に耐えきれなくなった機械龍は地に伏してしまった。

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 守備力0

「キメラテック・フォートレス・ドラゴンが守備表示になっちまった！しかもグラウンド・コアが効果で破壊されたってことは…！」

「絶望は何度でも私たちの前に現れる！戻れ、機皇帝グランエル！」

5つのパーツが再びフィールドへと戻り、本体の機皇帝グランエル∞を中心として合体し一つのロボットとなった。

グランエルT 守備力500

グランエルA 守備力0

グランエルG 守備力1000

グランエルC 守備力700

機皇帝グランエル∞ 攻撃力0

「倒したと思ったのに戻って来やがった!」

「そして機皇帝グランエル∞の攻撃力はワシのライフの半分の数値分上昇する!ワシのライフは14000!よって…」

グランエルはホセから受け取ったエネルギーによって巨大化していき、力を高めていった。

機皇帝グランエル∞ 攻撃力0↓7000

「さっきみたいにシンクロモンスターを吸収してない状態で攻撃力7000!?!」

「喰らうがいい!バトルだ。機皇帝グランエル∞でキメラテック・フォートレス・ドラゴンへと攻撃!グランド・スローター・キャノン!」

グランエルは蓄えたエネルギーを一点に集中させ、砲弾を撃つかのように機械龍へと放った。その衝撃は機械龍を貫いてコナミへと向かっていった。

「させません!」

「エンシエント・ホーリー!?!」

精霊のドラゴンはコナミを自身の翼で覆うことで衝撃を最小限に抑えた。

「助かったぜ…。これでこのターンの攻撃は受け切った!」

「それはどうだろうな…?ワシはグランエルAの効果を発動する!∞モンスターが守備モンスターを戦闘で破壊した時、そのモンスターをもう1度攻撃させることが出来る!グランエルの力をその身に受けるがいい!」

「なに?!?!」

再びグランエルが動き出す。今度はコナミに直接狙いを定めてエネルギー弾を放った。

「私と銀龍が力を合わせてもこの衝撃は防ぎきれません……！」

「トラップ発動、ガード・ブロック！この戦闘で発生するダメージを0にし、俺はカードを1枚ドロウする！」

コナミを不可視の障壁が囲い、グランエルの砲弾を弾き、僅かにそらすことで被害を免れた。

「何とかこのターンは凌いだか。ワシはカードを1枚伏せてターンを終了する」

ホセ LP14000

フィールド 『グランエルT』(守備表示) 『グランエルA』(守備表示) 『グランエルG』(守備表示) 『グランエルC』(守備表示) 『機皇帝グランエル∞』(攻撃表示)

セット1 『無限牢』 『スカイ・コア』(セット状態) 『ワイズ・コア』(セット状態)

手札3

sc6

「俺のターン！」

コナミ sc7↓8 ホセ sc6↓7

「この状況を突破するには……。頼むぜ」

コナミは先ほど自分を衝撃から守ってくれたドラゴンを見上げる。エンシエント・ホーリーはこちらを向くと無言で頷いた。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する時、レベル・ウオリアーはレベル4として特殊召喚することが出来る！さらに俺はチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを召喚！」

星が描かれた仮面を被った戦士が参上し、その周りを背中に小さな羽を生やした天使が舞った。

レベル・ウオリアー 攻撃力300

トラスト・ガーディアン 攻撃力0

「…シンクロか」

「そうだ！俺はレベル4のレベル・ウオリアーにレベル3のトラスト・

ガーディアンをチューニング！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

白く長い胴体を持ったドラゴンが機皇帝と向かいあうように現れた。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100

「融合召喚の次は精霊のモンスターか……」

「頼んだぜ、エンシエント・ホーリー！エンシエント・ホーリーは俺のライフが相手より下回っている時、その分攻撃力を下げる！」

「何……？」

長い胴体が見る見るうちに短くなっていき、トカゲのような姿になってしまう。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓0

「行くぜ、バトルだ！」

「何を企んでいるのかは知らぬが……。お前はグランエル∞に触れることは出来ない！グランエルのパーツは全てが特殊能力を持っている。グランエルGは自身への攻撃誘導、グランエルCは1ターンに1度だけ自身のモンスターの戦闘破壊を無効にすることが出来る！」

「そうだったのか……。だけどGモンスターの対策が役に立ってくれそうだぜ！トラップカード、ゴーゴンの眼を発動！」

コナミのトラップから出て来た目玉がグランエルを睨むと、本体を除く全てのパーツが石化してしまった。

「これは……」

「ゴーゴンの眼はこのターンだけ守備表示で存在するモンスター全ての効果を無効にすることが出来る！これで障害は無くなったぜ！エンシエント・ホーリーで機皇帝グランエル∞に攻撃！」

「だがそんなものは自殺行為だ！」

「そうでもないぜ……。トラップ発動、あまのじやくの呪い！このターン攻撃力を下げる効果は上がる効果に、上がる効果は下げる効果へと変わる！」

「何だど!？」



時空が歪んでトカゲのように小さくなっていたエンシエント・ホーリーは巨大化していき、機皇帝グランエルはその巨大な体が石化したパーツごと崩れていった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力0↓12100

機皇帝グランエル∞ 攻撃力7000↓0

「グランエルの弱体化だけでなく攻撃力10000を超えるモンスターを生み出すとは……!」

「これでグランエルを倒すことが出来る!エンシエント・ホーリー、エターナル・ライフ!」

エンシエント・ホーリーが翼を広げると光がグランエルを包み込み、光が消えて行くと共にグランエルも消えていた。

「ぐおおっ!?!」

光はホセにも伸び、Dホイールと一体化しているホセといえどもバランスを崩しかけてしまうほどの衝撃が走った。

ホセ LP14000↓1900

「やったぜ!エンシエント・ホーリー!俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。ここであまのじやくの呪いが消える!」

歪んでいた時空が消え、覆っていた概念も元へと戻った。

「そしてエンシエント・ホーリーの効果だ!相手よりライフが上回っている時、その差分の数値を攻撃力に加える!」

エンシエント・ホーリーの胴体がさらに伸びていき、ホセの前に巨大な壁のように立ちふさがった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓4200

「これほどの力を持つていたとは……鬼柳に気を取られて見誤ったか」

コナミ LP4000

フィールド 『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』(攻撃表示)  
セット2

手札1

「ワシのターン……やむを得ないか」

コナミ sc8↓9 ホセ sc7↓8

「ん?Dホイールから立ち上がった……一体何を?」

「コナミ、今こそ見せよう。我らの本当の姿を！」

「本当の…？Dホイールと合体するのが最終形態じゃないのかよ…!?」

プラシドが腰にさしていた剣を振るうと時空に裂け目が生まれた。その裂け目を通り、ルチアーノとプラシドはホセの元へとたどり着いた。

「おせーよ、ホセ。さっさとやるぞー！」

「僕も忘れないでよね！」

突然光が彼らの周りを包み込む。部品が組み込まれるような機械音が響き渡り、彼らのDホイールもそれに伴い変形していった。

「何だ…!?!」

光が収まり、そこにいたのは僅か一人の人物。プラシドの面影がやや残っているが、ほぼ別人のようなロボットがドラゴンを模したDホイールと合体していた。

「…意外だな。私たちの見立てでは私が現れた時に前にいるのは不動遊星のはずだったが」

「お、お前は誰だ…?」

「私はアポリア。3つの絶望により生み出されし者。ルチアーノ、プラシド、ホセは私の記憶によって生み出された。私は未来を変えるために必ず貴様を倒す！」

「…3人が合体してフルパワーで来るってことか！だけど俺にはエンシエント・ホーリーがいる。そしてフィールドにはもう機皇帝はいねえ！グランエルもそう簡単には呼び戻せねえだろ！」

「甘いな。私は無限牢の効果を発動し、グラント・コアを魔法カード扱いでセットする！」

再び牢の中に茶色の球体が放り込まれていった。

「まさかさつきみてえに…!」

「いいや、私は無限牢のさらなる効果を発動する！このカードを墓地に送ることでこのカードの効果でセットしたモンスターを手札へと戻す！」

3つの球体が牢から解放され、アポリアの手中へと収まった。

「コアモンスター3体を手札に加えただと……！」

「貴様に見せてやろう。私の真の切り札をな！トラップ発動、機皇創世！私の手札よりスカイ・コア、ワイズ・コア、グランド・コアの3体を墓地へ送る！これによりデツキから最強の機皇帝を呼び出すことができる！」

「何だど!?機皇帝は3人の持つ3体で全部じゃねえのかよ……！」

「三つの絶望よ、新たな最強の力を降臨させよ！現れよ、機皇神マシニクル∞・キュービツク！」

コアモンスターが集結していき、一つのコアを形成する。そのコアを中心に部品が形成されていき、エンシエント・ホーリーに並ぶほどの巨大なロボットが出来上がった。

機皇神マシニクル∞・キュービツク 攻撃力4000

「これが……あいつらの切り札。グランエル以上の威圧感だ……！」

「新たな機皇帝……。後は頼みます、コナミ」

「……エンシエント・ホーリー……」

「私はマシニクルの効果を発動する！このモンスターも当然シンクロキラー……精霊の力を取り込め！」

マシニクルから光の触手が伸びていき、エンシエント・ホーリーを絡め取った。マシニクルはエンシエント・ホーリーを内部に取り込むとその力を吸収した。

機皇神マシニクル∞・キュービツク 攻撃力4000↓6100

「やっぱりシンクロモンスターを吸収する効果は健在か……！」

「当然だ。そして貴様の場にはモンスターはいない。終わりだ！私はマシニクルでコナミへとダイレクトアタック！ザ・キューブ・オブ・デイスペアー！」

マシニクルは2つの足となるパーツを用いてコナミに急接近する。その勢いを殺さず、腕に当たるパーツをコナミに向けて思い切り振り下ろした。

「させるか！トラップ発動、カウンター・ゲート！俺へのダイレクトアタックを無効にし、カードを1枚ドロウする！」

マシニクルの放った重いパンチはコナミの前に出現したゲートの

中に入り込み、空振りに終わった。

「ちつ：小手先の策で凌いだか」

「まだまだ！この効果でドロ―したモンスターが通常召喚出来るならそいつを攻撃表示で召喚出来る！行くぜ、ドロ―！」

コナミがカードを引くと、ゲートからまばゆき光が放たれた。

「俺が引いたのはレベル1のダーク・バグ！こいつを召喚だ！」

ゲートからは紫色に染まったブロックが出てきたかと思うと、ブロックから7本の虫の足が生えてきた。

ダーク・バグ 攻撃力100

「さらにダーク・バグは召喚に成功した時、墓地のレベル3のチューナーを特殊召喚する事ができる！戻ってこい、トラスト・ガーディアン！」

ダーク・バグが足を地面へと突き刺すと地面の一部に小さな穴が空く。その穴を通り、天使はフィールドへと舞い戻った。

トラスト・ガーディアン 守備力700

「足掻くか。だがそれもいつまで持っただろうな。私はこれでターンを終了する！ここでマシニクルの効果を発動する！コストとして装備していたエンシエント・ホーリー・ワイバーンを墓地へと送る！」

「何!?!」  
マシニクルは取り込んでいたエンシエント・ホーリーを解放する。しかし取り込んでいたエネルギーを失ったことで弱体化してしまった。

機皇神マシニクル∞・キュービツク 攻撃力6100↓4000

「わざわざ攻撃力を下げてまで何を…!?!」

「マシニクルはエンドフェイズに装備していたシンクロモンスターを墓地へ送ることで相手にそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！」

「…!」

解放されたエンシエント・ホーリーは弾丸のような速さでコナミへと放たれていた。

「エンシエント・ホーリーの攻撃力は2100。喰らうがいい！」

「コナミ……！」

コナミへと向かうエンシエント・ホーリーが苦悶の表情をする。自分の力がコナミに向かってしまう事が何よりも悔しく、苦しかったからだ。

「…エンシエント・ホーリーにそんなことはさせない！」

「何？」

コナミの前に無数の小さなモンスターが現れ、エンシエント・ホーリーを受け止めた。

「手札のクリアクリボーを墓地に捨てることで相手が発動した効果ダメージを与えるモンスター効果の発動を無効にする事ができる！」

「く……これも躲すだと！」

エンシエント・ホーリーはクリアクリボーに受け止められ、与えられていた勢いもなくなり地面へと沈んでいった。

「ありがとう…コナミ」

「いいってことよ！墓地で休んでな！」

「…だが、これで貴様の手札は0。ハンドレスを扱う鬼柳ならいざ知らず、貴様ではもはやどうすることもできまい。ターンエンド」

アポリア LP1900

フィールド 『機皇神マシニクル∞・キュービツク』（攻撃表示）

セット0

手札3

sc8

「俺のターン、ドロロー！これで俺のscは…」

コナミ sc9↓10 アポリア sc8↓9

「ふ…貴様の取ろうとする作戦など手に取るようにわかるぞ。大方スピード・ワールド2の効果でscを10個取り除き、フィールドのカードを1枚破壊する効果を使おうとしているのだろう」

「バレてたか…。ただどお前に伏せカードは無い！これは防げねえだろー！」

「甘いぞ！最強の機皇帝…その力を見くびるな！マシニクルは自身の破壊を墓地から1体、T・A・G・Cのいずれかのパーツを取り除く

「ことで免れる事ができる！」

「何…!? お前の墓地のパーツモンスターは全部で8体もいるじゃねえか…！」

「そう、もはや貴様はこの絶望から逃れることは出来ないのだ！ 諦めるんだな！」

マシンクルが一つ足を踏み出すだけで地面を通して衝撃がコナミへと伝わってきた。

「鬼柳も幸子も言ってただろ…？ 俺たちは絶対に諦めねえ！ 俺はダーク・バグをリリースしてガジェット・ソルジャーをアドバンス召喚する！」

背中に重火器を背負ったロボットがダーク・バグと入れ替わるように出てきた。

ガジェット・ソルジャー 攻撃力1800

「足掻けば足掻くほど絶望の味は濃くなる…愚かな選択だ」

「それはどうかな？ 俺にはまだ希望があるぜ！ 俺はレベル6のガジェット・ソルジャーにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！ 白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！ シンクロ召喚！ 降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

「やはりシンクロか…」

澄んだ青い瞳を持つドラゴンが白く透き通った翼を羽ばたかせ、フィールドに飛翔した。

蒼眼の銀龍 守備力3000

「そのようなモンスター、次のターンで…！」

「銀龍が特殊召喚に成功したことで効果発動！ 次の相手のエンドフェイズまで銀龍は効果の対象にならず、効果では破壊されない！」

「マシンクルの効果を逃れたか…！」

銀龍の翼が半透明のヴェールによって覆われていき、天からの加護で敵から身を守る力を入れた。

「俺は…これでターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示）

セット1

手札0

sc10

「私のターン！」

コナミ sc10↓11 アポリア sc9↓10

「奴のモンスターはマシニクルの効果もスピード・ワールド2の効果も受け付けないか……。だが、私はマシニクルの最後の能力を解放する！」

「まだ効果があるのかよ……！」

「手札のT・A・G・Cと名のつくモンスターを墓地に送ることでマシニクルにその効果を与える事ができる！私は手札からグランエルA、ワイゼルA3の2体のパーツを墓地に送る！」

マシニクルがパーツを取り込み、さらに能力をチューンアップさせた。

「バトルだ！マシニクルで蒼眼の銀龍へと攻撃！ザ・キューブ・オブ・デイスペアー！」

マシニクルは空中へと逃れようとする銀龍に対して足部に取り付けられたジェットを噴射することで追いつき、右翼を狙って拳を振り下ろした。

「マシニクルに与えられたワイゼルA3の効果により∞モンスターが守備モンスターへと攻撃しその数値を上回っていた時、超過分のダメージを相手へと与える！」

「く……！トラスト・ガーディアンの効果を発動！このカードをシンクロ素材にしたモンスターは1ターンに1度戦闘では破壊されねえ！」  
「だがダメージは免れない！」

右翼へと直撃した拳によって銀龍は痛みを覚え、バランスを崩し墜落する。

コナミ LP4000↓3000

「くっ！トラスト・ガーディアンの効果で銀龍は破壊されねえ！この効果が適用されたことで銀龍の守備力は400ポイントダウンする……！」

銀龍は天使の助けによって体勢を持ち直し、再び羽ばたこうとする。

蒼眼の銀龍 守備力2600

「それで凄いだつもりか。私はマシンニクルに与えられたグランエルAの効果を発動する！守備モンスターに攻撃した時、連続攻撃を可能とする！」

「しまった…！」

再び羽ばたこうとする銀龍に対してマシンニクルは容赦のない一撃を浴びせ、銀龍を地面へと叩き落としてしまった。

「ぐああっ!？」

コナミ LP3000→1600

「これで貴様の希望とやらは消え去った。それでもまだやるというのか？」

「当たり前…前だ。俺のライフはまだ0になってねえ…！」

衝撃をまともに受けたことでコナミの頭部からは血が流れ、身体もボロボロになっていた。

「そうか。だが私のscは10。私の手札にspがあればスピード・ワールド2の効果によって貴様は終わりだな」

「く…いや、鬼柳や幸子がオーガ・ドラグーンを使ったことでお前はspを多く使っちゃった…！手札にspは無い…はずだ！」

「…忌々しいがその通りだ。私の手札にspは無い。だが、次のターンに引けばその時点で貴様の敗北だ」

「く…！」

「最もマシンニクルにはグランエルAやワイゼルA3の効果が適用されている。仮にspを引けなかったとしても守備固めは通用しない」

「絶体絶命ってわけか…！」

「この状況に希望などあるまい。サレンダーでもして楽になれ…！」

「希望は…ある！鬼柳や幸子たちが必死になってバトンを繋いだ！俺がそのバトンをここで手放すわけにはいかねえ…！」

「貴様らは何故それほどまでに希望に縋るのか…理解に苦しむな。私はカードを1枚伏せてターンエンドだ」



アポリア LP1900

フィールド 『機皇神マシニクル∞・キュービツク』（攻撃表示）

セツト1

手札1

sc10

「アポリアの言う通り俺に残された猶予はもうねえ…。ここで勝負を仕掛けるしかねえ！俺のターン…ドロー！」

コナミ sc11↓12 アポリア sc10↓11

「俺はスピード・ワールド2の効果を発動する！scを4つ取り除くことで手札のsp1枚につき、800のダメージを与える！俺の手札には1枚だ！」

コナミのDホイールからアポリアへ衝撃波が放たれた。

コナミ sc12↓8

「成る程。その効果を3回使用すればライフを0にすることができわけか。だがその程度の策を読んでいないと思ったか？トラップ発動、エネルギー吸収板！相手が私にダメージを与える効果を発動した時、私はダメージを受ける代わりにその数値分のライフを回復する！」

「…！」

衝撃波はアポリアの前に出現した板に吸収され、衝撃はエネルギーに変換されアポリアに命の源をもたらした。

アポリア LP1900↓2700

「最後の足掻きも無駄だったな」

「へっ、これで終わるわけはねえとは思っていたさ」

「何だと？」

「俺には幸子が残してくれたカードが1枚残ってる…。俺はこのカードに全てをかける！」

「ハツタリを…！」

「ハツタリかどうか…その目で確かめな！トラップ発動、貪欲な瓶！墓地のカードを5枚デッキに戻すことで俺はカードを1枚ドローする！俺が戻すのはプロト・サイバー・ドラゴン、キメラテック・フォール

トレス・ドラゴン、エンシエント・ホーリー・ワイバーン、蒼眼の銀龍。そして：煉獄龍 オーガ・ドラグーン！」

「3体のシンクロモンスターを戻したか…。同じだな。シンクロモンスターのみばかりを求め、貴様らは破滅する！」

「いや、違うぜ。このドローでシンクロモンスターだけの力だけで満足しない、さらなる高みを目指してみせる！」

「ほう？面白い冗談だな！良いだろう。見届けてやろう」

コナミはデッキとエクストラデッキにそれぞれのカードを戻し、デッキトップに指をかけた。

「…ドロー！」

コナミは引き抜いたカードを横目で見る。それはまさしく彼が求めていたカードだった。

「…行くぜ、アポリア！俺は手札からs p | シンクロ・パニックを発動する！このカードは俺のs c が7以上ある時に発動出来る。効果で俺たちがこのデュエル中に呼び出したシンクロモンスターと同名のモンスターをエクストラデッキから可能な限り特殊召喚する事ができる！」

「何だと…!？」

「来てくれ、エンシエント・ホーリー！蒼眼の銀龍！」

空中に裂け目が現れ、光に包まれた2体のドラゴンが飛び出して来た。

「そして…！」

「…！この力は…!？」

「天国と地獄の間…煉獄よりその姿を現せ、煉獄龍 オーガ・ドラグーン！」

その2体のドラゴンについて行くように赤黒い体をしたドラゴンが姿を見せた。

「馬鹿な…ファーストホーリーの鬼柳が呼び出したシンクロモンスターをラストホーリーである貴様が呼び出しただど!？」

3体のドラゴンがコナミの周りに飛翔し、咆哮を上げた。

「これが鬼柳、そして幸子が俺に繋いでくれた絆のバトンだ！」

「くっ…黙れ！こんなものはまやかしだ！シンクロ・パニックにはもう1つ効果がある！この効果で呼び出したモンスターの攻撃力は0になり、効果も無効となる！」

ドラゴン達は戦いの疲れにより、羽ばたきをやめて地面へと着陸した。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力0

蒼眼の銀龍 攻撃力0

煉獄龍 オーガ・ドラグーン 攻撃力0

「むしろこれは成れの果てではないか…！力ばかりを求めた欲深き人々がたどり着いた末路！シンクロモンスターがもたらす破滅の象徴だ！」

「確かに今は3体とも力を失っちまっている。だが、何もシンクロモンスターが1体1体で戦う必要なんてねえ。俺は…3体の力を一つに束ねる！今まで俺たち3人が力を合わせて戦ってきたように！」

「な…!?」

ドラゴン達のエネルギーが一点に集まっていく。その中心には小さなモンスターが1体。しかしエネルギーを吸収していき、少しずつ大きくなっていった。

「俺はフィールドの3体のシンクロモンスターをリリースし、このモンスターにその力を託す！古より封印されし悪魔よ、3体を合わせた力をその身で具現せよ！来てくれ…真魔獣ガーゼット！」

蒼眼の銀龍の白銀の翼、エンシエント・ホーリー・ワイバーンの長き胴体、煉獄龍 オーガ・ドラグーンの鋭き爪。3つの特徴をその身で引き継いだ新たな生命が誕生した。

真魔獣ガーゼット 攻撃力0

「何だこれは…こんな過去は存在しなかった…！」

「こいつはお前達の機皇帝と向き合うことで俺が出した新しい答えだ。もしお前達が来なかったら…俺はこいつに出会わずに満足しちまってたんだらうな」

「く…だがマシニクルは最強の機皇帝！貴様らに超えることなど…！」

「確かにマシンニクルは強え！俺のモンスターのほとんどが歯が立たなかつた…。だけどデュエルをしている以上、必ずそいつを超える手段はある！最強なんてものはねえんだ！」

「貴様に…超えられるというのか？」

「超える！真魔獣ガーゼットは変幻自在のモンスター…映し出されるのは今の俺たちの全力！そしてこのモンスターは俺たちが強くなる度に強くなれる！真魔獣ガーゼットの効果！こいつの攻撃力はリリースに使用したモンスター全ての元々の攻撃力の合計となる！」

「馬鹿…な…!？」

ガーゼットの身体は3体のエネルギーを受けてマシンニクルを超え、さらに巨大になっていった。

真魔獣ガーゼット 攻撃力0↓7600

「これが今俺たちが出せる全力だ！バトル！真魔獣ガーゼットでマシンニクルへと攻撃！ユニティ…フォース！」

真魔獣ガーゼットは翼を用いて空を飛び、長き胴体を揺らしながら、鋭き爪でマシンニクルを切り裂いた。

「私が負けた…だと!？」

アポリア LP2700↓0

こうしてニューワールドとネオサテイスファクションの長き死闘は終わりを告げたのだった。

## 第4章 決戦！アーククレイドル 時を超えた舞台

鬼柳と幸子が命懸けでバトンをコナミに繋ぎ、コナミは3体のシンクロモンスターを束ねた真魔獣ガーゼットによってアポリアとの勝負に決着をつけたのだった。

「決まったー！WRGP準決勝、チームニューワールド対チームネオサテイスフアクション。勝利を掴んだのはネオサテイスフアクションだー！」

「すまない…友よ。不甲斐ない私を許してくれ」

「あーちよつとー！」

アポリアが腰に差していた剣を取り出し、進行方向へ丸を描くように振った。すると次元の裂け目が現れ、アポリアはDホイールごと裂け目へと入ってしまった。

「行っちゃった…。本当に俺たちが勝ったらアーククレイドルが消えるのか聞きたかったんだけどな」

コナミは空を見上げた。すると空に浮かんでいた居城、アーククレイドルが消えていくのを目にした。

「おおっ!?!やったのか…」

達成感を胸にコナミはピットへと戻っていった。

「やりやがったなコナミー！」

「やりましたわね」

「うおっ！お前ら身体は大丈夫なのか？」

「へっ！奴らに勝ったと思うと痛みは吹っ飛んじゃったぜ！」

「わたくしは…さすがに今回はきつかったですわね。体のあちこちが悲鳴をあげています」

幸子のライダースーツは至る所に傷がついており、戦いの激しさを物語っていた。

「鍛え方が足りねえな幸子！」

「鬼柳の身体の方がおかしいんですわ…」

「今度サティスフアクションタウンにある鉱山で鬼柳に鍛えてもらったらどうだ？」

「断固拒否しますわ！」

彼らは勝利の余韻に浸り、喜びを分かち合った。その後、観客席で応援していた5D'sやラグナロクのメンバーとアーククレイドルの消滅によってイリアステルの計画が潰えたことを確認した。

「決勝で会おうぜ遊星！」

「ああ！俺たちも全力で戦う！」

遊星たちと決勝で戦う約束をし、彼らは海野財閥のガレージに戻って来た。そこで3人で決勝進出とニューワールドに勝利したことを祝うささやかな祝賀会を行い、一晩を明かした。

そしてその朝、幸子は彼らの中で一番早く目が覚めた。

「ん…。もう朝ですよのね」

ガレージに設置されたベッドから体を起こし、寝ぼけた眼で周りを見回した。

「…2人とも床で寝ていますわね。風邪を引いていないといいですが」

幸子は呆れながらガレージに光を入れようとカーテンを開け、外の景色を目に入れた。彼女の目には…映るはずのないものが映っていた。

「…………え？」

神の居城、アーククレイドル。それが彼女の目に映っていた。

「うーん。眩しい…」

そこにコナミが起きてくる。それにつられ鬼柳も目を覚ましたようだ。

「何だよ幸子。こんな朝から…」

「ふ、2人とも！外を！」

「ん？」

彼らもそれを目にする。鬼柳は勿論、コナミの目にも精霊の力を使うことなくアーククレイドルが目に映っていた。

「な…!？」

「アーククレイドル!？」

イリアステルの計画ではアーククレイドルはWRGPの決勝でニューワールドが勝利することによってサーキットが完成し、アーククレイドルが出現する予定だった。準決勝でネオサティスファクションに敗北したことで彼らの見通しではアーククレイドルは出現されないはずだった。しかし、サーキットはデュエルのエネルギーによって完成するもの。コナミはアポリアとの戦いのラストターン、2体の精霊と鬼柳が神に与えられたオーガ・ドラグーンの力を束ねたガーゼットによって決着をつけた。それによって生み出されたエネルギーは彼らの見通しを超えるものだったのだ。

「幸子…お前が見えているってことは」

「アーククレイドルが出現してしまったということですね…」

「く…とりあえず遊星たちに連絡を！」

コナミはDホイールの通信機能を使い、遊星たちに連絡を取ろうとする。しかし、Dホイール自体が起動しなかった。

「Dホイールが動かねえ!？」

「何だと!？」

「どうやら…アーククレイドルはそのものがマイナス回転のモーメントのようですね」

「エンシエント・ホーリー?」

コナミの持つ精霊、エンシエント・ホーリー・ワイバーンがコナミに語りかけてきた。

「あの巨大な逆回転のモーメントの影響を受けたことによってDホイールのモーメントは停止してしまつたようです。…ですが」

エンシエント・ホーリーが翼を広げ、Dホイールを不思議な光で包み込むとコナミのDホイールが稼働しだした。

「精霊、またはそれに準じる力を持つものならばマイナス回転のモーメントの影響を受けなくさせることが出来るようです。シグナーやルーンの瞳を持つ彼らも同様のことが出来るでしょう」

「さすがエンシエント・ホーリー!早速遊星たちに連絡を…」

「…いえ、全ての影響を受けなくさせることは出来ません。走行機能

とデュエル機能…この2つの機能が限界です」

「う…仕方ねえか」

「それとアーククレイドルは徐々に降下しているようです…。このままならば恐らく12時間ほどでネオドミノシティ全体に被害を及ぼすでしょう」

「何!? タイムリミットは12時間しかねえのかよ!」

「…コナミー・タイムリミットって何のことだ!？」

精霊を見ることが出来ない鬼柳と幸子にコナミはエンシエント・ホーリーが告げた内容を伝えた。

「…そうか。遊星たちは遊星たちでどうにか動くはずだ。俺たちは俺たちで出来ることをしようぜ」

「鬼柳…。そうだな、何とかしてアーククレイドルを止めねえと」

「と言いましても…どうやって止めますの!？」

「…」つだけ。あのモーメントの中心部にさらに大きな力を持つプラズマのモーメントをぶつけられれば。しかし…そのようなモーメントなどこの状況では」

「…細かいこと考えても仕方ねえ! 直接乗り込んで方法を探ろうぜ!」

「だけどアーククレイドルは空に浮かんでるんだぜ? 空でも飛ばねえと…」

「空を…」

鬼柳とコナミの視点が一点で混じり合う。飛ぶことが可能なDホイールは彼らの目の前にあった。

「わたくしのDホイール…ですか」

「そうだ! 幸子のDホイールはモーメントを下に噴射することで飛べるんだったな!」

「これに3人で乗って行くか?」

「…無理ですわね。これはまだ開発途中の機能。1人の重量を支えるだけで精一杯ですわ」

「行けるのは1人だけってことか?」

「…いや、そうと決まったわけじゃねえぜ。幸子、どうやって飛行機能



を取り付けたかって分かるか？」

「え？ええ…分かりますわよ。新たな機能を取り付ける時に社員の作業を見ていましたから」

「そっか。なら、決まりだ！鬼柳！幸子のDホイールに乗って先に行ってくれ！」

「え？コナミや幸子はどうするんだ？」

「俺は今から俺のDホイールに飛行機能を取り付ける！」

「そんな無茶な…。専門の技術者でもないし難しいでしょう」

「俺はこれでもジャンクパーツからDホイールを組み上げたんだ！何とかしてみせる！ただ…」

「…分かっていきますわ。残り時間の都合上、改造は一台が限界でしょう。それにわたくしではマイナス回転のモーメントの影響を受けてしまいますわ」

「お前ら…。分かった！幸子、Dホイールは借りていくぜ！」

鬼柳が地縛神 C c a p a c A p u が入っているデッキを幸子のDホイールにセットするとDホイールが稼働を始めた。

「鬼柳。気をつけていきなさい」

「鬼柳！絶対に俺も後から追いつく！」

「ああ！俺は先に行って出来ることをやっておく！」

鬼柳は幸子のDホイールをガレージから外に出し、乗り込んでDホイールを浮上させる。あらぬ方向へと向かわぬようにバランスをとり、鬼柳はアーククレイドルに向けてDホイールを発進させた。

「幸子！Dホイールの改造を始めるぞ！」

「分かりましたわ！」

コナミと幸子はコナミのDホイールに飛行機能を取り付ける作業を開始した。

そして鬼柳は飛行機能のおかげで苦もなくアーククレイドルへと到着していた。

「でけえ…。こんなものが落ちてきたらネオドミノシティは終わりだぜ」

鬼柳はDホイールをアーククレイドルへと着地させる。周りを見

回すも入口らしきものは見当たらなかった。

「多分ここにアポリアやアポリアに協力しているイリアステルのメンバーがいるはずだ…。どこにいやがる？」

鬼柳が呟くとほぼ同時にアーククレイドルの一部が機械的な音とともに開いた。

「…誘ってやがるのか。だが時間がねえ、乗ってやる！」

鬼柳はDホイールを走らせ、その中へと突入した。鬼柳が中に入った瞬間、再び機械的な音ともに入り口が閉じていった。

「罨か…ういや、誰か居る！」

鬼柳はDホイールを減速させ、そこに佇んでいた一人の人物の前でDホイールを止めた。

「…来たか、鬼柳京介」

そこにいたのは仮面を顔につけた奇妙な人物だった。

「誰だお前は!？」

「私はイリアステルの滅<sup>めっしせい</sup>四星の一人。逆刹のパラドックス」

彼が仮面を取り外すと黄色と紫が入り混じった長髪がその衝撃で跳ね、彼の顔に刻まれた赤いマークを鬼柳に見せた。

「鬼柳京介。貴様に私達の計画の邪魔をさせるわけにはいかない。ゾーンの命により、貴様をここで倒す！」

「ゾーン…?」

「貴様に煉獄のドラゴンを託した者だ」

「…!?イリアステルがオーガ・ドラグーンを俺に…?」

「そうだ。貴様は不動遊星に並びゾーンに希望を抱かせたデュエリストだった」

「だった…だと?」

「そう。それはもう過去の話だ。残念だが…彼女、いや彼には時間が残されていない」

「時間がないって…。どういうことだよ!シンクロ召喚が未来を滅ぼすって話ならこれから俺たちが…!」

「残念だが…これからなどと悠長なことを言っている余裕はないのだ」

「何…!？」

「おしやべりはここまでだ鬼柳京介。ゾーンの元に進みたければ私を倒すことだな。私の後ろにあるものが見えるな？」

「あれは…歯車か？」

パラドックスの後ろには金色に輝く巨大な歯車が静かに佇んでいた。

「これはゾーンのいる太陽ギアを守る5つの遊星ギアの1つだ。そしてこの遊星ギアを破壊しないとゾーンのいる場所に貴様らは進むことは出来ない。さらにここにある遊星ギアは私のライフと直結しているー!」

「デュエルでお前を倒さねえと先に進めねえってことか…!」

「そういうことだ」

「なら…やってやるよ!」

「ふっ、愚かな。言っておくが私のデッキはあらゆる時代から最強のカードを取り寄せたデッキとなっている。貴様に勝ち目など方にもない」

「言ってな…。最強なんて俺の満足でぶち壊してやるよ!」

「「デュエル!」」

パラドックスと鬼柳のデュエル開始の掛け声が密室となっている空間に響き渡った。

「私からいかせてもらう!ドロー!…私は罪深き世界、Sin Worldを発動する!」

「いきなりフィールド魔法か…!」

彼らのいる空間がプリズムによって反射された虹色の光によって満たされた。

「このフィールドこそ私の舞台。ここでこそ私のモンスターが真価が発揮される。私はデッキの究極宝玉神、レインボー・ドラゴンを除外することで手札のSin、レインボー・ドラゴンを特殊召喚する!」

七色に輝く翼を持つドラゴンがフィールドに飛翔するも、プリズムの光を浴びた部分から色が吸い取られていき、翼が黒く染まってしまった。

Sin レインボー・ドラゴン 攻撃力4000

「な…!?いきなり攻撃力4000だど!」

「Sinモンスターは対となるモンスターをデッキから除外することで手札より特殊召喚できる。ただし、Sinモンスターはフィールドに1体しか存在させることができず、フィールド魔法がないと破壊されるがな」

（強力なモンスターだぜ…!だが、モンスターを守備表示で召喚すれば時間を稼げそうか?）

「私は2枚のカードを場に伏せターンを終える。さあ、かかってくるがいい!」

パラドックス LP4000

フィールド 『Sin レインボー・ドラゴン』（攻撃表示）

セット2 『Sin World』

手札2

「行くぜ!俺のターン、ドロー!」

「この瞬間私は永続トラップ、最終突撃命令を発動する!」

「何…?」

パラドックスの発動したトラップによって時空に歪みが発生した。

「このカードが場にある限り、フィールドの表側表示のモンスターは全て攻撃表示となる!貴様が守備を固めようなどという手を企んでいることなど分かっている」

「くっ…さすがに気づかれるか。どうする…!」

鬼柳は手札の6枚を見つめ、必死に突破の策を探った。

「無駄だ。貴様に攻撃力4000を超えるモンスターがないことはアポリアから伝え聞いている。ましてや1ターン目から突破など出来まい」

「俺は…インフェルニティ・ビーストを召喚!」

体が黄土色で彩られた犬がフィールドに降り立った。

インフェルニティ・ビースト 攻撃力1600

「そんなモンスターで何が出来る」

「ちっ、2枚のカードを伏せてターンエンドだ!」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・ビースト』（攻撃表示）

セツト2

手札3

「結局何も出来ずか。私のターン！この瞬間Sin Worldの効果を発動する！」

「一体何を……！」

「このフィールド魔法の効果により私はデッキから3枚Sinと名のつくカードを選び、相手はそこからランダムに1枚選択する！そして選ばれなかったカードはデッキへと戻り、選ばれたカードは私の手札へと加わる！さあ、選択しろ！」

パラドックスと鬼柳の間に3枚のカードが出現する。

「なら俺から見て右のカードだ！」

「良いだろう。そのカードを手札に加える！……ほう？」

パラドックスはそのカードを確認するとわずかに口角を上げた。彼の手札に加わったトラップカード、Sin Claw StreamはSinモンスターが場にいる時、相手フィールドのモンスターの体を破壊できる強力なカードだったからだ。しかし、そのカードが伏せられることはなかった。

「俺はここでトラップカード、死なばもろともを発動！」

「何だと？」

「このカードは互いの手札が3枚以上の時それを全て好きな順番でデッキの下に戻し、その後互いに5枚のカードをドロウする！そして俺はこの効果でデッキに戻したカードの数×300のライフを失う！」

「自らを破滅へと追い込むか……。そのカードの効果によって貴様のライフは1800ポイント失われる。Sin レインボー・ドラゴンがインフェルニティ・ビーストに攻撃すればその時点で貴様のライフはゼロだ。あっけない結末だったな」

「まだまだ！もう1枚のリバースカードも使わせ！永続トラップ、ハンドレス・フェイク！俺の場にインフェルニティモンスターがいる時、

次の俺のスタンバイフェイズまで手札を全て除外する！」

「な…!？」

鬼柳の手札が透明になっていき、死なばもろとも効果でやってきたゴブリンの検閲を回避した。

「よつて俺はデッキにカードを戻さず、5枚のカードをドローする！」

「ち…小賢しい真似を！私は3枚のカードを戻し、5枚のカードをドローする！同時に貴様は自身のカードの効果で900のライフを失う！」

ゴブリンによつてデッキに戻されたパラドックスのカードの怨念が鬼柳を貫いた。

「ぐっ…!？」

鬼柳 LP4000↓3100

「バトルだ！Sin レインボー・ドラゴンでインフェルニティ・ビーストへ攻撃！」

Sin レインボー・ドラゴンの翼から黒いエネルギーが放たれ、エネルギーの奔流にインフェルニティ・ビーストは飲み込まれてしまった。

「なっ！」

発生した衝撃は実体化していき鬼柳を容赦なく襲った。

「うおおおっ!？」

とつさに腕で衝撃から身を守るも、体は宙に浮き閉ざされた入り口に背中からぶつかってしまう。

鬼柳 LP3100↓700

「…言い忘れていたがSin Worldでのダメージは実体化する。そしてライフゼロになる時の衝撃は…言わずもがなだ」

「くそ…油断したぜ」

鬼柳は不屈の闘志で何とか立ち上がるも、身体はぼろぼろになっていた。

「私はさらに2枚のカードを伏せターンエンドだ。…アポリアから貴様は諦めることがないと聞いている。だが、この状況でも諦めないというのか？」

「当たり前だ！諦めなきや…チャンスは来る！」

「どうかな…。諦めずに戦っても絶望を迎えることもある」

「…？」

パラドックス LP4000

フィールド 『Sin レインボー・ドラゴン』（攻撃表示）

セット3 『最終突撃命令』『Sin World』

手札3

「俺のターン、ドロ…このスタンバイフェイズにハンドレスフェイクによって除外されたカードは手札に戻る！」

透明になっていた鬼柳の手札が元に戻っていった。

「手札…9枚か。だが貴様はハンドレスコンボを扱うと聞いているが…？」

「そうだけ。この手札はハンドレスコンボへの布石だ！おっと…ハンドレス・フェイクは使わねえぜ？」

「手札9枚からのハンドレスだと？ありえぬ妄言を…」

「ならその目で見てみな！俺は手札を5枚墓地に捨てることで魔法カード、最終戦争を発動する！こいつは手札を5枚捨てることで発動出来る。そして効果で…フィールドのカードを全て破壊する！」

「何だと…!？」

フィールドに巨大な爆弾が一つ投擲された。爆弾は地面へと着弾し、フィールドのカードを全て破壊出来るほどの衝撃を解き放った。

「させぬぞ…リバースカードオープン！カウンターラップ、ゲストラクシオン・ジャマー！手札を1枚捨て、フィールドのモンスターを破壊する効果を含むカードの発動を無効にし、破壊する！」

爆弾をバリアが包み込み、爆発の衝撃をバリア内だけですまさせた。

「残念だったな。その程度の策は読んでいる」

「残念？いいや、予定通りだ！俺は2枚のカードを伏せ、インフェルニティ・ミラーージュを召喚する！」

「…！ハンドレス…！」

鬼柳のフィールドに藍色のローブに身を包んだ小人の幻影が現れ

た。

インフェルニティ・ミラージュ 攻撃力0

「さあ、見せてやるぜ。俺の満足を！インフェルニティ・ミラージュは手札が0枚の時、リリースすることで墓地にある2体のインフェルニティモンスターを特殊召喚できる！蘇れ、インフェルニティ・ネクロマンサー！インフェルニティ・ビートル！」

幻影が消えていくと、紫色のローブに身を包んだ霊媒師と体全体が黒く染まったヘラクレスオオカブトが復活した。

インフェルニティ・ネクロマンサー 攻撃力0

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「さらにインフェルニティ・ビートルは手札が0枚の時、リリースすることでデッキから2体のインフェルニティ・ビートルを呼び出す！」  
「手札が0枚だというのに何という展開力だ……！」

ビートルの呼び声に導かれ2体の仲間がフィールドを舞った。

インフェルニティ・ビートル×2 攻撃力1200

「まだまだ！インフェルニティ・ネクロマンサーは手札が0枚の時、墓地のインフェルニティを復活させられる！戻ってこい、インフェルニティ・デストロイヤー！」

強固な肉体を持つ破壊者が地面を突き破り、フィールドに帰還した。

インフェルニティ・デストロイヤー 攻撃力2300

「ビートルはチューナーモンスター……行くぜ！俺はレベル6のインフェルニティ・デストロイヤーにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング！」

「……シンクロ召喚か」

「死者と生者の狭間、その虚ろな魂が混じるとき冥府の闇が舞い降りる！シンクロ召喚、いでよワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

100個の目玉が体に張り付いた奇妙なドラゴンが2人の前に姿を現した。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 攻撃力3000

「シンクロモンスターを呼んだか。だが、Sin レインボー・ドラゴ



ンには及ばぬ！」

「こいつ1体だけならな。俺は伏せていた永続魔法、インフェルニティ・ガンを発動し、墓地に送る！これによって2体のインフェルニティモンスターを墓地から帰還させることが出来る！」

「…驚いたな。まだ展開を続けることが出来るのか」

「俺はインフェルニティ・ビーストとインフェルニティ・ビートルを特殊召喚！」

地面に向かった銃が放たれ、それによつて出来た穴から犬とヘラクレスオオカブトが抜け出してきた。

インフェルニティ・ビースト 攻撃力1600

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200

「そして俺はレベル3のインフェルニティ・ネクロマンサーとレベル3のインフェルニティ・ビーストにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング！」

「1ターンで2回のシンクロだと…!？」

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！いでよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン！」

体が漆黒に染まりしドラゴンが飛翔し、翼を羽ばたかせてフィールドに風圧を走らせた。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 攻撃力3000

「仕上げだ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンは1ターンに1度、墓地のレベル6以下の閻属性モンスターを除外することで効果をコピーする！俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを除外し、効果を発動する！」

「…!?!まさか…貴様の狙いは！」

「俺は墓地のインフェルニティ・デストロイヤーを特殊召喚し、レベル6のインフェルニティ・デストロイヤーにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング！」

「3連続シンクロ…!しかもこの力は！」

「天国と地獄の間…煉獄はぐまより姿を現せ！煉獄龍 オーガ・ドラグーン！」

翼も手足も胴体も赤黒く染まったドラゴンが煉獄より飛翔し、闇に染まった体を2人に見せた。

煉獄龍 オーガ・ドラグーン 攻撃力3000

「ゾーンの与えしドラゴン……しかも3体のシンクロドラゴンを手札0から呼び出すとは……なるほど。ゾーンが希望を持ったのも頷ける」  
「なら、俺たちに未来を託してくれよ！そうすれば……」

「……言っただろう。時間がないと。どうしてもというのならば力づくで認めさせるがいい。貴様が呼び出した3体のシンクロモンスター  
の攻撃力ではSin レインボー・ドラゴンを超えることは出来ない  
がな！」

「攻撃力では……な。インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果発動！俺の手札が0枚の時、1ターンに1度相手フィールドのモンスターを破壊し、その攻撃力の半分のダメージを相手に与えることが出来る！」  
「……しまった……。デストラクション・ジャマーは最終戦争によって使わされている！」

「そうだ！最終戦争はハンドレスとインフェルニティ・デス・ドラゴンへの布石だったのさ！Sin レインボー・ドラゴンを破壊しろ！インフェルニティ・デス・ブレス！」

インフェルニティ・デス・ドラゴンから放たれた黒い炎がSin  
レインボー・ドラゴンの翼を燃やし、破壊した。

「ぐおおっ！」

パラドックスはSin Worldによって実体化したダメージ  
によって大きく仰け反った。

パラドックス LP4000↓2000

「よし……あとはオーガ・ドラグーンのダイレクトアタックで……！」

「……見正しいように見えた今の行動。しかし、それは大いなる間違  
いだ！」

「な、何だ……？」

パラドックスはアポリアがDホイールと合体していく時のように  
自身のパーツを分解していき、新たにフィールドに現れていた何かと  
合体していた。

「なっ…新たなドラゴンが場に出ているだど!？」

彼はドラゴンの頭頂部にあたる部分と自らの体を一体化させていた。

Sin トウルース・ドラゴン 攻撃力5000

パドックス LP2000↓1000

「Sin トウルース・ドラゴンはSinモンスターが破壊された時、ライフを半分にすることで手札または墓地より特殊召喚することが出来る！」

「攻撃力4000を倒したと思ったら今度は攻撃力5000かよ…!？」

「さあ、どうする！鬼柳京介！」

「…俺はこれでターンエンドだ！」

鬼柳 LP700

フィールド 『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』（攻撃表示） 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』（攻撃表示） 『煉獄龍 オーガ・ドラゴン』（攻撃表示）

セッター 『ハンドレス・フェイク』

手札0

「私のターン！私はこのターン、Sin Worldの効果を発動せず、通常のドローを行う！」

パドックスがドローを行うと一体化しているSin トウルース・ドラゴンが咆哮をあげた。

「さあ…絶望しろ！バトルだ！Sin トウルース・ドラゴンで煉獄龍 オーガ・ドラゴンへ攻撃する！さらにSin トウルース・ドラゴンがバトルで相手モンスターを破壊した場合、相手フィールドの表側表示モンスターを全て破壊する！まとめて消え去れ！」

Sin トウルース・ドラゴンの周囲に無数の黒い針が発生し、一斉に3体のドラゴンへと向けて射出された。

「さらばだ…！わずかな希望をもたらしたデユエリストよ！」

「…まだ俺は満足してないぜ！リバーズカードオープン、インフェルニティ・ブレイク！」

「何!？」

「墓地のインフェルニティカード、インフェルニティ・ガンを除外することで相手フィールド上のカードを1枚破壊する!俺が破壊するのは…Sin World!」

「し、しまった…!」

「確か言ったよな?Sinモンスターはフィールド魔法がないと破壊されるって!お前の方こそ消えな、Sin トウルス・ドラゴン!」  
Sin Worldが崩れていき、Sin トウルス・ドラゴンが苦しみます。一体化しているパラドックスも痛みを共有しているのかうめき声をあげた。やがてSin トウルス・ドラゴンは崩れ去った。

「はあ…はあ…」

「フィールド魔法が消えた以上お前に勝ち目はねえ!俺の勝ちだ!」

「…そいつはどうだろうな?」

「何?」

「言っただろう。私のデッキはありとあらゆる時代から最強カードを取り寄せた最強のデッキだと!私は手札から魔法カード、テラ・フォーミングを発動する!このカードによって私はデッキからフィールド魔法を1枚手札に加える!」

パラドックスが天に手を突き出すと光が降り注がれ、1枚のカードがゆっくりと降りてきた。

「そうはさせねえ!煉獄龍 オーガ・ドラゴンの効果発動!俺の手札が0枚の時、1ターンに1度魔法か罠カードの発動を無効に出来る!」

煉獄のドラゴンが黒炎のブレスを放ち、光を遮断したことでカードはパラドックスの手に収まることはなかった。

「…かかったな!」

「なっ…!?!」

「当然私はオーガ・ドラゴンの効果を把握している。本命は既に手札にある!出現せよ、3幻神をも封じ込める力を持つフィールド魔法よ!神縛りの塚、発動!」

フィールドの一部が盛り上がり塚が形成されていく。やがて巨大な塚が出来上がると周囲の雰囲気为重くなつていった。

「何だこれは…」

「私が探し出した神をも縛る力を持つカードだ。このカードで決着をつけてくれよう。私はトラップカード、Sin Selectorを発動する！墓地の2体のSinと名のつくモンスターを除外することでデツキより2枚のSinと名のつくカードを手札に加える。私はデストラクション・ジャマーのコストで墓地へ送っていたSin レッドアイズ・ブラックドラゴン 真紅眼の黒竜とSin レインボー・ドラゴンを除外する！」

パラドックスのデツキから2枚のカードが飛び出し、パラドックスの手中に収まった。

「私に加えたのはSin パラレルギアと…Sin スターダスト・ドラゴン！」

「スターダストだと！そいつは遊星の…！」

「そう。スターダストと対となるモンスターだ。最も、ペガサスの抹殺に失敗した際にスターダストは取り返されてしまったがな」

「ならそいつを呼び出すことは出来ねえじゃねえか！」

「ふ…甘いな。私はチューナーモンスター、Sin パラレルギアを召喚する！」

刃のついた歯車がフィールドで回転しだした。

Sin パラレルギア 攻撃力0

「そしてSin パラレルギアは手札のSinモンスターとシンクロ召喚を行うことが出来る！」

「…！エキセントリック・ボーイみたいな奴か…！」

「私はレベル8のSin スターダスト・ドラゴンにレベル2のSin パラレルギアをチューニング！次元の裂け目より生まれし闇よ、時を超えた舞台に破滅の幕を引け！シンクロ召喚！Sin パラドックス・ドラゴン！」

パラレルギアから発せられた黒い輪が黒く染まったスターダストを包み込み、完全に闇に染まったドラゴンを生み出した。さらにそのドラゴンは闇を取り込んでいき、巨大化を続けていった。

Sin パラドクス・ドラゴン 攻撃力4000

「ここに来て…また攻撃力4000のモンスターを呼びやがったか！」

「ふふ…Sin パラドクス・ドラゴンはフィールドにSin Worldが存在しない時、破壊される！」

「なっ…一体何を！」

Sin パラドクス・ドラゴンは無理に巨大化した影響で崩れ去ろうとした。しかし、塚から放たれた四本の鎖が強引にSin パラドクス・ドラゴンを支えた。

「フィールド魔法、神縛りの塚の効果によりフィールドのレベル10以上のモンスターは効果の対象にはならず、また効果では破壊されない！」

「何！ならインフェルニティ・デス・ドラゴンの効果も効かねえのか…!?」

「そういうことだ！貴様が運命を託したシンクロドラゴンも私を倒すには至らない…！貴様に残っているのは次の私のターンに目の前で為すすべなく自分のモンスターを破壊されてしまうという絶望のみ！」

「く…！」

「神縛りの塚によって再びダメージも実体化する…。やはりシンクロモンスターは良き未来をもたらさぬようだ。鬼柳京介、これが絶望だ。私はこれでターンエンド」

パラドクス L P 1000

フィールド 『Sin パラドクス・ドラゴン』(攻撃表示)

セット1 『最終突撃命令』 『Sin World』

手札0

「…絶望。確かに今の俺のシンクロモンスターたちじゃお前を倒すことは出来ねえ」

「そうだ。貴様に希望はない」

「いや、希望は他力本願で手に入るもんじゃねえ！俺はこのドロウで希望を掴み取ってみせる！俺のシンクロモンスターの力はまだこん

なもんじやねえ…!」

「人は絶望しかなくともシンクロモンスターに継ることしか出来ない。破滅の未来へと歩みを進めるがいい!」

「…俺のターン。このカードにかけるぜ。コナミがシンクロモンスターの力を束ねたように俺も…こいつらを束ねる為の力を!…ドロオオオー!」

鬼柳は腕をクロスさせ、左手で右腕につけているデュエルディスクからカードを引き抜き、鋭い軌跡を描いた。

「どうだ?やはり貴様にもたらされたのは絶望だろうか?」

「…俺はワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの効果を発動し、インフェルニティ・ビーストの効果をコピーする!」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの目が一つ見開き、インフェルニティ・ビーストのデータを読み込んだ。

「悪あがきか。見苦しいぞ」

「どうかな…。満足させてやるぜ、お前を!」

「ふっ…Sin パラドクス・ドラゴンは神縛りの塚により効果の対象とならず、カード効果で破壊されない。今更何をするというのだ?」

「俺はこのカードに全てを託すぜ。手札から魔法カード、クロス・アタックを発動!こいつは俺の場に同じ攻撃力の攻撃表示モンスターがいる時に発動できる…!」

3体のドラゴンからエネルギーが溢れ出ていく。

「貴様の場のモンスターの攻撃力は全て3000…!」

「そして俺は同じ攻撃力を持つモンスターの内、1体を選択する!そして選択したモンスターは…このターン、相手にダイレクトアタックすることができる!」

「…馬鹿な!?!この局面でダイレクトアタックを可能にするカードを引き当てたというのか!?!」

「そうだ!諦めなければ…必ず活路は開ける!俺はそれを信じている!俺が選択するのは…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン!」

インフェルニティ・デス・ドラゴンと煉獄龍 オーガ・ドラグーン

のエネルギーがワンハンドレッド・アイ・ドラゴンへと集約されていった。

「これでワンハンドレッド・アイ・ドラゴンはダイレクトアタックが出来る！行くぜ！バトルだ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでパラドックスに直接攻撃！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンは100個の目でパラドックスを捉え、3体のドラゴンのエネルギーを合わせた力を解き放とうとした。

「やられるものか…！私はゾーンのために何としてもこの戦いに勝たなくてはならない！リバースカードオープン！カウンタートラップ、攻撃の無力化！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制的に終了させる！」

「…！」

「このカードにはオーガ・ドラグーンの効果も発動することは出来ない！一歩及ばなかったな鬼柳京介！」

パラドックスのフィールドに渦が発生していき、パラドックスを守るように取り囲んでいく。

「…それはどうか？」

「ここにきてまだそんな減らず口を…！貴様はこの絶望から何を変えられるというのだ！」

「変えてやるよ…！俺のシンクロモンスターの可能性をお前に見せてやる！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンがコピーしたインフェルニティ・ビーストの効果！このモンスターが攻撃する時、俺の手札が0枚の場合…相手は魔法・罠カードを発動出来ない！」

「なん…だと…!？」

パラドックスの周りに発生しようとした渦は収まっていき、パラドックスは無防備になってしまう。

「何故だ…。私を待つ未来は絶望しかないのか!？」

「…いや、違うな。お前は絶望なんかしてねえ」

「何だど？貴様に何が分かるというのだ…！」

「さつきお前が言ってただろ？何としてもゾーンのために勝たなくて



はならないって。つまりお前はゾーンに希望を抱いてるってことだ！そして人は希望がある限り…絶望はしねえ！」

「…！私がゾーンに希望を…？私は絶望をしていないというのか？」

「ああ。絶望をしている人間が希望を抱くことはねえ」

鬼柳はクラッシュタウンで希望を抱くことなくただ死の順番を待っていた時のことを思い出す。人は絶望をしている時は希望を抱かない。しかし彼は遊星やコナミ、ニコやウエストに希望を与えられた。死神の生き様を見せるといふ希望を抱いてからは挫けることはあれど、絶望することはなかった。

「…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでパラドックスに直接攻撃！インフェルニティ・サイト・ストリーム！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンから放たれた闇のエネルギーがパラドックスを包み込んでいく。パラドックスは闇に包まれながらも、まるで光に包み込まれているかのように感じていた。

「…そうか。この胸に抱いている感情。これは絶望ではない、希望なのだな」

パラドックス LP1000↓0

こうして遊星ギアは破壊され、ゾーンへと一つ近づいたのだった。

たった一人で

鬼柳のシンクロモンスターの力を合わせた一撃に。パラドックスのライフは0となり、パラドックスのライフと直結していた遊星ギアが破壊された。

「希望……か。私とその感情を未だ胸に秘めていたとはな。最後にそのことを知ることが出来て良かった」

「最後だと？……お、おい!？」

糸が切れたマリオネットのようにパラドックスの身体は崩れていった。

「ふ……やはり限界か」

「どういうことだよ……!？」

「元よりこの機械の身体は歴戦のデュエリスト達に敗れた時点で機能が停止していた。ゾーンによってお前達との戦いのため一時的に復活していただけのこと。私はゾーンのため警戒対象の一人である貴様を抹殺し、共に尽き果てる覚悟だったのだがな……」

「ふざけんなよ！デュエルで人が死ぬなんてのはもうこりこりだぜ！何か……何かねえのかよ……」

「安心しろ……私は既に遙か未来に死を迎えている。私は所詮あの時の私の絶望の記憶から生み出された機械だ。それにこの身体は未来のモーメントによって動かされている。この時代のモーメントではどうすることも出来ない」

「ならどうやってゾーンはお前を復活させたんだよ！ゾーンならお前の身体に未来のモーメントを移す方法があるんじゃないやねえのか!？」

「ふ……貴様は希望を捨てないのだな。だがこのモーメントは別の口ポットから移されただけのこと。本来モーメントは永久機関だが……一定以上の量があることが条件だ。しかし、互いに動くためにはこの微量なモーメントを引き継ぐしかなかったのだ」

パラドックスが口を動かすたびに彼の身体に無理が生じ、傷ついた身体の節々から火花が散っていた。

「もういいー喋るな……」

「おかしな話だ。何故貴様は私を心配する？先ほどまで私たちは命のやり取りをしていたのだぞ」

「……俺は一度ダークシグナーになり、たくさんの人々を地縛神の生贄にした。それでも…命のやり取りをしたっていうのに手を差し伸べてくれた奴らがいた！それで分かったんだよ。誰かを助けようという気持ちに理由なんていらねえ！ただ助けたいって気持ちがあれば手を伸ばす。それが当たり前じゃなきゃならねえんだってな」

彼は今でも鮮明に思い出すことが出来た。あの時彼らが伸ばしてくれた手を。そしてその時に抱いた気持ちを。

「お前らだってそうだろうよ…。アポリアが言っていたぜ。俺たちの未来はいずれ破滅する。だから未来の人々を助けるためにお前らは俺たちを全力で倒そうとしたんだ」

「…そうだ。私達は失った両親や友、共に生きていた大勢の人々を救わねばならない。それが生き残った者の使命なのだから」

「だけどお前らはそのためにこの時代の人々を犠牲にしようとしている。それじゃダメなんだ！絶対どこかにあるはずなんだ…！過去も未来も救える道が！」

「ふふ…子供のような理想ばかりを追い求めた考えだ。現実はどう上手くは行かない。だが……」

パラドックスの声がどんどん小さくなっていく。彼は力を振り絞って…呟いた。

「その考えを本当に切り捨てても良かったのだろうか？我が友、ゾーンよ……」

その言葉を最後に彼は口を閉ざしてしまった。

「……まさか」

鬼柳はパラドックスの肩を掴み、揺らした。しかし反応が返ってくることはなかった。

「くそっ！」

彼は床を全力で殴り、胸の中のもやもやした感情を晴らそうとした。

「…進むしかねえか。パラドックス…お前の想いは俺が受け取った」

ぜ」

彼はDホイールを太陽ギアへ繋がる道へと向ける。パラドックスを一度振り返った後、Dホイールを走らせていった。

時を同じくしてコナミのDホイールの改造が終了していた。

「よし…。これでやっとアーククレイドルに向かうことができるぜ」

「気をつけていきなさい。鬼柳が先に向かったことであちらも警戒しているでしょうから」

「そっか…。十分に気をつけるぜ。幸子も早く避難を…」

「もう遅いでしょう。今から避難をして間に合うと思いますか?」

彼らの窓から見えるアーククレイドルは鬼柳が向かう前より目に見えて近づいてきていた。

「でもこのまま何もしないよりは…」

「…庶民。あなた達がアーククレイドルを止めてきてくれるのでしょうか?」

「幸子…」

「早くお行きなさい。そしてここに返って来ること。約束ですわよ?」

「…ああ!約束だ!」

コナミはDホイールを宙に浮かせ、アーククレイドルに向けて走らせていった。彼は向かう途中、アーククレイドルに向かう虹の道が出現していたのを目にした。

「何だあれは…?…あそこを走っているのは遊星達か!」

遊星達、チーム5D'sのメンバーはチームラグナロクに旧モーメントを利用して虹の架け橋をアーククレイドルに架けてもらい、アーククレイドルに渡ることに成功していた。

「俺も急がねえとな…!」

コナミはDホイールを走らせ、遊星達より後にアーククレイドルに到着した。

「ここがアーククレイドルか。遊星達や鬼柳はどこだ…?」

コナミは周りを見渡す。するとアーククレイドルに空いた大きな穴が目に入った。

「もしかして…」

彼は穴に近づき、下を覗いた。すると3つに分かれた道が穴の中にあることを確認することができた。

「他に空いている所はねえ。なら…」

コナミは着地させていたDホイールを浮かせ、その穴に突入しようとした。しかし背後から声を掛けられ、コナミは遊星達かと思いつく後ろを振り返った。だがコナミの予想は大きく外れていた。

「…あなたの相手は私」

「め、恵!? どうしてここに…?」

コナミに声を掛けたのは銀髪の少女、レイン恵だった。

「もしかしてイリアステルに連れ去られたのか!？」

「…聞こえなかったのならもう1度言う。あなたの相手は私」

「…本気で言ってるのか?」

「冗談でこんなことは…言わない」

恵はコナミをはつきり見つめて言い切った。

「嘘だと言ってくれよ…。またお前と戦いたってのはこんな所で戦いたって意味じゃないんだぜ?」

「…私もその時は違う意図を込めて言った。けど結果として私はあなたと戦わなくてはならない」

「何でだよ…。俺とお前が戦わなきゃならない理由なんてないだろ!」

「理由を知りたいのなら…付いてきて」

機械的な音と共にアーククレイドルの一部が開いていく。彼女はそこに入っていった。

「……」

コナミは一瞬そこに入るのをためらってしまふ。入ればとんでもない事実を突きつけられてしまうような予感がしたからだ。しかしここで止まっただけでは何も解決しない。

「くそっ!」

コナミは恵が向かった場所へDホイールを走らせた。その道は近未来的で彼が見たことのない技術が使われていることを伺わせる。

それがコナミの中に渦巻く不安を大きくさせていった。その道を走る時間は決して長くはなかったが、コナミにとつては長く感じられた。彼のDホイールはそんな経緯を経て、一つの部屋に突入した。

「……こは？」

コナミは部屋を見回した。すると奥に金色に輝く巨大な歯車とそれに繋がっている何かを見つけた。

「……ここまで来れば私がおかあなたにも分かるはず」

「お前も……アポリアみたいにロボットなのか。アポリアは未来からやってきたと言ってた。ってことはお前の正体は……」

恵は背中からコードを出し、背後の歯車と繋がっていた。

「そう、私も彼と同じく未来からやってきた。破滅の未来から生み出された絶望によって」

「絶望……？」

「アポリアは愛してくれる者がいなくなった絶望、愛する者がいなくなった絶望、愛さえいらなくなった絶望の3つの絶望からロボットとして創造主ゾーンによって生まれ変わった」

「それであいつらはプラシド、ルチアーノ、ホセの3人に分かれていたのか……。だけどゾーンってのは誰だ？」

「ゾーンは破滅の未来に立ち向かっていた4人の生き残りの中で今も唯一生き残っている者。そして未来の運命を変えるために私たちを導く者」

「親玉ってわけか……」

「ゾーンのいる太陽ギアにたどり着くためには私と繋がっている遊星ギアを破壊しなくてはならない。そして遊星ギアを破壊するには私のライフを0にしなくてはいけない」

「だからお前と戦わなきゃいけないってことか？意味がわからないぜ！何で俺とお前がこんなことをしなきゃならねえ！」

「アポリアが3つの絶望によって生まれたように私もある絶望から生み出された。その絶望があなたと戦わなくてはいけない理由」

「どういうことだよ……!?!」

「私を生み出した絶望。それは……」

恵は太陽ギアがある方向へと振り返る。数瞬の後、コナミへと向き直した。

「…世界で最後の一人になってしまった絶望」

「なっ…!?それって……」

「そう。私はゾーンの絶望から生まれた。だからこそあなたをゾーンの元に行かせるわけには行かない」

恵の身体から無数のコードが伸びていき、遊星ギアを覆い隠すように広がっていった。

「あなたは私に希望を抱かせていた。だけどゾーンには時間がなくなってしまう」

「最後の生き残り、そして時間がなくなった……って。もしかして…!?」

「あなたが想像している通り、彼の寿命も尽きかけている。だからこそあなたが導き出す未来を見ている余裕はなくなった。だから過去のモーメントをアーククレイドルによって葬ることで未来の人々を確実に救わなくてはならない」

「そんな…。だけどアーククレイドルが落ちれば大勢の人達が犠牲になる…これじゃ未来の人々を救っても意味がないだろ!」

「それでも確実に犠牲者は減る。それで未来を救えるなら…必要な犠牲」

「…っ!ふざけるな!」

「…ならあなたはもうしろと言うの?」

「俺達が何とかして未来を変えれば…!」

「…確かにあなた達は大きく成長している。それは私もゾーンも分かっている。だけどさっきも言った通り、ゾーンには時間がない。あなた達が確実に未来を変えられる保証なんてない」

「くっ…」

「…それでもあなた達が未来を変えられるというのなら。示して、このデュエルで」

「…!」

恵がディスクを展開し、コナミに向かって構えた。

「…分かったよ。やるしかねえ！」

コナミも覚悟を決め、ディスクを展開して恵に向かい合う。

「あなたにはこのデュエルで私が味わった絶望を味わってもらおう。もし乗り越えられなければ、未来を変えることは出来ないと判断する」

「…乗り越えてやるよ！」

「「デュエル！」」

コナミと恵のデュエルが始まる。先攻のランプがついたのはコナミ。

「俺のターン、ドロロー！俺はギガテック・ウルフを召喚！」

鉄屑から作られたオオカミがフィールドに降り、遠吠えをあげた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP4000

フィールド 『ギガテック・ウルフ』（攻撃表示）

セット2

手札3

「私のターン、ドロロー。私はピラミッド・タートルを召喚」

黄金に輝くピラミッドを甲羅のように背負った亀がフィールドに現れた。

ピラミッド・タートル 攻撃力1200

「そのモンスターは…！」

「バトル。ピラミッド・タートルでギガテック・ウルフに攻撃」

オオカミとカメは互いに体当たりでぶつかりあい、その衝撃で発生した爆風と共に2体とも破壊されてしまう。

「ピラミッド・タートルが戦闘で破壊されたことでテッキから守備力2000以下のアンデット族モンスターを呼び出すことができる」

「確かこの前は攻撃力2400の龍骨鬼を…！」

「私が呼び出すのは…守備力1050のゴブリンゾンビ」

爆風が晴れるとそこには体が骨のみになってしまったゾンビが現れていた。

ゴブリンゾンビ 攻撃力1100



「攻撃力1100のゴ布林ゾンビを…?」

「さらにバトル。ゴ布林ゾンビで追撃」

ゾンビは短剣を取り出し、無防備なコナミに向かって斬りかかった。

「ぐっ…!?!」

コナミ LP4000→2900

「さらにゴ布林ゾンビの効果であなたのデッキトップのカードが墓地へ送られる」

ゾンビの呪いでコナミのカードが墓場へと埋葬されてしまう。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

レイン恵 LP4000

フィールド 『ゴ布林ゾンビ』（攻撃表示）

セット2

手札3

「先制ダメージを貰っちゃったか。だけど、ここからだ！俺のターン、ドロロー！俺はチューナーモンスター、ジェネクス・コントローラーを召喚するぜ！」

頭の左右にアンテナをつけたロボットがフィールドに降り立った。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「チューナー…」

「そして手札から魔法カード、アイアンコールを発動！俺のフィールドに機械族モンスターがいる時、墓地からレベル4以下の機械族モンスターを特殊召喚出来る。戻ってこい、ギガテック・ウルフ！」

地面に空いた穴から金属音を響かせながら、オオカミがフィールドに帰還した。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

（…来る。あなたを破滅へと導く絶望が）

「俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーが特殊な電波を飛ばし、ギガテック・ウルフの姿を変貌させていく。

「3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA・ジエネクス・トライフォース！」

ジエネクス・コントローラーが変貌したギガテック・ウルフの胸部にあるコアに装填される。突き出した右腕にある3つの装置のうち、オレンジのものが点灯した。

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

「炎属性をシンクロ素材にしたトライフォースは相手モンスターを戦闘で破壊した時、その攻撃力分のダメージを相手に与える！これで一気に……」

「…そうはいかない。私は先ほどあなたに言ったはず。あなたには絶望を味わってもらおうと。永続トラップ、調律師の陰謀を発動する！相手フィールドに特殊召喚されたシンクロモンスターのコントロールを得る！」

「な、何!?!」

フィールドに鐘が響き渡る。その音を聞いてしまったトライフォースは恵の方に行ってしまった。

「パラドックス。アンチノミー。アポリア。私に手を貸してくれた彼らはもう生きてはいない。それでも一人で戦わなくてはいけない辛さ。あなたにも味わってもらおう」

「く…まだだ！手札からオーバーロード・フュージョンを発動する！墓地のモンスターを除外して闇属性・機械族の融合モンスターを融合召喚するぜ！俺は墓地のキャノン・ソルジャーとギガテック・ウルフを除外！」

「キャノン・ソルジャー…ゴブリンゾンビの効果で墓地に」

「全てを発射する戦士よ、鉄屑のオオカミと一つとなり新たな力を手に入れる！融合召喚！その射撃で敵を射ぬけ、迷宮の魔戦車！」

青くコーティングされた機体の先端に赤いドリルが付けられた戦車が出陣した。

迷宮の魔戦車 攻撃力2400

「…私も足掻いた。あなたのように融合召喚に救いを求めたことも

あった」

「恵…」

「…私はトラップカード、ヘル・ポリマーを発動！私の場のモンスター、ゴブリンゾンビをリリースすることであなたの場に融合召喚されたモンスターのコントロールを得る」

「迷宮の魔戦車まで…!?!」

ゴブリンゾンビが火葬されていくと、その火が縄のように戦車に伸びていき、強引に恵の場に引っ張っていった。

「私は融合召喚を極めた。それでも破滅からは逃れられなかった。そこからゾーンは英雄伝説に救いを求めた」

「英雄伝説？」

「私達のいる未来にも伝わってきた。不動遊星が英雄として人々を突き動かし、世界を救った伝説が」

「遊星が…!?!」

「ゾーンは遊星のデータを集め、それを自らに移植した。元々あった人格や性別を消去し、完全に不動遊星として成り代わった。そして不動遊星として人々を救うために行った彼の活動は一時成功したかに見えた」

「…成功しなかったのか？」

「何もかもが遅すぎた。ゾーンが行った活動は人々を救うには至らなかった…。だからゾーンはこの時代に来た時、不動遊星に注目し希望を持っていった」

「ゾーンが遊星に希望を…」

「そして私達が来た影響からか鬼柳京介も進化を遂げた。ゾーンも希望を託しオーガ・ドラグーンを託した」

「あの石版はゾーンが降らせたのか…!?!」

「そう。…だけどこれも遅すぎた。人間には寿命がある。ゾーンはあなた達の進化を認めてはいる。だけどあなた達が未来を変える確証が無ければ、ゾーンはこの計画を変える気はない」

「…デュエルで見せてやるよ。俺たちが絶望を乗り越えることで証明してやる！」

「…デュエルを続行する。フィールドから墓地へ送られたゴブリンゾンビの効果でデッキから守備力1200以下のアンデット族モンスター、馬頭鬼めずきを手札に加える」

ゾンビの呼び声に応じ、恵の手に新たなモンスターがもたらされた。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP2900

フィールド 無し

セツト3

手札0

「私のターン。私は馬頭鬼を召喚する」

斧を振り回しながら、馬の頭をした鬼がフィールドへと降りて来た。

馬頭鬼 攻撃力1700

「バトル。まずは馬頭鬼でダイレクトアタック」

鬼は斧を振りかぶり、コナミへ振り下ろそうとする。

「させるか！速攻魔法、スケープ・ゴート！俺のフィールドに4体の羊トークンを特殊召喚する！」

黄色、青、ピンク、オレンジの色をした羊がフィールドを浮遊しました。

羊トークン×4 守備力0

振り下ろされた斧は青色の羊を切り裂いた。

「…とつさに壁モンスターを。だけどまだあなたのモンスターの攻撃が残っている。行って…！」

コナミの信頼する2体のモンスターが黄色とピンクの羊を突き飛ばしていった。

「くっ…！」

「私はこれでターンエンド」

レイン恵 LP4000

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示） 『迷

宮の魔戦車』（攻撃表示） 『馬頭鬼』（攻撃表示）

セット0 『調律師の陰謀』

手札4

「俺のターン、ドロー！俺は手札から命削りの宝札を発動する！このカードによって手札が3枚になるようにドローする！」

コナミは上から向かってくるギロチンを躲し、3枚のカードを手に収めた。

「カード・ブロッカーを召喚！こいつは召喚に成功した時、守備表示になる！」

小さな戦士が場に現れ、オレンジ色の羊を守るように盾を構えた。

カード・ブロッカー 守備力400

「カードを2枚伏せて…ターンエンドだ！」

「防御を固めてきた…。でもそれでは乗り越えることは出来ない」

コナミ LP2900

フィールド 『羊トークン』（守備表示） 『カード・ブロッカー』（守備表示）

セット4

手札0

「私のターン…私はフィールド魔法、アンデット・ワールドを発動する！」

「…！」

フィールドが闇に飲まれていき、フィールドのモンスターがアンデット化していった。

「このカードがある限り互いのフィールド、墓地のモンスターはアンデット族となり、手札からアンデット族モンスター以外のモンスターをアドバンス召喚することは出来ない」

「ますます不利に…」

「このままあなたを倒す。バトル。私はライフフォースでカード・ブロッカーを攻撃する」

ライフフォースが右手を突き出し、火炎放射を戦士に向かって放った。

「カード・ブロッカーの効果発動！デッキの上から3枚のカードを墓

地に送ることで守備力が1500アップする！」

「それでも…この攻撃は防げない」

戦士の盾が大きくなっていくも、火炎放射の威力に耐えきれず戦士はやられてしまった。

「そして…炎属性をシンクロ素材にしたトライフォースの効果発動」

「あつ…!?!」

「戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える…！カード・ブロッカーの攻撃力は400」

トライフォースの放った火炎放射がコナミを襲った。

「トライフォース…。お前の効果を俺が受けることになるなんて…！」

コナミ LP2900↓2500

「まだ攻撃は残っている。馬頭鬼で最後の羊トークンへ攻撃」

鬼の斧によってオレンジ色の羊も切り裂かれてしまった。

「そして迷宮の魔戦車でコナミにダイレクトアタック」

ドリルが回転していき、そのままコナミへと突っ込んでくる。

「俺は…。くっ！」

コナミは腕をクロスさせ衝撃を抑えようとするも、そのまま大きく後ろに飛ばされてしまった。

コナミ LP2500↓100

「今のあなたは信頼するモンスターに攻撃され肉体的にも精神的にも辛いはず…。」

「まだ…だ！トランプ発動、運命の発掘！俺が戦闘ダメージを受けた時、カードを1枚ドロウ出来る！」

コナミは傷ついた腕を伸ばし、カードを引き抜いた。

「だけどあなたのライフは残りわずか。次のターンで終わらせる。私はこれでターンエンド」

レイン恵 LP4000

フィールド 『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示） 『迷

宮の魔戦車』 『馬頭鬼』（攻撃表示）

セット0 『調律師の陰謀』『アンデットワールド』

手札4

「俺の…ターン！カード・ブロッカーの効果で墓地へ送られたキラー・スネークの効果発動！このカードは墓地から手札に戻すことができる！」

ヘビが地面を突き破り、コナミの手札へと加わっていった。

「そして俺はチューナーモンスター、A・ジェネクス・ケミストリを召喚！」

背中にタンクを背負い、タンクと繋がっている鉄砲を持った機械兵が現れた。

A・ジェネクス・ケミストリ 攻撃力200

「チューナー…でもシンクロ出来る素材は揃っていない」

「…それはどうか？俺はこのチャンスを待ってたんだ！トラップ発動、シンクロ・マテリアル！このターンのバトルフェイズを行えない代わりに相手のモンスター1体をシンクロ素材にすることができる！」

「私のフィールドのモンスターを…！」

「俺が選ぶのは迷宮の魔戦車だ！レベル7の迷宮の魔戦車にレベル2のA・ジェネクス・ケミストリをチューニング！闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアン！」

黒い蒸気機関車が姿を現し、蒸気を噴き上げた。

レアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「そしてレアル・ジェネクス・クロキシアンがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールドの1番レベルが高いモンスターのコントロールを得る！」

「なっ…。私のフィールドで最もレベルが高いのは…」

鐘によって操られていたトライフォースが蒸気をかけられて目を覚まし、コナミのフィールドへと戻っていく。

「トライフォースは奪い返させてもらったぜ！確かに一人で戦うのは辛すぎる。だけど俺たちは時間がある。そして仲間もいる。だから俺たちは絶望せずに未来を救ってみせる！」

「……！」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP100

フィールド 『リアル・ジエネクス・クロキシアン』（攻撃表示）

『A・ジエネクス・トライフォース』（攻撃表示）

セツト3

手札1

「私のターン、ドロ。……！」

恵がドロしたカードを見ると明らかに表情が険しいものへと変わっていった。

「コナミ。確かにあなたは絶望を乗り越えたように見える。だけどここからが本番、あなたはまだ乗り越えたわけではない。本当の絶望を……！」

「何だって……！」

「先ほど言ったように私は融合召喚を極めた。あなたのように融合召喚に救いを求めて。だけど、このカードでは解決することが出来なかった。でも私はこのカードで……あなたを倒す。手札のカードを1枚墓地に送り、私は手札から速攻魔法を発動する！」

突然フィールドに猛風が吹き荒れる。油断すれば簡単に飛ばされそうになるほどの風にコナミは必死に耐えていた。

「力を解き放て。——超融合！」

「超……融合だって？」

「このカードの効果でフィールドから任意のモンスターを選び、融合する！」

「フィールドのモンスターって……俺のモンスターも融合素材に出来るのか!？」

「そう。そしてあなたはこのカードの発動に対してあらゆるカードを発動することは出来ない！」

「なっ……それじゃあ防ぎようがねえじゃねえか！」

「その通り。本当の絶望は防ぐことが出来ないもの……！私はあなたのトライフォースとリアル・ジエネクス・クロキシアンを融合させる！」



あなたはこれをただ見ているしかない！」

「くっ。なんてカードだ……！」

コナミのモンスターを取り込み、現れたのは悪魔のようなツノが生えた邪悪なドラゴン。体がゾンビのように骨で形成され、翼は闇に染まっていた。

「…融合召喚。絶望をもたらせ、冥界龍 ドラゴネクロ！」

冥界龍 ドラゴネクロ 攻撃力3000

「何だこいつは…!？」

邪悪なドラゴンが低く唸るように咆哮をあげ、コナミを威圧した。この龍の力を前にコナミは立ち向かう事が出来るのだろうか……。

## 絶望がもたらすもの

レイン恵によって奪われたモンスターを取り返し、コナミは彼女の与えた絶望を抜け出したかに見えた。しかし、絶望の先に待っていたのはさらなる絶望だった。

「…融合召喚。絶望をもたらせ、冥界龍 ドラゴネクロ！」

彼女が破滅の未来に対抗する手段として手に入れた究極の融合魔法、超融合。それによって発生した渦はコナミの場の2体のシンクロモンスターを取り込み、闇によって覆われた邪悪なドラゴンを呼び出した。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻撃力3000

「何だこいつは…!？」

「このドラゴンは私が絶望に抗うために導き出した最後の足掻き。だけれどこのドラゴンも結局は希望となることはなかった」

「そうか…。今こいつは2体のシンクロモンスターを融合して現れた。これもシンクロモンスターの力を合わせる戦い方の一つってことか…」

「そしてあなたの場のモンスターはこれでいなくなった。加えてあなたのライフは100。これで終わらせる」

(…やべえ。俺の伏せてる3枚のカードはどれも攻撃を防ぐような効果を持つてるカードじゃねえ…!)

「バトル。ドラゴネクロであなたにダイレクトアタック。ソウル・クランチ！」

ドラゴンの纏う邪気が集約し、怨霊となって放たれた。

「……までなのか…?」

怨霊の集合体が地面を這うように近づき、コナミの足元までやってきた。その時、突然コナミの周りが光よって包み込まれていった。

「…クリアクリボー!？」

光の正体は自身の身体を発光させたクリアクリボーだった。クリアクリボーはコナミに向かって小さな手を必死に振り、何かを伝えようとしていた。

「…そうだよなクリアクリボー。前にカイバーマンにも言われたじゃねえか。どんな時でも恐れずデツキを信じて戦えつて。俺に出来るのはそれくらいだ！墓地のクリアクリボーの効果発動！ダイレクトアタックを受けた時、墓地のこのカードを除外することでカードを1枚ドロー出来る！」

「…カード・ブロッカーの効果で墓地に…」

「そして引いたカードがモンスターならそいつを特殊召喚して攻撃対象をそのモンスターに変更出来る…ドロー！」

コナミは迷いなくデツキからカードを1枚引き抜いた。

「来たぜ…俺が引いたのはUFOタートルだ！こいつを守備表示で特殊召喚！」

クリアクリボーの発する光から未確認飛行物体を背負った亀が現れ、コナミを守るように立ち塞がった。

UFOタートル 守備力1200

「そのあなたの足掻きすらさらなる絶望への引き金に過ぎない…。ドラゴネクロとバトルを行うモンスターは戦闘では破壊されない」「え…？」

怨霊は亀を攻撃することなく、四肢を掴んで身動きを取らせないようにならしていた。

「そしてバトルを行なったモンスターの攻撃力を0にし、そのモンスターの元々のレベル・攻撃力を持つダークソウルトークンを私のフィールドへ呼び出す！」

「UFOタートルの魂を吸い取るってわけか…！」

「そう。そしてあなたのモンスターは魂を吸い取られた抜け殻となり、その魂はあなたに襲いかかる…！」

「…そんなものはお断りだぜ！これ以上俺のモンスターを奪われてたまるか！トラップ発動、アルケミー・サイクル！このターンの終わりにまで俺のフィールドに存在する全ての表側表示モンスターの元々の攻撃力は0になる！」

「なっ…!?!」

亀の魂が幽体離脱によって怨霊の手から逃れていき、怨霊は魂を吸

い取ることが出来なくなる。

UFOターゲットル 攻撃力1400↓0

そして吸い取るエネルギーがないまま移し身のトークンが生み出されていく。

「…ダークソウルトークンを守備表示で特殊召喚する」

移し身のトークンは力を持たず、意思を持たない人形のようにフィールドに佇んだ。

ダークソウルトークン 守備力0

「よし…攻撃を躲したぜ！」

「まだ攻撃は残っている…！行って、馬頭鬼！」

鬼は斧を振るい、無防備な亀を切り裂いた。

「つと…！アルケミー・サイクルによって元々の攻撃力が0になったモンスターが戦闘で破壊され墓地へ送られたことでカードを1枚ドロウ出来る！」

「ただどここれであなたの場のモンスターは再び全滅した…！」

「いいや、そんなことはないぜ！UFOターゲットルの効果発動！このモンスターが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する事ができる！来てくれ、人造木人18！」

「…！」

亀の消滅によって未確認飛行物体が解放され、フィールドに浮遊していく。未確認飛行物体の下部から光線が降り注ぎ、頑丈な装甲を持ったロボットがゆっくりと降りて来た。

人造木人18 攻撃力500

「…だけど私の場にドラゴネクロが存在する限りあなたに勝利はない。私はこれでターンを終了する！」

レイン恵 LP4000

フィールド 『冥界龍 ドラゴネクロ』（攻撃表示） 『馬頭鬼』（攻撃表示） 『ダークソウルトークン』（守備表示）

セット0 『アンデットワールド』

手札3

「助かったぜクリアクリボー。お前がいなかったらここで俺はやられてた…」

クリアクリボーは笑いながらコナミの周りをくるくると回り、光の粒子となって消えていった。

「俺のターン、ドロー！ここは何としても引くわけにはいかねえ。デッキを信じて戦うなら…このカードだ！トラップ発動、無謀な欲張り！俺はデッキから2枚のカードをドローする！ただしこのカードを使った後、俺のドローフェイズは2回スキップされる！」

「そんな…無茶な」

「無茶でもしねえとお前の絶望は超えられねえからな。…ドロー！」

コナミはデッキから2枚のカードを思い切り引き抜いた。

「…行くぜ、恵！」

「…！」

「俺は手札から魔法カード、森のざわめきを発動する！このカードは相手フィールドにいるモンスター1体を裏側守備表示にする事ができるぜ！」

（狙いは…守備力0のドラゴネクロ？確かに守備表示なら倒すことは出来る。…けれども）

「ドラゴネクロはたとえ自身が戦闘で破壊されようともバトルしたモンスターの攻撃力を0にし、そのモンスターの魂を糧にダークソウルトークンを生み出す。ドラゴネクロを倒したとしてもライフ1000のあなたは…」

「勘違いしてもらっちゃ困るぜ。俺が裏側守備表示にするのは馬頭鬼だ！」

「え…？」

突如発生した突風に鬼は抗う事が出来ず、体勢を大きく崩してしまふ。

馬頭鬼（裏側守備表示） 守備力800

「さらに俺は森のざわめきのもう一つの効果を発動し、フィールド魔法を手札に戻す！」

「アンデットワールドが…!？」

腐敗したフィールドが浄化されていき、ゾンビのようにやつれていったモンスターも元に戻っていった。

「そしてバトルだ！人造木人18でダークソウルトークンに攻撃！」

UFOタートルの移し身は抵抗する事なく人造木人18の装甲で押し潰されてしまった。

「くっ…。だけどこれであなたの場に攻撃可能なモンスターはいない。バトルフェイズはこれで終わる…！」

「いいや、まだだ！トラップ発動、墓荒らし！こいつは相手の墓地にある魔法カードを1枚だけ俺の手札に加える事が出来る！」

「私の墓地の魔法カード？まさか…！」

「俺が手札に加えさせてもらったのはこのカードだ！」

恵の墓地から1枚のカードが飛び出し、コナミの手に収まる。そしてコナミは恵にそのカードを見せた。

「超融合…！」

「このカードで示してやるぜ。お前達が味わった絶望は決して無駄にはならねえってことをな」

「どういう…こと？」

「破滅の未来があったってことは少なからず俺達はその未来を変えられなかった過去があったってことだ。だからお前達イリアステルは未来を変えるためにここに来た。…けどな、お前達が俺達にその絶望を伝えたことで俺達は知る事が出来た」

「…何を？」

「その絶望を変える事が出来る可能性だ！何も知らなかったらそもそも変えること自体を考えられねえ。お前達が伝えてくれたからこそ、俺達はその未来を変える事が出来るんだ！」

「……。なら…示して」

「…！恵…？」

「あなた達が私達を超える事が出来ればそれはあなた達が絶望を超える可能性を得たことを示す」

「恵…もしかして」

「…違う。もしそれで力不足と判断されればアーククレイドルは地上に落ち、モーメントと共に大勢の人々も葬られる」

恵はコナミをしつかりと見据える。その目は静かにこの発言が嘘ではないことを物語っていた。

「…デュエルを続行。墓荒らしによって手に入れた魔法カードがプレイされればあなたは墓荒らしの効果によって2000のダメージを受ける。たとえ超融合といえども発動出来なくては意味はない…！」  
「…へっ。なら意味を持たせてやるぜ！手札からハネワタの効果発動！このカードを手札から捨てることで俺がこのターン受ける効果ダメージは0になる！」

「…墓荒らしの効果ダメージを打ち消した…」

羽の生えたけむくじやらの天使がコナミの頭上を舞い、光の鱗粉を降り注がせた。

「…行くぜ。俺は手札のキラーク・スネークを墓地に捨て手札から速攻魔法、超融合を発動する！」

フィールドに再び豪風が吹き荒れ、彼らの中心に巨大な渦が発生した。

「このカードはフィールドの任意のモンスターで融合する事が出来る。俺が融合させるのは人造木人18と…冥界龍 ドラゴネクロだ！」

「ドラゴネクロを使って…さらに融合!？」

風によって吹き飛ばれたロボットと彼女の絶望の象徴である邪悪なドラゴンが渦へと吸い込まれていき、頑丈な装甲とドラゴンの胴体が組み合わさった機械龍を生み出した。

「融合召喚！絶望を乗り越えろ…重装機甲 パンツアードラゴン！」

龍の体が鋼鉄でコーティングされていき、その姿を2人の前に見せた。

重装機甲 パンツアードラゴン 攻撃力1000

「まさかドラゴネクロを吸収してさらに融合するなんて…。だけど攻撃力は1000。その程度では…」

「それはどうかな？こいつの力、俺が引き出してやるぜ。まずは裏側

守備表示になっている馬頭鬼に攻撃だ！」

機械龍が口を大きく開くと砲台を覗かせ、放った鋭い弾丸が馬の面を被った鬼を貫いた。

「このターンだけでモンスターが全滅……」

（だけど恵のライフは未だ4000。対する俺は100。…次のターンで勝負するしかねえか）

「カードを2枚伏せて……ターンエンドだ！」

コナミ LP100

フィールド 『重装機甲 パンツアードラゴン』（攻撃表示）

セツト2

手札0

「私のターン、ドロー。たとえ超融合によって呼び出されたモンスターだとしても……負けるわけにはいかない。私は再び手札からフィールド魔法、アンデットワールドを発動する！」

フィールドが闇に覆われていき、地面やモンスターも腐敗していく。

「このフィールド魔法によってフィールドと墓地のモンスターはアンデット族となった。墓地に存在するドラゴン族のドラゴネクロも！」

「ドラゴネクロをアンデットに……」

「そしてアンデットは不死のモンスター。何度でも蘇り……何度でも襲いかかってくる。墓地の馬頭鬼の効果発動！墓地のこのカードを除外することで私の墓地からアンデット族モンスターを特殊召喚する事が出来る！私が呼び出すのはもちろん……」

腐敗した地面が崩れ、巨大な穴が空く。そこから怨霊を纏った邪悪なドラゴンが再び姿を現した。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻撃力3000

「ドラゴネクロが復活しやがったか……」

「絶望はまるでゾンビみたいは何度でも私達に襲いかかった。ドラゴネクロ……このモンスターを乗り越えなければあなたに可能性はない」

邪悪なドラゴンは低い唸り声をあげ、空気を震わせた。

「でも……もはや逃れる道はない。この攻撃で終わらせる！バトル。冥



界龍 ドラゴネクロで重装機甲 パンツアードラゴンに攻撃！ソウル・クランチ！」

邪悪なドラゴンから無数の怨霊が機械龍に向かって襲いかかっていた。

「…逃げる気なんかさらさらないぜ。立ち向かってやる！世界をひっくり返してでも乗り越えてやる！トラップ発動、リバーサル・ワールド…反転世界！」

時空が歪み、歪みはやがて空間へと侵食し亀裂を発生させた。

「これは…!?!」

「反転世界の効果によってフィールドの全ての効果モンスターの攻撃力、守備力は入れ替わる！」

「パンツアードラゴンの守備力は2600。ドラゴネクロの守備力は0。…だけど、甘い！ドラゴネクロとバトルしたモンスターは攻撃力が0になり、私の場に元々の攻撃力を得たダークソウルトークンを呼び出す。これで本当の終わり…!」

怨霊が機械龍を囲んでいき、魂を吸い取ろうとしていく。

「…恵。確か言ってたよな。デュエルが楽しいかどうか分からないって」

「…?確かに…言った。でもそれは私がロボットだったことで感情が無かったから」

「いいや、違うな。デュエルしててわかったぜ。恵が俺とデュエルした理由。それは俺をここで倒す事じゃない。俺に絶望を味わわせることで、その絶望を乗り越えるための力を手に入れさせるためだ！」

「…!」

「今思えばニューワールドとの試合の前に恵が俺にデュエルを提案したのは絶望を超えるだけの可能性があるかを確認するためだった。わざわざそんなことをする奴が感情が無いなんて思わねえ」

「ならばそもそもデュエルが楽しいか分からないという発言が嘘だっただけのこと」

「俺はそうは思わねえ。お前は今まで絶望と戦ってきた。そして最後の一人になっても戦った。そりゃ忘れちまうよな…デュエルは本当は楽しいもんだって」

「……」

「俺は遊星達がデュエルしてるのを見て楽しそうだと思ってデュエリストになったんだ。だから…俺のデュエルでお前を楽しませてやるよ！」

「…こんな時に楽しむなんて」

「こんな時、だからだぜ。行くぜ恵！これが俺の可能性だ！トラップ発動、仁王立ち！フィールドのモンスター1体の守備力を倍にする事が出来る！」

「…!?つまり…」

機械龍の胴体が巨大化していき、堅牢な壁として怨霊の侵攻を防いでいく。

重装機甲 パンツアードラゴン 守備力2600↓5200

「そして反転世界の効果発動！攻撃力と守備力がひっくり返るぜ！」

歪んだ空間に巻き込まれ怨霊を放っていた邪悪なドラゴンは他に伏し、機械龍の怨霊を防いでいた壁に無数の砲台が現れた。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻撃力3000↓0

重装機甲 パンツアードラゴン 攻撃力1000↓5200

「あの状況から…絶望を乗り越える一手を」

邪悪なドラゴンが地に伏したことで怨霊は消え去る。そして機械龍から砲撃が放たれ、ドラゴンを貫いた。

「あなたとのデュエルはやはり楽し…かった」

レイン恵 LP4000↓0

恵のライフが0になったことで彼女が守っていた遊星ギアが破壊された。そして遊星ギアと一体化していた恵も崩れ落ちていく。

「あ、危ねえ！」

とつさにコナミは走り出し、恵が地面に叩きつけられる前に支えることができた。その時、コナミは二つの事実気付いた。一つは彼女の内にモーメントが流れ、それをエネルギーに動いていること。そしてもう一つは……。

「モーメントの回転の音が弱え…。こんなんじや止まっちゃうぞ…！」

「…やむを得なかった。ゾーンの指示によって私の中にある未来のモーメントの一部をパラドックスに移すことになった時点で…覚悟はしていた」

遊星ギアが破壊されたことで太陽ギアに繋がる道が解放される。そしてその道から遊星ギアが破壊された時より大きな音が響いた。

「今のは…太陽ギアが開いた音。アポリア達もチーム5D'sに倒され、ゾーンへの道が開いたということ」

「お、おい…恵！」

コナミが支えている恵の身体が脱力していき、彼女が自分の身体を支えきれなくなっていることを感じさせる。

「私はあなた達に…未来を託す。あなた達なら未来を変えられると信じる。だから私は…安心して眠れる」

「…俺達は絶対に未来を破滅なんかさせねえ。だからお前も生きてそれを見届けてくれよ…！」

「…私も見届けたかった。だけど、どうしても未来の人々を救うには犠牲が出るのは避けられない。私はロボット、人間じゃない…私がいなくなっても問題はない」

「馬鹿を言うなよ！お前は人間だ！感情を持って自分の意思を持って行動してきたじゃねえか！」

「…コナミ。ごめんなさい…でも、ありがとう」

その言葉を最後に恵の口が閉ざされる。

「恵？」

コナミは彼女を揺らし、反応がないか探った。しかし、反応はない。

「…いや、まだ少しだけモーメントの音が聞こえてくる。本当に小せえが…」

彼女の動力源となっているモーメントは未だ動いていた。だが、聞こえてくる音はあまりにも頼りない。

「…俺はもしかしたら本当はゾーンを倒してアーククレイドルを止めに行かなきゃならねえのかもしれないねえ。確かに破滅の未来を変えるにはどうしても犠牲が出てしまうのは仕方ねえのかもしれないねえ。…だけだよ」

コナミは恵を持ったまま立ち上がった。そして彼女をDホイールに乗せ、そのままある方向へとDホイールを向けた。

「目の前の生きている人間を救えねえで破滅の未来なんか救えるかよ……！」

コナミは太陽ギアへと繋がる道ではなく入る時に使用した入り口の道の方へとDホイールを走らせた。ゾーンのことを鬼柳とチーム5D'sに託して。

「もし恵を助けられるとしたら……同じ体を持つ奴から助かる方法を聞き出すしかねえ！確かアポリアは5D'sの誰かに倒されたって恵は言ってた。なら……！」

入る時は長く感じた道だったが、何故か今のコナミにとっては一瞬のように感じられた。入り口を抜け出したコナミが向かったのは5D'sのメンバーが向かったであろうアーククレイドルに空いた穴から通じる道。しかし、その道は3つに分岐していた。

「……迷ってる暇はねえ。頼む、こっちであってくれ！」

コナミは空飛ぶDホイールを走らせ、自身が選んだ道へと向かっていった。その道がアポリアへと通じる道だと信じて。

## もう一つの戦い

コナミはDホイールをフルスピードで走らせて選んだ道突き進み、やがて一つの部屋にたどり着いた。

「アポリアはいるか?!?」

コナミは部屋を見渡す。しかしその部屋に人はおらず、あるのは部屋の一部が崩壊したことにより出来上がったガレキのみ。

「外れか……」

コナミは引き返そうとDホイールを反転させる。その時ガレキが崩れ落ち、コナミは振り返った。彼の目に映ったのは体の節々から火花を走らせたアポリアだった。

「…コナミか。何故貴様がここにいる?」

アポリアはガレキを払いのけ、コナミに近づいていった。

「……ゾーン……いや、レイン恵を倒したか」

アポリアはコナミのDホイールに乗せられたレイン恵に気づき、彼がここに来た目的を探った。

「貴様は他の遊星ギアを破壊しに来たのか?だが、見ての通り私は敗れた。パラドックスもアンチノミーもシェリーも敗れたらしい。ならば既にゾーンへ繋がる道は開かれたはずだ」

アポリアは自身を倒した3人のシグナーが通ったであろう太陽ギアへと繋がる道を指差した。

「俺がここに来た理由はそんなのじゃねえ。恵を…助けるためにここに来たんだ!」

「…何だと?」

アポリアは訳がわからないといった顔でコナミを見つめる。

「貴様は自分が何を言っているのか理解しているのか?」

「…ああ。俺はレイン恵という人間を救いたい。それだけだ」

コナミはアポリアの目を真っ直ぐに見つめ返した。

「本当に貴様らは訳が分からん。3人のシグナーは絶望を乗り越えるだけでなく敵であるはずの私に希望を与え、挙げ句の果てに貴様は敵であるレイン恵を救おうとしている。それは何故だ?」

「決まってるだろ。お前達は本当は敵じゃないからだ」

「…何を言っている。私達はアーククレイドルを墜落させることでネオ童実野シティを消滅させようとしているのだぞ」

「それはお前達が未来を救うためにやっつてることだろ？未来を救おうとするのは別に間違ったことじゃねえ。お前達が間違えたのは…やり方だけだ」

「……」

アポリアはルチアアノ、プラシド、そしてホセとして破滅の未来を防ぐためにこの時代で活動してきた。アーククレイドルを出現させるためのサーキットと呼ばれる回路を完成させるために動いたのも彼だった。しかし…サーキットを起動させ、この時代のモーメントを消滅させるのは最終手段のはずだった。アポリアはゾーンが不動遊星や鬼柳京介に希望を抱いていたのを知っていた。だがアポリアはゾーンの寿命が残り少ないという事実を知らされぬままゾーンが急にアーククレイドルの墜落を決定したため、どうしてもこのやり方に不信感を拭いきれないでいた。

「それより時間がねえんだ！どうしたら恵を救える？」

「…私達は未来のモーメントによって動いている。この時代のモーメントでは動かすことが出来ない。よって普通の方法ならば彼女を救うことは出来ない」

「何か特別な方法なら救えるのか!？」

「…ああ。一つだけある。だが、それには二つの条件を満たさなくてはならない」

「一体何をすればいいんだ？」

「その一つはサイコパワーを使える者がいることだ」

「サイコパワー…!?確かアキが使えるって遊星が言ってたけど…どうしてサイコパワーなんだ？」

「彼女はサイコパワーを破壊に用いていたようだが本来サイコパワーとは傷ついた者を癒す力。この力ならあるいは彼女のモーメントを復元させることが出来るかもしれない」

「なるほどな…。なら早速アキがいるところに！」

「待て。問題はもう一つの条件だ。レイン恵のモーメントは残りわずか。これを元通りにするにはさらにサイコパワーによって扱うカードをライフ回復系のカードとしなくてはならない。回復系のカードには衰弱したものを蘇らせる力があるからだ」

「安心しろ！回復系のカードなら俺のデッキに何枚かある！」

「いや、貴様の言うカードは恐らく自分のライフを回復するカードだろう。だがサイコパワーによって相手に力を与えたい場合は相手に干渉することの出来るカードでなくてはならない。つまり……」

「…相手のライフを回復させることの出来るカードじゃないと駄目なことか？」

「その通りだ」

コナミは自分のデッキを取り出し、相手のライフを回復させることの出来るカードを探す。しかし、通常のデュエルにおいて相手のライフを回復させることにメリットはない。コナミのデッキも例に漏れず相手のライフを回復させることの出来るカードは入っていないかった。

「言っておくが私のデッキにもそのようなカードはない」

「ど、どうすれば……！」

「…やはり諦めるのだ。彼女も停止するのを承知でデュエルを行なつたはずだ」

「そんなのは諦める理由にはならねえよ！俺はあいつを救ってやりた  
いんだ……！」

コナミは胸元のポケットに手を伸ばす。デッキにいれずとも彼は緊急時に備えて何枚かカードを持ち歩いていた。彼はそのカードに希望を託した。

「だが、相手のライフを回復出来るカードなどこの世に僅かだ。貴様がそのようなカードを持っている確率などゼロに近い」

コナミは諦めずカードを手取る。そして彼は一枚のカードに気がついた。かつてそのカードの持つ可能性を体感し、お守りのように常に持ち歩くことにしていたそのカードに。

「——それはどうかな？」

「モウヤンのカレー…だと？」

コナミがアポリアに見せたのはモウヤンのカレーというマジックカード。効果はライフポイントを200回復させるだけ、しかしコナミが求めていた数少ない相手のライフを回復させることの出来るカードだった。

「これなら恵を救えるよな？」

「あ、ああ…」

「よし！じゃあ行ってくるぜ！」

「…十六夜アキとクロウ・ホーガンはここから入り口に戻り、右側の道を通った部屋にいるはずだ。だが、遊星ギアを破壊した今そこにいるとは限らないが…」

「そう思い込んですれ違つちまうのが一番怖え。恵に残された時間はあまり長くない…だろ？」

「確かに…。彼女に残された時間はそう長くはないだろう。サイコパワーはあくまで衰弱したものを蘇らせるだけだ。停止を迎えたものを蘇らせることは…当然できない」

「なら急がせてもらうぜ！」

「…コナミ」

「ん？」

「今更私が言うには差し出がましい願いだ…。どうか彼女を救ってやって欲しい。過去のゾーンも…私にとっては親友なのだ」

「…ああ！絶対に救ってやる！」

そう答えるとコナミはDホイールを走らせ、アキの元へと向かっていった。

「…奴は奴のやるべきことをやりに行った。ならば私も私のやるべきことをやりに行こう」

アポリアは傷ついた体を動かし、ゾーンのいる太陽ギアへと続く道へと向かっていった。

一方、鬼柳は太陽ギアの入り口でチーム5D'sのメンバーと合流していた。



「…なるほどな。お前は俺達とは別ルートでアーククレイドルに突入したと言うわけか」

「そうだぜジャック。にしてもこんなガキまで命懸けの戦いをしなきゃならねえとはな」

「ガキじゃないやい！俺はシグナーとして龍可を守るんだ！」

「龍亞……」

彼の右腕にある心臓の形をした痣。それが彼が勇気を持って戦い抜いた証として刻まれていた。

「勇姿を見せてやりたかったぞ。こいつがいなければ俺達は勝てなかった」

「ジャック……！」

仲間を待ちながら情報を交換する彼らの元に一人の人物がたどりに着いた。

「遊星！」

「鬼柳……」

勝負に勝ち、ここまで進んできた遊星。しかし、彼の声に覇気は感じられなかった。遊星はその理由を彼らに告げた。

「ブルーノが…俺達の敵だったというのか？」

「…いや、違う！確かに俺とブルーノは戦わなくてはならなかった。だが、あいつは俺を信じてくれた。そして俺を助けるためにあいつは……」

彼らチーム5D'sのメンバーの一人が敵であったこと。しかし、本当は遊星に希望を持っていたこと。そして遊星を助けるために彼が犠牲になつてしまい、自分の仲間を失ってしまったことを遊星は引きずってしまっていた。だが、ジャックにだからこそブルーノの犠牲を無駄にははいけなと言われ、遊星はブルーノのためにもゾーンを止めることを決意した。

「…行こう！」

遊星は混乱していた自分の気持ちをまとめ、太陽ギアへと踏み出そうとした。

「ま、待って！遊星！」

「アキさんとクロウがまだ来てないの…」

「アキとクロウが…?」

「太陽ギアへの道が開かれてから随分時間が経っているぞ! あいつらは何をやっているのだ!」

「…でも遊星ギアが破壊されてるってことはあいつらも勝ったってことだろ? なら先に進んでもいずれ追いついて来るんじゃないやねえか?」

「…アーククレイドルが墜落するまでの時間は残り少ない。アキとクロウを信じてここは進もう」

遊星はアキとクロウを心配しながらも彼らを信じて仲間と共に太陽ギアへと進んでいった。

時を同じくしてコナミはクロウとアキが戦っていた部屋に到着していた。

「ここも部屋の一部分が崩れてガレキになってやがる…。ん? あのガレキの近くに誰か倒れてねえか!」

コナミは慌ててガレキへと近づいていく。そこに倒れていたのは金髪の見知らぬ女性とクロウだった。

「クロウ!? 何で倒れて…」

コナミの視界は完全に倒れた二人に向いていた。その死角から放たれた何かコナミに向かっていくのに気付くことは出来なかった。

「危ない!」

「…!?」

コナミはとっさにDホイールを宙に浮かせた。するとその真下を炎の玉が通過していった。

「ちっ! 余計なことを…」

「なっ…!?」

コナミは炎の玉が放たれた方向に目を向ける。そこにいたのは鎖によって身動きを封じられたアキと顔の右半分に大きな傷を負った見覚えのある男だった。

「ふふ…久しぶりだな。まさかこんなところで貴様にも会えるとは思わなかった。歓迎しよう…盛大にな! ファイヤー・ボール!」

その男は炎の玉を何発かコナミに向けて放った。コナミはDホ

イールの飛行機能を生かし、何とかかわすことに成功する。

「何でお前がこんなところにいるんだよ…!? デイヴァイン!」

その男の正体はダークシグナーとシグナーの戦いの際、コナミに敗れ収容所送りとなっていたアルカディア・ムーブメント総師、デイヴァインだった。

「おっと…貴様は知らなかったか。元々アルカディア・ムーブメントはイリアステルに対するレジスタンス組織なのだよ」

「そうなのか…!? いや、お前はそもそも捕まっただはずじゃ…?」

「今、街はアーククレイドルが墜落する非常事態。囚人も他の収容所への移動となった。その隙をついてデュエルディスクを奪い、サイコパワーでその場を離れるなど容易だ。馬鹿な奴らだ…目先の恐怖に怯えサイコデュエリストである私の警戒を怠るとはな」

「デイヴァイン…」

そんな彼を横から動きを封じられたアキが訴えるように見つめる。

「アキ…そこで少しの間我慢してるんだよ」

しかしデイヴァインは一切気にせず、コナミへとゆっくり近づいていく。

「その妙なDホイールのせいで私のサイコパワーは通用しないようだな。なら…これならどうだ?」

そう言つてデイヴァインはディスクを構える。

「貴様には拭いがたい屈辱を味わったからな。サイコデュエルで貴様に復讐してやろう…!」

（恵のモーメントはいつまで持つか分からねえのに…! 早い事アキを解放しねえと…）

「アキが気になるか? 私に勝てばアキを封じるこの鎖は解ける…。勝てたら話だな」

「…やるしかねえのか…!」

コナミはサイコパワーに備えDホイールに乗ったままデュエルの体勢に入った。その時、デイヴァインがコナミの後ろに乗っている恵の存在に気が付いた。

「その小娘は…。どうやら貴様が倒してくれたみたいだな。感謝する

ぞ。はははー！」

「どうゆうことだよー！」

「そいつは我々の計画をことごとく邪魔してくる厄介な存在だった。この前も私の脱獄を計画した可愛い部下達を無力化してくれたからな。貴様を倒した後はたつぷり礼をしてやらないとな」

デイヴァインは下卑た笑みを浮かべる。

「させるかよ……俺はお前を絶対に倒す！そして……」

コナミは後ろに乗る恵を見る。

(俺に希望を持ってくれた恵を助けてみせる！いや……助ける！)

そして互いに向かい合い、しばしの沈黙の後に開始の合図が部屋に響く。

「デュエル！」

様々な想いが交錯しながら、戦いの幕が切って落とされた。

## 理想のために

コナミとダイヴアインのデュエルが始まった頃、時を同じくして遊星達はゾーンと対面していた。ゾーンは遊星達に未来を変えるためには些細な犠牲は受け入れなくてはならないと告げた。

「アンチノミー…いや、ブルーノは最後までお前のことを信じていた！なのにお前はそれすらも些細な犠牲だということのか!？」

「それにパラドックスも息を引き取る寸前にお前のことを心配していた！ネオ童実野シティの消滅という道を選んだお前のことを案じていたんだ！」

遊星と鬼柳が必死にゾーンを説得しようとする。しかし彼は一瞬の間を挟んだ後、ゆっくりと首を横に振った。

「…彼らはよく戦ってくれました。より良き未来のために…犠牲になったのです」

「なっ…！」

ゾーンの答えに遊星は言葉を失った。仲間との絆を大事にしている彼には仲間であるブルーノの思いを必要な犠牲として捨て去ったゾーンの考えは受け入れられないものだった。

「納得がいかないようですね。ですがいざれあなたにも分かります。犠牲を伴わぬ救いなどこの世にはないのだと」

「そんなことはない！俺は…俺達は犠牲を良しとするお前の考えを認めはしない！」

「その考え方があなたがあなたのおごりなのです…。ですがそこまで言うならば良いでしょう。まずはあなたを倒し、私の考えが合っていることを証明して見せましょう」

ゾーンと遊星は向かい合い、互いにデュエルの構えに入ろうとする。だがそこに思いがけない人物がやって来た。

「…アポリア」

体の節々から火花を走らせながらもアポリアはゆっくりとゾーンへと近づいていく。

「不動遊星、鬼柳京介。ここは私がゾーンとデュエルを行う」

「何だと!？」

「…どういうつもりですか？」

「簡単なことだ。私は彼らから希望を与えられた。だからこそ君にもかつて持っていた希望を思い出して欲しいのだ」

「ゾーンが持っていた希望…？あつ！」

鬼柳はディスクから一枚のカードを取り出す。そのカードはかつてゾーンが鬼柳に与えたカード、煉獄龍 オーガ・ドラグーンだった。

「ゾーン、君はかつてこの2人に希望を抱いていたはずだ。そして彼らは申し分無い力を身につけた。だというのに何故君はアーククレイドルを落下させたのだ!？」

「ゾーンが俺達に希望を……」

「あなたも分かっているはずです。希望の先に待っているのは…絶望なのだ」と

「確かに私も以前はそう思っていた。だが私は…彼らが見せてくれた希望を信じたくなったのだ」

アポリアの言葉を最後に場に静寂が走る。互いの感情が渦巻く場で再び言葉を紡いだのはゾーンだった。

「…分かりました。アポリア、私とデュエルをしましょう」

「…!」

「あなたが私に希望を見せてくれればアーククレイドルの落下を止めましょう。ですがそれが叶わなければ…あなたともお別れです」

「ゾーン！お前はまた仲間を…!」

「待て。…これでいいのだ不動遊屋」

アポリアは遊屋と鬼柳を下がらせ、ゾーンと向かい合う。

「「デュエル!」」

アポリアはゾーンに希望を思い出させるため、ゾーンはアポリアに希望などないことを思い出させるために。それぞれの思惑が交わりながら彼らのデュエルは開始された。

一方、コナミとダイヴァインのデュエルが始まった瞬間、部屋の壁から二つの奇妙な物体が射出されていた。

「なっ…!」

とつさにコナミはDホイールを走らせ回避を試みるも奇妙な物体は彼を追うように加速していき、ついには寸分の狂いなく彼の胸に張り付いてしまった。対してデイヴアインは慌てることなく、当たり前のようにその物体を受け入れた。

「な、何だ!?!」

「これはこの部屋にあった仕掛けさ。デュエルによってライフが減るとそいつから毒が体内に注入されていく。まあライフがゼロにならなければ精々苦しいくらいだろうが…ゼロになれば致死量の毒が注入され衰弱した体は死を迎えるだろう」

「何だ?!?こんなもの外してやる…!」

「ふふ…やめておけ。無理に外せば命の保証はない」

「くっ…!」

「この仕掛けは本来ここに来たシグナーを迎え撃つために設置されたのだろうが何故か切られていた。どうやらこの部屋の主は相当甘い性格のようだな」

「シエリー…」

アキはこの部屋の主、シエリーが自分達に殺意を向けていなかったことを知り、デイヴアインに気絶させられ地に伏している彼女に目を向けた。

「私は甘くないぞ…。障害となる可能性があるものは確実に排除させてもらう。先攻は私だ!私のターン、ドロー!」

「…!」

「私はチューナーモンスター、メンタルシーカーを召喚する!」

近未来的なスーツに身を包んだ少年が不思議な力で宙に浮きだした。

メンタルシーカー 攻撃力800

「さらに速攻魔法、緊急テレポートを発動!このカードの効果によってデッキからレベル3以下のサイキック族モンスターを呼び出す!私が呼び出すのは調星師ライズベルトだ!」

次元の裂け目を突き破り妖怪のような使い魔を連れた禍々しい雰囲気青年がフィールドに降り立ち、自身の周りに魔法陣を出現させ

た。

調星師ライズベルト 攻撃力800

「これで場にチューナーと非チューナーが揃った…。来るか！」

「まだまだ。調星師ライズベルトは特殊召喚に成功した場合、フィールドのモンスター1体のレベルを3つまで上げることが出来る！私はライズベルトのレベルを3から6へ上昇させる！」

魔法陣から放たれた光が青年を包み込んでいくと、青年の風貌が段々と大人びていった。

調星師ライズベルト レベル3↓6

「これで準備は整った！私はレベル6となったライズベルトにレベル3のメンタルシーカーをチューニング！我が高ぶりし復讐の黒炎よ：その炎で全ての敵を焼き殺せ！シンクロ召喚！圧殺せよ、ハイパーサイコガンナー！」

白磁のような抜けるような白の重装備で身を固めた巨人が2丁のサイコガンンを握りながら現れた。

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3000

「1ターン目から攻撃力3000かよ…！」

「この程度で怖気ついたか？私は2枚のカードを伏せてターンを終了する！」

デイヴァイン LP4000

フィールド 『ハイパーサイコガンナー』（攻撃表示）

セット2

手札2

（恵には一刻の猶予も残されてねえ。ならリスクを負ってでも速攻でデイヴァインを倒す！）

「俺のターン、ドロロー！俺は速攻魔法、シンクロ・コントロールを発動するぜ！こいつは俺のフィールドと墓地にシンクロモンスターがない時にライフを1000払うことで発動出来る！」

コナミ LP4000↓3000

「ふふ…ライフを払ったか」

コナミのライフが減った瞬間、張り付いていた物体から胸に直接毒



が注入されていった。

「うぐっ…!？」

「コナミ!？」

コナミは突然の痛みに思わずDホイールのバランスを崩しそうになる。

「何が精々苦しいだけだ…。めちやくちや辛えじやねえか…!」

何とか気合いで持ち直すも呼吸は荒く、顔からは汗が滝のように流れていた。

「ふふ…どうした？ターンエンドか？」

「そんなわけあるか！シンクロ・コントロールの効果発動！このターンの終わりまで相手フィールドにいるシンクロモンスター1体のコントロールを得る！」

「何!?私の場のシンクロモンスターを奪うだと!」

「貰ってくぜ…お前のハイパーサイコガンナーを!」

光の輪がハイパーサイコガンナーを包み込んでいき、輪ごとコナミの場へと引つ張られていく。

「まさか…よりもよってその戦術とはな」

「…?」

「…トランプ発動!バスター・モード!」

光の輪によつて拘束されていたハイパーサイコガンナーが消え去ったかと思うとフィールドに雷が落ちる。抉れた地面の上に立っていたのは身体中に電気を帯びたハイパーサイコガンナーだった。

ハイパーサイコガンナー<sup>スラッシュ</sup>／バスター 攻撃力3500

「かわされた!？」

「バスター・モードは特定のシンクロモンスターをリリースすることでデッキより進化体を呼び出すカードだ。私はこのカードを使うことでハイパーサイコガンナーをリリースし、ハイパーサイコガンナー／バスターを呼んでいた。貴様が苦しい思いをしてまで使用したシンクロ・コントロールは不発というわけだ。はははは!」

「くそっ……まだまだ!ライフを800払って魔法カード、魔の試着部屋を発動する!」

コナミ LP3000↓2200

「そんな…!?ライフを払ったら…!」

コナミは再び毒を注入され、顔がさらに険しいものになっていく。「く…魔の試着部屋の効果でデツキの上から4枚のカードをめくりその中であつたレベル3以下の通常モンスターを場に呼び出す!」

4つの試着部屋のカーテンが開かれ、条件に合わなかった2つの部屋はロケットによってどこかへと飛ばされていった。

「俺は1枚目のレベル3通常モンスター、ジェネクス・コントローラーと3枚目のレベル2通常モンスター、ファイヤー・アイを特殊召喚…だ!」

頭の左右にアンテナを付けたロボットと炎の翼が生えた目玉が試着部屋から飛び出てきた。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

ファイヤー・アイ 攻撃力800

「そして俺はファイヤー・アイをリリースし、タン・ツイスターをアドバンス召喚するぜ!」

炎の目玉が消えていき、今度は舌が竜巻のように巻かれたモンスターが現れた。

タン・ツイスター 攻撃力400

「俺はレベル6のタン・ツイスターにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング!闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ!シンクロ召喚!汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアン!」

黒い蒸気機関車が汽笛を鳴らし、蒸気をダイヴァインの場に満たしていった。

レアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「何だ?」

「クロキシアンがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールドで一番レベルが高いモンスターのコントロールを得るぜ!」

「ほう?」

「お前の場にはレベル11のハイパーサイコガンナー／バスターしか

いねえ！これで一気にカタをつけるぜ！」

蒸気力でハイパーサイコガンナー／バスターがコナミの場に押し出されていく。

「…懲りない奴だ。私は手札からタイム・エスケーパーを捨て、効果を発動する！次の私のスタンバイフェイズまでハイパーサイコガンナー／バスターを除外させてもらう！」

ハイパーサイコガンナー／バスターが小人に腕を掴まれると発生した次元の裂け目に投げ込まれてしまった。デイヴアインの場に充満していた蒸気は行き場を失い、消滅していく。

「またかわされた!？」

「当然だ。そんな戦術は既に対策している」

「まさか……」

アキが何かに気づき、目を大きく見開いた。

「さすがはアキ。私の戦術の意図に気付いたようだな」

「デイヴアイン……。あなたのカードは機皇帝を対策したものね」

「あつ！」

「ふふ…その通りだ。ここに乗り込めば戦うことになると思ってね。まさか貴様相手に使うことになるとは思わなかったがな。さて…次はどうする?。」

「くつ…。アドバンス召喚したタン・ツイスターが墓地に送られた時、このカードを除外することで2枚のカードをドロー出来る!…バトル！クロキシアンでダイレクトアタック！」

デイヴアインへの線路が現れ、蒸気機関車はスピードを上げて突進していく。

「…ふん」

デイヴアイン LP4000↓1500

デイヴアインは後ろに大きく飛ばされ、同時に彼にも毒が注入されていった。

「くっ…この程度か」

デイヴアインは一瞬苦しみの表情を浮かべるも、何でもないように装い体を起こしていく。

「お前…苦しくないのか？」

「こんなことより苦しいことなどいくらでもあった。貴様には以前話しただろうか？」

「サイコデューエリストは生まれつき特別な能力を持っているから変異者として一般人に差別されてきたって話か……」

「…っ！」

アキは思わず息を飲んだ。遊星と会う前の彼女は親から“化け物”と言われ傷ついた心を自分では抑えきれないことがあった。

「なあ…アキ？君も辛かっただろう。一般人に忌み嫌われ、親しい者にも恐れられる苦しみを君は知っているはずだ」

「それは…確かに辛かったわ。でも！私は遊星に受け止めてもらった。そして彼に指し示してもらったのよ。恐れず諦めなければ途中でどれだけ困難が立ち塞がってもいつかは分かり合うことが出来るって！」

遊星を介してアキは親との間に絆を感じることが出来た。そして彼女は知った。自分は今まで諦めていたのだと。また“化け物”と言われるかもしれない。その恐怖に負けて全てを諦めて拒絶していたからこそ親との溝を広げてしまったのだと。

「アキ……」

「…ふ。他人に考えを任せ依存する癖は治っていないか」

「なっ…!？」

「いいかい。君のことも勿論私は調べてある。君が両親と仲直りした話もね。確かに君はそれでいいかもしれない。でも世のサイコデューエリストがそれで全て上手くいくわけではない。君の親のように分かりあおうと歩み寄る者などごく少数に過ぎないのだよ」

「どうゆうこと…？」

「分からないとは言わせないよアキ。たとえサイコデューエリストであつても他人に歩み寄ろうとした者はいた。だがその末路のほとんどは…拒絶だ。ある意味奴らにとっては当然なのだろう。私達は“化け物”なのだから」

「うっ…」

支えてくれる者がいるアキにとってはあまり気にすることではなかったが、彼女の周りにも未だ自分のことを恐れる人はいた。仕方ない…彼女は自分にそう言い聞かせ、出来るだけ怖がらせないように振る舞っていた。

「一般人どもは私達を恐怖の対象として見ている。貴様にはその理由が分かるか？」

デイヴアインはあえてアキではなくコナミに向かって聞いた。

「え…？サイコパワーが万が一自分に使われることを考えると怖いから…じゃないのか？」

「表面上はそうだろう。だが…実際は違う。奴らは私達が異端者…つまり“化け物”だと認識することで自分達が普通だ、世の中から外れていないんだと認識しているのだ」

「自分達が世の中から外れていない…？」

「前提として人間には差別本能がある。これは避けられない。これがあまり表面に出ないのは理性があるからだ。例えば自分の好みで差別を行い、それが公に出れば世の中から差別を行なった人間が悪者だと評価される。だが…サイコデュエリストという誰から見ても“化け物”という存在がいればどうだ？」

「…まさか」

「そうだ。サイコデュエリストを差別しようと誰からも批判されない。“化け物”はむしろいい的だ。アキ、フォーチュンカップで君が黒薔薇の魔女として出場した時のことを覚えているかい？」

「覚えて…いるわ。観客は皆好きなように私のことを否定していた。あ、ああ…！」

その時のことを思い出しアキの顔が恐怖で歪んでいく。フォーチュンカップの時、彼女は仮面を付けていた。その恐怖にまともに向き合うことは出来ないと感じていたから。

「すまない、アキ。私だって君を苦しめたわけではない。私が恨みがあるのは差別をする奴らだけだ」

「…デイヴアイン」

デイヴアインはコナミに向き直り、話を続ける。

「それにサテライト出身で犯罪者の証であるマーカを付けた不動遊星も奴らの差別対象だった。だというのになんだ。アキと不動遊星の対戦の時奴らはどうしたと思う？今まで否定してきた不動遊星にあらうことか応援をし、魔女を倒すように仕向けたんだ。：あまりに勝手だと思わないか？」

「：確かに。それは勝手だと思わず」

コナミはフォーチュンカップを直接見てはいないが、フォーチュンカップが終わった時に遊星が観衆にブーイングを受けていたのを見ていた。

（アキが反論しないところを見るに多分ディヴァインの言ってることは本当なんだろうな。だとするとアキとの試合の後は遊星はまた差別されたわけだ。確かに勝手だな。：けど）

「だから私はイリアステルの力を得て歴史の改ざんを行おうと思ってる。差別のない完全平等の社会へと変えるのだ！貴様も素晴らしい考えだと思うだろう？」

ディヴァインの理想はサイコデュエリストのための世の中を作り出すこと。そのために彼が出した結論こそが差別のない完全平等の社会だった。

「：…：悪いな、ディヴァイン。俺はその考えには賛成出来ないぜ」

「ふふ…：やはり貴様のような者には理解が出来ぬか」

「いや、違うぜ。確かにお前の言い分は理解した。だけど納得は出来ないぜ。お前は差別を無くすためにイリアステルの力で歴史を変えようとしている。それってさ…：分かり合うことを諦めちまつたってことじゃねえかな」

「：…何だと？」

「アキが言ってたじゃねえか。恐れず諦めなければどれだけ困難が立ち塞がってもいつかは分かり合えるって」

「それは無理だと言っただろう。奴らのほとんどはサイコデュエリストを拒絶した。世の中自体がサイコデュエリストを“化け物”だと認識しているからだ。だからこそ私は変えるのだ。世の中ごとく！」

「それが諦めてるって言ってんだよ！世の中がサイコデュエリストを

“化け物”扱いしてるっていうならその認識をひっくり返すために活動しろよ！お前は受け入れられないことを恐れて認識自体をぶっ壊そうとしているだけだ！」

「貴様ああ……この私がそんなものを恐れているというのか！第一貴様はサイコデュエリストですらない！そんなお前の言葉など……」

「確かに俺はサイコデュエリストじゃねえ。だけど……差別は受けてきた。サテライトの人間としてな」

「なっ……!?!」

その事実は所詮はサイコデュエリストでない者の軽い言葉だというデイヴアインの認識を変えるには十分だった。彼もサテライトの人間が差別を受けていることはフォーチュンカップでの不動遊星の姿を見て十分に知っていたから。

「それでも俺はシティに来てトップスの人間に掛け合った。サテライトはシティと違って一日生きるのすら苦労してたからな。ちゃんとそいつは理解してくれたぜ。サテライトとシティの間にあった格差のことをな。そして俺達はサテライトで貧困に苦しむ人達を助けていった。その活動が伝わったからかいつの間にかサテライトとシティの間にあった格差は次第になくなっていった……」

「……だから私にもそうしろ、と?」

「ああ」

「ふ……馬鹿馬鹿しい」

「……!」

「私には今更そんな考えは受け入れられない。あともう少しでイリアステルの力が手に入るのだ……! 貴様やイリアステルという犠牲を払ってでも私は私の描く世界を手に入れる! さあ、デュエルを続けろ!」

「くっ……カードを1枚伏せてターンエンドだ!」

コナミ LP2200

フィールド 『リアル・ジエネクス・クロキシアン』

セット1

手札4

「私のターナー！この瞬間、タイム・エスケーパーによって除外されたハイパーサイコガンナー／バスターが帰還する！」

異次元の裂け目から雷が放たれ、落雷によって焦げた地面にハイパーサイコガンナー／バスターは着地していた。

ハイパーサイコガンナー／バスター 攻撃力3500

「バトルだ！ハイパーサイコガンナー／バスターでクロキシアンへと攻撃する！」

サイコガンから放たれたのは電気を帯びた無数の光線。光線によって蒸気機関車は跡形も無く消滅してしまった。

「ぐあっ…!？」

サイコデュエルの衝撃と共にコナミに毒が注入され、コナミはDホイルを制御しきれず地面へと墜落していつてしまう。

コナミ LP2200↓1200

「終わりだ！ハイパーサイコガンナー／バスターの効果発動！こいつがバトルを行なった時、戦闘した相手モンスターの守備力分のダメージを相手に与え、私はそのモンスターの攻撃力分のライフを回復する！」

「何?!クロキシアンの守備力は2000…!？」

墜落を阻止しようとするコナミに向かってハイパーサイコガンナー／バスターの持つもう一丁のサイコガンから光線が放たれた。

「コナミ…!？」

とっさにアキが声をあげるも光線は無慈悲にコナミへ向かっていった。



## 自分が信じられるもの

コナミの命を絶とうとハイパーサイコガンナー／スラッシュバスターの持つサイコガンから光線が放たれていた。

「コナミ…!?!」

アキが声をあげる間にも光線はコナミへと向かっていく。光線は着弾し、コナミをDホイールごと爆風で包み込んだ。

「勝った…!」

「そんな…!」

爆風からDホイールが抜け出し、地面に向かって落ちていく。そしてDホイールが地面に接触し…そのまま地面を駆け出した。

「何だど?!」

「けほっ、けほっ…助かったぜクリアクリボー」

コナミは上を見上げ、光線から自分を守ってくれた精霊に礼を言った。礼を受け取ったクリアクリボーは笑顔を見せ、分裂させていた体を一つに戻してどこかへと消えていった。

「馬鹿な…! 貴様はハイパーサイコガンナー／バスターのモンスター効果によってクロキシアンの守備力2000分のダメージをくらい、ライフを失ったはずだ!」

「俺はそいつに対して手札のクリアクリボーの効果を発動していたのさ! クリアクリボーは相手がダメージを与えるモンスター効果を発動した時、手札から捨てることでそのモンスター効果の発動を無効に出来る!」

「上手い! 発動が無効になったことでハイパーサイコガンナー／バスターのライフ回復効果も封じたわ!」

「ちっ…。無駄な足掻きを!」

「だけど俺はその足掻きのおかげで生き延びたぜ! デイヴアイン…お前は足掻いてるか!?!」

「何を言っている? 私が足掻く必要などあるまい」

「あるさ…。お前達サイコデュエリストは“化け物”として認識されている。だからこそそんな認識をひっくり返すためには歴史改変な

んかよりも足掻いてでも誰かに自分のことを認めてもらう必要があるだろ！」

「そんな必要などない！それこそ無駄な足掻きだ。私を受け止められるものなどいない！」

「…そんなことはないわ！デイヴアイン……」

「アキ？」

アキの声は震えていた。彼女の耳には自分の歯がガクガクと鳴っているのが聞こえていた。

「ふふ…アキ。まさか君が私に反論するなんてね」

デイヴアインはアキに近づいていく。そして彼女の顎あごにゆつくりと触れた。

「いけない子だ。このデュエルが終わったらあの頃のアキに戻してあげよう」

(デイヴアイン。昔あなたは私を騙し、道具としてアルカディア・ムーブメントを成長させるために使った。けれど…それでもあなたは受け止めてくれた。父親に“化け物”と恐れられ、傷ついた私を受け止めてくれた。確かに利用するためだったのかもしれない。それでも……)

「アキ!?危ねえ！」

デイヴアインがアキに危害を加えると思ったコナミはとつさにデイヴアインに近付こうとした。しかし、彼女の一言で思わずDホールを止めてしまった。

「デイヴアイン。私は…あなたを受け止められるわ」

「…何？」

デイヴアインはまるで信じられないものを見たかのように大きく目を見開いた。

「何を言っているんだアキ？私が君のことを騙していたことを今更知らないわけではないだろう？」

「ええ、知っているわ。だけどあなたに考えを委ね何も考えなかった昔じゃなく、今だからこそ分かるの。あの時あなたが私を受け止めてくれたのは…あなたの本心だったことを」

「な……！」

アキの震えが収まっていく。彼女はかつて遊星が自分のことを受け止めてくれたようにダイヴアインを受け止めようと決意を固めていた。

「あなたは確かに非道な人だった。使えないと判断した人には容赦の無い人だった。けれど……あなたは私のように“化け物”と言われ、行くあてもなかった多数のサイコデュエリストをアルカディア・ムーブメントに迎えていた」

「……当然だ。イリアステルの力を得るためにサイコデュエリストを兵器として育てていたのだからな。その計画はその小娘に潰されてしまったが……」

頑なにダイヴアインはアキの言葉を否定する。しかしアキは首を横に振り、それをさらに否定した。

「あの時は分からなかった。この不思議なつながりを表す言葉を私は知らなかった。……でも今なら分かるわ」

「やめろ……」

ダイヴアインはアキから手を離し、後ずさっていく。まるで何かに怯えているかのように。

「私達の間にもあったのよ。——絆。あなたの中にも他人を思いやる気持ち……」

「やめろと言っていているだろう！私は……私は認めないぞ！“化け物”として扱われたあの日から……私は誰も信じないと誓った！信じられるのは自分の力だけだ。ましてや私が人を思いやるだど？そんなことあるはずが……」

「恐れないで……ダイヴアイン！」

「……!?!」

「恐れず諦めなければ途中でどれだけ困難が立ち塞がってもいつかは分かり合うことが出来る。私を……信じて！」

アキの言葉にダイヴアインは一瞬固まる。だが彼はすぐに結論にたどり着いた。

「……私が信じられるのは私だけだ！アキ……君にも私を受け止められるは

しない!」

「そんな……!」

(ディヴァインに私の思いを届けることが出来なかった…。遊星…私  
はあなたのようにはなれないの?)

アキが失意に沈みそうになる。しかし、その前に声を張り上げたも  
のがいた。

「ディヴァイン!デュエルで…俺に気持ちをぶつけてこい」

「何だと?」

「デュエルで…」

コナミの言葉でアキは遊星が自分のことを受け止めてくれた時の  
ことを思い出した。

(そうだったわ…。遊星はデュエルで私の心の叫びを受け止めてくれ  
た!自分でも制御出来なかった気持ちの暴走に立ち向かってくれた。  
なら今のディヴァインを受け止めるには…!)

「ふん。貴様に指図される謂れなどない。私は永続トラップ、安全地  
帯をハイパーサイコガンナー/バスターを対象に発動する!この  
カードによってハイパーサイコガンナー/バスターはあらゆる破壊  
を受け付けず、相手の効果の対象にもならない!」

「何い!?!」

ハイパーサイコガンナー/バスターが出現した電子空間に閉じ込  
められてしまった。

(シンクロモンスターを対象に吸収する機皇帝の対策として入れてい  
たこのカードだが…安全地帯か。安全なところに避難し、サイコデュ  
エリストを差別する一般人のようで実に不愉快なカードだ。ならば  
…壊してやろう)

「さらに私は手札から速攻魔法、サイクロンを発動する!このカード  
は場の魔法または罠カードを1枚破壊する!」

(俺の伏せてるトラップカード、リボン・パズルは破壊されるか…)

「私は安全地帯を破壊する!」

「何だと!?!」

電子空間を包み込むほどの台風が発生し、その強風に電子空間は存

在を保ち続けることが出来ず消滅してしまう。そして電子空間に取り込まれていたハイパーサイコガンナー／バスターも共に消滅してしまい、フィールドに残ったのは身につけていた白い装備だけだった。

「安全地帯が場を離れた時、その対象となったモンスターは破壊される」

「一体何をやる気だよ…!?!」

「破壊するのだ…私が信じられないものは全てな！ハイパーサイコガンナー／バスターのもう一つの効果を発動！このカードが破壊された時、墓地のハイパーサイコガンナーを呼び戻す！」

「…!?!」

フィールドに散らばっていた装備が空中のある一点に浮き、そこを中心に光の粒子が集まっていった。そして光の粒子が時間と共にあるべき姿へと変化していった。

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3000

「嘘だろ…」

「そして今はまだ私のバトルフェイズだ。貴様の足掻きは無駄だったということ嫌でも身に染み込ませてやろう。ハイパーサイコガンナーで貴様にダイレクトアタックをする！」

ハイパーサイコガンナーは2丁のサイコガン融合させ電磁を帯びた剣へと変え、コナミにその剣を振り下ろすべく向かっていった。

「まだまだ…まだ俺は足掻けるぜ！相手がダイレクトアタックしてきた時、墓地のクリアクリボーを除外することで俺はカードを1枚ドロウ出来る。ドロウしたのがモンスターカードならそいつを特殊召喚して攻撃対象をそのモンスターに変更するぜ！」

「小賢しい真似を！」

「行くぜ…ドロー…ふう。ドロウしたのは人造木人18いんぼち！モンスターだ！こいつを守備表示で呼ぶぜ！」

頑丈な装甲を身につけたロボットがハイパーサイコガンナーからコナミを守るように立ち塞がった。

人造木人18 守備力2500

「ちっ…悪運の強いやつめ。だが逃しはしないぞ！ハイパーサイコガンナーの効果により攻撃力が守備力を超えていればその分だけ貴様に貫通ダメージを与え、私はその数値分のライフを回復する！」

「やべえ…！」

ハイパーサイコガンナーの振るった剣は頑丈な装甲を容易く切り裂き、その衝撃はコナミにも及んだ。

「ぐうっ!？」

コナミ LP1200↓700

コナミはサイコデュエルによるダメージを受けさらに体に毒が回ったのに対し、

「ふはははー！」

デイヴァイン LP1500↓2000

デイヴァインはライフを回復し、コナミとの差を確実に広げている。

「私は場にカードを1枚伏せ、ターンを終了する。ふふ…顔色が悪いぞ？」

(これ以上は…やべえ。ただでさえ、恵とのデュエルでのダメージが抜けきってねえのに…！くそっ、持ってくれよ俺の身体…！)

デイヴァイン LP2000

ワールド 『ハイパーサイコガンナー』(攻撃表示)

セット1

手札0

「俺のターン、ドロ―！俺は…チューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚する！」

激しい突風を巻き起こしながら翼も胴体も白く染まったドラゴンがコナミの場に飛翔した。

デブリ・ドラゴン 攻撃力1000

「デブリ・ドラゴンが召喚に成功した時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚出来る！戻ってこい、人造木人18！」

ドラゴンがさらに翼を羽ばたかせ、突風で地面に穴を空けると風に

押し出されて頑丈な装甲を身につけたロボットがフィールドに押し戻された。

人造木人18 攻撃力500

「シンクロ召喚に必要なモンスターを揃えたか…」

「俺はレベル5の人造木人18にレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼の銀龍！」

青く澄んだ瞳を持った白きドラゴンが突風を突き抜け、咆哮をあげた。

蒼眼の銀龍 守備力3000

「ち…あの時の忌々しいドラゴンか」

「銀龍が特殊召喚に成功したことで効果が発動するぜ！次のターンの終わりまで銀龍はカード効果では破壊されず、効果の対象にもならない！」

「そのモンスターで時間を稼ぐ気か。随分と消極的だな」

（恵に残ってる時間は少ない。…だけどここで焦ればあいつには勝てねえ！頼むぜ…銀龍！）

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP700

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示）

セット2

手札2

「私のターン…パワー・インジェクターを召喚する！」

腕に取り付けた機械から伸びたコードが直接体に突き刺さったサイボーグが現れる。

パワー・インジェクター 攻撃力1300

「よし…。銀龍の守備力を超えるモンスターは出なかったか」

「馬鹿め。私は600のライフを払い…！パワー・インジェクターの効果が発動する！」

デイヴァイン LP2000↓1400

デイヴァインが注入される毒に苦しみながらも、パワー・インジェ

クターのサイコパワーを解放させた。

「パワー・インジエクターの効果によりこのターン私の場の全てのサイキック族モンスターは500上昇する！」

「……」

パワー・インジエクターが声にならない叫びをあげながら、デイヴアインの場を自らのサイコパワーによって満たしていった。

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3000↓3500

パワー・インジエクター 攻撃力1300↓1800

「そんな……。これじゃあコナミの呼び出したドラゴンでも防ぐことは出来ない！」

「バトルだ！ハイパーサイコガンナーで貴様のドラゴンを粉碎する！」

ハイパーサイコガンナーは満ちていくサイコパワーを取り込み、力を増幅させた剣を銀龍の翼めがけて振り下ろした。

「まずはハイパーサイコガンナーの効果で貫通ダメージをくらえ……！」

「くらうわけにはいかねえ！速攻魔法、ピラミッドパワーを発動！このターン俺のフィールドにいるモンスターは守備力が500アップする！」

「何!?!」

コナミのフィールドに光で形成されたピラミッドが完成し、白銀の翼がピラミッドに宿る力を受け巨大化していった。

蒼眼の銀龍 守備力3000↓3500

「受け止める銀龍！」

振り下ろされた剣は巨大化した銀龍の翼に挟み込まれ、白刃どりによって防いだ形となった。

「ちい……」

「どうだデイヴアイン！俺にだってお前のことを受け止めることは出来るんだぜ！」

「……ふん。かろうじて防いだくらいで何を言う。私はこれでターンを終了する！この瞬間パワー・インジエクターの効果が切れ、攻撃力は



元に戻る」

「ごつちもピラミッドパワーの効果も切れて守備力は元に戻る…」

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3500↓3000

パワー・インジエクター 攻撃力1800↓1300

蒼眼の銀龍 守備力3500↓3000

デイヴァイン LP1400

フィールド 『ハイパーサイコガンナー』（攻撃表示） 『パワー・イ

ンジエクター』（攻撃表示）

セット1

手札0

「俺のターン、ドロー！この瞬間、銀龍の効果が発動するぜ！墓地の通常モンスター、ジェネクス・コントローラーを復活させる！」

頭の左右にアンテナがついたロボットが銀龍の羽ばたきに押し出されフィールドに帰還した。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

（…後ろに乗ってる恵のモーメントがさらに弱まってやがる。もうほとんど時間は残ってねえ。…やるしかねえのか！）

「俺は手札からギガテック・ウルフを召喚する！」

鉄屑で作られたオオカミが金属音と共に場に降り立った。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「そしてレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

「これは……」

ジェネクス・コントローラーが特殊な電波を飛ばし、ギガテック・ウルフの姿を変えていく。

「3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ！シンクロ召喚！燃やし尽くせA・ジェネクス・トライフォー  
ス！」

ジェネクス・コントローラーが変貌したギガテック・ウルフの胸部にあるコアに装填される。突き出した右腕にある3つの装置のうち、オレンジのものが点灯した。

A・ジエネクス・トライフォース 攻撃力2500

「だがそんなモンスターではパイパーサイコガンナーを倒すことは出来ないぞ」

「パイパーサイコガンナーは倒せなくてもお前の場にはもう1体モンスターがいるだろ！バトルだ！トライフォースでパワー・インジエクターに攻撃するぜ！」

トライフォースは右手を突き出し、火炎放射を放った。パワー・インジエクターはなすすべなく炎によって燃え尽きてしまう。

ダイヴァイン LP1400↓200

「ぐっ……！」

「そして炎属性をシンクロ素材にしたトライフォースの効果を発動だ！相手モンスターを戦闘で破壊した時、その攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「……！」

「パワー・インジエクターの攻撃力は1300。これが通ればダイヴァインは……」

トライフォースがさらに火炎放射をダイヴァインに向かって放つ。

「ダイヴァイン……」

思わずアキがダイヴァインの名を呼ぶも既に火炎放射はダイヴァインの至近距離まで近づいており、彼に避ける術はなかった。

## 最後の足掻き

トライフォースの放った火炎放射がダイヴァインに向かっていき、既にダイヴァインの至近距離まで近づいていた。

「ダイヴァイン……」

「……」

ダイヴァインは向かってくる炎を避けることなく、その身で受け止めた。

「これでダイヴァインに1300のダメージが入った……！俺の勝ちだ！」

ダイヴァインを包んだ炎が次第に消えていく。その中にいたダイヴァインは……まだ立っていた。

「貴様の……勝ちだと？笑わせる。私が貴様ごときに2度も負けてなるものか！」

ダイヴァイン LP2000↓1400

「ダイヴァインのライフが……!？」

「そんな馬鹿な!?トライフォースの効果で確かにダイヴァインにダメージを与えたはずだぜ？」

「そのトライフォースは今や無残な姿だがな……」

「何!？」

コナミが慌てて目を向けるとトライフォースは内部から破壊され、破損した部品が散らばっていた。

「私は貴様の発動した効果が及ぶ前にこのトラップカードを行使していたのだ……。トラップカード、念導力をな。このカードは私のサイキック族モンスターが戦闘によって破壊された時に発動でき、攻撃した相手モンスターを破壊し私はその攻撃力分のライフを回復する!」「トライフォースの攻撃力は2500。その攻撃力分回復していたからその後の効果ダメージを受けきれたのね……」

「そういうことだ。貴様の攻撃は無駄に終わったな……!」

「無駄か……。そんなことはないぜ。今の攻撃で分かったことがあるじゃねえか」

「分かったことだと…？一体何のことだ？」

「それはお前がちゃんと足掻けるってことだ！その足掻きがあれば変えられるはずだ…社会のサイコデューエリストへの認識だってな」

「それは無駄だと言っただろう…。今のお前の攻撃のようにな。私は大勢のサイコデューエリストが社会によって拒絶されたのを知っている。そんな社会に私達を認めてもらうために足掻こうと無駄に決まっている」

「どうかな…。確かに認めてもらうのは簡単なことじゃねえ。だけど…それでも理解してくれるやつは絶対にいる」

コナミはデイヴアインの立場を昔の自分と重ね合わせていた。サテライトは裕福なシティとは違い、食事やカードもロクに手に入らず毎日生きるのだけで精一杯だった。そんなサテライトに住む人々はシティに住む人々から差別され、セキュリティからは屑として扱われていた。

「俺も決めつけていたことがある。サテライトを理解してくれる人や、手を差し伸べてくれるやつなんかいねえって。だけど実際は違った。サテライトから足掻いて抜け出そうとする遊星達に勇気を分けてもらって、俺も行動を起こした。そうしたらいたんだ、俺の考えを受け止めてくれるやつがな。本当は俺が諦めていただけだったんだ…」

「コナミ…」

「…私は信じないぞ。それに今の私の憎しみや苦しみはこのサイコパワーによって力となっている。もはやこの力を受け止められるものなどいない！」

「なら…俺が受け止めてやるよ」

「何…？」

「俺は2枚のカードを伏せてターンエンドだ！デイヴアイン…お前の憎しみや苦しみを全て俺にぶつけて来い！」

コナミ LP700

フィールド 『蒼眼の銀龍』（守備表示）

セツト3

## 手札0

「全て…ぶつけろだと？ならばお望み通り貴様を葬りさつてくれる！私のターン！……！」

「ディヴァインの場のハイパーサイコガンナーの攻撃力は3000。コナミの場の銀龍の守備力も3000。ディヴァインはどんな手を…？」

「私は手札から永続魔法、フューチャー・グロウを発動する…！このカードは墓地のサイキック族モンスターを1体取り除くことで、取り除いたモンスターのレベル×200分の数値を私の場のサイキック族モンスターの攻撃力に与える！」

ディヴァインの場が淡い緑色の光によって満たされていく。

「そいつの効果でハイパーサイコガンナーを強化するつもりか…！」  
「ただの強化ではない…！私が取り除くのはレベル1のハイパーサイコガンナー／バスターだ！」

無数の光の粒子がハイパーサイコガンナーに吸収されるとハイパーサイコガンナーの体が巨大化していき、力を示すように周囲の地面をサイコパワーを放出することで砕け散らせた。

ハイパーサイコガンナー 攻撃力3000↓5200

「そんな…。攻撃力5200なんて…!?!」

「全てを終わらせてやろう…！バトルだ！私はハイパーサイコガンナーで蒼眼の銀龍を攻撃する！」

ハイパーサイコガンナーは手に握りしめている剣に自身の持つサイコパワーを全て与え、銀龍に狙いを定めて振り下ろした。

「そしてハイパーサイコガンナーは貫通能力を持つ…！」

サイコパワーによって剣は伸びていき、コナミごと斬り裂けるほどの大きさとなる。

「私の力を受け止められるものなど…いない！」

振り下ろされた剣が風を裂きながら、銀龍とコナミに向かって振り下ろされていく。銀龍はコナミを守ろうと翼を羽ばたかせ、剣に向かっていった。

「いいや…受け止めてみせる！トラップ発動、仁王立ち！」

銀龍の翼が白銀の輝きを増し、翼はまるでハイパーサイコガンナーを包み込むように広げられた。

「これは…!？」

「仁王立ちの効果で銀龍の守備力はこのターンの終わりまで倍になる…!」

蒼眼の銀龍 守備力3000↓6000

輝きは胴体にも広がっていき、白銀のヴェールはハイパーサイコガンナーから振り下ろされた剣を優しく受け止めた。

「くっ…。だが、仁王立ちによって守備力が上がるのはこのターンまで。このターンの終われば守備力は0となる！お前に私を受け止められはしない！」

「何度だつて言つてやる！恐れず諦めなければどんな困難が立ち塞がってもいつかは分かりあえる！こいつでお前の目を覚まさせてやるぜ…トラップ発動、クロスカウンター！俺の守備モンスターの守備力が攻撃モンスターの攻撃力より高い場合、この戦闘で相手に与える戦闘ダメージは2倍になる！」

「なん…だと…!？」

ハイパーサイコガンナーを受け止めていた銀龍の翼がさらに巨大化していく。そしてその翼は…デイヴァインを包み込んだ。

デイヴァイン L P 1 4 0 0 ↓ 0

「何故だ…？何故私は貴様に勝つことが出来ない!?私はこれほどの力を持つているというのに…!」

「それは…力の使い方を知らねえからだ」

「何？」

「俺の考えを受け止めてくれたやつもそうだった。間違つた力の使い方しか知らなかった。だけど本当の使い方を知つた今のあいつは強いぜ…俺達がアーククレイドルを止めると信じて待つてくれてるんだ」

「私が本当の力の使い方を知らない…？だから私が弱いだと？そんなはずは…!」

「いいえ、デイヴァイン。コナミの言う通りよ」

デイヴアインがデュエルに敗れたことでアキを縛っていた鎖は解け、アキはデイヴアインのもとへ近づいていく。

「あなたが来る前のデュエルで私はサイコパワーの本当の使い方に気付くことが出来たの…」

「聞くまでもない！サイコパワーは破壊の力だ！」

デイヴアインの否定にアキは静かに首を振り、そしてこう告げた。

「サイコパワーは…癒しの力よ」

「何だと…？馬鹿な！君もよく知っているだろう！この力は人を傷つける力だと！」

「いいえ、他人を傷つけていたのはサイコパワーでは無いわ！憎しみや苦しみ…そんな負の感情がサイコパワーに伝わって破壊の力となっていたのよ。サイコパワーを破壊の力にしていたのは…他でもない私達の他人を否定する気持ちだったの」

「そんな…そんなことを私に信じろというのか…ぐっ!?!」

「デイヴアイン!?!」

コナミの胸元に張り付いていた物体が外れたのと同時に、デイヴアインに最後の毒が注入されてしまう。

「…どちらにせよ私は終わりだ。もう…どうでもよいか」

「そんな…！諦めないでデイヴアイン！」

崩れ落ちるデイヴアインをとっさにアキは支える。その手から伝わったデイヴアインの体温はまるで氷のように冷たかった。

「諦めなければ分かりあえる…だったか。そんなことはないということとを私の身を持って証明してやろう…！」

「そんなことはない！何か…何か…助かる方法があるはずよ！」

アキはとっさに周りを見渡す。しかし、そこはアーククレイドルの一室。彼ら3人と倒れているシエリーとクロウ以外には何もなかった。

「諦める…アキ」

「嫌よ！私は諦めないわ！」

「何故だ…?!」

「私は…まだあなたのことを受け止めていない！あなたが受け止めて

くれたように私もあなたの気持ちを受け止めていないわ！だから私は…絶対に諦めない！」

「そうだ！諦めるなアキ！このカードを受け取れ！」

彼らの会話を聞いて決心したコナミはあるカードをアキへと投げ渡した。

「このカードは…!?!」

「やれ…アキ！」

コナミの言葉の意味を理解したアキは自身のサイコパワーを解放し、そのカードをサイコパワーを介して発動させた。

「モウヤンのカレー…発動！」

アキの発動したモウヤンのカレーから不思議な光が発され、デイヴァインを包み込んでいく。その光は暖かく…そして優しかった。

「な…に…?」

次第に毒によって衰弱化していたデイヴァインの体が治癒されていき、そして光が消える頃にはデイヴァインの体は完治していた。

「まさか…サイコパワーは本当に癒しの力だともいうのか…?」

そんなデイヴァインの言葉に笑みを浮かべるアキだったが急に体から力が抜け、崩れ去ってしまう。

「アキ!?!」

「う…:」

「…そうか。人を死の淵から帰還させるほどのサイコパワーを消費したのだ。しばらくはサイコパワーはおろか、動くことすらままならないただろうな」

「なっ…!?!それじゃあ恵を…うっ！」

ライフこそ0にならなかつたもののコナミの体にはそれなりに毒が注入されており、その影響で体が思うように動かなくなりDホイールから転げ落ちてしまう。そして制御の利かなくなつたDホイールはクラッシュし、乗せていた恵がデイヴァインとコナミの間に落ちてしまう。

「しまったーくっ…:」

コナミは慌てて恵のもとに向かおうとするが、毒の影響で立つこと



が出来なかった。

「ふふ…サイコパワーが癒しの力だと？馬鹿馬鹿しい」

対してアキのサイコパワーによって体が回復したダイヴアインはゆっくりと恵に近づいていく。

「ダイヴアイン…!」

コナミはダイヴアインが恵を恨んでいることを思い出す。何とかして体を動かそうとするが今まで蓄積したダメージも重なり、ほとんど動くことが叶わなかった。

「くく……」

その間にダイヴアインが恵のもとにたどり着く。彼は手に持ったカードを恵へとかざし、そのカードをサイコパワーを通して解放した。

「やめ——」

「モウヤンのカレー…発動だ」

「…え？」

ダイヴアインが手にしたカードから溢れ出た光は恵を包み込んでいった。

「サイコパワーが癒しの力だというのなら、破壊の力と信じて私が行なってきたのものは…実に馬鹿馬鹿しいことだった」

ダイヴアインがサイコパワーの消費に伴い体勢を崩した時、恵からある音が聞こえてきた。

「この音は…モーメント。やはりこいつもイリアステルの3皇帝と同じくロボットだったというわけか」

「…!恵は…恵は無事なのか!?!」

「やはり貴様がすぐにこのカードを取り出せるようにしていたのはこいつを助けるためだったか…。この調子ならばしばらくすればモーメントが安定し、正常に動くだろうな」

「よ…良かった…!本当に…!」

コナミの体は毒の影響ではなく、安堵感から地面に崩れていった。「でも…どうして恵を助けてくれたんだ?」

「…アキは言った。サイコパワーを破壊の力に変えたのは私達の他人

を否定する心だと。それで気づいたのだ…私は他人に否定されるのを恐れ、先に他人を否定していたのだと」

「デイヴアイン…」

「だから私のサイコパワーは破壊の力にしかならなかった。だが、今のアキのサイコパワーは確かに破壊の力ではなかった。つまり…私は認めざるを得ないわけだ。自らの過ちをな」

「…でも、お前にも使えたじゃねえか。癒しのサイコパワーを。やっぱりアキの言う通りあったんだよ…お前にも他人を思いやる心がな」  
「…そう思いたければそう思うがいい」

そしてコナミとデイヴアインは互いにその場で動けるようになるまで体を休めた。その間クラツシユ音で目が覚めたクロウとシェリーがデイヴアインに敵意を向けるもコナミに止められ、アキを支えながら遊星達のもとに向かっていった。

彼らが到着した時、アポリアとゾーンのデュエルの決着がついていた。結果は…ゾーンの勝利。アポリアは遊星達に何も希望を託せなかつたと思つたが、遊星はアポリアのおかげでゾーンのデッキのことが知ることができ、決して無駄ではなかつたと伝えた。アポリアは希望を繋いだことで報われたと感じ、遊星達にゾーンと戦うための翼を授けた。

「遊星…。俺があいつと決着をつけてやりたいところだが…お前に任せるぜ」

「鬼柳…」

「お前は俺がダークシグナーだった時も必死に戦い、俺のことを救ってくれた。信じてるぜ、お前ならこの街を守ってくれるって」

「…ああ！俺は絶対にこの街を守ってみせる！」

遊星は鬼柳やチーム5D'sの思いを受け取り、ゾーンとの最終決戦へと臨んだ。アポリアを倒した時械神に苦戦を強いられるも、仲間との絆を紡ぎ、結束の力で立ち向かう。そしてブルーノとの絆によってアクセルシンクロのその先、リミットオーバーアクセルシンクロにたどり着き状況を打開する。ゾーンは最後の力を振り絞り、遊星の前に立ち塞がる。しかし、集いし願いによって呼び出されたスターダス

ト・ドラゴンの攻撃によってついに戦いの幕が閉じた。

「私が今までやってきたことは：間違いだったのでしょうか」

ゾーンは未来を守るために自分が行ってきたものが本当に正しかったのかが分からなくなっていた。

「…いや、お前達の行動は俺達に警告として刻まれた。このままだといずれ訪れてしまう未来を俺達に知らせてくれた。決してそれは無駄にはならない。あとは：俺達がその希望を繋いでいく」

ゾーンはアーククレイドルによって街を滅ぼすという形であれ、彼なりに未来を守ろうとしてきた。そしてその行動が無駄ではなかったことを知った彼は：アーククレイドルを止めるために自身についているプラスのモーメントをアーククレイドルのマイナスのモーメントにぶつけることによって、アーククレイドルを消滅させた。

ゾーンとの戦いを見ていた鬼柳やシエリー、チーム5D'sは赤き竜の力によって消滅に巻き込まれるのを回避した。

だが：赤き竜といえども外部にいた彼らとは違って内部にいた彼らを助けることは無理だった。

「この揺れは：そうか。誰かがマイナスのモーメントにプラスのモーメントをぶつけたのか！まずいな…このままだとアーククレイドルごと私達も消滅に巻き込まれるぞ！」

「何だど!？」

しばらく時間が経ったことで何とか動ける程度には回復した2人は慌てて外へ出ようとした。

「デイヴアイン！お前はここにどうやって来たんだ？」

「ち…私はこの緊急テレポートをサイコパワーによって具現化することによってここまで来たのだ。だが先ほどの消費でこのカードを使うほどのサイコパワーは残っていない…」

「なら乗れ！このDホイールで脱出するぞ！」

コナミとデイヴアイン、恵を乗せてDホイールは入り口に向かって走っていった。そして何とか消滅前に入り口にたどり着き、あとは上へ抜ければ脱出というところまで来た。

「よし…あとは飛行機能を使えばすぐだ！」

コナミはDホイールの飛行機能を使い、脱出を試みる。しかし…何故か浮くことはなかった。

「どうした!?このままだと落ちるぞ!」

「…あつ!しまった…この機能は試験段階だから一人までしか乗せて浮くことが出来ねえんだつた…!くそつ、毒で頭が回ってなかったぜ!」

「だが貴様はあの女を乗せてあそこまできたはずだ!」

「あれは恵が未来のロボットだから異様に軽かったんだよ…!くつ、落ちてたまるか!」

入り口から出たところにある通路から落ちないようにDホイールを止めようとする。しかし、すぐにでも抜け出そうとフルスロットルで走っていたためにブレーキは明らかに間に合わない。

「間に合わねえ…!一体どうすれば…!」

慌てるコナミの背後から複数のプラグがDホイールに突き刺さり、内部のプログラムを変更していく。

「な、何だ!?!」

そしてDホイールが通路から飛び出したその時、コナミのDホイールの後部がわずかに変形し、そこに何かが合体していた。

「モータメントを私の身体に直接繋げたことで出力…上昇!」

「恵!?!」

一瞬底へと沈みそうになったDホイールが普段より明らかに鋭くモータメントが逆噴射されることで、無事Dホイールが浮き出した。

「色々言う前に…優先事項があると判断!」

「…そうだな!まずはここを脱出…うっ!」

ほんの一瞬、抜けきっていない毒がコナミの運転を狂わせた。その結果、消滅しつつあるアーククレイドルから落ちてきたガレキの下に入ってしまう。

「…!危ない!」

「ち…!ファイヤー・ボール!」

デイヴアインが放った火の玉がガレキを木っ端微塵に砕き、辛うじて衝突を回避した。

「ふらふらするな！今のでギリギリ残っていたサイコパワーも尽きた。これ以上はフォロー出来んぞ！」

「デイヴアイン……」

「コナミ。私がガレキの墜落地点を計算して指示を出す。その指示通りに動かないと……危ない」

「分かった！任せとけ！」

恵の的確な指示によってガレキを回避しながら、上へ上へと抜けていく。そして……彼らは消滅の前にアーククレイドルから脱出することが出来た。

## それぞれの一步

「ゾーン……」

恵は消滅していくアーククレイドルを振り返りながら小さく呟いた。

「あなたの生命反応が消滅した。きっと彼らに未来を託してあなたは……。あなたが見届けられなかった彼らの作り上げる未来は私が見届ける。それが私の……新しい使命」

恵は視線を元に戻し、Dホイールをコントロールしているコナミを見つめた。

「……大丈夫。彼らならきつと未来を変えられる。私は……そう信じている」

絶望から作られたロボットとしてではなく、感情を持つ人間として彼女はそう思った。そんな彼女の乗るDホイールはダイヴアインの要望により、あるところへ向かっていた。

「……ここがいい」

空中に浮いていたDホイールが地面につき、ダイヴアインの目的地の前で止まった。

「収容所？」

「私は過去にサイコデュエリストに覚醒しない者は使えないと考え、優秀でない者を無理やりにも覚醒させようと過剰な刺激を与えていたことがあった。そして……その実験で一人死者を出してしまった」

「あ……。ミステイの弟、トビーか！」

「そうだ。それも私の他人を否定する心が生み出したことだ……。こんなことで罪が消えるとは思わないが、アキや貴様に突きつけられた過ちは私なりに償うつもりだ」

ダイヴアインはDホイールからゆっくりと降り、無人の収容所へ向かっていく。

「だが、私はサイコデュエリストが“化け物”として扱われることをよしとしたわけではない。いつか必ず……その認識をひっくり返してやろう」

「デイヴアイン…。ああ！お前なら出来るさ！」

デイヴアインの決意を聞いたコナミは安心してその場を離れていった。そしてコナミは懸命にDホイールを走らせていく。目的地は必ず帰ると約束をした場所。

「恵…。お前が無事で本当に良かったぜ」

「コナミ…。どうして私を助けたの…？」

「どうしてって言われてもな。…俺がお前を救いたって思ったからだよ」

「でも…ネオ童実野シティを守るためにはゾーンを倒さなくてはならなかった。なのにあなたは私を…」

「遊星や鬼柳達を信じたのさ。あいつらなら絶対にネオ童実野シティを守ってくれると思ったぜ」

「仲間を信じた…ということ？」

「そうだけ。言っただろ？俺達には仲間がいるから絶望せずに未来に立ち向かえるって。だから今回も絶望せずに俺がやるべきことをやれたのさ」

「……」

話しているうちに目的の場所にたどり着いていた。コナミがその場所の前にDホイールを止めると、後ろから機械音が響いた。振り返ったコナミが見たのはDホイールと分離した、とてもロボットには見えない普段コナミが見ていた人間の恵の姿だった。

「私はあなた達が作り上げる未来を見届ける。けれど…私もこれから一人の人間としてあなた達と一緒に未来に立ち向かっていこうと思う」

「恵…！」

「そしてまたいつかあなたと…楽しいデュエルをしたい」

恵はコナミを見てはつきりと顔に笑みを浮かべた。

「ああ！約束だ！」

約束を交わした恵は自分のやるべきことを探しにどこかへと行ってしまった。それを見届けたコナミは目的の場所、海野財閥のガレージの中へと入っていった。

「おーい、幸子！」

「…!?庶民！」

「へへっ、約束通り帰ってきたぜ」

ガレージの中で帰りを待っていた幸子は突然かけられた声に驚きながら、同時に安堵感を覚えていた。

「良かった…。心配させないで下さいな。本社の一部がアーククレイドルに接触し、崩壊した時は駄目かとも思いましたわ」

「げっ…。結構ギリギリだったんだな」

「不動遊星がゾーンと名乗る者と対決している様子が中継されているのがここからも見えました…。あなたは何をしていたのですか？」

「遊星がやったのか…。うーん、俺は俺のやるべきことをやってたぜ」

「よく分かりませんが…。まあいいでしょう。約束通り無事に帰ってきたのですから」

「幸子…ありがとうな」

「礼などいりません。仲間として心配くらいしますわ」

「それもだけど…俺が言いたいのはこの時、俺とお前が初めて会った時に荒れながらも俺の考えを受け止めてくれたことだぜ」

「えっ!?な、なんで今になってそのことを…?」

「お前があの時受け止めてくれたおかげで俺はあいつのことを受け止められたんだ…。だから…その、ありがとうな」

「は、はあ…。まああの時はわたくしもあなたから教えてもらったことがありますし…お互い様ですわ」

「そっか」

外から段々と雑音が聞こえるようになってくる。その理由はアーククレイドルの墜落が阻止されたことでネオ童実野シティの住民が次第に避難場所から帰ってきたからだだった。しかし、彼らの顔つきはどこか重々しいものだった。

「ネオ童実野シティが救われたっていうのにみんな暗いな…」

「…遊星とゾーンのデュエルが中継されたことで彼らにも破滅の未来に対する警告が為され、その事実が彼らの重荷となっているのでしよう」



「そうなのか…」

「恐らくアーククレイドルによってここ以外にもネオ童実野シティの一部が崩れ、復興活動を行わなくてはならないというのにこの様子では心配ですわね…」

「なら、俺達がまずやるべきことは一つだ！」

「鬼柳!？」

赤き竜によってアーククレイドルの消滅から逃れ、5D、sのメンバーとネオ童実野シティを守ったことの喜びを分かち合った後、彼らとあることを話してきた鬼柳がガレージに帰ってきていた。

「けどとりあえず…お前らも無事で何よりだぜ」

「良かった…鬼柳もアーククレイドルの消滅に巻き込まれなかったんだな」

「俺だけじゃないぜ。遊星達5D、sも無事だ！」

「本当に良かったですわね…」

ネオサティスファクションのメンバーは皆で無事を喜び会った。

そして話題は鬼柳の発言へと戻っていった。

「ところで先程やるべきことは一つ…と言ってましたが」

「ああ。遊星達とも話し合っただ。最終的には破滅の未来を回避するための一手を打たなきゃならねえんだろうが…まずは住民の活気を取り戻した方がいいってことになったんだ」

「そうは言ってもそんな簡単に戻るようなものじゃないぜ…?」

「いいや、一つだけあるぜ。俺達が住民の活気を取り戻せる方法が！」

「それは一体…?」

「忘れたのか？俺達が何のためにチームを結成したのか！」

「あっ！」

「まさか…」

「そうだ！今度のWRGP決勝、チーム5D、s対チームネオサティスファクション！俺達のデュエルでみんなを…満足させてやろうぜ！」

## 最終章 それぞれの決着 全力のぶつかり合い

「32組のチームが参加したWRGPもいよいよ大詰め！熾烈な戦いを勝ち抜いた2組のチームが今日、このスタジアムで雌雄を決するぞ！」

MCの実況でスタジアムに集まった観客から歓声が湧き上がった。

「まずはチーム5D，sの入場だ！」

スタジアムのゲートが解放され、5D，sのメンバーが一人一人入ってくる。

「1人目はチーム5D，sの鉄砲玉！クロウ・ホーガン！」

「へえ…こんな状況だつてのに結構人数入ってるじゃねえか。こりやしくじれねえぜ！」

クロウはあらかじめサポーターとして入っていた龍亞や龍可、アキに誘導され、自分のチームのピットへと入っていった。

「2人目は元キングのジャック・アトラス！」

「ジャックー！」

「ジャックー！」

「アトラス様ー！」

「ふん…」

ジャックは応援してくれているファンに軽く手を挙げて応えながらピットへ入っていく。

「そして…3人目！ネオ童実野シティを救った英雄！不動遊星だ！」

遊星の名前が出た瞬間、会場は最高峰の盛り上がりを見せた。

「おのれ…遊星め。俺が呼ばれた時よりも大きい歓声を受けおつて…！」

「しゃあねえだろ。遊星はこの街を救った英雄なんだから。それよりファーストホイーラーなんだから早く準備しろよ！」

「くっ…」

クロウとジャックがそんな会話をしている間に遊星は大きな歓声

に戸惑いながらピットに入ってきた。

「みんな。このデュエルは鬼柳とも話した通り…」

「分かっている。住民の活気を取り戻すための戦いだと言うのだろう？だが、キングのデュエルは常にエンターテインメントでなくてはならない！俺は普段通りに戦うだけだ」

「そうだぜ遊星。俺達は俺達に出来ることをすりやいいんだ」

「そうよ遊星。あんまり気負わないで。あなたのデュエルはきつとみんなの心に届くわ」

「…ありがとう。どうやら重荷を感じていたのは俺みたいだ」

遊星は息を大きく吸い、ゆっくりと吐き出した。

「これが俺達がチームとして戦う最後の試合となる。悔いが残らないように全力を尽くそう！」

遊星の言葉に皆が頷いた。

「よーっし！コナミ達には悪いけど…この勝負、遊星達が勝たせてもらうぜ！」

「あつ！噂をすれば…コナミ達も入ってくるみたいね」

龍亞と龍可の言葉で彼らの視線が入り口へと移った。

「さあ、次はチームネオサティスフアクションの入場だ！…ん？この音は何の音だー!？」

観客は音の正体を探るために騒ぐのをやめ、耳を傾けた。

「あの音は……」

遊星はこの音に聴き覚えがあった。かつて死の街で起きていた悪夢のような状況を切り裂いた時、始まりはこの音だった。

「幸子。ハーモニカはフーって感じよりハーって吹いた方がいい音が出やすいぜ」

「結構難しいですわね。ピアノなどのメジャーな楽器はマスターしたのですが…」

コナミと幸子、そして鬼柳が吹くハーモニカの音がスタジアム中に響き渡っていた。

「何で…ハーモニカ？」

「ふっ、鬼柳らしいな…」

龍可が疑問に思う間も彼らはハーモニカを吹き続けた。やがてピットに入る手前で彼らは吹くのをやめ、鬼柳が人差し指を天に突き上げた。

「俺達はこれから全力で5D、sとぶつかり合う！必ずお前らを満足させてやるぜ！」

鬼柳が放った一声でそれまで思わず静まっていた観客が再び沸き起こった。

「…あつ。チ、チームネオサティスフアクションの鬼柳、幸子、コナミもピットインしたぞ！早速だが、両チームのファーストホイラーは配置についてくれ！」

MCの実況に合わせ、5D、sからはジャックがスタートラインへとついた。そしてネオサティスフアクションからは鬼柳が出ていった。

「鬼柳！」

「何だ、コナミ？」

「このデュエルは鬼柳が願ったサティスフアクションのメンバーでのデュエルでもあるんだ。満足してこいよ！」

「…ああ！」

ピットから出ていった鬼柳もスタートラインにつき、ジャックと並びあつた。

「…鬼柳。貴様とデュエルするのは久しぶりだな」

「そうだな…サティスフアクションの時以来か」

「俺は当然手加減はせんぞ。さらなる高みに昇るためにも…貴様を超える！」

「へっ…上等じゃねえか。そうこなくちやなあ！」

2人はスピード・ワールド2を展開し、後はスタートのカウントダウンを待つだけとなった。

「いよいよ、この瞬間がやって来たぞ！観客の皆も今か今かと待ちきれないようだ！」

2人の前に出て来たスクリーンが10秒のカウントダウンを始め、ジャックと鬼柳はスタートの瞬間に備えて集中力を高めていく。

「この最後の戦い、始まってしまえば誰にも止めることは出来ない！ならば我々は勢いよく押し出そう！ライディングデュエル……」

そして最後のカウンtdownが点滅した瞬間、スタジアム中の観客が一齐にその言葉を口に出した。

「アクセラレーション！」

後押しされるように2人のDホイールも走り出した。先攻を取ることが出来るのは第1コーナーを回ったDホイーラー。走り出しは互角だったが……

「あーっと！ジャックのDホイールが加速していくぞー！」

「俺のDホイール、ホイール・オブ・フォーチュンに敵うと思ったか！」

ジャックのDホイールにはクロウのツテを通してボルガー&カンパニー社が開発した加速エンジンが組み込まれていたため、加速性能はキングだった頃よりも増していた。

「くっ！させるかよー！」

鬼柳は内側のレーンを攻め、最短の距離で第一コーナーを曲がろうとする。

「甘いぞ、鬼柳！」

しかし、それを読んでいたジャックに内側のレーンへと詰められてしまい、道を塞がれてしまう。

「そんな手でこのジャック・アトラスの前を走らせはしない！」

「…かかったな、ジャック！」

「何？」

ジャックのDホイールの真後ろに入ることになった鬼柳のDホイールが次第に加速していき、ジャックのDホイールへと追いついていった。

「これは!?…スリップ・ストリームか！」

ジャックと鬼柳のDホイールが直線上に並んでいるため、ジャックのDホイールが受ける空気抵抗を鬼柳のDホイールは受けず、その分鬼柳のDホイールは加速していた。

「くっ！だが、ここをどいてしまえば俺はその分外を回ることになる……！」

「どうだ…ジャック！」

「…まだまだ！いくら加速しようとお前のDホイールは俺の後ろにある！…ここから外回りで抜かすほどの時間は残っていない！」

「誰が外回りで抜かすって…？加速は十分についた…ここだ！」

「何…!？」

鬼柳のDホイールからモーメントが逆噴射され、鬼柳のDホイールが空中に浮いた。そのままジャックの頭上を越え、先に第一コーナーを駆け抜けた。

「先攻は鬼柳だー！」

「くっ、俺達が努力してきたようにお前達も勝つための努力を惜しまなかったということか…面白い。来い、鬼柳！」

「行くぜ、ジャック！」

「「デュエル！」」

「俺のターン、ドロー！俺はインフェルニティ・デーモンを召喚するぜ！」

ヤギのようなツノが頭に2本生えた悪魔が呼び出された。

インフェルニティ・デーモン 攻撃力1800

「カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

鬼柳 LP4000

フィールド 『インフェルニティ・デーモン』（攻撃表示）

セット2

手札3

スピードカウンター

sc0

「俺のターン！」

鬼柳 sc0↓1 ジャック sc0↓1

「奴が使っているインフェルニティは手札が0になると本領を發揮する。ならば先手を打つまで！俺はチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを召喚する！」

紫色のローブを身に纏った悪魔が現れ、不思議な呪文を唱え始めた。

ダーク・リゾネーター 攻撃力1300

「そして手札の奇術王　ムーン・スターは俺の場にチューナーモンスターが存在する時に特殊召喚できる！」

月のオブジェクトがついた杖を持った魔術師が現れたかと思うと、突然現れた炎によって身を包まれてしまう。無事ではすまないかと思われたが、ダーク・リゾネーターの詠唱によって展開された魔法陣から傷一つ付いていない姿で現れ、観客を沸かせた。

奇術王　ムーン・スター　攻撃力900

「早速シンクロか……！」

「行くぞ！レベル3のムーン・スターにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！」

ダーク・リゾネーターが音叉を鳴らすとムーン・スターと共に煙に包まれていった。

「天を焼くシリウス、孤狼の蒼き瞳よ、地に縛られた牙無き犬共を噛み砕け！シンクロ召喚！焼き焦がせ……天狼王　ブルー・セイリオス！」  
煙が晴れていくとそこには3つの青い狼が連結し、鋭い銀色のツノを無数に生やした獣が誕生していた。

天狼王　ブルー・セイリオス　攻撃力2400

「まずはこいつで貴様のモンスターを相手してやろう！」

「待ちな！その前にこいつを呼ばせてもらおうぜ……！俺は手札のカオスハンターの効果を発動する！」

「このタイミングで手札からモンスター効果だど!？」

「こいつは相手がモンスターを特殊召喚した時にこのカード以外の手札を1枚捨てることで特殊召喚出来る！さあ、来い！」

赤い鎧を纏ったレディが白い長髪を風でなびかせながらフィールドに降り立った。

カオスハンター　攻撃力2500

「カオスハンターの攻撃力はジャックの呼び出したシンクロモンスターよりも上だぜ！」

「やるな！強力なモンスターを呼び出し、かつハンドレスへと近づくとは……。だが、もう1体のモンスターは逃がしはしない！バトルだ！ブルー・セイリオスでインフェルニティ・デーモンに攻撃！ウルフズ・ファンゲ天狼蒼牙

！」

ブルー・セイリオスの牙が蒼く燃え出し、その牙でインフェルニティ・デーモンを焼きながら噛み切った。

「くっ……！」

鬼柳 LP4000↓3400

「先制はもらったぞ、鬼柳！」

「へっ、甘いぜジャック！トランプ発動、命の綱！こいつは俺のモンスターが戦闘で破壊された時に手札を全て捨てることで発動できる！」

「何い?！」

「その効果で、破壊されたモンスターを墓地から攻撃力を800上昇させた状態で呼び出すぜ！」

墓地へと続く穴に綱がおろされ、インフェルニティ・デーモンが引っ張り戻された。

インフェルニティ・デーモン 攻撃力1800↓2600

「そしてインフェルニティ・デーモンの効果発動！こいつが手札0の時に呼び出された時、デッキからインフェルニティカードを手札に加えられる！」

「命の綱により貴様の手札は0……！計算通りというわけか！」

「俺はデッキからインフェルニティ・ガーディアンを手札に加えるぜ！」

「見事だ……！だが、俺も負けはせん！カードを1枚伏せてターンを終了する！」

ジャック LP4000

フィールド 『天狼王 ブルー・セイリオス』（攻撃表示）

セット1

手札3

sc1

「次はこっちの番だ！俺のターン！」

鬼柳 sc1↓2 sc1↓2

「バトルだ！インフェルニティ・デーモンでブルー・セイリオスに攻撃！ヘル・プレッシャー！」



インフェルニティ・デーモンは先程の仕返しとばかりに空中に魔法陣を出現させ、炎によって覆われた巨大な手でブルー・セイリオスを握りつぶした。

「ぐうっ…!?!」

ジャック LP4000↓3800

「通った！さらに俺はカオスハンターで……」

「そう簡単にやらせはせん！ブルー・セイリオスの効果発動！

ブルー・サクレイメイション

蒼天昇牙！」

カオスハンターの持っている鞭がどこからともなく現れた蒼い炎によって燃やされてしまう。

「な、何だ!?!」

「ブルー・セイリオスは破壊され墓地へと送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を2400ダウンさせる！俺はこの効果をカオスハンターに対して発動していた！」

カオスハンター 攻撃力2500↓100

「何だと…！ちっ、攻撃力100じゃ攻撃しても意味はねえか…。俺はカオスハンターを守備表示にする！」

カオスハンター 守備力1600

「モンスターをセットし…カードを1枚伏せる。ターンエンドだ！」

鬼柳 LP3400

フィールド 『インフェルニティ・デーモン』（攻撃表示） 『カオスハンター』（守備表示） 裏側守備表示1

セット2

手札0

sc2

「俺のターン…ふ、行かせてもらおうぞ！」

「…」

鬼柳 sc2↓3 ジャック sc2↓3

「トラップ発動、ロスト・スター・ディセント！墓地のシンクロモンスターをレベルを1つ下げ、守備力0の状態で守備表示で特殊召喚する！戻れ、ブルー・セイリオス！」

ツノの一部が炎によって溶けてしまったブルー・セイリオスがぼろぼろになりながらも帰還した。

天狼王　ブルー・セイリオス　守備力0

「あいつを破壊したらまた攻撃力を下げられちまう……！」

「このジャック・アトラスが同じような手を使うと思ったか！俺のデュエルは常に先に行く！俺はチューナーモンスター、チェーン・リゾネーターを召喚する！」

藍色のローブを纏った悪魔が現れ、手に持っている鎖をジャックのDホイールめがけて投擲した。

チェーン・リゾネーター　攻撃力100

「そしてチェーン・リゾネーターは召喚に成功した時にフィールドにシンクロモンスターがいる場合、デッキからリゾネーターを1体呼び出すことが出来る！俺が呼び出すのはクロック・リゾネーターだ！」

青色のローブを纏った悪魔がフィールドに引っ張り出された。

クロック・リゾネーター　守備力600

「もう1度シンクロしてくるか……！」

「レベル5となったブルー・セイリオスにレベル3のクロック・リゾネーターをチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

強固な肉体をフルに使い紅蓮の翼をはためかせ、ジャックの頭上を縦横無尽にドラゴンが飛び回った。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻撃力3000

「く……！攻撃力3000……エースモンスターで勝負に来たか！」

「確かにレッド・デーモンズ・ドラゴンは俺のエースだ。だが、俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンのさらなる力を解放する！」

「さらなる力だど!?!」

「ふふ……フィールドにレベル8以上のシンクロモンスターが存在する時、手札のクリエイト・リゾネーターは特殊召喚する事が出来る！」

背中にプロペラをつけた悪魔がレッド・デーモンズ・ドラゴンに仕えるように駆けつけた。

クリエイト・リゾネーター 攻撃力800

「クリエイト・リゾネーターもチェーン・リゾネーターもチューナーモンスター…。一体何をやる気だ？」

「俺の得た新たな力を貴様にも見せてやろう…。俺の荒ぶる魂…バーニング・ソウルを貴様にぶつけてやる！」

ジャックが自分の心臓を掴むように手を胸に当てると、目が燃え上がるように赤くなった。

「俺はレベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル1のチェーン・リゾネーターとレベル3のクリエイト・リゾネーターをダブルチューニング！」

「ダブル…チューニングだ?!」

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！シンクロ召喚！出でよ…スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

2体のリゾネーターが音叉を鳴らすと炎の輪となってレッド・デーモンズ・ドラゴンを包みこむ。炎の輪を抜けたドラゴンは赤黒く彩られ、より力強さを増していた。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン 攻撃力3500

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴン!?まるで地縛神みてえな威圧感を感じるぜ…!なんて圧力だ…!」

「これが俺の新たな切り札だ…!俺はこいつでお前を超える!スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果発動!俺の墓地に存在するチューナーモンスター1体につき、攻撃力を500アップさせる!俺の墓地には4体いる。よつて…!」

ただでさえ巨大なスカーレット・ノヴァ・ドラゴンがさらに大きくなり、フィールド全体を包み込むほどの大きさとなってしまう。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン 攻撃力3500↓5500

「なん…だと…!?!」

「バトルだ!スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでインフェルニティ・デーモンへ攻撃!バーニング・ソウル！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは手足をたたみ、まるで弾丸のような鋭さで突っ込んでインフェルニティ・デーモンを地面に叩きつけ

た。

「うおおおっ!?!」

鬼柳 LP3400↓500

あまりの衝撃に鬼柳もバランスを崩しかけてしまう。

「どうだ鬼柳…俺の渾身の一撃は!」

「効いたぜ…!だが、俺もタダじゃ転ばねえ!墓地のインフェルニティ・リベンジャーの効果発動!手札が0枚の時に俺のモンスターが戦闘で破壊された時、そのモンスターのレベルと同じレベルで墓地から特殊召喚する事が出来る!」

2丁の拳銃を握る小さな戦士が墓地から這い出て来た。

インフェルニティ・リベンジャー 守備力0 レベル1↓4

「俺は場に2枚のカードを伏せ、ターンを終了する!さあ、ここから逆転出来るものならしてみろがいい!」

ジャック LP3800

フィールド 『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』（攻撃表示）

セット2

手札0

sc3

「やってやるぜ…!俺のターン!」

鬼柳 sc3↓4 ジャック sc3↓4

「よし…いいカードだ。俺はインフェルニティ・ガーディアンを反転召喚する!」

フィールドの一部が赤く燃え上がったかと思うと、その炎に浮くようにガイコツが姿を現した。

インフェルニティ・ガーディアン 攻撃力1200

「インフェルニティ・リベンジャーはチューナー…お前もシンクロで来るか!だが、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを超えるシンクロモンスターなどいない!」

「確かにあいつを超えるのは骨が折れそうだぜ…。だけど勝負に絶対なんてねえ…挑ませてもらうか!俺はレベル4になっているインフェルニティ・リベンジャーにレベル4のインフェルニティ・ガー

ディアンをチューニング！死者と生者の狭間、その虚ろな魂が混じるとき冥府の闇が舞い降りる！シンクロ召喚、いでよ…ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

体中に目が張り付いた奇妙なドラゴンがスカーレット・ノヴァ・ドラゴンと向かい合った。

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン 攻撃力3000

「ほう…攻撃力3000か。中々の攻撃力だが…我がスカーレット・ノヴァ・ドラゴンには遠く及ばない！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンがワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを見下ろし、雄叫びを上げた。

「こいつだけじゃ確かに敵わねえが…このカードと合わせたらどうだ！手札からs p—<sup>スピードスベル</sup>ハーフ・シーズを発動する！こいつはs cが3以上ある時に発動でき、相手フィールドのモンスター1体の攻撃力を半分にしてその数値分のライフを俺は回復する！」

「何…!？」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンからエネルギーが吸収され、鬼柳の命の源へと変換されていく。力を吸収されたスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの大きさはワンハンドレッド・アイ・ドラゴンと同程度となってしまう。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン 攻撃力5500↓2750

鬼柳 LP500↓3250

「これで上下関係は逆転した！バトルだ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでスカーレット・ノヴァ・ドラゴンへ攻撃！インフィニティ・サイト・ストリーム！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが闇のオーラを纏ったエネルギー弾を狙いをスカーレット・ノヴァ・ドラゴンに定めて放った。

「そうはさせせん！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果を発動！このカードをエンドフェイズまで除外する事で相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「…！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは空中に次元の裂け目をこじ開け、

一時的に攻撃を逃れようとした。

「いくら攻撃力で上回っていようと攻撃が通らなければ意味はない！」

「ならば意味を持たせてやるぜ……！」

「……!?何故だ……スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが動かないだど！」

ジャックがスカーレット・ノヴァ・ドラゴンを見上げると異次元へと逃れようとするスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの翼を押え込み、動きを封じていた者がいた。

「カオスハンターの効果だ！こいつがいる限り、相手はモンスターを除外することが出来ねえ！」

「ぐっ……これでは攻撃を無効にする事は出来ない……！」

動きを封じられたスカーレット・ノヴァ・ドラゴンはエネルギー弾をまともに受け、戦闘不能になってしまった。

「やってくれたな……！」

ジャック LP3800↓3550

「っし……スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを倒したぜ！俺はこれでターンエンドだ！」

鬼柳 LP3250

フィールド 『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』(攻撃表示)

オスハンター』(守備表示)

セツト2

手札0

sc4

「おのれ……この屈辱、倍にして返してくれる！俺のターン！」

鬼柳 sc4↓5 ジャック sc4↓5

「ライフを500払い、トラップ発動！デーモンの雄叫び！俺の墓地からデーモンと名のつくモンスターを呼び戻す！」

ジャック LP3550↓3050

「ジャックの墓地にいるデーモンと名のついたモンスターだと？……まさか！」

「蘇れ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

墓地からも響く雄叫びと共に再び紅蓮の翼をはためかせ、フィールドに飛翔した。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻撃力3000

「ただしこの効果で呼び出したモンスターはいかなる場合にもリリースできず、エンドフェイズには破壊される」

「つてことは…相打ち狙いか!?!」

「俺が自らの魂を放棄することなどありえん!バトルだ!レッド・デーモンズ・ドラゴンでカオスハンターへ攻撃する!森羅万象…全てを貫け!アブソリュート・パワーフォー스!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンは無防備なカオスハンターに向かって拳を押し出すように突き出し、掌底打ちによって自らのパワーを余すところなく伝えた。

「カオスハンターがやられたか…!だが、手札0の時に俺のモンスターが戦闘で破壊されたことで墓地のインフェルニティ・リベンジャーを……」

「2度も同じ手を通すほど俺は甘くないぞ!レッド・デーモンズ・ドラゴンは守備モンスターを攻撃した時、相手の守備モンスターを全て破壊する!デモン・メテオ!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンは地面から這い出ようとしていたインフェルニティ・リベンジャーに向かってカオスハンターを突き飛ばし、2人もろとも墓地へと落としてしまった。

「インフェルニティ・リベンジャーが効果を使えるのはあくまで戦闘で破壊された時!レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果によってカオスハンターが破壊されたことでその効果を使うことは出来ない!」

「くっ!隙がねえな…。だが、デーモンの雄叫びによってレッド・デーモンズ・ドラゴンはエンドフェイズに破壊される!」

「それはどうかな?俺はもう1枚のトラップを発動する!亜空間物質転送装置!このカードによってレッド・デーモンズ・ドラゴンはエンドフェイズまで除外される!」

「何だと…!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンはスカーレット・ノヴァ・ドラゴン

が作っていた次元の裂け目に一時的に避難した。

「カードを1枚伏せてターンを終了する！戻ってこい、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンは裂け目を突き破るようにフィールドに帰還した。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンは一度場を離れたことでデーモンの雄叫びとの関係を消し去った！よってデーモンの雄叫びによって課せられた契約は破棄されている！」

「強い意志を感じるぜ！何としても自分のエースで勝利を掴もうとするジャックの決意を……！こういう奴は強え……。だけどそれを超えてこそ、俺は満足することが出来る！」

ジャック LP3050

フィールド 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札0

sc5

「俺のターン……ドロー！」

鬼柳 sc5↓6 ジャック sc5↓6

「まず俺は場にカードを伏せる！」

「セット……これで奴の手札は再び0か」

「そして俺はワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの効果を発動する！エンドフェイズまで墓地の閻属性・レベル6以下のモンスターを除外し、その効果を得るぜ！俺が除外するのは……インフェルニティ・ガーディアン！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの目が1つ大きく見開かれ、インフェルニティ・ガーディアンのデータが読み込まれていた。

「そして……バトルだ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンでレッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃！インフィニティ・サイト・ストリーム！」

「何……？相打ち狙い……ではないな」

「当然だ！ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンにコピーされたインフェ



ルニテイ・ガーディアンの効果によって俺の手札が0枚の時、こいつは破壊されない！」

「……！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンから再び闇のオーラを纏ったエネルギー弾が放たれ、レッド・デーモンズ・ドラゴンを襲った。着弾による煙がジャックのフィールドを包み込む。

「よし……やったか！」

煙が次第に晴れていく。そこにいたレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿は禍々しさを増しており、紅蓮の翼は完全に漆黒に染まっていた。

「何だと……！」

「惜しかったな鬼柳。俺は貴様が攻撃してきた時、このカードを発動していた！トラップカード……バスター・モードをな！」

「バスター・モードだと……！」

「バスター・モードはシンクロモンスターをリリースし、その進化体をデッキから呼び出すカード！俺はこのカードを使い、レッド・デーモンズ・ドラゴンを進化させていた！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター 攻撃力3500

「ここに来て攻撃力3500だと!?くつ、攻撃を中断してターンエンドだ！エンドフェイズにワンハンドレッド・アイ・ドラゴンが得た効果は消滅する……！」

鬼柳 LP3250

フィールド 『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』（攻撃表示）

セット3

手札0

sc6

「俺のターン！」

鬼柳 sc6↓7 ジャック sc6↓7

「バトルだ！レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターでワンハンドレッド・アイ・ドラゴンへ攻撃する！エクストリーム・クリムゾン・フォース！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは息を大きく吸い込むと、勢いよく灼熱のブレスを放ち、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンを燃やし尽くした。

鬼柳 LP3250↓2750

「ぐおっ！墓地のインフェルニティ・リベンジャリーの効果を……！」  
「懲りないな！レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの効果発動！このモンスターは攻撃後、フィールドのこのモンスター以外のモンスターを全て破壊する！クリムゾン・ジ・エンド！」

高熱のブレスによってワンハンドレッド・アイ・ドラゴンは跡形もなく焼却されてしまった。

「やっぱりジャックには通じねえか……！なら俺はワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの効果を発動するぜ！こいつは破壊された時、デッキからあるカードを俺の手札に加えさせる！」

「……まさか……」

「来い！地縛神 Cc a p a c A p u！」

「地縛神……遊星から聞いた通り、お前も地縛神の力を自分の力として取り込んでいたか……！ならば俺はスピード・ワールド2の効果を発動する！s cを7つ取り除き、カードを1枚ドロウする！」

ジャック s c 7 ↓ 0

「場に2枚のカードを伏せ……ターンエンドだ！」

ジャック LP3050

フィールド 『レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター』（攻撃表示）

セット2

手札0

s c 0

「行くぜ……C c a p a c A p u！俺のターン！」

鬼柳 s c 7 ↓ 8 ジャック s c 0 ↓ 1

「リバースカードオープン！s p—エンジェル・バトン！s cが2以上ある時に発動でき、俺は2枚のカードをドロウしその後1枚のカードを墓地へ送る！」

天使から渡された2枚の羽がカードに変わり、鬼柳に新たな可能性をもたらした。

「そしてトラップ発動！極限への衝動！俺の手札を2枚墓地へ送り、俺の場に2体のソウルトークンを呼び出す！」

鬼柳が墓地へ送ったカードの魂がフィールドで浮遊しだした。

ソウルトークン×2 守備力0

「来るか……！」

「俺は2体のソウルトークンをリリースする！現れやがれ！地縛神  
C c a p a c A p u！」

闇に染まった巨人がレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターと対峙した。

地縛神 C c a p a c A p u 攻撃力3000

「遠慮はしねえ！バトルだ！地縛神は相手にダイレクトアタックが出来る！C c a p a c A p uでジャックに攻撃だ！」

巨人がレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターを無視して、ジャックに向けて拳を振り下ろした。

「貴様が地縛神を使用することは想定していた！その攻撃は通さん！トラップ発動、チェンジ・デステニー！その攻撃を無効にし、攻撃モンスターを準備表示にする！」

振り下ろされた拳はレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターによって受け止められ、拳ごと地縛神は投げられてしまった。

「ぐ……！筋縄じゃいかねえか！だけど地縛神は攻撃の対象にはならねえ。次のターンにもう1度……！」

「無理だな。チェンジ・デステニーによって以降地縛神の表示形式を変えることは出来ない！」

「何だと!？」

「だがチェンジ・デステニーにはリスクもある。貴様はチェンジ・デステニーによって無効にされたモンスターの攻撃力の半分の数値自分分のライフを回復、またはその分のダメージを相手に与えることが出来る！さあ、選べ！」

「俺のデュエルはいつだって攻めて攻めて攻めまくるデュエルだ！こ

ここで回復なんて選択肢はねえ！食らいやがれ、ジャック！」

「だろぅな……！お前はそういうやつだ！」

ジャック LP3050↓1550

「俺はスピード・ワールド2の効果を発動し、scを7つ取り除くことで1枚ドロウする……カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

鬼柳 sc8↓1

鬼柳 LP2750

フィールド 『地縛神 Ccapac Apu』（守備表示）

セット2

手札0

sc1

「俺のターン！」

鬼柳 sc1↓2 ジャック sc1↓2

「ジャック！さっき言った通り地縛神は攻撃の対象にはならねえ！いくらレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターが強力な効果を持っているようと、攻撃が出来なければ意味はねえぜ！」

「ふっ……ならば意味を持たせれば良いのだろうか？」

「何!？」

「トラップ発動、リバイバル・ギフト！俺の墓地からチューナーモンスターを効果を無効にして呼び出す！戻れ！クロック・リゾネーター！」

フィールドに3つの宝箱が出現し、その箱のうち1つには青色のローブを纏った悪魔が入っていた。

クロック・リゾネーター 守備力600

「そしてリバイバル・ギフトのもう1つの効果によって貴様の場に2体のギフト・デモン・トークンを特殊召喚する！」

「……そういうことか！」

2つの宝箱からは小さな黒い悪魔が現れ、鬼柳の場に降り立った。

ギフト・デモン・トークン×2 攻撃力1500

「バトルだ！レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターでギフト・デモン・トークンへと攻撃する！エクストリーム・クリムゾン・フォース

！」

「レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは攻撃後、自身以外の全てのモンスターを破壊する……！」

「そうだ！たとえ地縛神が攻撃の対象にならなくとも、その効果で消し去ることは出来る！」

灼熱のブレスが地縛神と2体の小悪魔を包み込んでいく。しかし包んだはいいものの、一向に炎が地縛神に寄る様子はなかった。

「何……？レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの炎が弾かれているだど！」

「危なかったぜ……。俺はさつきエンジェル・バトンによって墓地へ送っていた超電磁タートルの効果を発動していた！こいつは墓地から除外することでデュエル中1度に限り、バトルフェイズを強制終了させることが出来る！」

「そんなカードを墓地へ送っていたのか……！」

地縛神と炎に同極の電極が植え付けられたことで反発しあい、やがて炎は消滅していった。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

ジャック LP1550

フィールド 『レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター』（攻撃表示）

示) 『クロック・リゾネーター』（守備表示）

セット1

手札0

sc2

「俺のターン、ドロロー……！」

鬼柳 sc2↓3 ジャック sc2↓3

「このターンで勝負をつけさせてもらうぜ……ジャック！」

「……地縛神が封じられた状態で仕掛けてくる気か……！」

「俺はsp—ヴィジョンウィンドを発動する！scが2以上ある時、墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚することが出来る！俺が呼び出すのは……チューナーモンスター、インフェルニティ・ビートルだ！」

体が黒く染まっているはずのヘラクレスオオカブトが灰色の状態  
で帰還した。

インフェルニティ・ビートル 攻撃力1200  
「チューナー…しまったー!」

「ありがたく使わせてもらうぜ…お前のプレゼントをな!俺はレベル  
3のギフト・デモン・トークン2体にレベル2のインフェルニティ・  
ビートルをチューニング!死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫  
の檻より魔の竜は放たれる!シンクロ召喚!いでよ、インフェルニ  
ティ・デス・ドラゴン!」

体が漆黒に染まったドラゴンがフィールドに飛翔した。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 攻撃力3000

「俺が呼び出したモンスターすらも利用するとはな…!」

「インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果発動!こいつの攻撃を放棄  
することで相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力の半分の数値分  
のダメージを相手に与える!当然狙いは…レッド・デーモンズ・ドラ  
ゴン/バスター!」

「…!」

「これで終わりだ…ジャック!インフェルニティ・デス・ブレス!」

インフェルニティ・デス・ドラゴンから黒炎が放たれようとしてい  
た。

「まだだ!永続トラップ発動、デモンズ・チェーン!俺はインフェルニ  
ティ・デス・ドラゴンの攻撃と効果をこのカードによって封じる!」

「…!」

インフェルニティ・デス・ドラゴンの口を鎖が縛り、黒炎が放てな  
い状態になってしまう。

「これで次のターンのレッド・デーモンズ・ドラゴン/バスターの攻撃  
でお前の場のモンスターは全滅となる!」

ピシヤリ。ヒビが入るような音がかすかに聞こえてくる。

「…何?」

そして鎖に入ったヒビはさらに大きくなっていき、やがて鎖は完全  
に外れてしまった。

「…カウンタートラップ、インフェルニティ・バリア！俺の場にインフェルニティが攻撃表示で存在する時、相手が発動した効果の発動を無効にして…破壊する！」

鎖から解放されたインフェルニティ・デス・ドラゴンは黒炎を放ち、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの漆黒の翼を燃やし尽くすことで破壊した。

「俺よりお前の方が一手先を読んでいたか…！」

ジャック LP1550↓0

「ジャックに…勝った…！」

鬼柳は喜びを噛みしめる。しかし、まだ勝負は終わってはいなかった。

「たとえ俺が敗れようと我が魂は何度でもフィールドに蘇る！レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの効果発動！破壊された時、墓地のレッド・デーモンズ・ドラゴンを復活させることが出来る！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンは地面を突き破り、その紅蓮の翼を三度羽ばたかせた。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻撃力3000

「そうだ…これはチーム戦！満足するのはまだはやかったぜ…！」

こうして鬼柳とジャックの勝負は決した。しかし、まだ勝負は始まったばかり。彼らの戦いはまだまだ続く……。

## 絆のバトン

鬼柳とジャックの勝負は鬼柳に軍配が上がった。しかし、ジャックは自らの魂、レッド・デーモンズ・ドラゴンを次のホイーラーに繋いだのだった。

「だけどお前がまさかチームプレイをするなんてな……」

「ふん。一人で勝てるほどチーム戦は甘くない……。俺はこのWRGPを通して学び、また強くなったのだ。鬼柳！俺はお前に敗れたが、俺達5D'sは決して負けはしない！」

「いいや、勝つのは俺達ネオサティスフアクションだ！」

鬼柳の返事にジャックは微かに笑みを浮かべながら、ピットへと戻っていった。

「鬼柳の野郎……。強えな」

「そうだな……。俺達が強くなっているように奴もまた強くなっているということだ」

「へっ、ますます燃えてきたぜ！」

「クロウ。奴はまだゾーンに託されたあのドラゴンを使用していない。あの切り札を出されれば厄介なことになる……。お前の速攻で奴を倒してこい！」

「そうしたいのは山々だけどよ……。あいつの場には攻撃することが出来ねえ地縛神がいるんだぜ？」

「既に攻略の一手は打ってある。後は貴様次第だ……。頼んだぞ！」

「何だかよく分からねえが……。任せときな！」

クロウはジャックからバトン代わりのシールと場に残されたカードを受け取ると、鬼柳に向かってDホイールを走らせていった。

「5D'sのセカンドホイーラーはクロウだ！強力なモンスターを2体従えている鬼柳にどうやって立ち向かっていくのかー!？」

「久しぶりだなクロウ！俺の全力をぶつけてやるぜ！」

「ああ！だけど俺のデュエルは鉄砲玉みてえに素早いぜ！悪いが俺についてこれねえ内に倒させてもらおう！」

「言うじやねえか。来い！」



「行くぜ、鬼柳！」

「「デュエル！」」

鬼柳 LP2750

フィールド 『地縛神 C c a p a c A p u』（守備表示） 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札0

スピードカウンター

s c 3

クロウ LP4000

フィールド 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』（攻撃表示） 『クロック・リゾネーター』（守備表示）

セット0

手札5

s c 3

「俺のターン、ドロォー……そうか、そういうことか！ようやく分かったぜ、ジャック！」

鬼柳 s c 3 ↓ 4 クロウ s c 3 ↓ 4

「まずは先制攻撃させてもらうぜ！スピード・ワールド2の効果発動！s cを4つ取り除き、手札のs p 1枚につき800のダメージを与える！俺の手札には1枚だ！」

クロウのDホイールから鬼柳のDホイールに向かって衝撃波が放たれた。

クロウ s c 4 ↓ 0

鬼柳 LP2750 ↓ 1950

「へっ、この程度何ともねえぜ！」

「そう言ってるのも今の内だ！俺はクロック・リゾネーターをリリースしてB F —漆黒のエルフェンをアドバンス召喚！」

ブラックフェザー

小さな悪魔の代わりに場に現れたのは手足の生えたカラス。立派な黒翼は健在で、翼が羽ばたくと周囲に強風を巻き起こした。

B F —漆黒のエルフェン 攻撃力2200

「だけどそいつじゃ地縛神もインフェルニティ・デス・ドラゴンも倒せ

ねえ！」

「慌てんなよ！漆黒のエルフェンの効果発動！こいつが召喚に成功した時、相手モンスター一体の表示形式を変更することが出来る！」  
「何だと!？」

「俺はインフェルニティ・デス・ドラゴンを守備表示にするぜ！」

漆黒のエルフェンが起こした強風が鬼柳の場に佇むインフェルニティ・デス・ドラゴンを吹き飛ばし、体勢を崩させた。

インフェルニティ・デス・ドラゴン 守備力2400

「…しまった。この状況は！」

「気づいたみてえだな！だが、もう遅いぜ！バトルだ！レッド・デーモンズ・ドラゴンでインフェルニティ・デス・ドラゴンに攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが炎のブレスを放つと、鬼柳のフィールドが炎の海に包まれていった。

「そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンは守備モンスターに攻撃した時、相手の守備モンスターを全て破壊する！デモン・メテオ！」

インフェルニティ・デス・ドラゴンと地縛神はレッド・デーモンズ・ドラゴンの放った炎の海に溺れ、その身を沈めていった。

「くっ！まさかこんな手で地縛神がやられちゃうとはな…！」

「これでお前の場はがら空きだ！決めるぜ！漆黒のエルフェンで鬼柳にダイレクトアタック！」

漆黒のエルフェンが鬼柳に向かって飛んでいき、鋭い爪で鬼柳を切り裂いた。

「これがあいつらのチームプレイ…絆か。遊星達は俺がいなくなつてからも互いに絆を深めていたんだな。ちくしょう…満足させられちまったぜ…！」

鬼柳 LP1950↓0

鬼柳のライフが0になり、それに伴いDホイールが減速していった。

「だけど…俺にも新たに築いた絆がある！ネオサティスフアクション…俺の新しいチームで築いた絆が強いか、それともお前達の絆が強い

か…本当の勝負はこれからだ！」

「おうよ！俺達の絆はどんなチームにだって負けはしねえ！」

鬼柳は絆のバトンを繋ぐため、ピットへ戻っていった。

クロウ LP4000

フィールド 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』（攻撃表示） 『BF

―漆黒のエルフエン』（攻撃表示）

セツト0

手札5

s c o

「お疲れ様ですわ。後はわたくしに任せなさい」

「…幸子。お前には悪いけど最初チームメンバーに女が入るのは俺はあんまり良く思っただけじゃなかった。ずっと男ばかりのチームでやってきたからな」

「なっ！」

「だけどここの大会一緒に前と戦ってきて…お前の強さがよく分かったぜ。俺はお前とコナミに支えられたからこそここまで頑張れた。札を言うぜ。仲間になつてくれて…ありがとな」

「…こちらこそ札を言いますわ。あなたに引張られたからこそわたくしもここまでついてこれたのですから。ただ…」

「ただ？」

「まだわたくし達の戦いは終わってはいないでしょう？」

「…そうだな」

鬼柳はふっ、と笑い幸子に自分の場に残った唯一のカードを手渡した。

「さあ、わたくしもネオサティスフアクションの一員として満足させてもらおうとしましょうか！」

「ああ！満足してこい！」

幸子はピットを飛び出し、クロウへと追いついた。

「チームネオサティスフアクションのセカンドホイラーは幸子だ！クロウも幸子もテクニカルなタクティクスを得意とするDホイラー！ジャックと鬼柳のデュエルが力のぶつかり合いなら、この2人

の戦いは技のぶつかり合いとなるかー!?」

「来たな！手加減はしねえぜ！」

「そんなものは無用ですわ！行きますわよ！」

「「デュエル！」」

「わたくしのターン、ドロー！」

幸子 sc4↓5 クロウsc0↓1

「彼の場には強力なモンスターが2体……。わたくしはモンスターをセットします！さらにカードを2枚伏せてターンエンド！」

幸子の場に正体不明のモンスターが現れた。クロウからは情報を探る術は無く、挑む場合は未知のモンスターへの挑戦となる。

幸子 LP4000

フィールド 裏側守備表示1

セット3

手札3

sc5

「それで終わりか？ならこっちの番だ！俺のターン！」

幸子 sc5↓6 クロウsc1↓2

「俺の場にBFが存在する時、手札のBF―黒槍のブラストは特殊召喚することが出来る！」

漆黒のエルフェンの召集に応え、青い翼をはためかせて黒く鋭い槍を持った仲間が参上した。

BF―黒槍のブラスト 攻撃力1700

「行くぜ。バトルだ！」

「3体のモンスターで総攻撃を仕掛けてきますか…！」

（さあて…どいつで攻撃するかな。…ここは確実に守備モンスターを倒させてもらうぜ！）

「俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンでセットモンスターに攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが再びブレスを吐き出すと伏せられていたモンスターが明らかにになった。

「わたくしが伏せていたのは素早いマンタですわ！」

白いヒレで必死にブレスを防ごうとするマンタだったが、ブレスの圧に押されてしまう。

素早いマンタ 守備力100

「そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンが守備モンスターを攻撃したことで効果発動！デモン・メテオ！」

鬼柳のモンスターと同様にブレスが炎の海となっていき、マンタを包み込んでしまった。

「これで壁モンスターはいなくなったぜ！」

「それはどうでしょうね？」

マンタを包む炎の海がどこからか流れてきた大量の海水に覆われ、一瞬で消えてしまった。海水の中には2匹のマンタが跳ねている。

素早いマンタ×2 守備力100

「倒したはずのモンスターが増えてやがるだと！」

「素早いマンタは効果によって破壊された時、同名モンスターという名の仲間をデツキから任意の数だけ呼び出すことが出来るのですわ！」

「何!? くっ、レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果を利用されちゃったか…! だけど俺の場にはまだ2体のモンスターがいるんだぜ! 黒槍のブラストで素早いマンタに攻撃だ！」

青い翼を羽ばたかせ、天高く飛翔した黒槍のブラストは急激に降下して鋭い槍をマンタに向かって突き立てた。

「黒槍のブラストは守備モンスターに攻撃した時、貫通ダメージを与えるぜ！」

「そんな単調な攻撃は通しませんわ! トラップ発動! ポセイドン・ウェーブ! その攻撃は無効となりますわ！」

黒槍のブラストの突き立てた槍は津波の壁によって防がれてしま

う。

「やるな…!」

「まだですわ! ポセイドン・ウェーブのさらなる効果を発動! フィールドの魚族モンスターの数×800のダメージを相手に与えます!」

「マジかよ！」

津波はクロウをも覆いつくし、津波になった2体のマンタがクロウにヒレでビンタを決めた。

「当然、素早いマンタは魚族ですわ！」

「うおっ！…いてて……」

クロウ LP4000↓2400

反撃を予想しきれなかったクロウは後ろに下がる形となつてしまい、並んで走っていた幸子が前に出る形となった。

「やられちまったぜ…。だが、まだ攻撃は残っている！漆黒のエルフェンで素早いマンタに攻撃だ！」

津波によつて自軍へ押し戻されていくマンタをめがけて漆黒のエルフェンは爪を振り下ろし、切り裂いた。

「追撃のモンスターを呼ばれた分、モンスターを倒されてしまいましたか…」

「ダメージは食らったが、まだまだこれからだぜ！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！この瞬間、レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果によつて攻撃宣言を行っていない俺のモンスターは破壊される！」

「黒槍のブラストはポセイドン・ウェーブによつて攻撃を無効にされました。よつてこのターン攻撃宣言をしていないのと同じということですよわね」

孤高のドラゴンが戦う意思のないモンスターをその拳で排除してしまつた。

クロウ LP2400

フィールド 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』（攻撃表示） 『BF

—漆黒のエルフェン』（攻撃表示）

セット2

手札3

sc2

「わたくしのターン！」

幸子 sc6↓7 クロウ sc2↓3

「わたくしはチューナーモンスター、竜宮の白タウナギを召喚します

わ！」

紅色のヒレの所々に宝石のような輝きを放つ球体がはめ込まれた竜宮の使いが津波により出来上がった海に飛び込んだ。

竜宮の白タウナギ 攻撃力1700

「シンクロか！」

「当然！レベル2の素早いマンタにレベル4の竜宮の白タウナギをチューニング！氷の檻に閉ざされし龍よ、今こそ真の力を解き放ち、勝利という栄光を支配せよ！シンクロ召喚！全てを凍てつかせなさい：氷結界の龍 ブリユーナク！」

海に飛び込んだ白タウナギがマンタと同調すると、突然海が凍っていった。すると翼や胴体がまるで氷のように透き通ったドラゴンが凍った海を突き破り、天高く飛翔した。

氷結界の龍 ブリユーナク 攻撃力2300

「漆黒のエルフェンの攻撃力を超えてきたか……！」

「それだけではありませんわ！ブリユーナクの効果を発動！1ターンに1度、わたくしの手札を任意の数だけ墓地へ送ることで相手フィールドのカードをその分だけ手札に戻すことが出来ますわ！」

「なっ！」

（クロウのライフは2400。わたくしの手札を全て捨て、クロウのフィールドのカードを全て手札に戻したとしてもライフは残ってしま……ならば！）

「わたくしは1枚の手札を捨て、レッド・デーモンズ・ドラゴンをエクストラデッキに戻します！」

幸子の手札がブリユーナクの力によって氷の槍へと変換されていく。氷の槍は稲妻のような速さでレッド・デーモンズ・ドラゴンへと向かっていき、その力を封印した。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンが……！」

「そしてバトル！ブリユーナクで漆黒のエルフェンに攻撃！」

ブリユーナクが咆哮を上げると凍った海が分解され、無数の氷弾として漆黒のエルフェンに放たれた。

「僅かですが攻撃力はこちらの方が上！これであなたの場のモンス

ターは全滅ですわ!」

「…そいつはどうかかな!」

「!?!」

漆黒のエルフェンが翼を大きく広げると無数の羽がブリユーナクに向かつて放たれ、氷弾を全て弾き飛ばしてしまった。

「一体何が…!?!」

「俺は手札のBF―月影のカルートの効果を発動していたのさ!」

「手札のモンスター効果ですって…!」

「こいつは俺のBFがバトルする時、墓地に送ることで発動出来る! このターンの終わりまで漆黒のエルフェンの攻撃力は1400上昇するぜ!」

BF―漆黒のエルフェン 攻撃力2200↓3600

漆黒のエルフェンの放った羽がブリユーナクの翼を傷つけ、ブリユーナクは地面へと落ちていってしまう。

「ぎゃあああ!」

幸子 LP4000↓2700

ダメージを受けた幸子は後退していき、クロウに追い抜かされてしまふ。

「どうだ!これが5D、sの鉄砲玉、クロウ様の実力よ!」

「くう…!やりますわね。ですが!トラップ発動、激流蘇生!わたくしの水属性モンスターが破壊され墓地へ送られた時、そのモンスタ―を呼び戻すことが出来ますわ!」

撃ち落とされた氷弾が溶け、再び津波が発生する。上に押し出されるように発生した津波は地面へと落ちてきたブリユーナクを支え、上空へと押し戻した。

氷結界の龍 ブリユーナク 攻撃力2300

「戻ってきやがったか!」

「そして激流蘇生の効果により呼び戻したモンスターの数×500のダメージを相手に与えますわ!」

「げっ!」

津波が再びクロウの方に向かっていき、Dホイールごと包み込んで



しまった。

「また津波かよー！」

クロウ LP2400↓1900

ダメージを受けたクロウは少し後退し、幸子と並んで走る形となった。

「わたくしはカードを1枚伏せ：ターンエンドですわ！」

「この瞬間、漆黒のエルフェンの攻撃力は元に戻るぜ！」

B F―漆黒のエルフェン 攻撃力3600↓2200

幸子 LP2700

フィールド 『氷結界の龍 ブリユーナク』（攻撃表示）

セツト2

手札1

s c 7

「こつから巻き返させてもらうぜ！俺のターン！」

幸子 s c 7↓8 クロウ s c 3↓4

「手札から s p―エンジェル・バトンを発動する！ s c が2以上の時、カードを2枚ドロ―してその後1枚墓地に捨てるぜ！」

クロウは天使にもたらされたカードを受け取り、逆転の可能性を探った。

「俺はチューナーモンスター、B F―竜巻のハリケーンを召喚する！」

ワイシャツとジーンズを履いた筋肉質な鳥獣人がフィールドに降り立った。

B F―竜巻のハリケーン 攻撃力0

「チューナー：そちらもシンクロで来ますか」

「……。いや！俺は竜巻のハリケーンの効果を発動するぜ！こいつはターン終了まで場のシンクロモンスターと同じ攻撃力になれる！」

「何ですって……！」

「俺はブリユーナクの攻撃力をコピーさせてもらうぜ！」

筋肉質な鳥獣人が高速回転し、自身を竜巻で包み込む。竜巻が収まる頃には竜巻のハリケーンの姿はブリユーナクそのものへと変わっていた。

B F―竜巻のハリケーン 攻撃力0↓2300

「バトルだ！竜巻のハリケーンでブリューナクへと攻撃！」

クロウの場に佇んだブリューナクが万物を凍らせる息吹を吹き出した。

「竜巻のハリケーンで相打ちさせ、漆黒のエルフェンでダイレクトアタックする作戦ですか…甘いですわね！墓地からキラー・ラブカの効果を発動しますわ！」

「墓地だと!?!」

「このカードを除外することで場の海竜族モンスター、ブリューナクへの攻撃を無効にし、攻撃モンスターの攻撃力を次のわたくしのエンドフェイズまで500下げますわ！」

本物のブリューナクが咆哮を上げると海がブリューナクを守るように壁となり、竜巻のハリケーンの息吹を防いだ。

B F―竜巻のハリケーン 攻撃力2300↓1800

「竜巻のハリケーンの攻撃が防がれたか…」

「漆黒のエルフェンの攻撃力は2200。ブリューナクには届きませんわ！よってこれであなたのバトルは終了です！」

「へっ、お前こそ甘いな！トラップ発動、緊急同調！このカードによってバトルフェイズ中にシンクロ召喚することが出来る！」

「なっ…しまった！バトルフェイズ中にシンクロしてくるとは…！」

「レベル6の漆黒のエルフェンにレベル1の竜巻のハリケーンをチューニング！黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！羽ばたけ…B F―アーマード・ウイング！」

竜巻によって2羽の鳥が包まれ、竜巻が晴れるのを待たずに鋼の肉体を纏った鳥獣人が竜巻を突き破って出てきた。

B F―アーマード・ウイング 攻撃力2500

「こいつはバトルフェイズ中に呼ばれた！よってこいつも攻撃出来るぜ！アーマード・ウイングでブリューナクに攻撃！ブラック・ハリケーン！」

竜巻を追い風として発生させ、勢いに乗ったアーマード・ウイングは息をつく間も無くブリューナクを拳でノックアウトしていた。

「くうっ……！」

幸子 LP2700↓2500

ダメージを受けた幸子は後退していき、再びクロウに前を走られてしまう。

「よし！俺は2枚のカードを伏せてターンエンドだ！」

クロウ LP1900

セツト3

手札0

sc4

(強い……まるで野生の勘でわたくしの手を見抜いているかのような鋭さですわ。彼を超えるためには……わたくしが最も信頼するあのモンスターを呼び出すしかありませんわ！)

「わたくしの……ターン！」

幸子 sc8↓9 クロウ sc4↓5

「わたくしも手札からs pーエンジェル・バトンを発動しますわ！scが2以上ある時デッキから2枚のカードをドロ―し、その後1枚のカードを墓地へ送ります！」

天使から渡された2枚のカードを受け取り、その代償として1枚のカードを墓地へと埋葬した。

「来ましたわね……！s pーデッド・シンクロンを発動しますわ！scが5以上ある時、素材となるモンスターを墓地から除外することでシンクロ召喚を行うことができます！ただし、このエンドフェイズにそのモンスターは除外されますわ」

「そうきたか……！」

「わたくしはエンジェル・バトンによって墓地へ送ったレベル3の魚雷魚にレベル4の竜宮の白タウナギをチューニング！氷の槍を身に宿す龍よ、その凍える吐息で幾千の敵を凍らせよ！シンクロ召喚！全てを貫け、氷結界の龍 グングニール！」

身体全体が氷によって覆われたドラゴンが異次元の狭間からフィールドに飛び出した。

氷結界の龍 グングニール 攻撃力2500

「攻撃力2500…このターンで除外されるってことは相打ち狙いか。残念だったな！アーマード・ウィングは戦闘で破壊されず、俺への戦闘ダメージも0にする無敵のモンスターなんだぜ！」

「厄介ですわね…ですが。わたくしはグングニールの効果を発動しますわ！1ターンに1度、手札から2枚までカードを墓地へ捨てることでその分だけ相手フィールドのカードを破壊出来ますわ！」

「何だ?!」

「わたくしは最後に残ったこのカードを墓地に送りますわ。狙いは…わたくしから見て一番右にあなたが伏せているカードですわ！」

「アーマード・ウィングを狙わねえ…伏せカードを警戒したか?」

グングニールが咆哮を上げると天から氷の槍が降下し、クロウの伏せているカードを貫いた。

「けど運が悪いな！お前が貫いたのは地雷だぜ！俺は破壊されたトラップカード、BFマインの効果を発動！」

「破壊されたトラップを発動ですって!」

「こいつは相手の効果によって破壊された時発動出来る！破壊された時に俺の場にBFがいる場合、相手に1000ダメージを与えて俺はカードを1枚ドロウする！」

地雷に突き刺さった氷の槍が爆風により弾き返され、幸子に直撃してしまう。

「ぐっ!」

幸子 LP2500↓1500

ついにクロウとライフが逆転してしまい、Dホイールもクロウより大きく後退してしまった。

「警戒しすぎたな！お前はアーマード・ウィングを破壊するチャンスを見すみす逃しちまったぜ！」

「…ふふ、まだですわ。わたくしはわたくしがもつとも信頼するエースモンスターを呼び出しています！」

「だけどお前の手札は0だ！そんな状態でエースを呼べるのか?」

「呼べるかではありませんわ…呼び出すのです！トラップ発動、燃え上がる大海！このカードはわたくしの場にレベル7以上の水属性モ

ンスターが存在する時に発動出来ますわ！」

幸子のフィールドを満たす海に巨大な渦が発生した。

「このターン効果モンスターの効果が発動するために墓地へ送られた水属性モンスターを墓地から呼び戻すことが出来ますわ！」

「な…コストにしたモンスターを呼び戻すだ?!?コストになつてねえじゃねえか！」

「ふっ、安心なさい。そのモンスターが特殊召喚された後、わたくしの場のモンスターを1体破壊しなくてはなりませんわ。ですがその前にわたくしのエースが現れますわ…！」

巨大な渦の発生元は少し動くだけで津波を発生させてしまうほど大きなシーラカンスだった。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「これがわたくしのエースですわ。そしてわたくしは燃え上がる大海によってグングニールを破壊！」

巨大な渦の勢いに羽を休めていたグングニールが巻き込まれ、そのまま沈んでいってしまった。

「へっ、確かに攻撃力は上がったがアーマード・ウイングに戦闘は無意味だぜ！」

「誰が戦闘を仕掛けると言いました？シーラカンスは手札を1枚捨てることでデッキから可能な限りレベル4以下の魚族モンスターを呼び出すことが出来るのですわ！」

「なにい!?グングニールの破壊も計算の内つてわけかよ!…いや、お前の手札は0だ!その効果はこのターンは使えねえぜ！」

「見落としがありますわね!わたくしはスピード・ワールド2の効果を発動!scを7つ取り除くことでカードを1枚ドロップしますわ！」

「げっ…！」

幸子がさらに減速していくも、シーラカンスが4つの渦を発生させ仲間を呼び出していった。

幸子 sc9↓2

「そして手札を1枚捨て、シーラカンスの効果が発動致しますわ!あなたの能力を存分に発揮なさい！」

4つの渦からそれぞれ1匹ずつ、合計4匹の魚が渦から飛び出してきた。

竜宮の白タウナギ×2 攻撃力1700

オイスターマイスター 攻撃力1600

ヒゲアンコウ 攻撃力1500

「この効果で呼び出したモンスターの効果は無効になり、攻撃も出来ません。…ですが！」

「竜宮の白タウナギはチューナーモンスター……！」

「レベル3のオイスターマイスターにレベル4の竜宮の白タウナギをチューニング！シンクロ召喚！再びその姿を見せなさい！氷結界の龍 グングニール！」

渦に飲まれていたグングニールが海をその身で貫き、再び上空へ飛翔した。

氷結界の龍 グングニール 攻撃力2500

「グングニールの効果を使おうにも今度こそお前に手札はねえぜ！」

「狙いはその先ですよ？オイスターマイスターが戦闘以外で墓地へ送られた時、場にオイスタートークンを残しますわ！」

グングニールが飛び出した拍子に小さなオイスターマイスターの子供が2匹の魚のいる場所へ流されていた。

オイスタートークン 守備力0

「そしてわたくしはレベル1のオイスタートークンとレベル4のヒゲアンコウにレベル4の竜宮の白タウナギをチューニング！」

「連続シンクロ召喚……！」

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！凍らせなさい、氷結界の龍 トリシューラ！」

氷結界に封印されし最後の龍がその封印を解き、グングニールと共に上空へ飛翔した。

氷結界の龍 トリシューラ 攻撃力2700

「あの状況から攻撃力2500以上のモンスターを3体も並べるとはな。だけどアーマード・ウィングは……！」

「無敵なのでしょう？戦闘では……ね。トリシューラの効果発動！シン

クロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド・墓地から1枚ずつカードを除外しますわ!」

「な…何だとお!? インチキ効果もいい加減にしろ!」

「ふふ…わたくしはBF—マインによってドロ—されたカードと、墓地の最も攻撃力が高い漆黒のエルフェン、そしてフィールドのアーマード・ウイングを除外します!」

トリシューラが咆哮を上げるとフィールド上に暴風が吹き荒れ、氷の槍が縦横無尽に飛び交う。氷の槍は3枚のカードに刺さるとそのまま異次元へと消えてしまった。

「くっ…!」

「これで終わりですわ! バトル! シーラカンスでクロウヘダイレクトアタック!」

シーラカンスが海の水を巻き上げるとそのまま渦状の竜巻となってクロウを襲った。

「勝った…!」

「……」

渦状の竜巻はクロウへ直撃する寸前、光の壁によって遮られてしまった。

「なっ…!?!」

「まだだ! トラップ発動! 王魂調和! こいつは俺へのダイレクトアタックを無効に出来る!」

「ですがまだわたくしの攻撃は終わっていませんわ!」

「王魂調和の効果も終わってないぜ! 攻撃を無効にした後、レベルの合計が8以下になるように墓地のチューナーとそれ以外のモンスターを除外することで、選んだモンスターのレベルの合計と同じレベルのシンクロモンスターをシンクロ召喚扱いで呼び出す!」

「今度は相手ターンにシンクロ召喚ですって…!?!」

「墓地のレベル3の月影のカルートとレベル4の黒槍のブラストにレベル1の竜巻のハリケーンを除外してチューニング! 吹き荒べ嵐よ! 鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ! シンクロ召喚! BF—孤高のシルバー・ウインド!」

光の壁が眩しい光を放ち、その閃光が止む頃には立派な銀の翼が生えた鳥獣人が現れ、剣を構えていた。

BF―孤高のシルバー・ウインド 攻撃力2800

「そして孤高のシルバー・ウインドがシンクロ召喚に成功したことで効果発動だぜ！このカードの攻撃力より低い守備力を持つフィールドのモンスターを2体破壊出来る！」

「く…わたくしの場のモンスターはどれも下回っている！」

「厄介な効果を持つグングニールとシーラカンスには消えてもらうぜ！パーフェクト・ストーム！」

孤高のシルバー・ウインドは鋭い野生の勘で急所を見抜き、巨大なモンスターをもろともせず切り捨ててしまった。

「何てこと…」

「ちなみに俺はこの効果を使ったターンにバトルすることは出来ねえが、相手ターンにシンクロしたからその効果は関係ないぜ！」

「くっ！隙がないですわ。シーラカンスまで繋げても彼を超えられないとは…ですが…諦めませんわ！チームネオサティスフアクシヨンの一員として最後の一瞬まであなたに食らいつきます！」

「なんて気迫だ…俺も油断出来ねえぜ！」

幸子は追いかける魚のように諦めずに隙を伺い、クロウは獲物を狙う鳥のように慎重に相手の様子を伺っていた。

「トリシューラではシルバー・ウインドを超えられない…わたくしはこれでターンエンドですわ！」

「…ここだ！トラップ起爆！」

「ここ…！」

「デルタ・クロウーアンチ・リバーズ！俺の場にBFがいる時、相手がセットしている魔法・罠カードを全て破壊する！」

「な…!?」

シルバー・ウインドが幸子の場に伏せられていたカードを貫き、破壊してしまった。

「よし…これでシルバー・ウインドがトリシューラを倒すのを邪魔する奴はいねえ！そしてトリシューラがいなくなればもうお前には



手は残ってねえはずだ!」

「…そうですね。やはり、今のわたくしではあなたに勝つことは難しいのかもしれない」

クロウは獲物を仕留めたと感じ、後ろを走っている幸子の表情を見ようと振り向いた。そして…驚いた。

(あいつ…笑ってやがる!?)

幸子はまるで隙を見つけたかのように…笑っていた。

「ですが、わたくし達ならばあなたに勝つことは出来ますわ」

「ど、どういうことだ!?!」

「ジャックがあなたにレッド・デーモンズ・ドラゴンを託したようにわたくしにも1枚…鬼柳が残したバトンが繋がれていたのですわ」

「鬼柳が渡したカード…伏せカードか! だけど、そいつは今破壊したぜ!」

「あなたはわたくし以上に鬼柳のことを知っているでしょう? 鬼柳は…死神ですわ。そして…死神は死にませんのよ! 破壊された白銀のスナイパーの…モンスター効果を発動しますわ!」

「モンスター効果だど!?!」

氷が張り巡らされた幸子のフィールドに防寒着を羽織ったスナイパーが銃を構え、スコープを覗いて標準を合わせていた。

白銀のスナイパー 守備力1300

「白銀のスナイパーは魔法カード扱いで場にセットすることが可能なモンスター…。さらにこのカードは相手の効果によって破壊されたターンのエンドフェイズに墓地から特殊召喚出来ますのよ。そして…」

「そして…?」

「このモンスターがこの効果で特殊召喚に召喚した場合、フィールドのカードを1枚破壊出来ますわ! わたくしは孤高のシルバー・ウィンドを破壊!」

「なっ…しまった!」

スナイパーの標準が定まり、一寸の狂いなく孤高のシルバー・ウィンドの急所を撃ち抜いた。

「これで本当に…ターンエンドですわ」

幸子 LP1500

フィールド 『氷結界の龍 トリシューラ』（攻撃表示） 『白銀のスナイパー』（守備表示）

セット0

手札0

sc2

「こりや…かなりまずいぜ。俺の手札にもフィールドにもカードが残ってねえなんてな…ドロー！」

幸子 sc2↓3 クロウ sc5↓6

「…ここでこのカードか。そういうこと…なんだろうな。俺はカードを1枚伏せ…ターンエンドだ！」

「…！」

クロウ LP1900

フィールド 無し

セット1

手札0

sc6

「…わたくしのターン！」

幸子 sc3↓4 クロウ sc6↓7

「場にカードを1枚伏せますわ。そして…バトル！トリシューラでクロウへダイレクトアタック！」

トリシューラが大きく息を吸い、鋭い息吹をクロウへ放った。

（この伏せカードは…俺から遊星へのバトンだ！後は頼んだぜ…遊星！）

「うおおおっ!？」

クロウ LP1900↓0

万物を凍らせる息吹が直撃したクロウのライフは0になり、大きく後退した。そして…幸子がクロウを追い抜いた。

「ふう…何とか勝ちましたわね。ですが気は抜けませんわ」

セカンドホイーラー同士の激闘を制した幸子。しかし、まだ試合は

終わっていない。ラストホイーラーの遊星にバトンを繋ぎに行くク  
ロウを横目に幸子はもう一度気合を入れ直したのだった。

可能性は人の数だけある

鬼柳が残したカードの力を借り、幸子はクロウに勝利した。ライフが0になったクロウは応援席からマーサハウスの子供達の声援を受けながらピットへ戻っていくのだった。

「クロウ。このカードは……」

遊星はクロウが残した1枚の伏せカードを確認し、クロウの意図を汲み取った。

「後は任せませ、遊星！」

「…ああ！」

クロウからバトンを受け取った遊星はピットからDホイールを走らせると、観客席から大きな歓声を受けながら幸子に追いついた。

「5D'sのラストホイールはもちろん不動遊星だ！果たしてここから逆転することが出来るのかー!？」

「来ましたわね不動遊星。ネオ童実野シテイを救った……英雄。ですがそう簡単にやられませんわよ！いいえ、むしろここでわたくしがあなたを倒して差し上げますわ！」

「仲間が繋いでくれたバトン…俺はそれを無駄にするわけにはいかない！行くぞ！」

「「デュエル！」」

幸子 LP1500

フィールド 『氷結界の龍 トリシューラ』（攻撃表示） 『白銀の

スナイパー』（守備表示）

セット1

手札0

スピードカウンター

S C 4

遊星 LP4000

フィールド 無し

セット1

手札5

S C 7

「俺のターン、ドロ―！」

幸子 s c 4 ↓ 5 遊星 s c 7 ↓ 8

「わたくしの場には攻撃力2700のトリシューラがいますわ。フィールドが整わない内に押し切ってみせます！」

「そうはさせない！俺は手札のモンスターカード1枚を墓地に送ることで手札からチューナーモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚する！」

タンブルウィードと呼ばれる植物が風にふかれて転がり過ぎたかと思うと、フィールドに西部劇風のハットを被り赤いマントを羽織ったモンスターが参上した。

クイック・シンクロン 攻撃力700

「さらにクリア・エフェクターを召喚！」

足にまで届いてしまいそうなほど長い黒髪をした女性が、風によって髪をなびかせながら優雅にフィールドに舞い降りた。

クリア・エフェクター 攻撃力0

「もうチューナーとそれ以外のモンスターを…！」

「クイック・シンクロンをシンクロ素材とする場合、シンクロンチューナーモンスターの代わりとする！俺が選択するのは…ニトロ・シンクロン！」

クイック・シンクロンの前に複数枚のカードが並び、回転を始めた。クイック・シンクロンはホルダーから素早く銃を取り出し、早撃ちによって指定されたニトロ・シンクロンのカードを撃ち抜いた。

「行くぞ！俺はレベル2のクリア・エフェクターにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

クイック・シンクロンが羽織っていたマントで自身とクリア・エフェクターを隠した。次の瞬間、風によってマントがどこかへ飛ばされる。そこには筋肉質な戦士が現れていた。

ニトロ・ウォリアー 攻撃力2800

「さらにクリア・エフェクターの効果発動！このカードがシンクロ召

喚に使用され墓地へ送られた時、俺はカードを1枚ドロウする！」

「トリシューラの攻撃力を1ターンで超えた上に手札を補充した…！さすが…ですわね」

「そして俺はクロウが残したこのカードを発動する！スピードスベル s p — シフト・ダウン！ s c を6つ取り除くことでカードを2枚ドロウする！」

「…！」  
D ホイールが大幅に減速していく代わりに遊星は新たなカードを手札へ加えた。

遊星 s c 8 ↓ 2

（シフト・ダウンをドロウした時、クロウの s c は6だった。クロウはこのカードを使用して逆転出来る可能性に賭けることも出来たはずだ。だが、連携によって真価を発揮するクロウのデッキでは2枚のカードでこの状況を乗り越えるのはやや分が悪い。クロウは分の悪いギャンブルよりも俺に確実に戦力を残すことを優先してくれたんだ。…俺はその期待に必ず応えてみせる！）

「バトルだ！ニトロ・ウオリアーでトリシューラへ攻撃！ダイナマイト・ナツクル！」

トリシューラが氷の槍を飛ばし迎撃を狙うもニトロ・ウオリアーは飛んでくる槍を次々と躲し、トリシューラに接近した。

「ここでニトロ・ウオリアーの効果を発動！俺のターンに俺がマジックカードを発動した場合、このダメージ計算の間だけ攻撃力を1000上昇させることが出来る！」

「何ですって…！」

ニトロ・ウオリアーの拳が巨大化していき、トリシューラへと振り下ろされた。

ニトロ・ウオリアー 攻撃力2800 ↓ 3800

至近距離まで接近されたトリシューラに回避手段はなく、そのまま討伐されてしまった。

「くっ！白銀のスナイパーを守備表示にしている正解でしたわね…！」

幸子 LP 1500 ↓ 400

「この瞬間、ニトロ・ウォリアーの攻撃力は元に戻る。…だが俺はここでニトロ・ウォリアーのもう一つの効果を発動する！」

ニトロ・ウォリアー 攻撃力3800↓2800

「もう一つの効果…？」

「ニトロ・ウォリアーの攻撃によって相手モンスターを破壊した時、相手の表側守備表示のモンスターを攻撃表示に変更し、そのモンスターにニトロ・ウォリアーは続けて攻撃することが出来る！」

「なっ…!？」

「ダイナマイト・インパクト！」

ニトロ・ウォリアーが胸からビームを放つと白銀のスナイパーが隠れ場所としていた氷壁を粉碎し、白銀のスナイパーを戦場に引っ張り出した。

白銀のスナイパー 攻撃力1500

「ニトロ・ウォリアー…もう1度攻撃だ！ダイナマイト・ナックル！」  
隠れて狙撃の機会を伺っていた白銀のスナイパーだったが隠れ場所を壊されては為す術はなく、ニトロ・ウォリアーの拳をまともに受けてしまった。

「まさか1ターンでやられてしまうとは…！」

幸子 LP400↓0

幸子のライフが0になったことでDホイールが減速し、遊星に追い抜かされてしまった。

「悔しいですが…後は庶民に託すしかないようね」

遊星 LP4000

フィールド 『ニトロ・ウォリアー』（攻撃表示）

セット0

手札6

sc2

幸子はサテライトの子供達から声援を受けながらピットへ戻っていった。

「…おいおい、幸子。このカードは…」

「ふふ…まあ、そういうことですわね。後はあなたと不動遊星の一騎

打ちで決まりますわ。気を引き締めていきなさい！」

「おうよー任せときな！」

幸子からカードとバトン代わりのシールを受け取ったコナミはこの戦いに決着をつけるため、Dホイールを走らせていった。

「WRGP決勝戦、チーム5D's対チームネオサティスフアクション！泣いても笑ってもこれが最後のデュエルだ！このデュエルが終わった時、最後まで走り続けているチームの優勝だ！ラストホイーラー同士のデュエル…一瞬たりとも見逃すな！」

MCの実況に会場は今までで最高峰の盛り上がりを見せる。デュエルが始まる前にあつたどことない重みはいつの間にか消え失せていたようだ。

「どうやら活気を取り戻すっていう俺達の目的はあいつらが達成しちまったようだな」

「…そうだな。だが、この戦いには…もう一つ目的がある」

「え？そうなのか…？」

「ああ。俺はこの戦いが始まる前に…レイン恵と話をした」

「恵と!?」

「そうだ。俺は彼女から色々なことを聞いた…彼女がゾーンの絶望から生まれたことも。そして、お前と恵がアーククレイドルでデュエルしたこともな」

「……」

「俺達は彼らが味わった絶望の未来を変えなくてはならない。このデュエルは…俺達の可能性を試すデュエルだ。今まで俺達が培ってきた可能性を全力でぶつけ合い、それを恵だけではなくみんなに見せるんだ！今ある力に満足してしまい滅びてしまった未来、そんな未来が訪れないようにまず俺達はこのデュエルを見ている全ての人にデュエルが持つ無限の可能性を示すんだ！」

「…分かったぜ、遊星。このデュエル…俺の全てをぶつける！行くぜ！」

「来い、コナミ！」

「「デュエル！」」



「俺のターン、ドロロー！」

コナミ s c 5 ↓ 6 遊星 s c 2 ↓ 3

「リバースカードオープン！ s p シフト・ダウン！ s c を6つ取り除きカードを2枚ドロローする！」

「何だと!?!」

奇しくも幸子が託しコナミが使用したカードは遊星がクロウに託されたカードと同じカードだった。コナミはそのカードの力により、大幅な減速を代償に新たなカードを手札へ加えた。

コナミ s c 6 ↓ 0

「どうやら幸子も狙いは同じだったみたいだぜ。これで遊星と俺の条件は同じになった！後は…俺の全力をぶつけるだけだ！手札のプリミティブ・バタフライは俺の場にモンスターがいない時、特殊召喚する事が出来る！」

5本の羽根が生えた蝶々がフィールドを舞い、鱗粉をまき散らした。

プリミティブ・バタフライ 攻撃力1200

「プリミティブ・バタフライの効果発動！こいつは1ターンに1度、場の昆虫族モンスターのレベルを1つあげることが出来る！俺はこの効果でプリミティブ・バタフライ自身のレベルを1つ上げる！」

鱗粉が一つに集まって羽根の形となり、プリミティブ・バタフライの新たな羽根として付着した。

プリミティブ・バタフライ レベル5 ↓ 6

「さらに俺はチューナーモンスター、サニー・ピクシーを召喚するぜ！」

半透明の羽を生やした赤髪の小さな妖精がプリミティブ・バタフライを光の輪で包み込んだ。

「来るか…」

「俺はレベル6になったプリミティブ・バタフライにレベル1のサニー・ピクシーをチューニング！聖なる命の灯火、今ここに永遠とわに輝く星となる！シンクロ召喚！降誕せよ、エンシェント・ホーリー・ワイバーン！」

白く長い胴体を持ったドラゴンがフィールドを縦横無尽に舞い、ドラゴンが通った場所には一瞬遅れて嵐のように力強い風が通り過ぎていった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100

「攻撃力はニトロ・ウォリアーの方が上だ…どう来る？」

「エンシエント・ホーリーは相手よりライフが上回っている場合、その数値分だけ攻撃力を上昇させる！」

「だが、今互いのライフは4000！その効果は適用されない！」

「そうでもないぜ！シンクロ素材になったサニー・ピクシーの効果発動！サニー・ピクシーが光属性モンスターのシンクロ召喚に使われた場合、俺はライフを1000回復する！」

「…！」

妖精が光の粉をコナミにふりかけると、命の源へと変換されていた。

コナミ LP4000↓5000

「そして俺のライフが遊星のライフを上回ったことでエンシエント・ホーリーの効果が発動し、攻撃力が1000上昇する！」

エンシエント・ホーリーの胴体が伸びていき、ニトロ・ウォリアーの頭上を越える大きさとなった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓3100

「これでニトロ・ウォリアーを倒せる！バトルだ！エンシエント・ホーリーでニトロ・ウォリアーを攻撃！エターナル・ライフ！」

エンシエント・ホーリーが長い胴体でニトロ・ウォリアーを包み込むとニトロ・ウォリアーは光に包まれていき、やがて消滅してしまっ

た。

「くっ…！」

遊星 LP4000↓3700

「遊星のライフが減ったことでエンシエント・ホーリーの攻撃力はさらに上昇するぜ！」

エンシエント・ホーリー 攻撃力3100↓3400

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP5000

フィールド 『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』（攻撃表示）

セット1

手札5

sc0

「何とかしてこのターンであのモンスターを倒さないとあのモンスターは攻撃力をさらに上げていく…！俺のターン！」

コナミsc0↓1 遊星sc3↓4

遊星は脳内で7枚の手札から繋がる様々な道を展開し、この場面で最良と思われる道を選択して行動に移した。

「俺はシンクロン・エクスペローラーを召喚する！」

仲間を探しだす能力を持つガジェットが場に現れ、穴の空いた部分から光の縄を出し墓地へと下ろした。

シンクロン・エクスペローラー 攻撃力0

「シンクロン・エクスペローラーが召喚に成功した時、墓地のシンクロンと名のつくモンスターを1体特殊召喚することが出来る！」

「クイック・シンクロンを呼び戻すつもりか…！」

「…いや、俺が呼び戻すのはクイック・シンクロンにより墓地へ送っていたロード・シンクロンだ！」

光の縄に引っ張られ、足にローラーがついたロボットがフィールドに帰還した。

ロード・シンクロン 攻撃力1600

「さらに手札のドツペル・ウオリアーの効果発動！俺の墓地のモンスターが特殊召喚に成功した時、手札のこのカードを特殊召喚することが出来る！」

軍事服を着た小さな戦士が銃を構えながらフィールドに見参した。

ドツペル・ウオリアー 攻撃力800

「あつという間にモンスターがたくさん出てきやがった…！」

「俺はレベル2のシンクロン・エクスペローラーとレベル2のドツペル・ウオリアーにレベル4のロード・シンクロンをチューニング！集いし希望が、新たな地平へいざなう！光差す道となれ！シンクロ召喚

！駆け抜ける、ロード・ウォリアー！」

フィールドの一点に光が走り、光が収まる頃には鋼鉄のパーツで形成された鎧を身に纏った戦士が現れていた。

ロード・ウォリアー 攻撃力3000

「攻撃力3000か…惜しかったな遊星！」

「まだだ！ドツペル・ウォリアーはシンクロ素材になった時、俺の場に2体のドツペル・トークンを残す！」

フィールドに一見ドツペル・ウォリアーと同じように見えるモンスターが現れると、分身して場に残った。

ドツペル・トークン×2 攻撃力400

「さらにロード・ウォリアーの効果発動！1ターンに1度、デッキからレベル2以下の機械族モンスターを呼び出せる！俺が呼び出すのは…チューナーモンスター、ニトロ・シンクロン！」

ロード・ウォリアーがマント状のパーツから光を放つと、出来上がった光の道からニトログリセリンという有機化合物が入った容器に手足が生えたロボットが走ってきた。

ニトロ・シンクロン 攻撃力300

「チューナーを…まさか、連続シンクロか!？」

「俺はレベル1のドツペル・トークン2体にレベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！いでよ、アームズ・エイド！」

「アームズ・エイド…しまった！」

3体のモンスターが同調して現れたのは腕の形をしたパーツモンスター。フィールドに浮かんだアームズ・エイドはロード・ウォリアーめがけて発進された。

アームズ・エイド 攻撃力1800

「アームズ・エイドはモンスターに装備することができ、そのモンスターの攻撃力を1000上昇させる！俺はロード・ウォリアーに装備！」

ロード・ウォリアーは腕のパーツを外すと新たにアームズ・エイドを装着し、より力強さを増した。

ロード・ウォリアー 攻撃力3000↓4000

「バトルだ！ロード・ウォリアーでエンシエント・ホーリーに攻撃！ライトニング・クロー！」

アームズ・エイドの指にあたる部分から鋭い爪が伸びていき、ロード・ウォリアーはエンシエント・ホーリー目掛けて力一杯アームズ・エイドを振り下ろした。

「ぐあつ……！」

鋭く振り下ろされたアームズ・エイドに切り裂かれ、エンシエント・ホーリーは地面へと墜落していった。

コナミ LP5000↓4400

「さらにアームズ・エイドの効果発動！装着モンスターがモンスターの戦闘で破壊し墓地へ送った時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「……！」

ロード・ウォリアーが腕をエンシエント・ホーリーが墜落していく方向に向けると、そのまま装着しているアームズ・エイドを発射した。

「エンシエント・ホーリーの攻撃力は2100！よってコナミに2100のダメージを与える！」

アームズ・エイドはエンシエント・ホーリーの胴体を掴むとそのままコナミに向かって投げける体勢に入った。

「させねえ！俺はエンシエント・ホーリーの効果を発動する！」

「何?！」

「エンシエント・ホーリーは戦闘で破壊され墓地へ送られた時、ライフを1000払うことで復活することが出来る！戻ってこい！」

エンシエント・ホーリーは尻尾を鞭のようにふるい、アームズ・エイドの拘束を緩めて抜け出した。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 守備力2000

コナミ LP4400↓3400

「そしてアームズ・エイドの効果ダメージは墓地に戦闘で破壊したモンスターがいなきや発生しねえ！」

アームズ・エイドはエンシエント・ホーリーを捕まえるのを諦めて、再びロード・ウォリアーに装着された。

「躲されたか……俺は場にカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

遊星 LP3700

フィールド 『ロード・ウォリアー』（攻撃表示）

セット1 『アームズ・エイド』

手札4

sc4

「俺のターン！」

コナミsc1↓2 遊星sc4↓5

「俺はエンシエント・ホーリーを攻撃表示に変更する！そしてエンシエント・ホーリーは俺のライフが相手より下回っている場合、その数値分攻撃力が下がる！」

エンシエント・ホーリーの胴体が見るうちに小さくなり、ロード・ウォリアーを見上げる形となった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2100↓1800

「バトル！エンシエント・ホーリーでロード・ウォリアーに攻撃だ！」

「何だど!？」

エンシエント・ホーリーは格上の相手に無謀な戦いを仕掛けていった。

「反撃しろ、ロード・ウォリアー！ライトニング・クロー！」

ロード・ウォリアーはエンシエント・ホーリー目掛けて再び腕を振り下ろそうとした。

「ここだ！トラップ発動、あまのじゃくの呪い！このターンが終わるまで攻撃力が下がる効果は上がる効果に、上がる効果は下がる効果になる！」

「そういうことか……!？」

時空が歪むとエンシエント・ホーリーは縮ませていた胴体を伸ばして振り下ろされた腕をかわし、逆にロード・ウォリアーを見下ろす形となった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力1800↓2400

ロード・ウォリアー 攻撃力4000↓2000

「これで攻撃力は逆転した！行け、エンシエント・ホーリー！エターナ

ル・ライフ！」

エンシエント・ホーリーが胴体をロード・ウオリアーに巻きつかせ、再び光でロード・ウオリアーを包み込んでいった。

「やらせはしない！トラップ発動、シンクロ・バリアー！俺の場のシンクロモンスター、ロード・ウオリアーをリリースすることで俺は次のターンが終わるまで一切のダメージを受けない！」

「なっ…!?!」

ロード・ウオリアーが光に包み込まれて消滅する前に遊星が発動したトラップによってロード・ウオリアーはどこかへ消えてしまった。(躲された…けど受けるダメージはたったの400。温存しても良さそうなのに…エンシエント・ホーリーの攻撃力が上がるのを嫌ったのか?)

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！この瞬間、あまのじやくの呪いが切れてエンシエント・ホーリーの攻撃力は元に戻る！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力2400↓1800

コナミ LP3400

フィールド 『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』(攻撃表示)

セット1

手札5

sc2

「俺のターン！」

コナミsc2↓3 遊星sc5↓6

「この瞬間、永続トラップ発動！女神の加護！俺はライフを3000回復する！ただし、このカードが場を離れたら俺は3000のダメージを受ける！」

「…！」

コナミのトラップから女神の石像が現れる。石像からは祝福の光が発され、コナミのライフを回復していった。

コナミ LP3400↓6400

「ライフを回復したことでエンシエント・ホーリーの効果発動！攻撃力が上がるぜ！」

エンシエント・ホーリーの胴体が今までにないくらい伸びていき、天にも昇ってしまうほど巨大になってしまった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン 攻撃力1800↓4800  
「どうだ、遊星！せっかくトラップを使ってダメージを防いだのに無駄になっちまったな！」

「…それはどうかね」

「え？」

「俺はロードランナーを召喚する！」

頭に黄色のアホ毛が生えたピンク色の小鳥がフィールドに降り立ち、赤いブーツでフィールドを走り出した。

ロードランナー 攻撃力300

「ロードランナー…攻撃表示で出したってことはシンクロに使うつもりか」

「バトルだ！ロードランナーでエンシエント・ホーリーに攻撃！」

「な…なにい!？」

ロードランナーは歩幅が小さいながらも音速のスピードでエンシエント・ホーリーに向かっていった。しかし、あまりの体格差に胴体の一部に当たっただけで大きく後ろに弾かれてしまった。

「シンクロ・バリアーの効果が続いているため、このバトルで俺はダメージを受けない！」

「だがロードランナーは……」

「さらにロードランナーは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」

後ろに大きく弾かれたロードランナーだったが頭を何回か横にふると、何事も無かったかのように走り出し遊星のDホイールについていった。

「だけど今のバトルに何の意味が……？」

「ふっ、気づかないかコナミ？」

「って言われても…今のバトルじゃ結局何も変わらなかったぜ？」

「今のバトルでは…な。このモンスターはモンスターの召喚に成功したターン、手札から特殊召喚することが出来る！来てくれ、ワン



シヨット・ブースター！」

「…あー」

ロードランナーを追うようにロケットなどの推進の役割を果たすブースターを腕につけたロボットが現れた。

ワンシヨット・ブースター 攻撃力0

「ワンシヨット・ブースター…そういうことか！」

「俺はワンシヨット・ブースターの効果を発動する！ワンシヨット・ブースター自身をリリースすることでこのターン、バトルを行なった相手モンスター1体を破壊する！俺はエンシエント・ホーリーを破壊！」

ロードランナーがブースターの上に乗るとそのままブースターごと腕から発射される。ロードランナーは体の向きを変えることで軌道を修正し、当たる直前のタイミングでブースターを降りた。放たれたブースターはエンシエント・ホーリーに直撃し、その衝撃でエンシエント・ホーリーは崩れ落ちてしまった。

「エンシエント・ホーリー！しまった…効果で破壊されたら復活効果も使えねえ！」

力尽きたエンシエント・ホーリーはそのまま場から消えてしまう。

「くそー！確かそのカード、ラリーのдар！返しに行かなかったのか？」

「返しに行ったが…やはり持っていて欲しいと言われてしまった」

「おのれラリーめ…」

「ふっ…俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

遊星 LP3700

フィールド 『ロードランナー』（攻撃表示）

セット1

手札2

sc6

「だけどここのターンからシンクロ・バリアーの効果は切れる！俺のターン！」

コナミsc3↓4 遊星sc6↓7

「俺はエーリアン・ソルジャーを召喚するぜ！」

水色の球体を所々につけた異形の戦士が剣をかざし、ロードランナーに狙いを定めた。

エーリアン・ソルジャー 攻撃力1900

「ロードランナーは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されねえ…だけどダメージは受ける！バトルだ！エーリアン・ソルジャーでロードランナーに攻撃！」

エーリアン・ソルジャーは足についている水かきを生かし、目にも留まらぬスピードでロードランナーに近づいた。そして剣を横向きに振りかざし、なぎ払うように振り出した。

「それを待っていた！トラップ発動、パワー・フレーム！俺の場のモンスターがそのモンスターより攻撃力が高いモンスターに攻撃された時、その攻撃を無効にする！」

振り出された剣はロードランナーを切り裂く前に立方体のフレームに当たってしまい、軌道がそれてロードランナーは難を免れた。

「防がれたか…！」

「まだまだ！パワー・フレームは発動後、攻撃されたモンスターの装備カードとなり攻撃モンスターとの攻撃力の差の数値分だけ装備モンスターの攻撃力を上昇させる！」

「なっ…！エーリアン・ソルジャーとロードランナーの攻撃力の差は1600…！」

フレームは受けた衝撃分の値1600を一つの面に表示し、ロードランナーに背負わせる形で装備された。ロードランナーはフレームの不思議な力を受けた影響か、走るスピードをさらに増していった。

ロードランナー 攻撃力300↓1900

「やべえ…ロードランナーは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されねえ。そのロードランナーの攻撃力が1900になっただってことは…」

「そうだ！これによりロードランナーは戦闘で破壊することができなくなった！」

「やられたぜ…！俺はこれでターンエンドだ！」

コナミ LP6400

フィールド 『エーリアン・ソルジャー』（攻撃表示）

セツト0 『女神の加護』

手札5

sc4

「俺のターン…：来たか」

コナミsc4↓5 遊星sc7↓8

「俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚する！」

「ジャンク・シンクロン…！遊星が愛用してるモンスターだ…！」

オレンジを基調としたロボットが場に現れる。

ジャンク・シンクロン 攻撃力1300

「ジャンク・シンクロンが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！俺はクリア・エフェクターを特殊召喚！」

ジャンク・シンクロンが手をかざすとその方向に光の穴が出現し、長い黒髪を持った女性がフィールドに帰還した。

クリア・エフェクター 守備力900

「そして俺はレベル2のクリア・エフェクターにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが背中についているリコイルスターターを引っ張るとバックパックのエンジンが始動し、クリア・エフェクターと同調していった。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

起動音とともにジャンクパーツによって組み上げられたロボットが参上し、拳を前に突き出した。

ジャンク・ウォリアー 攻撃力2300

「クリア・エフェクターがシンクロ素材となったことでカードを1枚ドロウする！そしてジャンク・ウォリアーの効果発動！このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、俺の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力分だけ攻撃力を上昇させる！」

「…！ロードランナーはレベル1…！」

「パワー・オブ・フェローズ！」

ロードランナーから溢れ出たエネルギーがジャンク・ウォリアーに注がれていき、仲間の力を受け取ったジャンク・ウォリアーはパワーアップを果たしていた。

ジャンク・ウォリアー 攻撃力2300↓4200

「攻撃力…4200のジャンク・ウォリアーだど!?」

「バトルだ！ジャンク・ウォリアーでエーリアン・ソルジャーに攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーはジェットエンジンを起動するとエーリアン・ソルジャー以上のスピードで近づき、ナックルダスターをつけている拳で痛恨の一撃を食らわせた。

「ぐうっ…！」

コナミ LP6400↓4100

「まだ攻撃は残っている！ロードランナーでコナミにダイレクトアタック！」

フレームを背負ったロードランナーが猛スピードでコナミに突進し、くちばしでDホイールを突つくと見た目とは裏腹に大きな衝撃を与えた。

「うわああっ!?…つとー！」

コナミは連続で発生した衝撃にバランスを崩しかけるも、何とか耐えきった。

コナミ LP4100↓2200

「やべえ…！一気にライフを削られちゃった」

「俺はこれでターンエンドだ！」

遊星 LP3700

フィールド 『ロードランナー』（攻撃表示） 『ジャンク・ウォリアー』（攻撃表示）

セット0 『パワー・フレーム』

手札3

sc8

「何とかしねえと…俺のターン！」

コナミ s c 5 ↓ 6 遊星 s c 8 ↓ 9

(つて言ってもな…この状況をそう簡単に逆転は出来ねえか)

「…俺はモンスターをセット！さらにカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「…！」

コナミ L P 2 2 0 0

フィールド 裏側守備表示1

セット1 『女神の加護』

手札4

s c 6

「…俺のターン！」

コナミ s c 6 ↓ 7 遊星 s c 9 ↓ 1 0

「俺はスピード・ワールド2の効果を発動する！取り除くs cは…10個だ！」

遊星 s c 1 0 ↓ 0

「10個つてことは…フィールドのカードを1枚破壊する効果か！容赦ねえぜ…！」

「俺がこの効果で狙うのは…女神の加護だ！」

「…！」

コナミの場で佇んでいる石像の上に暗雲が立ち込めフラッシュと共に放電、すなわち雷が落ちていった。雷は石像を貫き、木っ端微塵に破壊されてしまった。

「そして女神の加護はフィールドから離れた時、発動したプレイヤーに3000のダメージを与える！コナミのライフは2200…これで終わりだ」

女神の石像を破壊してしまった崇りが邪悪な光として発され、コナミを包み込んでいった。

「やったか…？」

次第に光が暗れていき、やがてコナミの姿が見えるようになった。「ビビったぜ…。あの石像破壊するとああなるのか…」

コナミ LP22000↓2200

「ライフが…減っていない？」

「俺は女神の加護が破壊される前にハネワタの効果を手札から発動していたのさ。このカードは手札から捨てることでこのターン俺が受ける効果ダメージを0にすることが出来る！」

コナミの周りでは羽の生えた毛むくじやらのモンスターがコナミに光を寄せ付けないようにしていた。

「女神の加護が破壊された時の対策を用意していたのか…やるな。だが、俺のターンは終わっていない！俺はジャステイス・ブリンガーを召喚！」

正義の名の下に審判を下す神官がジャンク・ウオリアーの側に降り立った。

ジャステイス・ブリンガー 攻撃力1700

「バトルだ！ジャンク・ウオリアーでセットモンスターを攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウオリアーは拳を地面に振るうと地割れを発生させ、その衝撃でセットモンスターの正体を明らかにした。

クリアクリボー 守備力200

伏せられていたのは紫色の毛むくじやらのモンスター。そのまま地割れの衝撃に巻き込まれ、あっさり破壊されてしまう。

「これでコナミの場にモンスターはいない！ロードランナーでコナミにダイレクトアタック！」

ロードランナーが再び猛スピードで走り出す。

「墓地のクリアクリボーの効果発動！相手が直接攻撃してきた時、墓地のこのカードを除外することでカードを1枚ドロウ出来る！」

「…！」

「そして引いたカードがモンスターならそいつを特殊召喚し、攻撃対象をそのモンスターへ変更する！行くぜ…ドロウ！」

クリアクリボーがマトリョーシカのように割れると中から光が発せられた。

「よし…俺が引いたのは振り子刃の拷問機械だ！こいつを守備表示で

特殊召喚！」

光から下半身が可動式の刃となつて揺れているロボットが現れ、ロードランナーの進路に立ち塞がった。

振り子刃の拷問機械 守備力2000

「くっ…反射ダメージを受けるか」

「甘いぜ、遊星！俺はさらにトラップを発動させる！」

「何!？」

「トラップ発動、クロスカウンター！攻撃された守備モンスターの守備力が攻撃モンスターの攻撃力を超えていた場合、戦闘ダメージを倍にし、さらに攻撃モンスターを破壊する！」

猛スピードで突っ込んできたロードランナーに対して振り子刃の拷問機械は刃を動かし、背負っていたフレームごと弾き飛ばしてしまった。その衝撃に耐えきれず、ロードランナーはフィールドから消え去ってしまう。

「ぐっ…ロードランナー…！」

遊星 LP3700↓3500

「いくら戦闘で破壊出来なくなったロードランナーでもこれは耐えられなかったみたいだな！」

「やられた…そんな手で来るとはな。ジャステイス・プリンガーではあのモンスターを倒すことは出来ない。俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

遊星 LP3500

フィールド 『ジャンク・ウォリアー』（攻撃表示） 『ジャステイス・プリンガー』（攻撃表示）

セット1

手札2

sc0

「こっから反撃だ…俺のターン！」

コナミsc7↓8 遊星sc0↓1

「スピード・ワールド2の効果発動！scを7つ取り除くことでカードを1枚ドロウするぜ！」

コナミSC8↓1

「俺はジェネクス・コントローラーを召喚！」

「……ここでジェネクス・コントローラーか……！」

頭の左右にアンテナがついたロボットがフィールドに降り立った。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「行くぜ！俺はレベル6の振り子刃の拷問機械にレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーが特殊な電波を飛ばすと振り子刃が収められ、そのまま変形させていった。

「闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、レアル・ジェネクス・クロキシアン！」

拷問機械は蒸気機関車へと変形し、中枢コアに送り込まれたジェネクス・コントローラーによって制御された。

レアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「クロキシアンがシンクロ召喚に成功したことで効果発動！相手フィールドで一番レベルが高いモンスターのコントロールを得るぜ！」

「俺の場で最もレベルが高いのはレベル5のジャンク・ウォリアー……！」

クロキシアンの吹き出した蒸気が手の形となり、そのままジャンク・ウォリアーを握るようにして包み込んだ。そしてそのままコナミのフィールドへと引っ張られて行く。

「断ち切らせはしない！俺はジャステイス・ブリンガーの効果を発動する！1ターンに1度、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター効果を無効にすることが出来る！ジャステイススラッシュ！」

「何だっ!?」

ジャステイス・ブリンガーは手に持っていた剣で蒸気を何度も切り裂き、手の形をしていた蒸気を分解させてしまった。

「これによりジャンク・ウォリアーのコントロールは移らない！」

「これで押し切れると思ったけど防がれたか……！なら、バトルだ！クロキシアンでジャステイス・ブリンガーに攻撃！」



ジャステイス・ブリンガーに向かう線路が現れ、クロキシアンはスピードを上げて突進していった。

「トラップ発動、スキル・サクセサー！ジャステイス・ブリンガーの攻撃力を400上昇させる！」

ジャステイス・ブリンガーの剣が僅かながら大きくなった。

ジャステイス・ブリンガー 攻撃力1700↓2100

「それでも攻撃力はクロキシアンの方が上だ！」

必死に剣を振り下ろして抵抗するジャステイス・ブリンガーだったが、相手が蒸気機関車では分が悪くそのまま跳ねられてしまった。

「くっ…」

遊星 LP3500↓3100

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP2200

フィールド 『リアル・ジエネクス・クロキシアン』（攻撃表示）

セット2

手札2

sc1

「俺のターン、ドロー！」

コナミ sc1↓2 遊星 sc1↓2

「バトルだ！ジャンク・ウオリアーでクロキシアンに攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウオリアーがジェットエンジンを起動し、回転するよう  
に移動しながらクロキシアンに向かって拳を振り下ろした。

「ここだ！トラップ発動、リバーサル・ワールド反転世界！このカードでフィールドの効  
果モンスター全ての攻守をひっくり返す！」

「何だと!？」

時空が歪んでいき、やがて歪みは空間に到達した。フィールドにいたジャンク・ウオリアーとクロキシアンは空間の歪みに巻き込まれてしまう。

ジャンク・ウオリアー 攻撃力4200↓1300

リアル・ジエネクス・クロキシアン 攻撃力2500↓2000

「反撃だ！クロキシアン！」

クロキシアンは振り下ろされた拳を進行方向を変えて回避し、体勢を崩したジャンク・ウォリアーに突進していった。

「この拳…届かせる！墓地のスキル・サクセサーの効果発動！このカードを墓地から除外することで自分のターンに限り、エンドフェイズまで俺の場のモンスターの攻撃力を800上昇させる。俺はジャンク・ウォリアーの攻撃力を上げる！」

ジャンク・ウォリアー 攻撃力1300↓2100

「しまった！」

ジャンク・ウォリアーはすぐさま起き上がり、突進してきたクロキシアンにカウンターする形でアツパーを打ち込んだ。

「うっ…！」

コナミ LP2200↓2100

「俺は場にモンスターをセットし、カードを1枚伏せる。これでターンエンドだ！この瞬間、スキル・サクセサーの効果は終了する！」

ジャンク・ウォリアー 攻撃力2100↓1300

遊星 LP3100

フィールド 『ジャンク・ウォリアー』（攻撃表示） 裏側守備表示1

セット1

手札1

sc2

「俺のターン、ドロー！」

コナミ sc2↓3 遊星 sc2↓3

「トラップ発動、シンクロ・スピリッツ！俺の墓地のシンクロモンスターを除外し、そのモンスターのシンクロ素材になったモンスターをフィールドに呼び戻す！俺はクロキシアンを除外！戻ってこい、振り子刃の拷問機械！ジエネクス・コントローラー！」

「…！」

蒸気機関車が2体のロボットを蒸気に乗せてフィールドへと押し戻した。

振り子刃の拷問機械 攻撃力1750

ジエネクス・コントローラー 攻撃力1400

「バトルだ！振り子刃の拷問機械でジャンク・ウオリアーに攻撃！断  
砕処刑！」

ジエツトエンジンで回避を試みるジャンク・ウオリアーだったが振  
り子刃の拷問機械からアームが伸びていき、動きを封じられた状態で  
刃をまともに受けてしまった。

「ぐっ…！ジャンク・ウオリアー…！」

遊星 LP3100↓2650

「ここは攻めるぜ！ジエネクス・コントローラーでセットモンスター  
に攻撃！」

ジエネクス・コントローラーが振り子刃の拷問機械のアームで投げ  
飛ばされ、遊星が伏せていたモンスターに突撃していった。

「俺が伏せていたのはチューニング・サポーター。守備力は…300  
だ」

チューニング・サポーター 守備力300

「よし！倒せるぜ！」

フライパンを帽子がわりにしている奇妙な小型ロボットにジエネ  
クス・コントローラーが見事に突撃し、チューニング・サポーターは  
地に伏してしまった。

「くっ…」

「そして…俺はレベル6の振り子刃の拷問機械にレベル3のジエネク  
ス・コントローラーをチューニング！」

「…！再びシンクロか…」

「白銀の翼はためかせ敵を魅了しろ！シンクロ召喚！降臨せよ、蒼眼  
の銀龍！」

蒼く澄んだ瞳を持つ神々しいドラゴンが上空からゆっくりと  
フィールドに舞い降りた。

蒼眼の銀龍 守備力3000

「銀龍が特殊召喚に成功したことで効果発動！銀龍は次のターンの終  
わりまで効果の対象にならず、効果では破壊されねえ！」

銀龍が咆哮を上げると不可視のヴェールによって包まれていき、不

可侵領域を作り上げていた。

「く……これでは倒せる手段がかなり限られてしまう……!」

「頼んだぜ、銀龍!俺はこれでターンエンドだ!」

コナミ LP2100

フィールド 『蒼眼の銀龍』(守備表示)

セツト0

手札3

s c 3

「俺のターン!」

コナミ s c 3 ↓ 4 遊星 s c 3 ↓ 4

「俺はチューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚する!」

翼も胴体も白く染め上げられたドラゴンが現れ、突風を巻き起こした。

デブリ・ドラゴン 攻撃力1000

「デブリ・ドラゴンが召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを呼び戻すことが出来る!俺はクリア・エフェクターを特殊召喚!」

突風によって地面に穴が開けられ、風によってクリア・エフェクターがフィールドに押し戻されてきた。

クリア・エフェクター 攻撃力0

「さらに永続トラップ発動、エンジェル・リフト!墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する!チューニング・サポーターを特殊召喚!」

チューニング・サポーターもクリア・エフェクターについてくるように風によって押し戻され、フィールドに帰還した。

チューニング・サポーター 攻撃力100

「そしてチューニング・サポーターはシンクロ素材とする場合、レベルを2として扱うことが出来る!」

「つまり合計レベルは……8?ってことは!」

「俺はレベル2となったチューニング・サポーターとレベル2のクリア・エフェクターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング!集

いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！  
飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

デブリ・ドラゴンを中心として3体のモンスターが同調していくと  
デブリ・ドラゴンの姿が進化していき、星屑のドラゴンが上空へと飛  
翔した。

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

「来たな…遊星のエースモンスター！」

スターダストの登場に銀龍はさらに咆哮を上げ、敵対心を出してい  
く。

「チューニング・サポーターがシンクロ素材になった時、俺はカードを  
1枚ドロウする！俺はクリア・エフェクターの効果と合わせて2枚の  
カードをドロウする！…場にカードを1枚伏せてターンエンドだ！」  
「さすがのスターダストでも銀龍はそう簡単に超えられなかったみた  
いだな…」

遊星 LP2650

フィールド 『スターダスト・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札2

sc4

「行くぜ、俺のターン！」

コナミsc4↓5 遊星sc4↓5

「このスタンバイフェイズに銀龍のもう1つの効果が発動する！俺は  
スタンバイフェイズ毎に墓地から通常モンスターを特殊召喚するこ  
とが出来る！この効果でジェネクス・コントローラーを復活させるぜ  
！」

銀龍の羽ばたきによってジェネクス・コントローラーがフィールド  
へ押し戻されてきた。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「そして俺はE・HEROエレメンタルヒーロー スパークマンを召喚！」

雷を自在に操る戦士がフィールドに見参した。

「E・HERO…か」

「俺はレベル4のE・HERO スパークマンにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！3つのエレメントを司るものよ、まばゆき希望を胸に明日への扉を開け！シンクロ召喚！輝け、<sup>アリー</sup>A・ジェネクス・トライフォース！」

ジェネクス・コントローラーがアンテナから電波を飛ばすと戦士の体の変貌していき、人型のロボットへと成り代わる。中枢コアにはジェネクス・コントローラーが転送され、突き出した右手にある3つのランプの内、白色の光が発光した。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

(コナミのシンクロモンスターの攻撃力はどちらも2500。どちらかをスターダストと相打ちさせればダイレクトアタックを狙うことが出来るが：俺にはコナミがここで相打ちを狙っているとは思えない。ここからどう仕掛けてくる…?)

「光属性のモンスターをシンクロ素材にしたトライフォースの効果発動！1ターンに1度、墓地の光属性モンスター1体を裏側守備表示で場に呼び戻すことが出来る！」

「スパークマンを…いや、まさか…！」

「戻ってこい、エンシエント・ホーリー！」

思わず目をつぶってしまふほどの閃光と共に、白く長い胴体を持つドラゴンがフィールドに帰還した。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン (裏側守備表示) 守備力2000

「これで俺が特に信頼してる3体のシンクロモンスターが場に揃った！行くぜ…！俺はフィールドの3体のシンクロモンスターをリリース！」

「何だと!？」

「こいつに3体のシンクロモンスターの力を集めるぜ…！古より封印されし悪魔よ、3体を合わせた力をその身で具現せよ！来てくれ…真魔獣ガーゼット！」

蒼眼の銀龍の白銀の翼、エンシエント・ホーリー・ワイバーンの長く白い胴体、A・ジェネクス・トライフォースの鍛え上げられた腕を

引き継いだ新たな生命が誕生した。

真魔獣ガーゼット 攻撃力0

「これは……！」

「真魔獣ガーゼットの攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計になる！よって攻撃力は……！」

ガーゼットが3体のシンクロモンスターからエネルギーを受け取り、そのエネルギーによって余すところなく強化されていった。

真魔獣ガーゼット 攻撃力0↓7100

「攻撃力7100……!? そうか、これはコナミが見つけたシンクロモンスターのを合わせた戦い方なのか……！トランプ発動、スリップ・サモン！相手がモンスターの特異召喚に成功した時、俺は手札からレベル4以下のモンスターを1体守備表示で特異召喚することが出来る！来てくれ、ゼロ・ガードナー！」

ゼロの形をした磁石を運んでいるプロペラをつけたロボットがスターダストの隣に降り立った。

ゼロ・ガードナー 守備力0

「スターダストにゼロ・ガードナー……一緒に戦ったデュエルを思い出さず。バトルだ！真魔獣ガーゼットでスターダストに攻撃！ユニティフォース！」

真魔獣ガーゼットは翼を羽ばたかせ空を飛び白く長い胴体を揺らしながら、鍛え上げられた腕を存分に使い強力な一撃をスターダストに叩き込んだ。

「ゼロ・ガードナーの効果発動！ゼロ・ガードナーをリリースすることでこのターン発生する俺への戦闘ダメージを0にし、スターダストもバトルで破壊されない！」

叩き込まれた拳はゼロ・ガードナーの持っている磁石に誘導され、代わりにゼロ・ガードナーが受けていた。

「真魔獣ガーゼットの攻撃を躲したか……！ただど次のターンで決めるぜ！俺はこれでターンエンド！」

コナミ LP2100

フィールド 『真魔獣ガーゼット』（攻撃表示）

セット0

手札2

sc5

「俺の…ターン！」

コナミsc5↓6 遊星sc5↓6

「俺はチューナーモンスター、異次元の精霊を召喚する！」

まだ赤ん坊の年齢である幼い精霊がフィールドに浮遊しだした。

異次元の精霊 攻撃力0

「俺の場にチューナーモンスターが存在する時、手札のブースト・ウオリアーは特殊召喚することが出来る！」

ブーストエンジンを背負った戦士がフィールドを飛び回った。

ブースト・ウオリアー 守備力200

「これは…！」

「レベル1のブースト・ウオリアーにレベル1の異次元の精霊をチューニング！集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力！シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！」

音速の速さでレーシングカーのような姿をしたロボットが現れ、タイヤを回転させて火花を散らした。

フォーミュラ・シンクロン 攻撃力200

「フォーミュラ・シンクロンがシンクロ召喚に成功したことでカードを1枚ドロウする！」

「シンクロチューナー…来るのか、あのモンスターが！」

「…クリア・マインド！」

遊星は心を落ち着かせ、自身の得た新たな境地に至った。

「レベル8のスターダスト・ドラゴンにレベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！」

遊星のDホイールが加速して行くとスターダスト・ドラゴンとフォーミュラ・シンクロンが同調した瞬間に、遊星もどこかへと消えてしまった。



「消えた!？」

「…アクセルシンクロオオオー! 生来せよ、シユートイニング・スター・ドラゴン!」

消えたと思われた遊星が後ろから現れ、スターダストが進化した姿、シユートイニング・スター・ドラゴンを引き連れていた。

シユートイニング・スター・ドラゴン 攻撃力3300

「これがアクセルシンクロか…! だけど攻撃力は真魔獣ガーゼットの方が上だ!」

コナミが見出したシンクロモンスター<sup>1</sup>の力を合わせて戦う可能性と遊星が見出したシンクロモンスター<sup>2</sup>の力を合わせて戦う可能性、それぞれの魂が向かい合っていた。

(このカードに賭ける!)

「…俺は場にカードを1枚伏せてターンを終了する!」

遊星 LP2650

フィールド 『シユートイニング・スター・ドラゴン』(攻撃表示)

セット1

手札0

sc6

「俺のターン!」

コナミ sc6↓7 遊星 sc6↓7

(遊星のシユートイニング・スター・ドラゴンは確か自身をエンドフェイズまで除外することで攻撃を無効にすることが出来る。…だけどそれは1度だけだ!)

「俺は華麗なる密偵<sup>スパイ</sup>—Cを召喚するぜ!」

ドレスを身につけた魅惑的なレディが現れると何枚かのカードが前で回りだし、スパイ—Cはベルトから取り出したナイフを投擲して1枚のカードを貫いた。

華麗なる密偵—C 攻撃力1200

「スパイ—Cは召喚に成功した時、相手のエクストラデッキのカードをランダムに1枚選択し、その攻撃力で効果を変える! <sup>シンクレットリサーチ</sup>秘密調査!」

「…選ばれたのはターボ・ウォリアー。攻撃力は2500だ」

「選ばれたモンスターの攻撃力が2000以上だった時、スパイ—Cの攻撃力は1000上昇するぜ！」

華麗なる密偵—C 攻撃力1200↓2200

「よし…バトルだ！真魔獣ガーゼットでシューティング・スター・ドラゴンへ攻撃！ユニティフォース！」

「そうはさせない！シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！このモンスターを除外することで攻撃を無効にする！」

真魔獣ガーゼットが振り下ろそうとした拳をシューティング・スター・ドラゴンは翼で受け止め、その後異次元へと消えていった。

「これでフィールドはがら空きだ！さらにスパイ—Cで…」

「…この時を待っていた！トラップ発動、ゼロ・フォース！」

遊星が発動したトラップからゼロの形をしたリングが無数に飛びだし、コナミの場にいた2体のモンスターを押しさえつけた。

「ゼロ・フォースは俺の場のモンスターが除外された時に発動できる。その効果で…フィールドの全てのモンスターの攻撃力を0にする！」

「な…何だと!？」

リングによって2体のモンスターから力が失われていき、どちらも地に膝をつけてしまった。

真魔獣ガーゼット 攻撃力7100↓0

華麗なる密偵—C 攻撃力2200↓0

「スパイ—Cと真魔獣ガーゼットの攻撃力が…く…スピード・ワールド2の効果発動！scを7つ取り除くことでカードを1枚ドロ—する！…俺は2枚のカードを伏せてターンエンドだ！」

コナミ sc7↓0

「この瞬間、除外されたシューティング・スター・ドラゴンはフィールドに戻る！」

シューティング・スター・ドラゴンはゼロ・フォースの影響を受けていない状態でフィールドに帰還した。

シューティング・スター・ドラゴン 攻撃力3300

コナミ LP2100

フィールド 『真魔獣ガーゼット』（攻撃表示） 『華麗なる密偵—  
C』（攻撃表示）

セット2

手札1

sc0

「俺のターン！」

コナミ sc0↓1 遊星 sc7↓8

「この瞬間、トラップ発動！捨て身の宝札！俺の場の攻撃表示モンスター2体の攻撃力の合計が相手フィールドの最も攻撃力が低いモンスターより低い場合、俺はカードを2枚ドロウする！ただしこのカードを使用したターン、俺は召喚を封じられる！」

「コナミはこの状況でも諦めていない…何か防ぐ手があるのか。ならば！シユータイング・スター・ドラゴンの効果発動！デッキの上から5枚のカードをめくり、その中にいるチューナーモンスターの数だけ攻撃することが出来る！」

「…！」

「1枚目。チューナーモンスター、アンノウン・シンクロン！2枚目。非チューナーモンスター、サルベージ・ウオリアー。3枚目。チューナーモンスター、ターボ・シンクロン！4枚目。トラップカード、くず鉄のかかし。5枚目。チューナーモンスター、チェンジ・シンクロン！」

「3枚のチューナーか…！」

「よってシユータイング・スター・ドラゴンはこのターン、3回攻撃することが出来る！バトルだ！」

シユータイング・スター・ドラゴンは虹色に発光して分身を作り、3体のシユータイング・スター・ドラゴンが攻撃体勢に入った。

「そうはさせねえ！永続トラップ発動、ガリトラップーピクシーの輪——俺の場に攻撃表示のモンスターが2体以上存在する時、相手は攻撃力が一番低いモンスターには攻撃できねえ！」

コナミの場にピクシーという妖精が光の輪を作り出し、コナミの場の全てのモンスターをその輪で囲んだ。

「何だど!?コナミの場のモンスターはゼロ・フォースによってどちらも攻撃力は0……!」

「これでシューティング・スター・ドラゴンといえども攻撃は出来ねえぜ!」

シューティング・スター・ドラゴンは光の輪によって近づくことができず、分身を消してしまった。

「くっ……!ターンエンドだ!」

遊星 LP2650

フィールド 『シューティング・スター・ドラゴン』(攻撃表示)

セット0

手札1

sc8

「何とか紙一重で防げたな……俺のターン、ドロ!」

コナミ sc1↓2 遊星 sc8↓9

「ガリトラップの効果は俺の場に2体以上の攻撃表示のモンスターがいねえと適用されねえ……。俺はカードを2枚伏せて、スパイCと真魔獣ガーゼットを攻撃表示にしたままターンエンドだ!」

コナミ LP2100

フィールド 『真魔獣ガーゼット』(攻撃表示) 『華麗なる密偵—

C』(攻撃表示)

セット2 『ガリトラップ—ピクシーの輪—』

手札2

sc2

「……俺のターン!」

コナミ sc2↓3 遊星 sc9↓10

「選択を誤ったな、コナミ!俺はスピード・ワールド2の効果を発動!10個のscを取り除きフィールドのカードを1枚破壊する!俺が狙うのはガリトラップ—ピクシーの輪—だ!」

遊星 sc10↓0

「……しまった……!」

ピクシーが作り上げた輪は落雷によって分断されてしまい、機能し

なくなってしまうた。

「そして俺はシューティング・スター・ドラゴンの効果を発動する！」  
「ここで遊星がチューナーを引かなければシューティング・スター・ドラゴンはこのターン攻撃することは出来ねえ……」

「行くぞー！1枚目。チューナーモンスター、ハイパー・シンクロン！2枚目。非チューナーモンスター、マックス・ウォリアー。3枚目。トラップカード、スターライト・ロード。4枚目。チューナーモンスター、ブライ・シンクロン！5枚目。チューナーモンスター、エフェクト・ヴェーラー！」

「げっ！また3枚も引きやがった……！」

シューティング・スター・ドラゴンは再び分裂し、3体のドラゴンが攻撃体勢に入った。

「バトルだ！シューティング・スター・ドラゴンで真魔獣ガーゼットに攻撃！スターダスト・ミラージュ！」

分身のシューティング・スター・ドラゴンが手足を折りたたんで直線的な形態へ変形し、弾丸の如き鋭さで身動きの取れない真魔獣ガーゼットに突撃した。

「これを食らったら負ける……！そうはさせねえ！永続トラップ発動、死力のタッグ・チェンジ！」

「……」

シューティング・スター・ドラゴンの突撃を食らう直前、何者かが真魔獣ガーゼットを突き飛ばすことで突撃を回避していた。

「死力のタッグ・チェンジは俺の攻撃表示モンスターが戦闘で破壊される時、そのダメージを0にして手札の戦士族モンスターを特殊召喚することが出来る！俺はこの効果で戦闘ダメージを0にし、カード・ブロッカーを守備表示で特殊召喚！」

真魔獣ガーゼットを突き飛ばしたのは盾を構えた小さな戦士だった。

カード・ブロッカー 守備力400

「躲したか……だが、まだ攻撃は残っている！シューティング・スター・ドラゴンで華麗なるスパイCを攻撃！」

もう一つの分身が手足を折りたたみ、真魔獣ガーゼットと同じく身動きが出来ないスパイ—Cに突撃していった。

「まだまだ！カード・ブロッカーの効果発動！俺のモンスターが攻撃された時、攻撃対象をこのモンスターに変更出来る！」

小さな戦士は動けなくなったスパイ—Cをかばうように盾を構え、シューティング・スター・ドラゴンの攻撃に備えた。

「それでもシューティング・スター・ドラゴンはもう1度攻撃することが出来る！3回目の攻撃で決着をつける！」

「く…！カード・ブロッカーの効果発動！攻撃対象になった時、デッキの上から3枚のカードを送ることでこのターンが終わるまで守備力を1500アップできる！」

3枚のカードの力がカード・ブロッカーの盾に託されていき、エネルギーを受け取った盾は見る見るうちに大きくなっていった。

カード・ブロッカー 守備力400↓1900

しかしシューティング・スター・ドラゴンの突撃の威力は凄まじく、少し大きくなった盾では防ぐことは叶わず突撃によって盾にヒビが入り、そのまま盾を構えているカード・ブロッカーごと飛ばされそうになる。

「…よし！俺は今墓地に送られたシールド・ウォリアーの効果を発動するぜ！」

「何?！」

ヒビの入った盾にシールド・ウォリアーの魂が注がれたことで盾に入っていたヒビは修復され、より強固な硬さを手に入れていた。

「シールド・ウォリアーを墓地から除外することで一度だけ俺のモンスター戦闘破壊を防ぐことが出来る！」

急激に硬くなった盾に突撃していたシューティング・スター・ドラゴンの分身は弾かれ、そのまま消えてしまった。

「防がれたか…。ならばせめてカード・ブロッカーだけでも…いや、それも不可能なのか…！」

「気づいたか、遊星！そうだぜ…もう1度攻撃すればカード・ブロッカーに攻撃が誘導され、その守備力はさらに1500アップする！つ

まり守備力は3400となり、シューティング・スター・ドラゴンの攻撃力を超える！」

「く……バトルを終了する！」

本体のシューティング・スター・ドラゴンが攻撃することは叶わず、虹色に発光させていた体も元に戻ってしまった。

「カードを1枚伏せ……ターンエンドだ」

「この瞬間、カード・ブロッカーの守備力は元に戻るぜ」

カード・ブロッカー 守備力1900↓400

遊星 LP2650

フィールド 『シューティング・スター・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札1

sc0

「……俺のターン！」

コナミsc3↓4 遊星sc0↓1

「カード・ブロッカーによって墓地に送られたキラーク・スネークの効果発動！このカードはスタンバイフェイズに墓地から手札に戻すことが出来る！そしてsp-エンジェル・バトンを発動！scが2以上の時に発動出来るぜ。俺はデッキから2枚のカードをドロし、1枚のカードを墓地へ送る！俺は今加えたキラーク・スネークを墓地に！」

コナミは天使からもたらされたカードを手札に加え、代わりに1枚のカードを礼として差し出した。

「よし……俺はsp-icとカード・ブロッカーをリリースするぜ！アドバンス召喚！来てくれ……リボルバー・ドラゴン！」

頭と手に当たる部分に合計3つの銃砲身が置かれたロボットがフィールドに着地し、鈍く重い音を響かせた。

リボルバー・ドラゴン 攻撃力2600

「そのモンスターは……アキとの戦いで融合召喚に使用したモンスターか。だが、シューティング・スター・ドラゴンの方が攻撃力は上だ」  
「ならシューティング・スター・ドラゴンを対象にリボルバー・ドラゴンの効果を発動するぜ！1ターンに1度、コイントスを3回払い2回

以上が表だった時、選択したモンスターを破壊出来る！ロシアン・ルーレット！」

リボルバー・ドラゴンの銃砲身がシューティング・スター・ドラゴンに向けられ、撃ち落とす準備を完了させた。

「…ならばシューティング・スター・ドラゴンのもう一つの効果を発動！1ターンの1度、フィールド上のカードが破壊される効果が発動された時、その効果を無効にして破壊することが出来る！」

シューティング・スター・ドラゴンが自身を狙うロボットに突撃しようとして勢を整えようとする。しかし、構えられた銃を目にすると途端に動きを止めてしまった。

「なっ…どうしたシューティング・スター・ドラゴン!？」

「…残念だったな、遊星！俺は確かにシューティング・スター・ドラゴンを対象にリボルバー・ドラゴンの効果を発動した。けどリボルバー・ドラゴンはコイントスに成功しないと対象にしたモンスターを破壊出来ねえ。つまり発動した時点では破壊出来るかどうかは確定してねえのさ！だからフィールドのカードを破壊する効果を無効にするシューティング・スター・ドラゴンの効果は破壊するか分からねえリボルバー・ドラゴンに使うことは出来ねえ！」

「そういうことか…！」

「さあ…フィールドにコインが舞うぜ！」

3枚のコインがフィールドに出現し、天高くに飛ばされた。そしてコインが1枚ずつフィールドに落ち、その結果を示した。

「よし…表だ！」

2枚目のコインもフィールドに跳ね、一つの面を上に向けた。

「…裏か。次のコインが勝負だな、コナミ」

「ああ！頼んだぜ…！」

そして3枚目のコインがゆっくりと天から落ち、カランカランという音と共に結果を示した。

「…ふっ」

「う、裏あ!？」

リボルバー・ドラゴンがシューティング・スター・ドラゴンに向け



て銃弾を放つ。しかし、それは不発弾だった。

「表になったのは1枚だったため、シューティング・スター・ドラゴンは破壊されない。残念だったな」

「ちくしょう…今のは当たって欲しかったぜ。でも落ち込んでる場合じゃねえ！次の作戦だ！手札からs p ー起爆化を発動！こいつは俺のs cが2以上の時、俺の場の魔法・罠カードを1枚破壊することで発動出来る！俺は死力のタッグ・チェンジを破壊し、その効果でシューティング・スター・ドラゴンを守備表示に変更する！」

（どうする…シューティング・スター・ドラゴンの効果で破壊効果を含む起爆化を…いや、ステータスで上回られたとしても攻撃を無効にする効果がある以上問題はない。効果を使わせに来ている可能性を考えれば使わない方がいい）

死力のタッグ・チェンジが破壊されると爆風が発生し、シューティング・スター・ドラゴンは爆風によって体勢を崩してしまった。

シューティング・スター・ドラゴン 守備力2500

（やっぱりシューティング・スター・ドラゴンの効果は温存してきたな。昔から遊星のデュエルを見て俺には分かるぜ…お前は効果を使わなくても大丈夫なら無理して使おうとはしないってな！）

「バトルだ！リボルバー・ドラゴンでシューティング・スター・ドラゴンに攻撃！銃ガン・キャノン・ショット砲撃！」

リボルバー・ドラゴンが再びシューティング・スター・ドラゴンに銃砲身を向けると、今度はしっかりと銃弾が放たれた。

「そうはいかない！シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！自身を除外することで攻撃を無効にする！」

体勢を崩して地に降りていたシューティング・スター・ドラゴンは翼を飛ばたかせ、上空に空いた異次元への穴へと避難しようとした。

「それは読んでいたぜ！トラップ発動、ゴーゴンの眼！」

コナミの発動したトラップからメデューサの目が出現し、それと目を合わせてしまったシューティング・スター・ドラゴンの翼が石化してしまった。

「何!?!」

「ゴーゴンの眼はこのターンが終わるまでフィールドの守備表示モンスターの効果が無効にする！起爆化によってシューティング・スター・ドラゴンは守備表示！これで逃げられないぜ！」

「しまった！守備表示にしたのはステータスで上回るためだけではなく、ゴーゴンの眼とのコンボを兼ねていたのか…！」

翼が石化して動けなくなってしまうたシューティング・スター・ドラゴンは攻撃を躲す事ができず、銃弾によって撃ち抜かれてしまった。

「シューティング・スター・ドラゴン！くっ…！」

「やったぜ…！ついにシューティング・スター・ドラゴンを倒した！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「く…トラップ発動！スターダストフラッシュ星屑の残光！このカードは墓地のスターダスト・ドラゴンを復活させることができる！」

墓地から眩い光と共にスターダスト・ドラゴンが帰還した。

スターダスト・ドラゴン 攻撃力2500

「スターダストが復活したか…！けどスターダストじゃリボルバー・ドラゴンを倒すことは出来ねえぜ！今度こそターンエンドだ！」

コナミ LP2100

フィールド 『リボルバー・ドラゴン』（攻撃表示）

セット1

手札0

sc4

（コナミの言う通り、スターダスト・ドラゴンではリボルバー・ドラゴンを倒すことは出来ない。次のドロローが勝負…!!）

遊星がドロローしようとした瞬間、遊星の右腕に刻まれた赤き龍の痣が輝きだした。

「これは…!?!」

5D'sのピットにいたジャック、クロウ、アキ、龍可、龍亞の痣も同時に輝きだしたかと思うと、彼らの痣が遊星の元へ集まっていた。

「…そうか。お前も俺と共に戦ってくれるのか…赤き龍！」

遊星の背中に6人の赤き龍の痣が刻まれていくと、遊星のデッキの一番上のカードが光り輝いた。

「俺の…ターン！」

コナミ s c 4 ↓ 5 遊星 s c 1 ↓ 2

「手札から s p ー ヴィジョン・ウィンドを発動！ s c が2以上ある時、墓地のレベル2以下のモンスターを1体特殊召喚する！俺はチューニング・サポーターを呼び戻す！」

頭にフライパンを被った小型の機械がフィールドに帰還した。

チューニング・サポーター 攻撃力100

「そして手札からこのモンスターを召喚する！現れよ…救世竜 セイヴァー・ドラゴン！」

遊星の場に温かみを感じさせる光を放つ小さな竜が出現した。

救世竜 セイヴァー・ドラゴン 攻撃力0

「これは遊星と一緒に鬼柳と戦った時の…！ってことは…！」

「俺はレベル1のチューニング・サポーターとレベル8のスターダスト・ドラゴンにレベル1の救世竜 セイヴァー・ドラゴンをチューニング！集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！シンクロ召喚！光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

救世竜 セイヴァー・ドラゴンによってスターダスト・ドラゴンとチューニング・サポーターが光の輪に包まれていくと、透き通った胴体を持つ神々しいドラゴンが姿を現した。

セイヴァー・スター・ドラゴン 攻撃力3800

「チューニング・サポーターがシンクロ素材となったことでカードを1枚ドロウする！」

「くっ…！シユールディング・スター・ドラゴンの次はこいつか…！」

「行くぞ、コナミ！セイヴァー・スター・ドラゴンの効果発動！相手モンスター1体の効果を無効にし、その効果を得る！サブリメーション・ドレイン！」

セイヴァー・スター・ドラゴンが羽を広げるとリボルバー・ドラゴンから光が出現し、吸収されていた。

「そして俺は吸収したりボルバー・ドラゴンの効果を発動する！」

「…!」

フィールドに3枚のコインが舞った。

「このコインの内、2枚以上が表ならばリボルバー・ドラゴンは破壊される!」

今度は3枚のコインは同時に落ち、その結果を示した。

「裏、表…表か!」

「よってリボルバー・ドラゴンは破壊される!」

セイヴァー・スター・ドラゴンが放ったエネルギー弾はリボルバー・ドラゴンに直撃し、リボルバー・ドラゴンは破壊されてしまった。

「これでコナミの場のモンスターはいなくなつた…。このダイレクトアタックで決める!」

「…それはどうかな?」

「何?!」

「このトラップで決めてやる!トラップ発動!ヘイト・クレバス!」

遊星のフィールドに氷河が出現すると現れた裂け目に向かって強烈な風が吹き、セイヴァー・スター・ドラゴンが吸い込まれていく。

「ヘイト・クレバスは俺の場のモンスター1体が破壊されて墓地へ送られた時に発動出来る!相手フィールドのモンスター1体を墓地に送り…その攻撃力分のダメージを遊星に与える!」

「…!セイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃力は3800…!」

「これで終わりだ!」

吸い込まれてしまったセイヴァー・スター・ドラゴンは遊星の頭上に出来た異次元の穴から現れ、そのまま落ちていった。

「く…やらせるわけにはいかない!セイヴァー・スター・ドラゴンのもう一つの効果発動!相手がカードの効果が発動した時、このカード自身をリリースすることでその発動を無効にし、相手フィールドのカードを全て破壊する!スターダスト・フォース!」

「な…これも躲すのか!」

セイヴァー・スター・ドラゴンは自らの意思で消えていくと、コナミの場のカードもそれに伴い全て消えていった。

「これで俺と遊星の場のカードは全て消えた…!ここからはドロウ勝

負か！」

「く…俺はこれでターンエンド！」

「…この瞬間、墓地のキラーク・スネークは自身の効果で除外されるぜ。しめた…完全にがら空きだ。ここを逃す手はねえ…！」

遊星 LP2650

フィールド 無し

セット0

手札1

sc2

「俺のターン、ドロ―！」

コナミsc5↓6 遊星sc2↓3

「いいカードだぜ…！spシフト・ダウン発動！scを6つ取り除くことでカードを2枚ドロ―する！」

コナミsc6↓0

「よし！俺はギガテック・ウルフを召喚するぜ！」

鉄屑で作られたオオカミがフィールドに降り立ち、遠吠えをあげた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「バトルだ！ギガテック・ウルフで遊星にダイレクトアタック！」

鉄屑で作られたオオカミが金属音を響かせながら向かっていき、体当たりを仕掛けた。

「ぐっ…！」

遊星 LP2650↓1450

「これでライフが逆転したぜ…俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

コナミ LP2100

フィールド 『ギガテック・ウルフ』

セット1

手札0

sc0

「俺のターン！」

コナミ s c 0 ↓ 1 遊星 s c 3 ↓ 4

「s p ーオーバー・ブーストを発動！ s c を 4 上昇させる！ただし、このターンの終わりに s c が 1 となるが…俺は続けてスピード・ワールド 2 の効果を発動する！ s c を 7 つ取り除き、カードを 1 枚ドロウする！」

遊星 s c 4 ↓ 8 ↓ 1

「俺はスピード・ウォリアーを召喚する！」

「ここであたか…！」

小さな戦士が現れ、フィールドをスケートをするかのように滑らかに走りだした。

スピード・ウォリアー 攻撃力 900

「バトルだ！スピード・ウォリアーでギガテック・ウルフに攻撃！ソニック・エッジ！」

「攻撃力はこっちの方が上。だけど確かスピード・ウォリアーは…」「そうだ！スピード・ウォリアーは召喚したターンのバトルフェイズに攻撃力を倍にする！」

スピード・ウォリアー 攻撃力 900 ↓ 1800

スピード・ウォリアーは目にも留まらぬスピードでギガテック・ウルフに急接近し、アッパーによってギガテック・ウルフを吹っ飛ばした。

「うっ…！これでライフはほとんど互角か…！」

コナミ L P 2100 ↓ 1500

「俺は場にカードを 1 枚伏せ、ターンを終了する！ここでスピード・ウォリアーの攻撃力は元に戻る！」

スピード・ウォリアー 攻撃力 1800 ↓ 900

遊星 L P 1450

フィールド 『スピード・ウォリアー』（攻撃表示）

セット 1

手札 0

s c 1

「俺のターン！」

コナミ s c 1 ↓ 2 遊星 s c 1 ↓ 2

「トラップ発動、補充要員！俺の墓地に5体以上のモンスターがいる時、墓地から攻撃力1500以下の通常モンスターを3体まで手札に加えることができる！俺は墓地からジェネクス・コントローラー、ギガテック・ウルフ。そしてカード・ブロッカーの効果で墓地に送られていた人造木人18いんばちを手札に加えるぜ！」

「一気に戦力を補充してきたか…！」

「そして今手札に加えたジェネクス・コントローラーを召喚！」

頭の左右にアンテナがついたロボットが今日何度目かになる登場を果たした。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「バトルだ！ジェネクス・コントローラーでスピード・ウオリアーに攻撃！」

ジェネクス・コントローラーが電波を飛ばすとスピード・ウオリアーは突然進行方向を変えられてしまい、そのままのスピードで地面と衝突してしまった。

「トラップ発動、スピリット・フォース！俺への戦闘ダメージを0にし、その後俺の墓地に存在する守備力1500以下の戦士族チューナーを手札に戻す！」

「何…まさか！」

「俺は守備力500のジャンク・シンクロンを手札に戻す！」

「ジャンク・シンクロン…！やべえ…俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ L P 1 5 0 0

フィールド 『ジェネクス・コントローラー』

セット1

手札2

s c 2

「俺のターン、ドロー！」

コナミ s c 2 ↓ 3 遊星 s c 2 ↓ 3

「s p エンジェル・バトンを発動！s c が2以上の時、デッキから

カードを2枚ドロ―し、その後1枚のカードを墓地へ送る！」

遊星は天使からもたらされたカードを手に脳内で戦略を構築し、1枚のカードを墓地に送った。

「そして墓地へ送ったトラップカード、リミッター・ブレイクの効果発動！」

「何だ?!」

「リミッター・ブレイクは墓地へ送られた時、手札・デッキ・墓地のいずれかからスピード・ウォリアーを特殊召喚する！墓地から蘇れ！」

リミッター・ブレイクによって墓地からフィールドへの道が出来上がり、道を滑るように走ってスピード・ウォリアーが帰還した。

スピード・ウォリアー 攻撃力900

「そしてジャンク・シンクロンを召喚する！さらに効果によってクリア・エフェクターを呼び戻す！」

ジャンク・シンクロンが手をかざすとクリア・エフェクターが光の穴を通ってフィールドに帰還する。幾度となく呼ばれたクリア・エフェクターの顔には疲労が伺え、倒れそうになるクリア・エフェクターをスピード・ウォリアーが支えた。

ジャンク・シンクロン 攻撃力1300

クリア・エフェクター 守備力900

「くっ……ここに来てもう1度シンクロか……！」

「俺はレベル2のスピード・ウォリアーとレベル2のクリア・エフェクターにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！シンクロ召喚！吠えろ、ジャンク・バーサーカー！」

ジャンク・シンクロンがバックパックのエンジンを起動するとスピード・ウォリアーがクリア・エフェクターと共に光の輪に包まれていき、鉄球のついた武器を手にした体が赤く染まった鬼を呼び出した。

ジャンク・バーサーカー 攻撃力2700

「クリア・エフェクターがシンクロ素材となったことでカードを1枚ドロ―する！そして俺はジャンク・バーサーカーの効果を発動！」



「…！」

「ジャンク・バーサーカーは墓地のジャンクと名のつくモンスターを除外することで相手モンスターへの攻撃力をその攻撃力分下げることが出来る！俺はジャンク・ウォリアーを除外し、ジェネクス・コントロールラーの攻撃力を下げる！」

ジャンク・ウォリアーの魂がジェネクス・コントロールラーにまとわりつき、その動きを封じた。

ジェネクス・コントロールラー 攻撃力1400↓0

「ジェネクス・コントロールラーの攻撃力が…!？」

「バトルだ！ジャンク・バーサーカーでジェネクス・コントロールラーに攻撃！」

動きを封じられたジェネクス・コントロールラーに向かってジャンク・バーサーカーは武器を振り下ろし、鉄球を直撃させた。

「負けてたまるか…!トラップ発動、ガード・ブロック！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

ダメージによって発生した衝撃は不可視の障壁によって防がれた。

「これも防いだか…！」

(このデュエル…互いに全てを出し尽くしている。決着がつかないのは俺とコナミの力の持つ可能性がほぼ互角だということか。だが…そろそろ決着がつくだろう。俺達の持てる可能性を…最後までぶつけ合う！)

遊星 LP1450

フィールド 『ジャンク・バーサーカー』(攻撃表示)

セット1

手札1

sc3

「俺のターン、ドロウ…このカードは」

コナミsc3↓4 遊星sc3↓4

「遊星…俺はこのカードで勝負に出るぜ！」

「…！仕掛けてくるか…！」

「行くぜ！手札からspスピード・フュージョンを発動！scが4

以上の時、俺の手札・フィールドのモンスターで融合召喚することが出来る！」

「融合召喚……！」

「俺は手札のギガテック・ウルフと人造木人18で融合！鉄で作られしオオカミよ、人の手で作られし木人よ……その無垢なる力を一つにし、始祖のドラゴンを顕現させよ！融合召喚！これが俺の新たな可能性！来てくれ……始祖竜ワイアーム！」

オオカミと木人が渦によって一つになっていくと、渦より現れたのは蛇のような体に竜の頭、そしてコウモリの翼を持った四肢を持たないドラゴンだった。

始祖竜ワイアーム 攻撃力2700

「これが……コナミの最後の切り札か！」

「そうだ！俺はこのモンスターで遊星に勝つ！バトルだ！始祖竜ワイアームでジャンク・バーサーカーに攻撃！」

始祖竜ワイアームは息を大きく吸うと一気にブレスを吐き出した。対抗するべく、ジャンク・バーサーカーは手に持っていた武器を投擲し鉄球を直撃させた。

「互いに攻撃力は2700……相打ちか？」

「いいや、そうはいかねえぜ！始祖竜ワイアームの効果発動！このモンスターは通常モンスター以外とのバトルでは破壊されねえ！」

「何……!？」

始祖竜ワイアームは鉄球をもろともせず、ブレスによってジャンク・バーサーカーを焼き尽くしてしまった。

「くっ……」

「よし……ジャンク・バーサーカーを倒したぜ！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP1500

フィールド 『始祖竜ワイアーム』（攻撃表示）

セット1

手札0

sc4

「あのモンスターを超えなければコナミに勝つことは出来ない…デッキよ、俺の声に応じてくれ…ドロー！」

コナミSC4↓5 遊星SC4↓5

「…このカードは！」

「…？どうした…遊星？」

「コナミ…俺はこのデュエルで分かったことがある。デュエルの可能性は…そのまま人の持つ可能性に繋がるんだ」

「と言うと…？」

「俺達はイリアステルの野望を止めるためにシンクロキラーの機皇帝を始めとして様々なものを超えていった。そして俺達は超える度に一つ…また一つと強くなれた。だが…俺とコナミが見出した答えがそれぞれ違うように、可能性は人の数だけあるんだ」

「あ…」

「俺は信じる。人が自分の可能性を見失わない限り、決して絶望の未来が訪れることはない！」

「…そうだな。俺達には一人一人違う可能性を持つてるんだ。無限大の可能性を持つてるんだ…今ある力に満足なんか出来ねえ！もつと強くなりたい…そんな気持ちを忘れなければ絶対にそんな未来は訪れねえ！」

「ああ…その通りだ。そしてだからこそ…」

「俺は…」

「…お前に勝ちたい！」

互いに持てる力をぶつけ合った2人はさらに強くなりたいと望んでいる。まだ2人は…満足していなかった。

「行くぞ、コナミ！」

「来い、遊星！」

「リバーズカードオープン！トラップカード、ロスト・スター・ディセント！このカードの効果により墓地のスターダスト・ドラゴンを効果を無効にし、守備力0の状態で特殊召喚する！」

地面を突き破り、星屑のドラゴンが三度<sup>みたび</sup>フィールドに帰還した。

スターダスト・ドラゴン 守備力0

「いくらスターダストでもその状態じゃ戦えねえぜ！」

「ふ…もちろん分かっている。だから俺はこのカードでスターダストのさらなる可能性を引き出してみせる！俺は手札からこのカードを発動する！s p r s ピード・フュージョン！」

「なっ…なに！遊星が融合召喚だつて!?!」

「お前がアキと戦った時のデュエルがヒントとなった。アクセルシンクロを習得したため、機皇帝の対策として使うことはなかったが…今ならば俺には見える！このカードの持つさらなる可能性が！俺はフィールドのスターダスト・ドラゴンと手札のソニック・ウオリアーを融合させる！」

星屑のドラゴンが音速のスピードを持つ戦士と渦により交わり、一つになっていく。

「融合召喚！到来せよ、波動竜騎士 ドラゴエクイテス！」

渦から波動が発せられると、巨大な槍をかついだ竜騎士が見参していた。

波動竜騎士 ドラゴエクイテス 攻撃力3200

「これが遊星の融合モンスターか…だが、始祖竜ワイアームはバトルでは破壊されねえ！」

「波動竜騎士 ドラゴエクイテスの効果発動！1ターンに1度、墓地のドラゴン族シンクロモンスターを除外することでその効果を得る！」

「…！セイヴァー・スター・ドラゴンの効果をコピーして効果を無効にするつもりか！だけど甘いぜ！始祖竜ワイアームは自身以外のモンスター効果を受け付けない！」

「いいや…俺が効果を得るのはセイヴァー・スター・ドラゴンじゃない！」

「何だつて?」

「俺が選択するのは…シューティング・スター・ドラゴンだ！」

「…！融合モンスターにアクセルシンクロモンスターの効果を与えた…!?!」

シューティング・スター・ドラゴンの魂が波動となって竜騎士に受

け継がれ、その効果を得た。

「そして得たシユーン・テイニング・スター・ドラゴンの効果を発動する！デッキの上から5枚のカードをめくり、その中のチューナーモンスターの数だけ攻撃することが出来る！」

「…そうか、いくら始祖竜ワイアームが戦闘で破壊されなくてもダメージは受ける。1回につき俺が受けるダメージは500。つまり…遊星が3体のチューナーを引けば俺のライフは0…！」

「そうだ。この効果で決着をつける…1枚目…チューナーモンスター、ドリル・シンクロン！」

「くっ…あと2枚か」

「2枚目…非チューナーモンスター、ボルト・ヘッジホッグ！」

「ふう…」

「3枚目…くっ、トラップカード、スクランブル・エッグ！」

「あと2枚のカードが勝負だ…！」

「4枚目…チューナーモンスター、スチーム・シンクロン！」

「…！」

「5枚目……チューナーモンスター！モノ・シンクロンだ！」

「なっ…！」

遊星が引いたカードのうち、3枚のカードがチューナーだったことで竜騎士の持っている槍が3つに増え、3回の攻撃が可能になった。

「ゴナミ…この勝負、俺の勝ちだ！バトル！波動竜騎士 ドラゴエクイテスで始祖竜ワイアームに3連続攻撃！スパイラル…ジャベリン！」

竜騎士が3本の槍を回転させ、ジャイロ回転で始祖竜ワイアームに投擲した。螺旋状に回転する槍はスピードを増していき、始祖竜ワイアームにめがけて向かっていった。

「遊星、正直俺は遊星が融合召喚してくると思っただけ…けどな」

「…？」

「どうやら俺のデッキは…この展開に伝えてくれたようだぜ！これで終止符を打つ！トラップ発動、決戦融合ーファイナル・フュージョン

！このカードは俺の場の融合モンスターと相手の場の融合モンスターがバトルする時に発動出来る！その効果で攻撃を無効にし…お互いに場の融合モンスター2体の攻撃力の合計分のダメージを受ける！」

「何…!?そんなことしたら俺達のライフは…！」

「悪いな…遊星。俺はこう見えても結構負けず嫌いなんだ！」

始祖竜ワイアームは槍を躲すと翼で竜騎士に攻撃する。竜騎士も迎え撃つように己の拳を翼にぶつけ、2体のモンスターが正面からぶつかり合ったことで衝撃波が発生した。

「2体のモンスターの攻撃力の合計は5900！5900ダメージ分の衝撃波が俺達を襲うぜ！」

「互いに受け切れるライフではない。引き分け…ということか」

「そういうことだ！」

「そう言えば…お前に一つ言っていないことがあったな」

「…?何のことだ？」

「俺も…こう見えても負けず嫌いだということだ。波動竜騎士 ドラゴエキテスの最後の効果発動！このカードが攻撃表示で存在する時、相手のカード効果によって発生するダメージは代わりに相手を受ける！ウェーブ・フォース！」

「え…:…な、なんだとお!?…ってことは…」

「決戦融合の効果ダメージをコナミは一人で引き受けることになる！よって…お前が受けるダメージは11800だ！」

遊星の方向に発生した衝撃波が竜騎士の作り出した波動の障壁によってコナミの方向に返されていく。コナミは自身の方向に発生していた衝撃波と共にその衝撃波を受けたのだった。

「はは…:。これもデュエルの持つ可能性…ってことか。…うおおっ!?!」

コナミ LP1500↓0

「…:…け、決着…この激戦を制したのは…不動遊星！よってWRGPの優勝チームは…5D'sだー！」

こうして彼らの戦いは幕を閉じたのだった。

## 一人一人の道

WRGPが終わってしばらく経った頃、ネオ童実野シティの復興が終わったことで滞在する理由が無くなった鬼柳はニコやウエストのいるサティスファクションタウンへ戻ろうとしていた。

「鬼柳…行っちゃうのか？」

「ああ、ウエスト達を待たせすぎちゃったしな。それに俺はあいつらにサティスファクションタウンを発展させて生き様を見せるって約束したんだ。いつまでも残ってるわけにはいかねえ」

コナミと鬼柳はWRGPの間、世話になっていた弥生のホテルにあるロビーで話し合っていた。

「へえ…目的を失ったアンタがまた暴走するんじゃないかと心配してたけど、余計な心配だったみてえだな」

「ノーマネーの姉御…」

そこに話を聞いていた弥生が割り込んできた。

「安心しな。俺はもうそんな不満なこととはしねえ」

「へっ…そうかい」

チームサティスファクションが解散した事情を知っている弥生は安心し、話題を変えた。

「そういや、テメエらはWRGPの準優勝チームなんだ。プロからお誘いの一つや二つくらい来たんじゃないのか？」

「ああ…まあな」

「俺は断っちゃまったなー。どうも俺はプロは性に合わねえし」

「確かにテメエはプロって感じじゃねえな。鬼柳も断っちゃまったのか？」

「…いや、断ってねえ。まだどうするか決められてねえんだ」

「珍しいな。アンタはいつもこういう時はすぐ決断するじゃねえか」

「…コナミ。お前これからどうするかって決めたか？」

「いや…俺も決まってねえ」

「遊星はもう決めたらしいぜ。モーメントの代わりになる永久機関を開発するんだとよ」

「ああ…アタイもゾーンと遊星のデュエルを見てたから分かるよ。確か未来は向上心を失った人の心、ただ力を求める人の欲がモーメントに危険だと判断されて滅ぼされたんだったな。だからモーメントの代わりになる安全な永久機関を開発すれば、破滅の未来を回避できるってわけか」

父親が開発していた旧モーメントが起こしたゼロ・リバースの惨劇によって多数の犠牲を出してしまったことに責任を覚えていた遊星は父親の開発を引き継ぐ思いで、モーメントに代わる安全な永久機関を開発しようと決意していた。

「だが俺は遊星みてえに器用じゃねえからそれは手伝えねえ。パラドックスに破滅の未来を回避するって宣言したのに、俺はどうするべきか…まだ答えが出ねえんだ」

「俺もだ…」

「だけど遊星がその永久機関の開発に成功すればそれで万事解決じゃねえのか？」

「いいえ、解決ではありませんが万事とはいきませんわね」

「幸子！」

ホテルに入ってきた幸子がさらに話に割り込んできた。

「確かにモーメントの代わりに安全な永久機関が開発されれば、それを通して危険に晒されることはないでしょう。しかしただ強い力のみを求めるといふ欲が消えるわけではありませんわ。力に溺れた人間がどのように力を振るうか…想像に難くないですわ。まるでこのホテルで力を振るっていたわたくしのように…ね」

「ああ…そういえば幸子と初めて会ったのはこのホテルだったな」

幸子は過去にこのホテルを海野財閥の権力を振るって買収しようとしていたことを思い出し、自嘲するような薄笑いを見せた。

「モーメントがその欲を危険だと判断したのはそれなりの理由があるということですよ。きつとその欲は別の形で未来の人々に降りかかってしまうことでしょう」

「なるほどな。だけどモーメントが世界を破滅させちまうよりはマシじゃねえか？」



「ええ…ですから不動遊星が行おうとしていることは的確だと言えますわ。しかし時として人の欲とは恐ろしいものです。どのように力を振るうのが正しいのか…それすらも判断出来なくなってしまうのですから」

「幸子…」

「ですからわたくしは決めましたわ。これからわたくしがどうすべきかを。庶民、デュエルチャリティーをご存知ですか？」

「いや、知らねえ」

「デュエルチャリティーとは、あるプロの連盟が行なっている活動ですわ。登録しているプロが得た賞金の一部を貧しい地域の人々が欲している食糧や物資に変換し、それらの地域の人々に分け与えるというものです」

幸子はデバイスを取り出すと立体映像を空中に出し、その活動を分かりやすく示した。

「…？賞金をそのまま与えるんじゃないやダメなのか？」

「あら、庶民なら分かるでしょう？サテライトとシティに格差があった頃、あなた達が欲しいのはお金でしたか？」

「ああ…そっか。仮に金やD デュエルポイント Pを与えられたとしてもあんな所じや使い道がねえ。食べ物やカードとかを直接支給してくれた方が助かるな」

「待ってくれ…幸子」

「どうしたのですか、鬼柳？」

「デュエルチャリティーはプロがやる活動。ってことはお前まさか…!？」

「勿論です。わたくしはプロになりますわ。わたくしは庶民達と共にいて力がある者は力が無い者に力を貸すべきということを学びました。なら迷う理由はありません…そのための準備もたつた今済ませて来ましたわ」

「そう言えばいつも着てるデュエルアカデミアの制服じゃなくて、面接行くときみたいなスーツ着てるな。それにしばらく連絡も取れなかったし…一体今まで何してたんだ？」

「しばらく連絡を取れなかったのはプロに相応しい実力を得るために修行していたからですわ。そして今日は海野財閥の本社に寄つてきましたの。お父様に大事な用事がありましたので」

「大事な用事…?」

「ええ、お父様にデュエルで勝利して海野財閥の後継ぎを正式に断らせて貰ったのですわ」

「そっか…って、ええ!?!」

コナミは驚きのあまり座っていたソファから崩れ落ちてしまった。

「へー、アンタがねえ。どういう風の吹きまわしだい?海野財閥がスポンサーについていた方がプロとしてもやっていきやすいだろうに」  
「それでは意味が無いのですわ。強い力に依存したままでは…ダメなのです。己の力で為してこそ初めて意味がある。わたくしはそう思いますわ」

「そっか…」

「その様子だとあなた達はまだどうするか決めていないようですわね?」

「ああ…情けねえとは思うが答えが出ねえんだ」

「そうですか…なら庶民。わたくしとデュエルをしましょう」

「…!そうだな…デュエルはいつも俺達を導いてくれた。俺達が迷つてるなら…その答えはデュエルの中に見つけるしかねえか」

「そういうことですわ。それに…言いましたわよね。いつかあなたとの決着をつけると。プロになる前にその決着…つけさせてもらいますわ!」

「望むところだ!」

コナミは崩れ落ちていた体を持ち直し、ソファを飛び越えて幸子と対峙した。

「お前ら…ここはホテルのロビーだぞ。まあ…あの時のデュエルよりはよっぽどマシな理由でデュエルするしな。特別に許してやるか」

弥生はため息を吐くと、呆れたような表情を浮かべながらも彼らのデュエルを見守ることを決めていた。

「デュエルで…か」

鬼柳はデュエルで道を見つけようとする彼らの姿勢に思うところがあり、2人の様子をまじまじと見つめていた。

「思えば庶民に負けたのも丁度この場所。決着をつけるには丁度良いですわ」

「ああ……ここはシティに来てから俺が初めてデュエルした場所だ。ここから俺の道は変わったんだ。ここなら……俺の道を示してくれるかもしれないねえな。行くぜ！」

「来なさい！」

2人はデュエルディスクを展開し、数秒の沈黙の後デュエルの開始を宣言した。

「デュエル！」

デュエルディスクがランダムに先攻を選ぶ。先攻のランプが点灯したのは……幸子。

「わたくしのターンからですわね。ドロー！わたくしはヒゲアンコウを召喚いたします！」

餌となる魚を誘導するための長いヒゲを持った深海魚がフィールドで跳ね出した。

ヒゲアンコウ 攻撃力1500

「確かあいつは水属性モンスターの召喚のためにリリースされる時に2体分のリリースとして扱えたはず。コナミのターンを耐えて最上級モンスターを一気に呼び出す気か……！」

「ふふ……今のわたくしはそんな隙は与えませんわ！さらにマジックカード発動！大波小波！わたくしの場のヒゲアンコウを破壊し、手札から水属性モンスターを一体呼び出しますわ！」

「なっ……まさか！」

ヒゲアンコウが突如出現した波によって包まれていくと、波によって海が形成されていく。

「現われ出でなさい！超古深海王シーラカンス！」

その海から姿を見せたのはヒレが扇の形をした巨大なシーラカンスだった。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「1ターン目からシーラカンスを！こりややべえぜ！」

「わたくしはシーラカンスの効果を発動しますわ！手札を1枚捨てることでデッキから可能な限り、レベル4以下の魚族モンスターを効果を無効にして特殊召喚します！来なさい、わたくしの魚達！」

シーラカンスが扇形のヒレを水面に叩きつけると4つの渦が発生し、そこから一匹ずつ魚が飛び出て来た。

竜宮の白タウナギ 攻撃力1700

光鱗のトビウオ 攻撃力1700

ハリマンボウ 攻撃力1500

素早いマンタ 攻撃力800

「いつ見ても厄介すぎる効果だぜ……しかも竜宮の白タウナギはチューナー……！」

「当然シンクロさせていただきますわよ！わたくしはレベル2の素早いマンタにレベル4の竜宮の白タウナギをチューニング！」

竜宮の白タウナギが水のリングとなって素早いマンタを包み込み、水の粒子へと変換させていく。

「万物を凍てつかせし氷よ、その姿を虎に変え相手を支配しなさい。シンクロ召喚！吠えなさい、氷結界の虎王 ドウローレン！」

水の粒子は虎の姿となるとその姿を凍らせていき、氷を纏った虎へと変貌していった。

氷結界の虎王 ドウローレン 攻撃力2000

「そのモンスターは……！」

「……？庶民にこのモンスターを見せたことがありましたかしら……？まあいいですわ。わたくしはドウローレンの効果を発動します！1ターンに1度、わたくしの場の表側のカードを好きな数だけ手札に戻すことでエンドフェイズまで戻した数×500分攻撃力を上昇させます！戻りなさい、ハリマンボウ！光鱗のトビウオ！」

ドウローレンが雄叫びをあげると2匹の魚を押し出していた渦が勢いを増し、2匹の魚を勢いよく飛ばしてしまった。

氷結界の虎王 ドウローレン 攻撃力2000↓3000

「だけど攻撃力が上がるのはエンドフェイズまで……。なのに折角展開

したモンスターを手札に？」

「…そうか。シーラカンスによって呼び出したモンスターの効果は無効化される。だけど手札に戻せば無効化を打ち消すことが出来るってわけか！」

「そういうことですわ。それにシーラカンスはわたくしの場に空きがあるほど真価を発揮する。これで次のターンも大量展開が可能になった…というわけです。わたくしはカードを1枚伏せてターンエンド！この瞬間、ドウローレンの攻撃力は元に戻ります。さあ、どうします…庶民？」

氷結界の虎王 ドウローレン 攻撃力3000↓2000

「くっ…これが修行の成果ってわけか」

「ふふ…これはまだ一欠片に過ぎませんわ」

幸子 LP4000

フィールド 『超古深海王シーラカンス』（攻撃表示） 『氷結界の虎王 ドウローレン』（攻撃表示）

セット1

手札3

「俺のターン、ドロロー！ここはこのカードに賭ける！ライフを800払ってマジックカード、魔の試着部屋を発動するぜ！」

コナミの場に赤いカーテンで覆われた4つの試着部屋が現れた。

コナミ LP4000↓3200

「俺はデッキの上から4枚のカードをめくり、その中にいるレベル3以下の通常モンスターを呼び出すぜ！」

「わたくしと共にタッグデュエルで戦った時は1枚でしたが…今回はどうでしょうね？」

「それは引けば分かるさ！1枚目！レベル1通常モンスター、大木炭インパチ18！」

「…！」

「2枚目！レベル3通常モンスター、ジェネクス・コントローラーだ！」

「く…やりますわね」

「3枚目！レベル2通常モンスター、ファイヤー・アイ！」

「な…まさか！」

「4枚目！…そう上手くはいかねえか。レベル4効果モンスター、UFOタートルだ」

UFOタートルが入った試着部屋は下についていたジェットエンジンのよってどこかへ飛ばされていく。残った試着部屋からは3体のモンスターが試着を終え、出てきた。

大木炭18 守備力2100

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

ファイヤー・アイ 攻撃力800

「3体とは運が良かったですわね。ですが、そのモンスター達ではわたくしのモンスターは倒せませんわ！」

「確かにな…だけど俺はまだこのターン、召喚をしてないぜ！俺は大木炭18をリリースしてタン・ツイスターをアドバンス召喚だ！」

舌が竜巻のように巻いたモンスターが台風のように回転しながら現れた。

タン・ツイスター 攻撃力400

「…この状況は…」

「早速こっちも行くぜ！俺はレベル6のタン・ツイスターにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング！」

ジェネクス・コントローラーが特殊な電波を飛ばすとタン・ツイスターの姿が変貌していった。

「闇のエレメントを司る者よ、欲を制御し力を希望に変えろ！シンクロ召喚！汽笛を鳴らせ、リアル・ジェネクス・クロキシアン！」

変貌したタン・ツイスターは蒸気機関車となり、ジェネクス・コントローラーはコアへと装填され、その力を制御した。

リアル・ジェネクス・クロキシアン 攻撃力2500

「クロキシアン…！」

「あの時のデュエル…こいつでシーラカンスを借りて勝利したっけな。悪いが今回も借りるぜ！クロキシアンがシンクロ召喚に成功したことで相手フィールドの一番レベルが高いモンスターのコント

「ルールを得る！」

クロキシアンが汽笛を鳴らすと蒸気で作られた手が幸子のフィールドに向かっていった。

「幸子の場でレベルが一番高いのはレベル7のシーラカンスだ。そしてシーラカンスを奪えばコナミの場の総攻撃力は6100。対して幸子の場は2000になる！」

「つてことは…ワンターンキルが成立するじゃねえか！」

蒸気で作られた手はシーラカンスを見つけると手を広げ、掴み取るうとした。

「ふふ…庶民、まさかわたくしとあなたの戦いがそんなあつけない幕切れで終わるとでも思ってた？わたくしが教えてあげますわ…そのモンスター…の弱点を！」

「クロキシアンの弱点だど!?!」

「トラップ発動、星蝕―レベル・クライム―！このカードは相手がシンクロモンスターを特殊召喚した時に発動出来ますわ！」

クロキシアンから9つの星が吸い取られていき、幸子の場で一つにくつついた。

「一体何を…!?!」

「このカードは呼び出されたシンクロモンスターと同じレベルを持つ星蝕トークンをわたくしの場に呼び出し、呼び出されたシンクロモンスターのレベルを1にしますわ。わたくしはこの攻撃力0のトークンを攻撃表示で特殊召喚します！」

星蝕トークン 攻撃力0 レベル1↓9

リアル・ジエネクス・クロキシアン レベル9↓1

「これでわたくしの場で最もレベルが高いモンスターは星蝕トークンとなりました。よってあなたがコントロールを得るのは星蝕トークンですわ！」

「なっ…しまった！」

シーラカンスを掴もうとしていた手は星蝕トークンを見つけるとそちらを掴み取り、コナミの場へと連れ帰ってしまった。

「これでシーラカンスは無事。そしてあなたの場には攻撃力0のト―

クンが攻撃表示で無防備の状態で見れた…というわけです」

「クロキシアンにそんな弱点が…くっ、アドバンス召喚したタン・ツイスターを除外することで2枚ドロウする！そしてバトルだ！クロキシアンでドウローレンに攻撃！」

ドウローレンに向かってレールが引かれるとクロキシアンはスピードを上げて突進していった。

幸子 LP4000↓3500

「ふふ…」

「アイツ…ダメージを食らったのに余裕そうだな」

「幸子の場にいるシーラカンスはフィールドに空きがあれば手札1枚で大量展開が出来る。だからドウローレンを失ってもそこまで痛くねえんだ…」

「シンクロモンスターを破壊したことで手札から速攻魔法、グリード・グラードを発動し2枚ドロウする！…場に3枚カードを伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP3200

フィールド 『リアル・ジエネクス・クロキシアン』（攻撃表示）

『ファイヤー・アイ』（攻撃表示） 『星蝕トークン』（攻撃表示）

セット3

手札4

「わたくしのターン、ドロウ！わたくしは手札を1枚捨て、シーラカンスの能力を解放します！わたくしはこの効果でデッキから再び4体の魚族モンスターを…」

シーラカンスが扇形のヒレを水面に叩きつけようとする。

「やらせるわけにはいかねえ！トラップ発動、ゴーゴンの眼！このターン守備表示モンスターの効果は無効になる！」

「ですがシーラカンスは攻撃表示！そんなトラップなど…」

「まだだ！さらにもう1枚のトラップを発動！重力解除！このカードはフィールドの全てのモンスターの表示形式をひっくり返す！」

「なっ…！」

フィールドに吹き荒れた暴風によって全てのモンスターは体勢を



崩してしまい、その拍子にメデューサの瞳を見たことで石化してしまった。

超古深海王シーラカンス 守備力2200

レアル・ジエネクス・クロキシアン 守備力2000

ファイヤー・アイ 守備力600

星蝕トークン 守備力0

シーラカンスが石化したことで水面は叩きつけられず、渦が発生することはなかった。

「カードのコンボでシーラカンスを封じましたか…！しかも星蝕トークンを含め全てのモンスターを守備表示にしてダメージを回避するのは…コストとして墓地へ送ったハリマンボウの効果でクロキシアンの攻撃力が500下がりますが、意味が無くなりましたわね。わたくしはシーラカンスを攻撃表示に変更します！」

石化したシーラカンスにヒビが入り、殻を破るように中からシーラカンスが復活した。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「これでゴーゴンの眼を逃れましたが…シーラカンスの効果は1ターンに1度のみ。ですが、効果を失おうともその攻撃力は健在ですわ！さらにわたくしは先ほど手札に戻した光鱗のトビウオを召喚します！」

鱗が光に反射して眩いほど輝いているトビウオが水面から大きく跳ねた。

光鱗のトビウオ 攻撃力1700

「バトル！シーラカンスでクロキシアンへ攻撃！」

シーラカンスは海の水を巻き上げ、石化したクロキシアンへと放った。

「クロキシアンがやられちゃったか…」

「まだ攻撃は終わっていませんわ！光鱗のトビウオでファイヤー・アイに攻撃！」

トビウオは水面から大きく跳ねると石化したファイヤー・アイに向かって飛び、ヒレで叩き落とした。

「くっ……！」

「これであなたの場には星蝕トークンのみ！わたくしはカードを1枚伏せてターンエンドですわ！」

幸子 LP3500

フィールド 『超古深海王シーラカンス』（攻撃表示） 『光鱗のトビウオ』（攻撃表示）

セツト1

手札1

「俺のターン、ドロー！俺は星蝕トークンをリリースし、人造木人18をアドバンス召喚するぜ！」

頑丈な装甲を纏ったロボットがコナミの場に降り立った。

人造木人18 攻撃力500

「守備力2500の人造木人18を攻撃表示……ということは狙いはシンクロですわね？」

「そうだ！永続トラップ発動、蘇りし魂！墓地の通常モンスターを守備表示で特殊召喚できるぜ……戻ってこい、ジェネクス・コントロールラー！」

地面に空いた穴から再びジェネクス・コントロールラーが舞い戻った。

ジェネクス・コントロールラー 守備力1200

「行くぜ！俺はレベル5の人造木人18にレベル3のジェネクス・コントロールラーをチューニング！」

ジェネクス・コントロールラーが再び電波を飛ばすと木人の姿を変えていった。

「炎のエレメントを司る者よ、燃え上がる心を制御し討ち倒れし同胞の意思を継げ！シンクロ召喚！燃え盛れ、サーマル・ジェネクス！」

木人は溶鉱炉へと姿を変え、中枢コアにジェネクス・コントロールラーを装填することで熱を制御した。

サーマル・ジェネクス 攻撃力2400

「ですが攻撃力はシーラカンスの方が上。狙いは光鱗のトビウオかしら？」

「それはどうかな！サーマル・ジェネクスの効果発動！墓地の炎属性モンスターの数×200攻撃力を上げるぜ！俺の墓地には大木炭18、ファイヤー・アイ、人造木人18の3体！よって攻撃力は600アップだ！」

「…！」

3体のモンスターの魂が溶鉱炉へと入っていくと、吹き出されている炎の勢いが増していった。

サーマル・ジェネクス 攻撃力2400↓3000

「これでシーラカンスの攻撃力を上回ったぜ！バトルだ！サーマル・ジェネクスでシーラカンスに攻撃！」

溶鉱炉から灼熱の炎を放ち、シーラカンスの周りにある水を全て浄化させることでシーラカンスは無力化されてしまった。

「シーラカンス…！」

幸子 LP3500↓3300

「まだまだ！さらにサーマル・ジェネクスは戦闘で相手モンスターを破壊した時、墓地のジェネクスモンスターの数×200のダメージを与える！俺の墓地にはジェネクス・コントローラーとクロキシアンの2体だ！」

シーラカンスに向かって放たれた炎の余熱が幸子を襲った。

「うっ…！」

幸子 LP3300↓2900

「どうだ幸子！シーラカンスを倒したぜ！俺は場に3枚カードを伏せてターンエンド！」

「やりますわね…庶民。しかし、わたくしがいつまでもシーラカンスばかりに頼っていると思わないことね！ここで永続トラップ、リミッター・リバーズを発動しますわ！墓地の攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚出来ます…戻りなさい、素早いマンター！」

マンタが上昇水流に乗って海の底から帰還した。

素早いマンタ 攻撃力800

コナミ LP3200

フィールド 『サーマル・ジェネクス』（攻撃表示）

セット3 『蘇りし魂』（使用済み）

手札1

「わたくしのターン！わたくしは素早いマンタを守備表示に変更しますわー！」

「サーマル・ジエネクスを超えられねえと見て守る気か！」

「読みが甘いですわね。リミット・リバーズによって復活したモンスターが守備表示になった時、リミット・リバーズと共にそのモンスターは破壊されます！」

「なっ…自分で自分のモンスターを破壊した!？」

「ですがこの瞬間、素早いマンタの効果が発動しますわ！このモンスターが効果で破壊された時、デッキから2体の素早いマンタを呼び出すことができます！」

マンタが下降水流に飲み込まれたかと思うと、上昇水流に押し返され仲間と共に戻ってきた。

素早いマンタ×2 攻撃力800

「そういうコンボか…だけど俺の場には攻撃力3000のサーマル・ジエネクスがいる！こいつを倒さなきゃ俺にダメージはねえぜ！」

「なら倒させていただきましょう！わたくしは光鱗のトビウオの効果を発動しますわ！自身以外の魚族モンスターを1体リリースする毎に相手フィールドのカードを1枚破壊することが出来ます！」

「…！素早いマンタは魚族…！」

「よって1体の素早いマンタをリリースし、サーマル・ジエネクスを破壊しますわー！」

トビウオはマンタを栄養として取り込むと水面を切り裂くほどの水鉄砲を放ち、溶鉱炉の炎を浄化させた。

「これであなたの場合は空きましたわ！」

「…そいつはどうか。ここで俺は2枚のトラップを発動するぜ！」

「…！またダブルリバーズですか…！」

「トラップカード、ヘイト・クレバス！そしてリボーン・パズル！まずはリボーン・パズルの効果で…！」

（あのカードは…まずいですわね。さらに逆転の一手を用意しなくて

は……！)

「わたくしは手札から速攻魔法、魔力の泉を発動します！相手フィードの表側表示の魔法・罠の数だけわたくしはドロシー、その後わたくしの場の表側表示の魔法・罠の数だけ手札からカードを捨てますわ！よってわたくしは3枚のカードをドロシー、1枚捨てます！」

「手札を交換したか……だけどトラップの効果は止まらねえ！リボン・パズルは俺の場のモンスターが1体のみ効果で破壊された時、そのモンスターを墓地から呼び戻すことができる！」

溶鉱炉の中に無数のパズルが集まっていき、そのパズルのピースが全て組み合わさると再び溶鉱炉の火が燃えだした。

サーマル・ジエネクス 攻撃力3000

「そしてヘイト・クレバスの効果だ！同じく俺のモンスター1体のみが効果で破壊された時、相手モンスター1体を墓地に送りその攻撃力分のダメージを与える！」

トビウオが跳ねていた水面が凍ると、その衝撃で裂け目が発生しそのまま底に落ちていつてしまった。

「くっ……光鱗のトビウオを墓地に送ってきましたか」

幸子 LP2900↓1200

「これで光鱗のトビウオでサーマル・ジエネクスを倒すことは出来なくなつたぜ！」

「なら次の手を打って差し上げましょう！わたくしは手札から竜宮の白タウナギを召喚します！」

紅色のヒレに宝石のように輝く球体をはめ込んだ竜宮の使いが海に飛び込んだ。

竜宮の白タウナギ 攻撃力1700

「そしてレベル2の素早いマンタにレベル4の竜宮の白タウナギをチューニング！氷の檻に閉ざされし龍よ、今こそ真の力を解き放ち、勝利という栄光を支配せよ！シンクロ召喚！全てを凍てつかせなさい……氷結界の龍 ブリユーナク！」

2匹の魚が同調すると海が凍っていく。すると氷のように透き通った翼と胴体を持つドラゴンが凍った海面を突き破り、海上を飛び

回った。

氷結界の龍 ブリユーナク 攻撃力2300

「確かそのモンスターは……！」

「ブリユーナクの効果発動！手札を1枚捨てることでサーマル・ジェネクスをエクストラデッキに戻しますわ！」

幸子の手札が氷の槍に変換されていくと、弾丸の如き鋭さでサーマル・ジェネクスに突き刺さり、その力を封印した。

「サーマル・ジェネクスがあっさりやられちゃった……！」

「そしてバトルですわ！ブリユーナクで庶民にダイレクトアタックします！」

ブリユーナクの咆哮により凍った海のカケラが無数の氷弾となってコナミを襲った。

「そうはさせねえ！トラップ発動、カウンター・ゲート！俺へのダイレクトアタックを無効にする！」

コナミの前に出現したゲートに氷弾が吸い込まれていき、氷弾がコナミに届くことはなかった。

「躲しましたか……！」

「さらにカウンター・ゲートの効果でカードを1枚ドロウするぜ！引いたカードは……暗黒<sup>ダーク</sup>プテラ！カウンターのゲートの効果でドロウしたモンスターが召喚出来る場合、呼び出すことが出来るぜ！来てくれ！」

氷弾が吸い込まれたのを確認し、ゲートの中から翼が漆黒に染まったプテラノドンが姿を現した。

暗黒プテラ 攻撃力1000

「モンスターを残してしまいましたか……わたくしはこれでターンエンドですわ」

幸子 LP1200

フィールド 『氷結界の龍 ブリユーナク』

セット0

手札1

「俺のターン！暗黒プテラをリリースするぜ！アドバンス召喚！頼ん

だぜ：サイバネティック・マジシャン！」

左手に白い杖を持った魔術師が現れ、呪文を詠唱し始めた。

サイバネティック・マジシャン 攻撃力2400

「く…ブリーナクを超える上級モンスターを召喚しましたか」

「さらに俺はリリースした暗黒プテラの効果を発動するぜ。こいつは戦闘以外でフィールドから墓地に送られた時手札に戻る！そして俺は暗黒プテラをコストにサイバネティック・マジシャンの効果を使うぜ。ブリーナクの攻撃力はこのターン2000になる！」

「少しでもダメージを…ということですね」

詠唱を終えた魔術師が杖をかざすと、ブリーナクの体をわずかに小さくさせた。

氷結界の龍 ブリーナク 攻撃力2300↓2000

「バトルだ！サイバネティック・マジシャンでブリーナクに攻撃！」

サイバネティック・マジシャンが天に杖をかざすと天から雷が落ち、ブリーナクの胴体を貫いてしまった。

「くう…！」

幸子 LP1200↓800

「これで形勢逆転だぜ！さらに俺は手札から命削りの宝札を発動！俺はこのカードの効果で3枚のカードをドロウする。…場に3枚カードを伏せてターンエンドだ！」

コナミ LP3200

フィールド 『サイバネティック・マジシャン』（攻撃表示）

セット3 『蘇りし魂』（使用済み）

手札0

「やってくれましたわね…わたくしのターン！ わたくしはマジックカード、貪欲な壺を発動します！墓地から5体のモンスターをデッキに戻すことでカードを2枚ドロウ出来ますわ。わたくしは2体の竜宮の白タウナギと3体の素早いマンタをデッキに戻します！…：ドロウ！」

「……」

「…やはり最後はこのカードに頼ってしまうようですね。ですが、

わたくしはこのカードの力に驕らず、その力を使いこなして見せましょう。わたくしは永続魔法、異次元海溝を発動します。このカードにより墓地から超古深海王シーラカンスを除外！」

シーラカンスが異次元にある深海に封印されてしまう。

「あのカードは鬼柳との戦いで使用したカード…ということとは」

「さらに手札からデープ・スイーパーを召喚します！」

尻尾の先に毒を仕込んだ魚が敵の気配を察知し、水面に浮上した。

デープ・スイーパー 攻撃力1600

「…俺はここで永続トラップ、能力吸収石を発動するぜ！このカードは相手がモンスター効果を発動し終えるたびにエンドフェイズまで魔石カウンターが乗る。最大で2つまでだけどな」

「魔石カウンター…？」

「ああ。そして魔石カウンターが2つ乗っている時、フィールドにいるモンスターの効果は無力化される！」

「…！」

「デープ・スイーパーには自身をリリースすることで魔法・罫を1枚破壊する効果がある。そして異次元海溝は破壊されれば除外したシーラカンスを帰還させることが出来る」

「シーラカンスの効果を使ったら、その後場のモンスターは無力化される。つまりシンクロモンスターに繋がられても効果は無効に出来るっつーことか」

「…なるほど。ですがその程度でわたくしは止められませんわ！デープ・スイーパーをリリースすることで異次元海溝を破壊します！」

深海から上昇水流に押し出され、次元を突き破りシーラカンスがフィールドに再び姿を現した。

超古深海王シーラカンス 攻撃力2800

「この瞬間、能力吸収石に魔石カウンターが1つ乗るぜ！」

「さらにわたくしは手札を1枚捨て…シーラカンスの効果を発動しますわ！呼び出すモンスターは…2体の竜宮の白タウンギ、オイスターマイスター、ハリマンボウですわ！」



シーラカンスが自身の周りに4つの渦を発生させ、4匹の魚を呼び出した。

竜宮の白タウナギ×2 攻撃力1700

オイスターマイスター 攻撃力1600

ハリマンボウ 攻撃力1500

「これは……。この瞬間、能力吸収石に2つ目の魔石カウンターが乗るぜ。これでこのターン、フィールドのモンスター効果は無効になる！」

2つの石が緑色の光を発し、フィールドを満たしていった。

「問題ありませんわ。わたくしはレベル3のオイスターマイスターにレベル4の竜宮の白タウナギを、レベル3のハリマンボウにレベル4の竜宮の白タウナギをそれぞれチューニング！」

それぞれ2匹の魚が同調していくと、交差しながら天へと昇っていった。

「氷の槍を身に宿す龍よ、その凍える吐息で幾千の敵を凍らせよ！シンクロ召喚！全てを貫け、氷結界の龍 グングニール！」

氷で体全体が覆われたドラゴンが2体、シーラカンスの隣にゆつくりと降り立った。

氷結界の龍 グングニール×2 攻撃力2500

「シーラカンスに2体のグングニール！」

「あなたと初めてデュエルした時もこの状況になりましたわね。ですが、わたくしはあの時とは違いますわ！墓地からオイスターマイスターとハリマンボウのモンスター効果を発動します！」

「モンスター効果だど!?能力吸収石の効果で……あつ！」

「能力吸収石が防げるのはあくまでフィールドでのモンスター効果のみ！墓地からならばそのトラップの範囲外ですわ！ハリマンボウの効果でサイバネティック・マジシャンの攻撃力を500下げます！」

ハリマンボウが体に生えたトゲをサイバネティック・マジシャンに放つと、サイバネティック・マジシャンは衰弱していった。

サイバネティック・マジシャン 攻撃力2400↓1900

「さらにオイスターマイスターが戦闘以外でフィールドから墓地に送

られたことで場にオイスタートークンを特殊召喚します！」

オイスタートークン 守備力0

「これで能力吸収石の効果も切れたらシーラカンスのもう一つの効果で対象に取る効果が無効に出来るってわけか……！」

「そういうことです。もつとも……次のターンがあればの話ですわ！バトル！シーラカンスでサイバネティック・マジシャンに攻撃！」

シーラカンスが渦の竜巻を作り出すと、螺旋状の回転をさせながらサイバネティック・マジシャンに放った。

「ぐっ……！」

コナミ LP3200↓2300

「そしてわたくしはグングニールで庶民に……！」

幸子がグングニールに攻撃命令を下そうとした瞬間、2体のグングニールはどこかへ飛び去ってしまった。

「なっ……！」

「……トランプ発動、自由解放！」

「……ここでそのカードですか……！」

「自由解放はバトルで俺のモンスターが破壊された時、フィールドの2体のモンスターをデッキに戻す！俺はこの効果で2体のグングニールをエクストラデッキに戻していた！」

「く……わたくしとしたことが同じ轍を踏んでしまうとは。ですが、わたくしの勝利に変わりはありませんわ！ターンを終了します！」

「この瞬間能力吸収石に乗っていた魔石カウンターは無くなり、モンスター効果が無効にされなくなるぜ」

幸子 LP800

フィールド 『超古深海王シーラカンス』（攻撃表示） 『オイスタートークン』（守備表示）

セット0

手札0

「俺のターン、ドロー！俺は手札からマジックカード、マジック・プラントラーを発動するぜ。場の永続トランプ、蘇りし魂を墓地に送ることで2枚ドローする……！」

2枚のカードをドロ―したコナミの表情が見る見るうちに変わっていった。

「どうしました?」

「幸子、俺にもやつと見えてきたみたいだぜ。俺が行くべき道かな」

「そうですか…ならばデュエルで示してみなさい! わたくしはさらにそれを超えてみせますわ!」

「言われなくても見せてやるぜ! 俺はギガテック・ウルフを召喚する!」

鉄屑で作られたオオカミが場に降り立ち、遠吠えをあげた。

ギガテック・ウルフ 攻撃力1200

「さらに手札からマジックカード、アイアンコールを発動するぜ! 俺の場に機械族モンスターがいる時、墓地からレベル4以下の機械族を呼び戻せる! 俺が戻すのは…ジェネクス・コントローラー!」

「…!」

ギガテック・ウルフの遠吠えに応じ、墓地からジェネクス・コントローラーが復活した。

ジェネクス・コントローラー 攻撃力1400

「そして俺はレベル4のギガテック・ウルフにレベル3のジェネクス・コントローラーをチューニング!」

ジェネクス・コントローラーがアンテナから特殊な電波を飛ばしギガテック・ウルフの姿を変貌させていく。

「3つのエレメントを司るものよ、炎の力を拳に宿しあらゆる敵を焼却せよ! シンクロ召喚! 燃やし尽くせA・ジェネクス・トライフォース!」

ジェネクス・コントローラーが変貌したギガテック・ウルフの胸部にあるコアに装填される。突き出した右腕にある3つの装置のうち、オレンジのものが点灯した。

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500

「ここでトライフォースですって…? ですが、その攻撃力ではシーラカンスを倒すことは出来ませんわ!」

「なら、試してみるか? バトルだ! トライフォースでシーラカンスに

攻撃！」

「なっ……！」

トライフォースが右手を突き出すと火炎放射が発射され、炎の渦となつてシーラカンスを包み込もうとした。

（ここで無策に突っ込んでくるはずは無いですわ。もし庶民が何か行動を起こすとしたら場に伏せられている1枚のカードのみ。炎属性をシンクロ素材としたトライフォースは戦闘で破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。つまりあの伏せカードは……）

この瞬間、幸子は初めてコナミとデュエルをした時のことを思い出した。

「それに先ほどまであなたが描いていた筋書きも読めましたわ」

「な、なんだと!?!」

「シンクロ・ストライクはシンクロモンスターの攻撃力をシンクロ素材となったモンスターの数×500アップさせるトラップカード。あなたはこれでトライフォースの攻撃力を上げて効果と合わせてわたくしに3500の反撃ダメージを与えようとした……こんなところでしょう」

「くっ……すごいなお前」

思い出した幸子はとっさにコナミの場の伏せカードに目を向けた。

（あの伏せカードは……もしや!?!）

「……わたくしは先ほどのターン、シーラカンスのコストによつて墓地へ送っていたキラー・ラブカの効果を発動しますわ！」

「……！」

海がシーラカンスを守るようにせり上がって壁になり、火炎放射を蒸発させてしまった。そして海から1匹の魚がトライフォースに飛びつき、毒を注入した。

「キラー・ラブカは墓地から除外することで魚族モンスターへの攻撃を無効にし、攻撃モンスターの攻撃力を500下げますわ！」

A・ジェネクス・トライフォース 攻撃力2500↓2000

「残念でしたわね。いくらトライフォースといえども攻撃出来なけれ

ば怖くありませんわ。次のターン、再びシーラカンスの効果を使えばわたくしの勝利が確定します！」

「…いや、幸子。次のターンは…無いぜ！」

「何ですって…！あなたの場に伏せられているカードは少なくともトライフォースの攻撃力を上昇させるカードのはず！そうでなければあの場面で攻撃するはずは…！」

「…信じていたのさ。幸子なら…そう読んでくれるってな。トラップ発動、反発力！このカードは攻撃表示モンスターへの攻撃が無効になつた時に発動することが出来る！」

「なっ…攻撃を無効にすることで発動出来るカードですって!?!」

「そうだ！そして効果で攻撃対象になつたモンスターと攻撃したモンスターとの攻撃力の差分のダメージを相手に与える！」

「シーラカンスの攻撃力は2800。トライフォースの攻撃力はキラール・ラブカの効果で2000…!?!」

「つまりその差分、800のダメージを幸子に与える！」

トライフォースはシーラカンスに拳を振るうとシーラカンスも扇形なヒレを振るい、弾き返した。そしてその衝撃が…幸子へと向かつていった。

「まさかデュエルの勝敗すらもブラフとして使うとは…読みきれませんでしたわ」

幸子 LP800↓0

この瞬間、決着はついた。

「幸子…俺は旅に出るぜ」

「旅に…?」

「ああ。俺は今のデュエルで思い出したんだ…初めてデュエルに触れた時のワクワクをな。あの時は遊星達がデュエルしてるのを見てるだけで楽しかった。だけどいつしかデュエルを戦いのために使い始めてからそんな気持ちは薄れてしまつてたんだ。多分そんな人は他にもいると思う、デュエルを戦いの道具として使わなきゃいけない人達がな。俺はそんな人達にデュエルの無限の可能性と楽しさを伝え…いや、思い出して欲しいんだ」

「庶民…」

「俺は今のデュエル…めちやくちや楽しかった。この前の遊星とのデュエルも楽しかったけど…何だろうな。今のデュエルは何だかデュエルを始めたばかりの時のことを思い出させてくれたからかもな。あの頃はカードさえあれば何だって出来る気がしてた…今ももちろんデュエルの可能性は無限だって思ってるけど、あの頃はそんな理屈なしに純粹に出来ると思っていたんだ。そしてその気持ちは…きつと無くしちやいけないものだったんだろうな」

コナミはそつと幸子に手を差し出した。

「ありがとな、幸子。お前とデュエルしなきゃ俺はこの気持ちを忘れたままだったかもしれねえ」

「…こちらこそ礼を言わせて貰いますわ。わたくしも今のデュエル、とても楽しかったですから」

幸子はコナミの手を取って握手する…フリをした。

「…ですが…わたくしは負けず嫌いですよ。あなたが旅に出ようとデュエルをしている限り、必ずどこかで会うことでしょう。そしてわたくしはあなたに何度でも挑み、そして必ずや勝利してみせます。握手はその時まで取っておきますわ」

「ははっ…幸子らしいな」

コナミは手を引つ込め、鬼柳の方に振り向いた。

「コナミ…デュエルで語り合うお前達を見て俺も一つ分かったことがある」

「それは…?」

「…お前らのデュエルを見てるとデュエルをしたい気持ちが湧いて来てどうにかなつちまいそうだった。やっぱり俺は…デュエルに取り憑かれているのかもしれないねえな。俺は正直プロになってもウエスト達に生き様を見せられるのか不安だった。だけど俺にはやっぱりデュエルしかねえんだ。今のでそれがよく分かった!俺は…プロになる!」

「おおー!」

「そして世界中に俺の満足を広めてやる!今の力だけじゃ満足出来な

くなるくらいにな！」

「プロ：ですか。なら鬼柳とも戦う機会はあるそうですね。あなたにもわたくしは負けっぱなしですからね、プロできっちり借りを返して差し上げますわ」

「そうはいかねえな。さらに借りを増やさせてやるぜ！」

（…可能性は人の数だけある、か。本当にそうだな…遊星。俺達3人は同じチームとしてやってきたけど、たどり着いた答えは似てるようでみんなバラバラだ。だけど…それでいいんだ）

こうして彼らはそれぞれの答えを出し、別々の道を歩むことになったのだった。

## 受け継がれる意志

「そう…旅に出るの」

旅の準備を終えたコナミはネオ童実野シティを出る前に恵と話をしていた。

「やっとなの道が見つかったんだ。色んな人にデュエルの無限の可能性と楽しさを思い出して欲しい…そのために俺は旅に出るぜ」

「デュエルの楽しさ…」

「そうさ。遊星や幸子…そして恵とのデュエルで気付くことが出来たんだ」

「私の…?」

「あの時のデュエルで恵はデュエルが本当は楽しくてワクワクするものってことを忘れていた。きつとそれは未来の人達もだ…」

恵はシンクロモンスターの方に溺れてしまった未来の人々のことを思い返した。そこにあつたのはデュエルで楽しもうとする姿ではなく、シンクロモンスターという力を振るうことばかりに楽しさを追求する姿だった。

「…そうかもしれない。だけどそれを今の人達に伝えても…」

「意味はある。恵達の未来で遊星が残した伝説が人々を突き動かしたように、今の人達が残した意志は未来に受け継がれるんだ」

「…不動遊星が残した意志をゾーンが継ぎ、そして私もゾーンの意志を継いでいる…。意志は…受け継がれる?」

「ああ。俺はそう信じてるぜ」

「…私も信じている。あなた達が作り上げる未来は…絶望の未来ではないことを」

「恵…」

「私はモーメントに代わる永久機関を完成させるために不動遊星の手伝いをすることに決めた。だから一緒に行くことは出来ないけど…あなたの活動が未来に繋がることを信じている」

今までゾーンの命令によって動いていた恵は一人の人間として新たな道を歩むことを決めていた。



「そっか…恵も道を決めたんだな」

コナミは前方にある二手に分かれたレーンを見つめながらDホイールに手をかけた。

「さあて…あんまりここに残っていると名残惜しくなっちゃうからな。そろそろ行くぜ」

「あ…」

コナミはDホイールにまたがり、モーメントを起動して出発の準備を整えた。

「…そうだ！恵、お前との約束はちゃんと覚えてるからな」

「…！」

「俺が旅に出てもデュエルをしてたら必ずどこかで会えるはずだ。その時に約束は果たすぜ…恵とまた楽しいデュエルをするって約束はな」

「コナミ…」

コナミは右手の小指をフック状に曲げ、恵の方に突き出した。

「これは？」

「指切りしようぜ。俺が万が一にも約束を破っちまわねえようにな」

「…こう？」

コナミが差し出した小指に恵はそつと自分の小指を絡ませた。

「合ってるぜ。…恵の指、冷たいな」

ロボットである恵は人間が持つ体温を持っていないため、手の温度も低かった。

「…大丈夫」

「え？」

「あなたの手が…温かいから」

たとえ体が冷たくとも、恵は温かい笑みを浮かべていた。

「そ、そっか。…じゃあ行くぜ。指切りげんまーん…」

互いに絡め合わせた小指を上下に振り、恵はコナミの口上を引き継ぐように言葉を紡いでいった。

「嘘ついたら…サブザンド千本ナイフ飲ます」

「ええ!?!」

指切りを終えた恵はそつと指を離した。

「私はあなたが約束を破るとは思っていない。だから…」

恵が少し恥ずかしそうにそっぽを向く。

（恵なりの冗談か…。やっぱり恵はロボットじゃなくて人間なんだな）

「大丈夫だぜ、恵。俺も約束を破る気はねえからさ。…さてと、今度こそ行くとするかな」

「…コナミ、私はあなたに会えて本当に良かった。あなたのおかげで…変わることが出来た」

「きっかけを作ったのが俺でも変わろうと思ったのは恵自身だぜ。だけど…俺もお前に会えて良かった！…じゃあ、またな！」

「…！…！…！行ってらっしゃい」

「ああ！行ってくる！」

行ってらっしゃい、という言葉には元気な状態で旅立ち、再び戻って来て欲しいという意味が込められている。恵の言葉に押されるようにコナミはDホイールを走らせた。

「…！」

その時コナミのデッキから2枚のカードが光を放ち、精霊として姿を見せた。

「エンシエント・ホーリー…それに銀龍」

「どうやら私達もお別れのようです。長いこと精霊界をカイバーマン様に任せすぎました」

「そっか。お前達にはダークシグナーと戦った時からずっと助けてもらってるもんな。今まで…ありがとうな」

「いえ、私達も人の持つ可能性を垣間見ることが出来ました。私も銀龍も…あなたと共に戦えたことを誇りに思っています」

エンシエント・ホーリーの言葉に賛同するように、銀龍が咆哮を上げた。

「私達は精霊界から人の歩む未来を見届けていきます。そして祈りましょう、未来が希望に満ち溢れていることを…」

「ああ！俺達は絶対に希望を掴み取ってやるぜ！」

エンシエント・ホーリーはコナミの言葉を聞くと、ゆつくりと頷いた。そして銀龍と共に光に包まれ：精霊界へ帰っていった。

「エンシエント・ホーリー達が俺を手助けしてくれたように、今度は俺がみんなの助けになる番だ！やっつけてやるぜ：！」

光の残滓が左のレーンに流れていくのを横目に、コナミは右のレーンへDホイールを走らせたのだった。

そして時は経ち、コナミはある場所でスクリーンに映し出された映像を見ていた。

「ジャック！ようやくキングへの挑戦権をもぎ取ることが出来たぜ：今日でその座は俺が貰い受けてやる！」

「甘いな、鬼柳。キングの座は守り続けることでその輝きを増す。そしてキングの輝きを最大限放つことが出来るデュエリストは：そう！この俺、ジャック・アトラスだ！」

「いいや、それはどうかな！俺の満足は限界すらぶち破る！幸子やクロウもそろそろトップリーグに上がってくるんだ：悪いが俺がキングの状態であいつらを迎えてやるぜ！」

「ほざいたな！だが俺は次に遊星と戦うまで誰にも負けないと誓った！たとえ貴様相手といえども決して負けはしない！」

「へっ、ここで四の五の言っても始まらねえ！」

「ふっ：そうだな。決着はデュエルでつけるとしよう」

「鬼柳もジャックも：相変わらずだな」

コナミは懐かしむように笑った。

「続きを見てえところだが：時間だな。さて、今日もやるとしますか！」

コナミはスクリーンを閉じた。その時、コナミのいた部屋のドアが開く音がした。

「せんせー、もうみんなあつまってるよー」

「分かった！先に行つててくれー！」

「はーい！」

少女は元気に返事をし、外へ走っていった。

「先生か…色んな所回ったけど、そう呼ばれるのはやっぱり慣れねえなあ。この前の所みたいの名前で呼んでもらうようにするか」

コナミは少女の後を追うように部屋を出ていった。

「今日は子供達だけじゃなくて大人達も出来るだけ集まってもらったからな…気合い入れねえと」

コナミは赤帽子のつばを後ろに引っぱり、気合を入れ直した。「それにしてもここは昔のサテライトに似てるな…」

集合場所に向かってしているとスクラップの山が目に入り、コナミにサテライトのことを思い出させた。

「懐かしいな。あの時は捨てられたカードを拾ったりしたな…ん？」

コナミはスクラップの山の一角に一枚のカードが刺さっているのを発見した。

「…折角だし拾っておくか！」

コナミはスクラップの山に登り、カードに手を伸ばした。

「ちよつと待てええ！」

「おつと…!？」

コナミとは逆方向からスクラップの山を登っていた少年がコナミがカードを取るより先にカードを拾っていた。

「これは俺が先に見つけたんだ！」

「そ、そっか。悪かったな」

「分かればよし！」

少年は偉そうに威張った後、拾ったカードを確認した。

「やったぜ！これでデツキ完成だ！」

「…！拾ったカードで…？」

「あー！馬鹿にしたな！」

「い、いや…馬鹿にしたわけじゃねえんだ。悪い」

（そうか…この地域は規模が小さすぎるからデュエルチャリティーの対象になれてねえんだ。だからここでカードをゲットするには拾うしかねえんだな）

「ったく…。見てろよ！俺はこのデツキで世界一のデュエリストになつてやる！」

「…！」

コナミは少年の言葉を聞いて、自分がデツキを完成させた時のことを思い出した。

(俺も…そう思ったっけな)

「どうした、兄ちゃん？」

「なあ、デュエル…楽しいか？」

「へ？そりゃ…もちろん！他の友達がデュエルしてるのを見てるだけでも楽しいし…それについてデツキが完成したんだ！何が出来るかすつげえワクワクするぜ！」

「…そっか。その気持ち…ずっと忘れるなよ」

「…？…うわっ！」

コナミは被っていた帽子を取ると、少年の頭に被せた。

「こいつは俺からのプレゼントだ！もし忘れそうになったら帽子の裏を見ればいい。…じゃあな！」

「あーちよつと！」

コナミは少年に向かって親指を立てると集合場所に向かって走っていった。

「帽子の裏…何だこれ？何か書いてある」

少年は帽子を確認すると、そこに二文字の言葉が力強く刻まれていることに気がついた。

「満足…？」

デュエルを楽しむ心を忘れなければ、限界を自分で決めつけずに自然にその先にある可能性を追い求めることが出来る。そんな尽きることのない満足の意志を継ぐ者がいる限り、彼らの未来に絶望が訪れることはないだろう。

「さあ…満足しようぜ！」